

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第228集

おお さき い せき
大 崎 遺 跡

2025

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

愛知県北東部の奥三河地域は、寒狭川など県下でも屈指の清流が流れる自然豊かなところで、その一部は天竜奥三河国定公園に指定されています。そして、急峻な地形でありながら、数少ない平坦地をうまく活かして、人々は古くから生活を営んできました。

この奥三河地域の一角をなす設楽町では、豊川で幾度となく繰り返されている洪水氾濫と、頻発する渇水の被害から人々の暮らしを守るため、そして活力に満ちた東三河地域の発展に貢献するために、設楽ダムの建設が進められています。

この設楽ダムによって水没する区域には多くの遺跡があり、またさまざまな工事の影響を受ける遺跡も存在します。これら遺跡の記録保存を実施するために、愛知県埋蔵文化財センターでは平成26年度から本格的に発掘調査を進めてまいりました。今回報告する大崎遺跡も、令和3年度と4年度に発掘調査が行われ、縄文時代から江戸時代までの人々の活動の痕跡が明らかになりました。

本書は、この大崎遺跡の調査成果をまとめたものであり、今後は学術的な資料として広く活用されることが期待されます。

最後になりましたが、発掘調査につきまして、地元住民の方々をはじめとする多くの方々にご協力をいただきました。また、関係各機関および関係者のご指導とご支援をいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。

令和7年3月31日

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 岡本 範重

例言

1. 本書は、北設楽郡設楽町田口字大崎に所在する大崎遺跡（おおさきいせき：県遺跡番号 700195）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、設楽ダムの事前調査として、国土交通省中部地方整備局から愛知県県民文化局を通じて、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが、管理委託を受けて実施した。調査対象面積は 11,085㎡である。
3. 発掘調査は、令和 3 年度は令和 3 年 8 月から令和 4 年 2 月にかけて、令和 4 年度は令和 4 年 5 月から令和 4 年 10 月にかけてそれぞれ実施した。
4. 調査担当者は、令和 3 年度は樋上昇（主任専門員、現調査課長）、川添和暁（調査研究専門員）、酒井俊彦（調査研究主任）、河嶋優輝、社本有弥（調査研究主事）、宮腰健司（調査研究嘱託員）、令和 4 年度は永井宏幸（主任専門員）、川添和暁、社本有弥である。
5. 発掘調査は、令和 3 年度は株式会社イビソク名古屋支店、令和 4 年度は株式会社アコード名古屋営業所の調査支援を受けて実施した。令和 3 年度の主要なスタッフは現場代理人：小林俊之、現場代理人補：鷺坂有吾、川元康民、吉田哲也、調査補助員：高橋理恵、生駒昌史、杉山敬亮、測量士：白木宏幸、舟橋哲郎、宮本亮太である。令和 4 年度の主要なスタッフは現場代理人：大倉崇、現場代理人補：中嶋竜也、調査補助員：菅原政徳、測量士：田畑徹也である。
6. 遺物整理、製図などの整理作業は社本有弥が行い、川添和暁が補佐した。また、次の方々のご協力を受けた。阿部裕恵・鈴木好美・瀧 智美・時田典子・堀田祐美・前田弘子・山田亜紀子・山田有美子・山本孝枝（整理補助員）
7. 出土遺物の実測トレース作業は株式会社アルカと株式会社文化財サービスと国際文化財株式会社に、土壌選別作業とプラント・オパール分析と花粉分析と土器付着炭化物などの放射性炭素年代測定分析と黒曜石の産地同定分析は株式会社パレオ・ラボに、報告書の印刷製本刊行発送業務は西濃印刷株式会社に、それぞれ業務を委託した。出土遺物の写真撮影は有限会社写真工房遊（金子知久）に依頼した。
8. 発掘調査および報告書作成に際しては、次の関係機関の指導・協力を受けた。愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室、愛知県埋蔵文化財調査センター、国土交通省中部地方整備局、設楽町教育委員会、設楽町立奥三河郷土館（五十音順、敬称略）
9. 発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々からご教示・ご協力をいただいた。増子康眞、山田昌久、綿田弘実（五十音順、敬称略）
10. 本書の執筆は、鈴木正貴（主任専門員）川添和暁、蔭山誠一、永井邦仁（以上調査研究専門員）、社本有弥が担当した。詳細は下記の通りである。第 1 章と第 2 章と第 3 章第 5 節と遺構図版は鈴木正貴、第 3 章第 1 節と第 5 章と写真図版は川添和暁、第 3 章第 2 節は蔭山誠一、第 3 章第 3 節は社本有弥、第 3 章第 4 節と第 5 章第 3 節の一部は永井邦仁、第 4 章第 1 節と第 2 節は森将志（株式会社パレオ・ラボ）、第 3 節と第 4 節はパレオ・ラボ AMS 年代測定グループ（伊藤茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・小林克也・中村賢太郎）、第 5 節は竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）、第 5 節はバンダリ・スダルシャン（株式会社パレオ・ラボ）がそれぞれ担当した。
11. 本書の編集は鈴木正貴が行い、川添和暁が補佐した。
12. 調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。ただし、新基準で表記してある。
13. 調査記録および写真記録は愛知県埋蔵文化財センター（愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 電話 0567-67-4161）で保管している。
14. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センター（愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 電話 0567-67-4164）で保管している。

目次

序・例言・目次

第1章 環境と立地

第1節 遺跡の位置	1
第2節 調査の経緯	1
第3節 地理的環境	2
第4節 歴史的環境	3

第2章 遺構

第1節 調査方法と基本層序	5
第2節 縄文時代から弥生時代の遺構	8
第3節 古代から江戸時代の遺構	43

第3章 出土遺物

第1節 縄文土器	51
第2節 弥生土器	101
第3節 石器・石製品	113
第4節 古代～近世の土器・陶磁器類	133
第5節 金属関連遺物	144

第4章 自然科学分析

第1節 大崎遺跡におけるプラント・オパール分析、花粉分析	145
第2節 大崎遺跡のプラント・オパール分析	149
第3節 放射性炭素年代測定（1）	152
第4節 放射性炭素年代測定（2）	154
第5節 大崎遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定	160
第6節 大崎遺跡から出土した炭化種実	164

第5章 総括

第1節 大崎遺跡の土地利用変遷	
-----------------	--

169

第2節 大崎遺跡の先史時代の様相	172
第3節 古代以降の遺物出土状況と水田関連遺構について	177

抄録

遺構図版

写真図版

挿図目次

第1図 大崎遺跡の位置図	1
第2図 大崎遺跡周辺の地形図	2
第3図 大崎遺跡周辺の遺跡分布図	4
第4図 基本層序土層断面図（1）21区東壁土層断面	5
第5図 基本層序土層断面図（2）南北トレンチ T04 東側	6
第6図 1230SI 遺構図	7
第7図 5001SI・5300SI 遺構図（1）	8
第8図 5001SI 遺構図（2）	9
第9図 5004SI・5361SI・5449SI 遺構図（1）	11
第10図 5004SI・5361SI・5449SI 遺構図（2）	12
第11図 5044SI・5303SI 遺構図（1）	13
第12図 5044SI・5303SI 遺構図（2）	14
第13図 5050SI・5451SI 遺構図	15
第14図 5052SI・5320SI 遺構図	16
第15図 5054SI 遺構図	17
第16図 5055SI・5450SI 遺構図	18
第17図 5057SI 遺構図	19
第18図 5090SI 遺構図	20
第19図 5321SI 遺構図	21
第20図 5324SI・5356SI 遺構図	22
第21図 5425SI 遺構図	24
第22図 5425SI・5440SI 遺構図	25
第23図 6004SI・6015SI 遺構図	26
第24図 6045SI・6048SX 遺構図	27
第25図 6047SI 遺構図	28
第26図 6049SI 遺構図	29
第27図 6051SI 遺構図	30
第28図 6052SI 遺構図	31
第29図 6068SI・6069SI 遺構図	32
第30図 6077SI 遺構図	33
第31図 6113SI 遺構図	34
第32図 6114SI 遺構図（1）	35
第33図 6114SI 遺構図（2）	36
第34図 0209SK・0215SK・0216SK・5130SK・5131SK・5135SK 遺構図	37
第35図 6159SK 遺構図	38
第36図 縄文時代の土坑遺構図	39
第37図 20001SL 遺構図	40
第38図 水田関連遺構図（1）	44
第39図 水田関連遺構図（2）	45
第40図 水田関連遺構図（3）	46
第41図 5454SA・5455SA・5456SA 遺構図	47
第42図 10010SS 遺構図	48
第43図 10011SS 遺構図	49
第44図 0245SY 遺構図	50
第45図 縄文土器 1	55
第46図 縄文土器 2	56
第47図 縄文土器 3	57
第48図 縄文土器 4	58

第 49 図 縄文土器 5	59
第 50 図 縄文土器 6	60
第 51 図 縄文土器 7	61
第 52 図 縄文土器 8	62
第 53 図 縄文土器 9	63
第 54 図 縄文土器 10	64
第 55 図 縄文土器 11	65
第 56 図 縄文土器 12	66
第 57 図 縄文土器 13	67
第 58 図 縄文土器 14	68
第 59 図 縄文土器 15	69
第 60 図 縄文土器 16	70
第 61 図 縄文土器 17	71
第 62 図 縄文土器 18	72
第 63 図 縄文土器 19	73
第 64 図 縄文土器 20	74
第 65 図 縄文土器 21	75
第 66 図 縄文土器 22	76
第 67 図 縄文土器 23	77
第 68 図 縄文土器 24	78
第 69 図 縄文土器 25	79
第 70 図 縄文土器 26	80
第 71 図 縄文土器 27	81
第 72 図 縄文土器 28	82
第 73 図 縄文土器 29	83
第 74 図 主要縄文土器出土分布図	100
第 75 図 弥生土器 1	104
第 76 図 弥生土器 2	105
第 77 図 弥生土器 3	106
第 78 図 弥生土器 4	107
第 79 図 弥生土器 5	108
第 80 図 弥生土器 6	109
第 81 図 弥生土器 7	110
第 82 図 弥生土器出土分布図	112
第 83 図 5001SI 出土石器	114
第 84 図 5004SI 出土石器 1	115
第 85 図 5004SI 出土石器 2	116
第 86 図 5044SI・5050SI 出土石器	117
第 87 図 5300SI・5320SI・5321SI・5324SI 出土石器	118
第 88 図 5361SI・5425SI 出土石器	119
第 89 図 6004SI・6069SI・6113SI・6115SL 出土石器	120
第 90 図 6015SI 出土石器	121
第 91 図 6047SI・6049SI・6051SI・6052SI 出土石器	122
第 92 図 土坑内出土石器	123
第 93 図 検出時など出土石器 1	124
第 94 図 検出時など出土石器 2	125
第 95 図 検出時など出土石器 3	126
第 96 図 検出時など出土石器 4	127
第 97 図 検出時など出土石器 5	128
第 98 図 検出時など出土石器 6	129

第 99 図 石製品	130
第 100 図 石器図面補遺 1	131
第 101 図 石器図面補遺 2	132
第 102 図 古代～近世の遺物実測図 1	139
第 103 図 古代～近世の遺物実測図 2	140
第 104 図 古代～近世の遺物実測図 3	141
第 105 図 遺物出土分布傾向【古代】	142
第 106 図 遺物出土分布傾向【中世】	143
第 107 図 金属関連遺物	144
第 108 図 分析試料採取層準	145
第 109 図 植物珪酸体分布図	146
第 110 図 産出した植物珪酸体	147
第 111 図 花粉化石のプレパラート写真	148
第 112 図 植物珪酸体分布図	150
第 113 図 d-1180 から産出した植物珪酸体	151
第 114 図 土器 449 付着炭化物の暦年較正の結果	153
第 115 図 炭素・窒素安定同位体比	157
第 116 図 炭素安定同位体比と C/N 比の関係	157
第 117 図 暦年較正結果	159
第 118 図 黒曜石産地分布図（東日本）	161
第 119 図 黒曜石産地推定判別図	161
第 120 図 大崎遺跡から出土した炭化種実	168
第 121 図 大崎遺跡 基本土層模式図による土地利用変遷状況	169
第 122 図 21A 区・21B 区・22B 区 南西側に展開する縄文時代～弥生時代の集落跡	171
第 123 図 縄文～弥生時代集落跡 B 地区の竪穴建物跡時期相関図	173
第 124 図 大崎遺跡およびマサノ沢遺跡出土の部分磨製石鏃	176
第 125 図 大崎遺跡周辺で確認された湧水的位置	180
第 126 図 大崎遺跡 22A 区東壁 土層断面状況写真	180

挿表目次

第 1 表 縄文土器・弥生土器主要遺構出土点数一覧	96-99
第 2 表 分析試料一覧	148
第 3 表 試料 1g 当りのプラント・オパール個数	148
第 4 表 分析試料一覧	150
第 5 表 試料 1g 当りのプラント・オパール個数	150
第 6 表 測定試料および処理	153
第 7 表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	153
第 8 表 放射性炭素年代測定の測定試料および処理（1）	156
第 9 表 放射性炭素年代測定の炭素・窒素安定同位体比測定結果	157
第 10 表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果（1）	158
第 11 表 放射性炭素年代測定の測定試料および処理（2）	159
第 12 表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果（2）	159
第 13 表 黒曜石産地推定分析対象	162
第 14 表 東日本黒曜石産地の判別群	162
第 15 表 黒曜石の測定値と産地推定結果	163
第 16 表 大崎遺跡から出土した炭化種実	165
第 17 表 縄文・弥生時代 小地域別遺構と形成時期一覧	172
第 18 表 石器石材別出土器種点数・総重量一覧	174,175

第 1 章 環境と立地

第 1 節 遺跡の位置

愛知県北設楽郡設楽町は、愛知県の北東山間部に所在し、東西約 22.4km・南北 19.7km・総面積約 273.94km² の範囲を占める。旧三河国設楽郡に属する設楽町は、北から時計回りに、豊田市稲武地区、長野県根羽村、豊根村、東栄町、新城市鳳来地区、新城市作手地区、豊田市下山地区、豊田市足助地区と接している。稲武地区を挟んで北側には、岐阜県恵那市上矢作町が、一方で東側には東栄町を挟んで、静岡県浜松市天竜区佐久間町が位置しており、当地はまさに美濃・信濃・遠江と接する境界地域である。

大崎遺跡は、設楽町内のほぼ中央にある田口地区の西端部に所在する。設楽大橋から大きく蛇行して遺跡の西側を南へ流れる境川は、遺跡の南側で寒狭川と合流し最終的に豊川となる。遺跡の西側はこの境川で侵食されて段丘崖となっており川

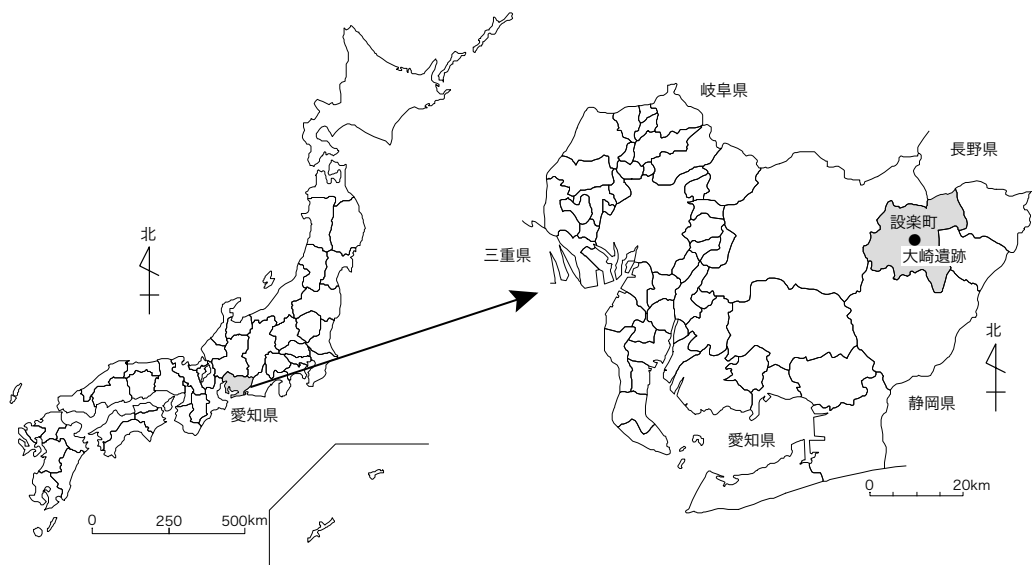
との比高は約 8m を測る。大崎遺跡の境川を挟んで西側の段丘面は狭く遺跡は存在しないが、蛇行する境川を少し上流に行くと川向かいに川向東貝津遺跡があり、その北側の丘陵上に大畑遺跡が分布する。一方、下流に向かうと谷が狭く急峻となり遺跡は全く認められなくなる。北から東側には標高約 500m の山塊があり、現在は田口集落から山塊頂部に至る道路は存在するが、そこから先は大崎遺跡に至る陸路と呼べる道は存在しない。

大崎遺跡が所在する段丘面は南北約 130m、東西約 90m を測る台形状の平面形を呈しており、北から南に緩やかに傾斜している。境川はこの段丘面の南西端で東側に鍵の手状に屈曲しており、現在は西側の段丘崖よりも南側の段丘崖は傾斜が緩やかで、川岸に容易に至ることができる。遺跡はこの段丘面のほぼ全面に展開している。

第 2 節 調査の経緯

大崎遺跡の発掘調査は、設楽ダムに伴う事前調

査として国土交通省中部地方整備局から、愛知県



第 1 図 大崎遺跡の位置図

県民文化局を通じた委託事業として愛知県埋蔵文化財センターが実施した。

大崎遺跡は、『愛知県遺跡分布地図Ⅲ（東三河地区）』（愛知県教育委員会 1996）に記載された周知の遺跡である。また、その後刊行された『詳細遺跡分布調査報告書』（愛知県教育委員会 2007）にも事前調査の必要な遺跡として掲載されている。

この大崎遺跡は標高約 363m から約 378m の河岸段丘上に所在しており、設楽ダムの湛水域（標高 437m 以下）に該当する。まずは、水没する河岸段丘面を対象に平成 19（2007）年度に愛知県埋蔵文化財センターにより範囲確認調査（現在の本発掘調査 A に相当）が実施され、29 ヶ所

のトレンチを掘削した結果、河岸段丘の全面に遺跡の範囲が広がることが判明した。これを受けて県教育委員会により本調査（現在の本発掘調査 B に相当）の範囲約 11000㎡が確定された。

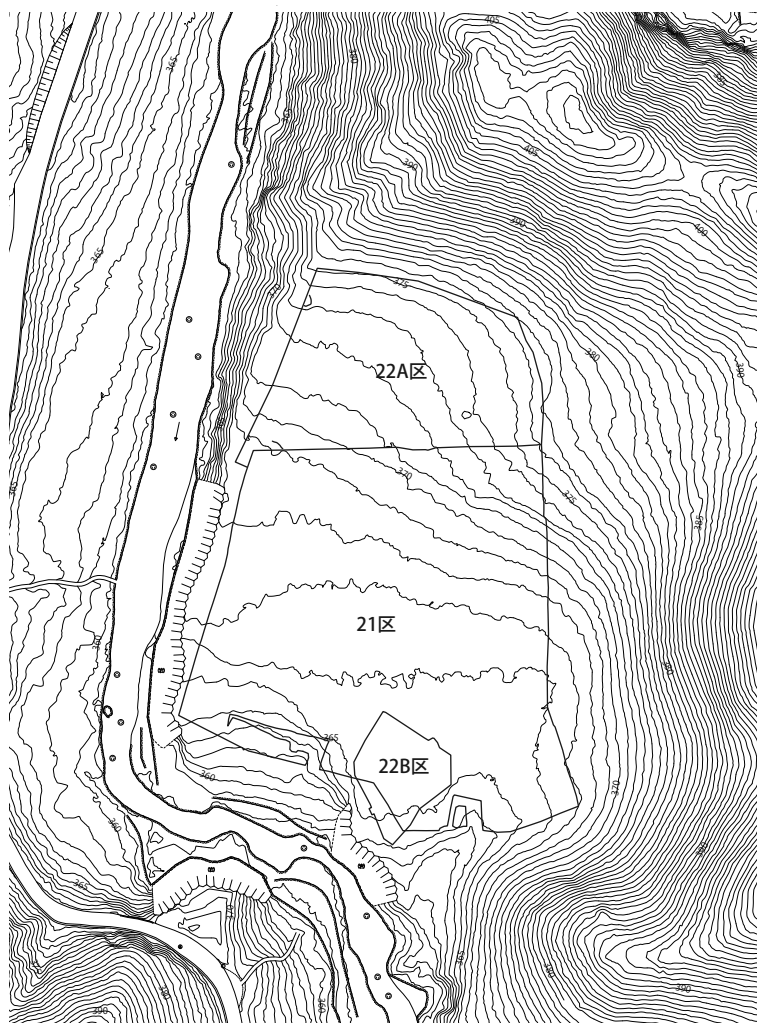
本調査は、まず令和 3（2021）年度に北端部を除く部分（8100㎡）が愛知県埋蔵文化財センターにより実施された。発掘調査は便宜上 2 区に区分し、西側を A 区、東側を B 区と設定し調査を実施した（なお、本報告書では両者を合わせて 21 区と呼称している）。調査の結果、南端部で分布調査や範囲確認調査では認識できていなかった下層の遺跡が存在することが疑われ、同時に下層確認調査を実施した結果追加調査を行うこととなった。令和 4（2022）年度は北端部の 22A 区

（2835㎡）と追加調査となった南端部の 22B 区（160㎡）を設定し調査を実施した。

令和 4 年 2 月と 3 月および令和 5 年 2 月と 3 月に遺構図を中心とした二次整理作業を、令和 5（2022）年度に、愛知県埋蔵文化財センターで図面の整理および出土遺物の分析・記録などの整理報告書作成業務を行い、令和 6 年度末に発掘調査報告書が刊行された。

第 3 節 地理的環境

設楽町内には、豊川水系と矢作川水系と天竜川水系の三本の河川水系が存在する。設楽ダムは豊川水系に設置されるもので、これに関わって発掘調査される遺跡は全て豊川水系に所在する。豊川水系は寒狭川（豊川）に境川や野々瀬川などが合



第 2 図 大崎遺跡周辺の地形図（S = 1 / 2000）

流するもので、概ね町域中央から南流する。また、設楽町は高低差が激しく豊川と当貝津川との合流地点付近で標高約 200m であるのに対し、北東端の茶臼山高原付近で標高約 1,320m を測る。

大崎遺跡は、標高約 363 ～ 378m、寒狭川（豊川）支流の境川左岸の河岸段丘上に立地する。当地は田口地区の西端に位置しており、陸路から見れば田口地区の西奥に相当する。遺跡の立地する段丘は、北から南に向かって緩かに傾斜しており、ここに縄文時代以来、古代・中世・近世までさまざまな活動がなされてきた。境川を隔てた川向地区には段丘面に川向東貝津遺跡などがあり、丘陵上には大畑遺跡などが存在する。大崎遺跡は境川水面との比高は最短で約 8m で、河川資源の利用にも便利であった。

設楽地域では地質学的な環境も複雑である。中

第 4 節 歴史的環境

ここでは、設楽町内で知られている遺跡などについて、整理しておく（第 3 図）。

後期旧石器時代では、設楽町津具地区に接した豊根村域には、茶臼山遺跡の所在が知られ、ナイフ形石器・搔器や剥片石核が良好な状態で出土した。川向坂の上にある市場口遺跡では、ナイフ形石器のほか、剥片・石核が出土している。

縄文時代草創期では、川向東貝津遺跡で木葉形尖頭器やその製作に関わる剥片石核類など多量の石器群が確認された。後期旧石器時代末の細石器（細石刃・細石核）が出土しており、石器群の一部は後期旧石器時代にさかのぼるものの可能性がある。また、八橋地区の滝瀬遺跡では、縄文時代草創期末から早期初頭に遡る可能性のある竪穴建物跡 10 基以上で構成された集落跡が確認された。

縄文時代早期では、名倉地区の星野神田遺跡で

中央構造線は天竜川から豊川沿いにかけて走っていることが知られ、その東側・南側は三波川変成帯、西側・北側は領家変成帯が分布しており、地質構造が大きく異なる。設楽地域は領家変成帯が分布範囲であるが、それに加えて新生代第三紀の火山活動による設楽層群が鳳来湖を中心に同心円状に分布している。設楽層群には、設楽火山岩類を含む南設重層群と堆積岩類由来の北設重層群があり、設楽町内では、北設重層群が境川東側を沿って、津具地区・豊根村へと延びている。笹平遺跡はこの設楽層群の外周傍の地点に位置している遺跡であり、このような多様な岩帯が近接地域に存在する当地において、設楽火山岩類や南設重層群由来の安山岩・溶結凝灰岩や、三波川変成帯由来の塩基性岩類、領家変成帯由来の花こう岩や片麻岩などが、利用可能な石材環境となっている。

は押型文土器の出土が古くから知られ、川向東貝津遺跡・滝瀬遺跡でも集石炉跡が発見されている。滝瀬遺跡や大名倉遺跡では、早期前半に属するトロトロ石器も出土し、川向地区の大栗遺跡では、早期前半に多く知られる煙道付炉穴が 1 基確認された。また、万瀬遺跡では、竪穴建物跡と炉穴群からなる早期前半の集落跡が調査されている。

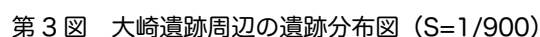
縄文時代前期では、津具地区の鞍船遺跡や胡桃窪遺跡では前期後半の竪穴建物跡が確認された。これ以外にも遺物が点的に確認されている。

縄文時代中期前半では、川向地区の石原遺跡では山田平式期頃を主体とする竪穴建物跡群が確認された。中期後半になると、笹平遺跡をはじめ滝瀬遺跡、川向東貝津遺跡と大畑遺跡などの集落遺跡がある。

縄文時代後期では大名倉遺跡、マサノ沢遺跡、笹

弥生時代前期では条痕文土器が各遺跡で散在的にみつき、笹平遺跡やマサノ沢遺跡で土器棺墓

中世では、西地・東地遺跡で竪穴状遺構が、滝瀬遺跡で大型の倉庫と思われる掘立柱建物跡などの遺構や遺物が発見されている。



第2章 遺構

第1節 調査方法と基本層序

1 調査区の設定と調査の方法

平成19年度の範囲確認調査（現在の本発掘調査A）の結果、本調査（現在の本発掘調査B）の対象となったのは、遺跡が所在する段丘面のほぼ全域で、その調査面積11085㎡である。調査対象地は境川の東側左岸の川に対して西に張り出す段丘上に立地し、東側と北側に山塊が控える。この段丘は南側が標高365m前後と低いのに対し、北側が標高378m前後と緩やかに高くなっている。発掘調査は令和3年度に南側のやや低い段丘部分を2区に分けて行い（実際には西側を21A区、東側を21B区と称して調査したが、本書では両者を合わせて21区と略す）、翌令和4年度に北側の標高が高い段丘部分を22A区、南端部の下層遺構の追加調査分を22B区と称して実施した。

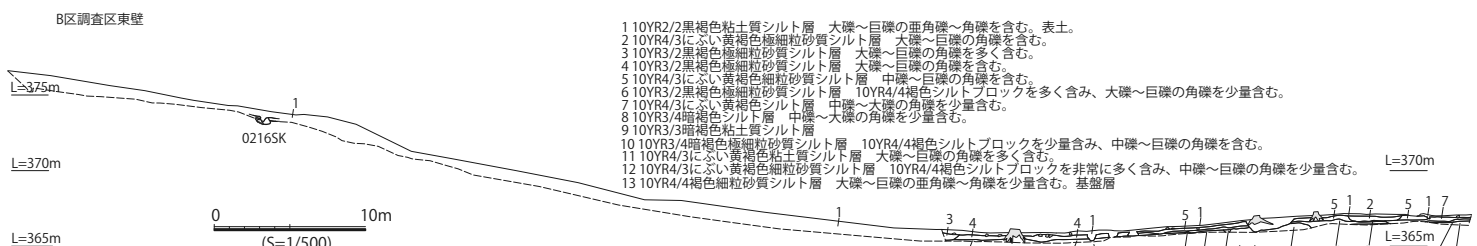
発掘調査にあたっては、調査区全域に世界測地系の国土座標測定値による10mグリッドを設定し、グリッド毎に出土遺物の取り上げ、遺構の整理を行っている。特に縄文時代の遺構・遺物が多く出土した区域に関しては、必要に応じて5mグリッドによる調査を行った。

調査は、重機による表土掘削および人力による包含層掘削を実施した後に、平面と壁面を精査して遺構検出を行い、これらの略測図を記録し写真を撮影した。検出された遺構は、土層断面を記録できるように遺構の形状に合わせ半截またはベル

トを設定して掘削を進め、必要に応じて遺物出土状態や土層断面の測量や写真撮影などの記録作業を実施した。そして、概ね全ての遺構を完掘し終えた状態で空中撮影など全体撮影を実施した。撮影後は遺構の断ち割り調査や基盤層を確認するための深掘り調査などの補足調査を実施した。調査終了後は堺川に濁水が流出しないよう埋め戻し作業を実施し、調査区域を事業者に引き渡した。

大崎遺跡の発掘調査成果の情報公開としては、発掘調査期間中に毎月刊行される設楽発掘通信（64号～74号）に調査成果速報を掲載したほか、令和3年12月19日と令和4年8月20日に地元説明会を開催した。また、「令和3年度設楽ダム関連発掘調査成果報告会『新設楽発見伝8』」では令和3年3月12日から調査成果の概要を解説した動画を公開した。これは新型コロナウイルス感染症の拡大を受けた措置である。翌年は令和5年3月4日に「令和4年度設楽ダム関連発掘調査成果報告会『新設楽発見伝9』」を開催し、大崎遺跡については2年分の調査成果を公表した。

整理作業については、発掘調査時から遺物洗浄も並行して実施しており、令和3年と4年の2月から3月の2ヶ月間は図面整理を中心とした二次整理作業を実施した。本格的な二次整理作業は令和5年度に実施した。報告書印刷刊行は令和6年度に実施した。



第4図 基本層序土層断面図（1）21区東壁土層断面（S=1/500）

2 調査日誌抄録

現地調査の経過について、調査区別に概要を記述する。

(1) 21 区の調査経過

月日	調査内容
2021 年	
8 月 30 日	A 区表土掘削開始。
9 月 13 日	A 区遺構検出を開始。
10 月 1 日	A 区遺構掘削を開始。
10 月 28 日	ラジヘリにより遺構撮影（A 区南西部）。下層遺跡確認のための補足調査開始。4 箇所に 2m × 2m のトレンチを掘削した。
11 月 8 日	B 区表土掘削の開始。
11 月 16 日	B 区遺構検出を開始。
11 月 25 日	ラジヘリにより遺構撮影（A 区北中部）。下層遺跡確認のための補足調査開始。9 箇所に 2m × 2m のトレンチを掘削した。
12 月 16 日	遺跡検討会。山田昌久氏の指導。
12 月 19 日	地元説明会を開催。23 名参加。
12 月 22 日	ラジヘリにより遺構撮影（B 区南半）。
2022 年	
1 月 19 日	B 区表土掘削を全部終了。
1 月 28 日	ラジヘリにより遺構撮影（B 区全景と A 区竪穴建物跡群）。
1 月 29 日	下層遺跡確認のための補足調査開始。8 箇所に 2m × 2m のトレンチを掘削。
2 月 4 日	調査を終了し撤収作業。

(2) 22A 区の調査経過

月日	調査内容
5 月 31 日	石積遺構の調査を開始。
6 月 24 日	石積遺構の調査を完了、表土掘削開始。
8 月 8 日	表土掘削を終了し、切株周囲の清掃など遺構検出準備を開始。
8 月 8 日	1 面遺構検出を開始。
8 月 19 日	1 面遺構検出状況の撮影。
8 月 20 日	地元説明会。調査区西側の 1 面遺構の検出状況を見学してもらう。
8 月 30 日	ラジヘリにより 1 面遺構撮影、終了後に補足調査開始。
9 月 13 日	2 面調査に向け包含層を重機で掘削を開始。
9 月 21 日	包含層掘削と同時に遺構検出を開始。
9 月 28 日	2 面遺構掘削を開始。
9 月 30 日	ラジヘリにより 2 面遺構撮影、終了後に補足調査開始。
10 月 5 日	補足調査終了。

(3) 22B 区の調査経過

月日	調査内容
5 月 31 日	表土掘削開始。
6 月 7 日	1 面遺構検出を開始。
7 月 11 日	1 面遺構掘削を開始。
8 月 8 日	ラジヘリにより 1 面遺構撮影、終了後に補足調査開始（～8 月 10 日）。
8 月 20 日	地元説明会。1 面遺構掘削状況を見学してもらう。
9 月 12 日	1 面補足調査（遺構掘削）を再開。
10 月 4 日	2 面調査に向け包含層掘削開始。
10 月 6 日	2 面遺構検出と遺構掘削を開始。
10 月 14 日	2 面遺構撮影。
10 月 20 日	南西壁深掘り調査。
10 月 21 日	区埋め戻し作業完了。

3 調査の概要と基本層序

(1) 調査成果の概要

大崎遺跡の発掘調査で確認された遺構は近代以降の可能性もあるものを含めて 1084 基を数える。また、この発掘調査で遺物は 27 リットル入りコンテナで 100 箱が出土した。出土遺物から推定される遺構の時期は、概ね 5 期に区分される。

縄文時代早期以前 土坑などがある。

縄文時代中期から弥生時代中期 竪穴建物 30 棟、土坑墓などがある。

古代から中世前半 水田関連遺構として水路や畦畔、沼地形やピット列などがある。

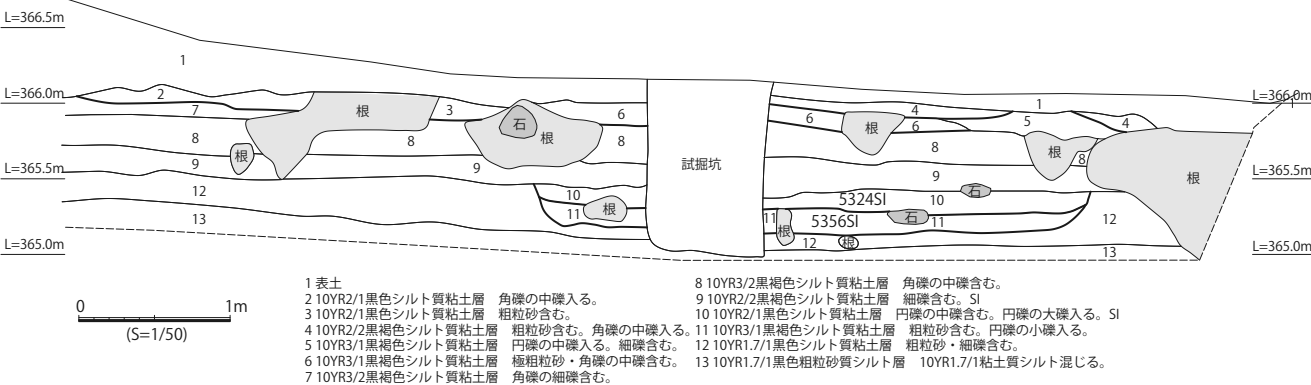
戦国時代から近世 水田関連遺構のほかピット列がある。

近世以降 積石遺構 8 基と炭焼窯 1 基がある。

(2) 大崎遺跡の土層堆積の概況

大崎遺跡は境川東岸、河岸段丘状の緩斜面地上に立地する。当地は現在の田口集落の西側にある丘陵尾根が境川に向かって伸びる末端付近に当たり、遺跡の北と東には丘陵尾根が迫っている。北東側はこれら尾根に挟まれた谷地形で、調査前の段階では湧水などのため湿潤な環境となっていた。遺跡範囲内は北東から南西方向への傾斜地となっており、遺跡中央付近で傾斜角度の変換点があり、北側に比べて南側の傾斜はさらに緩やかとなっている。

本遺跡での基本的な堆積層序は、上位から 1 層：

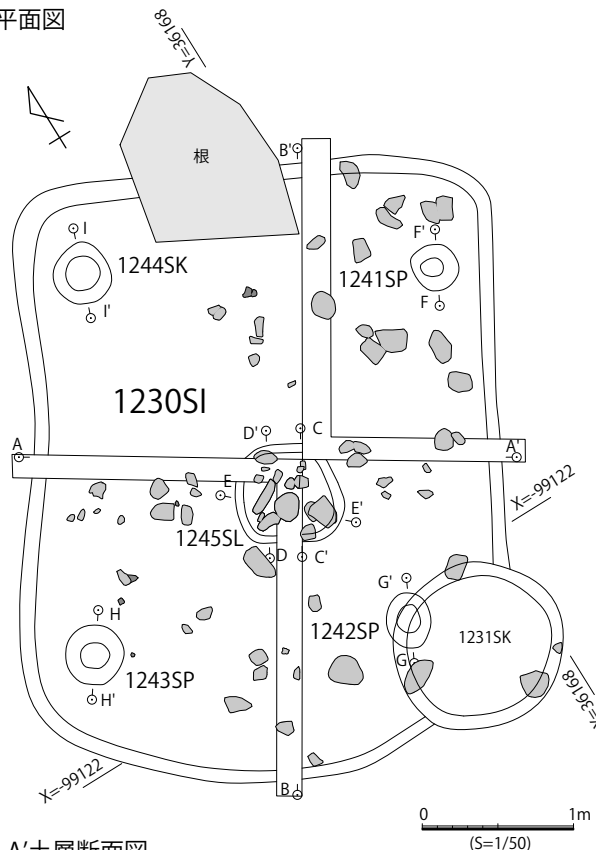


第5図 基本層序土層断面図（2）南北トレンチ T04 東側（S=1/50）

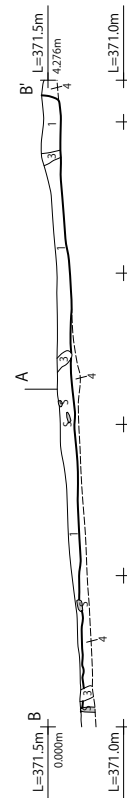
表土・腐植土（層厚約 10～40cm：第 5 図 1 層）、
 II 層：灰黄褐色から黒色粘土層など（層厚 20～
 40cm：第 5 図 2～7 層）、III 層：にぶい黄褐色
 から黒色粘土・シルト層（層厚 20～50cm：第
 5 図 8～9 層）、IV 層：黒色粘土・シルト層（層
 厚約 30cm：第 5 図 12～13 層）、V 層：明黄褐
 色粘土・シルト・砂・砂礫層（層厚約 30cm：第

4 図 13 層）である。II 層は古い段階の耕作土お
 よび遺物包含層、III 層上面が縄文時代中期以降の
 遺構検出面である。V 層が片麻岩由来の岩盤層あ
 るいは旧境川河床由来の堆積層である。IV 層の形
 成時期は不詳であるが、特に片麻岩由来の風化細
 礫を包含する層は、より V 層に近いと考えられる。

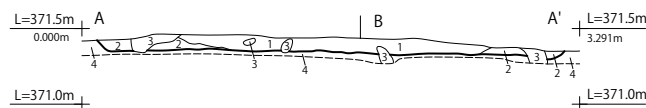
1230SI 平面図



1230SI B-B' 土層断面図

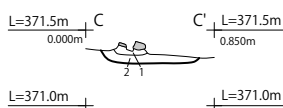


1230SI A-A' 土層断面図



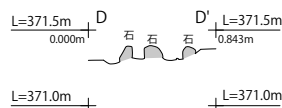
- 1, 10YR2/2 黒褐色シルト 炭化物微量含む
辺3～5cm程度角礫含む
- 2, 10YR2/3 黒褐色シルト
- 3, 10YR3/3 暗褐色シルト 植生痕
- 4, 10YR2/2 黒褐色シルト
辺5～10cm程度角礫含む

1245SL C-C' 土層断面図



- 1, 7.5YR3/1 黒褐色シルト
- 2, 10YR2/2 黒褐色シルト 炭化物微量含む

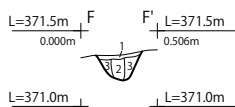
1245SL D-D' 土層断面図



1245SL E-E' 土層断面図

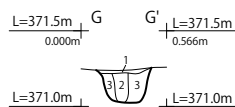


1241SP F-F' 土層断面図



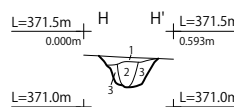
- 1, 7.5YR3/1 黒褐色シルト
炭化物微量含む
- 2, 10YR2/2 黒褐色シルト 柱痕
- 3, 10YR2/3 黒褐色シルト
10YR4/3 にぶい黄褐色
シルトBr微量含む

1242SP G-G' 土層断面図



- 1, 7.5YR3/1 黒褐色シルト
- 2, 10YR2/2 黒褐色シルト 柱痕
- 3, 10YR2/3 黒褐色シルト

1243SP H-H' 土層断面図



- 1, 7.5YR3/1 黒褐色シルト
- 2, 10YR2/2 黒褐色シルト 柱痕
- 3, 10YR3/1 黒褐色シルト
炭化物微量含む

1244SK I-I' 土層断面図



- 1, 7.5YR3/1 黒褐色シルト
炭化物微量含む

第 6 図 1230SI 遺構図 (S=1/50)

第2節 縄文時代から弥生時代の遺構

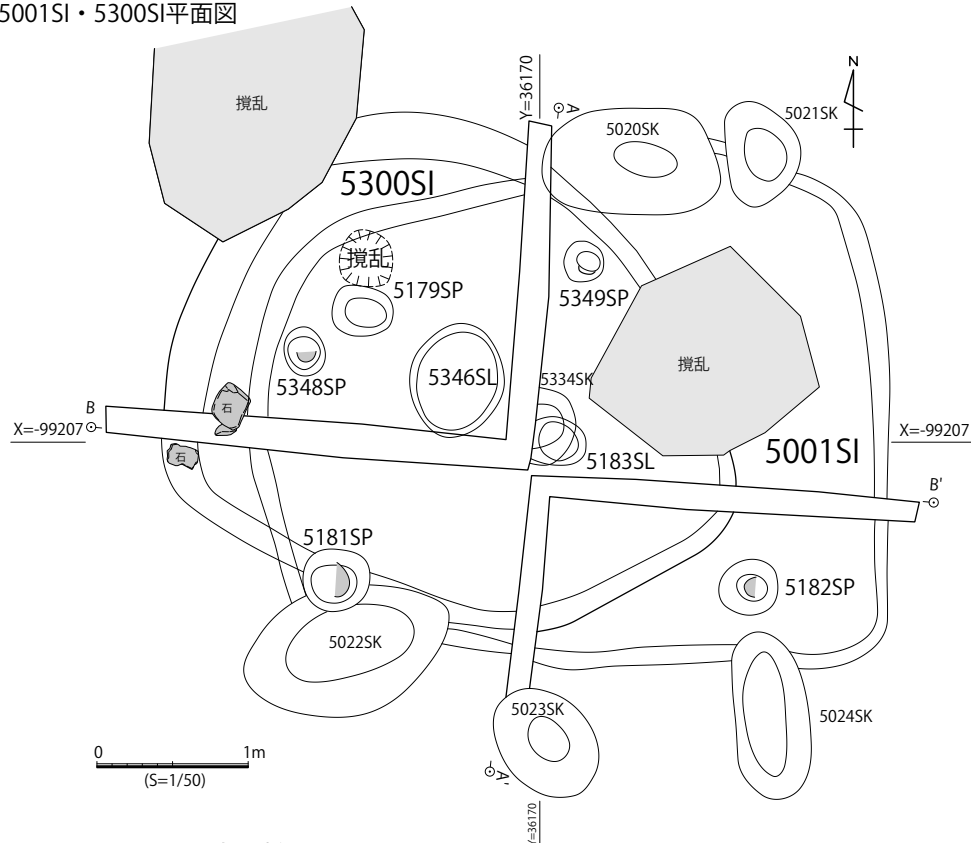
縄文時代から弥生時代の遺構としては竪穴建物跡が30棟、柱穴列1基、不定形土坑1基がある。

1 竪穴建物跡

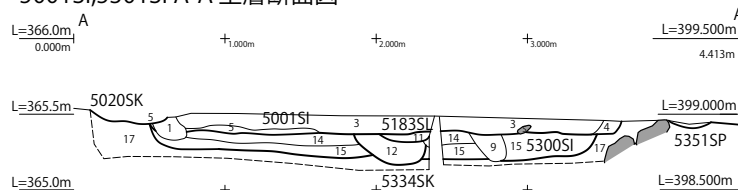
(1) 1230SI (第6図・遺構図版37)

22A区南西部1116と1216グリッドで黒褐色シルトを地山とする形で検出された竪穴建物跡

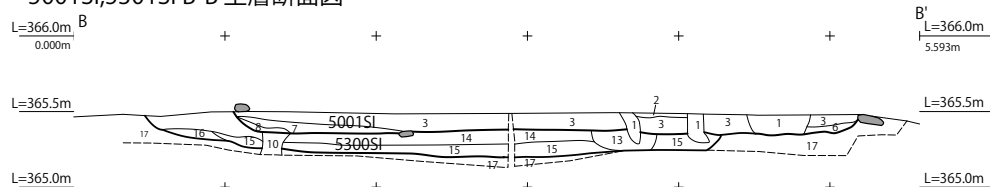
5001SI・5300SI平面図



5001SI,5301SI A-A'土層断面図



5001SI,5301SI B-B'土層断面図



- 1 植生痕
- 2 10YR2/2黒褐色中粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む。根攪乱
- 3 10YR2/2黒褐色中粒砂少量含むシルト層 やや明るい黒褐色シルトブロック含む。小礫少量含む。5001SI
- 4 10YR2/2黒褐色中粒砂質シルトと10YR3/3暗褐色中粒砂質シルトの混土层 小礫少量含む。5001SI
- 5 10YR2/1黒色中粒砂少量含むシルト層 5001SI
- 6 10YR2/1黒色中粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む。5001SI
- 7 10YR3/2黒褐色中粒砂少量含むシルト層 やや明るい黒褐色シルトブロック含む。小礫少量含む。5001SI
- 8 10YR2/1～2黒褐色中粒砂少量含むシルト層 黒褐色シルトブロック含む。小礫少量含む。5001SI
- 9 植生痕
- 10 植生痕
- 11 7.5YR2/1黒色細粒砂質シルト層 5183SL
- 12 10YR2/2黒褐色中粒砂質シルト層 黒色シルトブロック少量含む。小礫少量含む。5334SK
- 13 10YR2/1黒色中粒砂多く含むシルト層 小礫少量含む。
- 14 10YR2/2黒褐色中粒砂～細粒砂含むシルト層 黒色シルト小ブロック少量含む。小礫少量含む。5300SI
- 15 10YR2/2黒褐色細粒砂質シルト層 中粒砂少量含む。黒褐色シルトブロック少量含む。小礫少量含む。5300SI
- 16 10YR2/2黒褐色中粒砂多く含むシルト層 黒褐色シルト小ブロック含む。小礫・中礫少量含む。
- 17 10YR2/1～2黒褐色中粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む。

第7図 5001SI・5300SI遺構図(1) (S=1/50)

である。長軸 4.09m、短軸 3.08m の隅丸長方形の平面プランで深さは 0.12m を測る。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色シルトである。

主柱穴は 1241SP ～ 1244SP が該当し 1230SI の四隅に所在する。1241SP は長軸 0.32m、短軸 0.31m、床面からの深さ 0.19m、1242SP は長軸 0.37m、短軸 0.29m、深さ 0.23m、1243SP は長軸 0.39m、短軸 0.38m、深さ 0.20m、1244SP は長軸 0.40m、短軸 0.38m、深さ 0.08m で、いずれも平面形は円形を呈し規模が小さい。

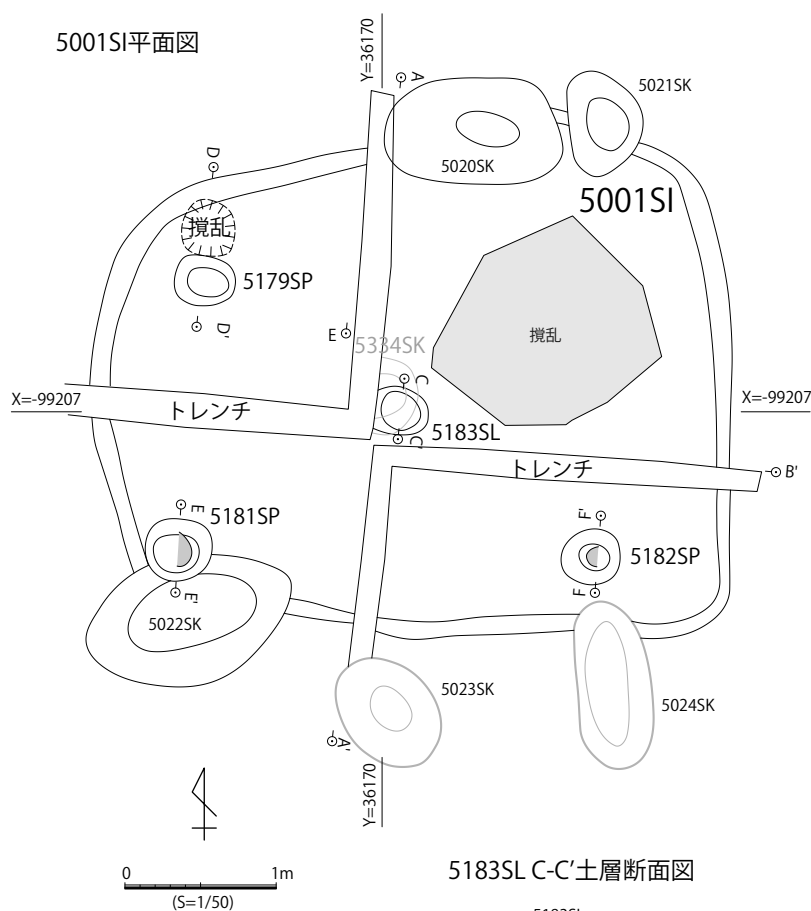
炉跡 1245SL は 1230SI の中央南寄りの床面に構築され、長軸 0.71m、短軸 0.65m、深さ 0.09m を測る。炉床付近では炭化物を含む黒褐

色シルトが堆積するが、被熱痕は認められない。内部から礫が数個出土したが床や壁を構築したものとは思われない。

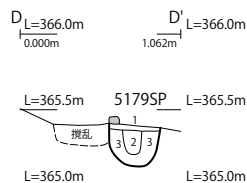
出土遺物から竪穴建物跡 1230SI は縄文時代晩期以降に位置づけられる。

(2) 5001SI (第7図～第8図・遺構図版 25)

21 区西部南端の 2016 と 2017 グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸 4.24m、短軸 3.17m のやや台形に歪んだ隅丸長方形の平面プランで深さは 0.18m を測る。下位に位置を少しずらして竪穴建物跡 5300SI が構築されている。黒褐色中粒砂含むシルトを地山とする形で検出された。埋土は小礫を少量に含む黒褐色シルトである。

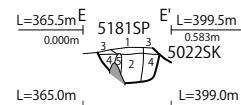


5179SP D-D' 土層断面図



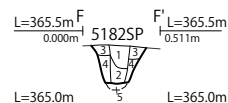
- 1 10YR2/2 黒褐色中粒砂～細粒砂少量含むシルト層
暗褐色シルトブロック少量含む。小礫・中礫少量含む。
- 2 10YR2/1～2 黒色細粒砂少量含むシルト層
黒褐色シルト小ブロック少量含む。柱痕跡
- 3 10YR2/1 黒色細粒砂質シルト層
暗褐色シルト小ブロック多く含む。柱掘方

5181SP E-E' 土層断面図



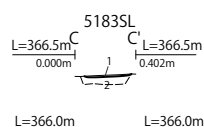
- 1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト層
灰黄褐色シルト小Brと小礫少量含む。柱痕跡
- 2 10YR2/2 黒褐色極細粒砂少量含むシルト層
黒色シルトBrと小礫少量含む。柱痕跡
- 3 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト層
灰黄褐色シルト小Brと小礫少量含む。柱掘方
- 4 10YR3/2 黒褐色極細粒砂少量含むシルト層
小礫と大礫少量含む。柱掘方
- 5 植生痕

5182SP F-F' 土層断面図



- 1 10YR3/2 黒褐色極細粒砂少量含むシルト層
黒色シルト小ブロック少量含む。小礫少量含む。柱痕跡
- 2 10YR2/1 黒色細粒砂少量含むシルト層
黒褐色シルト小ブロック少量含む。小礫少量含む。柱痕跡
- 3 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト層
灰黄褐色シルト小ブロック少量含む。小礫少量含む。柱掘方
- 4 10YR3/2 黒褐色極細粒砂少量含むシルト層
小礫少量含む。大礫少量含む。柱掘方
- 5 10YR2/1 黒色極細粒砂質シルト層
黒褐色シルト小ブロック少量含む。

5183SL C-C' 土層断面図



- 1 7.5YR2/1 黒色細粒砂質シルト層
- 2 10YR2/1 黒色極細粒砂質シルト層
黒褐色シルト小ブロック少量含む。

第8図 5001SI 遺構図 (2) (S=1/50)

主柱穴は5179SP、5181SP、5182SPが該当し5001SIの四隅に所在するが北東隅の主柱穴は不明である。5179SPは長軸0.42m、短軸0.40m、床面からの深さ0.28m、5181SPは長軸0.46m、短軸0.42m、深さ0.26m、5182SPは長軸0.40m、短軸0.385m、深さ0.31m、で、いずれも平面形は円形を呈し、平面と断面ともに柱痕が認められる（第8図）。

炉跡の可能性のある5183SLは5001SIの中央西寄りの床面に構築され、長軸0.40m、短軸0.36m、深さ0.04mを測る。黒色シルトが堆積するが、被熱痕は認められない。

出土遺物から竪穴建物跡5001SIは縄文時代中期に位置づけられる。

（3）5300SI（第7図・遺構図版25）

21区西部南端の2016と2017グリッドで検出された竪穴建物跡で、5001SIに切られる。長軸3.81m、短軸3.17mの歪な隅丸方形の平面プランで深さは0.29mを測る。埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。

主柱穴は5348SPと5349SPが該当すると思われるが、5300SIの四隅に位置しない。5348SPは長軸0.33m、短軸0.29m、床面からの深さ0.14mで、平面形は概ね円形を呈する。炉跡5346SLは1230SIの中央の床面に構築され、長軸0.76m、短軸0.63m、深さ0.04mを測る。炭化物や焼土が確認されず炉跡か否か不明。

出土遺物から竪穴建物跡5300SIは縄文時代中期後半に位置づけられる。

（4）5004SI（第9図～第10図・遺構図版25）

調査区北西端1916、1917、2016、2017グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸4.46m、短軸4.08mの概略隅丸正方形の平面プランで深さは0.14mを測る。同じ場所で竪穴建

物跡5361SIと5449SIが作り直されている。

主柱穴は5340SPが該当すると思われるが、他の柱穴は不明である。5340SPは長軸0.27m、短軸0.19m、床面からの深さ0.09mである。炉跡5355SLは5004SIの中央北寄りの床面に構築され、長軸0.50m、短軸0.33m、深さ0.07mを測る。この他に5332SKと5337SKがあるが、5004SIに伴う遺構ではないと思われる。

出土遺物から竪穴建物跡5004SIは弥生時代前期～中期前半に位置づけられる。

（5）5361SI（第9図～第10図・遺構図版25）

5004SIの下位に床面が検出された竪穴建物跡である。平面プランは5004SIと同一であるが、深さは0.46mを測る。

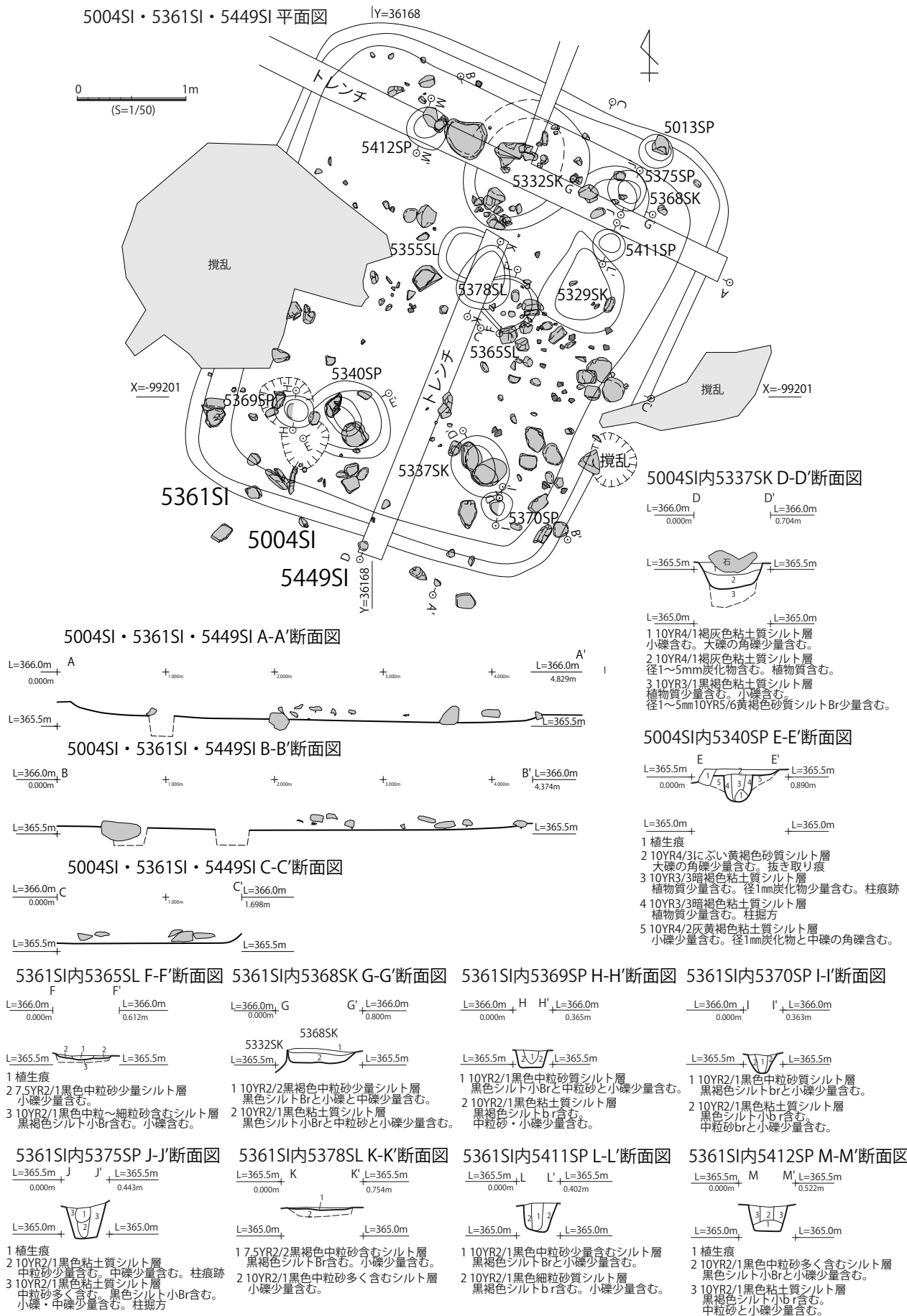
主柱穴は5369SP、5370SP、5411SP、5412SPが該当し5361SIの四隅に所在する。5369SPは長軸0.36m、短軸0.29m、床面からの深さ0.18m、5370SPは長軸0.29m、短軸0.26m、深さ0.17m、5411SPは長軸0.30m、短軸0.30m、深さ0.27m、5412SPは長軸0.40m、短軸0.38m、深さ0.31mで、いずれも平面形は円形を呈する（第10図）。

炉跡は5365SLと5378SLがあり、5361SIの中央北寄りの床面に構築されている。5365SLは長軸0.54m、短軸0.52m、深さ0.05mを、5378SLは長軸0.61m、短軸0.49m、深さ0.03mを測る。ともに炭化物や被熱痕は認められず、炉跡とすれば地床炉だったと思われる。

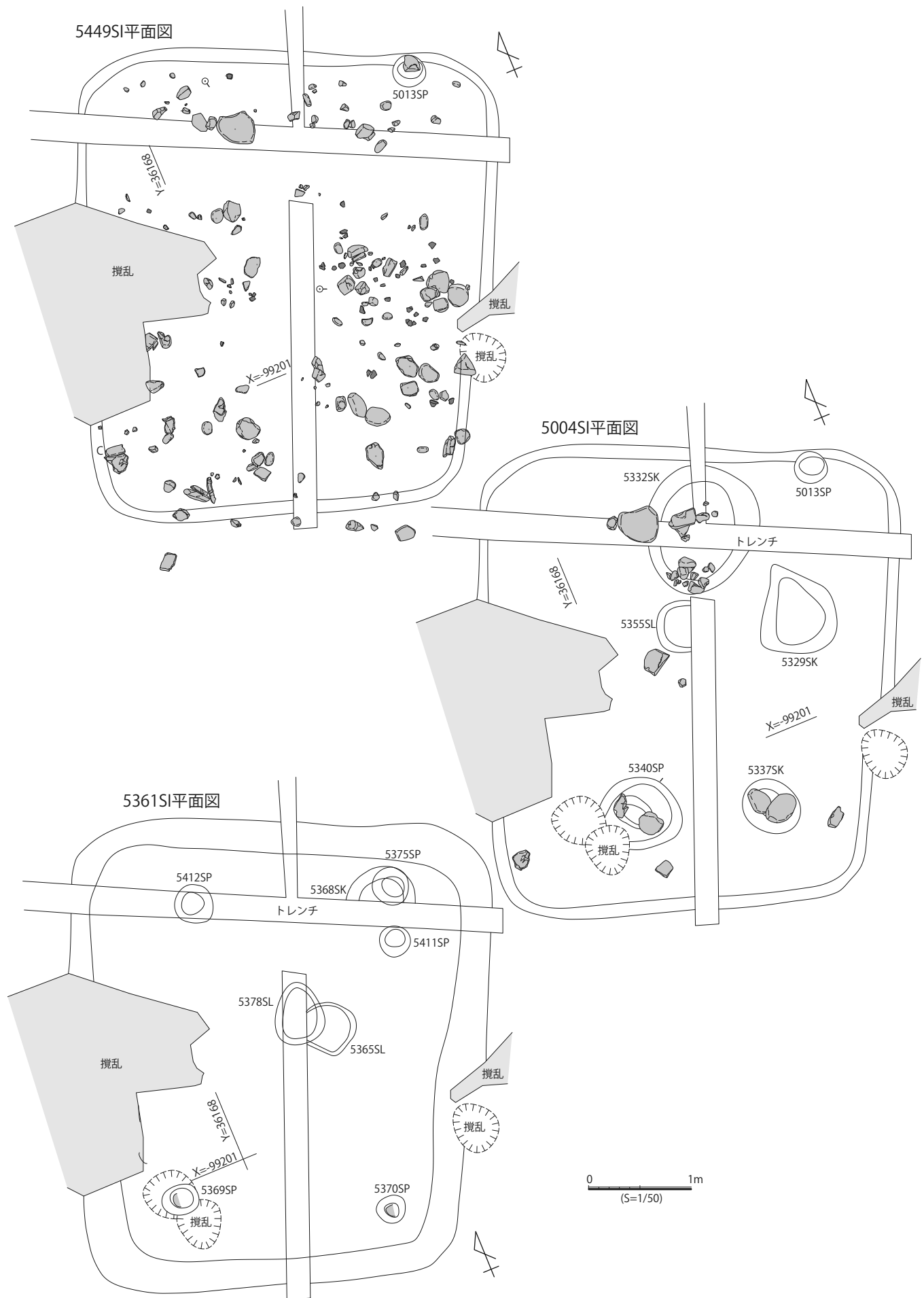
出土遺物から竪穴建物跡5361SIは弥生前期～中期に位置づけられる。

（6）5449SI（第9図～第10図・遺構図版25）

5004SIと5361SIの下位に床面が検出された竪穴建物跡である。平面プランは5004SIとほぼ同一で、深さは0.46mを測る。

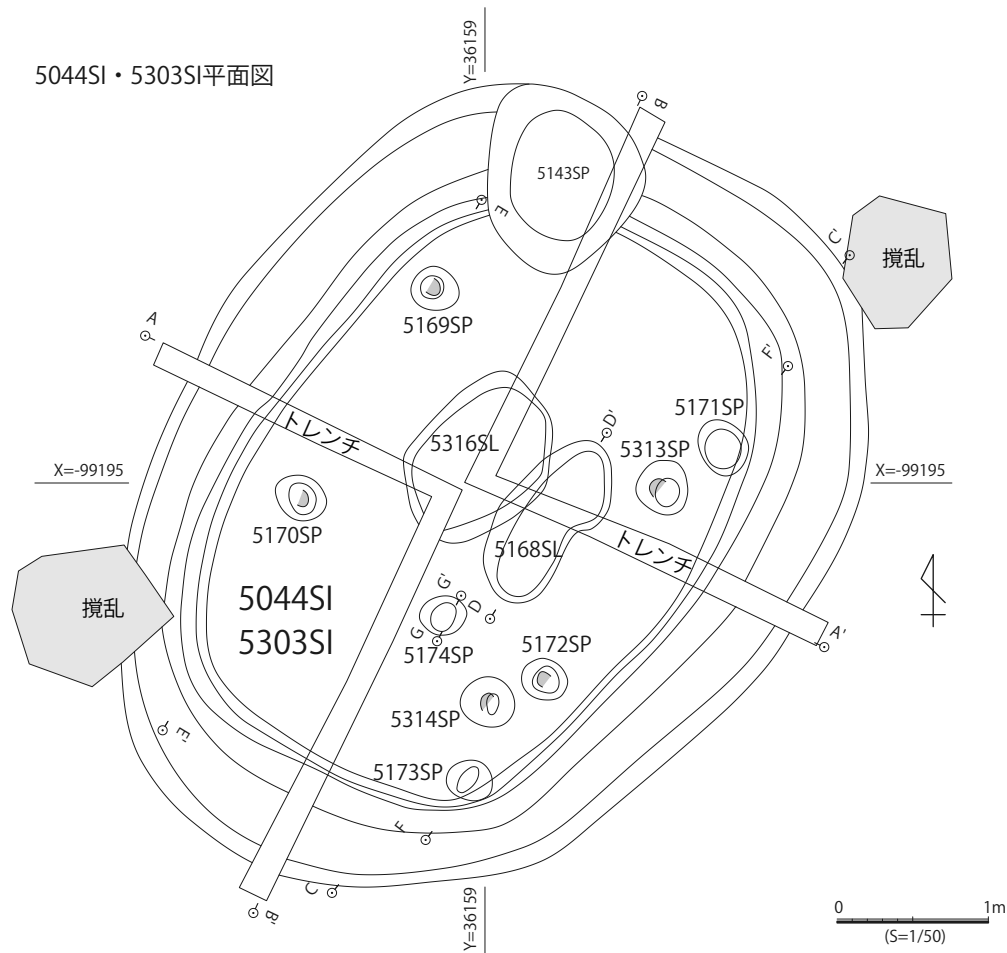


第9図 5004SI・5361SI・5449SI 遺構図(1) (S=1/50)



第 10 図 5004SI・5361SI・5449SI 遺構図 (2) (S=1/50)

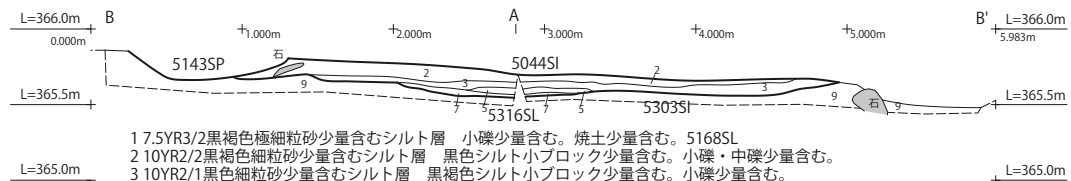
5044SI・5303SI平面図



5044SI・5303SI A-A'土層断面図

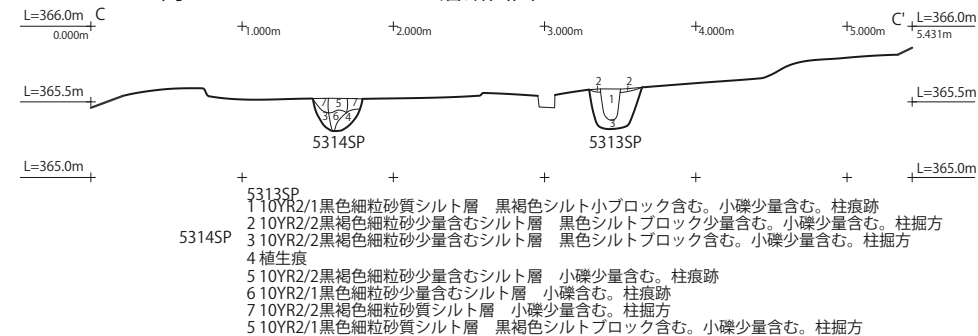


5044SI・5303SI B-B'土層断面図



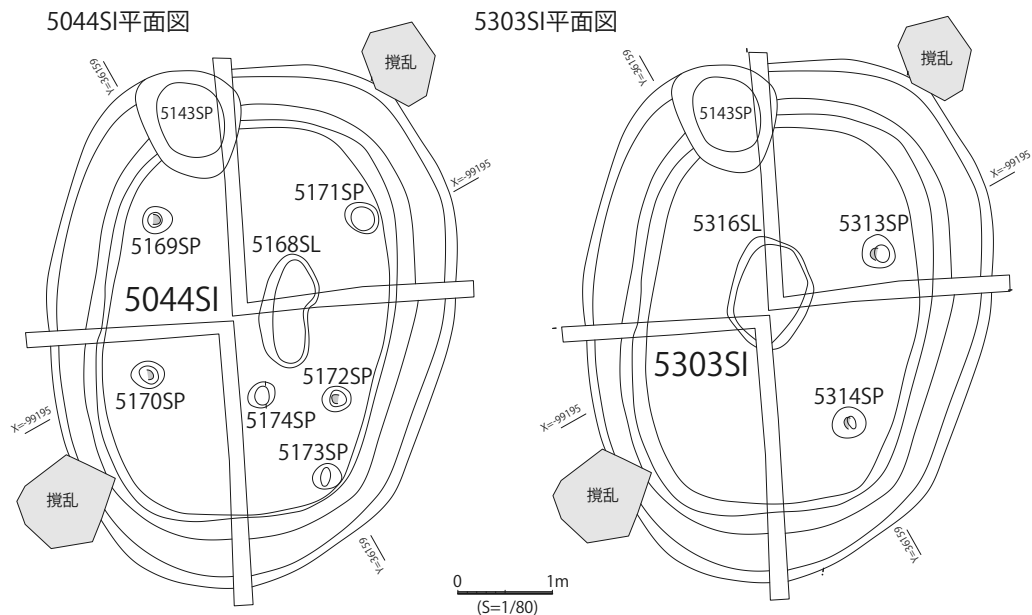
- 1 7.5YR3/2黒褐色極細粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む。焼土少量含む。5168SL
- 2 10YR2/2黒褐色細粒砂少量含むシルト層 黒色シルト小ブロック少量含む。小礫・中礫少量含む。
- 3 10YR2/1黒色細粒砂少量含むシルト層 黒褐色シルト小ブロック少量含む。小礫少量含む。
- 4 10YR2/1黒色粘土質シルト層 中粒砂少量含む。小礫少量含む。
- 5 10YR3~2/2黒褐色中粒砂少量含むシルト層 小礫・中礫少量含む。
- 6 10YR2/1黒色細粒砂質シルト層 黒褐色シルト小ブロック含む。
- 7 7.5YR2/1黒色極細粒砂多く含むシルト層 黒褐色シルトブロック少量含む。5316SL
- 8 10YR2/1黒色細粒砂質シルト層 黒褐色シルト小ブロック含む。小礫少量含む。周堤
- 9 10YR2/1黒色細粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む。

5303SI内5314SP・5315SP C-C'土層断面図

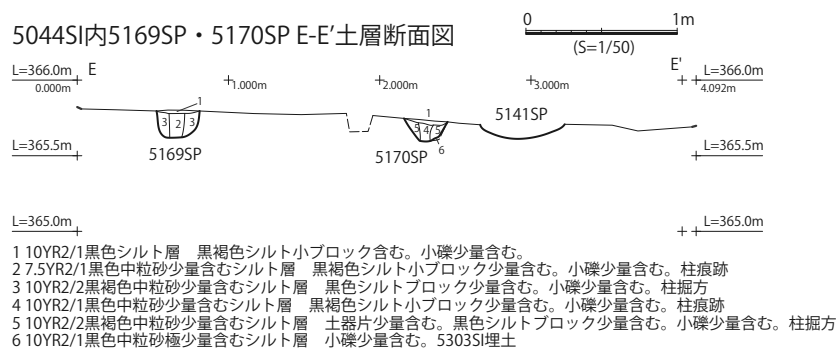


- 1 10YR2/1黒色細粒砂質シルト層 黒褐色シルト小ブロック含む。小礫少量含む。柱痕跡
- 2 10YR2/2黒褐色細粒砂少量含むシルト層 黒色シルトブロック少量含む。小礫少量含む。柱掘方
- 3 10YR2/2黒褐色細粒砂少量含むシルト層 黒色シルトブロック含む。小礫少量含む。柱掘方
- 4 植生痕
- 5 10YR2/2黒褐色細粒砂少量含むシルト層 小礫少量含む。柱痕跡
- 6 10YR2/1黒色細粒砂少量含むシルト層 小礫含む。柱痕跡
- 7 10YR2/2黒褐色細粒砂質シルト層 小礫少量含む。柱掘方
- 8 10YR2/1黒色細粒砂質シルト層 黒褐色シルトブロック含む。小礫少量含む。柱掘方

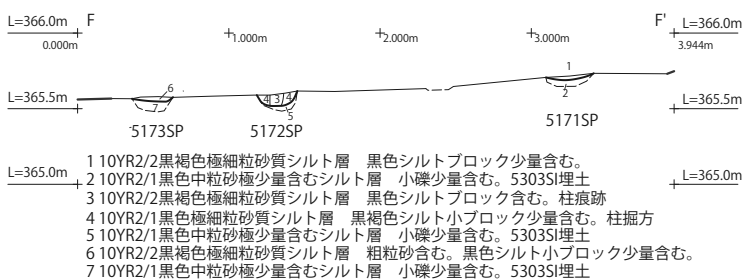
第 11 図 5044SI・5303SI 遺構図 (1) (S=1/50)



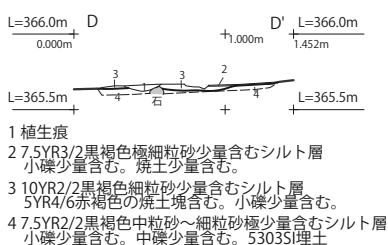
5044SI内5169SP・5170SP E-E'土層断面図



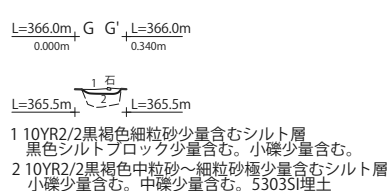
5044SI内5171SP・5172SP・5173SP F-F'土層断面図



5044SI内5168SL D-D'土層断面図



5044SI内5174SK G-G'土層断面図



第12図 5044SI・5301SI遺構図(2) (S=1/50)

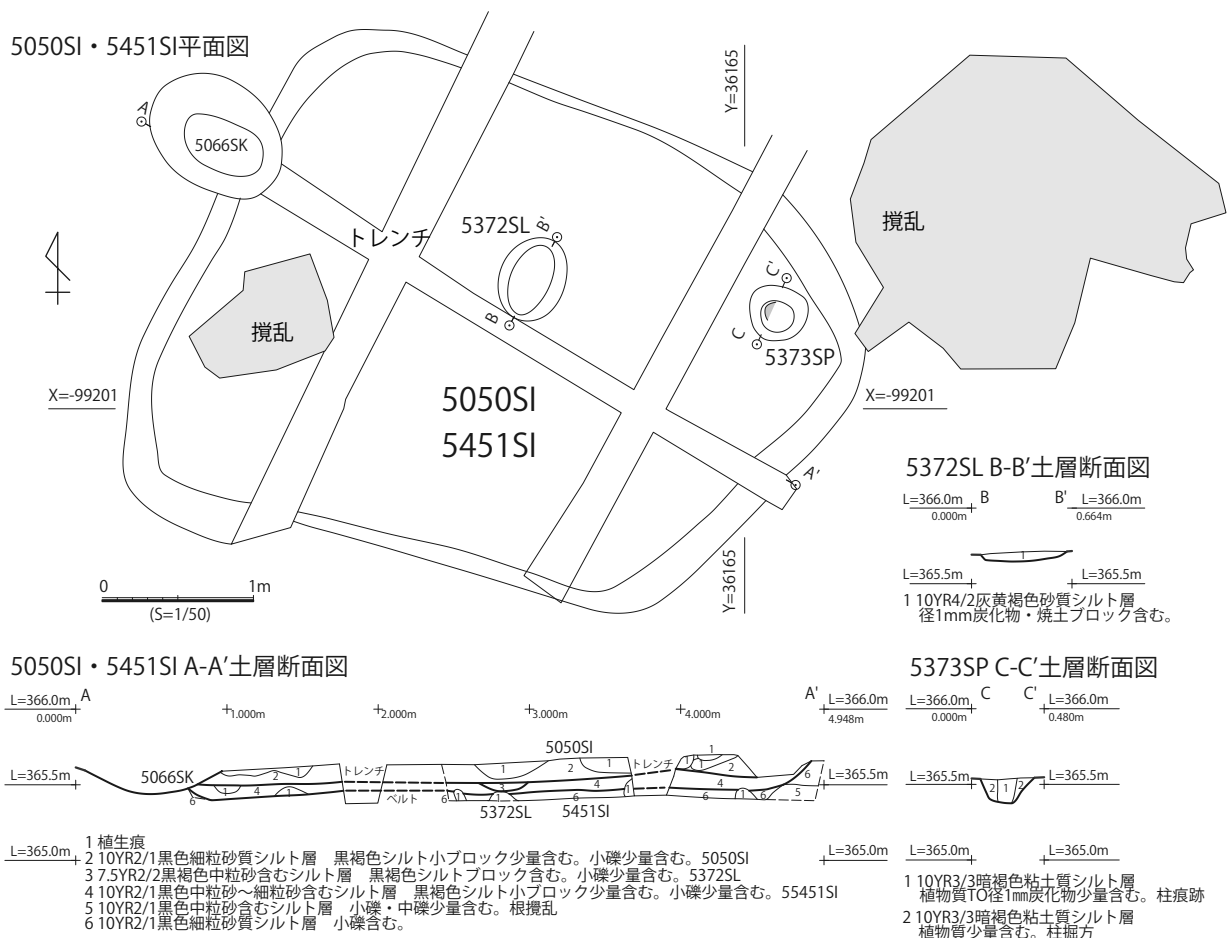
主柱穴や炉跡は確認されず、床面に礫が多量に散布している。

竪穴建物跡 5449SI は弥生時代前期～中期に位

置づけられる。

(7) 5044SI (第11図～第12図・遺構図版19)

21区中央部西寄りの1815と1916グリッド



第 13 図 5050SI・5451SI 遺構図 (S=1/50)

で検出された竪穴建物跡である。長軸 5.47m、短軸 4.48m の楕円形の平面プランである。検出段階で掘り方底面が検出された状態であり、埋土はほとんど認められない。下位に 5303SI が存在している。

主柱穴は 5169SP～5172SP が該当し 5044SI の中央寄りの四隅に所在するが、この他に 5173SP と 5164SP がある。5169SP は長軸 0.32m、短軸 0.29m、床面からの深さ 0.18m、5170SP は長軸 0.36m、短軸 0.32m、深さ 0.21m、5171SP は長軸 0.38m、短軸 0.35m、深さ 0.05m、5172SP は長軸 0.34m、短軸 0.28m、深さ 0.13m で、いずれも平面形は円形を呈し平面や断面で柱痕が確認された(第 12 図)。

炉跡 5168SL は 5044SI の中央東寄りの床面に構築された地床炉で、長軸 1.21m、短軸 0.61m の溝状を呈しており、深さ 0.08m を測る。炉床

付近では焼土をわずかに確認できる。

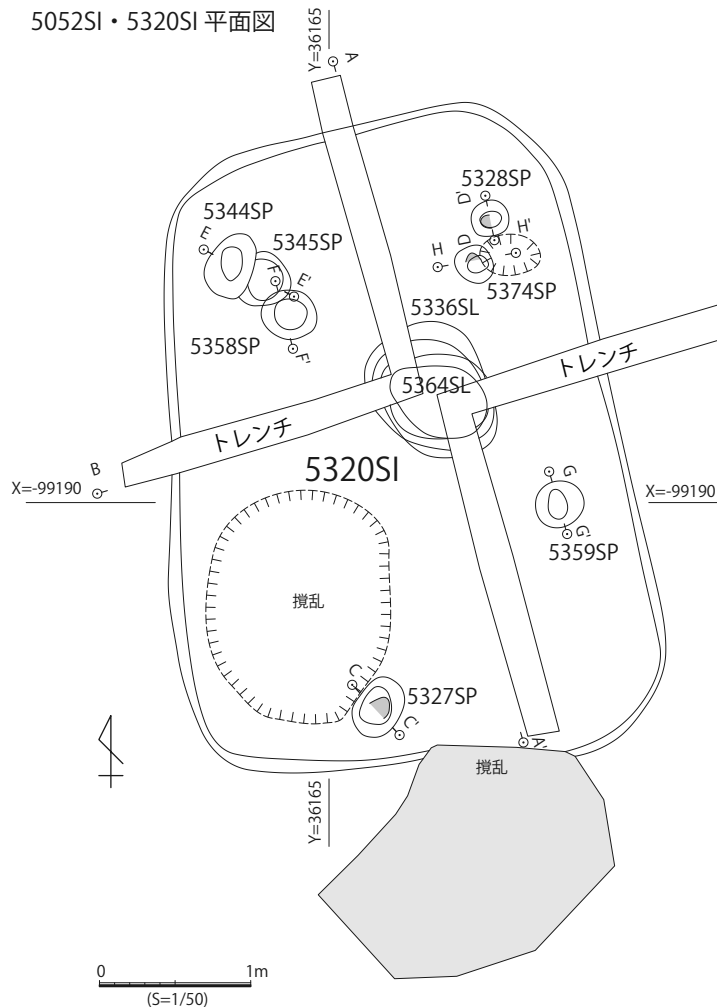
竪穴の外周部には幅 0.65m 前後で深さ 0.05m 前後の溝が巡っており、シルト小ブロックや小礫などを含む埋土となっており、上位に周堤が巡らされていたと考えられる。

出土遺物から竪穴建物跡 5044SI は弥生中期前半に位置づけられる。

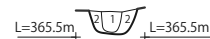
(8) 5303SI (第 11 図～第 12 図・遺構図版 19)

5044SI の下位で検出された竪穴建物跡である。長軸 5.47m、短軸 4.33m の楕円形の平面プランで深さは 0.15m を測る。埋土は黒褐色シルトが主体で、礫などを含む。

主柱穴は 5313SP と 53154SP が該当し、西側の柱穴は検出できなかった。5313SP は長軸 0.37m、短軸 0.35m、床面からの深さ 0.27m、5314SP は長軸 0.36m、短軸 0.33m、深さ 0.23m で、いずれも平面形は円形を呈し柱痕が

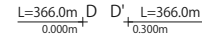


5052SI内5327SP C-C'土層断面図



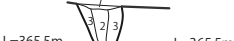
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト層 柱痕跡
- 2 10YR3/1黒褐色砂質シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトの混層 小礫少量含む。柱掘方

5052SI内5328SP D-D'土層断面図



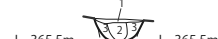
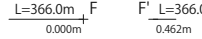
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト層 柱痕跡
- 2 10YR3/1黒褐色砂質シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトの混層 小礫少量含む。柱掘方

5052SI内5344SP E-E'土層断面図



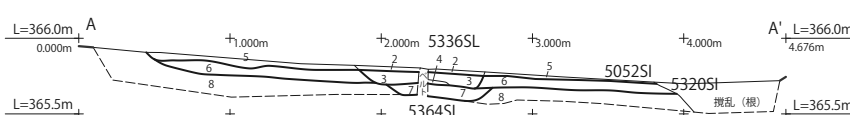
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト層 大礫の角礫少量含む。抜き取り痕。
- 2 10YR3/3暗褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。径1mm炭化物少量含む。柱痕跡。
- 3 10YR3/3暗褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。柱掘方。

5320SI内5358SP F-F'土層断面図

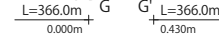


- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト層 抜き取り痕
- 2 10YR3/3暗褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。径1mm炭化物少量含む。柱痕跡
- 3 10YR3/3暗褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。柱掘方
- 4 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。小礫含む。径1~5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトブロック少量含む。

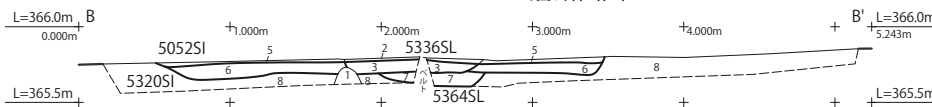
5052SI・5320SI A-A'土層断面図



5320SI内5359SP G-G'土層断面図

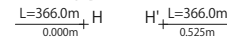


5052SI・5320SI B B'-B'土層断面図



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト層 抜き取り痕
- 2 10YR3/3暗褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。径1mm炭化物少量含む。柱痕跡
- 3 10YR3/3暗褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。柱掘方

5320SI内5374SP H-H'土層断面図



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。柱痕跡
- 2 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層 柱掘方

第 14 図 5052SI・5320SI 遺構図 (S=1/50)

確認できる (第 12 図)。

炉跡 5316SL は 5303SI のほぼ中央の床面に構築され、長軸 1.20m、短軸 0.91m、深さ 0.08m を測る。炭化物や被熱痕は認められないので、炉跡か否かは確定できない。

竪穴の外周には 5044SI と同様に浅い溝が存在

し、周堤の痕跡と推定される。

竪穴建物跡 5303SI は弥生時代中期前半に位置づけられる。

(9) 5050SI・5451SI (第 13 図・遺構図版 25)

21 区中央部西寄りの 1916 と 2016 グリッドで検出された竪穴建物跡で、上位に 5050SI



第 15 図 5054SI 遺構図 (S=1/50)

が、下位に 5451SI がある。上位の竪穴建物跡 5050SI は長軸 4.21m、短軸 3.19m の歪な長方形の平面プランで深さは 0.21m を測り、埋土は黒色細粒砂質シルトである。一方、下位の竪穴建物跡 5451SI は長軸 4.22m、短軸 3.59m の歪な長方形の平面プランである。埋土はシルトブロックや小礫などを含む黒褐色シルトである。

5050SI には柱穴や炉跡などの内部施設の遺構は検出できなかった。一方、5451SI では主柱穴は 5373SP と炉跡 5372SL が存在する。5373SP は長軸 0.40m、短軸 0.38m、床面からの深さ 0.18m である。5451SI の北東隅に位置するが、他の柱穴は確認することができなかった。炉跡 5372SL は 1230SI の中央北寄りの床面に構築された地床炉で、長軸 0.57m、短軸 0.44m、深さ 0.07m を測る。炉床付近では炭化物と焼土ブロ

ックを含む。

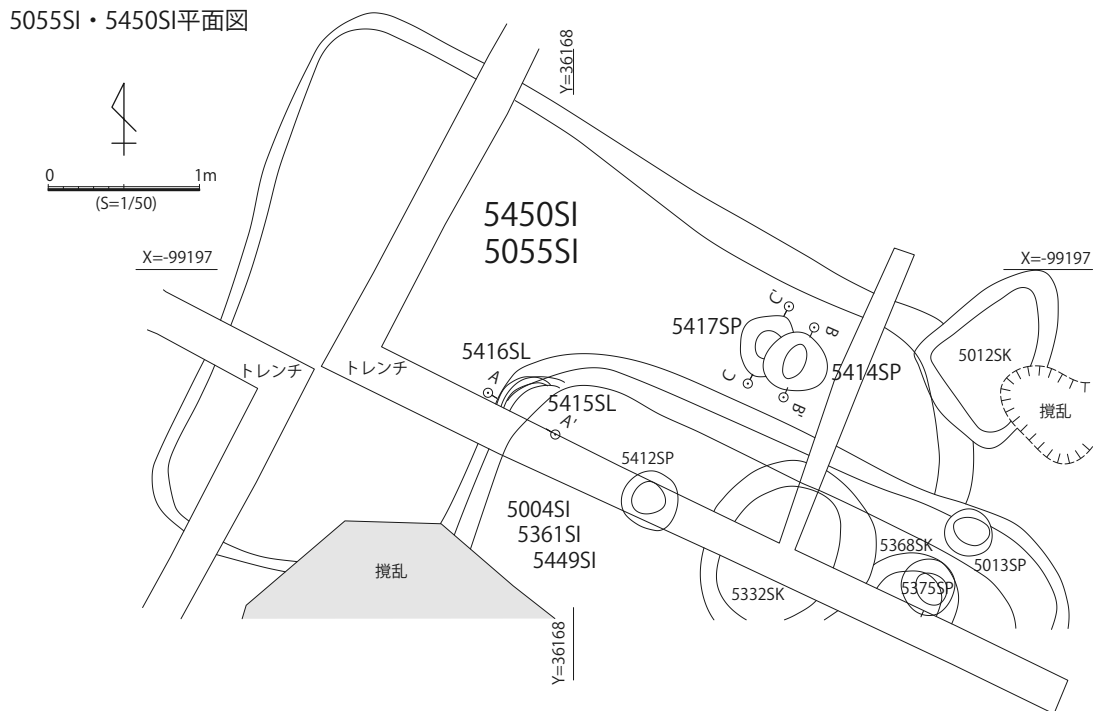
出土遺物から竪穴建物跡 5050SI・5451SI は縄文時代後期後葉～晩期前半に位置づけられる。

(10) 5052SI (第 14 図・遺構図版 19)

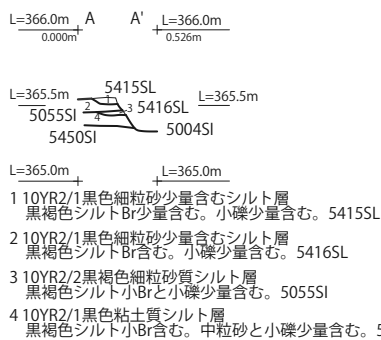
21 区中央部西寄りの 1816 と 1916 グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸 4.42m、短軸 2.96m の隅丸台形の平面プランで深さは 0.18m を測る。埋土は炭化物を含む黒褐色粘土質シルトである。

主柱穴は 5327SP と 5328SP と 5344SP が該当し 5052SI の四隅に所在するが、南東隅の柱穴は不明。5327SP は長軸 0.41m、短軸 0.30m、床面からの深さ 0.18m、5328SP は長軸 0.26m、短軸 0.25m、深さ 0.15m、5344SP は長軸 0.44m、短軸 0.31m、深さ 0.30m で、いずれも平面形は円形を呈する。

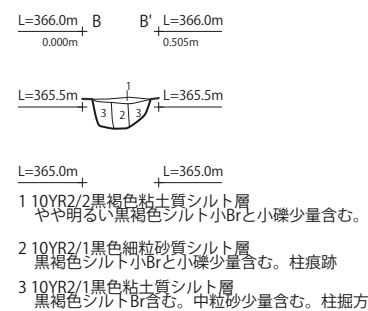
5055SI・5450SI平面図



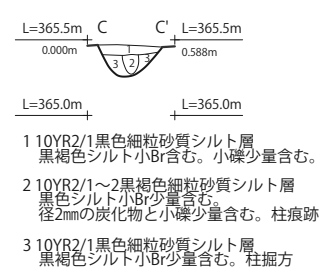
5415SL・5416SLA-A'土層断面図



5414SP B-B'土層断面図



5417SP C-C'土層断面図



第 16 図 5055SI・5450SI 遺構図 (S=1/50)

炉跡 5336SL は 1230SI の中央北寄りの床面に構築された地床炉で、長軸 0.88m、短軸 0.77m、深さ 0.10m を測る。炉床付近では炭化物や焼土ブロックを含む。

出土遺物から竪穴建物跡 5052SI は縄文時代晚期前半にさかのぼる可能性がある。

(11) 5320SI (第 14 図・遺構図版 19)

5044SI の下位で検出された竪穴建物跡である。長軸 4.42m、短軸 2.96m の隅丸台形の平面プランで深さは 0.15m を測る。埋土は炭化物を含む黒褐色粘土質シルトである。

主柱穴は 5358SP、5359SP、5374SP が該当し、竪穴の北側に偏って所在する。5358SP は長軸 0.37m、短軸 0.33m、床面からの深さ 0.18m、

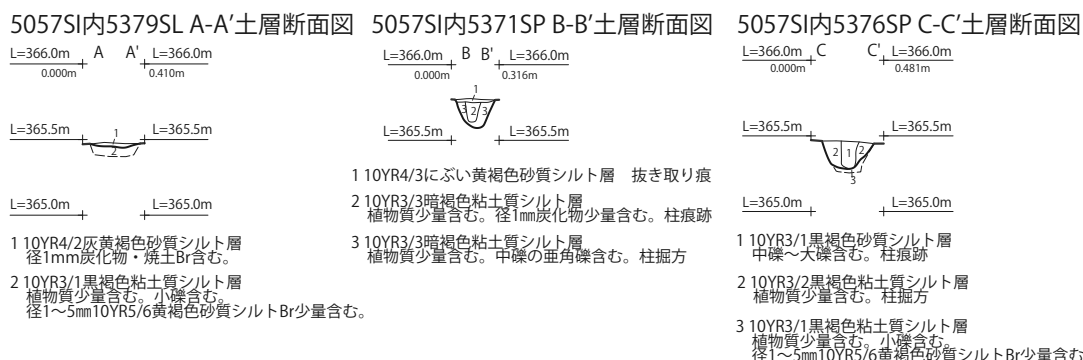
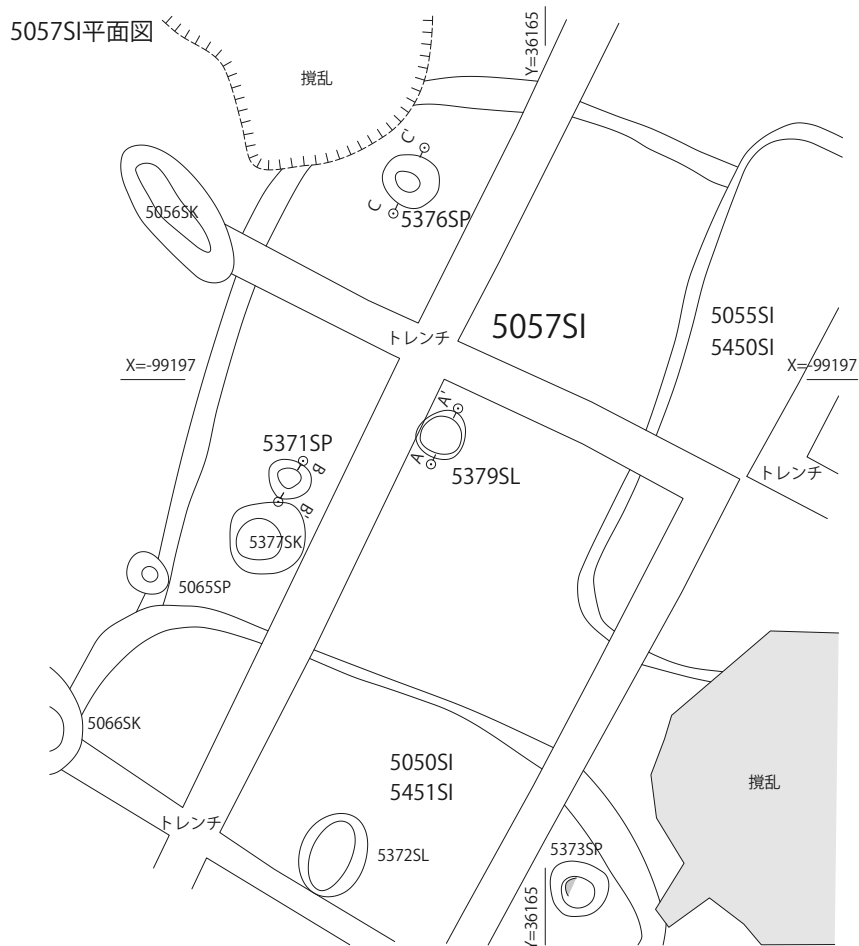
5359SK は長軸 0.33m、短軸 0.31m、深さ 0.29m、5374SP は長軸 0.27m、短軸 0.24m、深さ 0.23m で、いずれも平面形は円形である。

炉跡 5364SL は 5320SI の中央北寄りの床面に構築された地床炉で、長軸 0.83m、短軸 0.67m、深さ 0.14m を測る。埋土に炭化物と焼土ブロックを含む。

出土遺物から竪穴建物跡 5320SI は縄文時代後期初頭に位置づけられる。

(12) 5054SI (第 15 図・遺構図版 19)

21 区南西部の 1916 グリッドで検出された竪穴建物跡である。5321SI と 5055SI などに切られ全形は不明だが、長軸 3.70m、短軸 2.67m の隅丸方形の平面プランを呈していたと思われ、深



第 17 図 5057SI 遺構図 (S=1/50)

さは 0.14m を測る。埋土は黒色シルトや黒褐色シルトである。残存状況が不良なためか、竪穴建物に伴う内部施設は検出されなかった。時期は縄文時代中期後半から後期初頭に属すると思われる。

(13) 5055SI・5450SI (第 16 図・遺構図版 25)

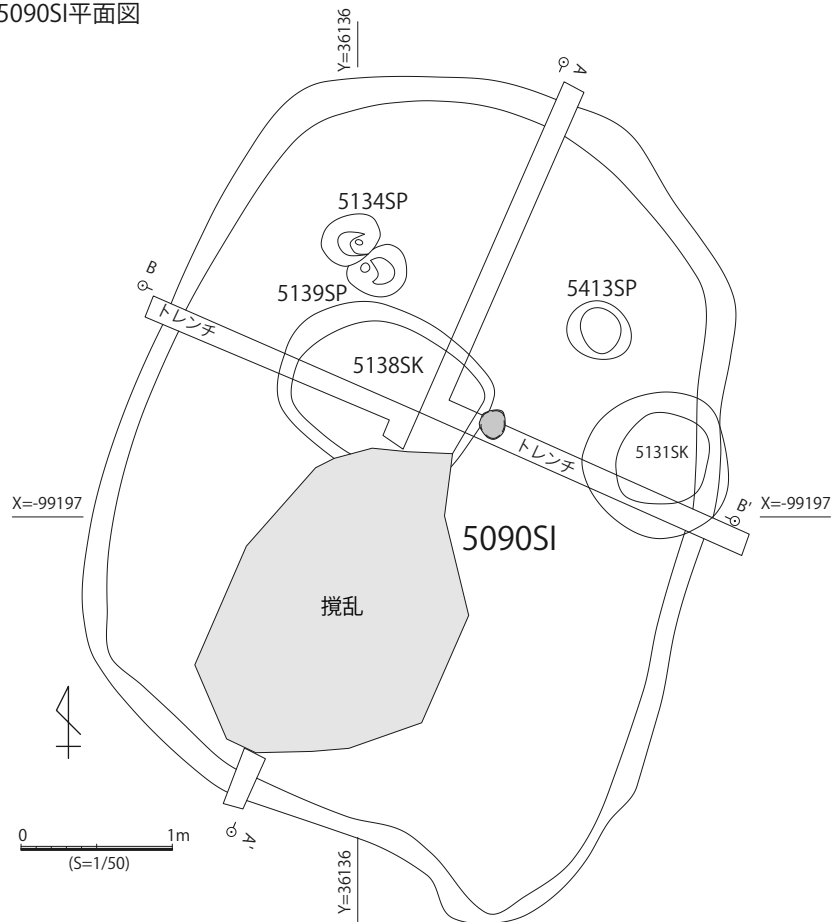
21 区南西部の 1916 と 1917 グリッドで検出された竪穴建物跡で、南東隅部が 5004SI に切られている。2 基の竪穴建物跡が重複して存在し、上位の 5055SI は長軸 5.09m、短軸 3.62m の隅丸方形の平面プランと推定され、深さは 0.26m

を測る。埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。一方、下位の 5450SI は長軸 5.12m、短軸 3.68m の隅丸方形の平面プランと推定され、埋土は黒褐色粘土質シルトである。

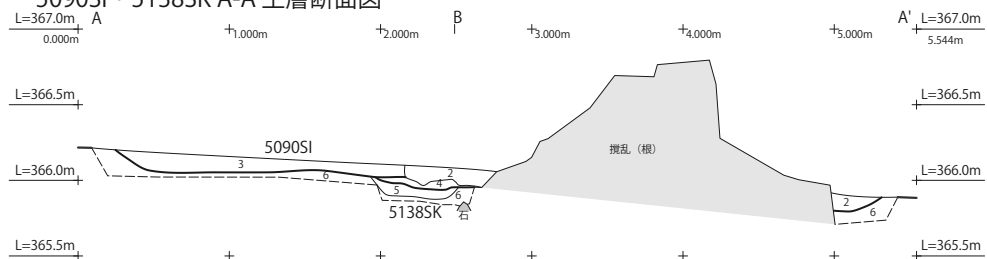
支柱穴は北東隅部のみ確認でき、5055SI は 5414SP、5450Si は 5417SP が該当する。5414SP は長軸 0.43m、短軸 0.39m、床面からの深さ 0.21m、5417SK は長軸 0.44m、短軸 0.23m 以上、深さ 0.21m である。

炉跡は中央部の床面で検出されたが、5004SI

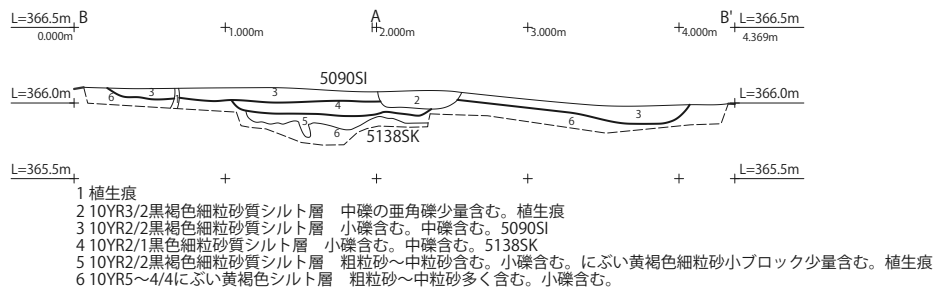
5090SI平面図



5090SI・5138SK A-A'土層断面図



5090SI・5138SK B-B'土層断面図



第 18 図 5090SI 遺構図 (S=1/50)

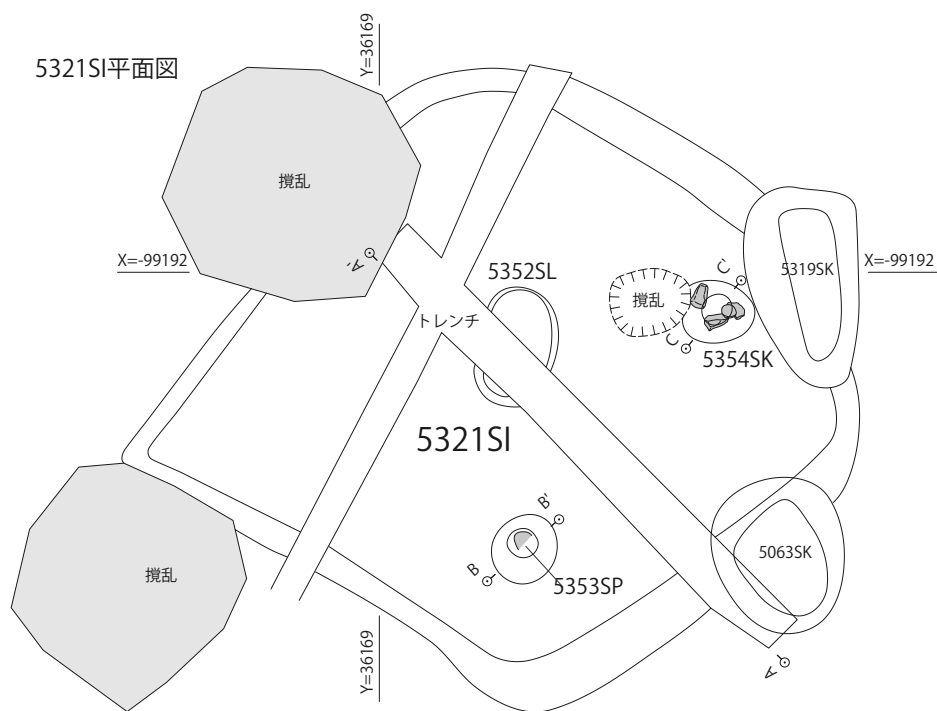
などで破壊され大部分は遺存していない。
5055SI に伴う炉跡は 5415SI、5450SI に伴う炉
跡は 5416SL で、黒褐色シルトが埋積するが炭
化物や被熱痕は認められない。

出土遺物から竪穴建物跡 5055SI と 5450SI は

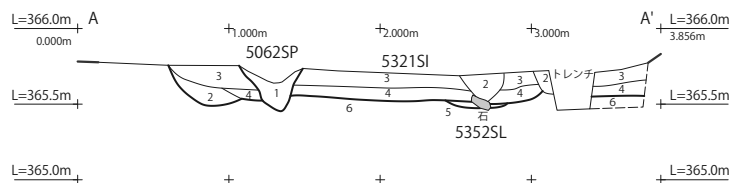
縄文時代中期後半に位置づけられる。

(14) 5057SI (第 17 図・遺構図版 25)

21 区南西部の 1916 グリッドで検出された竪
穴建物跡で、5055SI と 5050SI など切られ全
形は不明である。長軸 4.03m 以上、短軸 2.92m

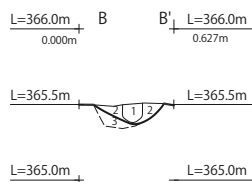


5321SI A-A'土層断面図



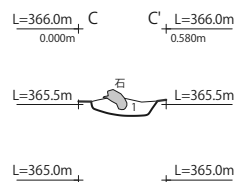
- 1 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト層 5062SP
- 2 植生痕
- 3 10YR3/3暗褐色粘土質シルト層 植物質と小礫含む。5321SI
- 4 10YR3/3暗褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。径1mm炭化物・焼土Br含む。5321SI
- 5 10YR3/3暗褐色砂質シルト層 植物質と小礫～中礫含む。径1mm炭化物・焼土Br含む。5352SL
- 6 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層 小礫～中礫含む。植物質と径1～5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5321SI内5353SP B-B'土層断面図



- 1 10YR3/3暗褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。径1mm炭化物少量含む。柱痕跡
- 2 10YR3/3暗褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。柱掘方
- 3 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。小礫含む。径1～5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5321SI内5354SK C-C'土層断面図



- 1 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層 大礫の角礫含む。

第 19 図 5321SI 遺構図 (S=1/50)

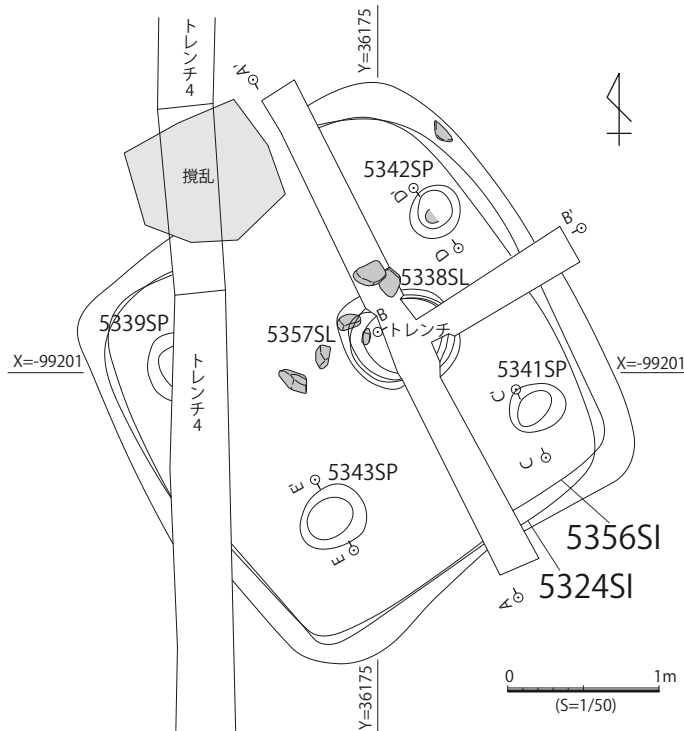
以上の隅丸方形の平面プランで深さは 0.22m を測る。

主柱穴は 5371SP と 5376SP が該当し 5057SI の西側の四隅に所在するが、東側の柱穴は不明である。5371SP は長軸 0.30m、短軸 0.27m、床面からの深さ 0.16m、5376SK は長軸 0.38m、

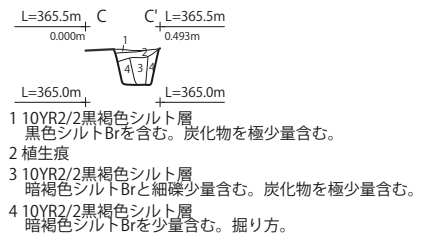
短軸 0.35m、深さ 0.34m で、いずれも平面形は円形を呈する。

炉跡 5379SL は 5057SI のほぼ中央の床面に構築された地床炉と思われ、長軸 0.34m、短軸 0.31m、深さ 0.05m を測る。炉床付近では炭化物と焼土ブロックを含む黒褐色シルトが堆積する

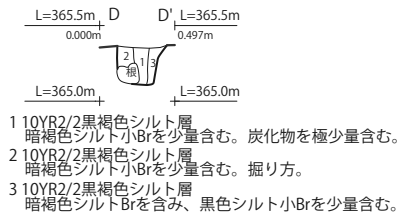
5324SI・5356SI平面図



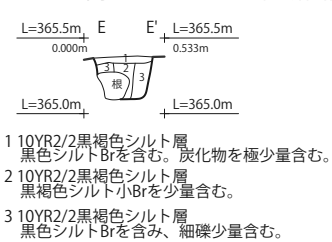
5324SI内5341SP C-C'土層断面図



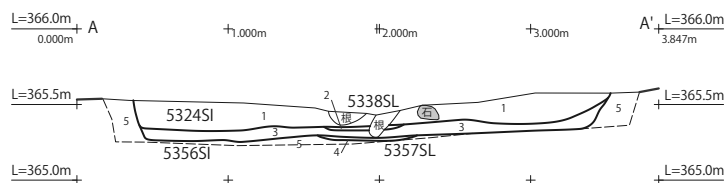
5324SI内5342SP D-D'土層断面図



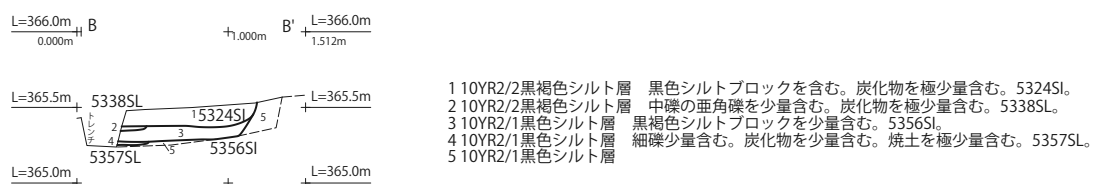
5324SI内5343SP E-E'土層断面図



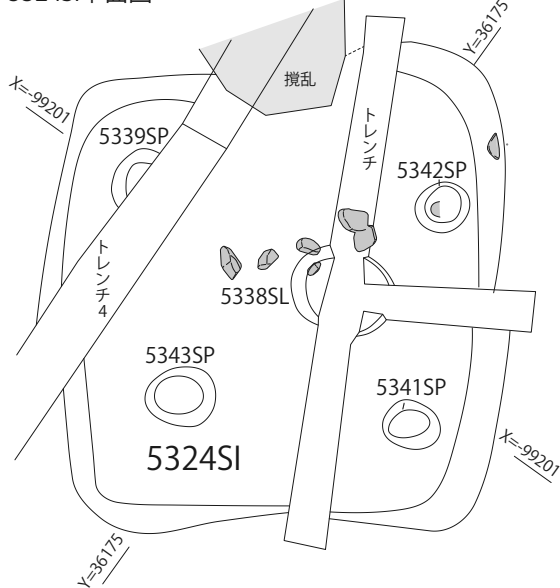
5324SI・5356SI A-A'土層断面図



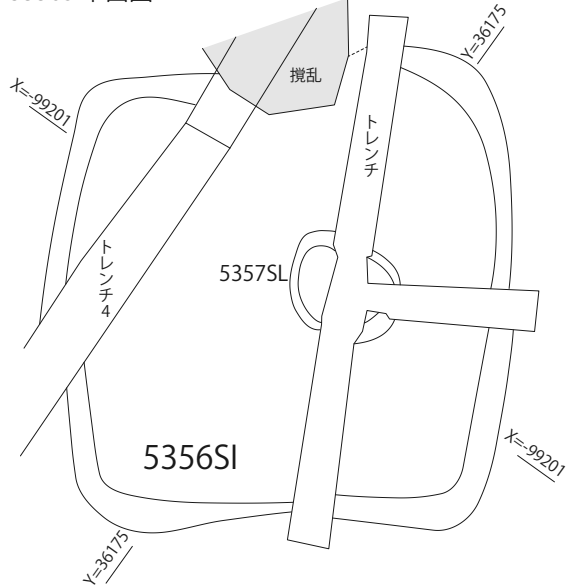
5324SI・5356SI B-B'土層断面図



5324SI平面図



5356SI平面図



第 20 図 5324SI・5356SI 遺構図 (S=1/50)

が、被熱痕は認められない。

出土遺物から竪穴建物跡 5057SI は縄文時代後期～晩期に位置づけられる。

(15) 5090SI (第 18 図・遺構図版 17・23)

21 区西端部の 1913 グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸 5.08m、短軸 3.91m の歪な楕円形の平面プランで深さは 0.26m を測る。埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。

主柱穴は 5134P と 5139SP と 5413SP が候補としてあげられるが、南部の柱穴は確認できなかった。5134SP は長軸 0.40m、短軸 0.31m、床面からの深さ 0.22m、5139SK は長軸 0.40m、短軸 0.32m、深さ 0.21m、5413SP は長軸 0.44m、短軸 0.38m、深さ 0.12m で、いずれも平面形は円形である。

5090SI の中央北西寄りの床面に土坑 5138SK があり、炉跡の痕跡の可能性が考えられる。長軸 1.38m、短軸 0.76m、深さ 0.14m を測るが、炭化物や被熱痕は認められない。

出土遺物から竪穴建物跡 5090SI は縄文時代後期～晩期に位置づけられる。

(16) 5321SI (第 19 図・遺構図版 19)

21 区南西部の 1916 と 1917 グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸 3.70m、短軸 3.68m の歪な隅丸方形の平面プランで深さは 0.32m を測る。埋土は炭化物を微量に含む暗褐色粘土質シルトである。

主柱穴は 5353SP と 5354SK が該当し 5321SI の四隅に所在する形となるが、西側の柱穴は遺存しない。5353SP は長軸 0.47m、短軸 0.42m、床面からの深さ 0.14m、5354SK は長軸 0.49m、短軸 0.42m、深さ 0.25m で礫を含む。

炉跡 5352SL は 5321SI の中央西寄りの床面に構築され、長軸 0.78m、短軸 0.52m、深さ

0.24m を測る。炉床付近では炭化物と焼土ブロックを含む。

出土遺物から竪穴建物跡 5321SI は縄文時代後期に位置づけられる。

(17) 5324SI (第 20 図・遺構図版 26)

21 区南部の 1917 と 2017 グリッドで検出された竪穴建物跡で、下位に 5356SI が存在する。長軸 3.16m、短軸 3.05m のやや歪な隅丸方形の平面プランで深さは 0.31m を測る。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色シルトである。

主柱穴は 5339SP と 5341SP ～ 5343SP が該当し 5324SI の四隅に所在する。5339SP は長軸 0.45m 以上、短軸 0.16m 以上、床面からの深さ 0.09m、5341SP は長軸 0.39m、短軸 0.31m、深さ 0.26m、5342SP は長軸 0.37m、短軸 0.33m、深さ 0.29m、5343SP は長軸 0.47m、短軸 0.40m、深さ 0.30m で、いずれも平面形は円形を呈し断面で柱痕が観察される。

炉跡 5338SL は 5324SI の中央東寄りの床面に構築され、長軸 0.68m、短軸 0.52m、深さ 0.06m を測る。炉床付近では炭化物を含む黒褐色シルトが堆積するが、被熱痕は認められない。内部から少量の礫が出土したが床や壁を構築したものとは思われない。

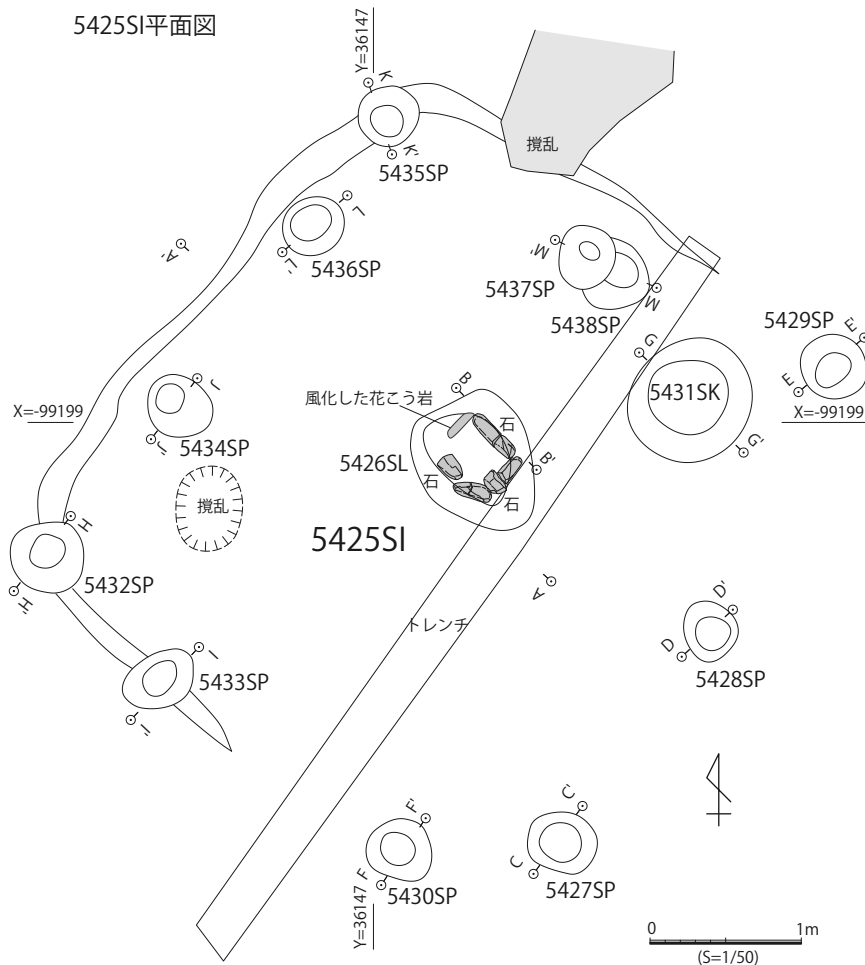
出土遺物から竪穴建物跡 5324SI は縄文時代後期中葉に位置づけられる。

(18) 5356SI (第 20 図・遺構図版 26)

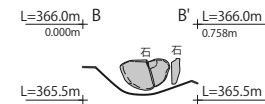
21 区南部の 1917 と 2017 グリッドで 5324SI の下位で検出された竪穴建物跡である。長軸 3.16m、短軸 3.05m のやや歪な隅丸方形の平面プランで深さは 0.23m を測る。埋土は黒色シルトである。

主柱穴は確認できなかったが、5321SI の主柱穴と同じ可能性も残る。炉跡 5357SL は 5338SL

5425SI平面図



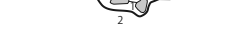
5425SI内5426SL B-B'立面図



5425SI内5427SP C-C'土層断面図

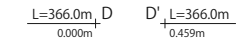


5425SI内5428SP D-D'土層断面図



- L=365.0m L=365.0m
- 1 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
10YR3/2黒褐色粘土質シルトBr含む。
径1mm焼土Br含む。大礫の亜角礫含む。
 - 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1~5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5425SI内5428SP D-D'土層断面図

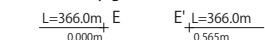


5425SI内5429SP E-E'土層断面図



- L=365.0m L=365.0m
- 1 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層
中礫の亜角礫少量含む。
 - 2 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。
 - 3 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1~5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5425SI内5429SP E-E'土層断面図



5425SI内5429SP E-E'土層断面図

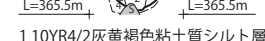


- L=365.0m L=365.0m
- 1 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層
中礫の亜角礫少量含む。
 - 2 10YR3/1黒褐色砂質シルト層
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。
 - 3 10YR3/2黒褐色砂質シルト層
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。
 - 4 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1~5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5425SI内5432SP H-H'土層断面図

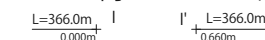


5425SI内5432SP H-H'土層断面図

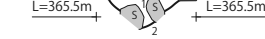


- L=365.5m L=365.5m
- 1 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層
中礫の亜角礫少量含む。抜き取り痕
 - 2 10YR3/1黒褐色砂質シルト層
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトブロック含む。柱痕跡
 - 3 10YR3/2黒褐色砂質シルト層
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトブロック含む。柱痕跡
 - 4 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1~5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトブロック少量含む。

5425SI内5433SP I-I'土層断面図

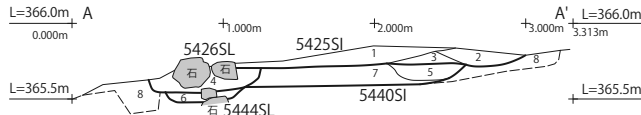


5425SI内5433SP I-I'土層断面図



- L=365.0m L=365.0m
- 1 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
10YR3/2黒褐色粘土質シルトBr含む。
径1mm焼土Br含む。大礫の亜角礫含む。
 - 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1~5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5425SI・5440SI A-A'土層断面図

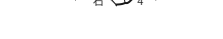


- L=365.0m L=365.0m
- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 植物質と径1mm炭化物・焼土Br少量含む。中礫含む。5425SI
 - 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。中礫含む。5425SI
 - 3 10YR3/1黒褐色砂質シルト層 径1~3mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。5425SI
 - 4 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 中礫含む。径1mm炭化物・焼土Br含む。5426SL掘方
 - 5 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。中礫~大礫含む。5440SI
 - 6 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 小礫~中礫含む。径1mm炭化物・焼土Br含む。5444SL
 - 7 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 中礫含む。径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。5440SI
 - 8 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1~5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5425SI内5430SP F-F'土層断面図



5425SI内5430SP F-F'土層断面図

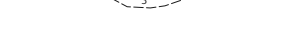


- L=365.0m L=365.0m
- 1 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層
中礫の亜角礫少量含む。抜き取り痕
 - 2 10YR3/1黒褐色砂質シルト層
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。柱痕跡
 - 3 10YR3/2黒褐色砂質シルト層
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。柱掘方
 - 4 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1~5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5425SI内5431SK G-G'土層断面図



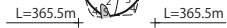
5425SI内5431SK G-G'土層断面図



- L=365.0m L=365.0m
- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層
小礫含む。大礫の亜角礫含む。
径1~3mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。
 - 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 小礫含む。
 - 3 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1~5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

第 21 図 5425SI 遺構図 (S=1/50)

5425SI内5434SP J-J'土層断面図



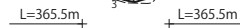
- 1 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層
中礫の亜角礫少量含む。抜き取り痕
- 2 10YR3/1黒褐色砂質シルト層
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。柱痕跡
- 3 10YR3/2黒褐色砂質シルト層
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。柱掘方
- 4 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1～5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5425SI内5435SP K-K'土層断面図



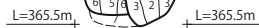
- 1 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層
中礫の亜角礫少量含む。
- 2 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。
- 3 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1～5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5425SI内5436SP L-L'土層断面図



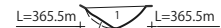
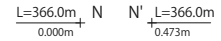
- 1 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層
中礫の亜角礫少量含む。
- 2 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。
- 3 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1～5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5425SI内5437SP・5438SP M-M'土層断面図



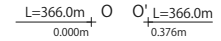
- 1 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層
中礫の亜角礫少量含む。抜き取り痕。5437SP
- 2 10YR3/1黒褐色砂質シルト層
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。柱痕跡。5437SP
- 3 10YR3/2黒褐色砂質シルト層
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。柱掘方。5437SP
- 4 10YR3/3暗褐色粘土質シルト層
径1mm炭化物含む。抜き取り痕。5438SP
- 5 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
柱痕跡。5438SP
- 6 10YR3/2黒褐色砂質シルト層
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。柱掘方。5438SP
- 7 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1～5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5440SI内5441SP N-N'土層断面図



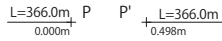
- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層
径1mm炭化物・焼土Br含む。大礫の角礫含む。
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1～5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5440SI内5442SP O-O'土層断面図



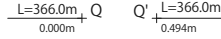
- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層
径1mm炭化物・焼土Br含む。
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1～5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5440SI内5443SP P-P'土層断面図



- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層
中礫含む。
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1～5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5440SI内5445SP Q-Q'土層断面図



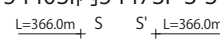
- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層
中礫少量含む。
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。

5440SI内5446SP R-R'土層断面図

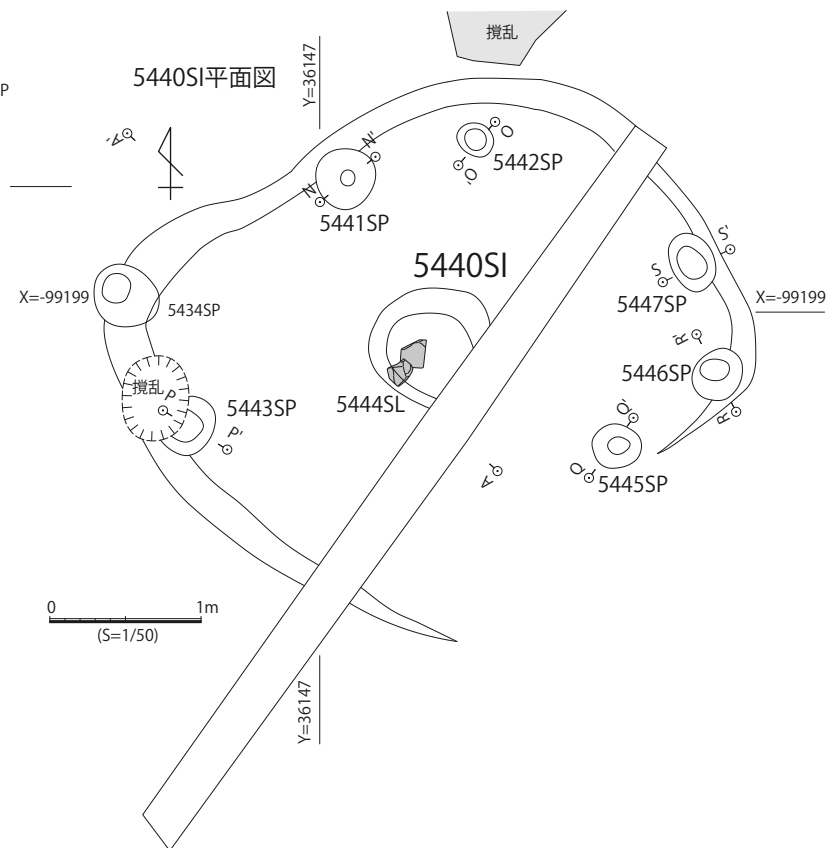


- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層
中礫少量含む。
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1～5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

5440SI内5447SP S-S'土層断面図

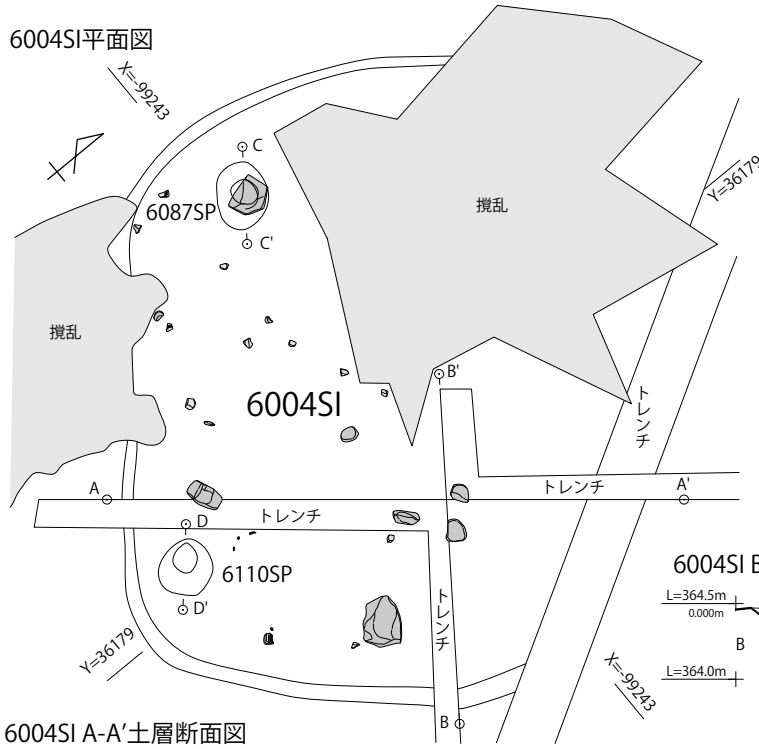


- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層
中礫少量含む。
径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr含む。
- 2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層
植物質少量含む。大礫の亜角礫多く含む。
径1～5mm10YR5/6黄褐色砂質シルトBr少量含む。

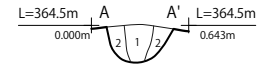


第 22 図 5425SI・5440SI 遺構図 (S=1/50)

6004SI平面図



6087SP C-C'土層断面図



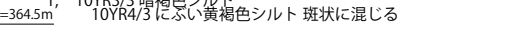
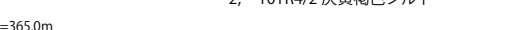
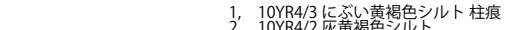
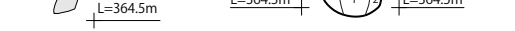
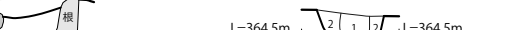
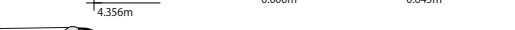
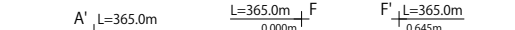
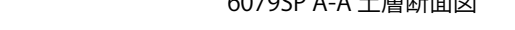
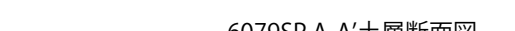
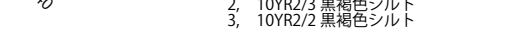
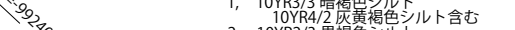
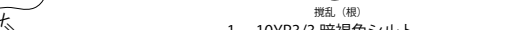
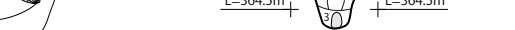
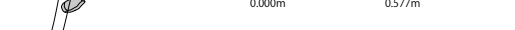
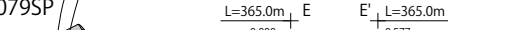
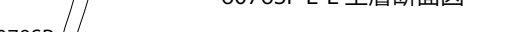
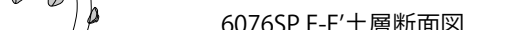
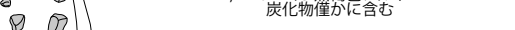
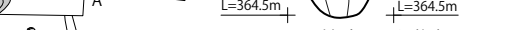
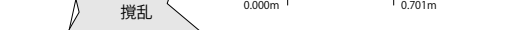
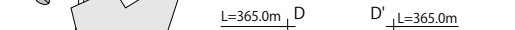
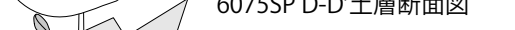
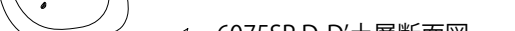
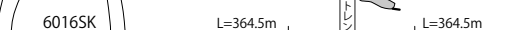
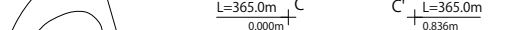
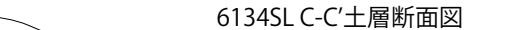
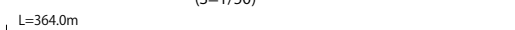
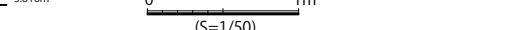
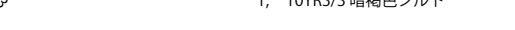
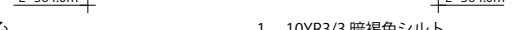
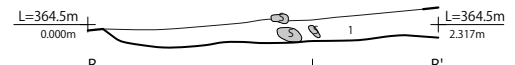
- 1, 10YR4/3 にふい黄褐色シルト 柱痕
2, 10YR3/3 暗褐色シルト

6110SP D-D'土層断面図

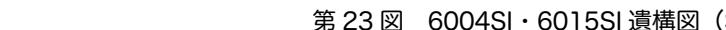
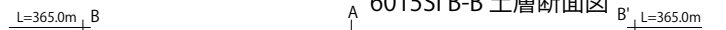
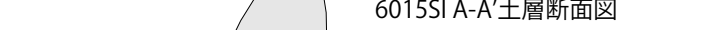
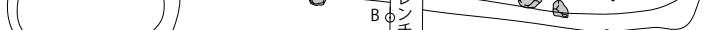
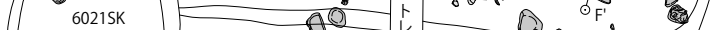
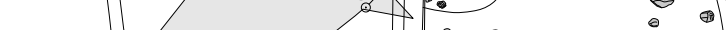
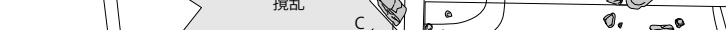
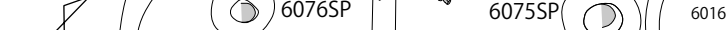
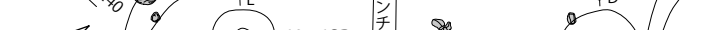
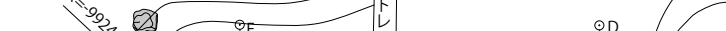
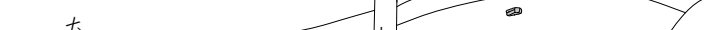
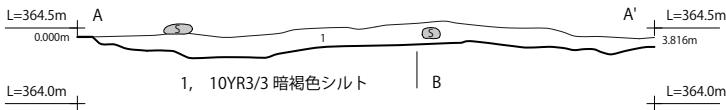


- 1, 10YR4/3 にふい黄褐色シルト
2, 10YR3/3 暗褐色シルト 柱痕
3, 10YR2/3 黒褐色シルト

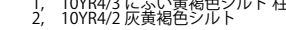
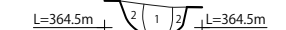
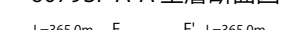
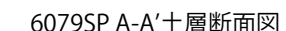
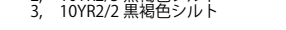
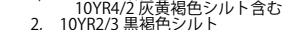
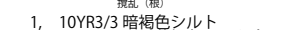
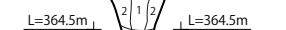
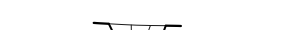
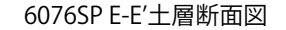
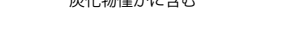
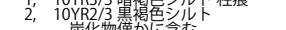
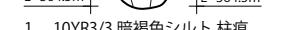
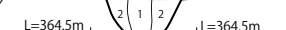
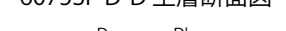
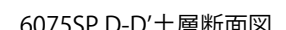
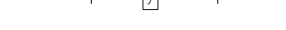
6004SI B-B'土層断面図



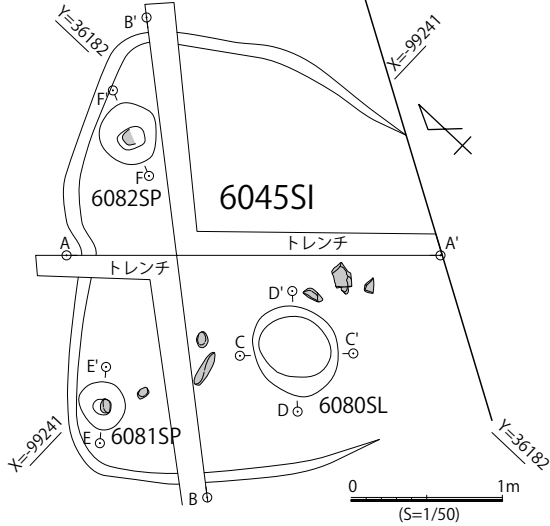
6004SI A-A'土層断面図



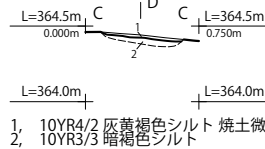
6134SL C-C'土層断面図



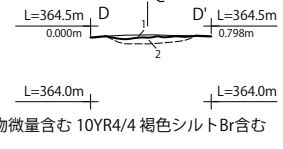
6045SI平面図



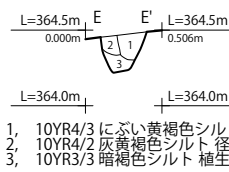
6045SI内6080SL C-C'土層断面図



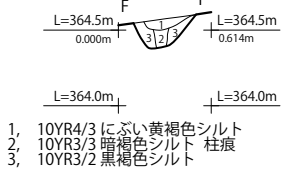
6045SI内6080SL D-D'土層断面図



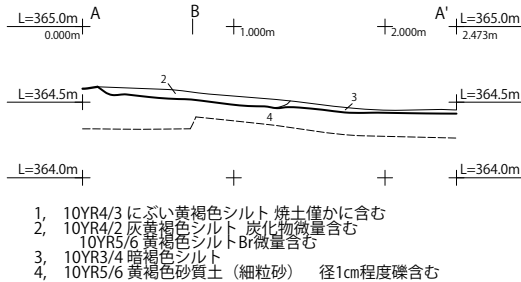
6045SI内6081SP E-E'土層断面図



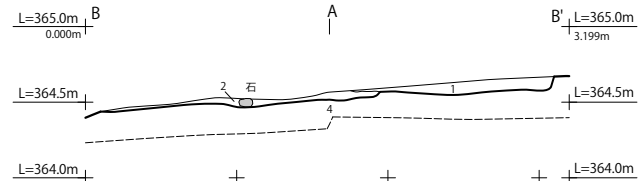
6045SI内6082SP F-F'土層断面図



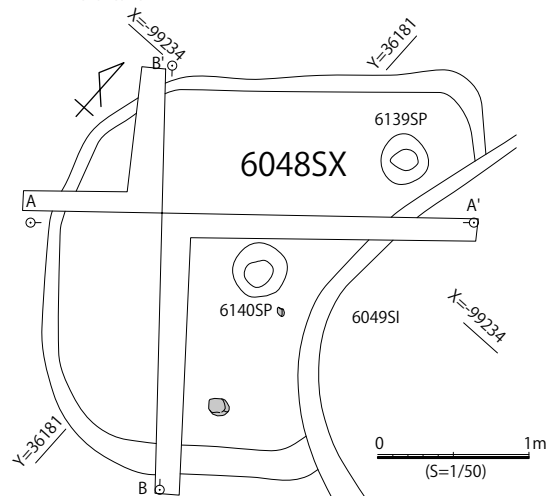
6045SI A-A'土層断面図



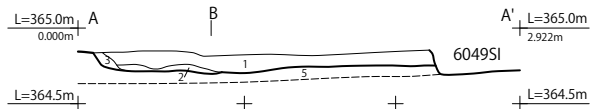
6045SI B-B'土層断面図



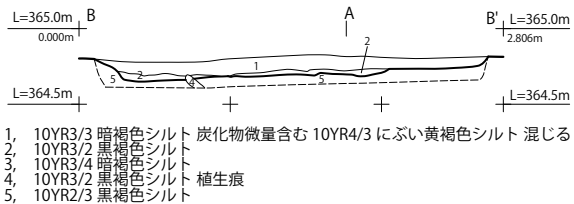
6048SX平面図



6048SX A-A'土層断面図



6048SX A-A'土層断面図



第24図 6045SI・6048SX 遺構図 (S=1/50)

の下位で検出された地床炉で、長軸 0.73m、短軸 0.66m、深さ 0.06m を測る。炉床付近では炭化物と焼土を含む黒色シルトが堆積する。

竪穴建物跡 5356SI は縄文時代後期中葉以前に位置づけられる。

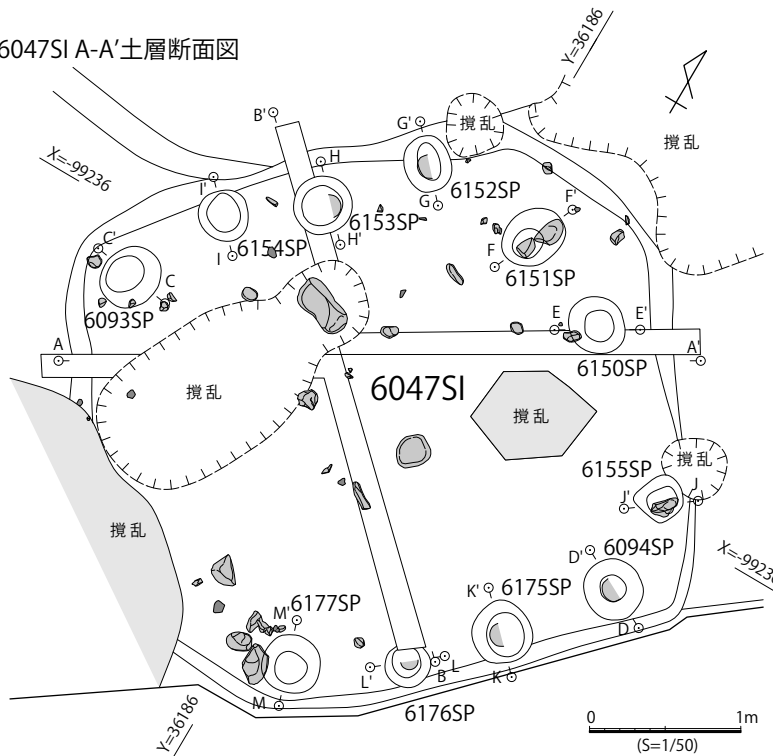
(19) 5425SI (第21図～第22図・遺構図版24)

21区南西部の1914と2014グリッドで検出

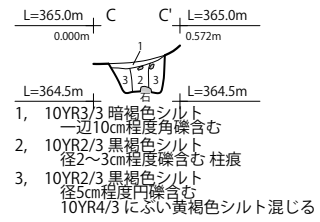
された竪穴建物跡で、東半部は斜面となって削られて残存していない。4.51m×2.61m以上の隅丸方形の平面プランと推定され、深さは0.15mを測る。埋土は炭化物と焼土を微量に含む黒褐色粘土質シルトである。

柱穴は5427SP～5438SPが該当すると考えられ、5425SIの外周におおよそ所在する。

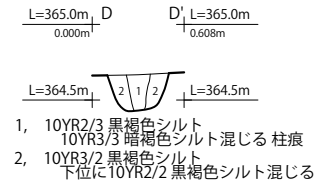
6047SI A-A'土層断面図



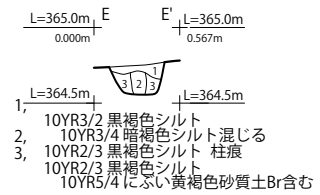
6047SI内6093SP C-C'土層断面図



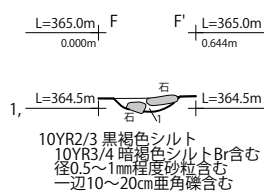
6047SI内6094SP D-D'土層断面図



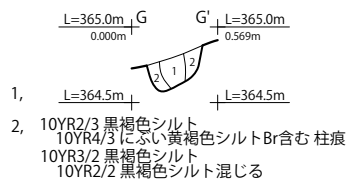
6047SI内6150SP E-E'土層断面図



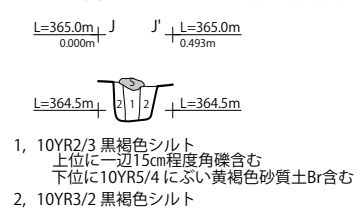
6047SI内6151SP F-F'土層断面図



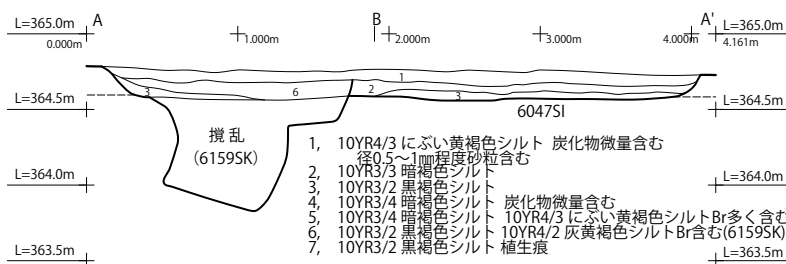
6047SI内6152SP G-G'土層断面図



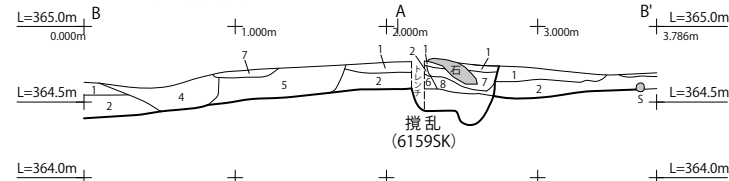
6047SI内6155SP J-J'土層断面図



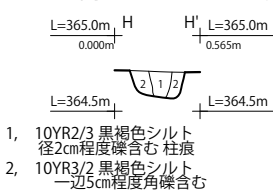
6047SI A-A'土層断面図



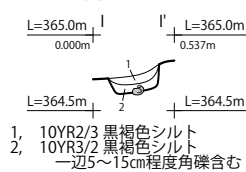
6047SI B-B'土層断面図



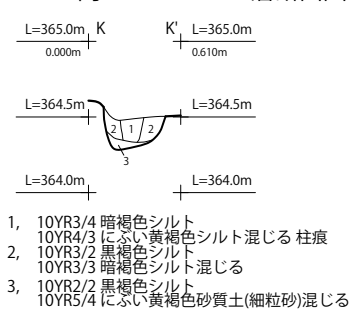
6047SI内6153SP H-H'土層断面図



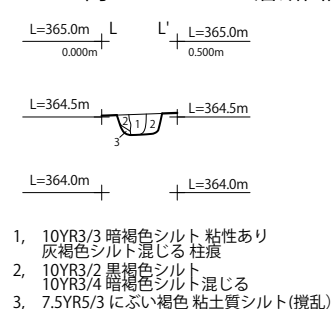
6047SI内6154SP I-I'土層断面図



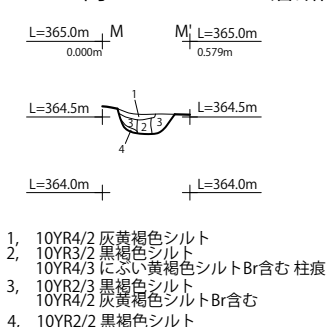
6047SI内6175SP K-K'土層断面図



6047SI内6176SP L-L'土層断面図

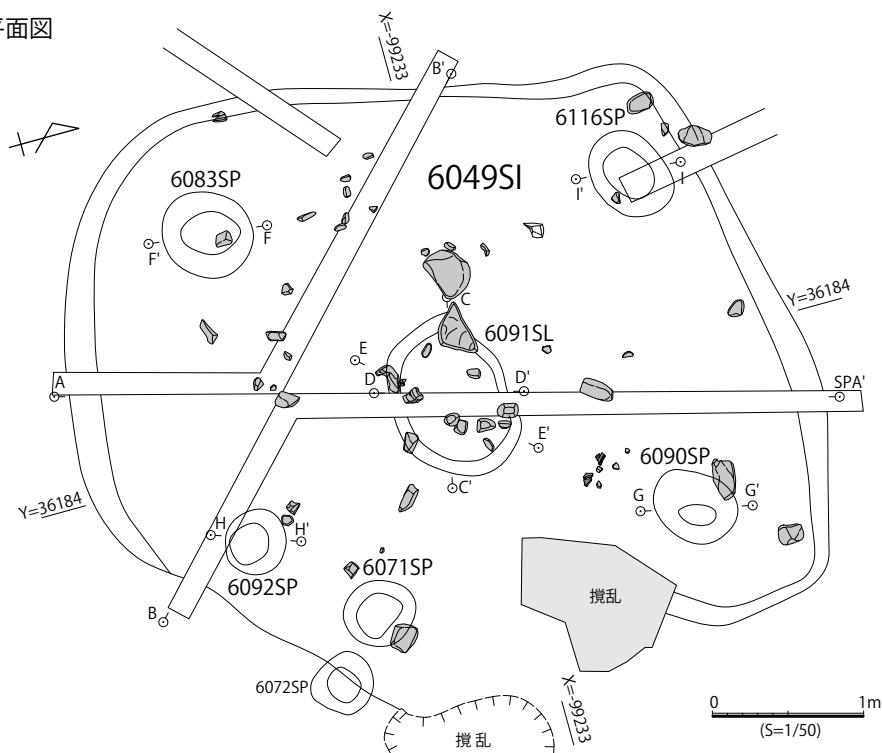


6047SI内6177SP M-M'土層断面図

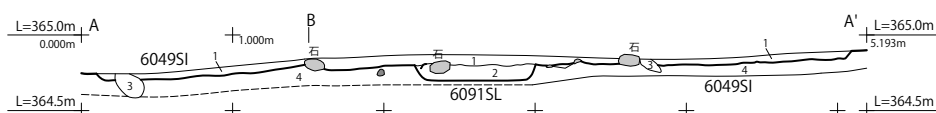


第 25 図 6047SI 遺構図 (S=1/50,1/20)

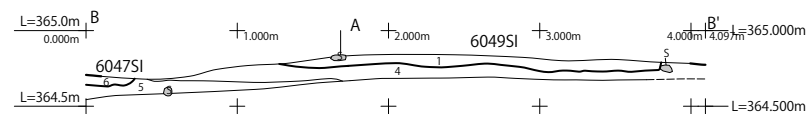
6049SI平面図



6049SI A-A'土層断面図

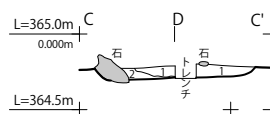


6049SI B-B'土層断面図

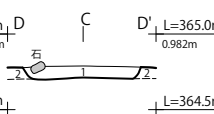


- 1, 10YR3/2黒褐色シルト 粘性ややあり 炭化物微量含む
- 2, 10YR3/4暗褐色シルト 粘性ややあり 10YR3/2黒褐色シルト混じる 炭化物微量含む
- 3, 10YR3/3暗褐色シルト 植生カクラン
- 4, 10YR2/3黒褐色シルト 粘性ややあり
- 5, 10YR2/2黒褐色シルト 粘性あり
- 6, 10YR4/2灰黄褐色シルト 炭化物微量含む 10YR4/3にぶい黄褐色シルト多く混じる(6047SI)

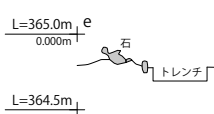
6091SL C-C'土層断面図



6091SL D-D'土層断面図

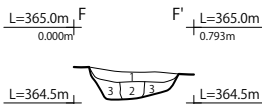


6091SL E-E'土層断面図



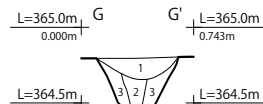
- 1, 10YR3/4暗褐色シルト 10YR3/2黒褐色シルト混じる 炭化物微量含む
- 2, 10YR3/2黒褐色シルト 粘性あり

6083SP F-F'土層断面図



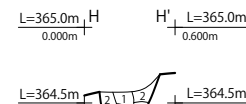
- 1, 10YR3/3暗褐色シルト 炭化物微量含む
- 2, 10YR2/3黒褐色シルト 柱痕
- 3, 10YR2/2黒褐色シルト

6090SP G-G'土層断面図



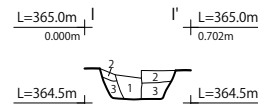
- 1, 10YR3/3暗褐色シルト 炭化物微量含む
- 2, 10YR2/3黒褐色シルト
- 3, 10YR4/3にぶい黄褐色シルトBr含む 柱痕
- 4, 10YR2/2黒褐色シルト
- 5, 10YR3/4暗褐色シルト
- 6, 10YR5/4黄褐色シルト混じる

6092SP H-H'土層断面図



- 1, 10YR2/3黒褐色シルト 柱痕
- 2, 10YR2/2黒褐色シルト
- 3, 10YR2/2黒褐色シルト 2より明るい
- 4, 10YR3/4暗褐色シルト

6116SP I-I'土層断面図

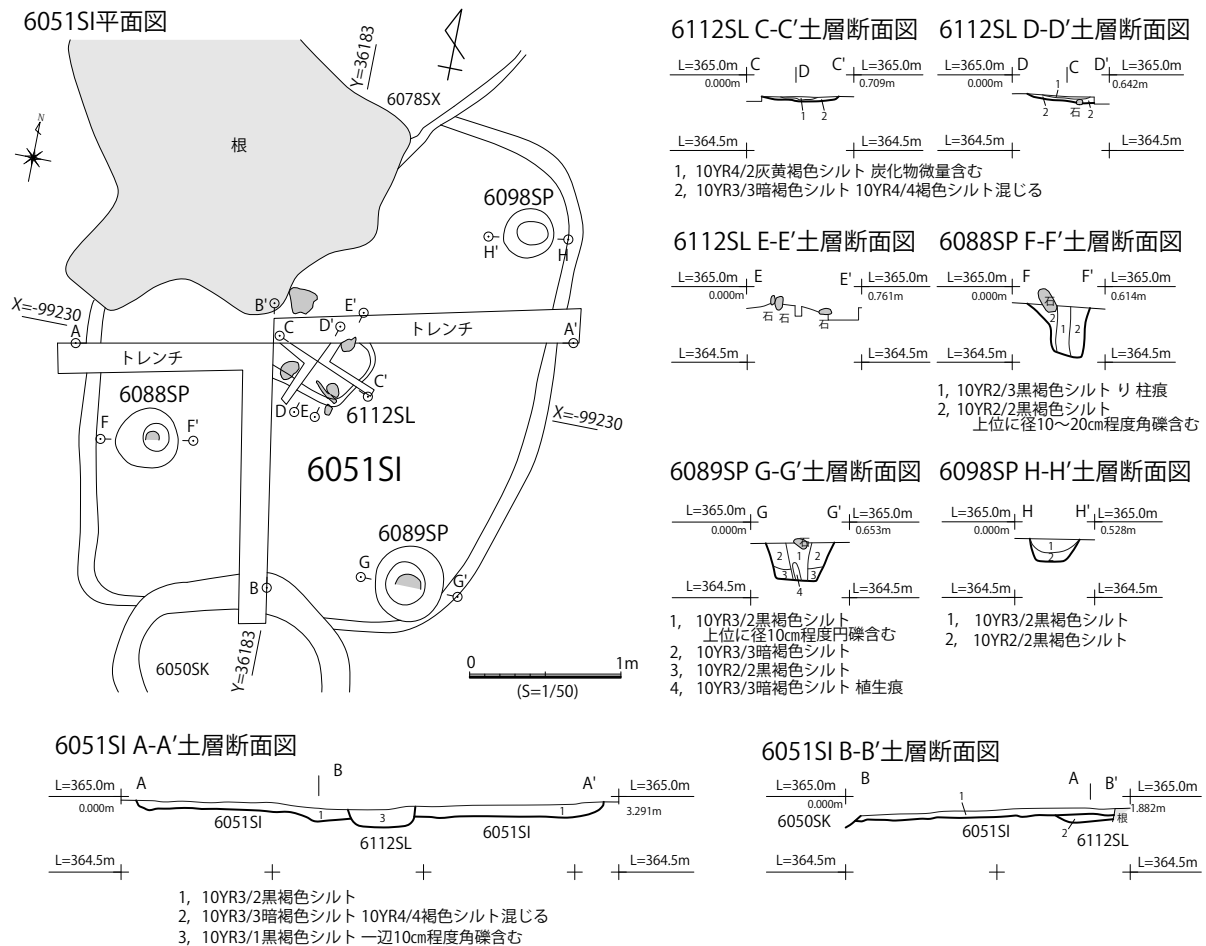


- 1, 10YR2/3黒褐色シルト 10YR2/2黒褐色シルトBr含む 10YR6/6明黄褐色シルトBr含む 柱痕
- 2, 10YR2/3黒褐色シルト 粘性あり
- 3, 10YR2/2黒褐色シルト 粘性あり

第26図 6049SI 遺構図 (S=1/50)

5431SKを除くSPは、長軸が0.41m～0.51m、短軸が0.35m～0.49m、深さが0.11m～0.33mの範囲に分布する規模を持ち、いずれも平面形は円形を呈している。

炉跡5426SLは5425SIのほぼ中央の床面に構築され、長軸0.98m、短軸0.80m、深さ0.23mを測る。板状の石材を6石用いて方形に組み石囲い炉を作っている。北東辺に最も長い石材を用い、



第27図 6051SI 遺構図 (S=1/50)

北西辺には風化した花崗岩が使用されていた。炉床付近では炭化物や焼土を含む黒褐色粘土質シルトが堆積する。

出土遺物から竪穴建物跡 5425SI は縄文時代晩期前半に位置づけられる。

(20) 5440SI (第22図・遺構図版24)

21区南西部の1914と2014グリッドで検出された竪穴建物跡で、南端部が残存していない。長軸3.87m、短軸2.96m以上の歪な隅丸長方形の平面プランで深さは0.15mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトである。

主柱穴は5441SP～5443SPと5445SP～5447SPが該当し5440SIの外周部に所在する。1241SPは長軸が0.25m～0.40m、短軸が0.21m～0.30m、深さが0.15m～0.31mの範囲に分布し、いずれも平面形はおおよそ円形である。

炉跡5444SLは5440SIのほぼ中央にあり、長軸0.82m、短軸0.63m、深さ0.13mを測る。内部に炭化物と焼土ブロックを含む黒褐色シルトが堆積する。

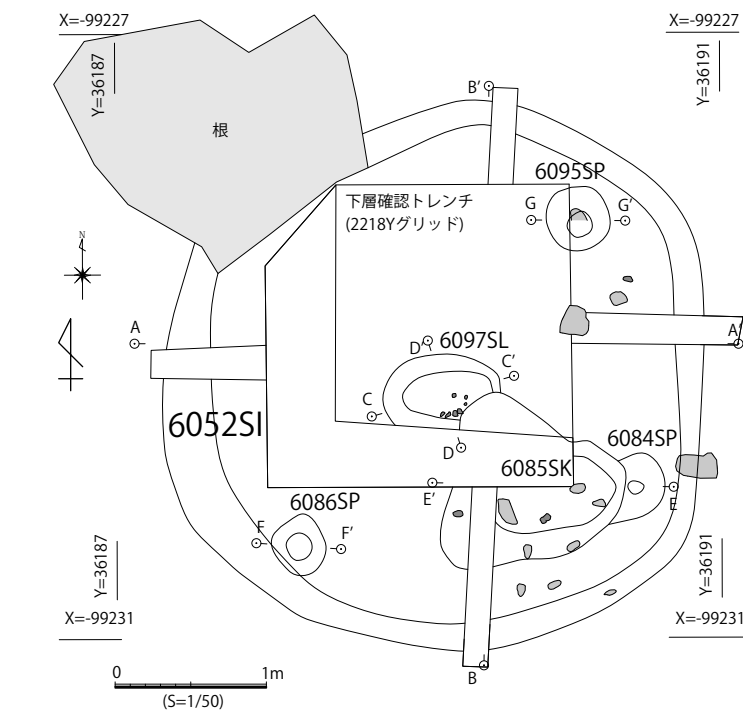
出土遺物から竪穴建物跡5440SIは縄文時代後期末に位置づけられる。

(21) 6004SI (第23図・遺構図版39)

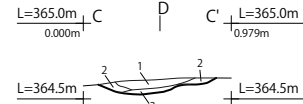
調査区南端に位置する22B区の南端部2317グリッドで検出された竪穴建物跡で、北東部が遺存していない。長軸4.32m、短軸3.19m以上の歪な隅丸長方形の平面プランで深さは0.14mを測る。埋土は暗褐色シルトである。

主柱穴は6087SPと6110SPが該当し東側の柱穴は検出できなかった。6087SPは長軸0.44m、短軸0.33m、床面からの深さ0.28m、6110SPは長軸0.37m、短軸0.35m、深さ0.43mである。炉跡は樹木根による攪乱で不明。

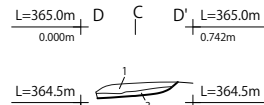
6052SI平面図



6052SI内6097SL C-C'土層断面図

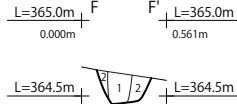


6052SI内6097SL D-D'土層断面図



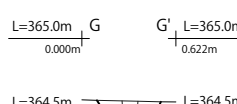
- 1, 10YR3/3 暗褐色シルト 炭化物微量含む 上位に遺物含む
- 2, 10YR3/2 黒褐色シルト
- 3, 10YR3/4 暗褐色シルト 焼土微量含む 炭化物微量含む

6052SI内6086SK F-F'土層断面図



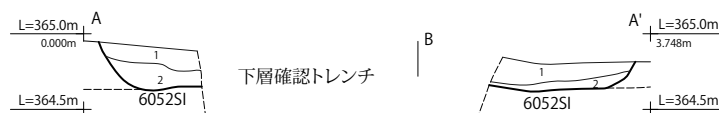
- 1, 10YR3/2 黒褐色シルト
- 2, 10YR2/3 黒褐色シルト 焼土微量含む 粘性あり

6052SI内6095SP G-G'土層断面図

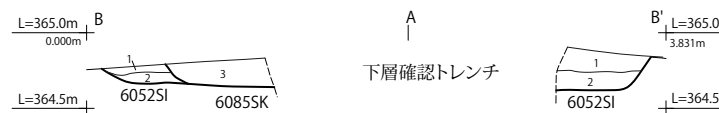


- 1, 10YR3/2 黒褐色シルト 柱痕
- 2, 10YR2/3 黒褐色シルト

6052SI A-A'土層断面図

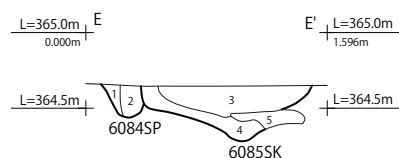


6052SI B-B'土層断面図



- 1, 10YR3/3 暗褐色シルト
- 2, 10YR3/2 黒褐色シルト
- 3, 10YR3/4 暗褐色シルト (6085SK)

6052SI内6084SP・6085SK E-E'土層断面図



- 1, 10YR3/3 暗褐色シルト (6084SP)
- 2, 10YR2/3 黒褐色シルト (6084SP)
- 3, 10YR3/4 暗褐色シルト 焼土微量含む 炭化物微量含む (6085SK)
- 4, 10YR3/2 黒褐色シルト (6085SK)
- 5, 10YR2/3 黒褐色シルト 柱痕

第 28 図 6052SI 遺構図 (S=1/50)

出土遺物から竪穴建物跡 6004SI は縄文時代中期前半に位置づけられる。

(22) 6015SI (第 23 図・遺構図版 39)

22B 区南部の 2316 と 2317 グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸 4.30m、短軸 3.87m のやや歪な隅丸長方形の平面プランで、一部の隅角部が土坑により破壊されているが、深さは 0.10m を測る。埋土は暗褐色シルトで多くの礫を含む。

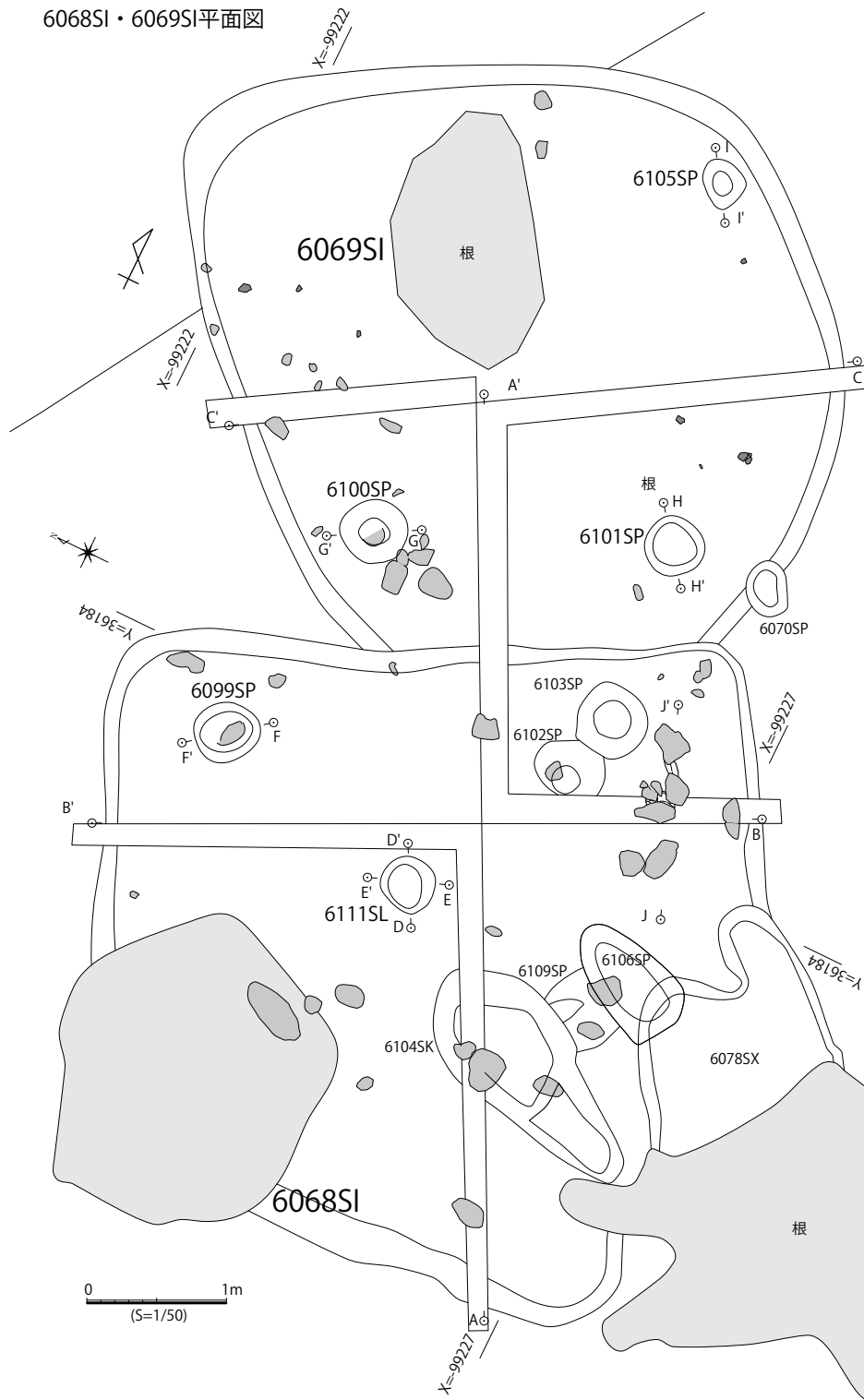
支柱穴は 6075SP、6076SP と 6079SP が該

当し 6015SI の四隅に所在する。6075SP は長軸 0.51m、短軸 0.50m、床面からの深さ 0.27m、6076SP は長軸 0.40m、短軸 0.38m、深さ 0.36m、6079SP は長軸 0.45m、短軸 0.39m、深さ 0.24m で、いずれも平面形は円形を呈する。

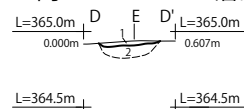
炉跡 6134SL は 6015SI の中央南寄りの床面に構築され、長軸 0.66m、短軸 0.53m 以上、深さ 0.14m を測る。炭化物や被熱痕は認められない。

出土遺物から竪穴建物跡 6015SI は縄文時代中期前半～後半に位置づけられる。

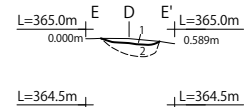
6068SI・6069SI平面図



6068SI内6111SL D-D'土層断面図

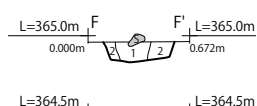


6068SI内6111SL E-E'土層断面図



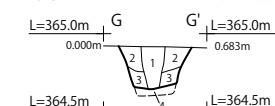
- 1, 10YR3/2 黒褐色シルト 焼土微量含む炭化物僅かに含む
- 2, 10YR2/3 黒褐色シルト 基盤層

6068SI内6099SP F-F'土層断面図



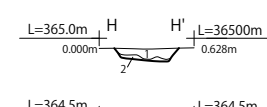
- 1, 10YR3/2 黒褐色シルト 上位に1辺2cm程度の角礫含む柱痕
- 2, 10YR3/3 暗褐色シルト 1より暗い
- 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じる

6069SI内6100SP G-G'土層断面図



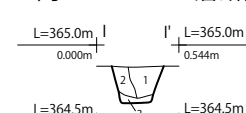
- 1, 10YR3/2 黒褐色シルト 柱痕
- 2, 10YR2/3 黒褐色シルト
- 3, 10YR3/2 暗褐色シルト 1より暗い
- 4, 10YR2/2 黒褐色シルト 基盤層

6069SI内6101SP H-H'土層断面図



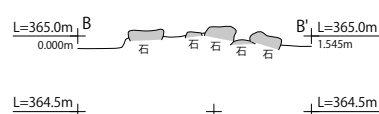
- 1, 10YR3/2 黒褐色シルト
- 2, 10YR2/2 黒褐色シルト

6069SI内6105SP I-I'土層断面図



- 1, 10YR3/3 暗褐色シルト
- 2, 10YR2/3 黒褐色シルト
- 3, 10YR2/2 黒褐色シルト

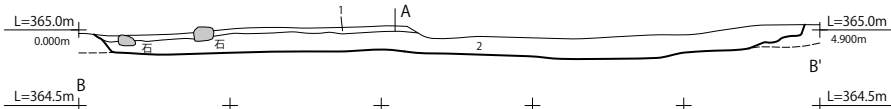
6068SI J-J'礫出土立面図



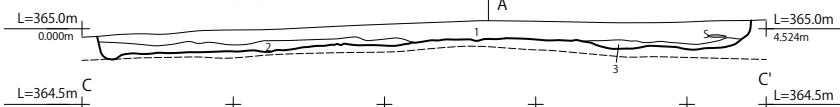
6068SI・6069SI A-A'土層断面図



6068SI B-B'土層断面図



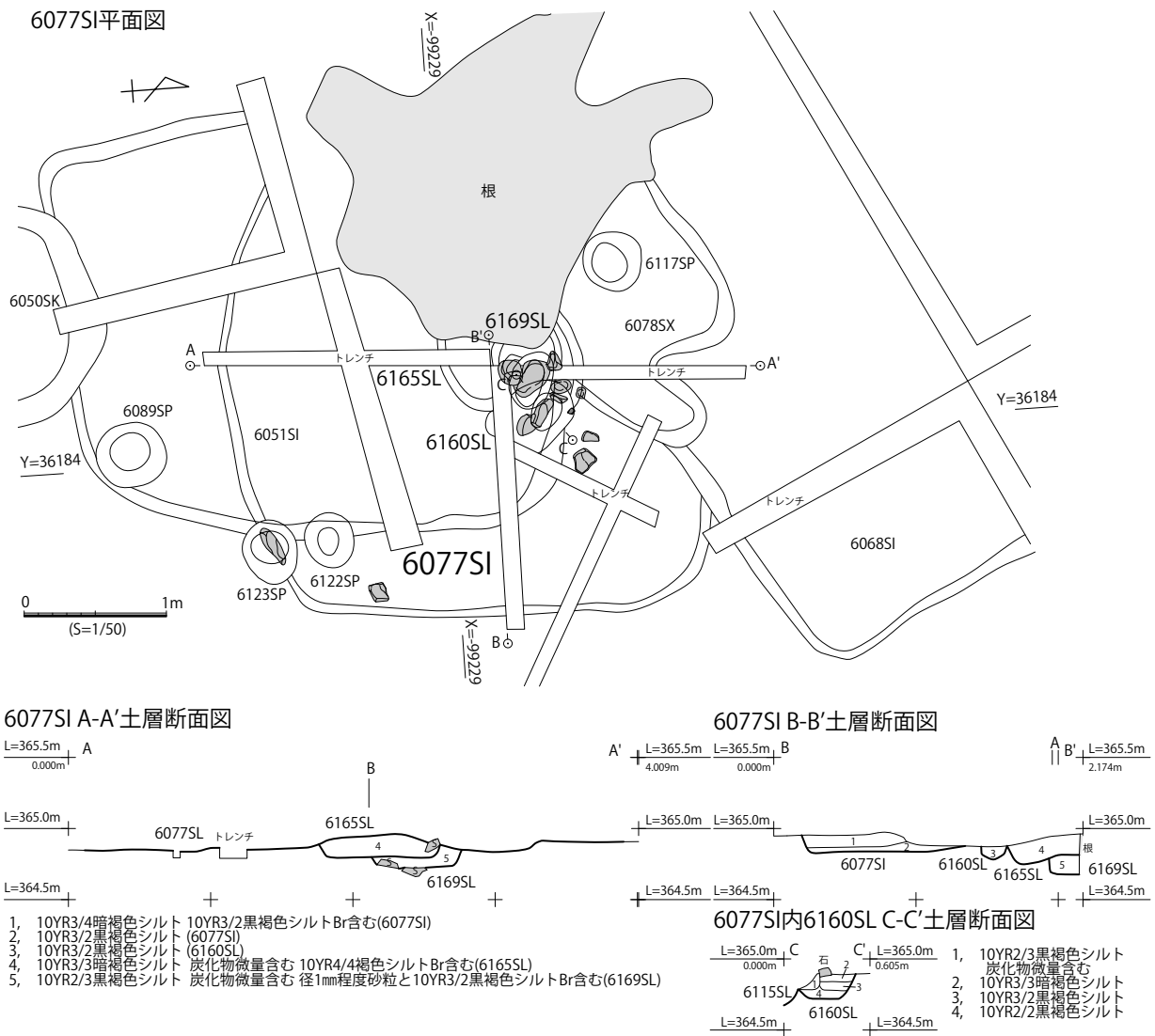
6069SI C-C'土層断面図



- 1, 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性ややあり
- 2, 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり(6068SI)
- 3, 10YR3/3 暗褐色シルト
- 4, 10YR3/2 暗褐色シルト 粘性ややあり(6069SI)
- 5, 10YR2/2 黒褐色シルト
- 6, 10YR3/3 暗褐色シルト

- 1, 10YR3/3 暗褐色シルト
- 2, 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性ややあり
- 3, 10YR2/2 黒褐色シルト

第 29 図 6068SI・6069SI 遺構図 (S=1/50)



第 30 図 6077SI 遺構図 (S=1/50)

(23) 6045SI (第 24 図・遺構図版 40)

22B 区南部の 2318 と 2418 グリッドで検出された竪穴建物跡で、南東部が調査区外に広がる。長軸 2.93m、短軸 2.08m 以上の歪な隅丸方形の平面プランと思われ、深さは 0.1m を測る。埋土は炭化物を微量に含むにぶい黄褐色から暗褐色シルトである。

主柱穴は 6081SP と 6082SP が該当し南東側の柱穴は不目である。6081SP は長軸 0.31m、短軸 0.29m、床面からの深さ 0.28m、6082SP は長軸 0.40m、短軸 0.36m、深さ 0.20m で、平面形は円形を呈する。

炉跡 6080SL は 6045SI の南西寄りの床面に構築され、長軸 0.60m、短軸 0.55m、深さ 0.09m を測る。炉床付近では微量の焼土と炭化物を含む

灰黄褐色シルトが堆積する。

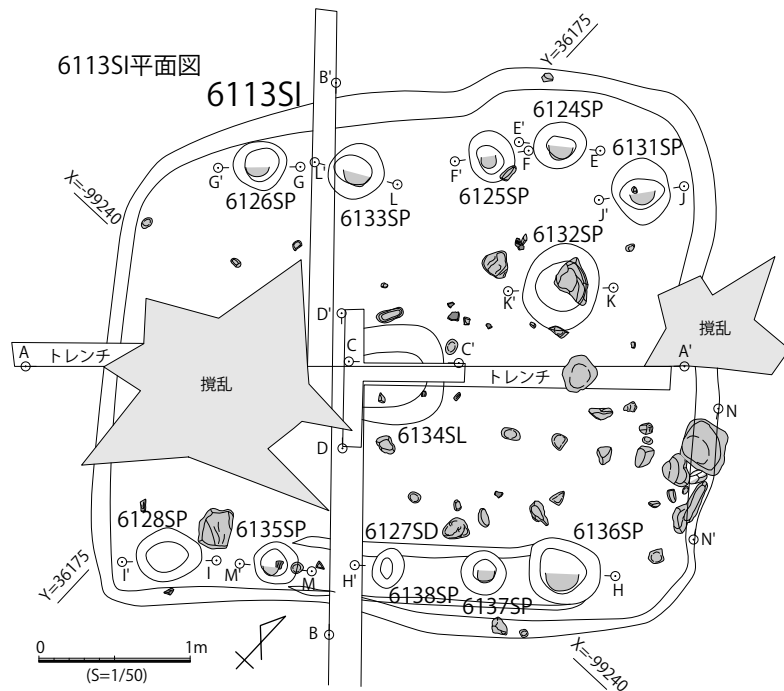
出土遺物から竪穴建物跡 6045SI は縄文時代中期に位置づけられる。

(24) 6048SX (第 24 図・遺構図版 40)

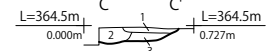
22B 区中央部南東寄りの 2317 と 2318 グリッドで竪穴建物跡として検出された遺構で、東部が 6049SI で切られ遺存していない。長軸 2.24m 以上、短軸 2.63m の隅丸方形の平面プランで深さは 0.12m を測るが、確実な付属施設は検出されず、竪穴建物跡とは認定できない。埋土は暗褐色シルトである。なお、柱穴の候補としては 6139SP と 6140SP がある。

出土遺物から竪穴建物跡 6048SX は縄文時代中期前半に位置づけられる。

(25) 6047SI (第 25 図・遺構図版 53)



6134SL C-C'土層断面図

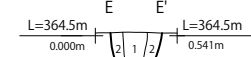


6134SL D-D'土層断面図



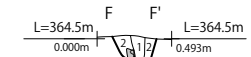
- 1, 10YR3/4 暗褐色シルト 炭化物僅かに含む
10YR5/4 にぶい黄褐色シルトBr微量含む
- 2, 10YR3/3 暗褐色シルト 炭化物微量含む
10YR4/4 褐色シルトBr含む
- 3, 10YR2/3 黒褐色シルト
- 4, 10YR4/2 灰黄褐色シルト

6124SP E-E'土層断面図



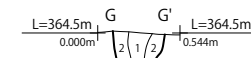
- 1, 10YR3/1 黒褐色シルト 柱痕
- 2, 10YR2/3 黒褐色シルト
10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混じる

6125SP F-F'土層断面図



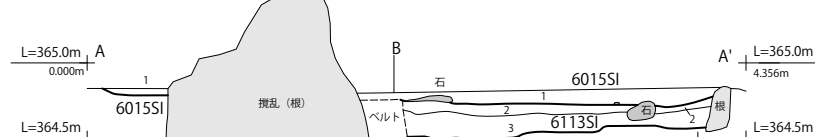
- 1, 10YR3/2 黒褐色シルト 柱痕
- 2, 10YR2/3 黒褐色シルト
一辺5cm程度角礫含む

6126SP G-G'土層断面図

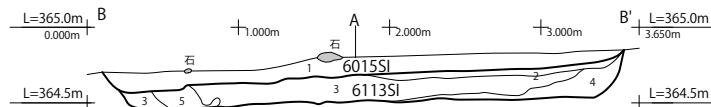


- 1, 10YR3/1 黒褐色シルト 柱痕
- 2, 10YR2/3 黒褐色シルト

6113SI A-A'土層断面図

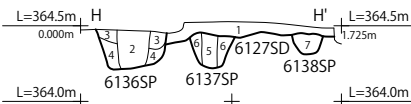


6113SI B-B'土層断面図



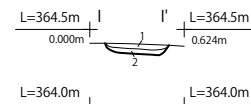
- 1, 10YR3/3 暗褐色シルト 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 斑状に混じる
- 2, 10YR3/3 暗褐色シルト 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 斑状に混じる
- 3, 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR4/4 褐色シルトブロック含む 炭化物微量含む
- 4, 10YR2/3 黒褐色シルト
- 5, 10YR2/3 黒褐色シルト 植生痕

6127SD H-H'土層断面図



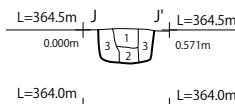
- 1, 10YR3/3 暗褐色シルト 炭化物微量含む(6127SD)
- 2, 10YR3/1 黒褐色シルト 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じる 柱痕(6136SP)
- 3, 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 斑状に混じる 柱痕(6136SP)
- 4, 10YR2/3 黒褐色シルト (6136SP)
- 5, 10YR3/1 黒褐色シルト 柱痕(6137SP)
- 6, 10YR2/3 黒褐色シルト 炭化物微量含む(6137SP)
- 7, 10YR3/1 黒褐色シルト (6138SP)

6128SP I-I'土層断面図



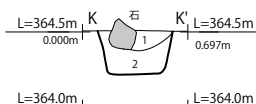
- 1, 10YR3/2 黒褐色シルト
- 2, 10YR2/2 黒褐色シルト

6131SP J-J'土層断面図



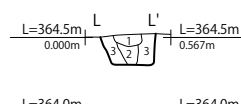
- 1, 10YR3/2 黒褐色シルト 柱痕
- 2, 10YR3/2 黒褐色シルト
10YR5/4 にぶい黄褐色シルトBr含む 柱痕
- 3, 10YR2/3 黒褐色シルト

6132SP K-K'土層断面図



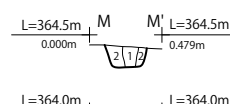
- 1, 10YR3/2 黒褐色シルト
1辺30cm程度角礫含む
- 2, 10YR2/2 黒褐色シルト

6133SP L-L'土層断面図



- 1, 10YR3/2 黒褐色シルト
炭化物僅かに含む 柱痕
- 2, 10YR3/3 暗褐色シルト 柱痕
- 3, 10YR2/3 黒褐色シルト

6135SP M-M'土層断面図



- 1, 10YR3/3 暗褐色シルト 柱痕
- 2, 10YR3/2 黒褐色シルト

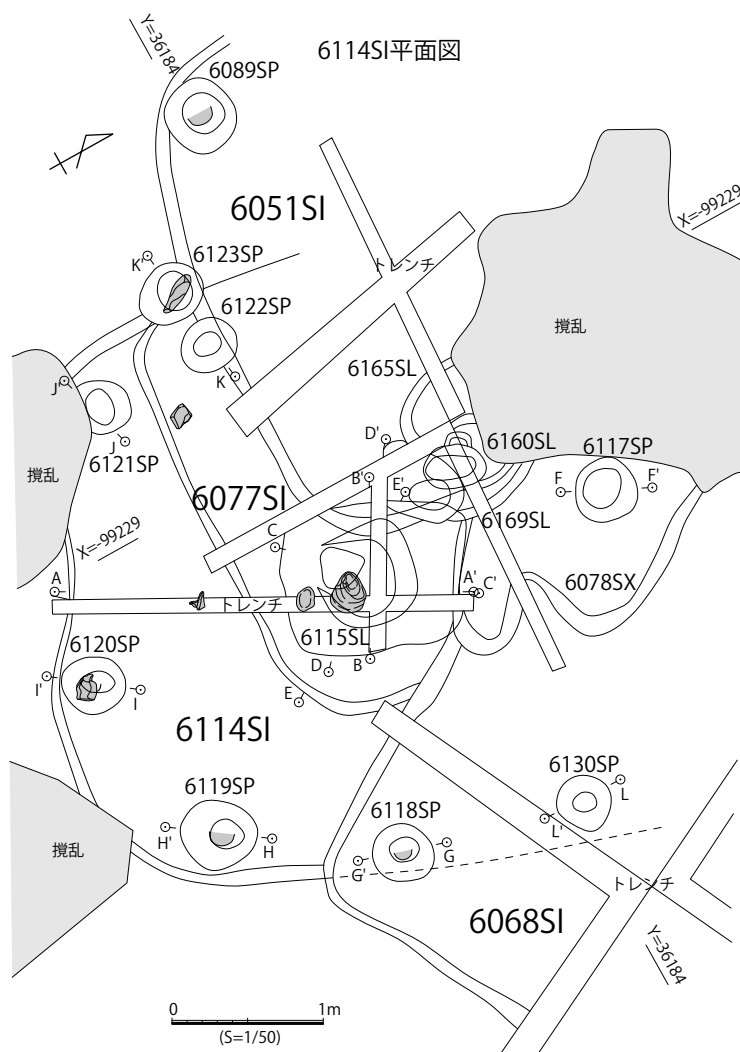
6113SI N-N'石列立面図



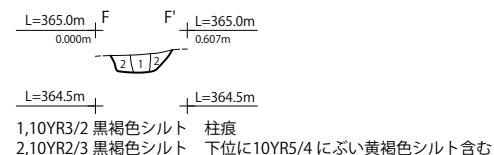
第31図 6113SI遺構図 (S=1/50, 1/20)

22B 区南東部の 2318 グリッドで、調査時点では 2 面遺構（全体の 3 面）として検出された 竪穴建物跡である。長軸 4.08m、短軸 3.64m の

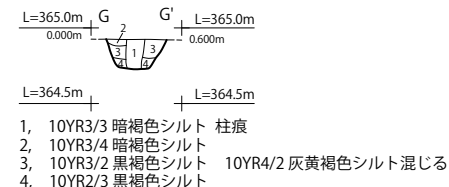
隅丸方形の平面プランで深さは 0.15m を測る。埋土は上位から炭化物を微量に含むにぶい黄褐色シルト、暗褐色シルト、黒褐色シルトの順で堆積



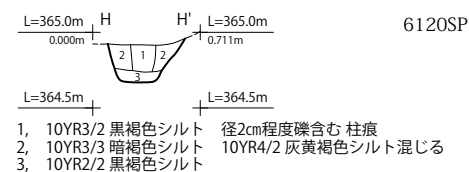
6114SI内6117SP F-F'土層断面図



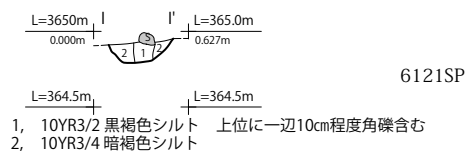
6114SI内6118SP G-G'土層断面図



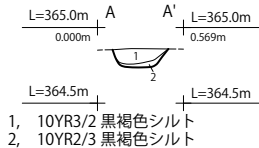
6114SI内6119SP H-H'土層断面図 6119SP



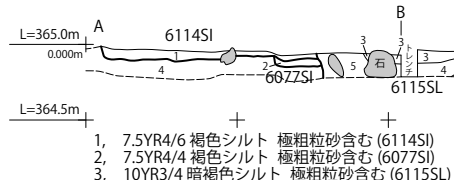
6114SI内6120SP I-I'土層断面図



6114SI内6121SP J-J'土層断面図



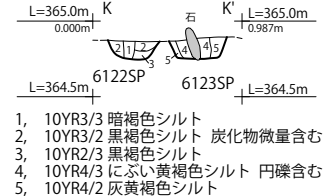
6114SI内6115SL A-A'土層断面図



6114SI内6115SL B-B'土層断面図



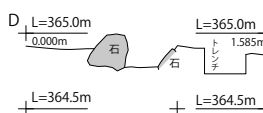
6122SP・6123SP K-K'土層断面図



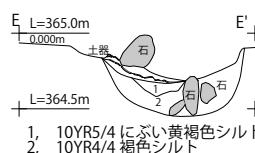
6114SI内6115SL C-C'土層断面図



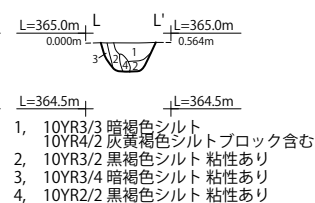
6115SL D-D'土層断面図



6115SL E-E'土層断面図



6114SI内6130SP L-L'土層断面図



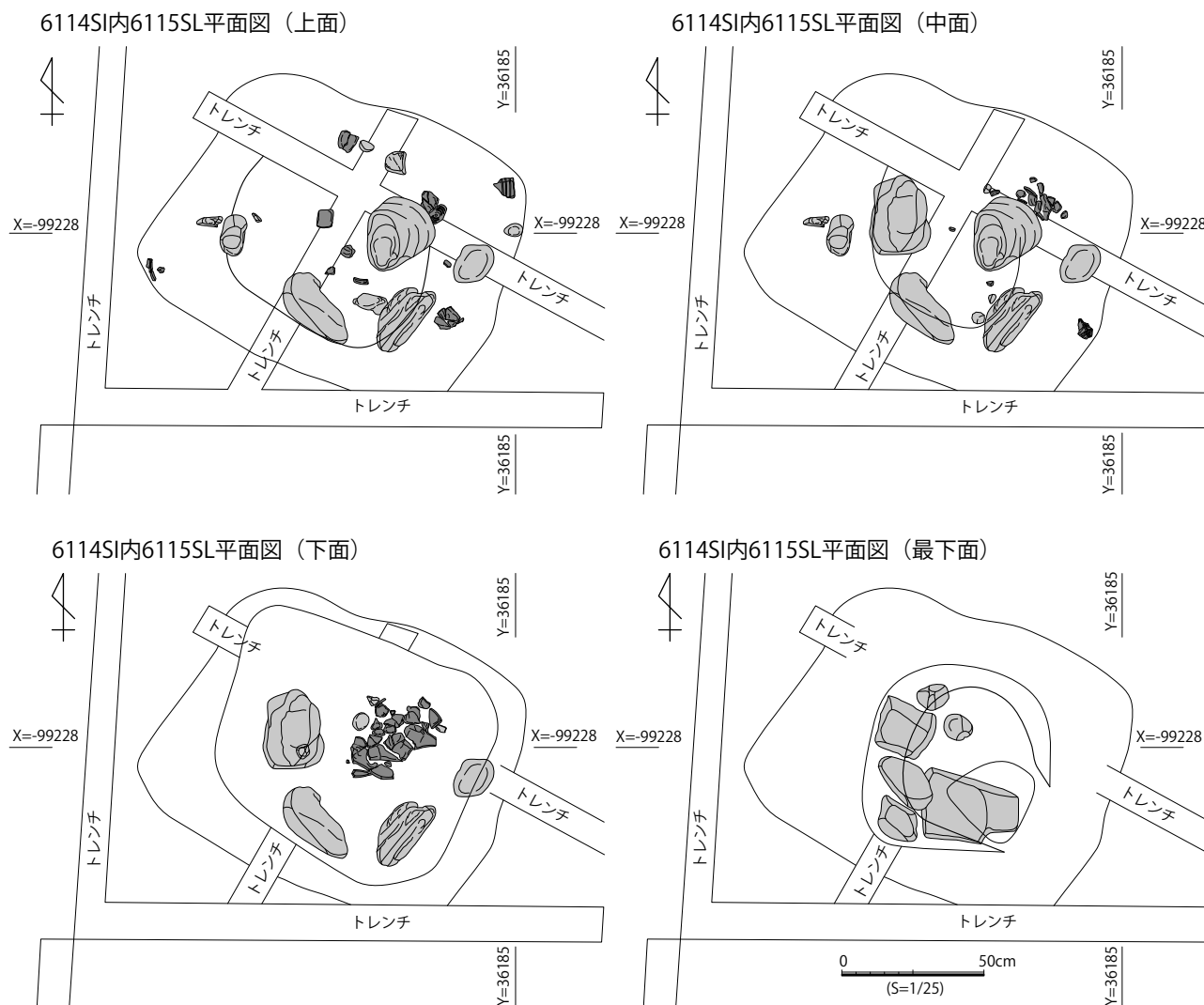
第 32 図 6114SI 遺構図 (1) (S=1/50)

する。

柱穴は 6150SP～6155SP、6093SP、6094SP、6175SP、6177SP が該当し 6047SI の外周部に並んで所在する。柱穴は長軸が 0.30m～0.44m、短軸が 0.29m～0.38m、深さが

0.11m～0.27m の範囲で分布する規模で、いずれも平面形は円形を呈する。一方、炉跡は不明である。

出土遺物から竪穴建物跡 6047SI は縄文時代中期後半に位置づけられる。



第 33 図 6114SI 遺構図 (2) (S=1/50.1/20)

(26) 6049SI (第 26 図・遺構図版 40)

22B 区中央部南東寄りの 2318 グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸 4.99m、短軸 3.34m 以上の隅丸五角形状の平面プランで深さは 0.09m を測る。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色シルトである。

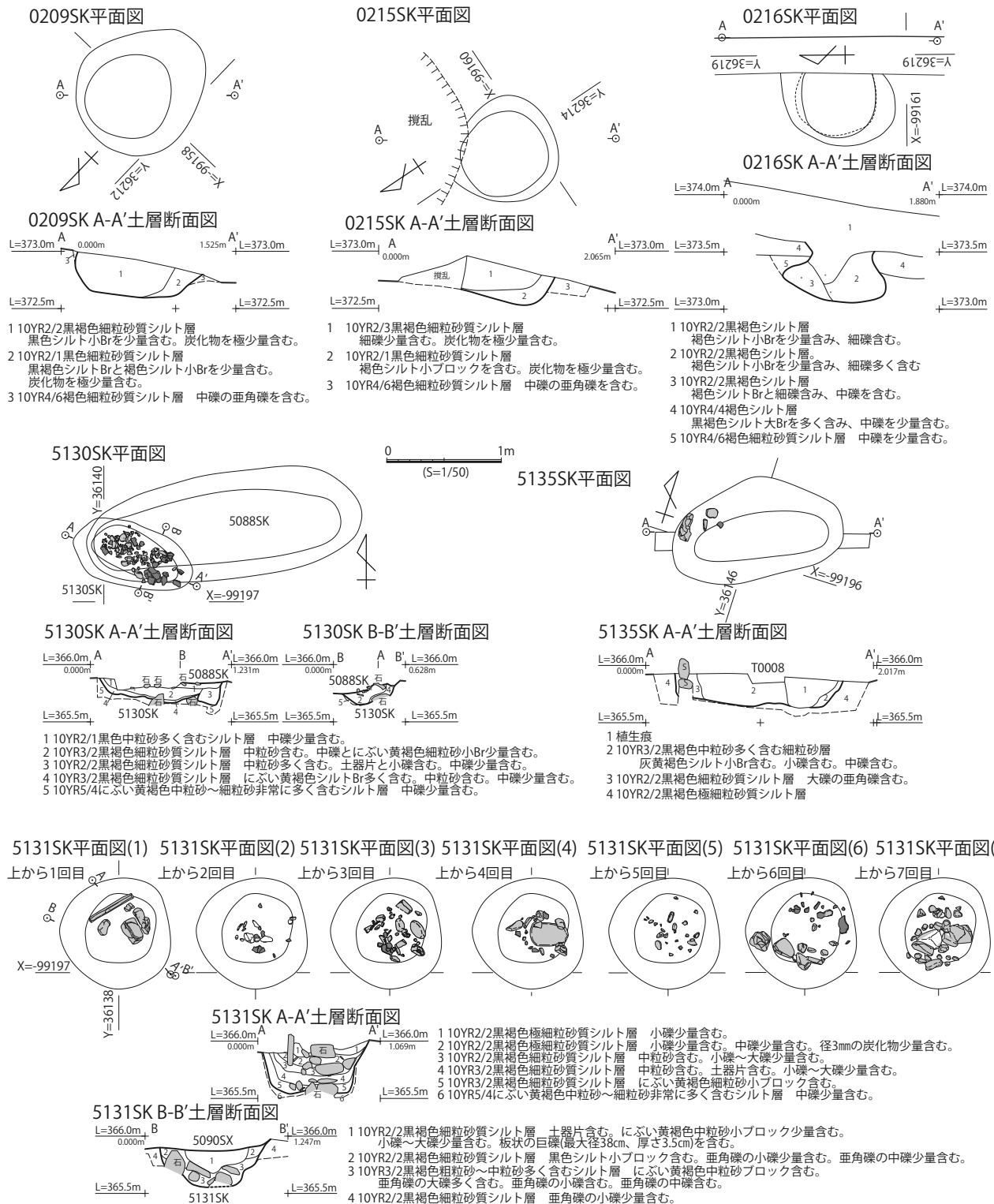
主柱穴は 6083SP、6090SP、6092SP と 6116SP が該当し 6049SI の概ね四隅に所在している。6083SP は長軸 0.61m、短軸 0.55m、床面からの深さ 0.22m、6090SP は長軸 0.57m、短軸 0.45m、深さ 0.38m、6092SP は長軸 0.44m、短軸 0.42m、深さ 0.12m、6116SP は長軸 0.62m、短軸 0.47m、深さ 0.20m で、いずれも平面形は歪な円形である。

炉跡 6091SL は 6049SI のほぼ中央の床面に構築され、長軸 1.06m、短軸 0.78m、深さ 0.09m を測る。炉床付近では炭化物を含む黒褐色シルトが堆積するが、被熱痕は認められない。炉外周部で礫が残存する部分もあるが、床や壁を構築したものとは思われない。

出土遺物から竪穴建物跡 6049SI は縄文時代後期中葉に位置づけられる。

(27) 6051SI (第 27 図・遺構図版 40)

22B 区中央部東寄りの 2218 と 2318 グリッドで検出された竪穴建物跡で北西部が樹木根により遺存していない。長軸 3.26m、短軸 3.12m の歪な隅丸方形の平面プランで深さは 0.09m を測る。埋土は黒褐色シルトである。



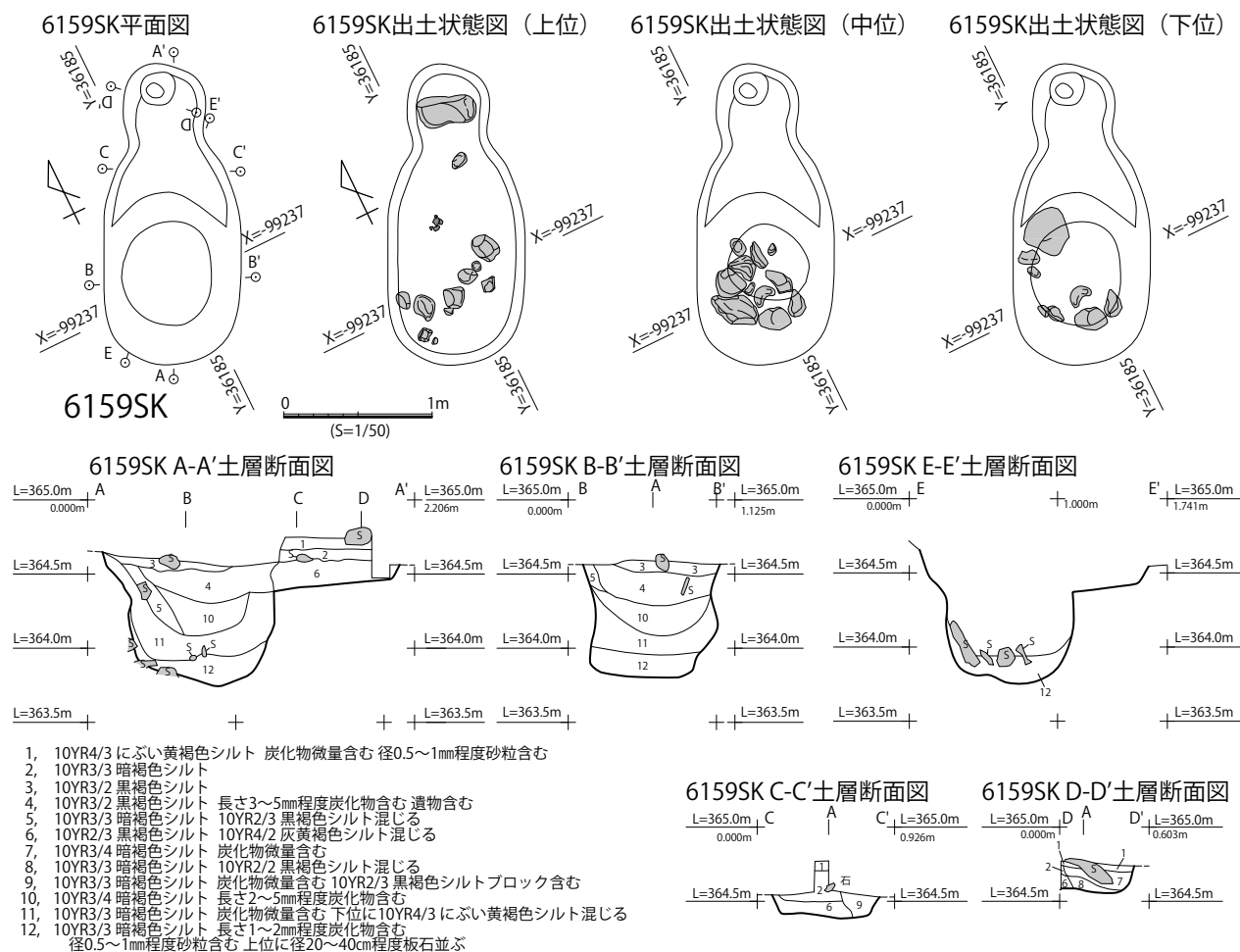
第 34 図 0209SK・0215SK・0216SK・5130SK・5131SK・5135SK 遺構図 (S=1/50)

主柱穴は 6088SP、6089SP と 6098SP が該当すると思われるが、6051SI の四隅に位置するとは言えない。6088SP は長軸 0.41m、短軸 0.39m、床面からの深さ 0.36m、6089SP は長軸 0.49m、短軸 0.45m、深さ 0.28m、6098SP は長軸 0.94m、短軸 0.57m 以上、深さ 0.07m

である。

炉跡 6112SL は 6051SI のほぼ中央の床面に構築され、長軸 0.52m 以上、短軸 0.38m 以上、深さ 0.04m を測る。礫は存在するものの炭化物や焼土を含まず、炉跡か否かは確定できない。

出土遺物から竪穴建物跡 6051SI は縄文時代中



第 35 図 6159SK 遺構図 (S=1/50)

期後半に位置づけられる。

(28) 6052SI (第 28 図・遺構図版 40)

22B 区東端部の 2217 から 2318 グリッドなどで検出された竪穴建物跡である。長軸 3.64m、短軸 3.56m の歪な隅丸六角形状の平面プランで深さは 0.13m を測る。埋土は黒褐色シルトまたは暗褐色シルトである。

支柱穴は 6084SP、6086SP、6095SP が該当すると思われ、6084SP は長軸 0.43m、短軸 0.26m 以上、床面からの深さ 0.28m、6086SP は長軸 0.41m、短軸 0.36m、深さ 0.22m、6095SP は長軸と短軸が 0.42m、深さ 0.27m で、いずれも平面形は円形である。

炉跡 6097SL は 6952SI のほぼ中央の床面に構築され、長軸 0.78m、短軸 0.52m、深さ 0.07m を測る。炉床付近では炭化物と焼土を含む黒褐色シルトが堆積する。

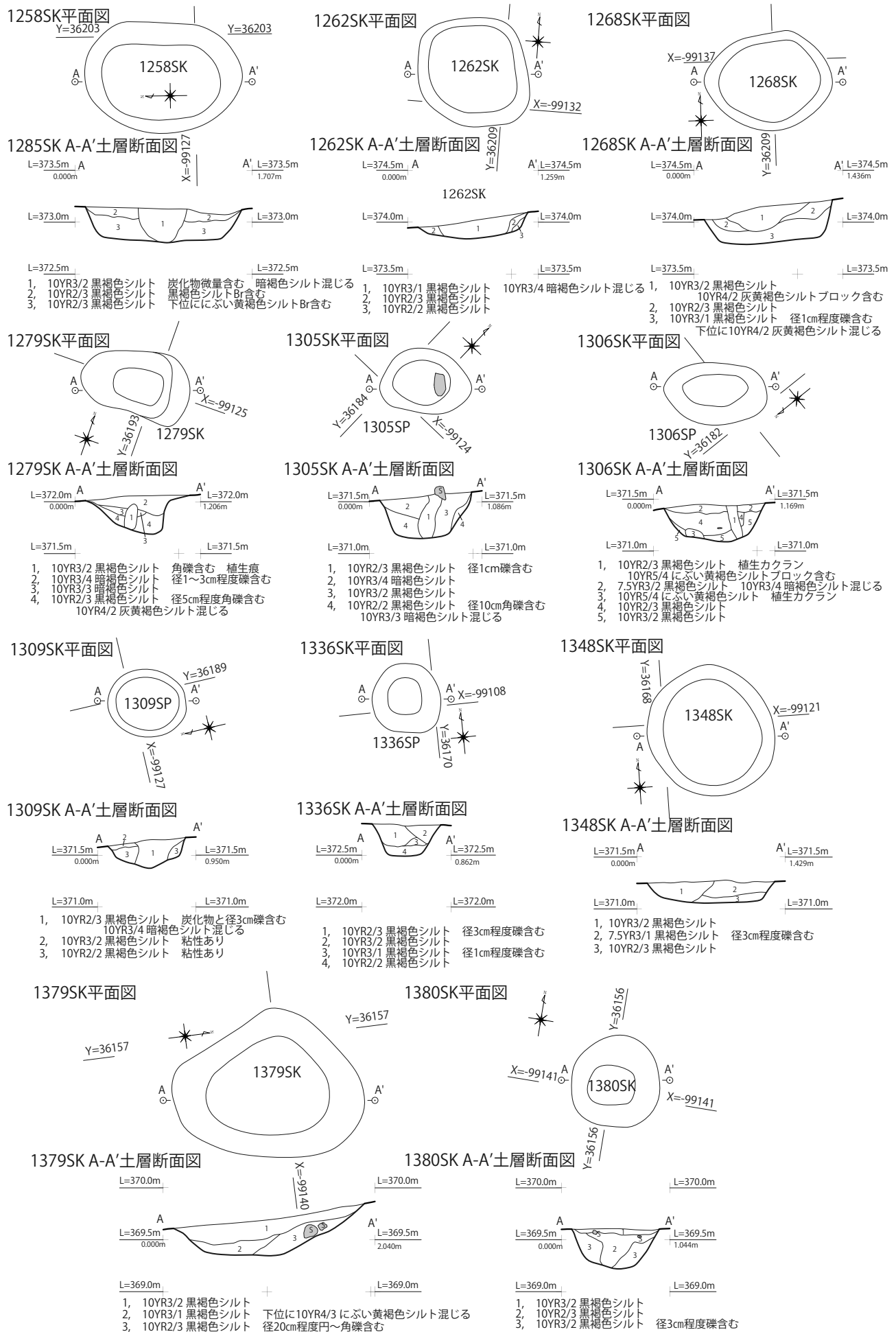
出土遺物から竪穴建物跡 6052SI は縄文時代中期以降に位置づけられる。

(29) 6068SI (第 29 図・遺構図版 40)

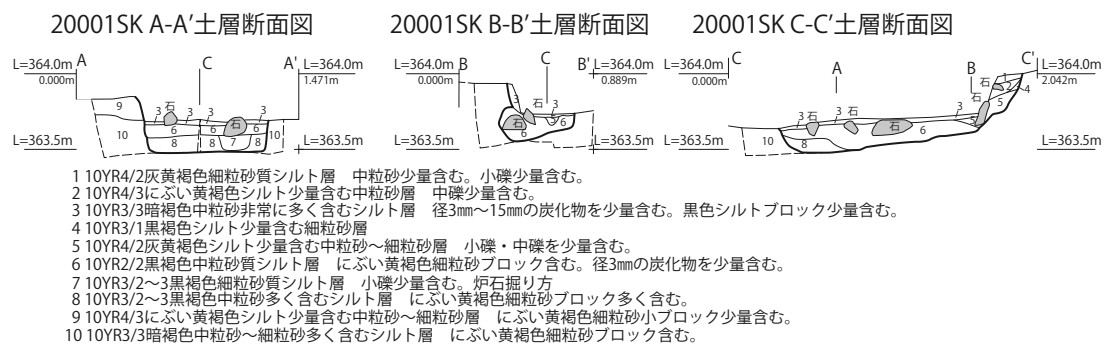
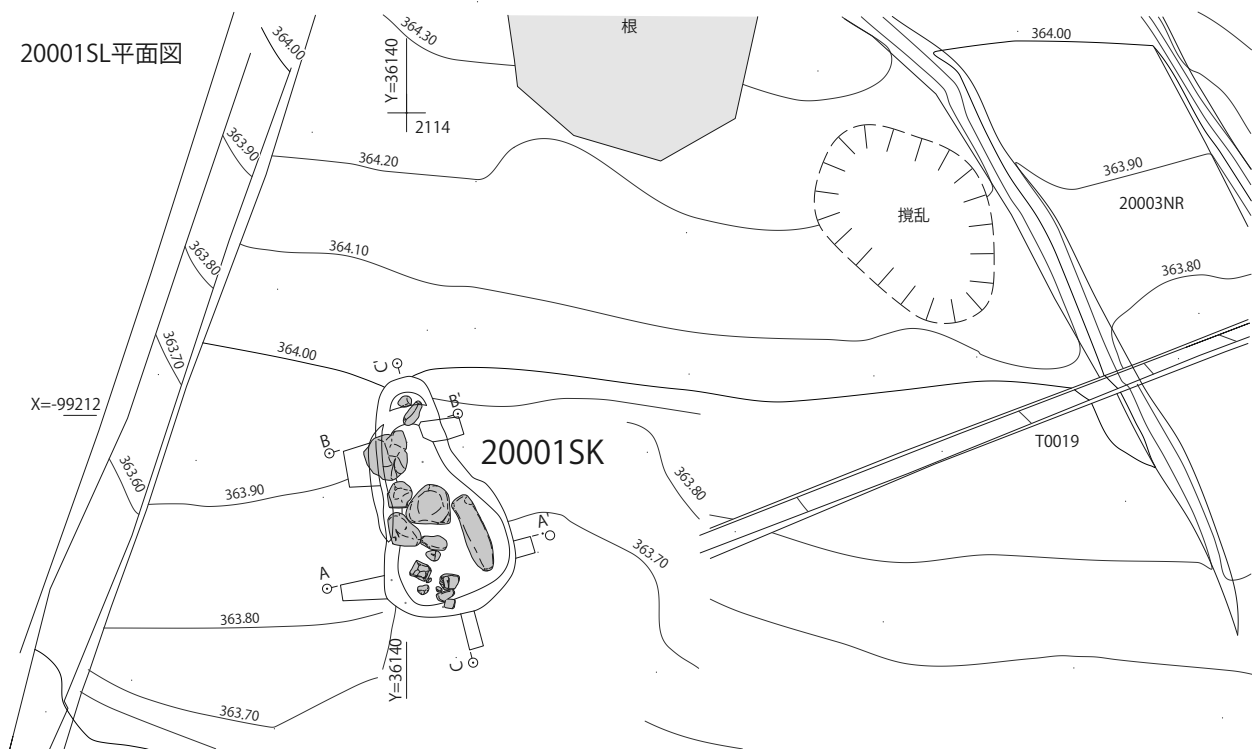
22B 区北東部の 2218 グリッドで検出された竪穴建物跡で南西部の一部が樹木痕により遺存していない。長軸 4.75m、短軸 4.70m の隅丸方形の平面プランと思われるが、西部で形状が乱れている。深さは 0.16m を測り、6069SI を切る。埋土は黒褐色粘土質シルトである。

支柱穴は不明瞭で確実なものは 6099SP のみである。長軸 0.47m、短軸 0.42m、床面からの深さ 0.15m で、平面形は円形を呈する。炉跡 6111SL は 6068SI の中央北寄りの床面に構築され、長軸 0.41m、短軸 0.39m、深さ 0.13m を測り、わずかに炭化物を含むが、被熱痕は認められない。

出土遺物から竪穴建物跡 6068SI は縄文時代中期以降に位置づけられる。



第 36 図 縄文時代の土坑遺構図 (S=1/50)



第 37 図 20001SK 遺構図 (S=1/50)

(30) 6069SI (第 29 図・遺構図版 40)

22B 区北東端部の 2218 グリッドで検出された竪穴建物跡で南西部が 6068SI に切られ遺存していない。長軸 4.32m、短軸 4.17m 以上の歪な隅丸方形の平面プランで深さは 0.08m を測る。埋土は上位が暗褐色シルト、下位が黒褐色シルトである。

主柱穴は 6100SP、6101SP および 6105SP が該当し概ね 6069SI の四隅の位置にある。6100SP は長軸 0.49m、短軸 0.46m、床面からの深さ 0.39m、6101SP は長軸 0.43m、短軸 0.42m、深さ 0.09m、6105SP は長軸 0.34m、短軸 0.27m、深さ 0.25m で、いずれも平面形は

円形を呈する。炉跡は確認できなかった。

出土遺物から竪穴建物跡 6069SI は縄文時代中期以降に位置づけられる。

(31) 6077SI (第 30 図・遺構図版 40)

22B 区中央部東寄りの 2218 と 2318 グリッドで検出された竪穴建物跡で 6051SI と 6068SI に切られ西部の遺存状況は不良である。長軸 2.90m 以上、短軸 0.64m 以上の歪な隅丸方形の平面プランと思われ、深さは 0.06m を測る。埋土は上位が暗褐色シルト、下位が黒褐色シルトである。

主柱穴は不明瞭で特定し難い。炉跡は 6160SL と 6165SL と 6169SL が重なって検出され、一

部は礫を伴い、炉床付近では炭化物を含む黒褐色シルトが堆積する。

出土遺物から竪穴建物跡 6077SI は縄文時代中期以降に位置づけられる。

(32) 6113SI (第 31 図・遺構図版 39)

22B 区南部の 2317 と 2417 グリッドで検出された竪穴建物跡である。長軸 4.47m、短軸 3.45m の歪な隅丸長方形の平面プランで深さは 0.15m を測る。埋土は上位が暗褐色シルト、下位が炭化物を微量に含む黒褐色シルトである。

柱穴は 6124SP ～ 6138SP が該当し 6113SI の外周囲に分布する。長軸は 0.34m ～ 0.57m、短軸は 0.29m ～ 0.48m、深さは 0.06m ～ 0.48m に分布し、概ね平面形は円形となる。

炉跡 6134SL は 6113SI の中央南西寄りの床面に構築され、長軸 0.66m、短軸 0.53m、深さ 0.14m を測る。炉床付近では炭化物を含む黒褐色シルトが堆積するが、被熱痕は認められない。

出土遺物から竪穴建物跡 6113SI は縄文時代中期前半～後半に位置づけられる。

(33) 6114SI (第 32 図～第 33 図・遺構図版 40)

22B 区中央部東寄りの 2218 と 2318 グリッドで検出された竪穴建物跡で、6051SI と 6068SI と 6077SI に切られて大部分が遺存していない。長軸 3.70m、短軸 1.15m 以上の隅丸方形の平面プランと思われ、深さは 0.04m を測る。埋土は褐色シルトである。

柱穴は 6118SP ～ 6122SP と 6130SP があり、6114SI の外周位に所在する。長軸は 0.36m ～ 0.51m、短軸は 0.29m ～ 0.46m、深さは 0.12m ～ 0.31m に分布する平面形は円形となる。

6114SI の中央の位置と思われる場所に炉跡 6115SL があり、長軸 1.20m、短軸 1.00m の長

方形で、深さ 0.49m を測る。壁面や炉床付近に礫が据えられた部分が残存しており、本来は石囲い炉であった可能性がある。

出土遺物から竪穴建物跡 6114SI は縄文時代後期中葉に位置づけられる。

2 土坑

(1) 0209SK (第 34 図・遺構図版 16)

21 区 1521 グリッドで検出された土坑である。長軸 1.21m、短軸 1.06m の歪な円形を呈し、深さは 0.41m を測る。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色シルトである。時期は縄文時代早期と推定される。

(2) 0215SK (第 34 図・遺構図版 16)

21 区 1521 と 1621 グリッドで検出された土坑で 0209SK の南西部に所在する。長軸 0.97m、短軸 0.90m のほぼ円形を呈しており、深さは 0.41m を測る。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色シルトである。時期は縄文時代早期と推定される。

(3) 0216SK (第 34 図・遺構図版 16)

21 区 1521 と 1621 グリッドで検出された袋状土坑で、半分は調査区外に広がる。長軸 0.97m、短軸 0.63m 以上のほぼ円形を呈し、深さは 0.52m を測る。埋土は褐色シルトで下半は袋状に挟れている。時期は縄文時代早期と推定される。

(4) 5130SK (第 34 図・遺構図版 18)

21 区 1913 と 1914 グリッドで検出された土坑である。長軸 1.08m、短軸 0.56m の楕円形を呈し、深さは 0.28m を測る。埋土は礫を多量に含む黒褐色シルトで、時期は縄文時代後期後葉と推定される。

(5) 5131SK (第 34 図・遺構図版 18)

21区1913グリッドで検出された土坑である。長軸0.99m、短軸0.98mの円形で深さは0.5mを測る。埋土は炭化物を含む黒褐色砂質シルトで、礫を厚く多量に含む。時期は縄文時代晩期前半と推定される。

(6) 5135SK (第34図・遺構図版18)

21区1914グリッドで検出された土坑である。長軸1.50m、短軸0.87mの歪な楕円形を呈し、深さは0.32mを測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は縄文時代後期後葉と推定される。

(7) 6159SK (第35図・遺構図版40)

22B区2318グリッドで検出された土坑である。長軸2.01m、短軸0.92mの瓢箪形を呈しており、南西半部が平面円形状に深くなっている。円形土坑部の深さは0.75mで横断面は箱堀状となるが、北東部は深さが約10cmと浅い。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトなどで、南半部の土坑には礫が多量に含まれていた。時期は縄文時代後期中葉と推定される。

(8) 1258SK (第36図・遺構図版49)

22A区1220グリッドで検出された土坑である。長軸1.52m、短軸1.07mの楕円形を呈し、深さは0.35mを測る。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(9) 1262SK (第36図・遺構図版50)

22A区1320グリッドで検出された土坑である。長軸1.05m、短軸1.05mの隅丸方形を呈し、深さは0.18mを測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(10) 1268SK (第36図・遺構図版50)

22A区1320グリッドで検出された土坑である。長軸1.24m、短軸0.95mの楕円形を呈し、深さは0.37mを測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(11) 1279SK (第36図・遺構図版49)

22A区1219グリッドで検出された土坑である。長軸1.06m、短軸0.58mの楕円形を呈し、深さは0.37mを測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(12) 1305SK (第36図・遺構図版48)

22A区1218グリッドで検出された土坑である。長軸0.89m、短軸0.62mの楕円形を呈し、深さは0.43mを測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(13) 1306SK (第36図・遺構図版48)

22A区1218グリッドで検出された土坑である。長軸0.98m、短軸0.60mの楕円形を呈し、深さは0.37mを測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(14) 1309SK (第36図・遺構図版49)

22A区1218グリッドで検出された土坑である。長軸0.76m、短軸0.64mのほぼ円形を呈し、深さは0.30mを測る。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトで、時期は縄文時代早期後半と推定される。

(15) 1336SK (第36図・遺構図版42)

22A区1016グリッドで検出された土坑である。長軸0.66m、短軸0.66mの円形を呈し、深さは0.31mを測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(16) 1348SK (第36図・遺構図版42)

22A区1216グリッドで検出された土坑である。長軸1.27m、短軸1.23mの円形を呈し、深さは0.21mを測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(17) 1379SK (第36図・遺構図版47)

22A区1315と1415グリッドで検出された土坑である。長軸1.86m、短軸1.44mの歪な円形を呈し、深さは0.35mを測る。埋土は黒褐色

シルトで、時期は縄文時代中期後半と推定される。

(18) 1380SK (第 36 図・遺構図版 47)

22A 区 1415 グリッドで検出された土坑である。長軸 0.88m、短軸 0.85m の円形を呈し、深さは 0.39m を測る。埋土は黒褐色シルトで、時期は不詳である。

(19) 20001SK (第 37 図・遺構図版 38)

第 3 節 古代から江戸時代の遺構

古代から江戸時代の遺構としては調査区全域で水田関連遺構と柱穴列 3 条、集石遺構 2 基などがある。

1 水田関連遺構 (第 38 図～第 40 図・遺構図版 1～33)

水田関連遺構が検出されたのは、調査区西半分から南側、さらには南東部分にかけてである。水田関連遺構は、Ⅱ層（灰黄褐色から黒色粘土等）内で展開しており、Ⅲ層（にぶい黄褐色から黒色粘土等）直上では概ね擬似畦畔を検出することとなった。水田関連遺構は、畦畔（土手状）および溝と、畦畔による区画内に形成された作土で構成されている。畦畔に囲われた区画は、一辺 4m ほどを主体とする小区画の概略方形状を呈している。遺構が展開する区域は緩やかに傾斜していることから、水田を造成するには、等高線に沿う形で小さい区画を小刻みな段差を持って構築することが、最も効率的であったと推測される。導水路と考えられる溝（1006SD と 0145SD）は調査区西部北端から始まり、流路の両肩自体も畦畔として利用されていたとみられる。0145SD 内には、水流を調整する施設であった可能性がある 0144SK など確認された。

水田関連遺構は部分的な補修・改変が継続して行われており、畦畔部分の土層断面をみると、複

21 区 2113 と 2114 グリッド 2 面で当初は煙道付炉穴の可能性を考慮して検出された土坑である。長軸 2.21m、短軸 0.89m の楕円形を呈し、深さは 0.52m を測る。埋土は炭化物を含む暗褐色から黒褐色砂質シルトで、礫を多量に含む。時期は縄文時代中期後葉以前と推定される。

数回にわたる造成が確認できる（第 40 図）。畦畔の堆積層から、山茶碗などの遺物が出土し、関連する土坑 5140SK から南伊勢系土師器鍋が確認されており、水田関連遺構の時期は鎌倉時代を前後とする時期の可能性が高い。また、東半部では、これらの水田と重複する近世の水田跡（5282SX など）が存在しているほか、灰釉陶器が多く出土していることから、水田は長期間にわたって機能していた可能性も考えられる。

(1) 0145SD・1006SD (第 39 図・遺構図版 37)

0145SD は 21 区で検出された溝で北から南へ流下する。検出された長さは 40.3m におよび、幅は 1.5m、深さは 0.35m を測る。一方、北側の 1065SD は 21 区で検出された溝で北から南へ流下する。検出された長さは 43.4m におよび、幅は 1.5m、深さは 0.35m を測る。平面形は地形に沿って緩やかに湾曲して蛇行し途中で溝は不明瞭となっている。

(2) 0144SK (第 39 図・遺構図版 12)

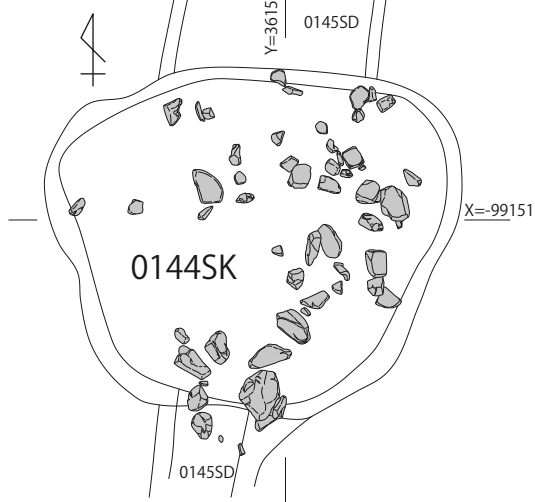
21 区 1515 グリッドで検出された土坑である。長軸 2.79m、短軸 2.51m の歪な形状で、深さは 0.19m を測る。0145SD の途中で設置され多量の礫を伴っていることから水量を調節する施設であった可能性が考えられる。

0 10m
(S=1/500)

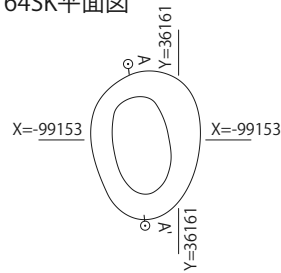


第 38 図 水田関連遺構図 (1) (S=1/500)

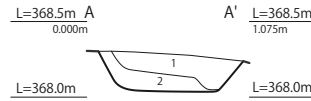
0144SK平面図



0164SK平面図

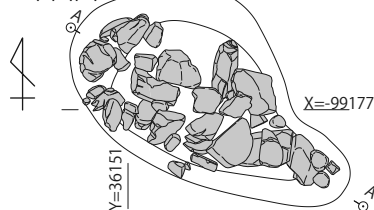


0164SK A-A'土層断面図

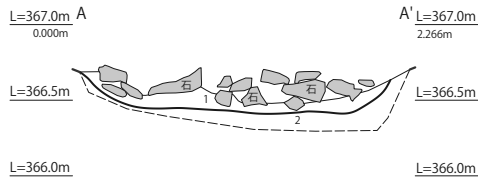


- 1 10YR3/1黒褐色粘土質シルトと10YR3/2黒褐色粘土質シルトの混層。小礫含む。中礫の角礫少量含む。
2 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。

0146SS平面図

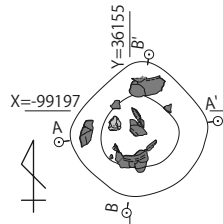


0146SS A-A'土層断面図

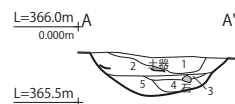


- 1 10YR4/1 褐灰色砂質シルト層 大礫～巨礫の角礫多く含む。径1～5mm炭化物少量含む。
2 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト層 植物質含む。小礫少量含む。径1mm炭化物含む。中礫の角礫含む。T0015_26層相当

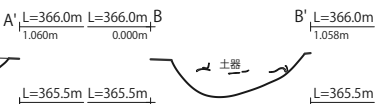
5140SK平面図



5140SK A-A'土層断面図

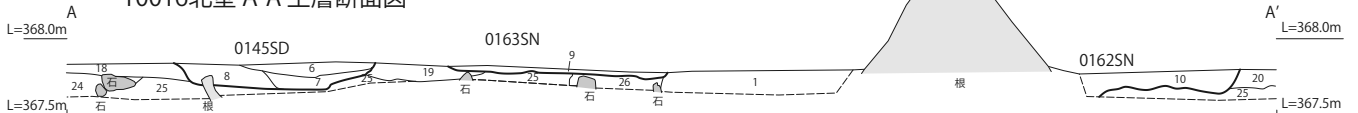


5140SK B-B'断面図

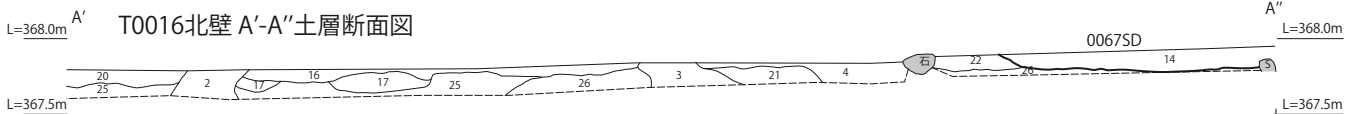


- 1 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト層 径1mm炭化物・焼土少量含む。植物質含む。中礫の亜角礫含む。
2 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト層 植物質多く含む。中礫の亜角礫含む。
3 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。
4 7.5YR4/1 褐灰色粘土質シルト層 植物質少量含む。径1mm10YR5/6黄褐色砂質シルトブロック少量含む。
5 7.5YR4/1 褐灰色粘土質シルト層

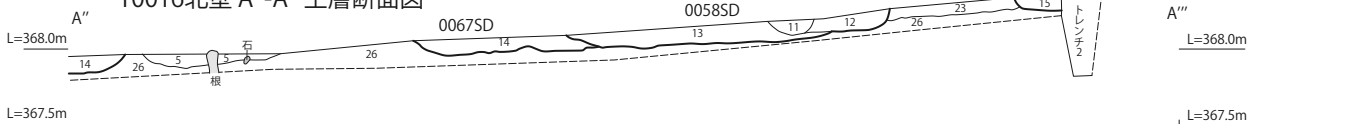
T0016北壁 A-A'土層断面図



T0016北壁 A'-A''土層断面図

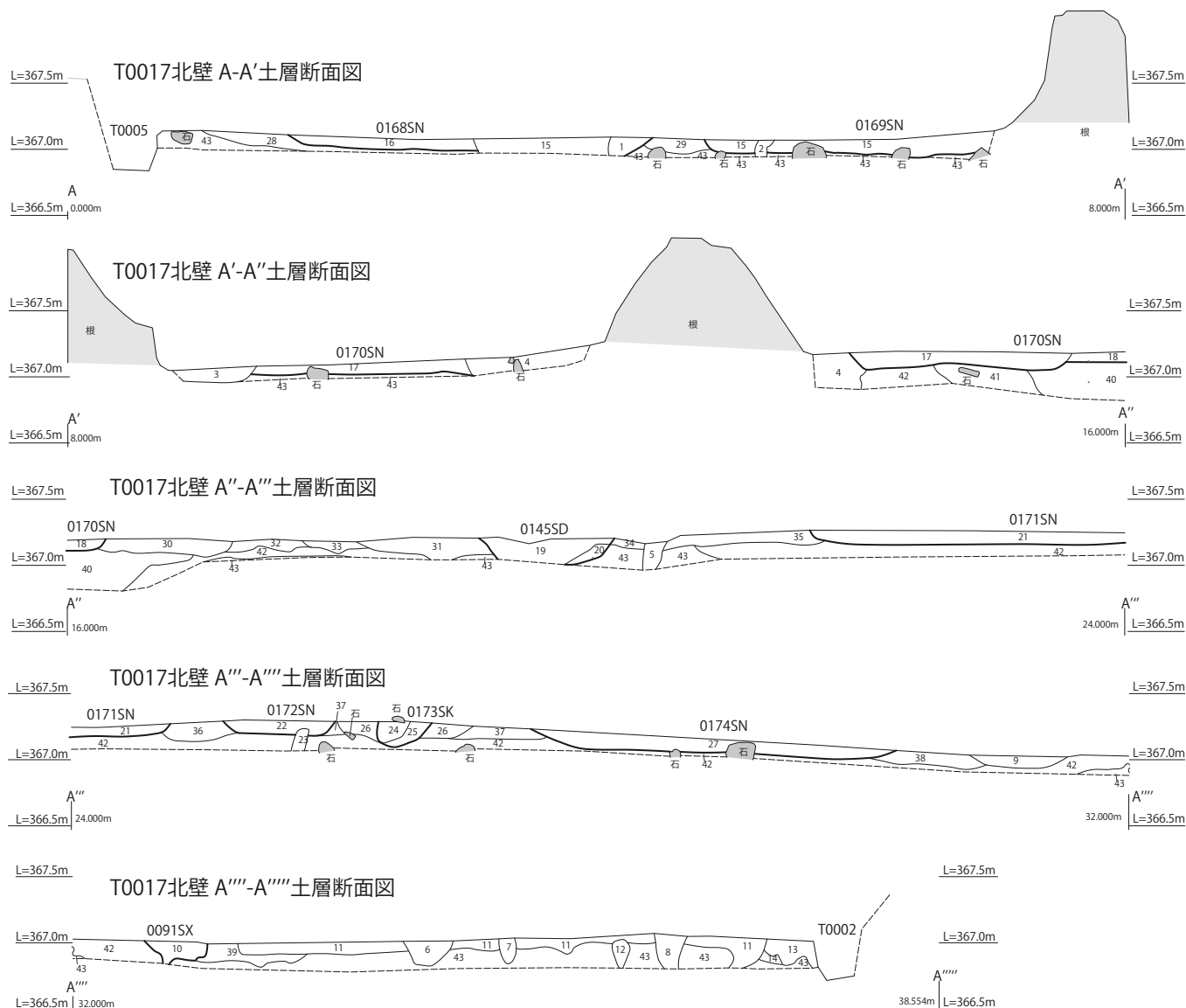


T0016北壁 A''-A'''土層断面図



- 1 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。植生痕
2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。大礫の角礫含む。植生痕か
3 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト層 植物質含む。中礫の角礫少量含む。植生痕か
4 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。植生痕
5 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。植生痕
6 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 径1～5mm炭化物含む。植物質含む。小礫含む。
7 10YR3/2黒褐色砂質シルト層 10YR3/3暗褐色粘土質シルト含む。小礫含む。
8 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 径1mm炭化物微量含む。大礫の亜角礫少量含む。
9 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層 植物質と鉄斑含む。小礫～中礫と径5mm炭化物少量含む。
10 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層 植物質と鉄斑含む。小礫～中礫と径5mm炭化物少量含む。
11 10YR3/3暗褐色砂質シルト層 小礫含む。0058SD
12 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 径1mm炭化物含む。小礫含む。0058SD
13 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。大礫の亜角礫含む。0058SD
14 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層 植物質と鉄斑含む。小礫～中礫と径1～5mm炭化物少量含む。
15 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層 植物質と鉄斑含む。小礫～中礫と径1～5mm炭化物少量含む。
16 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層 植物質多く含む。中礫の亜角礫含む。
17 10YR3/3暗褐色砂質シルトと10YR5/6黄褐色砂質シルトの混層 植物質含む。
18 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。径1mm炭化物微量含む。小礫含む。畦畔
19 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。径1mm炭化物微量含む。小礫含む。畦畔
20 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。径1mm炭化物微量含む。小礫含む。畦畔
21 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。径1mm炭化物微量含む。小礫含む。畦畔
22 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。径1mm炭化物微量含む。小礫含む。畦畔
23 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質含む。径1mm炭化物微量含む。小礫含む。畦畔
24 10YR3/1黒褐色砂質シルト層 中礫の亜角礫少量含む。巨礫の亜角礫含む。径1mm炭化物微量含む。
25 10YR3/3暗褐色粘土質シルト層
26 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層 中礫～大礫の亜角礫含む。

第 39 図 水田関連遺構図（2）（S=1/50）



- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1 植生痕 | 23 植生痕 |
| 2 植生痕 | 24 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 |
| 3 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 | 25 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 |
| 4 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 | 26 10YR4/1褐色粘土質シルト層 |
| 5 植生痕 | 27 10YR4/1褐色粘土質シルト層 |
| 6 10YR3/2黒褐色砂質シルト層 | 28 10YR4/1褐色粘土質シルト層 |
| 7 植生痕 | 29 10YR4/1褐色粘土質シルト層 |
| 8 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト層 | 30 10YR4/1褐色粘土質シルト層 |
| 9 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 | 31 10YR4/1褐色粘土質シルト層 |
| 10 10YR3/2黒褐色砂質シルト層 | 32 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 |
| 11 10YR3/2黒褐色砂質シルト層 | 33 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 |
| 12 植生痕 | 34 10YR4/1褐色粘土質シルト層 |
| 13 10YR3/2黒褐色砂質シルト層 | 35 10YR4/1褐色粘土質シルト層 |
| 14 10YR3/2黒褐色砂質シルト層 | 36 10YR4/1褐色粘土質シルト層 |
| 15 10YR4/1褐色粘土質シルト層 | 37 10YR4/1褐色粘土質シルト層 |
| 16 10YR4/1褐色粘土質シルト層 | 38 10YR4/1褐色粘土質シルト層 |
| 17 10YR4/1褐色粘土質シルト層 | 39 10YR4/1褐色粘土質シルト層 |
| 18 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 | 40 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 |
| 19 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 | 41 10YR4/1褐色砂質シルト層 |
| 20 10YR3/2黒褐色砂質シルト層 | 42 10YR3/2暗褐色粘土質シルト層 |
| 21 10YR4/1褐色粘土質シルト層 | 43 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層 |
| 22 10YR4/1褐色粘土質シルト層 | |
- 大礫の角礫多く含む。中礫の垂角礫含む。植物質含む。植物質と鉄斑含む。径1~5mm炭化物少量含む。植物質と鉄斑含む。径1~5mm炭化物少量含む。小礫含む。黄褐色砂質シルトと褐色粘土質シルトの混層。径1mm炭化物と中礫含む。小礫含む。小礫含む。植物質多く含む。小礫少量含む。畦畔基部or旧畦畔。小礫少量含む。径1mm炭化物含む。畦畔基部or旧畦畔。小礫含む。0171SN畦畔。小礫含む。0171SN・0172SN間畦畔。小礫含む。0174SN間畦畔。小礫含む。畦畔。小礫含む。畦畔。小礫含む。畦畔。植物質多く含む。径1mm炭化物含む。大礫の角礫少量含む。小礫少量含む。中礫~大礫の垂角礫含む。

第 40 図 水田関連遺構図 (3) (S=1/50)

(3) 0146SS (第 39 図・遺構図版 18)

21 区 1715 グリッドで 0145SD の西側で検出された土坑である。長軸 2.06m、短軸 1.22m の楕円形を呈し、深さは 0.33m を測る。内部から多量の礫が出土している。

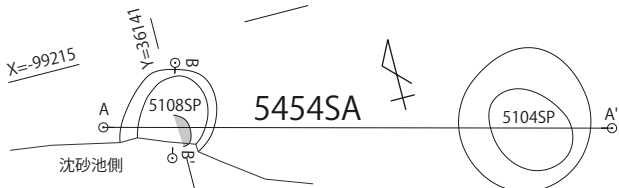
(4) 5140SK (第 39 図・遺構図版 18)

21 区 1915 グリッドで検出された土坑である。

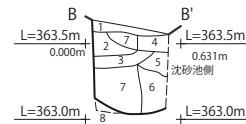
長軸 0.91m、短軸 0.88m の円形を呈し、深さは 0.28m を測る。埋土は黒褐色粘土質シルトで、土師器南伊勢系鍋が出土し、時期は中世と推定される。

2 柵列

5454SA平面図



5454SA(5108SP) B-B'土層断面図

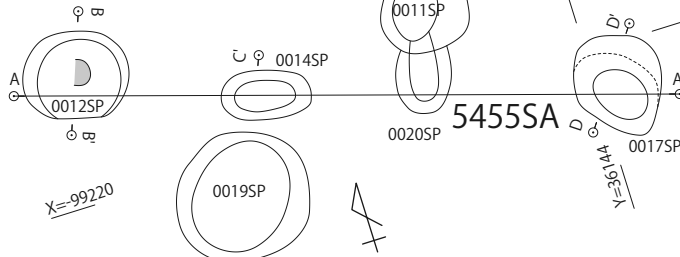


- 1 10YR3/1黒褐色砂質シルト層 小礫含む。径1mm炭化物少量含む。
- 2 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト層 植生痕
- 3 10YR3/1黒褐色砂質シルトと10YR5/2灰黄褐色シルトの混層 植生痕
- 4 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト層
径1mm10YR7/6明黄褐色砂質シルトブロック含む。
- 5 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト層
径1mm10YR7/6明黄褐色砂質シルトブロック少量含む。
- 6 10YR3/1黒褐色砂質シルト層
- 7 10YR4/1褐灰色砂質シルト層
径1mm10YR7/6明黄褐色砂質シルトブロック含む。
径1mm炭化物微量含む。
- 8 10YR5/6黄褐色砂質シルト層

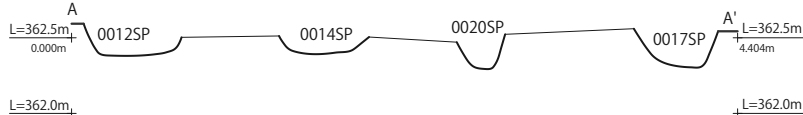
5454SA A-A'断面図



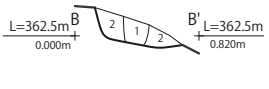
5455SA平面図



5455SA A-A'断面図



5455SA(0012SP) B-B'土層断面図



- 1 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト層
- 2 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト層
中礫含む。径1mm地山ブロック含む。

5455SA(0014SP・0019SP) C-C'土層断面図



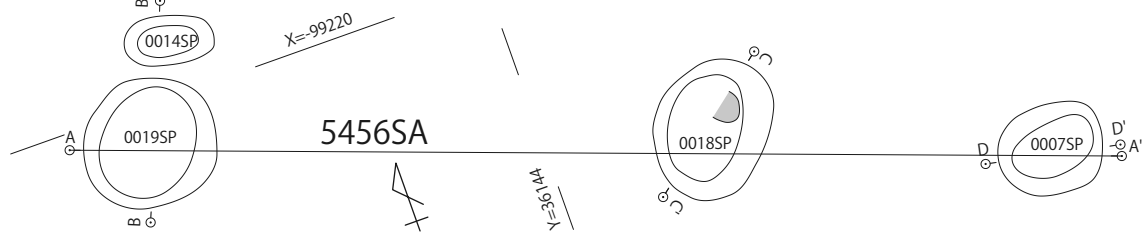
- 1 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト層 植物質含む。
- 2 10YR4/1褐灰色砂質シルト層 植物質含む。
中礫～大礫の角礫少量含む。
- 3 10YR4/1褐灰色砂質シルト層 植物質含む。
径1mm炭化物微量含む。
- 4 10YR5/6黄褐色砂質シルト層

5455SA(0017SP) D-D'土層断面図

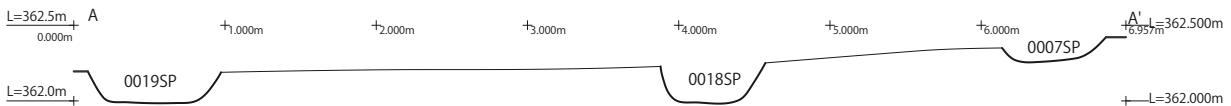


- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層 径1mm炭化物と中礫含む。大礫少量含む。
- 2 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト層 中礫含む。巨礫の角礫少量含む。
- 3 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト層 中礫含む。巨礫の角礫少量含む。
- 4 10YR6/4にぶい黄褐色細粒砂層 中礫～大礫多く含む。

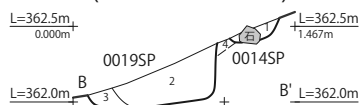
5456SA平面図



5456SA A-A'断面図

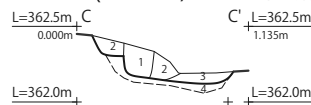


5456SA(0014SP・0019SP) B-B'土層断面図



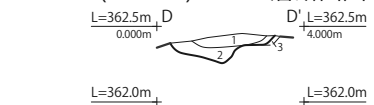
- 1 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト層 植物質含む。
- 2 10YR4/1褐灰色砂質シルト層 植物質含む。
中礫～大礫の角礫少量含む。
- 3 10YR4/1褐灰色砂質シルト層 植物質含む。
径1mm炭化物微量含む。
- 4 10YR5/6黄褐色砂質シルト層

5456SA(0018SP) C-C'土層断面図



- 1 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層 植物質少量含む。
- 2 10YR3/1黒褐色砂質シルト層 中礫含む。大礫含む。
- 3 10YR4/1褐灰色砂質シルト層 小礫含む。
径1mm地山ブロック少量含む。
- 4 10YR6/4にぶい黄褐色細粒砂層 中礫～大礫多く含む。

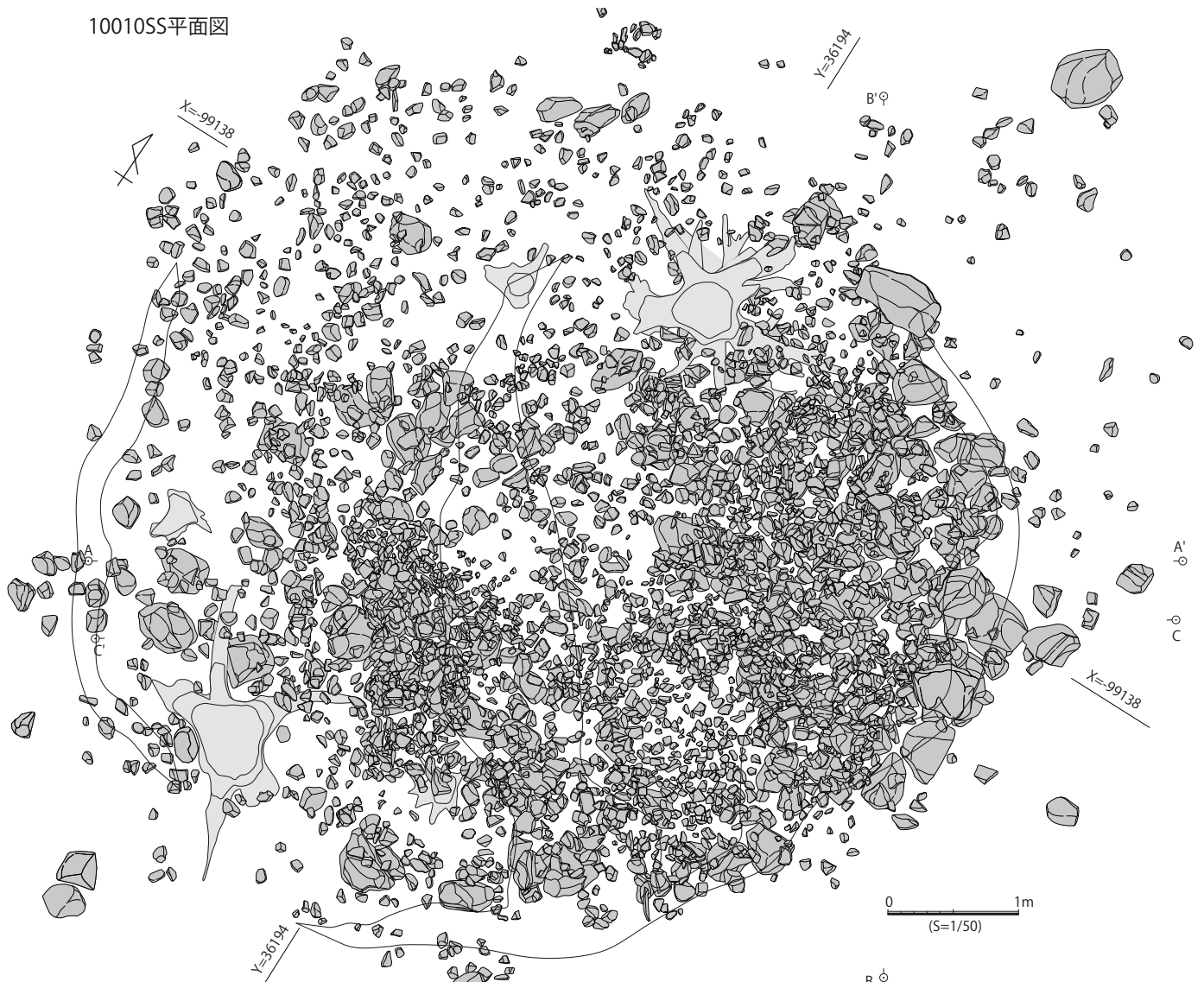
5456SA(0007SP) D-D'土層断面図



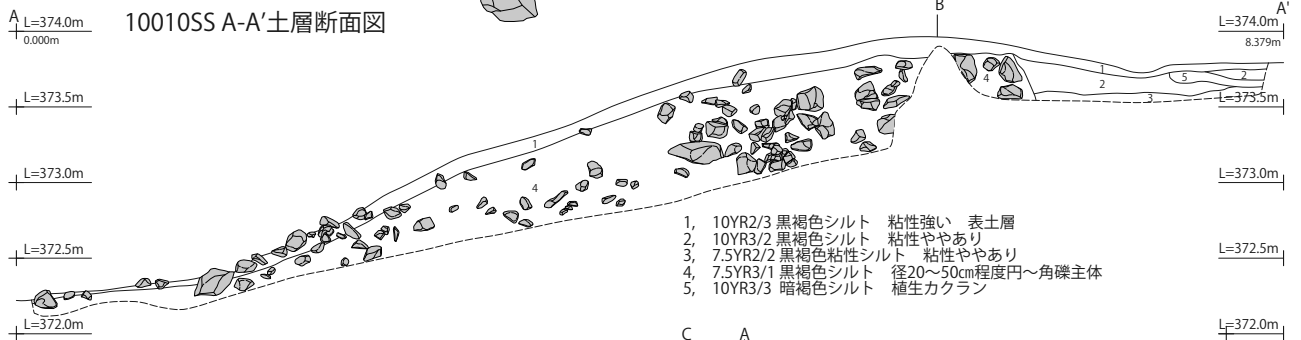
- 1 10YR3/3暗褐色砂質シルト層 小礫少量含む。中礫少量含む。
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト層 植物質含む。
- 3 10YR5/6黄褐色砂質シルト層

第 41 図 5454SA・5455SA・5456SA 遺構図 (S=1/50)

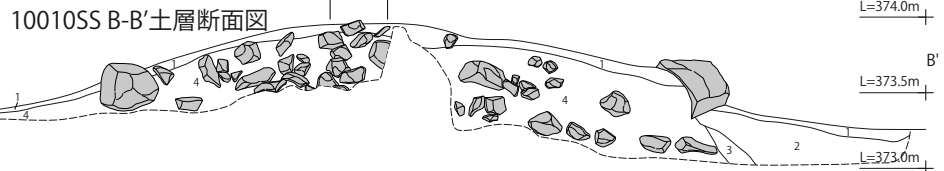
10010SS平面図



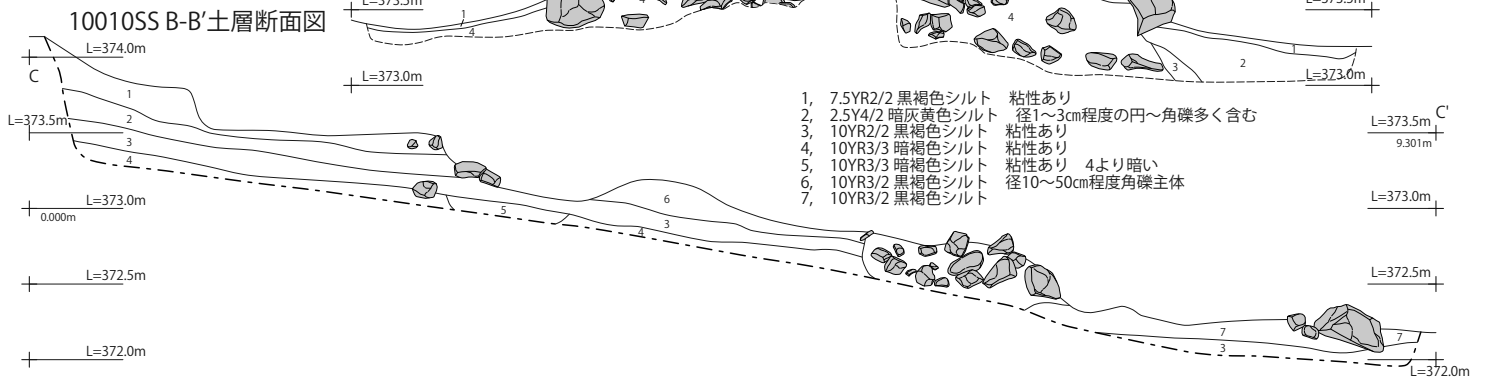
10010SS A-A'土層断面図



10010SS B-B'土層断面図



10010SS B-B'土層断面図



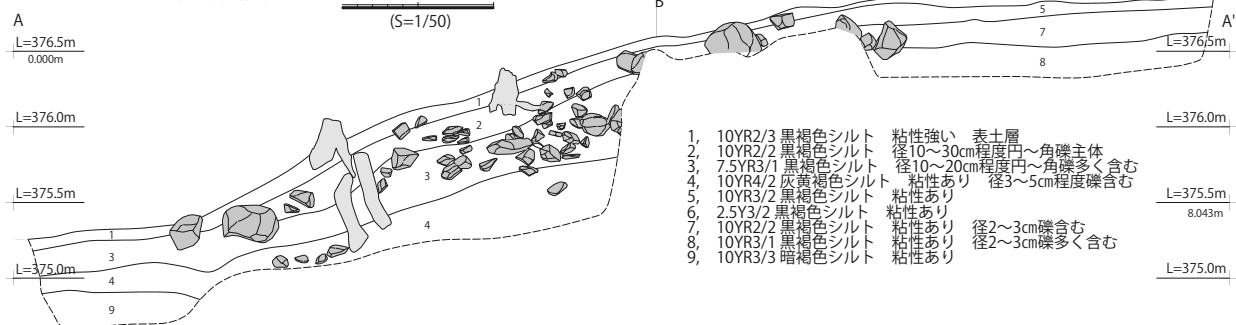
第 42 図 10010SS 遺構図 (S=1/50)

10011SS平面図

B' 〇

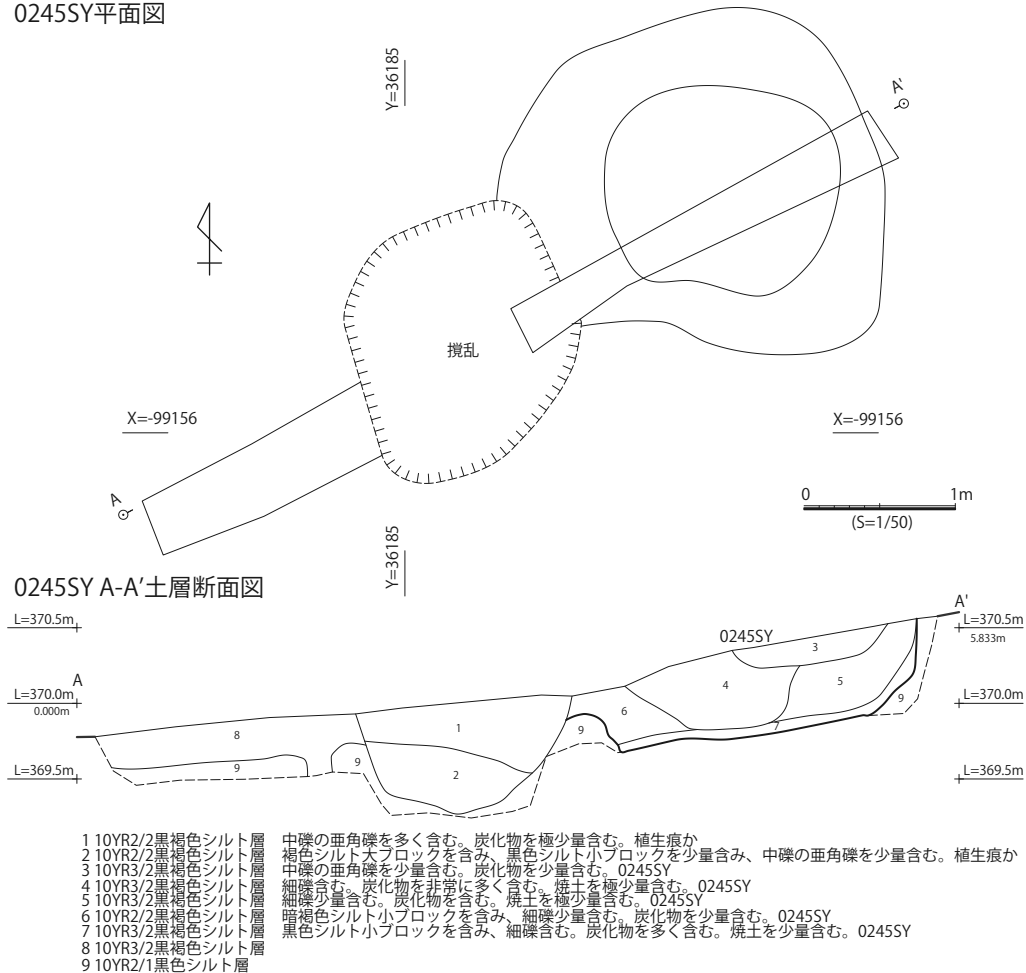


10011SS A-A'土層断面図



第 43 図 10011SS 遺構図 (S=1/50)

0245SY平面図



第 44 図 0245SY 遺構図 (S=1/50)

(1) 5454SA (第 41 図・遺構図版 24)

21 区 2114 グリッドで検出された柵列で、5104SP と 5108SP で構成される。長さは 3.36m を測り、時期は戦国時代から江戸時代と推定される。

(2) 5455SA (第 41 図・遺構図版 24)

21 区 2114 と 2214 グリッドで検出された柵列で、0012SP と 0014SP と 0017SP と 0020SP で構成される。長さは 4.40m を測り、時期は戦国時代から江戸時代と推定される。

(3) 5456SA (第 41 図・遺構図版 24)

21 区 2114 と 2214 グリッドで検出された柵列で 0007SP と 0018SP と 0019SP と 0020SP で構成される。長さは 4.40m を測り、時期は戦国時代から江戸時代と推定される。

3 集石遺構

(1) 20010SS (第 42 図・遺構図版 56)

22A 区 1319 と 1419 グリッドで検出された塚状遺構で、長軸 10.84m、短軸 7.64m の円形を呈し、厚さは 0.76m を測り、黒褐色から暗褐色シルトが堆積し角礫を多量に含み一部に円礫も確認される。時期は当初は江戸時代以降と推定されたが、出土遺物からこれよりも遡る可能性も考えられる。

(2) 20011SS (第 43 図・遺構図版 56)

22A 区 1320 と 1321 グリッドで検出された塚状遺構で、長軸 9.84m、短軸 7.73m の円形を呈し、厚さは 1.12m を測り、黒褐色から暗褐色シルトが堆積し角礫を多量に含み一部に円礫も確認される。時期は当初は江戸時代以降と推定されたが、出土遺物からこれよりも遡る可能性も考えられる。

4 炭焼窯

(1) 0245SK (第 44 図・遺構図版 14)

第3章 出土遺物

1. 出土遺物の概要

今回の大崎遺跡からの出土遺物は27リットルコンテナで、総計22箱にのぼった。本章の節立ての通り、帰属時期をみると、弥生時代・古代以降の遺物も出土しているものの、縄文時代に属する遺物が圧倒的に多い。水田関連遺構を構成する堆積層は、元来縄文時代および弥生時代の遺物包含層であったと考えられ、水田関連遺構の畦畔および作土にも縄文土器・弥生土器および石器・石製品が包含していた。水田関連遺構の性質上、二次的攪乱を受けていない遺物包含層が残存している場合であっても、耕作土とそれとの境は不明瞭で漸移的であった。

遺物の種別を見ると、土器・陶器・石器・石製品・金属製品が確認されている。弥生時代以降の土器、古代以降の陶器、金属製品、さらに石器・石製品は別途報告するため、本節では縄文土器についてのみ報告していくこととする。

なお、報告では、すべての資料についての報告を本文中では行うことができない状況にある。個別の資料報告については、遺物一覧表で行うこと

とする。本報告に関する一覧表一式は令和7年3月現在開設されている、愛知県埋蔵文化財センターホームページからダウンロード可能となっており、こちらからのデータの利用をお願いしたい (<http://www.maibun.com/DownDate/newhouko.html>)。

2. 資料整理調査の経過

発掘調査から持ち込まれた出土遺物は、調査グリッド・遺構・取上日付けなどの単位別に一括取上されているものと、各資料別に座標値を測ったドット取上の資料とがある。一括取上された資料は、土器・土製品・石器・石製品・金属製品に分類したあと、各種で部位に分け、さらに接合などを通じて破片同士の同一個体の検討を行った。

今回は整理体制の方針により、これまでの整理方針とは異なる形で進行した。実測など図化可能な資料のみを任意抽出して、それに関してのみの一覧表が作成された。従って、資料選択には、文様のある有文土器の選択比率が高い可能性も考えられる。

第1節 縄文土器

上述した方針で選択された縄文土器は、登録番号E-1～E-509、E-1108の計510点である(以下、E-は省略し、番号のみを示す)。第45図～第73図に出土した縄文土器を図示した。図示の方針は、21A区遺構内出土資料、21B区遺構内出土資料、21A区・21B区遺構外出土資料、22A区

遺構内出土資料、22B区遺構内出土資料、22A区・22B区遺構外出土資料の順で提示した。本報告では、整理の方針として、水田関連遺構と縄文時代・弥生時代の遺構とを峻別することなく遺構順の掲載となっている。そのため、出土土器群全体を報告した上で、特に縄文時代遺構については再

度提示する形をとる。

縄文土器の時期別提示

上記の方針で掲載した土器は、以下の様に分類される。

第1群土器 縄文時代早期の土器

早期前半から後半にかけての土器群である。いずれの資料にも繊維が含まれることが特徴である。各図ではキャプション上に●印を付した。

第1群土器 1【165】

外面に楕円押型文が認められる。押型文はいわゆるポジ状態を呈するもので、網目状にはなっていないものの楕円形状が不鮮明な状態となっている。黄島式としても新相かもしれない。

第1群土器 2【164・486】

茅山下層式とか元野式といわれる土器群である。164は太沈線が平行して施されているもので、そのうちの1本は内に連続刺突が施されている。内面には二枚貝条痕が確認される。486は細い貼付隆帯上に刺突列が施されているもので、内面はナデ調整となっている。

第1群土器 3【392・449】

文様構成が刺突列文のみのものを集めた。

391・392は外面の横方向に爪形の連続刺突列が展開するものである。器面最終調整は内外面ともにナデである。これは粕畑式に属する可能性がある。

449は八ツ崎Ⅰ式とされる土器である。三単位波状の口縁形態をもち、口縁部から胴部下半まで直線的な器形を呈する。そのなかで、口縁部と胴部上半には若干の屈折形状が認められることが大きな特徴となっている。器面全体には二枚貝条痕が施されており、その上に口縁端部と口縁部と

胴部上半との屈折部分、さらには上部上半と、均等な間隔を保って3条の連続した刺突列文が施されている。さらに口縁部には結節縄文が横位に展開し、波頂部では粘土の貼付が垂下するように施されている。内面は二枚貝条痕が施されている。

第1群土器 4【450】

上ノ山式とか入海Ⅰ式といわれる土器である。口縁部で波状を呈する。外面には交互押圧のある粘土の貼付隆帯があり、器面最終調整としては表面はナデ、内面はナデ・オサエが主体である。口縁端部にも貼付隆帯同様の交互刺突列が認められる。

第1群土器 5【129・134・270・330・348・349・350・351・352・353・357・393・451・487・488・489・490】

その他、胎土に繊維が含まれているものを集めた。内外面に二枚貝条痕が施されている土器が圧倒的多数であり、早期後半（後葉～末葉）に知られている東海系の表裏条痕土器と言えよう。

第2群土器 縄文時代前期の土器

第2群土器 1【345・492】

大麦田式と考えられる土器口縁部で、器壁5mm程度と薄手である。345は器面表に刻目をもつ細い貼付文が2条横方向に平行して施されている。貼付文下には縄文RLが展開する。一方、口縁端部上面にも刻目が認められ、口縁端部に沿った内面には縄文RLが施されている。492は、器面表面には縄文LRの地文の上に、2条の細い貼付隆帯が施されている。裏面の口縁端部付近でも1条の細い貼付隆帯の下に縄文LRが施されている。

第2群土器 2【363】

口縁で内湾する器形の口縁部である。器面外側

には半截竹管状工具による文様が施されており、斜行する集合沈線や横長の楕円文が構成されている。口縁端部上面にも同様の半截竹管状工具による刺突列が施されている。内面はナデ・オサエ調整である。前期末頃の土器片であろうか。

第3類土器 縄文時代中期前半の土器

第3群土器 1

本土器群は、さらに第3群土器 1a と第3群土器 1b に分けられる。

第3群土器 1a 【40・128・149・169・262・266】

爪形の刺突列のある貼付隆帯を特徴とするもので、北裏CⅡ式が主体となるものである。第3群土器 1 の主体をなす。40 は口縁直下で爪形刺突を伴うカマボコ状で低位の貼付隆帯が認められる。128 は口縁部で、口縁端部外面に連続する爪形文をもつ貼付隆帯が併走する。149 は40 同様に爪形刺突を伴うカマボコ状で低位の貼付隆帯が認められる。169 は口縁端部外面に爪形刺突を伴うカマボコ状で低位の貼付隆帯が認められる。262 は外面に半截竹管状工具による刺突列の文様が施されている。266 も40 同様に爪形刺突を伴うカマボコ状で低位の貼付隆帯が認められる。

第3群土器 1b 【77・343・401・439・500】

半截竹管状工具による沈線文様構成が加わるもので、北裏CⅢ式に属するものと思われる。77 は器面外面には半截竹管状工具による沈線と刺突による文様が施されているもので、内面はナデ調整である。343 は器面外面に半截竹管状工具による沈線複数条1単位で、多角形を形成するように構成されており、一部に三角の挟り入れが認められる。地文には縄文RLが認められる。401 は

口縁端部上面には連続する半截竹管状工具による集合短沈線が、その直下からは半截竹管状工具による集合沈線が施されている。439 は半截竹管状工具によるカマボコ状沈線、地文に縄文RLが施されている。457 は口縁部片で口縁端部外面に爪形刺突をもつ貼付隆帯、その下には半截竹管状工具による沈線による区画が描かれている。縄文LRが地文として施されている。500 は半截竹管状工具による区画内に、同工具による集合沈線と三角形状挟りが施されている。地文として縄文LRが施されている。

第3群土器 2 【281・329・344・370・406・407・408・409・416・456・459・491・493】

爪形の刺突列のある貼付隆帯に加えて、半截竹管状工具による沈線文様構成が主体となるもので、三角形状（三叉状）の挟り入れが見とれられることが特徴である。これらは前畑式と考えられる。281 は口縁端外面に工具による刺突列があり、下には半截半截竹管状工具による集合沈線が横位に展開する。329 は口縁端部外面には半截竹管状工具による爪形刺突列をもつ隆帯と同工具によるカマボコ状沈線が認められる。344 は半截竹管状工具による沈線により楕円文様などが描かれており、地文には縄文RLが施されている。370 は波状口縁の波頂部から刻目をもつ貼付隆帯が垂下しており、半截竹管状工具による沈線が横に展開する。縄文RLを地文とする。406 は粘土貼付の脇に半截竹管状工具によるカマボコ状の沈線が楕円形に重層的に施されており、縄文RLを地文とする。407 は半截竹管状工具調整による細隆帯と、併走する形で半截竹管状工具による沈線があり、三角形状の挟りが等間隔で施されている。縄文LRを地文とする。408 は半截竹管状工具による沈線と、地文縄文LRが施されている。409

は半截竹管状工具によるカマボコ状の沈線と縄文 RL、三角の挟りが認められる。416 は口縁部頂部に円状の突起が認められるものである。器面外面には半截竹管状工具によるカマボコ状沈線と刺突、刻み目のある貼付隆帯、連続した爪形文が展開する。また、口縁端部上面は突起部の内面に三叉状の挟りが施されている。456 は口縁端部外面には、連続した爪形文、間隔を空けて爪形刺突をもつ貼付隆帯が横位に貼り付けられている。459 は口縁端部外面に爪形の連続刺突が認められる。491 は半截竹管状工具による貼付隆帯を中心に、カマボコ状の沈線による文様が構成されている。493 は半截竹管状工具によるヘラ状刺突を持つ貼付隆帯により三叉状の文様展開となっており、口縁端部上面には小突起状に粘土貼付が2箇所施されている。

第3群土器 3

山田平式と考えられるが、施文の様相から、さらに以下の3群に分類される。

第3群土器 3a [6・125・163・251・338・360・445]

6 は口縁端部外面には爪形の連続刺突列が展開し、その下位には平行して半截竹管状工具による集合沈線が展開する。125 は器壁が5mm程度の口縁部から胴部への屈曲部付近と思われる。連続する爪形文のある貼付隆帯に沿って半截竹管状工具による沈線が展開する。163 は口縁端部外面に半截竹管状工具による刺突列、その下に平行して半截竹管状工具による集合沈線が展開する。251 は口縁端部をやや肥厚させ、その下では半截竹管状工具による沈線が認められる。口縁端部外面を含めて全体に文 LR が地文となっている。338 は半截竹管状工具によるカマボコ状の集合沈線が横位に、そして短めの集合沈線が縦位に施されてい

る。360 は内湾する器形の口縁端部に粘土の貼付を行うことで、上面に三叉状の凹みが作られている。また、外面には貼付隆帯に爪形の連続刺突と半截竹管状工具によるカマボコ状の集合沈線が施されている。445 は胴部屈曲部に爪形刺突列をもつ低位の貼付隆帯が施されている。

第3群土器 3b [339・340・361・430]

339 は内湾する器形の口縁部で、貼付隆帯の上に口縁部直下に植物穂による擬縄文のほか、半円状の粘土貼付が施されている。340 は口縁部に向かって屈曲するように外反する器形で、その屈曲部には植物穂による擬縄文が施されている。361 は口縁端部外面には爪形の連続刺突列が展開し、その下位には平行して半截竹管状工具による集合沈線が展開する。430 は内湾する器形の口縁部で、貼付隆帯の上に口縁部直下に縄文 I が施される。

第3群土器 3c [394・395]

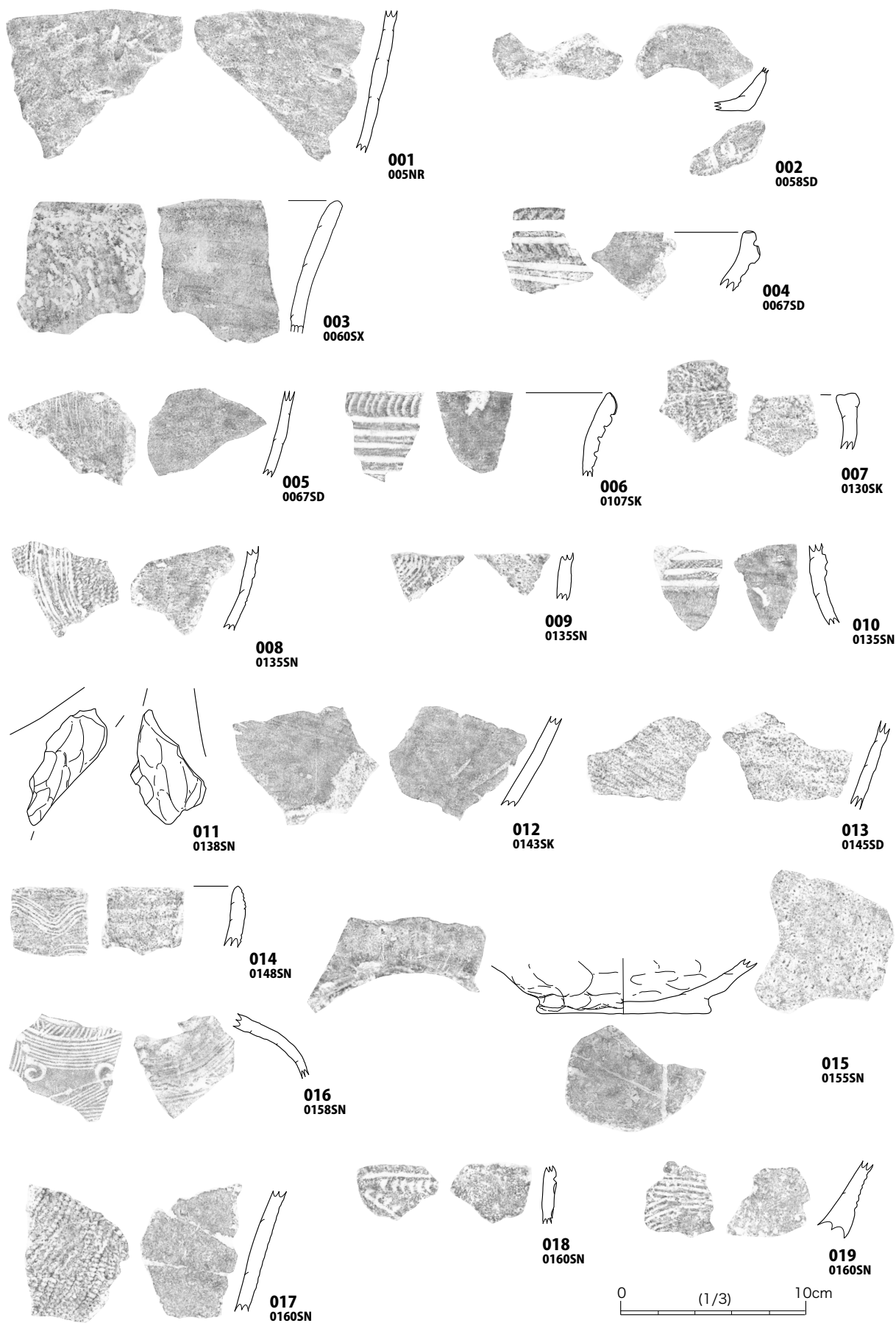
394・395 は内側に屈折するような器形を呈しており、屈曲部には貼付隆帯が展開する。器形自体は、第3群土器 3b と同様といえる。口縁端部外面には連続する爪形文が施されている。器面調整は、外面・内面ともにナデ・オサエが主体となっている。

第3群土器 4

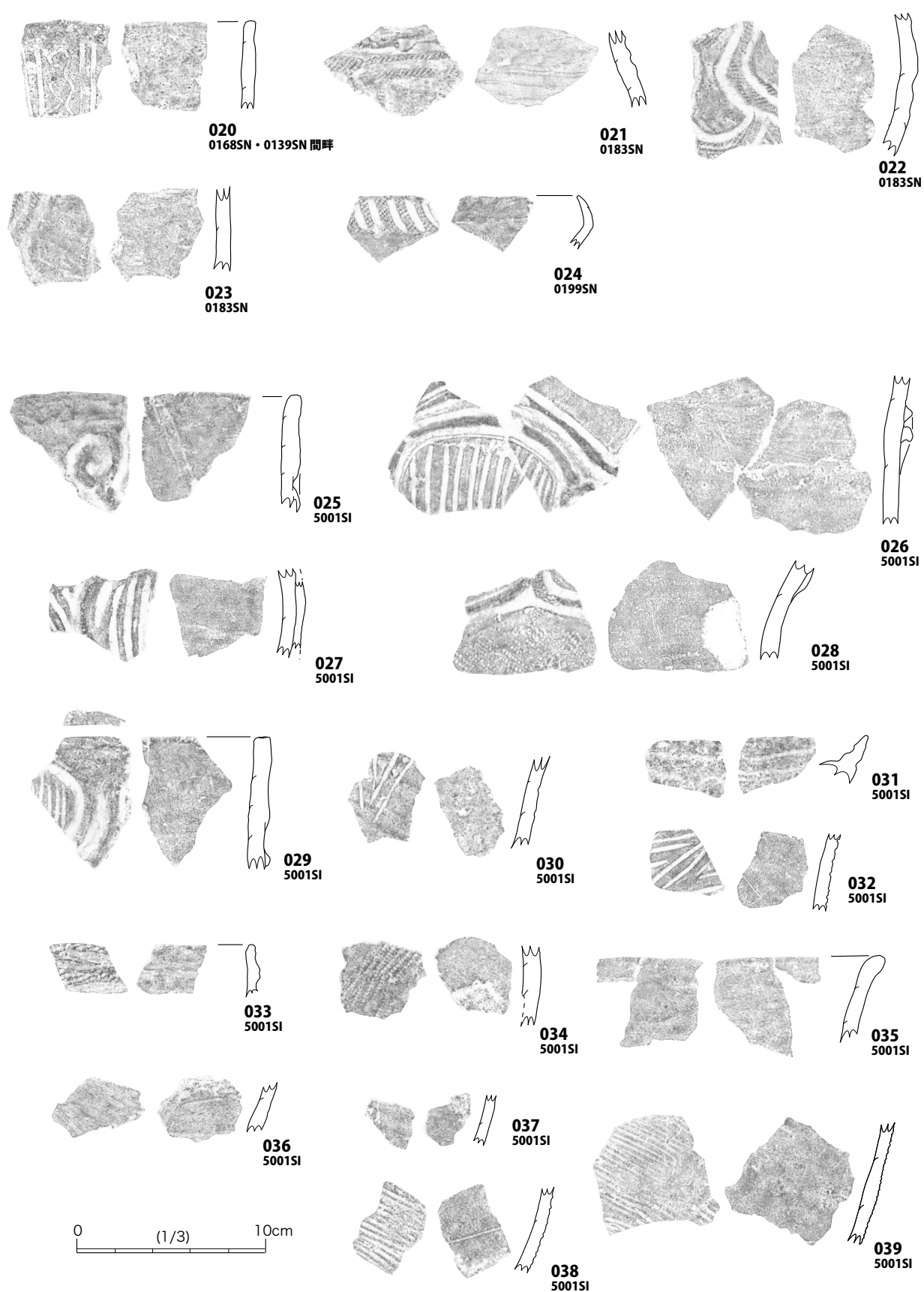
子種式に属するものと考えられるが、文様構成などから、さらに以下の4群に分類される。

第3群土器 4a [75・76・131・166・167・170・249・282・284・285・293・307・396・397・398・399・400・425・446・454・455・463・1108]

半截竹管状工具によるカマボコ状の隆帯および貼付隆帯が文様構成の主体となるものである。子種式に属するものと考えられる。75 は口縁部から胴部上半にかけての大型破片である。貼付隆帯



第 45 図 縄文土器 1



第 46 図 縄文土器 2

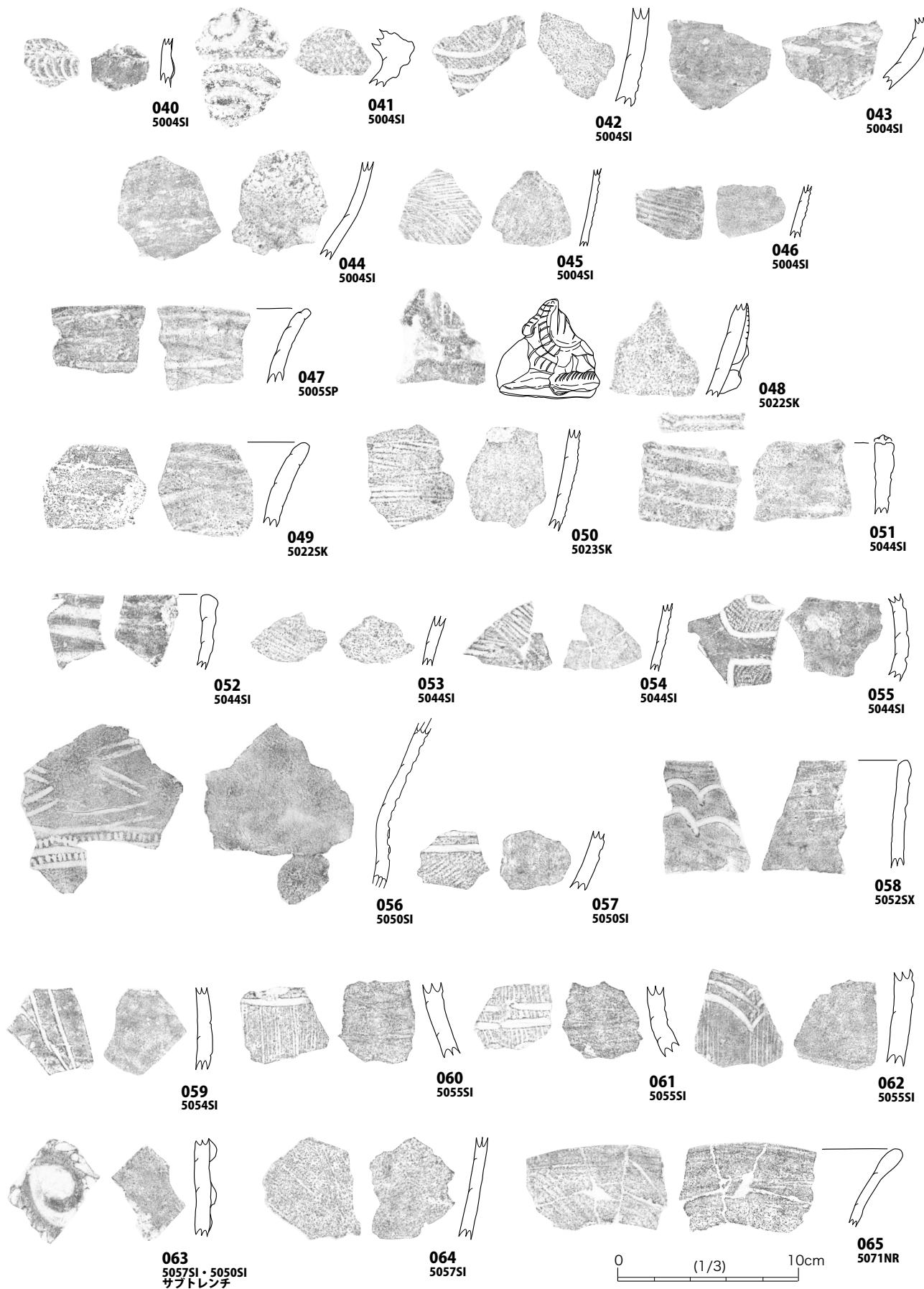
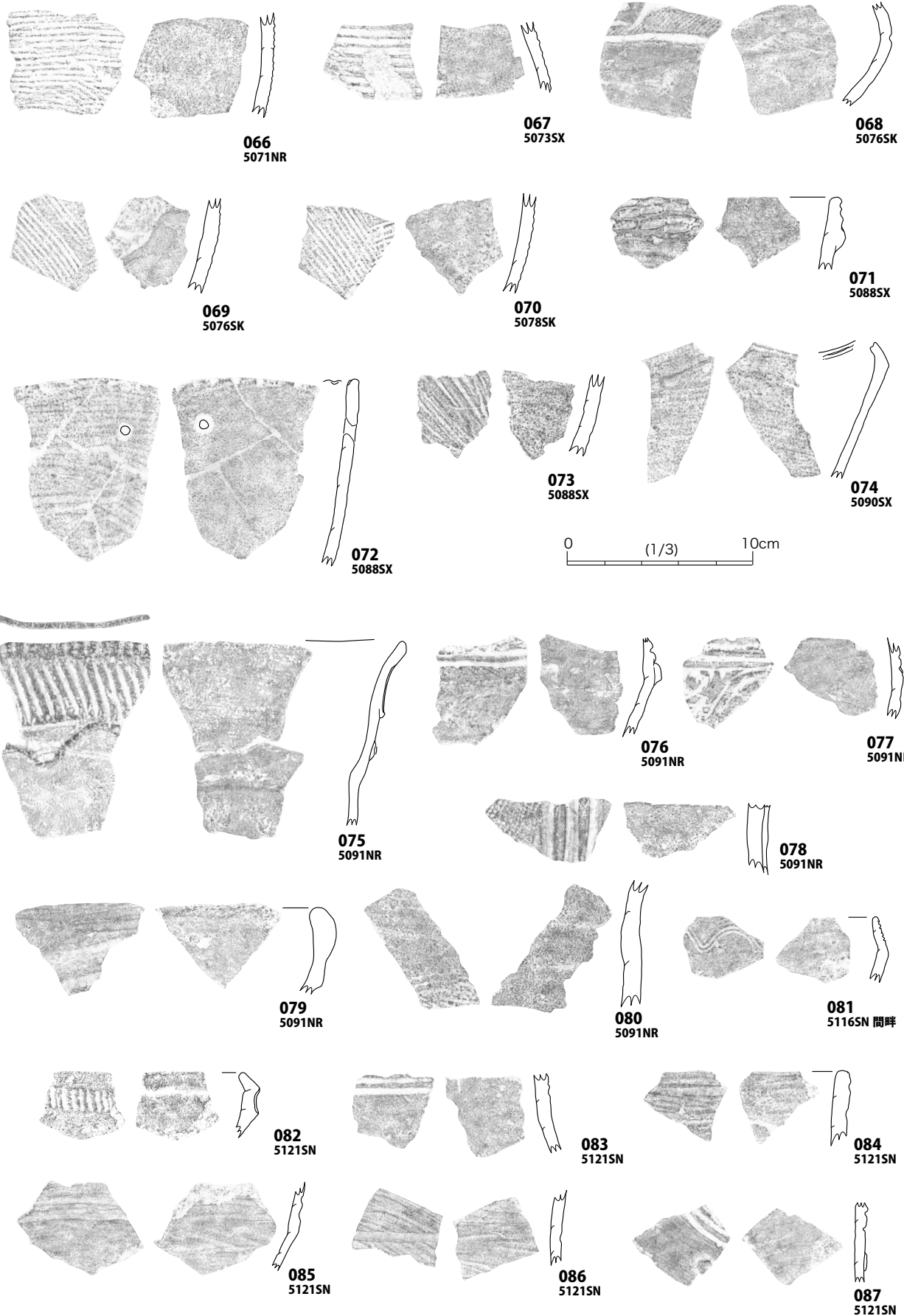
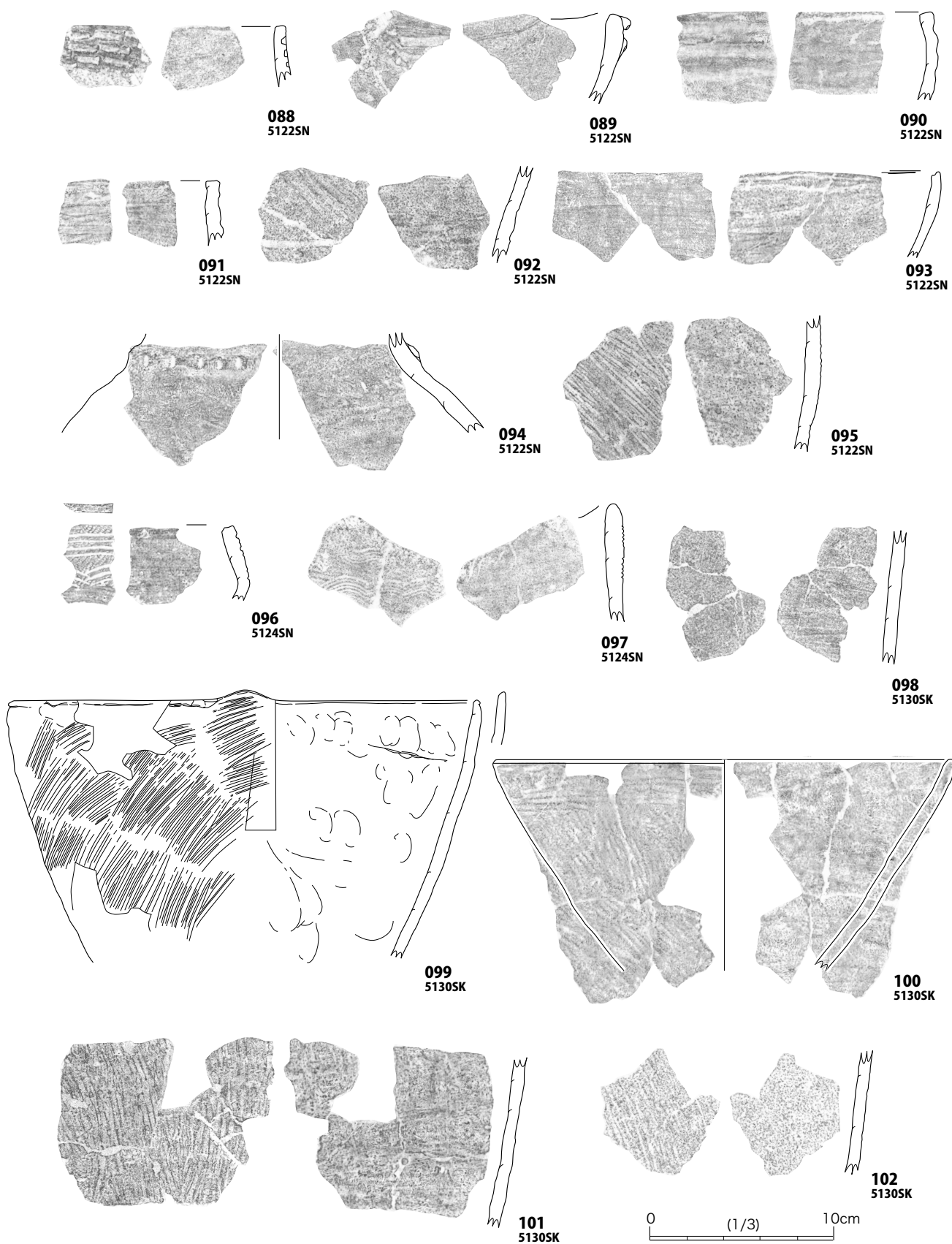


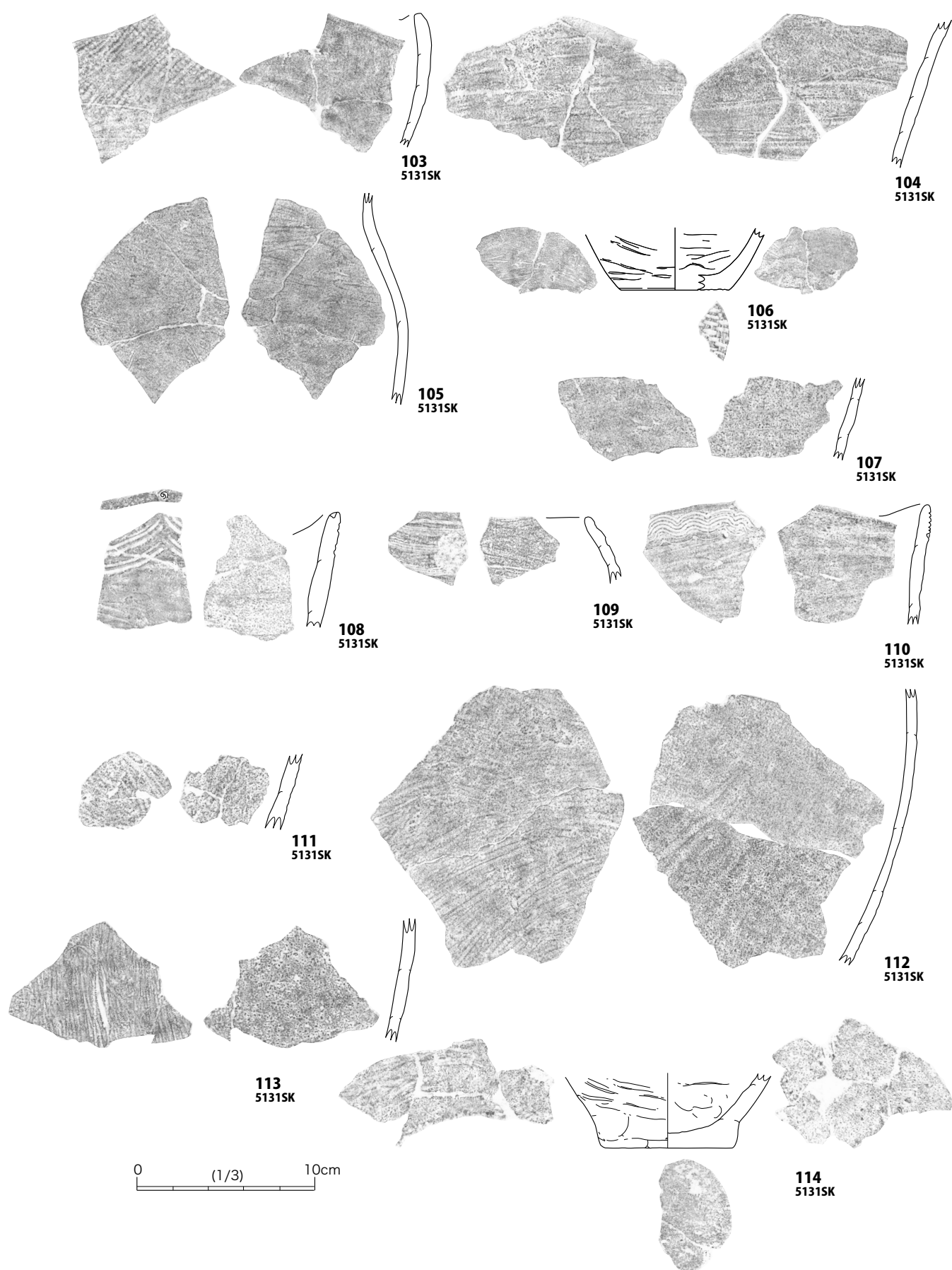
図 47 縄文土器 3



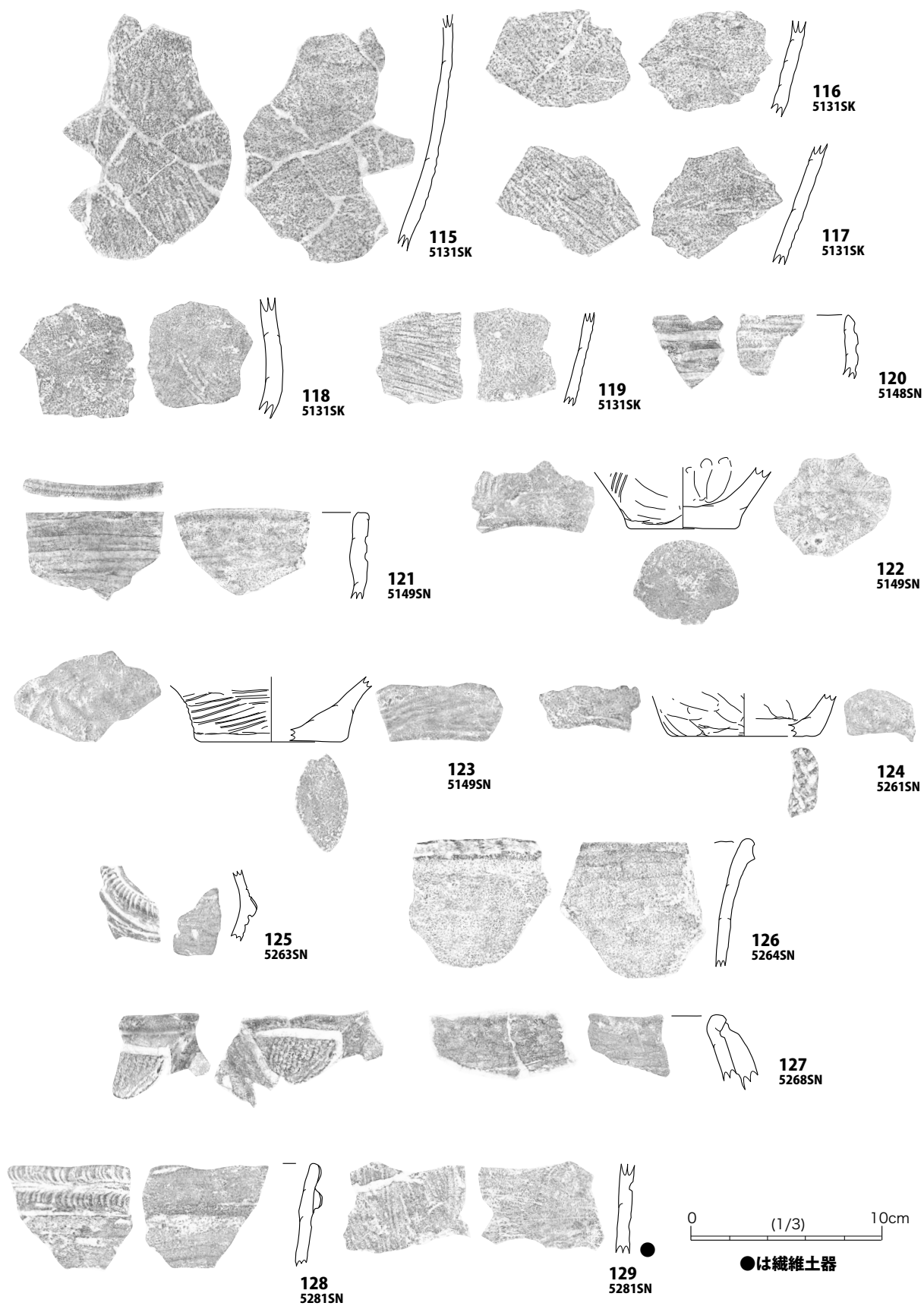
第 48 図 縄文土器 4



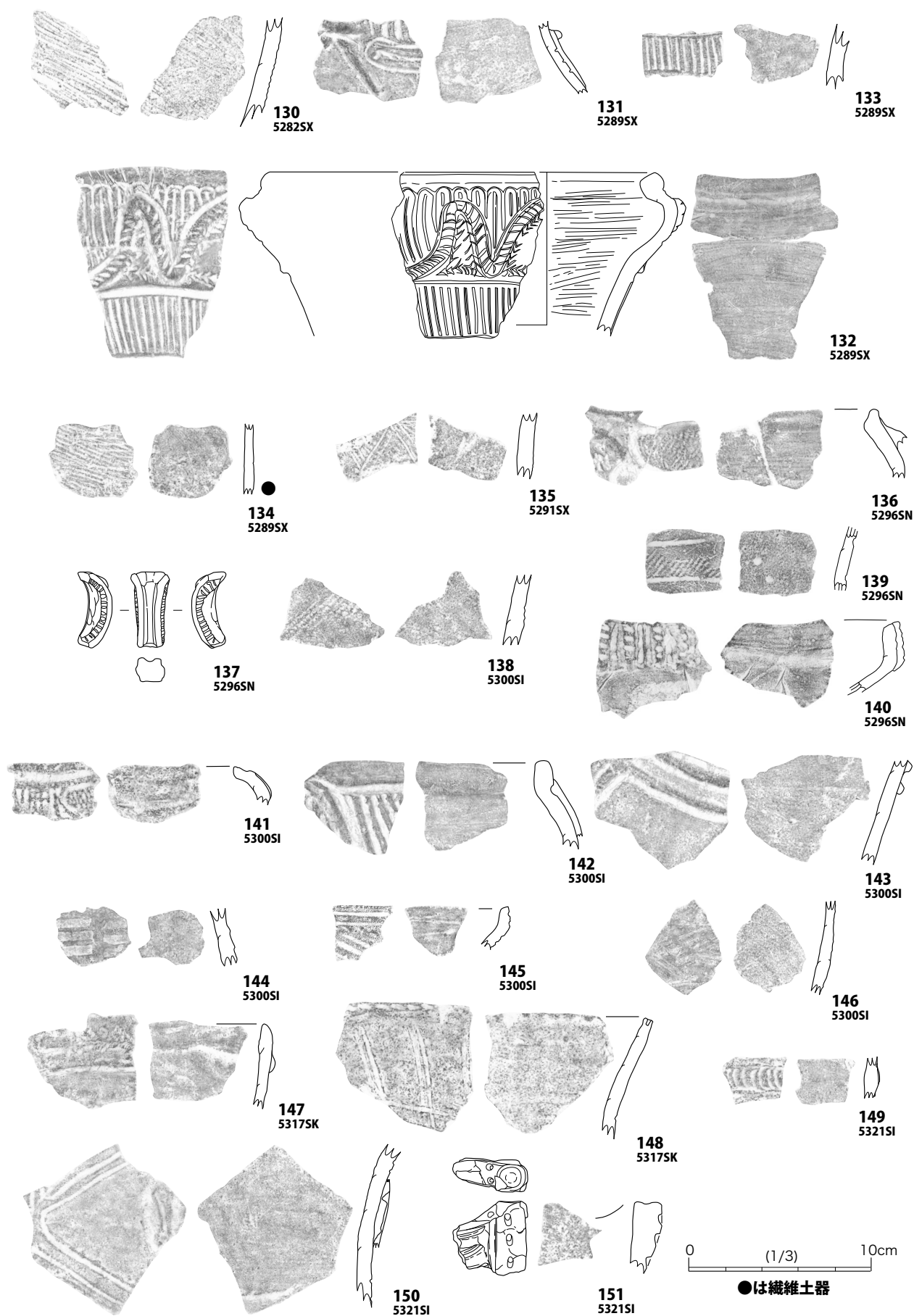
第 49 図 縄文土器 5



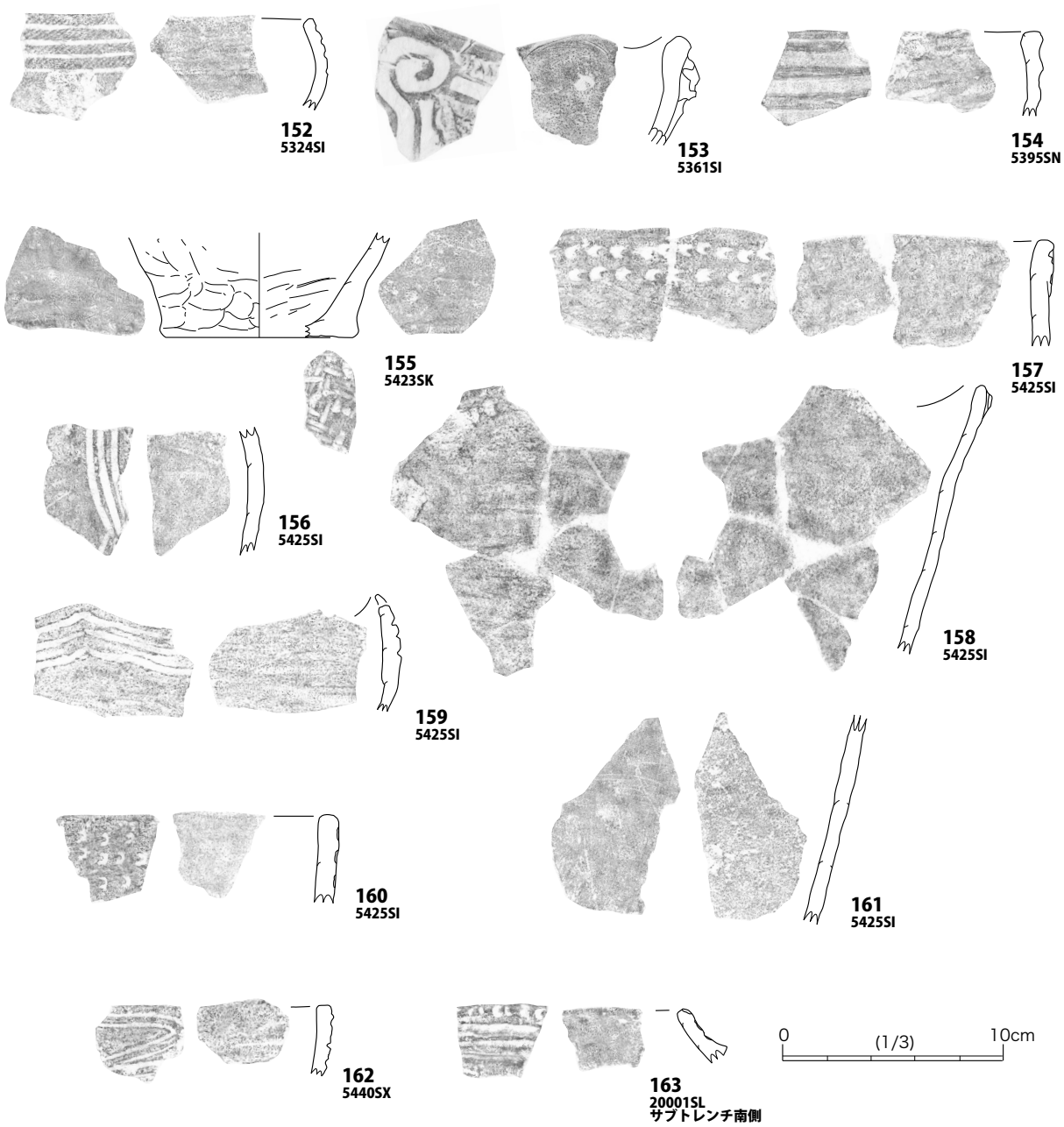
第 50 図 縄文土器 6



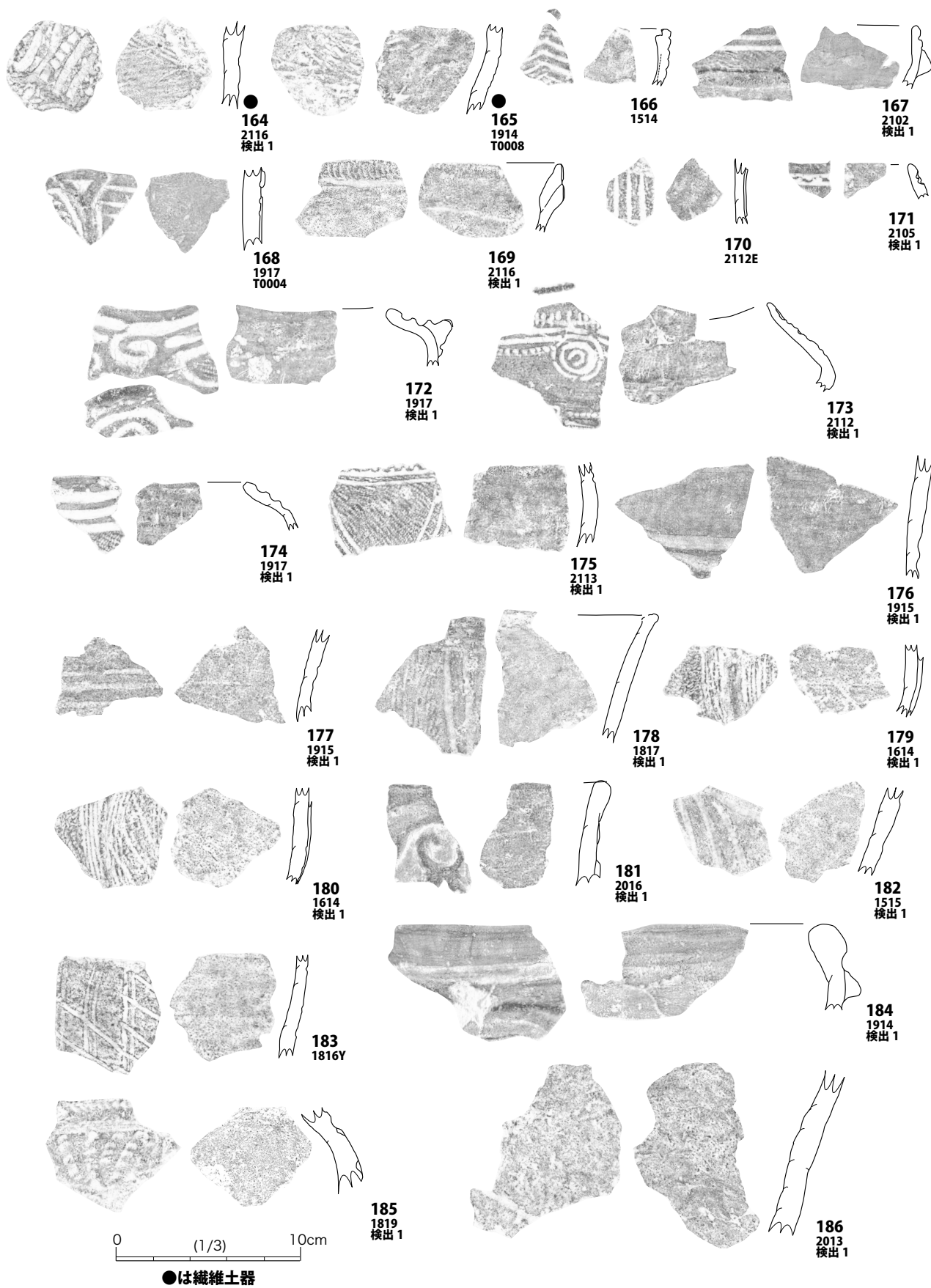
第 51 図 縄文土器 7



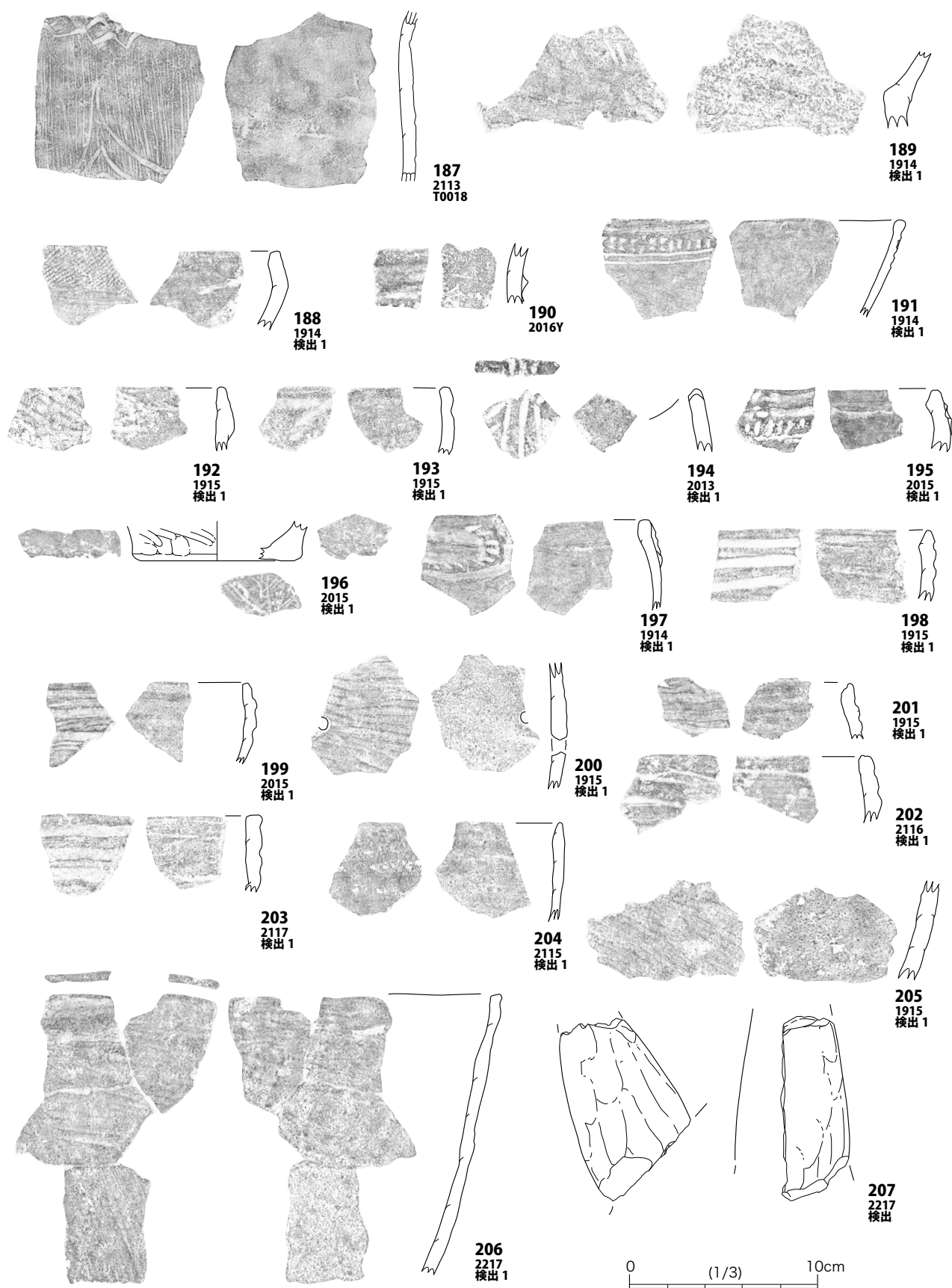
第 52 図 縄文土器 8



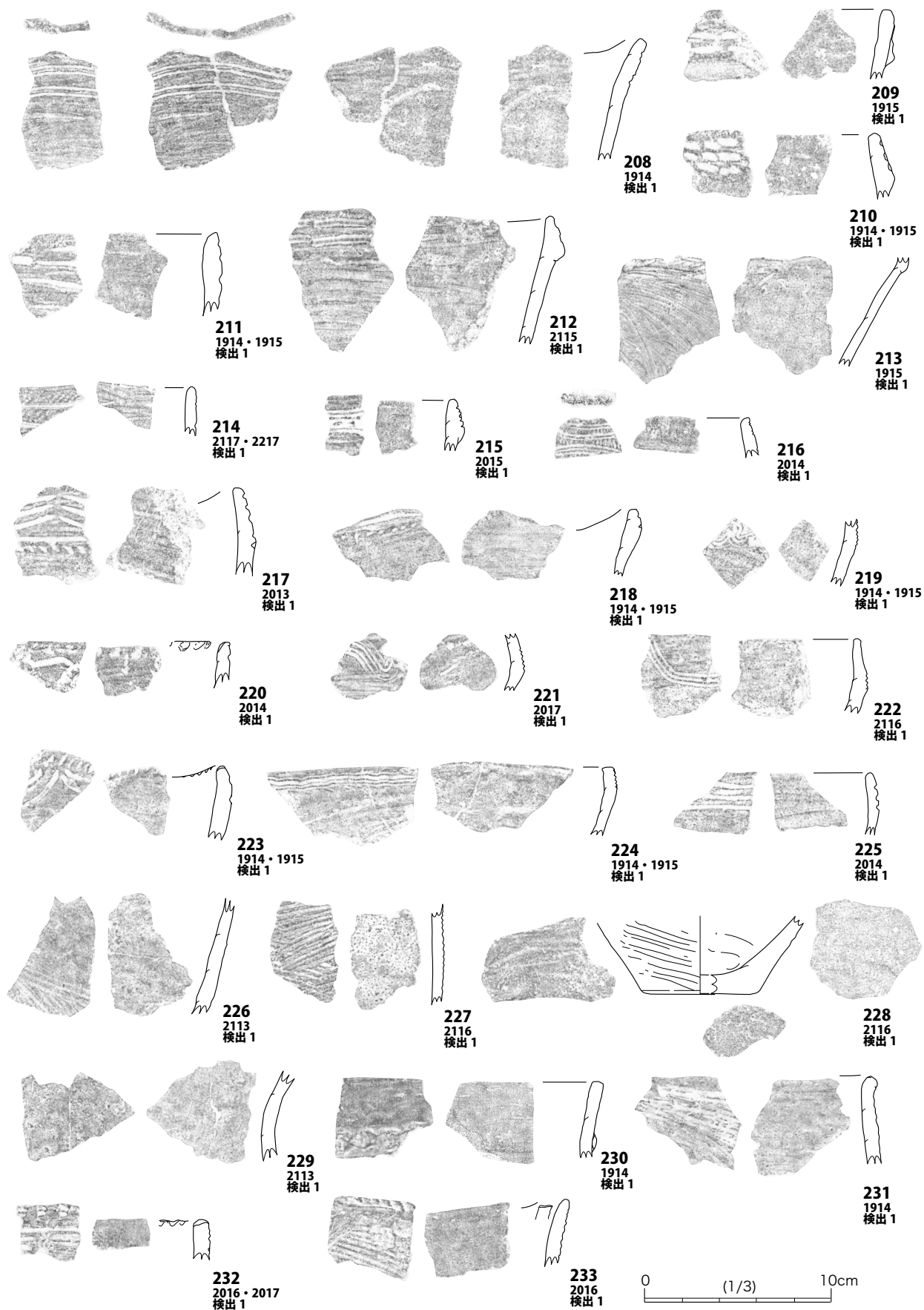
第 53 図 縄文土器 9



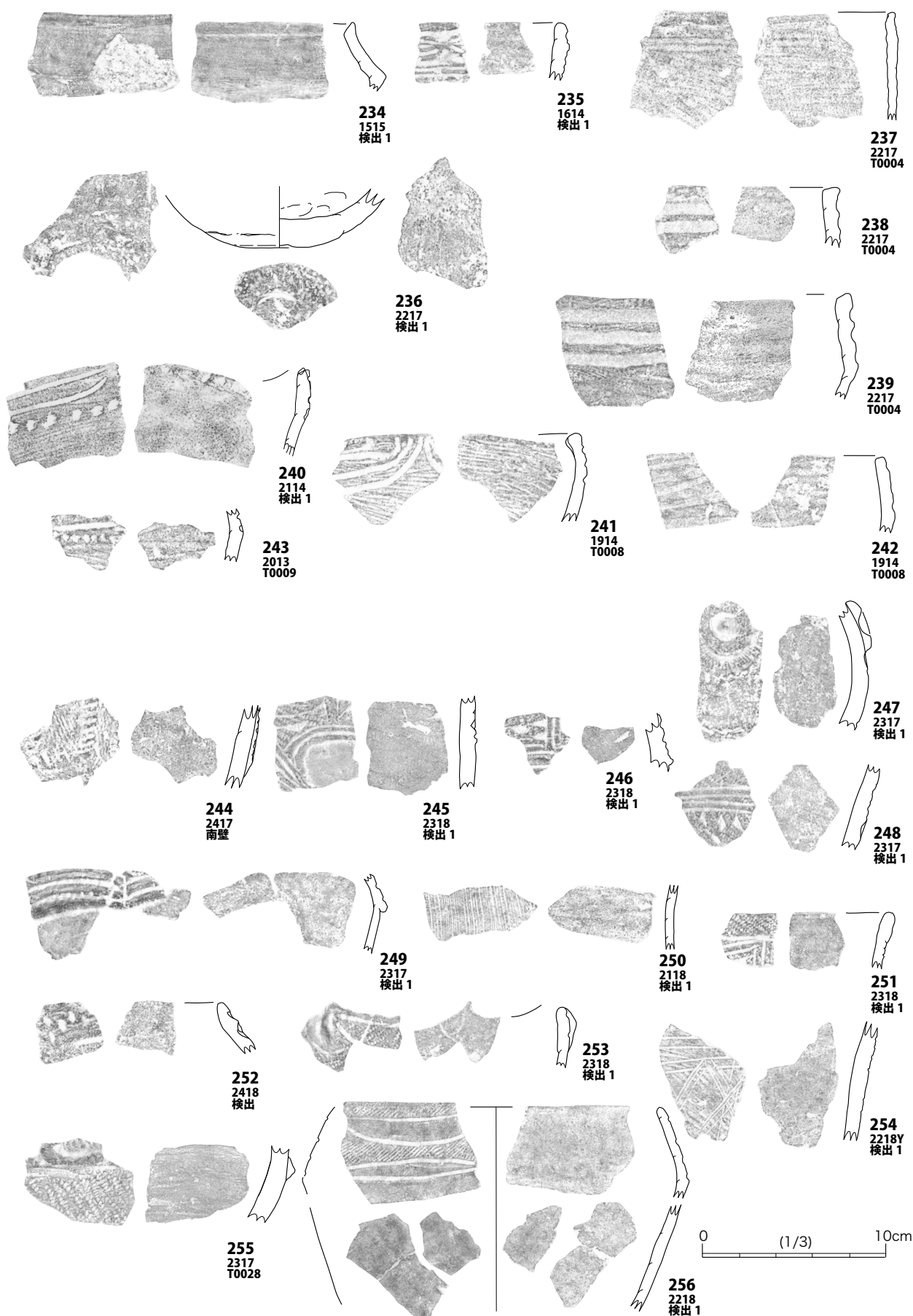
第 54 図 縄文土器 10



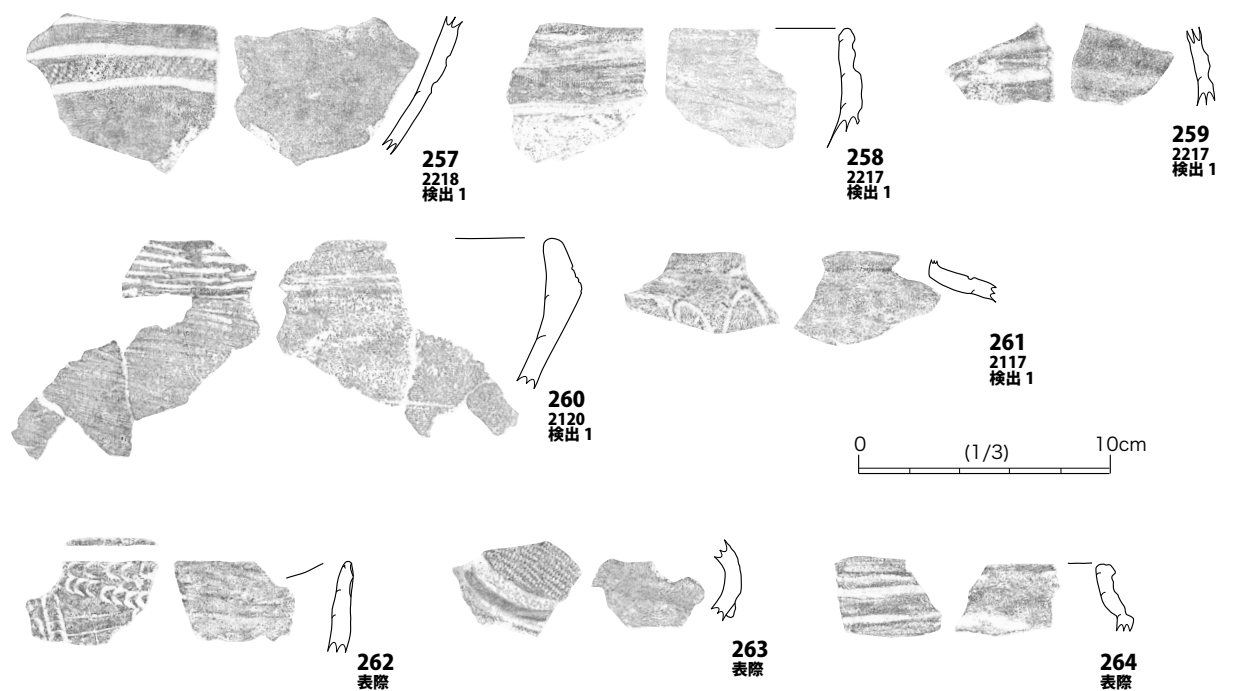
第 55 図 縄文土器 11



第 56 図 縄文土器 12

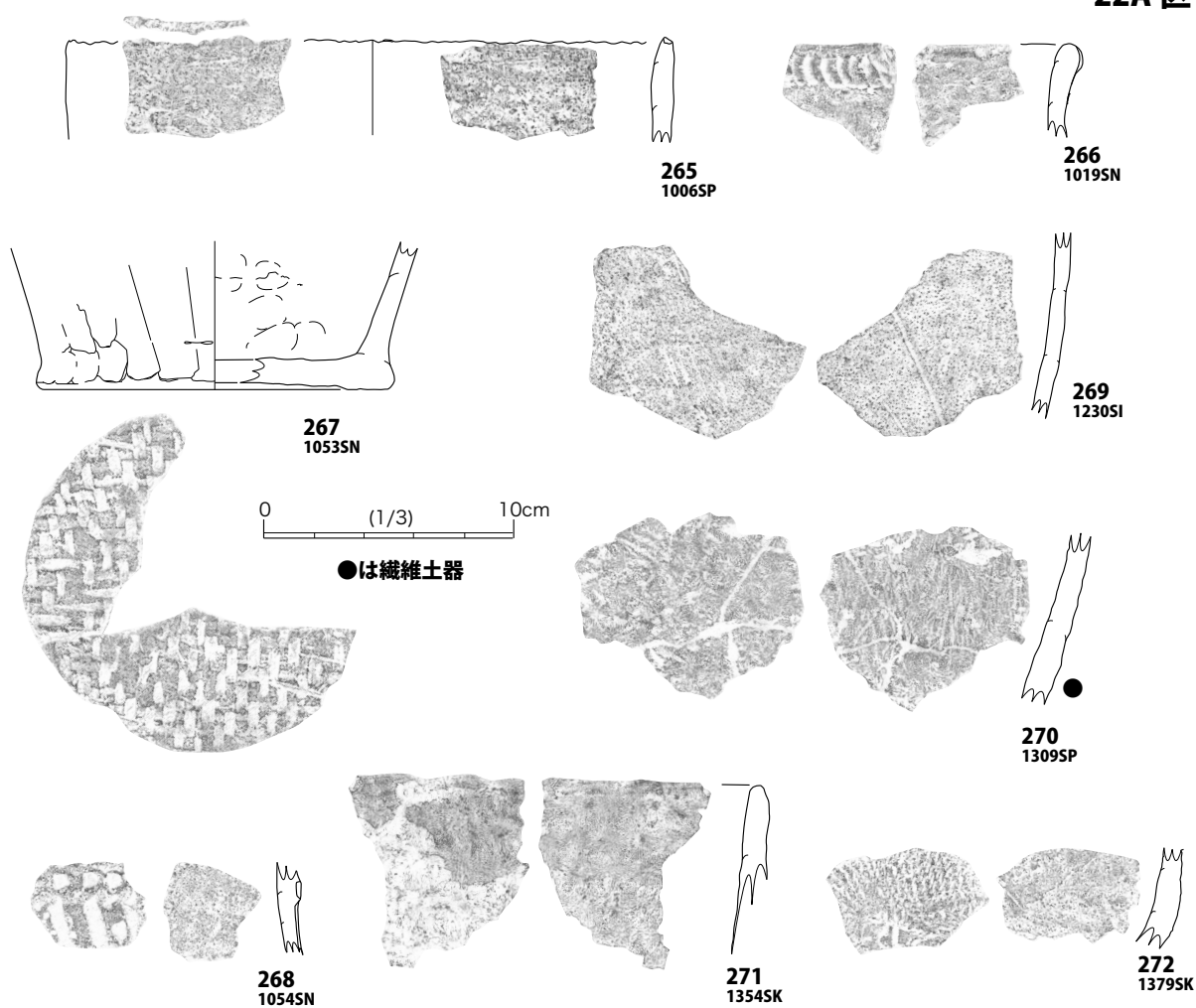


第 57 図 縄文土器 13

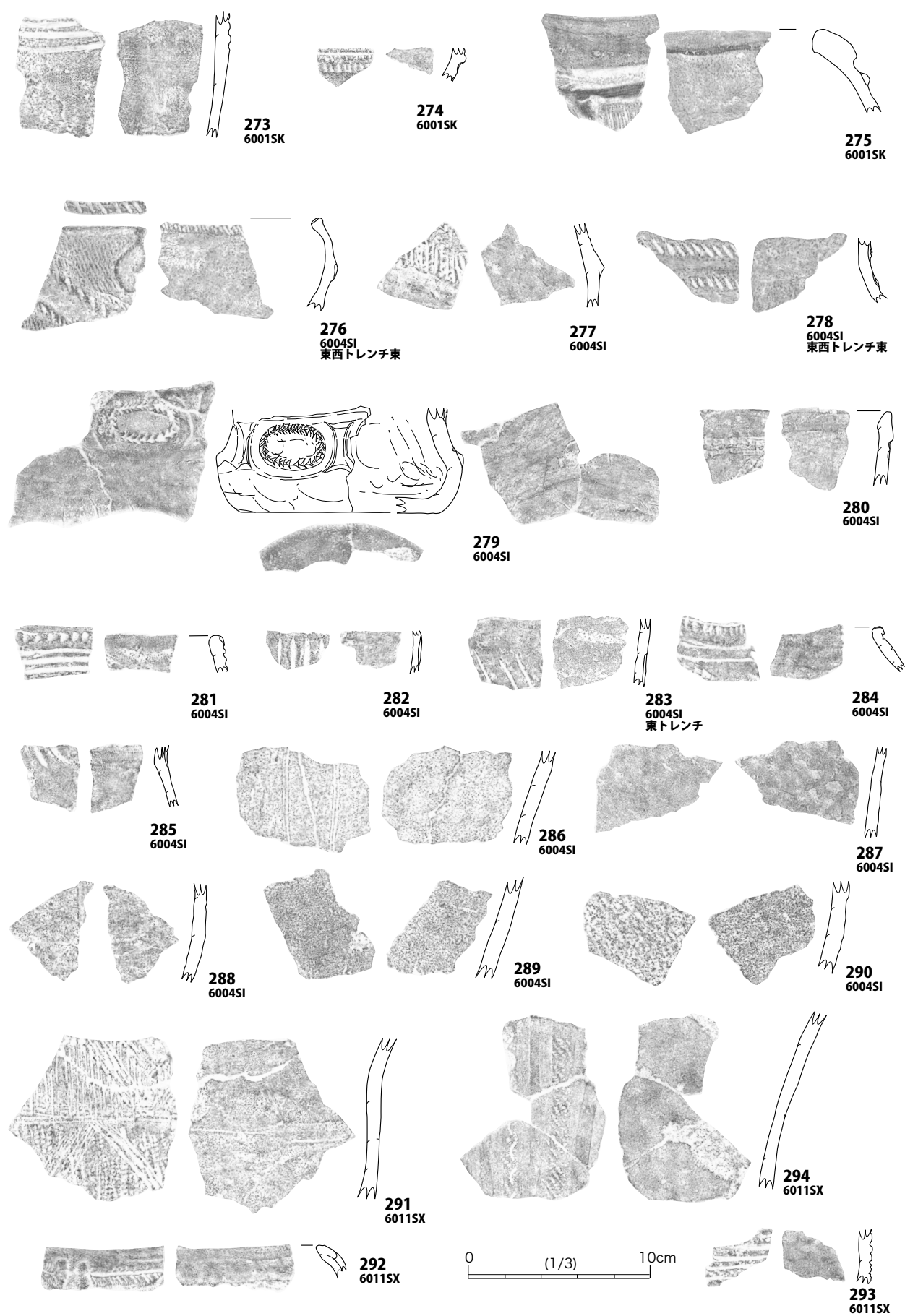


21 区

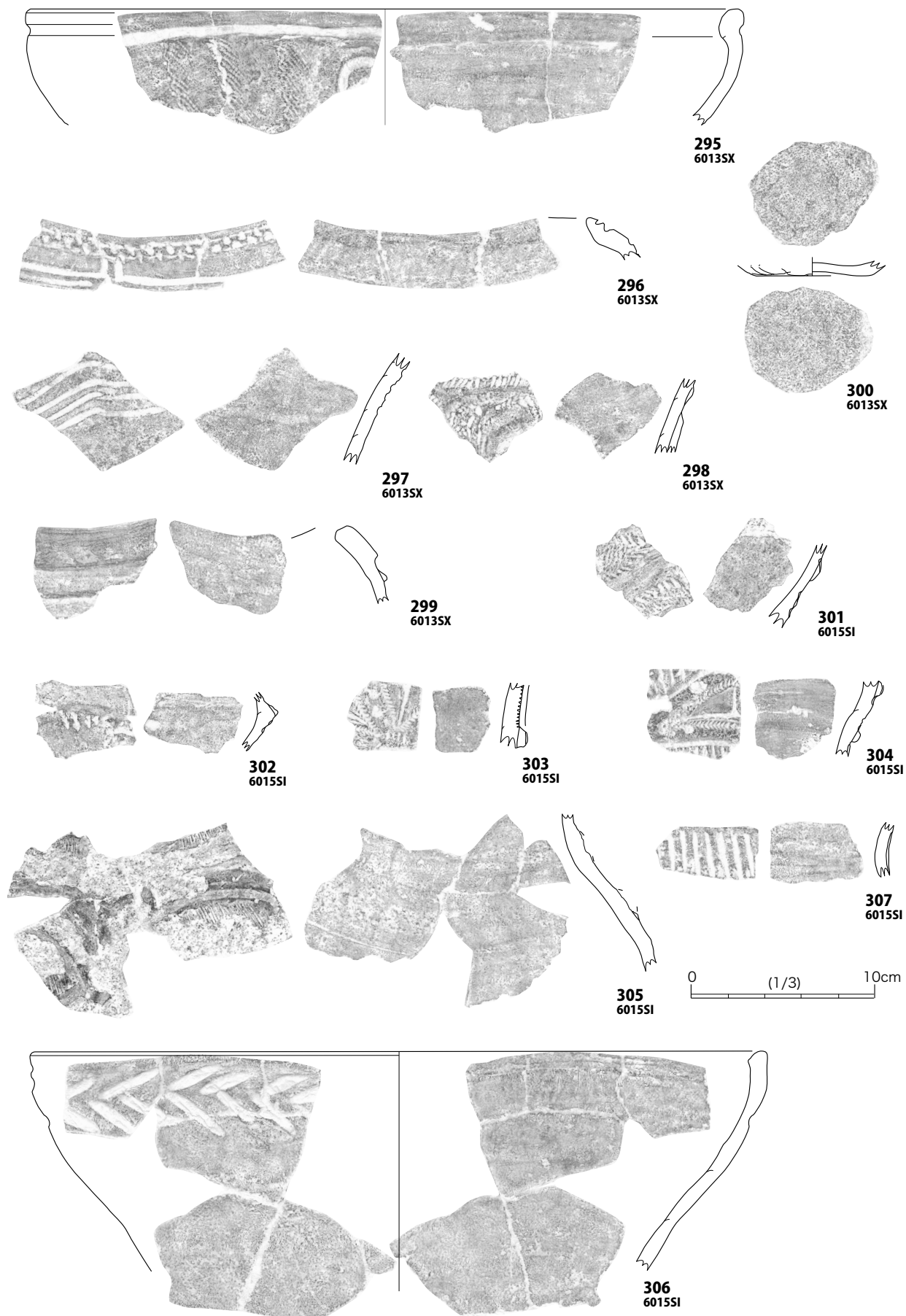
22A 区



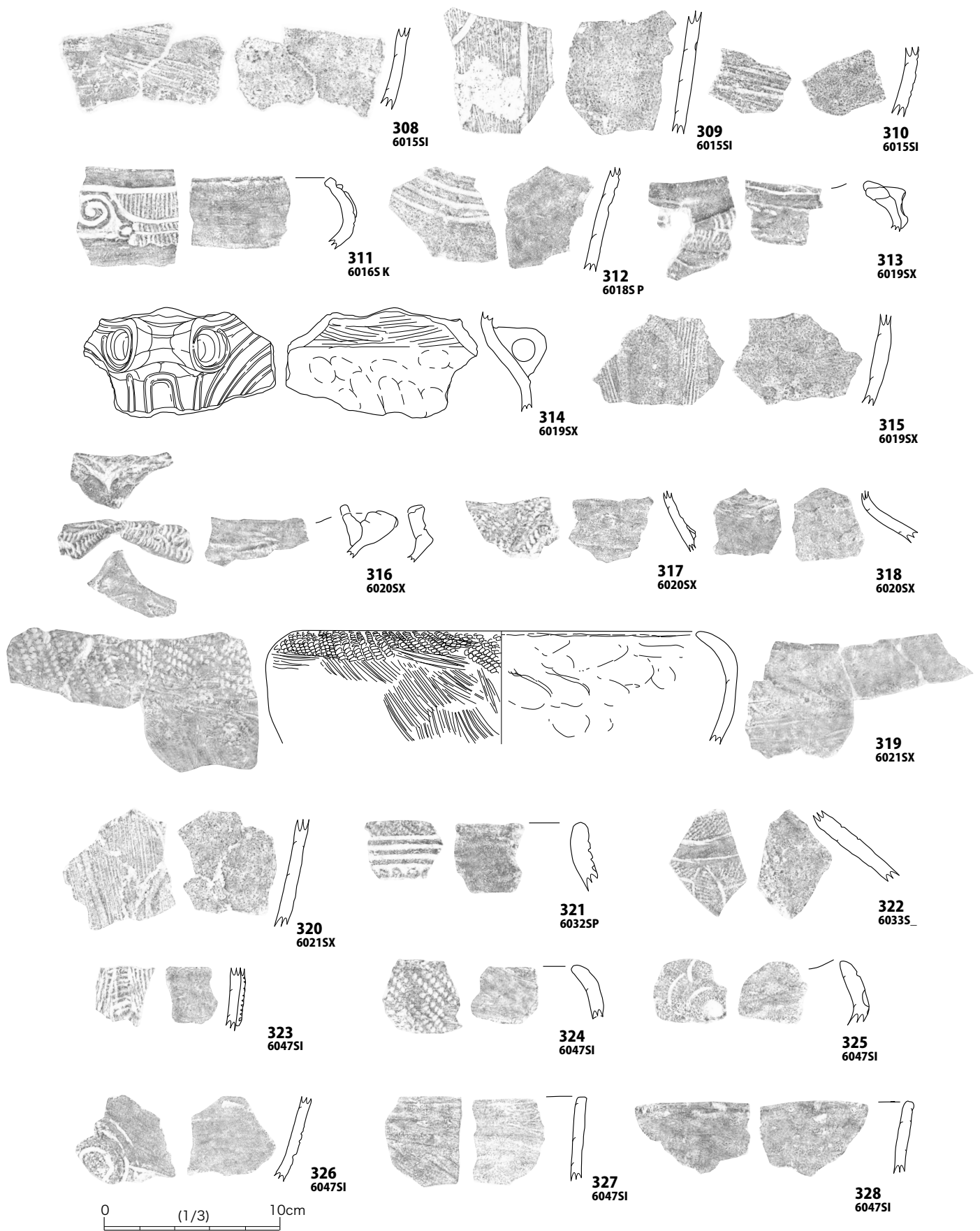
第 58 図 縄文土器 14



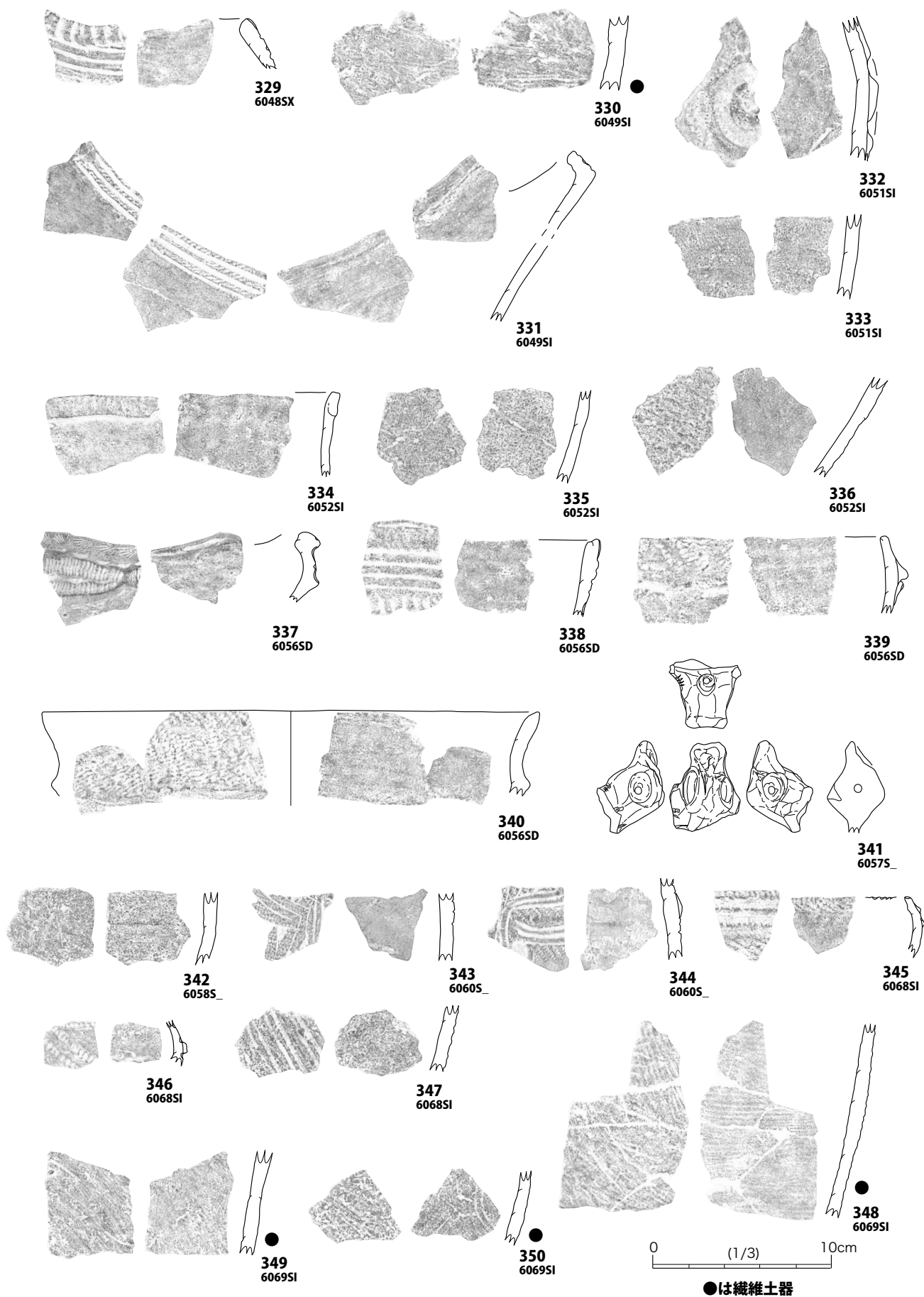
第 59 図 縄文土器 15



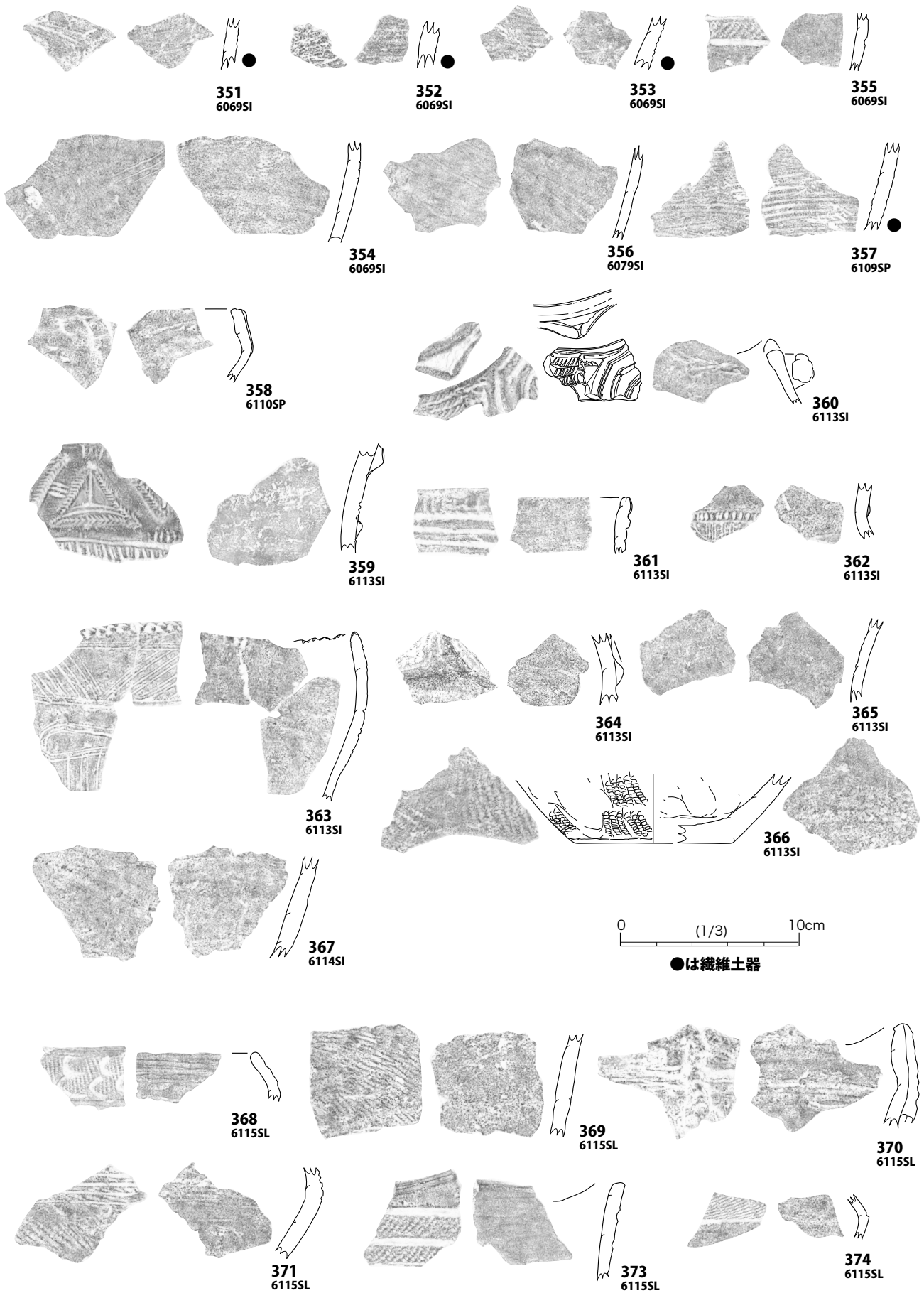
第 60 図 縄文土器 16



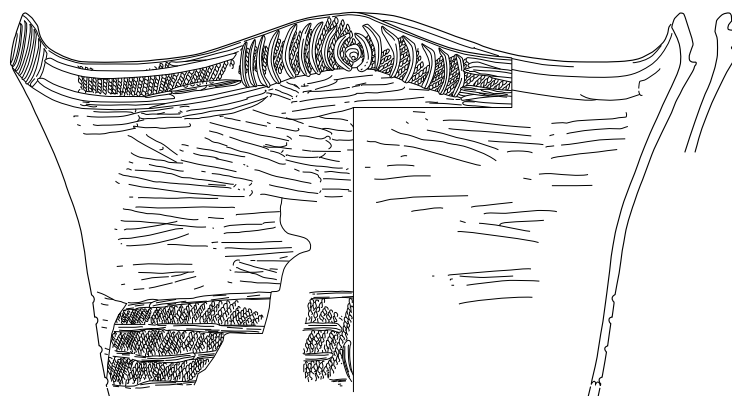
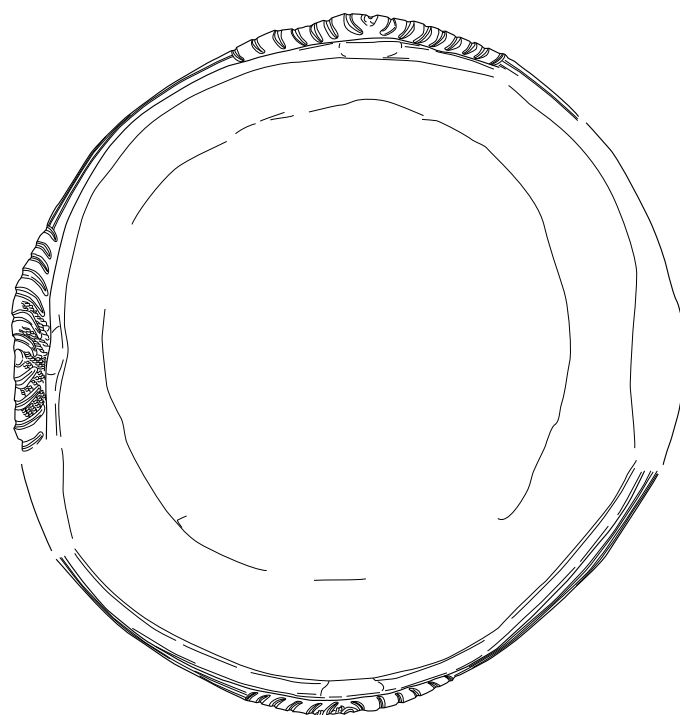
第 61 図 縄文土器 17



第 62 図 縄文土器 18



第 63 図 縄文土器 19

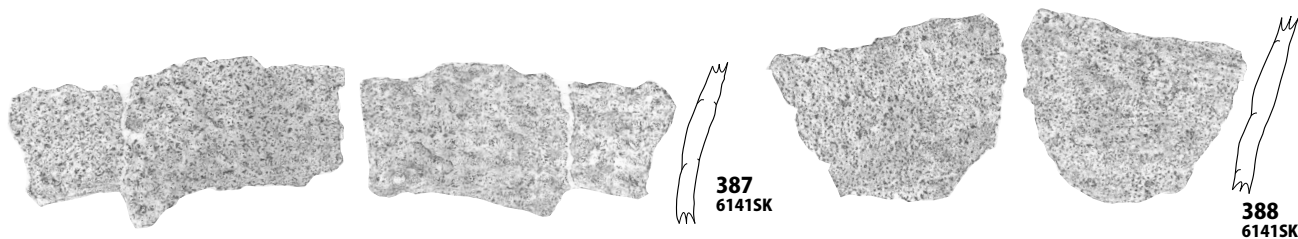
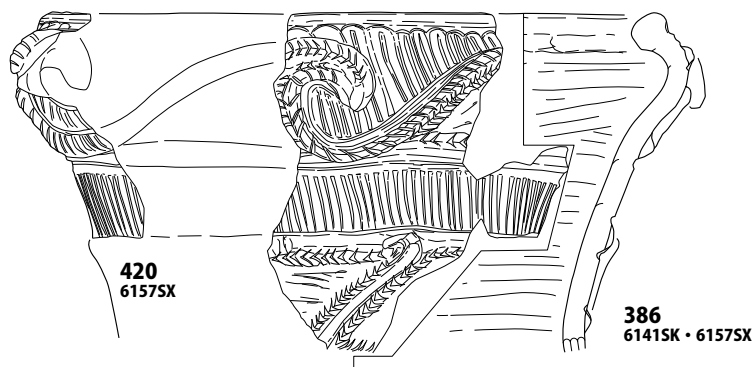
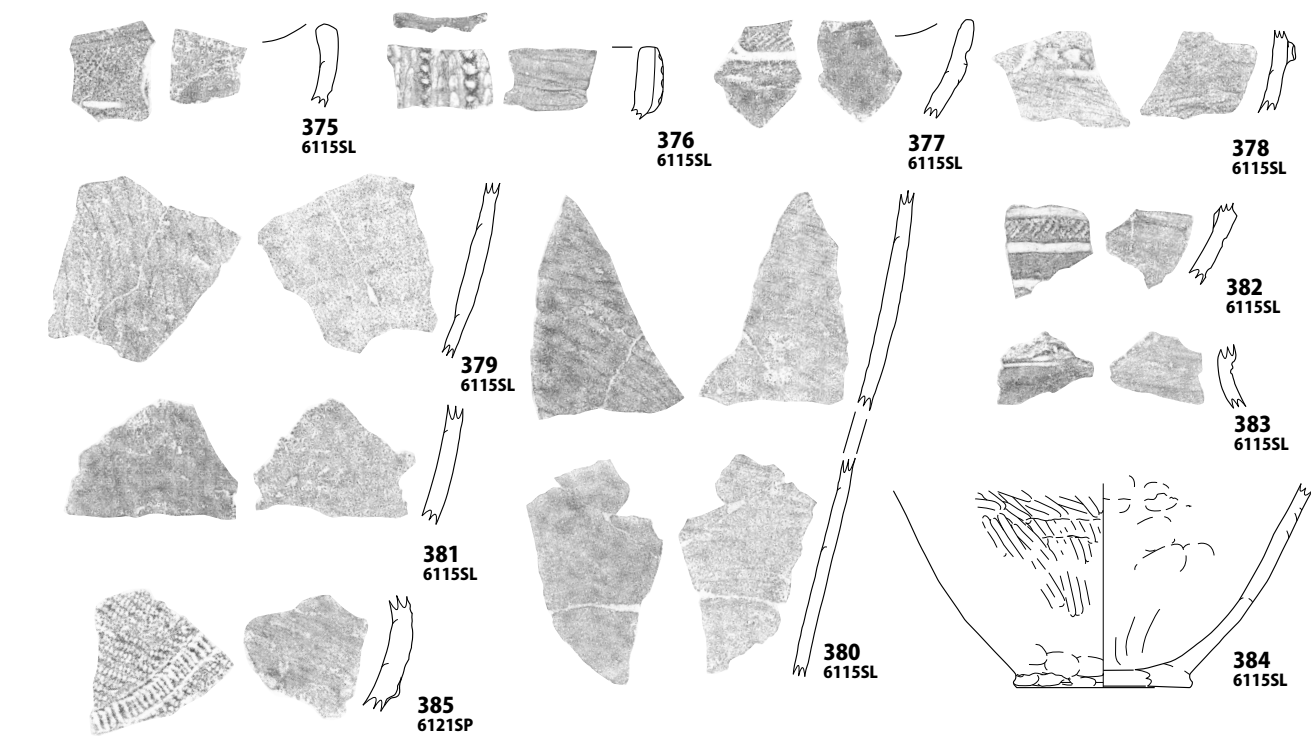


372
6115SL

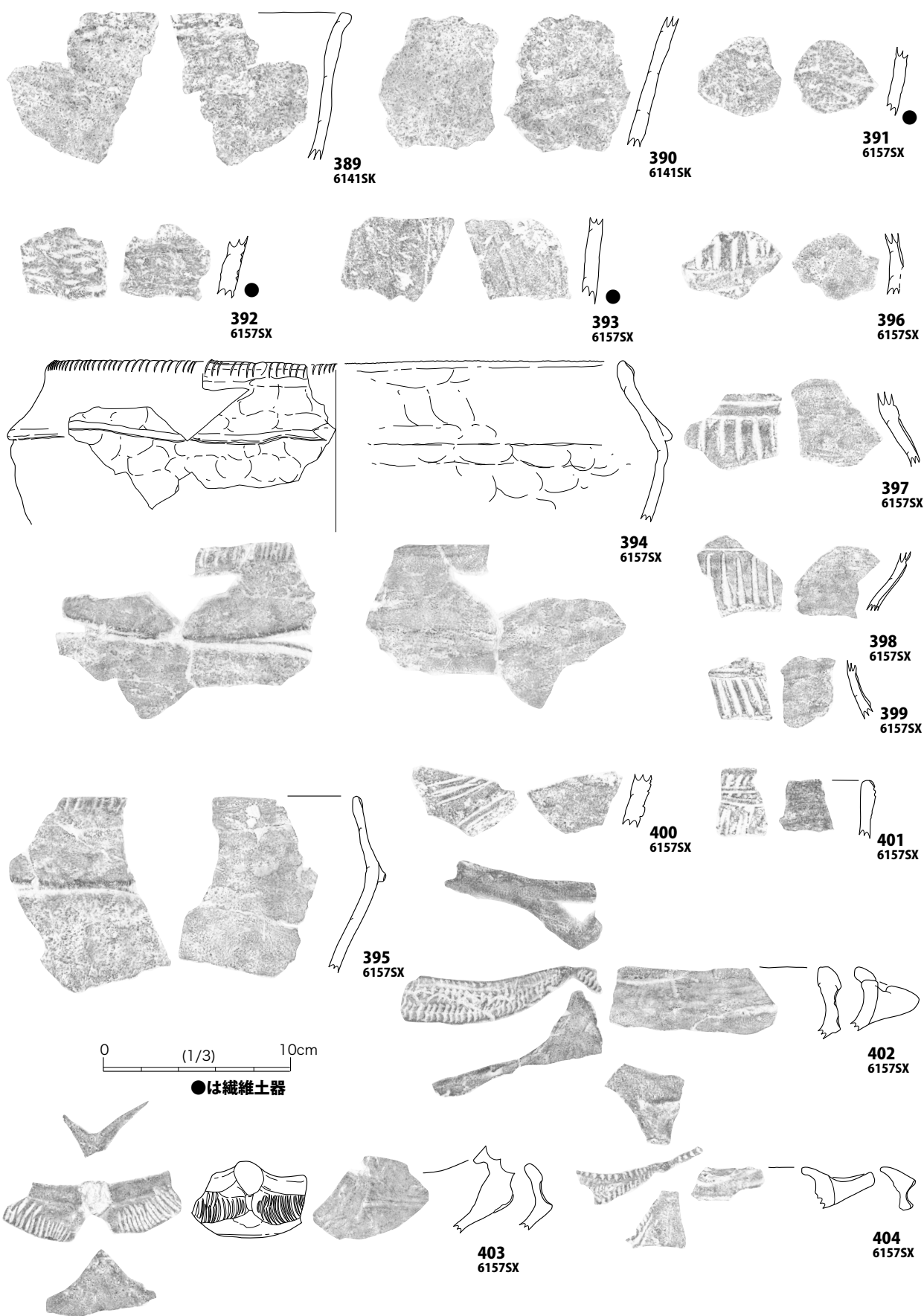


0 (1/4) 20cm

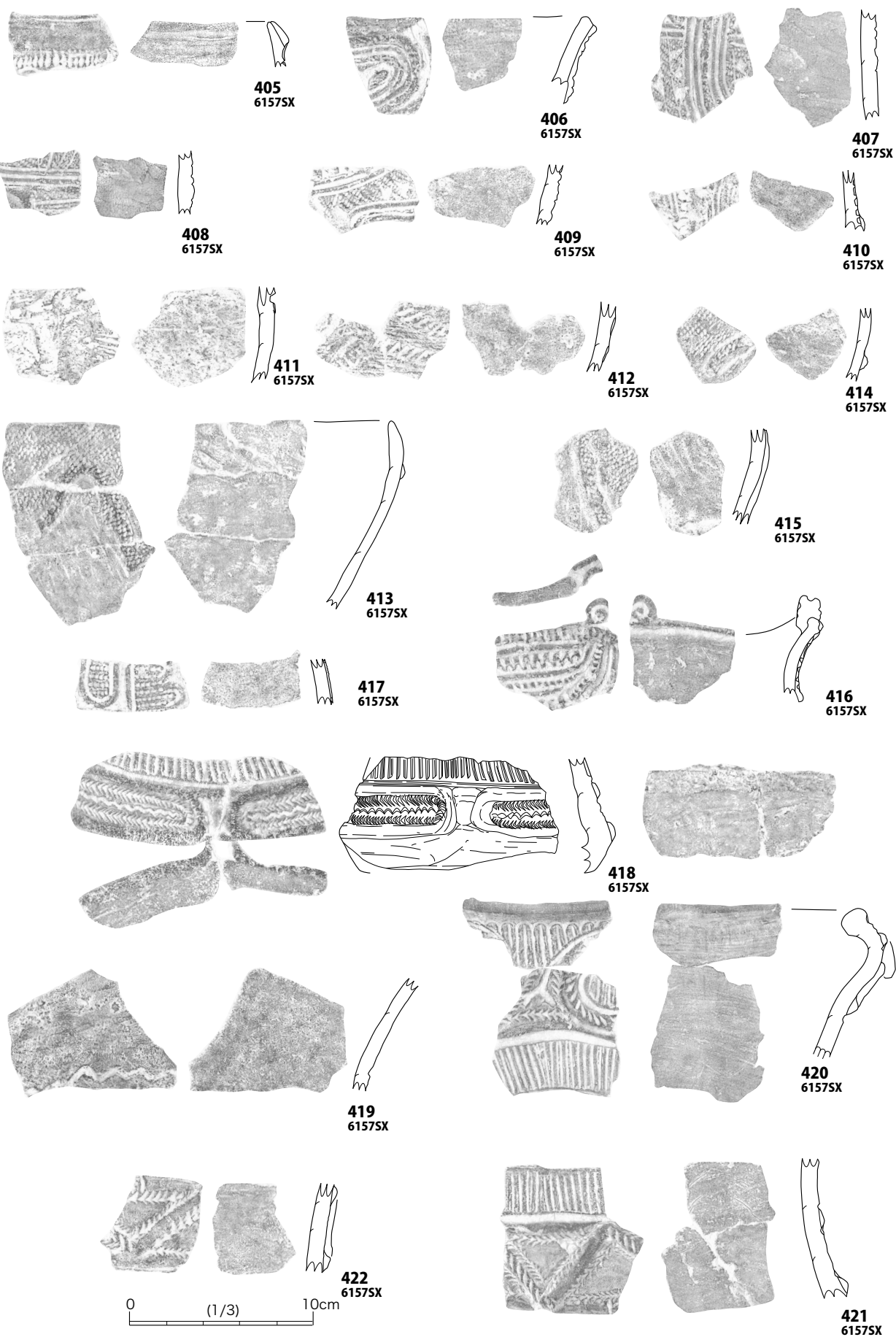
第 64 図 縄文土器 20



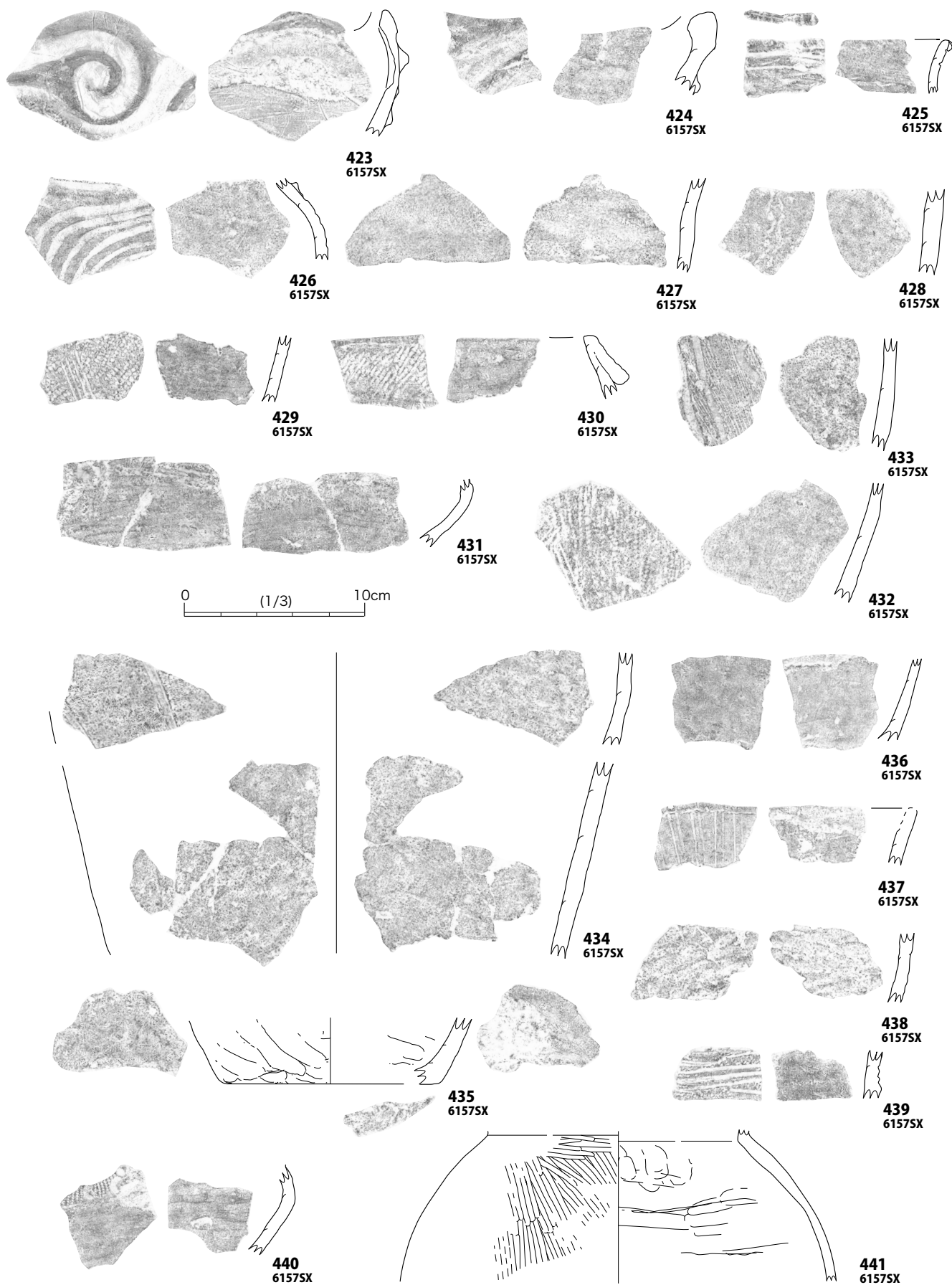
第 65 図 縄文土器 21



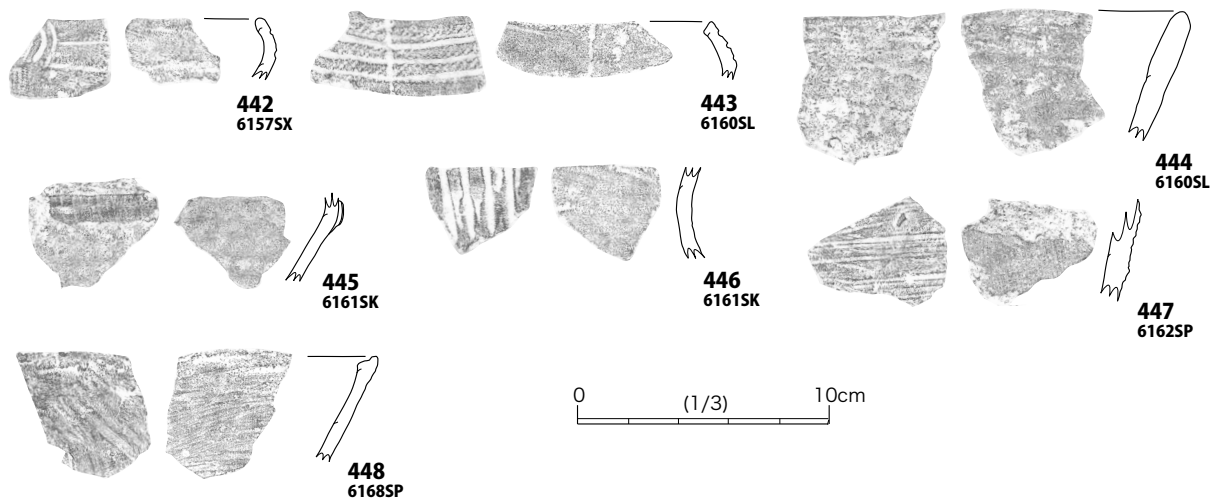
第 66 図 縄文土器 22



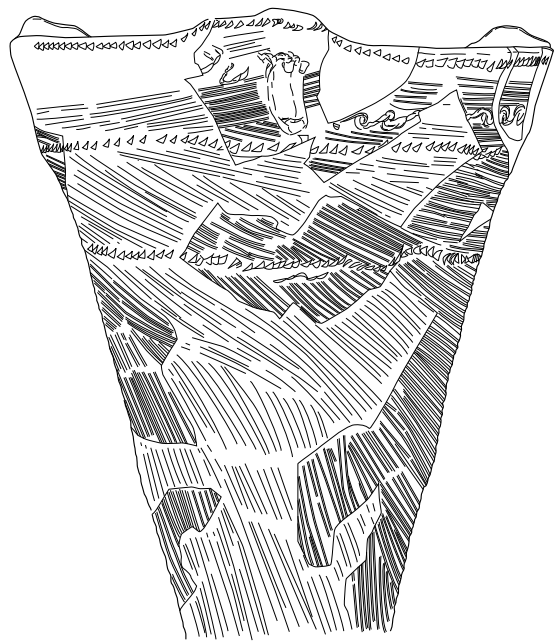
第 67 図 縄文土器 23



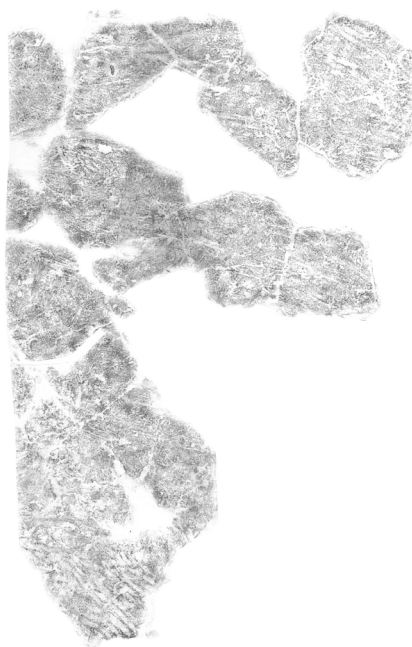
第 68 図 縄文土器 24



第 69 図 縄文土器 25



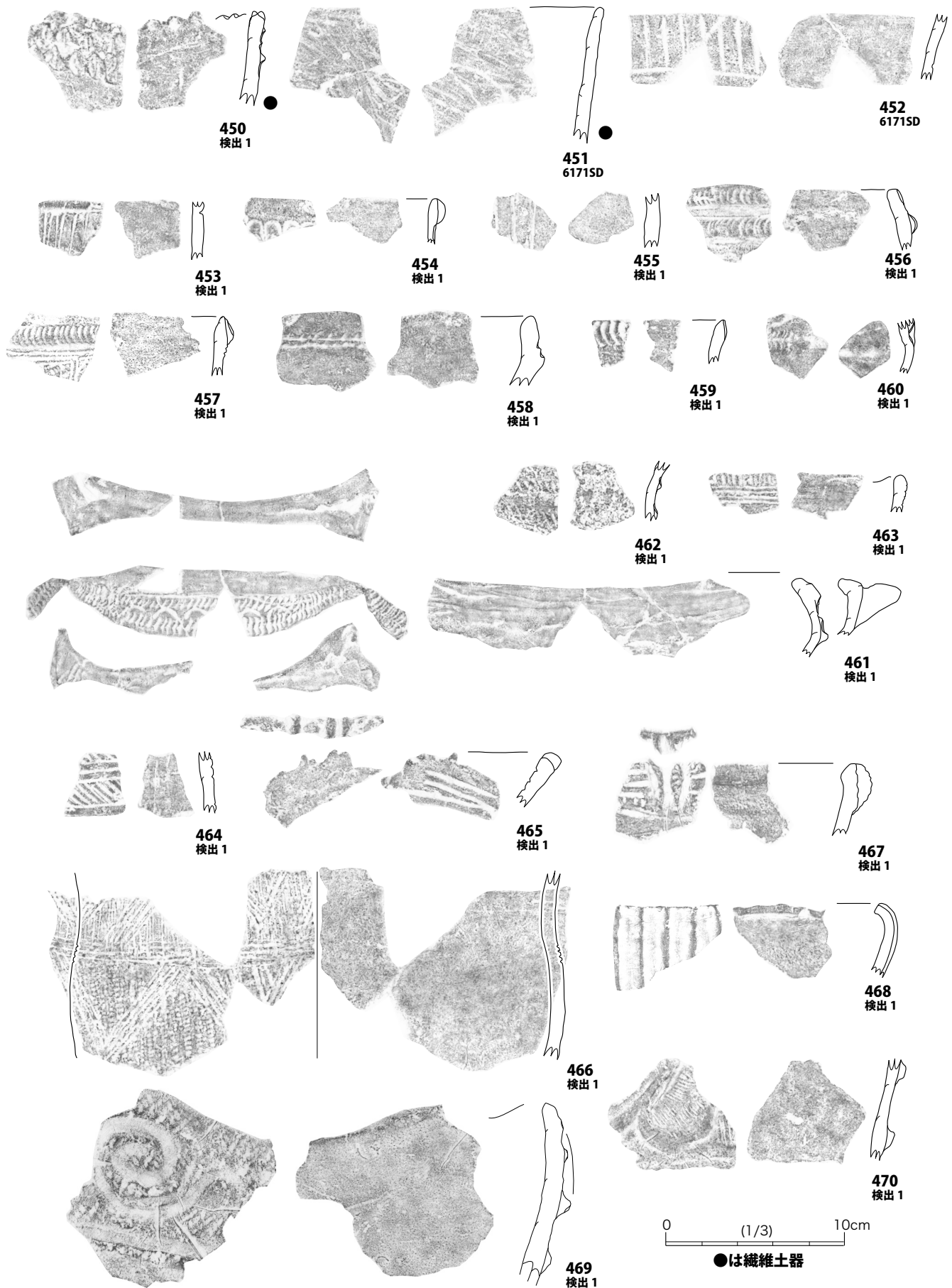
449
6170SX



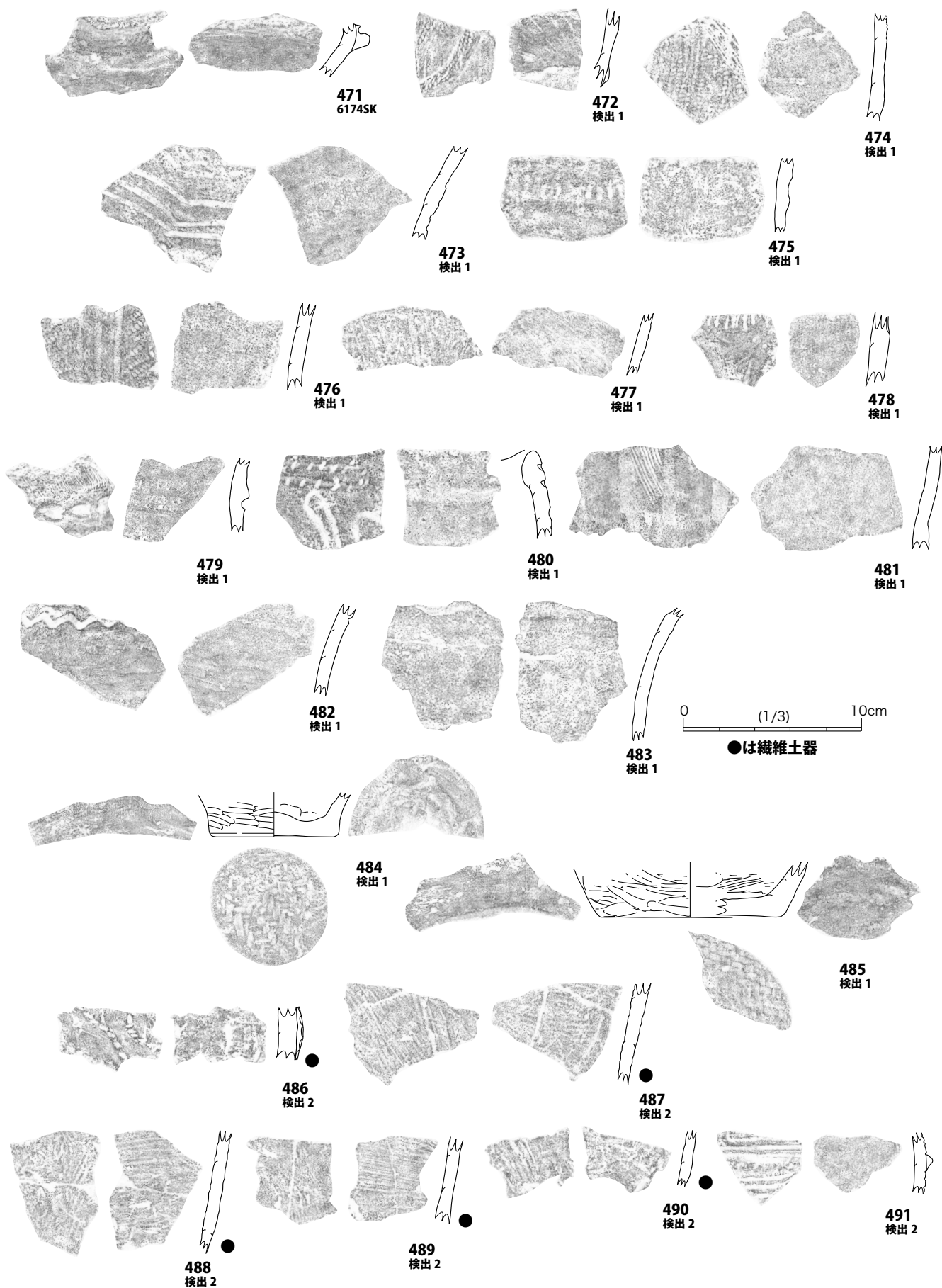
0 (1/4) 20cm

●は縄文土器

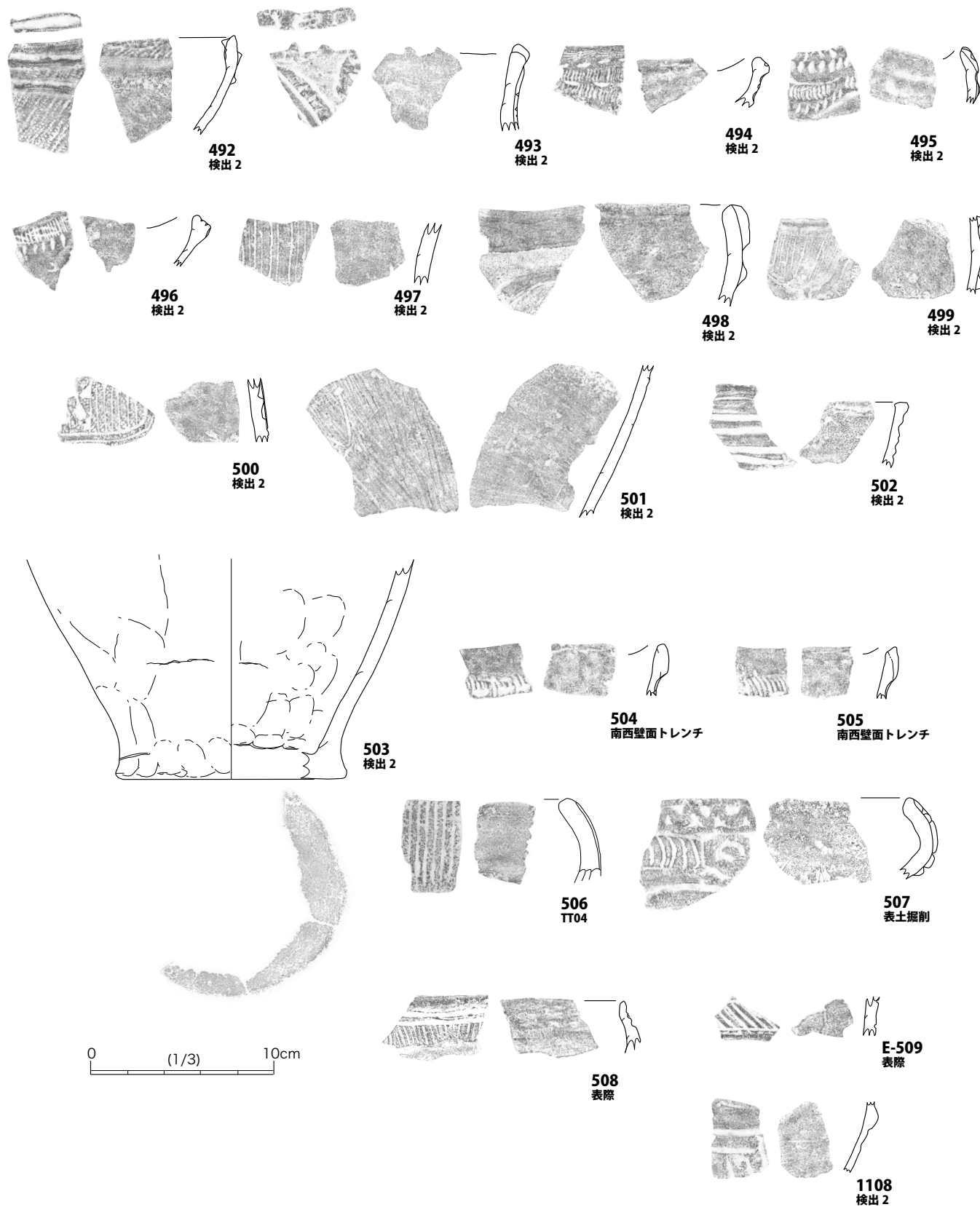
第 70 図 縄文土器 26



第 71 図 縄文土器 27



第 72 図 縄文土器 28



第 73 図 縄文土器 29

が横に二段展開し、その最下段は上方弧線状に連続しているものである。口縁端部外面から1段目の貼付隆帯までに半截竹管状工具によるカマボコ状の隆帯が集中的に施されている。76は口縁から胴部への屈曲部に肥厚させるような貼付がある。その上に半截竹管状工具によるカマボコ状の沈線と地文として縄文RLが認められる。131は胴部下半へと向かう胴部片である。外面には末広がり貼付隆帯、沈線による区画、半截竹管状工具による集合沈線が認められる。166は半截竹管状工具による集合沈線が山形になるように施されている。口縁端部上面は沈線断面のように深く凹む。167は口縁部下の貼付によって屈折器形の効果を出している。その上に口縁部外面には半截竹管状工具による沈線と縄文RLが施されている。170は半截竹管状工具による短沈線が縦位方向に認められる。249は胴部屈曲部の外面に貼付隆帯が施され、それに平行する形で連続した下方弧文状に沈線が横位に展開する。282は半截竹管状工具によるカマボコ状の短沈線が集中して縦方向に展開する。284は口縁端部外面に爪形刺突のある貼付隆帯が施されており、それに平行して半截竹管状工具によるカマボコ状沈線が展開する。285は斜方向の集中した平行沈線が認められるものである。293は半截竹管状工具によるカマボコ状の短沈線に縄文RLが地文として認められる。307・396・397・398・399・446・452・453は半截竹管状工具によるカマボコ状の短沈線が集中して縦方向に展開する。同工具による横位に展開する沈線と文様構成としてはセットと考えられる。400は半截竹管状工具によるカマボコ状の短沈線が斜方向に展開する。425は口縁端部に貼付隆帯、その下に平行して半截竹管状工具による沈線が施される。口縁端部上端には

連続した爪形の刺突列が施されている。454は口縁端部外面の貼付の下、半截竹管状工具によるカマボコ状の集合沈線が施されている。集合沈線の上端は逆U状に閉じる形となっている。455は半截竹管状工具によるカマボコ状の短沈線が集中して縦方向に展開する。463は口縁端部には連続した爪形文を施し、直下には半截竹管状工具による沈線が展開する。1108は半截竹管状工具によるカマボコ状の短沈線が横位にそして縦方向に短沈線が展開する。

第3群土器 4b 【319・324】

319・324は内湾する器形で、口縁端部外面に縄文RLが施されている。外面の下半に工具痕が顕著に認められる。器面内面にはナデ・オサエが主体である。

第3群土器 4c 【334】

334は口縁端部外面に低位の貼付隆帯が認められる。器面調整はナデが主体である。

第3群土器 4d 【410】

410は半截竹管状工具による刺突列をもつ隆帯をもとに併走する形で半截竹管状工具による集合沈線が展開する。

第3群土器 4e 【426】

426は胴部の屈曲部部分片で、横に展開する貼付隆帯と弧状を呈する集合沈線で、三叉状の意匠を呈していたと考えられる。

第3群土器 5

隆帯脇の沈線内や区画された凹み内に爪形をはじめとする連続した刺突列が認められることを特徴とするもので、北屋敷式Ⅱ式に属するものと考えられる。さらに以下の様に分類できる。

第3群土器 5a 【18・193・346】

18は半截竹管状工具によるカマボコ状の沈線と脇に爪形の連続刺突が認められる。北屋敷Ⅱ a

式と考えられる。三角形の区画を呈するものである。193 は連続する爪形文をもつ太沈線による三角形の区画が見られる。346 は貼付隆帯脇に爪形の刺突列が認められる。三角形区画を構成している。

第3群土器 5b 【82・193・245・246・248・274・280・292・302・313・316・337・346・402・403・404・405・458・460・461・475・494・495・496・504・505】

今回報告する北屋敷式の主体をなすもので、多くは北屋敷Ⅱc式に当たると考えられる。82 は口縁部片で太沈線内に連続した爪形文が認められる。274 は外面に半截竹管状工具による隆帯と際に爪形刺突列を持つ沈線が認められる。280 は口縁片で、外面に連続刺突のある沈線が施されている。292 は口縁部片で、縦方向に貼付隆帯と横方向の太沈線内に連続した爪形刺突列が施されている。302 は胴部への屈曲部付近で、貼付に加えて、横位へ展開する連続刺突列が施されている。313 は貼付隆帯脇に爪形の連続刺突を含む太沈線が認められる。316 は口縁部片で、貼付隆帯脇に連続の爪形文列2条と、弧線が展開する。貼付部は外面に向かって凸状を呈するもので、上面観では三叉状の凹みが形成されている。337 は外面には貼付隆帯と区画された内部には爪形の刺突列が2条施されている。端部上面にはハイガイによる連続押圧が認められる。402・403・404 は、貼付区画内に爪形の連続刺突が認められる。貼付突起が外面に凸状に施されているもので、上面観では三叉状の凹みが形成されている。405 は貼付区画脇に爪形の連続刺突列が施されている。458 は口縁屈折部に爪形の押し引き連続刺突のある沈線が施される。460 にも貼付隆帯脇に連続した爪形文が施されている。461 は、貼付区画内に

爪形の連続刺突と下方弧文が認められる。貼付突起が外面に凸状に施されているもので、上面観では三叉状の凹みが形成されている。475 は連続した爪形刺突列をもつ太沈線が認められる。494 は貼付区画内に連続する爪形文列と刺突列が認められる。さらに口縁端部上面にはハイガイの横圧列を見ることができる。495 は刻目を持つ貼付隆帯区画内に連続した爪形文列が認められ、さらに口縁端部上面にも爪形の刺突列を見ることができる。496 も貼付隆帯で区画された部分に爪形刺突列と弧線が連続して施されており、屈折部にも刺突列が認められる。504・505 はともに口縁部片で、太沈線内に連続した爪形文が認められる。

第3群土器 5c 【277】

277 は貼付隆帯の片側脇に長目の爪形刺突列が施されている。さらに脇には縄文rが施されており、隆帯と刺突列による区画内に施されていた可能性もある。

第3群土器 5d 【245・246】

245・246 は半截竹管状工具による隆帯と沈線で文様が構成されている。三叉状の挟り入れが間隔を空けて連続的に施されている。いずれも縄文RLが地文となっている。248 も半截竹管状工具による隆帯と沈線と三叉状の挟り入れが認められる。

第3群土器 5e 【283】

283 は斜格子状の沈線が施されているものである。

第3群土器 6

中部高地および信州系土器土器を集めた。勝坂式系・曾利式系の1群である。胎色はいずれも赤褐色を基調としている。さらに以下の様に分類できる。

第3群土器 6a 【168・247・279・303・304・

321・359・417・418・420・421・422・506】

多くは藤内Ⅱ式に比定されるものと考えられる。168は貼付隆帯による三叉文と横方向に向かう集合沈線が施されている。247は大きなボタン状の貼付と同心円状に貼付けられた隆帯文の上に連続した爪形文が施されている。また、鋸歯状の垂下沈線も認められる。279は胴部下半から底部にかけての部分である。外面には貼付隆帯脇に連続した爪形文によって隅丸方形状の区画が形成されている。303は貼付隆帯と脇に連続した細かい爪形文が施されている。304は貼付隆帯と脇に連続した細かい爪形文、さらには半截竹管状工具によるカマボコ状沈線が認められ、三角形の区画が形成されている中に三叉状の沈線表現が認められる。321は半截竹管状工具による集合沈線と工具による連続刺突が施されている。口縁端部外面には縄文RLが施されている。359は貼付隆帯の脇に爪形の細かい連続刺突、さらに半截竹管状工具による集合沈線によって三角形区画が作られている。この区画内には沈線による三叉表現が確認できる。417は半截竹管状工具による連続刺突列と貼付隆帯による区画が認められる・418は半截竹管状工具による集合沈線と貼付隆帯脇の細かい爪形刺突列により、長楕円の区画が作られている。区画内には波状沈線が施されている。420は刻目をもつ貼付隆帯による横位の入組文状の展開が認められる。隆帯の切れ目に沈線による三叉状の表現が確認できる。さらに加えて、半截竹管状工具によるカマボコ状の集合沈線と隆帯脇の細かい爪形刺突列が認められる。421は半截竹管状工具によるカマボコ状の集合沈線と貼付隆帯脇の細かい爪形刺突列が確認できる。422は貼付隆帯脇に爪形刺突列が認められる。421・422ともに三角形区画が展開する。506は

半截竹管状工具による集合沈線が認められる。

第3群土器 6b【132・133・386】

井戸尻式に比定されるものである。132は半截竹管状工具による短沈線で器面全体を覆っており、刻目を持つ貼付隆帯が横方向に展開する。但し、入組状を呈することはなくN字状となっていることが特徴である。133は半截竹管状工具による短沈線が密に施されている。386は刻目をもつ貼付隆帯が入り組み状に横展開する。切れ目には三叉状の線刻が施されている。半截竹管状工具による集合沈線で器面全体が覆われており、三角形区画を形成している隆帯脇には細かい爪形刺突列が認められる。

第3群土器 6c【468】

口縁端部から粘土の縦位貼付が連続して施されているものである。南信州の大門原式土器に比定される。

第3群土器 7

船元・里木系土器であるが、385は船元Ⅰ式に、その他多くは船元Ⅲ式に比定されると考えられる。文様からさらに以下のように分類される。

第3群土器 7a【7・135・291・466】

撚糸文を地文とするものである。7はやや内湾する器形の口縁端部上面が凹み状を呈するもので、器面には撚糸文が施されている。135は撚糸地文に平行沈線による鋸歯文が施されている。291は撚糸文を地文として、半截竹管状工具による幾何学的な文様が施されているものである。466は撚糸文を地文として、半截竹管状工具による幾何学的文様が展開している。

第3群土器 7b【8・9・179・180・244・276・278・298・301・317・323・371・385・412・462・474】

貼付隆帯および櫛描文を基調とするものであ

る。8は貼付の微隆起線文に沿って櫛描文が施されている。地文には縄文RLが施されている。9は櫛描文が認められる。179・180は貼付隆帯および隆帯に平行する集合沈線が施されており、植物穂による擬縄文が地文となっている。244は刻目をもつ貼付隆帯が縦位に展開し、植物穂による擬縄文が地文となっている。276は刻目をもつ貼付隆帯に植物穂による擬縄文が地文として認められる。また口縁端部上端には工具による連続した刻目が展開する。278は刻目をもつ貼付隆帯が2条、横位に展開する。298・301・317は連続刺突をもつ貼付隆帯が認められるもので、植物穂による擬縄文が地文となっている。323は刻目をもつ貼付隆帯とそれに平行する形の櫛描文が認められる。385は刻目をもつ貼付隆帯があり、縄文RLを地文とする。412は刻目をもつ貼付隆帯があり、植物穂による擬縄文を地文とする。462は爪形刺突のある貼付隆帯が2条認められ、植物穂による擬縄文を地文としている。474は縄文LRを地文として櫛描文が認められる。

第3群土器 7c【254・432】

縄文を地文とするものである。254は集合沈線による斜格子状文が認められるもので、縄文rを地文とする。432は縄文RLに、半截竹管状工具による沈線が描かれている。

第3群土器 8【464・509】

五領ケ台式に比定される土器群である。464・509ともに半截竹管状工具によるカマボコ状の集合沈線が施されているもので、短い集合沈線が密で、斜行していることが特徴である。

第3群土器 9【497】

上記で分類できないものを集めた。497は半截竹管状工具による集合沈線であるが、線が浅い。

第4類土器 縄文時代中期後半の土器

第4群土器 1

中富Ⅰ～Ⅲ式と考えられる土器群である。272が中富Ⅰ～Ⅱ式に属する可能性があるほかは、ほぼ中富Ⅲ式に当たると考えられる。文様の構成から下記のように分類される。

第4群土器 1a【141・311】

141はキャリパー器形の口縁部である。外面には貼付微隆帯と連続刺突が認められる。円状の区画内には縄文地文が認められる。311も同様の器形で、貼付隆帯による渦巻、沈線区画内に縄文Iが充填されている。

第4群土器 1b【171・296・507】

171はキャリパー器形の口縁部である。外面に交互刺突による波状文が施されている。296は同様の器形で、交互刺突による波状文のほか、下方で方形に区画するような2条の沈線が展開する。507も同様の器形で、交互刺突による波状文の下、貼付粘土による渦巻文と短沈線による充填が認められる。

第4群土器 1c【508】

508はキャリパー器形の口縁部で、平行沈線および集合沈線が認められる。

第4群土器 1d【173】

173はキャリパー器形の口縁部である。小波状を呈する口縁部で、波頂部外面には沈線による同心円文が設けられ、連続刺突列や沈線が横方向に展開する。

第4群土器 1e【272】

272は胴部片で、外面には植物穂による擬縄文が認められる。

第4群土器 2【41・143・153・156・172・174・175・176・185・250・252・263・297・482】

中富Ⅳ・Ⅴ式、咲畑式と考えられる土器群である。中富Ⅴ式および咲畑式が主体である。

口縁部片は以下の通りである。41 は強いキャリパー器形の屈曲部付近で、沈線による上下の渦巻文が認められる。沈線による渦巻 153 はキャリパー器形の口縁部片で、波状を呈す。波頂部直下では沈線による渦巻文から垂下沈線へと続く。波長部すら沈線内に連続する爪形文が口縁部に沿って展開する。縄文 RL が施されている。172 は強い屈曲のキャリパー器形で、外面に凸状になる粘土の貼付がある。それを起点として太い竹管状工具による渦巻文や沈線区画が施される。区画内には縄文 RL が施されている。174 は太い 3 条の平行沈線と縄文 RL が施されている。185 は連続刺突をもつ太沈線と貼付隆帯が施されている。252 は工具刺突による波状文が見られる。

胴部片は以下の通りである。143 は平行する 2 条の貼付隆帯が大きな波状に横位に展開する。156 は縦方向に 3 条の平行沈線が垂下する。175 は交互刺突による波状文が横位に展開し、地文の縄文 RL 上には平行沈線が展開する。176 は胴部屈曲部に浅くて太い平行沈線が 2 条展開する。250 は外面に条線が施されている。263 は貼付隆帯の脇に沈線が施され、これらで形成される区画内に縄文 RL が充填される。297 は胴部屈曲部に 4 条の平行沈線で大きな波状が描かれている。419 は胴部中位で横方向に展開する波状文が認められる。482 は胴部屈曲部に横方向に展開する波状の太沈線が施されている。

第 4 群土器 3

神明式・取組式土器である。さらに下のように分類される。

第 4 群土器 3a 【364・413・414・415・472】

神明式である。364 は貼付隆帯と脇の太沈線

で方形区画された内部に縄文 LR が施されている。413・414・415・472 は鉢形を呈する器形で、太い貼り付け隆帯は波状を呈し、口縁端部から貼付隆帯までの区画を縄文 LR が施されている。

第 4 群土器 3b 【22・23・25・26・27・28・29・30・31・42・48・63・78・79・127・136・142・181・182・184・253・255・268・275・299・305・306・332・362・423・424・431・469・498】

取組式である。25 は口縁部片で貼付隆帯による渦巻文が認められる。26 は太い貼付隆帯区画内に短沈線による充填が認められる。27 は胴部片で貼付隆帯と集合沈線で弧線による文様が展開する。28 も胴部片で、貼付隆帯が横位に展開し、接続部では三叉状を形成する。縄文 RL を地文とする。29 は口縁部片で二条の貼付隆帯区画内に短沈線が充填されている。30 も胴部片で、平行沈線内に巻貝による連続刺突が施される。31 は口縁部にある羽根状の装飾で外面には沈線による区画が認められる。42 は胴部片で、撚糸文の地文に弧状の平行沈線が施されている。48 は波状を呈する口縁部片で外面には連続した爪形刺突の施された隆帯で装飾が構成されており、区画内には短沈線が充填されている。63 は胴部片で貼付隆帯による渦巻文とそれを起点にする放射状の集合沈線が見られる。78 は貼付隆帯と脇の太沈線による区画と縄文 LR が地文となっている。79 は口縁部片で太い貼付隆帯による区画が認められる。127・136 は口縁部片で高位の貼付隆帯による区画内に縄文 LR が充填されている。181 は口縁部で貼付隆帯による渦巻文が施されている。182 は胴部片で平行する太沈線が施されている。184 は口縁部片で太い貼付隆帯により区画が設けられている。253 は波頂部で口縁端部上面か

ら外面にかけて貼付隆帯が垂下する。外面には沈線区画があり、縄文 LR は地文として施されている。255 は胴部片で、貼付隆帯が長楕円形に配し、区画内に刺突列が施される。縄文 RL が地文として施されている。268 は胴部片、刺突列のある貼付隆帯を基軸として、太沈線が平行して施されている。275 は口縁部でキャリパー器形を呈する。外面は貼付隆帯区画内に短沈線が充填されている。299 も口縁部でキャリパー器形を呈する。外面には貼付隆帯とナデにより太い凹線状が形成されている。305 は胴部下半で、太い貼付隆帯と脇沈線による区画内に短沈線が充填されている。306 もキャリパー器形を呈するもので、口縁部外面には連続した矢羽状沈線が横走する。332 は胴部片で貼付隆帯による渦巻文が施されている。362 も胴部片で、器形屈曲部に刻目をもつ隆帯が横位に展開し、その下には条線が垂下する。423 は口縁部片で、貼付隆帯による渦巻文が認められる。424 は口縁部片で、貼付隆帯による装飾が認められる。431 はキャリパー器形の口縁部から胴部屈折部付近で、外面には平行沈線と同心円状の円弧文が施される。外面・内面ともに中型巻貝による調整痕に酷似した器面調整が認められる。469 は口縁波頂部で、貼付隆帯により渦巻文などが展開する。縄文 LR を地文としている。区画内の隆帯上には縄文 LR が施されている。498 は口縁部片で貼付隆帯による楕円状の区画が認められる。

第 4 群土器 3c 【21・354・411・471・476】

神明式・取組式のいずれにも属する可能性のあるものを集めた。21 は胴部片で、外面には低位の貼付隆帯および沈線による区画と隆帯上に縄文 LR が施される。354 は胴部片で外面に条線が施されている。411 は胴部片で刺突列をもつ貼付

隆帯と太沈線で文様が構成されている。471 は口縁部から胴部への屈折部で、貼付隆帯によって区画されている。476 は 3 条の垂下沈線と縄文 LR が施されている。

第 4 群土器 4

島崎Ⅲ式～山ノ神式に当たるものである。

第 4 群土器 4a 【470・478】

島崎Ⅲ式に当たるものと考えられる。470 は胴部片で、貼付隆帯による区画と沈線による充填が施されている。478 は区画内に短沈線が充填されている。

第 4 群土器 4b 【20・62・187・309・314・315・320・326・429・433・434・479】

中期末の山ノ神式に 20 は口縁部で半截竹管状工具による平行する沈線および波状沈線が垂下する。62 は平行する弧状沈線と条線が認められる。187 は胴部片で条線を地文として、屈曲部に平行する 2 条の波状沈線が横位で展開し、その下部にはさらに大きな波状の平行沈線が見られる。309 は胴部片で、条線を地文として太沈線で垂下などが表現されている。314 は胴部片で、ブリッジ状の貼付と太沈線による区画が認められる。315 は胴部片で、浅い太沈線と条線が施されている。320 は条線を地文として、太沈線によって描かれている。326 も胴部片、太沈線による同心円文のほか地文として縄文 RL が施されている。429 も胴部片で、縄文 LR を地文として半截竹管状工具による沈線が描かれている。433 も胴部片で条線を地文に平行沈線が施されている。434 は胴部大型破片で、太くて浅い沈線のみが描かれる。479 は刺突列を持つ貼付隆帯と条線が認められる。

第 4 群土器 5 【142・145・294・295・428・499】

信州系土器を集めた。以下のように分類される。

第4群土器 5a【142・145・499】

沈線装飾を主体とするものである。142 はキャリパー器形を呈する口縁片で、貼付隆帯とそれに平行する形での集合沈線が横位に展開する。145 は屈折する器形で、口縁部には平行沈線、胴部には斜行する集合沈線が施されている。499 は胴部片で、外面には貼付隆帯による区画と区画内は半截竹管状工具の沈線による充填が認められる。

第4群土器 5b【294・295・428】

親田式に比定される1群である。294 は胴部片で浅い垂下する太沈線が施されている。縄文はLRで縦位方向の結節縄文も認められる。295 は口縁部で沈線区画が認められる。地文は縄文LRで、縦位方向で結節縄文も認められる。428 は胴部片で、縦位方向で結節縄文が認められる。

第4群土器 6【480】

北白川C式に比定されるものである。口縁部で刺突列を持つ沈線は口縁端部外側に、細い帯状の区画は太沈線によって文様が施されている。

第4群土器 7【17・32・34・43・44・49・60・61・138・144・177・178・186・190・273・286・287・288・289・308・312・333・365・367・369・427・437・473・477・481・483】

その他、中期後半を主体とする土器群（深鉢）を集めた。17 は胴部片で縄文LRが施されている。32 も胴部片で、平行沈線による幾何学文様が認められる。34 も縄文LRが施されている。43 は胴部屈曲部片で、ナデやオサエなどの調整が認められる。44 は胴部片、49 は口縁部片で、ナデやケズリ調整が見られる。60・61 は胴部片で平行沈線と条線が見られる。138 も胴部片で、縄文l

が施されている。144 も胴部片で平行する短沈線が主体となっている。177 は胴部片で平行した沈線が施されている。178 は平行沈線と縄文lが見られる。369 は胴部片で、縄文rが施される。437 では半截竹管状工具による集合沈線が、473 では平行沈線、481 では太沈線と条線が施されている。

第4群土器 8【15・300・366】

底部を集めた。366 は底面に敷物の圧痕が認められるが、編組製品である可能性がある。

第4群土器 9【137】

土器装飾部である。137 はリング状の装飾の両側面に沈線区画内に爪形の連続刺突が施されている。取組式（第4群土器 3b）に伴う土器装飾と考えられる。

第5類土器 縄文時代後期の土器

第5群土器 1

後期初頭～前葉の土器である。中津・称名寺式の段階が主体であるが、22・23 は福田K2式並行まで下る可能性がある。文様の構成から、以下に分類できる。

第5群土器 1a【22・23・55】

充填縄文の認められる1群である。22・23 は胴部片で、蛇行する平行沈線内に縄文LRが充填されているものである。22 は沈線区画は鉤の手状にものが連続したような様相を呈する。55 も胴部片で、沈線区画内に縄文LR充填されているものである。区画は上下に対向するような構成を呈している。

第5群土器 1b【59・148・151・183】

沈線による文様構成を呈するものである。59 は深鉢片で、平行沈線が認められるものである。148 は口縁部片である。外面には平行する2条一

単位の条線が垂下しており、口縁端部上面には工具による連続刺突列が見つめられる。151 は波状口縁の波頂部で、垂下してつけられた貼付に連続刺突が施されている。それを起点として沈線が横方向に複数展開する。波頂部上面には指による押圧、さらに口縁部には工具による刺突も認められる。183 は胴部片で、縦位は 2 本 1 単位の沈線、これに斜位方向は単沈線が重ねられ格子状の意匠を呈している。

第 5 群土器 1c 【5】

5 は胴部片で、外面には条線が施されているものである。

第 5 群土器 2

後期前葉～中葉の土器群で、堀之内 2 式並行期が主体となる。

第 5 群土器 2a 【4】

縄文が施されているものである。4 は口縁部片で、外面には沈線と工具による刻み目のある貼付隆帯が付き、上面には工具による刻目が認められる。

第 5 群土器 2b 【103】

103 は直立する器形で波状口縁を呈する。口縁部は外面には縄文 LR が施されており、外面・内面の調整としては巻貝条痕の可能性が考えられる。

第 5 群土器 2c 【51・126・150】

沈線・貼付によって文様が構成されているものである。51 は口縁端部に向かって直立気味の器形である。口縁端部上面には 8 字状のボタン状の貼付と沈線が走る。外面にはボタン状の貼り付け部を起点として、斜方向に平行沈線が施されている。126 は外反する口縁部片である。口縁端部に浅い横圧を連続して施し、小さい方形区角を表出させている。器面調整は外面・内面ともに中型

巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。150 は胴部片で、外面には平行沈線による区画で、三角形もしくは菱形の意匠が展開していた。区画の中央には 8 の字を呈するボタン状の貼付が認められる。器面調整は、器面調整は外面・内面ともに中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。

第 5 群土器 2d 【12・65・104・105・107・189・271・327・356・379・380・381・436・438・503】

12 は胴部片、47 は口縁部片で、器面調整のみが認められる。外面・内面ともに中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。65 は外反する器形の口縁部である。外面・内面ともに中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。104・105 も胴部片で、外面・内面ともに中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。107 は外面・内面ともに一般的なナデ調整が認められる。189・271・327・356・379・380・381 も外面・内面に中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められるものである。436・438・503 は外面・内面ともに一般的なナデ調整が認められる。

第 5 群土器 3

八王子式～西北出式、あるいは八王子 1 式～2 式に属する 1 群である。

第 5 群土器 3a 【24・152・325・331・372・373・375・440・443】

八王子式あるいは八王子 1 式とされる土器群である。24 はくの字に屈折した口縁部片で、外面には、縄文 LR を地文として半弧線が連続して描かれている。器面調整は中型巻貝などによるナデ・ケズリである。152 は緩やかに内湾する器形で、4 条の平行沈線の下に縄文 LR が地文となってい

る。325 は小波状を呈する口縁部片で、押圧を中心に同心状に展開する弧線が連続して描かれている。地文には縄文Ⅰが施されている。331 は大波状を呈する口縁部で、3 条の平行沈線の下に縄文Ⅰが施されている。器面調整は中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。372 は4 単位波状の器形で波頂部には巻貝工具による押圧から半弧線が連続して描かれている。波頂部は2 本の平行沈線でつながっており、縄文ⅠLR を地文とする。胴部中央にも文様帯があり、3 条の平行沈線と上下に連結する弧線が認められる。縄文ⅠLR を地文とする。器面調整は、外面・内面ともに中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕と考えられる。373 も波状口縁で、3 条の平行沈線に、縄文ⅠLR が施されている。375 も波状口縁で、波頂部下に同心円文と縄文ⅠLR が施されている。440 も屈折のある口縁部で、刺突と半弧線が描かれている。地文に縄文ⅠLR が施されている。器面調整は外内面ともに中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕と考えられる。443 も屈折する口縁部で3 条の平行沈線と縄文ⅠLR が施されている。

第5 群土器 3b 【140・358・376】

西北出式あるいは八王子2 式といわれるものである。140 はくの字に屈折した口縁部片で、口縁端部上面から刻目をもつ縦位の貼付隆帯が連続して施されている。358 は屈折する口縁部外面にノの字の貼付が認められるものである。386 も同様の口縁部で、内面の器面調整は中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。

第5 群土器 3c 【256】

256 は屈折の強いソロバン玉形の器形を呈する。沈線区画内に縄文Ⅰが充填されており、外面・内面ともに最終調整はミガキである。

第5 群土器 3d 【10・139・335】

その他胴部片などを一括した。10 は胴部片で、外面には3 本一単位の平行沈線に縄文ⅠLR が施されている。器面調整は中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められる。139 は平行沈線内に縄文ⅠLR が充填されている。335 は沈線区画内に縄文ⅠLR が充填されている。

第5 群土器 4

凹線文土器群である。以下の様にさらに分類される。

第5 群土器 4a 【52・154・204・238・239】

吉胡下層式あるいは元住吉山Ⅱ式に比定されるものである。52・154 は口縁部片で、凹線の内がナデられているものである。器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。204・238・239 も凹線の内がナデられているもので、特に204 は凹線の幅広でと深さが浅い状態となっている。

第5 群土器 4b 【203・259・264】

伊川津式あるいは宮滝式（古）に比定されるものである。

203・259・264 は、凹線内がナデられているが、凹線の形状が明瞭なものとなっている。器面調整は巻貝条痕である。

第5 群土器 4c 【33・83・84・85・86・90・91・92・109・120・121・194・198・199・201・202・242・258・502】

寺津下層式あるいは宮滝式（新）、神谷沢段階の資料である。33 は平縁の口縁部片で、凹線は内面がナデられていないもので、縄文Ⅰが施されている。83・84・85・86・90・91・92・109・120・121 も同様に内面がナデられていない凹線が認められる。器面調整にはナデのほか巻貝条痕が顕著である。194 は大波状口縁で、波頂部から3 条の平行する垂下沈線とそれを起点に左右に

展開する集合沈線が認められる。波頂部には垂下沈線に対応して刻目が認められる。198・199・201・202も同様に内面がナデられていない凹線が認められる。242・258・502も同様である。

第5群土器5

後期中葉～後葉の土器のうち文様の認められない土器を集めた。以下の様にさらに分類できる。

第5群土器5a【3・328】

器面調整は中型巻貝などによるナデ・ケズリ状の工具痕が認められるものを一括する。

第5群土器5b【13・35・36・37・53・98・99・100・101・102・111・112・113・116・117・118・119・200・206・226・237・448・501】

器面調整に巻貝条痕が認められるものを一括する。

第5群土器5c【1・64・161・335・342・387・388・389・390・444】

ナデなどの調整痕のみが認められるものを一括する。

第5群土器6【96・162・219・221・222】

後期末の土器群である。さらに二分できる。

第5群土器6a【96・162】

下別所式に比定されるものである。

96は口縁部片で、半截竹管状工具による平行沈線、弧状沈線、縄文LRが施されている。162は口縁部片で、半截竹管状工具による弧状沈線が認められる。いずれも器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。

第5群土器6b【219・221・222】

伊川津Ⅱ式とされる一群である。屈折する器形の口縁部に櫛描波状文とされる文様が認められるものである。いずれも器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。

第5群土器7【56】

信州系土器である。56は大波状口縁に、平行する短沈線による鋸歯状文、さらには細い工具による連続刺突が施されている。上之段式に比定される。

第5群土器8【87・93・257・377・382・384】

鉢もしくは浅鉢である。87はボタン状の貼付のある土器で、第5群土器4cに伴うものと考えられる。257は沈線区画内に縄文Iが充填されている。377・382は沈線区画内に縄文LRが施されている。第5群土器3aに伴うものと考えられる。

第5群土器9【11・16・68・207・229・261・318・322・341・368・374・383・441・442・467】

壺もしくは注口土器を集めた。11と207は注口部である。16は胴部片で、櫛描文や渦巻状沈線、刺突で文様が構成されている。322は胴部片で、沈線区画内に縄文LRが充填されている。第5群土器3aに伴うものと考えられる。341は口縁部に付く装飾部である。368・374・422も第5群土器3aもしくは3bに伴うものと考えられる。

第5群土器10【2・106・122・123・124・146・155・196・205・228・267・435・484・485】

後期土器の底部を一括している。2・106・124・155・267・435・484・485には編組製品の、196には木葉痕の敷物の圧痕が認められた。編組製品圧痕のうち編組技術が判明できるものとしては、106は2本飛び2本潜り1本送りのゴザ目、124は2本飛び2本潜り1本送りのゴザ目、155は2本飛び2本潜り1本送りの網代、267は2本飛び2本潜り1本送りのゴザ目、484は

2本飛び2本潜り1本送りの網代であるが図左下のみ3本飛び3本潜り1本送りの網代と組み方を変えている。485は2本飛び1本潜り1本送りの網代である。

第6群土器 縄文時代晩期の土器

第6群土器 1

晩期初頭から前葉の吉胡B I式・寺津式・あるいは大宮式などと言われる土器群である。さらに以下の様に分類できる。

第6群土器 1a【14・81・97・110・224】

櫛描波状文を特徴とする一群である。14・81・97・224は櫛描波状文が、110は櫛描波状文に加えて巻貝工具による刺突が認められる。

第6群土器 1b【208・225】

208は山形突起を呈する波状口縁の口縁部片である。半截竹管状工具による2条の平行沈線が施されている。器面調整は巻貝条痕である。225は口縁部に3条の平行沈線が施されている。

第6群土器 1c【214・216】

214は口縁部片で半截竹管状工具による2条の沈線と縄文LRを地文とする。器面調整は巻貝条痕である。216は半截竹管状工具による沈線に巻貝擬縄文が加わる。

第6群土器 1d【220】

220は口縁部片で沈線による波状文、口縁端部上面には工具による押厚列が展開する。器面調整は巻貝条痕である。

第6群土器 1e【74・198】

74は屈折する器形で、外内面ともに巻貝条痕が認められる。188は屈折する器形で、外面に縄文LRが施されている。器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。

第6群土器 2

晩期前葉の雷Ⅱ式・元刈谷式・保美Ⅱ式・蜷塚B式と呼ばれる土器群である。さらに以下の様に分類される。

第6群土器 2a【88・241・260】

口縁部を胴部から屈折させて内湾させているものである。88は内側に屈折・内湾させた口縁部外面に巻貝工具による短沈線が3段に渡って展開する。241は3条一単位の沈線による上方弧文が横位に展開する。260は内側に屈折、および外側を若干肥厚させた器形で、口縁部外面には半截竹管状工具による短沈線が3段に渡って展開している。器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。

第6群土器 2b【71・157・159・192・209・210・212・213・215】

口縁部を肥厚させた一群である。71は肥厚させた口縁部外面に巻貝工具による短沈線が2～3段に渡って展開する。器面調整は巻貝条痕である。157は若干肥厚させた口縁外面に半截竹管状工具による連続刺突文を2段に渡って施している。159は肥厚させた波状口縁に3条の平行沈線が施されている。192は肥厚させた口縁部外面に縄文rが施されている。209・210は肥厚させた口縁部外面に巻貝工具による短沈線が2～3段に渡って展開する。212は肥厚させた口縁部の外側に半截竹管状工具による短沈線が2条施されている。外内面には巻貝条痕が施されている。213は口縁部と胴部屈折付近から胴部にかけての土器片である。口縁部側には縄文LRが施され、外内面の調整は巻貝条痕が施されている。215は肥厚した口縁部の外面に半截竹管状工具による沈線と刺突列が施されている。

第6群土器 2c【58・160・211】

58は直立する器形で、外面には巻貝工具によ

る連続した弧状沈線が2条展開する。160は肥厚させていない直立した口縁部の外面に半截竹管状工具による連続刺突文を3段に渡って施している。211は直立する器形で、外面には巻貝工具による連続した短沈線が3条展開する。

第6群土器 2d 【108・217・218・240・243】

蜆塚B式といわれる一群である。108は波状を呈する口縁部片で、波頂部には巻貝工具による刺突を、波状口縁に沿って半截竹管状工具による平行沈線が2条施されている。217は波状口縁で口縁に沿って3本の平行沈線と横位に刺突列が1条認められる。器面調整は巻貝条痕である。218は緩い波状口縁で口縁に沿っての沈線刺突列が1条認められる。240は小波状口縁部で、外面には平行沈線と刺突列が横位に展開する。また口縁端部上面にはへう状工具による連続刺突が認められる。243は沈線と刺突列が認められる。

第6群土器 2e 【233】

223は緩い波状口縁を呈し、2本一単位の上方面弧文が横位に連続して展開する。口縁端部上面には連続した刻目が施されている。

第6群土器 3 【89・94・195・197・230】

晩期隆帯文土器群である。89は波状口縁の波頂部脇から弧状に刻目をもつ隆帯が展開する。94は壺形の器形を呈するもので、頸部に刻目をもつ隆帯が横走する。195は口縁部片で、刻目をもつ貼付隆帯が横位に展開する。197は平縁の口縁部片で刻目を持つ隆帯が長楕円形に貼り付けられている。230はやや直立する器形で、屈曲部には押圧のある貼付隆帯が横位に展開する。

第6群土器 4 【72・265】

晩期中葉稻荷山式としたが、第6群土器2までさかのぼる可能性もある。72は直立気味の口縁形状で、口縁端部上面には工具による連続した刻

目が施されているものである。器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。265も直立気味の口縁形状で、口縁端部上面には巻貝工具による連続した刻目が施されているものである。器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。

第6群土器 5 【19・38・39・45・46・50・54・66・67・69・70・80・95・115・130・227・231・232・233・234・269・290・310・347・447】

二枚貝調整およびそこから派生するケズリ調整などが施されている一群である。さらに以下の様に分けられる。

第6群土器 5a 【232・233】

西之山式に属するものと考えられる。232は直立した器形の外面に二枚貝条痕、口縁端部上面には二枚貝工具による連続刻みが認められる。233は緩やかな波状を呈する器形で、器形の外面に二枚貝条痕、口縁端部上面では波頂部はつまみ出して作られており、さらに二枚貝工具による連続刻みが認められる。

第6群土器 5b 【19・38・39・45・46・50・54・66・67・69・70・80・95・115・130・227・231・234・269・290・310・347・447】

その他、二枚貝条痕調整のある土器を一括した。晩期後葉に属するものが多いと思われるが、一部は晩期前半にさかのぼる可可能性もある。

第6群土器 6 【57・191・234・235・336・465】

鉢および浅鉢である。57は胴部片で、外面には平行沈線と縄文LRが施されており、内面の調整はミガキである。191は外面に半截竹管状工具による沈線内に連続刺突が施されているもので、器面調整は外内面ともに巻貝条痕である。234はくの字屈折する浅鉢で、五貫森式に伴うものと

第6群土器7【68】

第6群土器8【114・236】

晩期土器の底部である。

2. 遺構別出土状況（第1表）

第1表では、主要遺構における群別出土点数を示した。具体的な出土資料については、図キャプション上の注記を参考願いたい。

縄文土器がまとまって出土している遺構には、5001SI・5004SI・5044SI・5289SK・5130SK・5131SK・5425SI・6004SI・6015SI・6047SI・6049SI・6052SI・6113SI・

第1表

[illegible]

ることからも、出土は 21A 区南半分全体と 21B 区南西側、および 22B 区でまとまっていることが分かる。

図化報告した分についてのみ主要な縄文土器の出土分布傾向を遺跡全体図に示す。全体の統計的処理などについては、第5章で提示することとするが、堅穴建物跡が密集して調査された地区での遺物出土のほかに、水田関連遺構内からの出土も多い。水流など流れ込みによる二次的作用も受けているものもあると思われるが、耕作土（特にその最下層）と遺物包含層との層的境界は漸移的であ

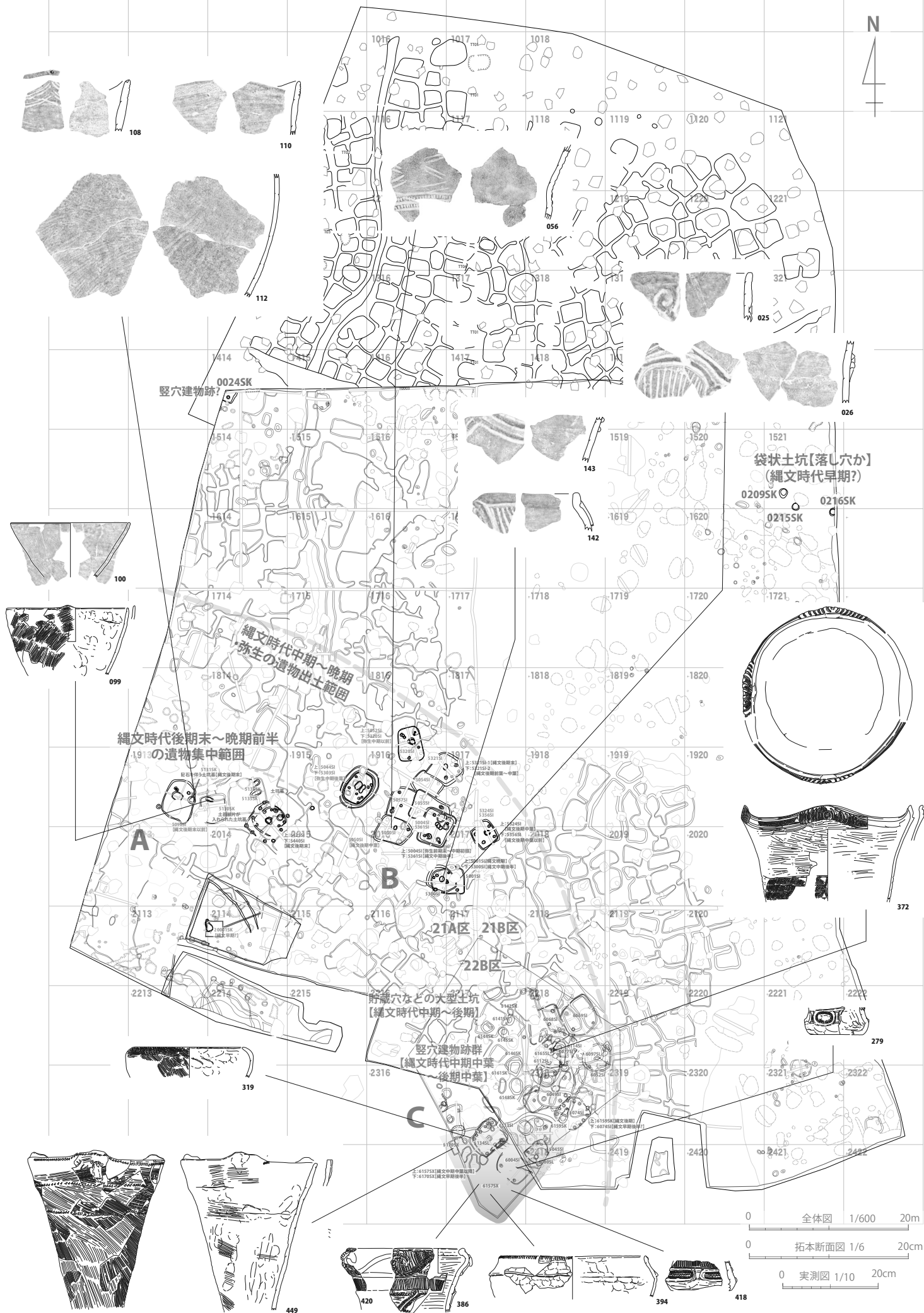
228	2217	6245SK
228	2219	6174SK
228	2218	6173SK
228	2218・2318	6172SX
228	2418	6171SD
228	2317	6170SX
228	2217	6167SP
228	2217	6164SK
228	2218	6162SP
228	2317	6161SK
228	2218	6160SL
228	2318	6159SK
228	2117	6158SK
228	2318・2417・2418	6157SX
228	2418	6156SP
228	2317	6148SK
228	2317	6147SX
228	2217	6145SK
228	2217	6143SK
228	2217	6141SK
228	2217	6140SK
228	2318	6123SP
228	2218	6121SP
228	2218	6120SP
228	2218	6115SL
228	2218	6114SI
228	2317	6113SI
228	2417	6110SP
228	2218	6109SP
228	2218	6097SL
228	2218	6079SI
228	2218	6069SI
228	2218	6068SI
228	2218	6052SI
228	2218	6051SI
228	2318	6049SI
228	2318	6048SX
228	2318	6047SI

第1表

[illegible]

繩文土器・弥生土器 主要遺構出土点数一覽 (2)

[illegible]



第2節 弥生土器

1. 概要

本節では、弥生時代から古墳時代前期にかけての土器を扱う。なお本遺跡における弥生時代の石器は、弥生時代の遺構分布が縄文時代の遺構分布と重複していることから、完全に分離することができないため、縄文時代の石器の中で取り扱い、弥生時代に属すると考えられるものは、それぞれの解説部分において記述する。当遺跡の弥生土器・古式土師器は27リットルコンテナにおよそ2箱出土しており、古墳時代前期の古式土師器は弥生土器に比べて圧倒的に少ない。またそのほとんどが小片であり、完形品の出土はない。

2. 弥生土器

大崎遺跡出土の弥生土器は、弥生時代前期（水神平式）から弥生時代中期前までのものが主体で、古墳時代前期の特徴を持つ古式土師器は少ない。弥生時代前期から弥生時代中期前半にかけての弥生土器は主に太頸壺と深鉢がある。ここで報告する弥生土器は、外面の調整・施文の形状から二枚貝の貝殻復縁を利用した貝殻条痕調整・施文土器と櫛状の植物束と思われる原体を利用した櫛条痕調整土器に分かれ、どちらの土器も内面は横ナデとナデ・指オサエで調整されている。貝殻条痕調整・施文土器には太頸壺と深鉢があり、櫛条痕調整土器には深鉢がある。貝殻条痕調整・施文太頸壺は平底の底部から体部上半にふくらみをもって立ち上がり、体部上半の肩部ですぼまる部分から屈曲せず緩やかに頸部が立ち上がって口縁部が外反する。貝殻条痕調整・施文深鉢は平底の底部からやや丸みをもって立ち上がり、口縁部がやや内湾する砲弾形のものと平底の底部からやや丸

みをもって体部がひらいて口縁部が外反するものがある。櫛条痕調整・施文深鉢は、平底の底部からやや丸みをもって体部がひらいて口縁部が外反する。

21A 区 0060SX (1001・1002) 1001・1002 は貝殻条痕調整深鉢で、1001 は底部、1002 は砲弾形の深鉢の口縁部で、1001 は弥生時代中期前半のものと思われる。

21A 区 0142SN・0170SN (1003) 貝殻条痕調整の口縁部が外反してひらく深鉢の口縁部片で、口縁部下は横方向の貝殻条痕調整、口縁端部を外側に少し屈折させて折り返す、弥生時代中期前半のもの。

21A 区 0151SN・0155SN (1004・1005) 1004 はやや先底気味の深鉢底部片で、外面は横ハケ、内面はナデ調整がみられる。1005 は弥生時代前期の壺の口縁部片で、内面に横ハケ調整が残る。

21A 区 0170SN (1006) 弥生時代中期前半の深鉢の口縁部片で、外面は条痕調整、内面は横ナデ調整である。

21A 区 0199SN (1007) 弥生時代前期の深鉢の体部片で、外面は左上がり斜めの貝殻条痕調整後垂下する貝殻直線文3条がみられる。

21A 区 5001SI (1008) 貝殻条痕調整太頸壺の口縁部片で、口縁端部外面に刻みのある突帯を巡らせる。口縁部上端面にも貝殻条痕による押し引き文がみられる。

21A 区 5014SI (1009～1036) 1009 は弥生時代中期前半の貝殻条痕調整・施文太頸壺で横貝殻条痕後に頸部の貝殻条痕波状文、口縁部上端面に貝殻刻みがみられる。1010 は弥生時代

前期の貝殻条痕施文太頸壺の頸部で貝殻施文による波状文が上から3帯めぐり。1011は貝殻条痕調整太頸壺の頸部片で横貝殻条痕調整がみられる。1012は弥生時代中期前半の貝殻条痕調整深鉢の底部から体部片で、外面は左上がり斜めの貝殻条痕調整がみられる。1013～1018は弥生時代前期～弥生時代中期前半の貝殻条痕調整深鉢の口縁部片で、口縁部上端面に横貝殻条痕調整がみられる。1013～1016は弥生時代前期、1017・1018は弥生時代中期前半のものと思われ、1018の口縁部にはつまみ状の盛り上がりがあり、口縁部内面の上端面際に右上がり斜め貝殻条痕刻みがめぐり。1019～1024は弥生時代中期前半の深鉢口縁部片で、1019・1022～1024は貝殻条痕調整のもの、1020・1021は櫛条痕調整のもので、口縁部上端面は1020・1023に貝殻刻み、1021に櫛条痕刻み、1022に貝殻刺突文、1024に貝殻押し引き文がみられる。口縁部端部際には1019・1024に右上がり斜め貝殻条痕、1023に貝殻波状文がめぐり。1025・1028は貝殻条痕調整太頸壺の体部片で、1025が体部下半部、1028は体部上半部で、1025は弥生時代前期のものと思われる。1026は条痕調整の深鉢の口縁部片、内面に突帯がめぐり。1027は貝殻条痕調整深鉢で体部下半の底部際部分、1029・1030・1034・1035は貝殻条痕調整深鉢の体部片、1031はハケ調整甕で体部下半の底部際部分、1032・1033は貝殻条痕調整深鉢の口縁部の下部分である。1036は深鉢の底部片で、内・外面の表面が摩滅していて調整は不明である。

21A 区 5006SP (1037) 弥生時代前期の貝殻条痕調整の深鉢の体部下半の底部際部分である。

21A 区 5044SI (1038～1040) 1038は弥

生時代前期の横ナデ調整の深鉢片、1039・1040は弥生時代前期の貝殻条痕調整深鉢の口縁部片で、外面に横貝殻条痕調整が残る。

21A 区 5045SK (1041) 貝殻条痕調整・施文太頸壺の体部上半の部分で、弥生時代中期後半になるか。

21A 区 5048SK (1042・1043) 1042は貝殻条痕調整の砲弾形の深鉢の口縁部片で、口縁部上端面に櫛状刺突文がみられる弥生時代中期前半のもの、1043は左上がり斜めの貝殻条痕調整がみられる深鉢の体部下半の底部際部分で、弥生時代前期のものと思われる。

21A 区 5050SI (1044～1047) 弥生時代中期前半の貝殻条痕調整のもので、1044・1045・1047は深鉢で、1044は内面口縁部上端部際に右上がり斜め貝殻条痕がめぐり。1045は口縁部上端面に貝殻刻みを施す、1047は底部片である。1046は内傾口縁土器で、口縁部内面に粘土を折り返し、内傾する口縁部がやや肥厚している、内面は横ナデ・ナデ調整がみられる。

21A 区 5054SI (1048) やや薄手の砲弾形深鉢の口縁部片で、口縁部上端をわずかに外反させる。弥生時代前期のものと思われる。

21A 区 5055SI (1049) 弥生時代中期後半以後の甕の頸部片で、内・外面に横ハケ調整がみられる。

21A 区 5077SN (1050) 貝殻条痕調整の砲弾形深鉢の口縁部片で、弥生時代前期のものか。

21A 区 5078SK (1051・1052) 貝殻条痕調整の深鉢の口縁部片で、弥生時代前期のものと思われる。1051の口縁部上端面に横貝殻条痕調整がみられる。

21A 区 5121SN (1053・1054) 1053は弥生時代前期の横貝殻条痕調整か横ナデ調整の深鉢の

口縁部片で、口縁部外面に2条1単位の併行沈線文が左回りにめぐる。1054は左上がり斜め貝殻条痕調整の深鉢の底部で、弥生時代中期のものと思われる。

21A 区 5122SN (1055) 弥生時代前期の櫛条痕調整の深鉢で、口縁部内面側の端部に刻みをめぐらせる。

21B 区 5289SX (1056) 貝殻条痕調整の砲弾形の深鉢で、弥生時代前期のものと思われる。

21A 区 5351SN (1057) 貝殻条痕調整の深鉢で、口縁部が外反するもので、弥生時代前期のものと思われる。

21A 区 5361SI (1058・1059) 貝殻条痕調整の深鉢で、口縁部が外反してひらく。1058は口縁部上端面に横貝殻条痕、1059は口縁部上端面に櫛状刻みがみられる。弥生時代前期のものと思われる。

21B 区 5381SN (1060) 貝殻条痕調整の深鉢の底部で、底部径8.8cm。弥生時代前期のものと思われる。

21B 区 5384SN (0161) 貝殻条痕調整の深鉢の口縁部で、横貝殻条痕調整後体部に横ナデを行う。弥生時代前期のものと思われる。

21B 区 5425SI (1062・1063) 1062は貝殻条痕調整の深鉢の口縁部片で、口縁部がやや内面側に屈折しておわる。口縁部上端面に横貝殻条痕がみられる。1063は右上がり斜めハケ調整の甕の底部片で、内面はナデ・横ナデである。底部径8.0cm。1062・1063は弥生時代前期のものと思われる。

21A 区検出1 (1064～1067・1069～1079)
1064～1066・1068・1071・1072は貝殻条痕調整の口縁部が外反する深鉢で、1064・1066は左上がり斜め貝殻条痕調整のもの、1068・

1071・1072は横貝殻条痕調整のものである。

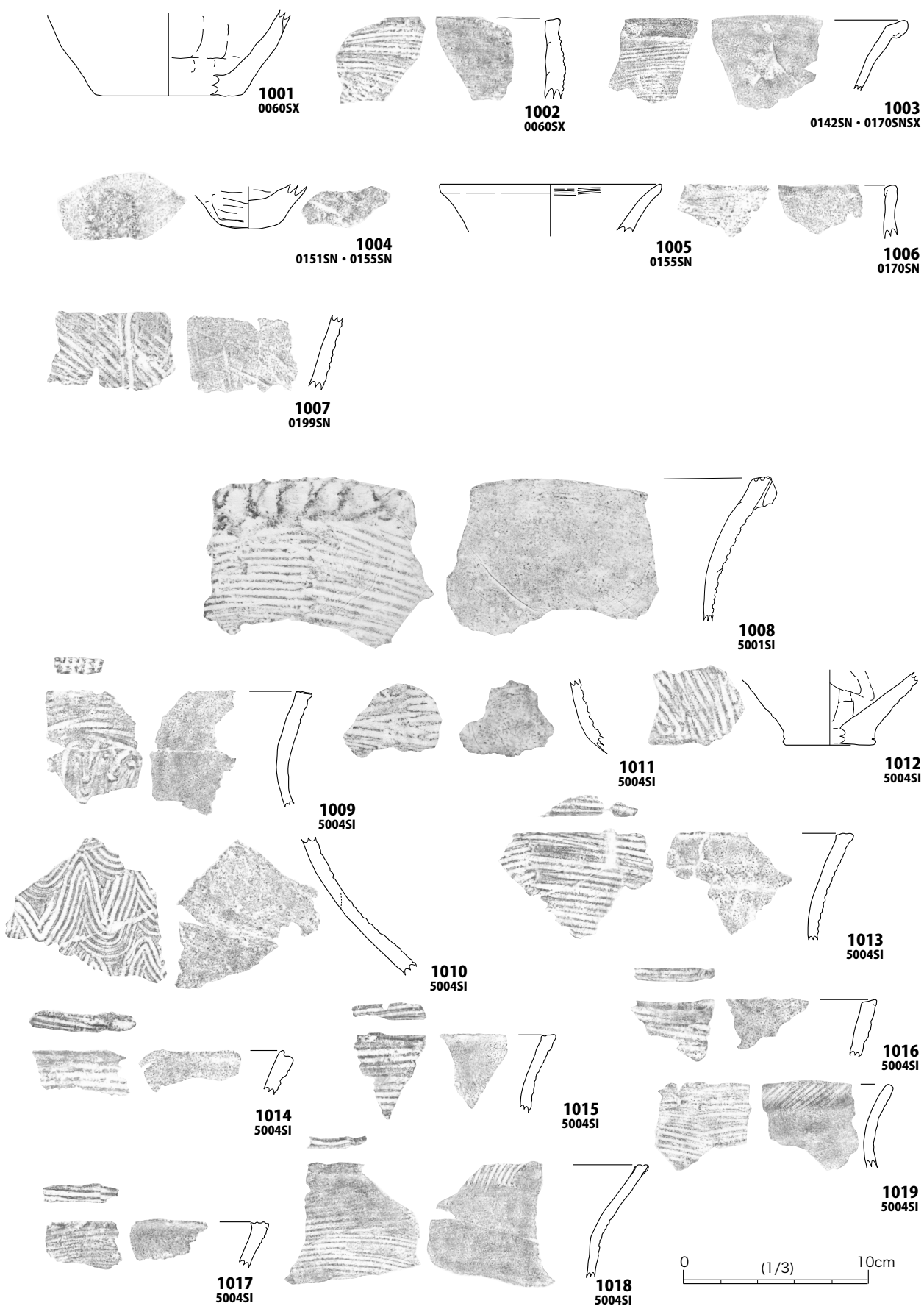
1065は貝殻条痕調整の砲弾形の深鉢で、体部の左上がり斜め貝殻条痕調整後、口縁部にヨコ貝殻条痕調整を施す、弥生時代前期のものと思われる。

1072は外反する口縁部の端部を内面側に折り返しており、上端面に貝殻刻みがみられる。1070は外反する口縁部をもつ深鉢で、外面は表面が磨減して調整が不明であるが、内面は横ハケ調整がみられる。1073は外面タテ綾杉条痕調整の深鉢の体部片である。1074壺の底部で外面横貝殻条痕調整とナデ調整、内面はナデ・横ナデ調整、1075・1076は深鉢の底部で、1075は内・外面がナデ・横ナデ調整のもの、1076は外面が横条痕調整、内面が横ナデ調整である。

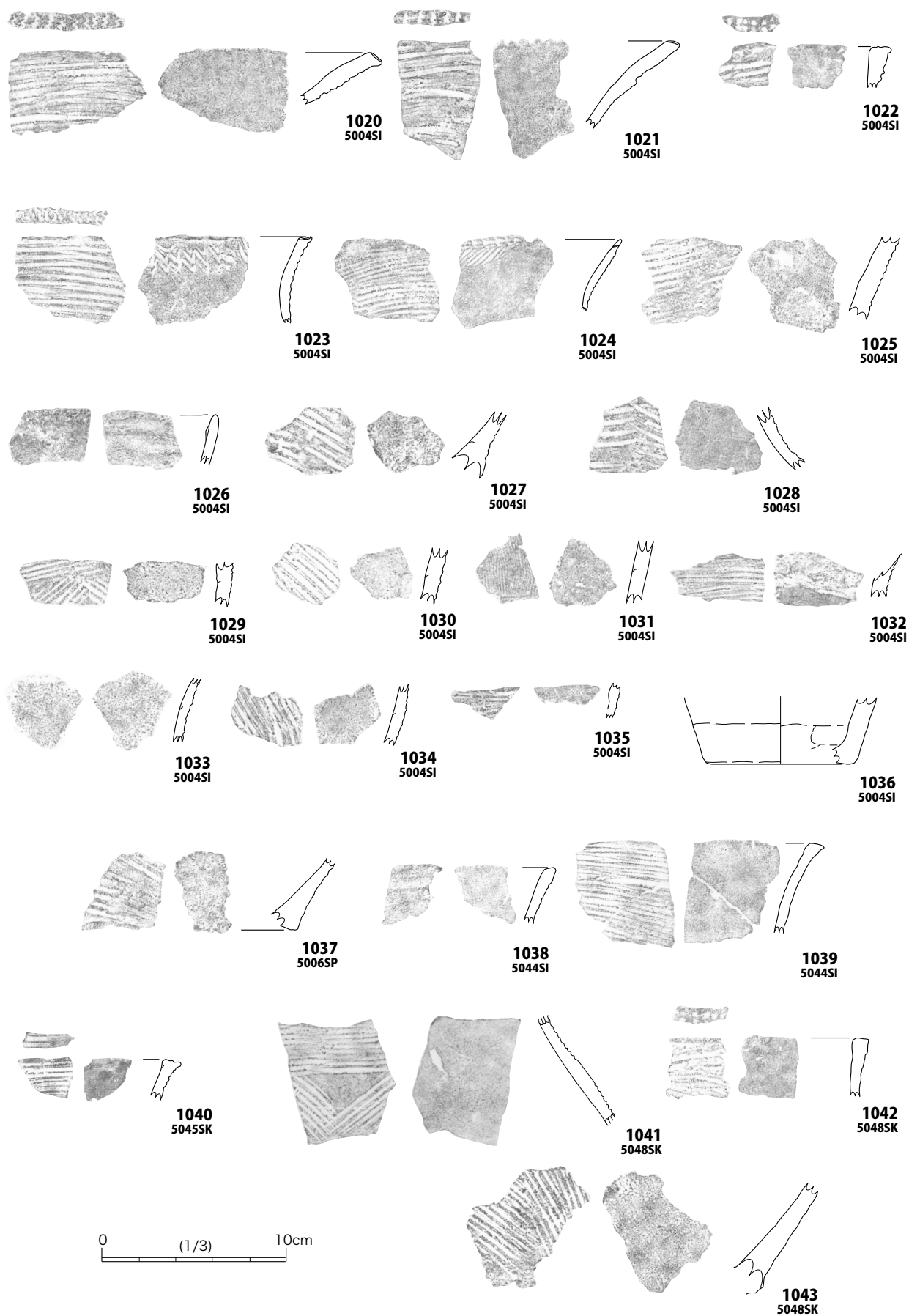
1069・1077～1079は内傾口縁土器で、外面が横貝殻条痕調整、内面は横ナデ・ナデ調整がみられる。口縁部がやや肥厚する傾向がみられ、全体に粘土紐積み上げ痕が残る。1064～1067・1069・1073～1076は弥生時代前期のもの、1070～1072・1077～1079は弥生時代中期前半のものである。

21A 区表採 (1068・1080) 1068は弥生時代前期の横貝殻条痕調整のある深鉢で、外反する口縁部の端部を内面側に折り返している。1080は弥生時代後期以後の台付甕の脚部で、外面はナデ調整、内面はハケ調整のものである。

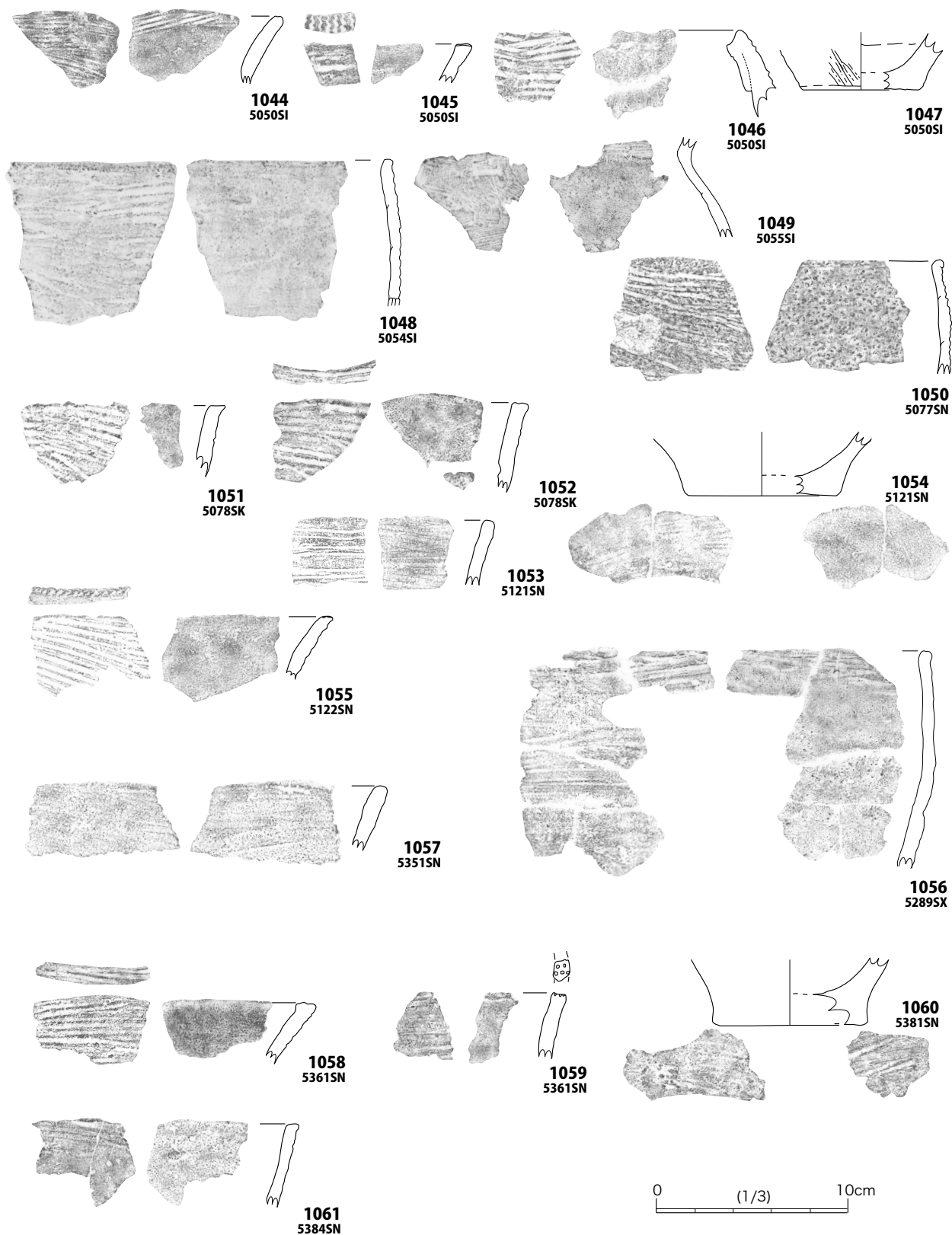
21B 区検出1 (1081～1086) 弥生時代中期前半は口縁部が外反する深鉢で、1081は外面横櫛状の条痕調整で、口縁端部を横ナデ調整で仕上げる。1082は外面横条痕調整、1083は外面タテ綾杉条痕調整、1084は外面タテ綾杉貝殻条痕調整で口縁部上端面を貝殻押し引き文、1085は外面横貝殻条痕調整で口縁部上端面を貝殻条痕押し引き文、1086は外面左上がり斜め貝殻条痕調



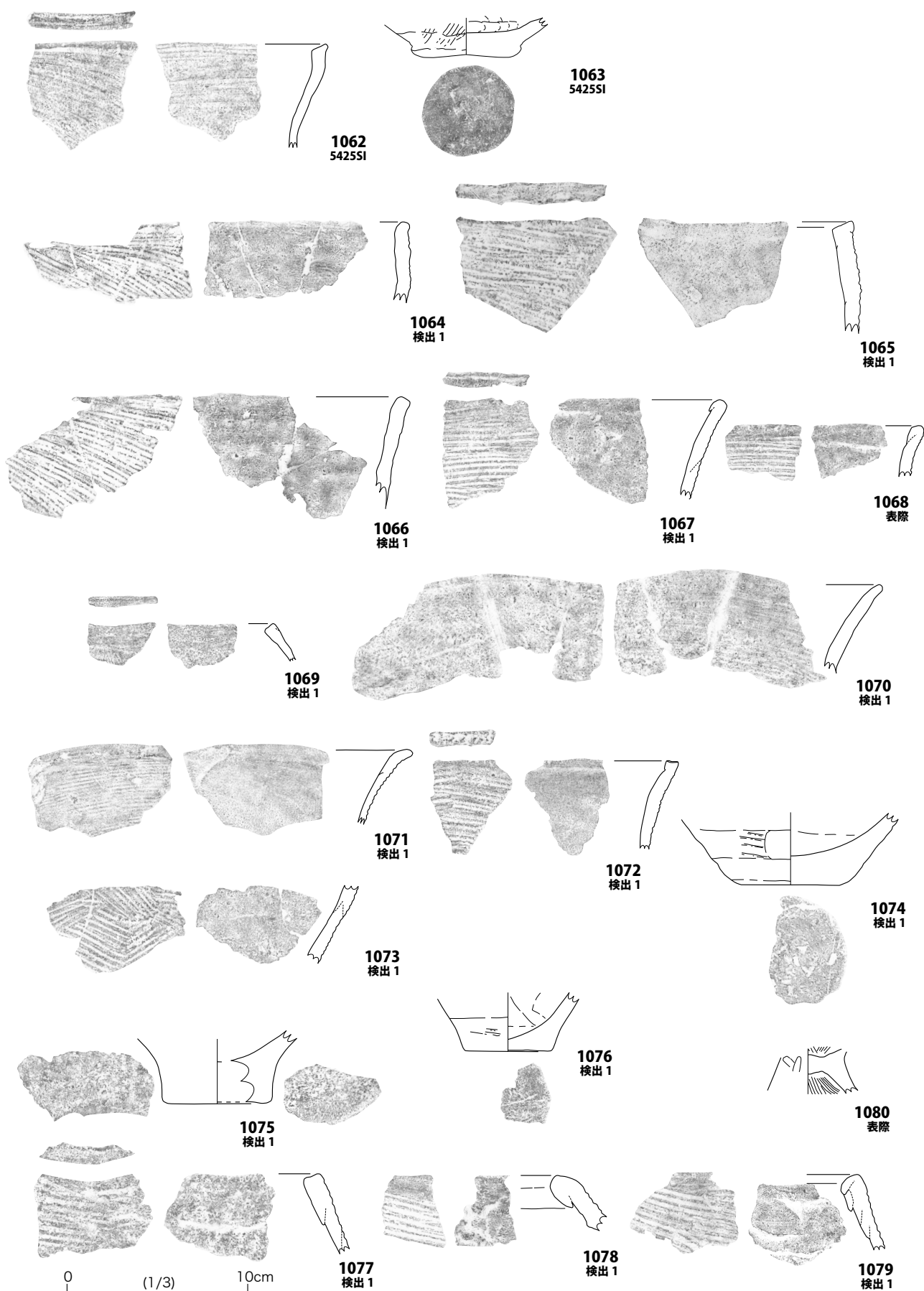
第 75 図 弥生土器 1



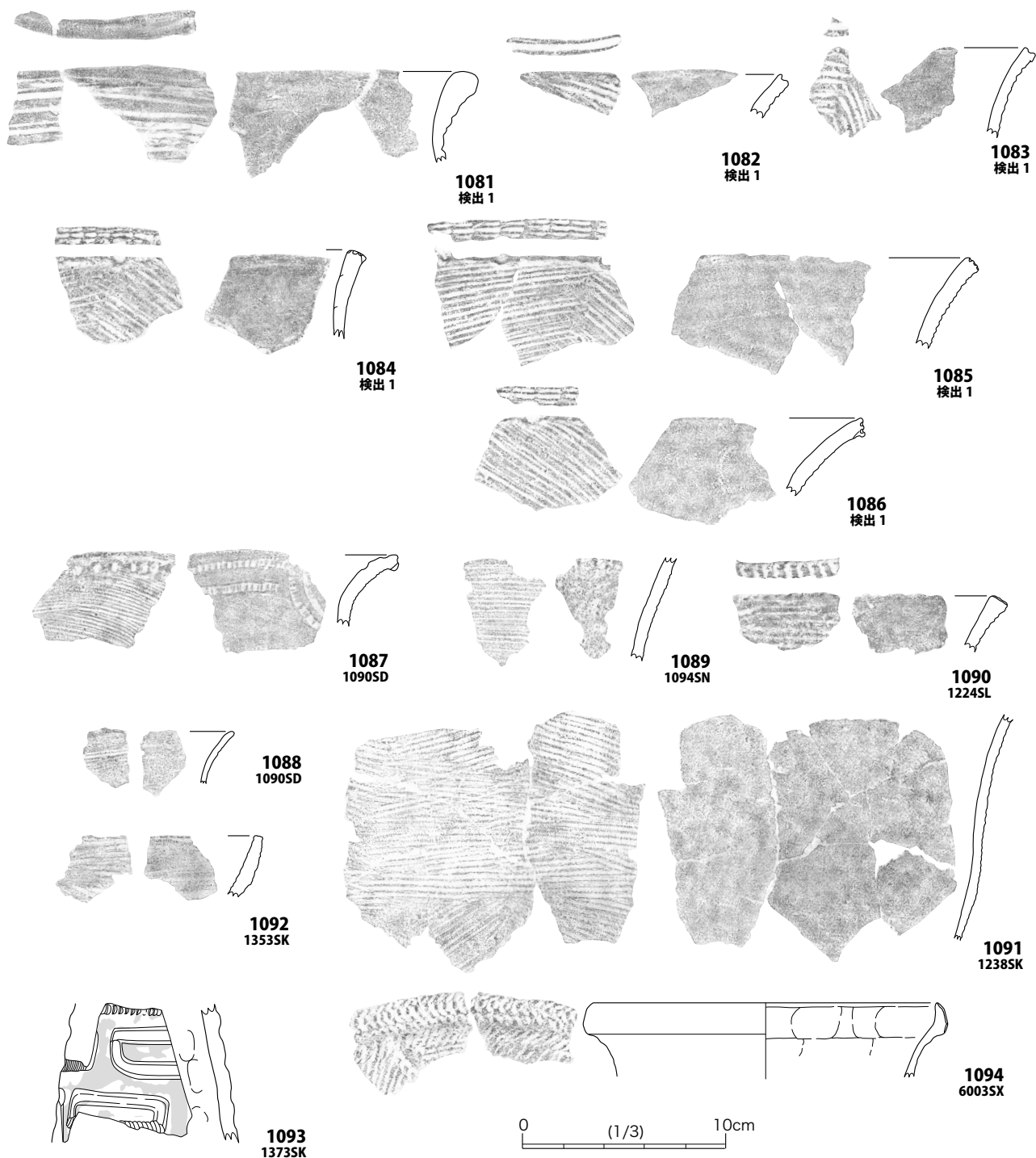
第 76 図 弥生土器 2



第 77 図 弥生土器 3



第 78 図 弥生土器 4



第 79 図 弥生土器 5

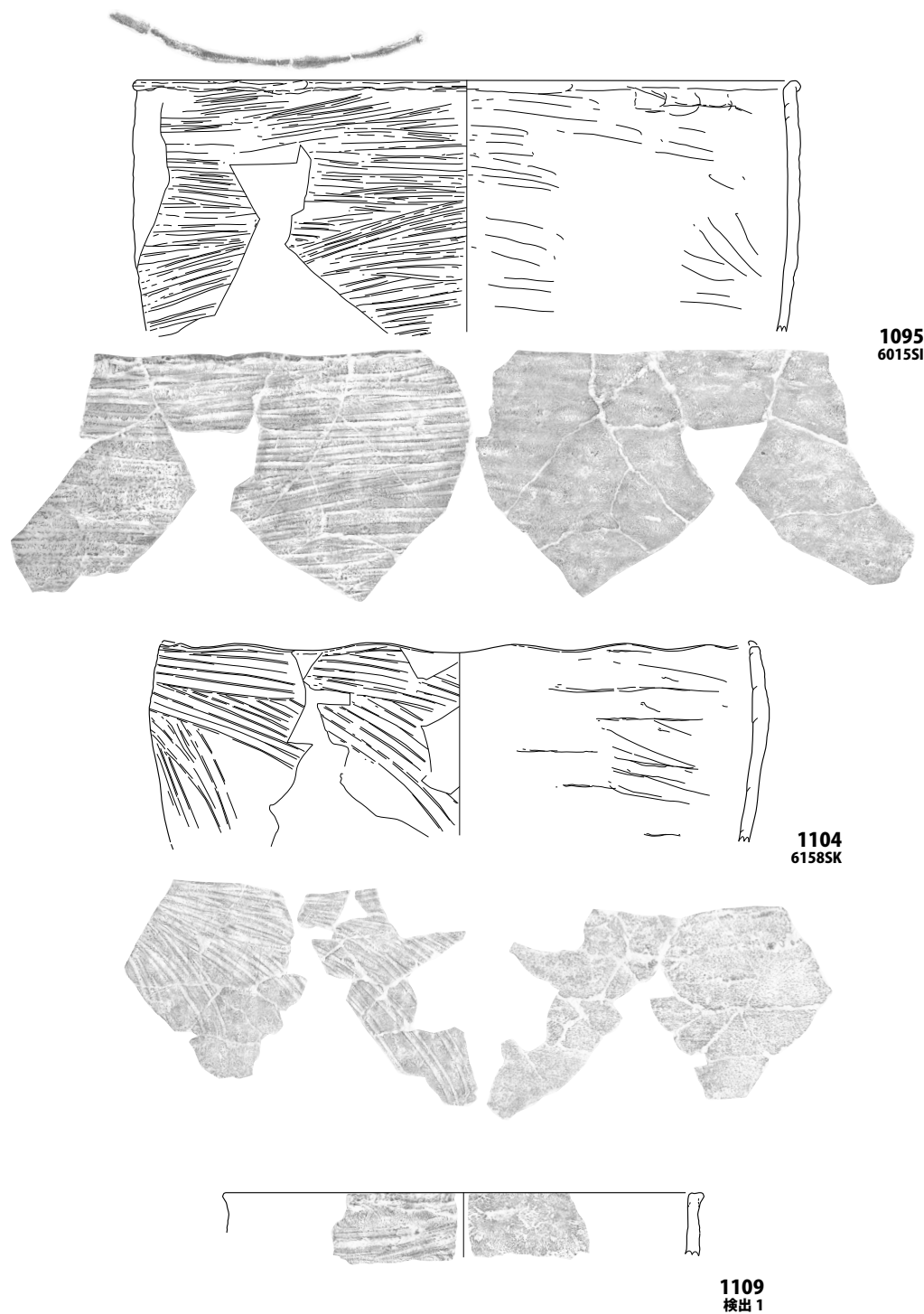
整で口縁部上端面を貝殻押し引き文がみられる。

22A 区 1090SD (1087・1088) 1087 は貝殻条痕調整の壺で、口縁部下端に刻み、内面口縁部にヘラ状押し引き文 2 条と直線文と弧文がある。1088 は貝殻条痕調整の深鉢で、口縁部が外反する。弥生時代中期のものと思われる。

22A 区 1094SN (1089) 横貝殻条痕調整の深鉢の体部片で、弥生時代中期と思われる。

22A 区 1224SL (1090) 横貝殻条痕調整の口縁部が外反する深鉢で、弥生時代前期のものと思われる。口縁部上端面に貝殻刻みがみられる。

22A 区 1238SK (1091) 貝殻条痕調整の深鉢



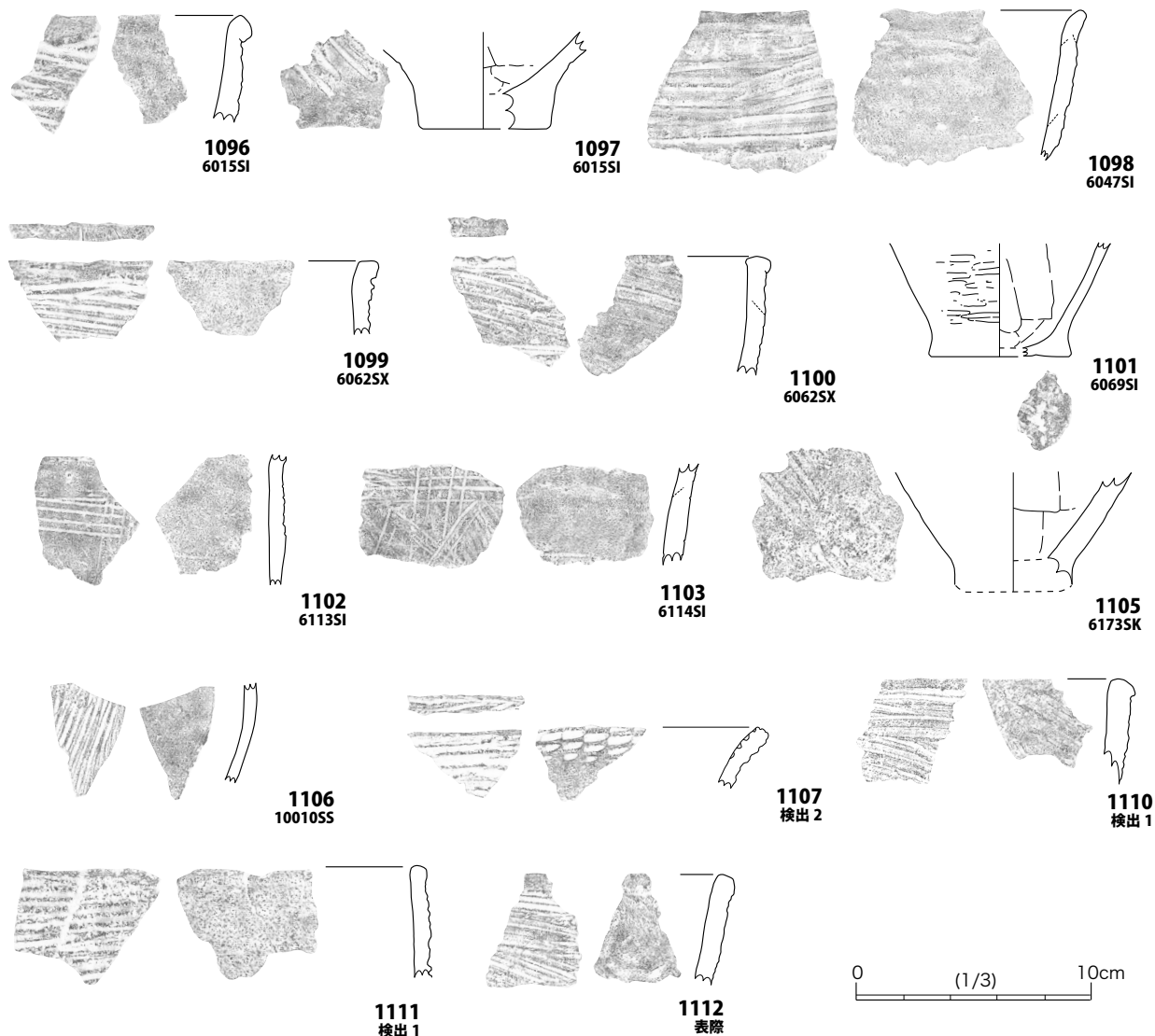
第 80 図 弥生土器 6

の体部で、体部上半は横貝殻条痕調整、体部下半はタテ綾杉貝殻条痕調整のものである。弥生時代中期のものと思われる。

22A 区 1353SK (1092) 外面横貝殻条痕調整の深鉢の口縁部片で、弥生時代中期のものと思わ

れる。

22A 区 1373SX (1093) 弥生時代中期前半の嶺田式の壺の頸部で、口縁部にかけてすぼまるものである。外面に太い沈線で横長の長方形文が2段でみられ、長方形の下線部分を刻みで表わされ



第 81 図 弥生土器 7

る。沈線の間はミガキ調整され、全体に赤彩が残る。内面はナデ・指押さえて整えられている。

22B 区 6003SX (1094) 受口口縁の太頸壺、外面頸部に右上がり斜めの貝殻条痕調整、内面は横ナデ調整がみられる。口縁端部に横羽状貝殻刻みがめぐる。口縁部径 22.4cm を測る。

22B 区 6015SI (1095 ~ 1097) 1095・1096 は貝殻条痕調整の砲弾形の深鉢である。外面は横貝殻条痕調整で、口縁端部を外側に小さく外反させる。1095 は口縁部径 38.4cm を測る。1097 は貝殻条痕調整の深鉢の底部である。弥生

時代前期のものと思われる。

22B 区 6047SI (1098) 外面横貝殻条痕調整の深鉢で、口縁部が緩やかにひらく。弥生時代前期のものと思われる。

22B 区 6062SX (1099・1100) 貝殻条痕調整の砲弾形深鉢で、外面は横から左上がり斜めの貝殻条痕調整がみられる。

22B 区 6069SI (1101) 弥生時代中期後葉の甕で、外面は横ミガキかナデの調整、内面は横ナデがみられる。底部径 8.0cm。

22B 区 6113SI (1102) 遠賀川式の甕で、外

面は横ナデ調整の後、2本1組の沈線文2帯が口縁部下をめぐる。

22B区6114SI (1103) 甕の体部片で、外面に左上がり斜めの貝殻条痕かハケ調整後、上から2本1組2帯の直線文、2本1組2帯の鋸歯文、2本1組2帯の垂下直線文がみられる。内面は横ナデ調整である。弥生時代中期のものと思われる。

22B区6158SK (1104) 貝殻条痕調整の砲弾形深鉢で、外面は体部の左上がり斜め貝殻条痕調整後口縁部の横貝殻条痕調整がみられる。口縁部径34.8cmをはかる。弥生時代前期のものと思われる。

22B区6173SK (1105) 貝殻条痕調整の深鉢で、底部径は約6.0cmである。

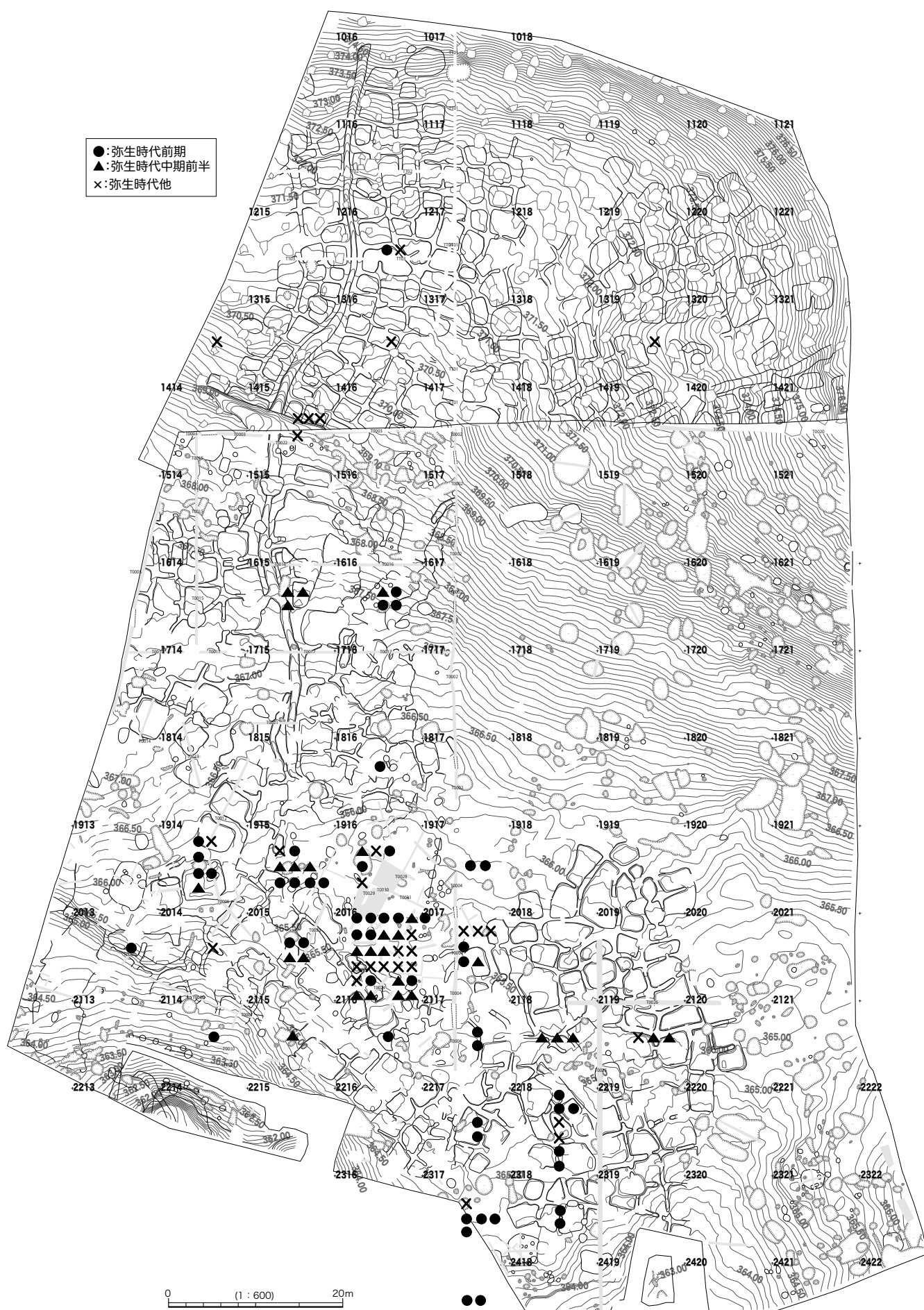
22A区10010SS (1106) 弥生時代中期後半の右上がり斜めハケ調整の甕である。内面は縦ナデ調整がみられる。

22A区検出2 (1107) ヨコ櫛条痕調整の深鉢で、弥生時代中期のものである。内面はヨコナデ調整で、口縁部上端下に櫛条痕刺突文列(4点1組)がめぐる。口縁部上端面にはヨコ櫛条痕がみられる。

22B区検出2 (1108) 弥生時代前期の深鉢で、外面ナデ調整後沈線の直線文2条と垂下直線文3条が施される。

22B区検出1 (1109～1111) 弥生時代前期の貝殻条痕調整の砲弾形深鉢で、外面はヨコ～左上がり斜め貝殻条痕調整がみられる。口縁部端部が小さく外反しておわる。1109は内面ヨコナデ調整で、粘土紐接合痕が残る、1110は内面左上がり斜め貝殻条痕調整のものである。

22B区表採・A区西側 (1112) 弥生時代前期のヨコ貝殻条痕調整の深鉢で、内面は左上がり斜めのナデ調整がされる。



第 82 図 弥生土器出土分布図

第3節 石器・石製品

石器に関しては石鏃、石匙、石錐、スクレーパー類、楔形石器、加工痕のある剥片、剥片、石核、礫器、打製石斧、磨製石斧、石錘、凹石、磨石・敲石類、砥石を確認した。器種名、【総点数】、登録番号の順に記載する。

1 石器

(1) 石鏃【総計 29】

33、35、40、52、62、63、64、65、67、68、72、74、75、77、78、79、80、81、82、83、84 は石鏃である。基部が残存しているものの多くが無茎凹基で、83、84 は無茎平基、40 は円基である。62、68、78 は素材剥片の主要剥離面を残している。40、84 は厚みのある剥片を用いている。

石材は黒曜石 13 点 (35、62、63、65、68、72、77、78、80、81)、安山岩 1 点、凝灰岩 2 点、溶結凝灰岩 11 点 (40、52、64、67、75、79、82、83、84)、下呂石 2 点 (33、74) である。

(2) 石匙【総計 9】

9、71、73、85、86、87 は石匙である。9、73、87 は縦長、71、85、86 は横長の形状を呈している。71 は縦長剥片、9、86 は横長剥片を素材としていと考えられる。

石材は、安山岩 3 点 (9、85)、溶結凝灰岩 4 点 (71、86、87)、泥質凝灰岩 2 点 (73) である。

(3) 石錐【総計 4】

1、18、41、42 は石錐である。18、42 は機能部に、1、40 は全縁に加工が施されている。1 は加工によって上部につまみを作出している。18、42 は縦長剥片を素材としている。

石材は黒曜石 2 点 (41、42)、安山岩 1 点 (1)、溶結凝灰岩 1 点 (18)、である。

(4) スクレーパー類【総計 35】

25、26、76、88、89、90、91、92、93、94 はスクレーパー類である。スクレーパー類とした石器の半数近くが最大長 5 cm 超、最大厚 1cm 前後となっており、大形でやや厚みのある剥片を素材としていたと考えられる。

石材は、黒曜石 2 点、安山岩 13 点 (76、93)、溶結凝灰岩 13 点 (88、89、90、91、92、94)、泥質凝灰岩 6 点 (25、26) である。

(5) 楔形石器【総計 3】

95 は楔形石器である。やや厚みのある素材剥片の周縁を加工している。

石材は黒曜石 2 点 (95)、泥質凝灰岩 1 点である。

(6) 加工痕のある剥片【総計 203】

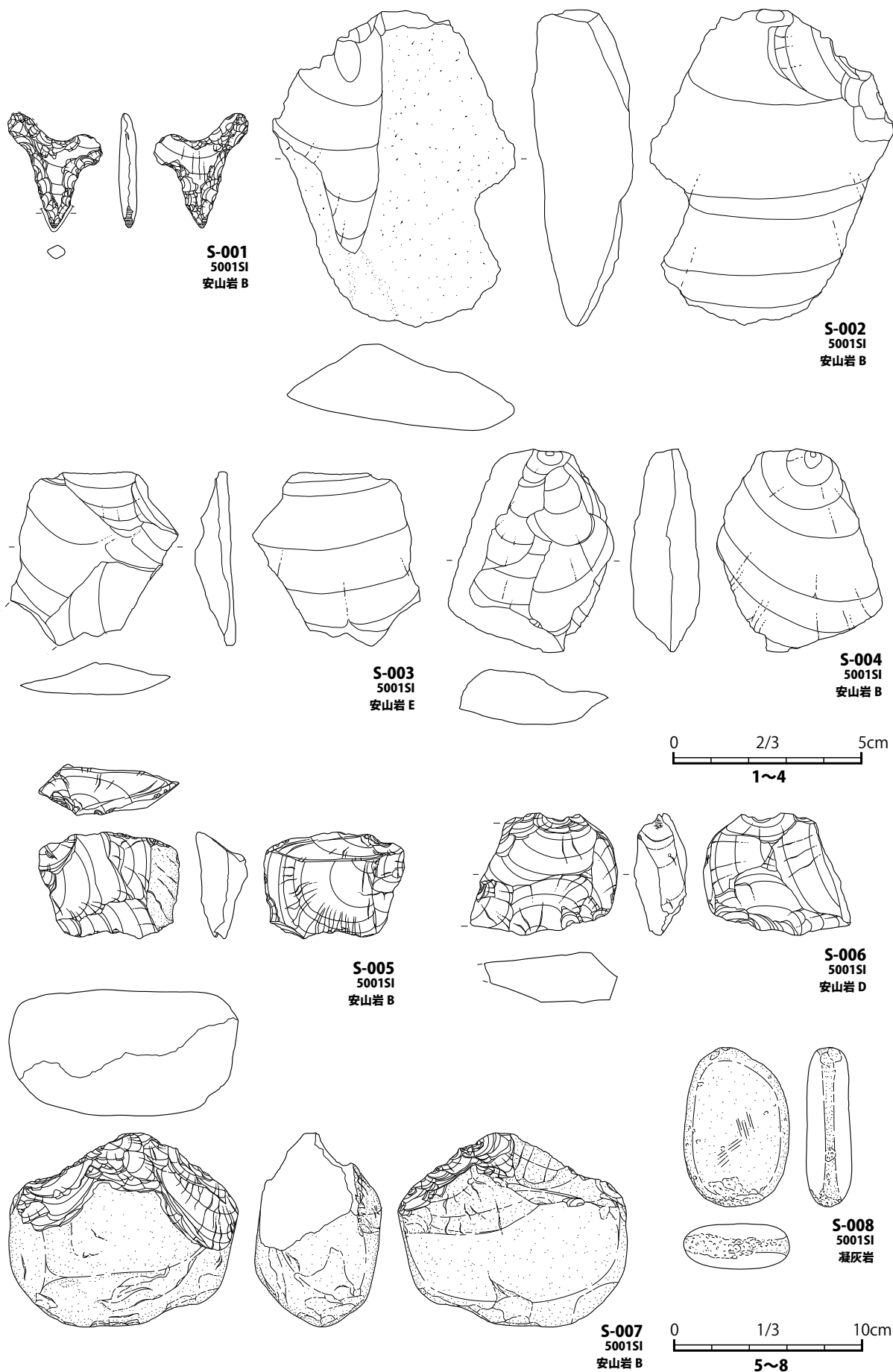
2、19、36、53 は加工痕のある剥片である。2、36 は原礫面を大きく残す大形の剥片を素材としている。26 は原礫面を残す剥片の両側縁を表から裏への連続した剥離を施している。

石材は黒曜石 13 点、安山岩 107 点 (2)、溶結凝灰岩 47 点 (19、53)、泥質凝灰岩 20 点 (36)、砂質凝灰岩 6 点、凝灰岩 6 点、下呂石 1 点、凝灰質泥岩 2 点、片麻岩 1 点である。

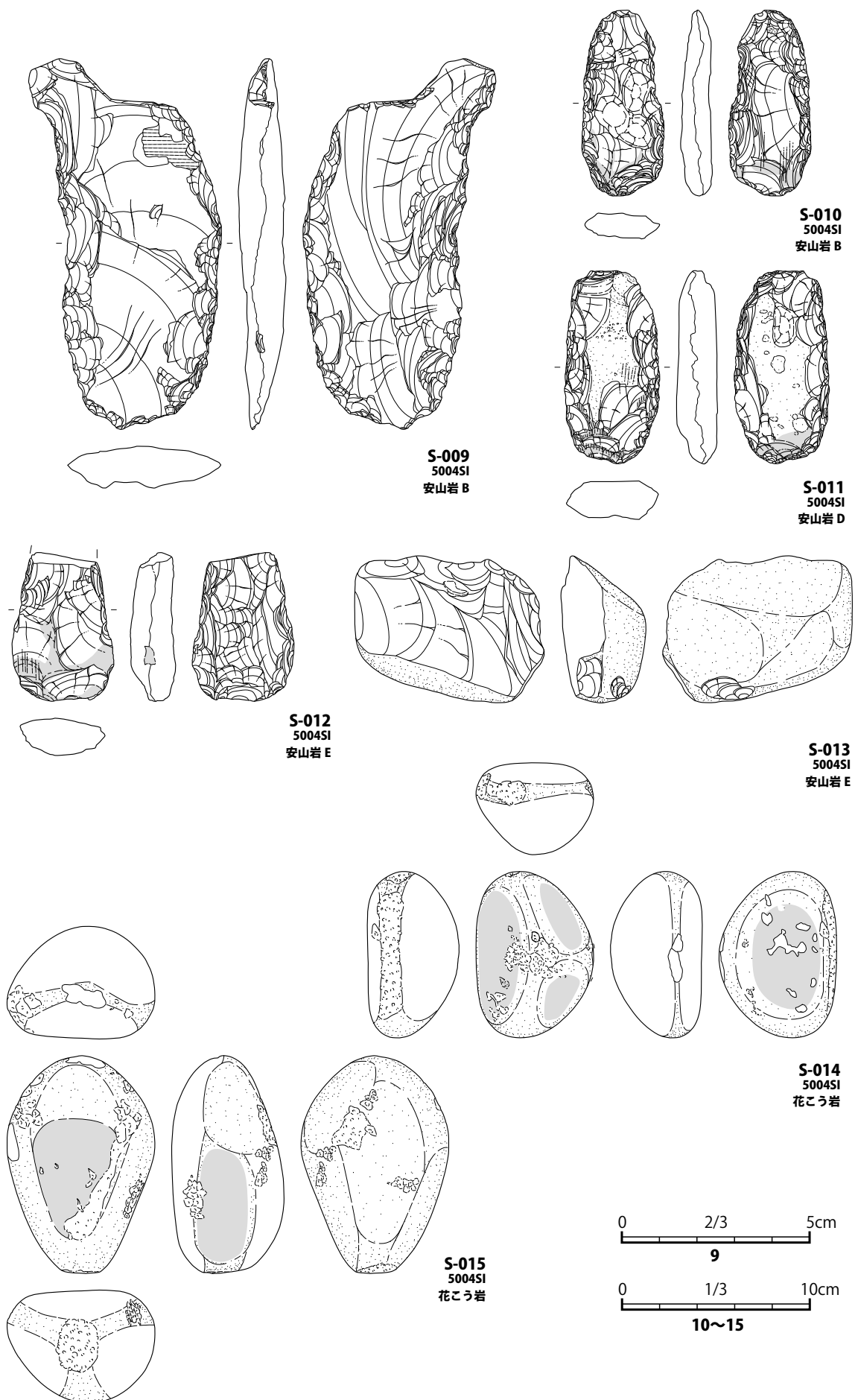
(7) 剥片【総計 1784】

3、4、20、27、32、43、44、45、46、47、54、58、60、61 は剥片である。4、20、43、46、47 は縦長剥片、3、28、32、44、45、54、58、60、61 は不定形の剥片である。4、27、61 は原礫面を残している。

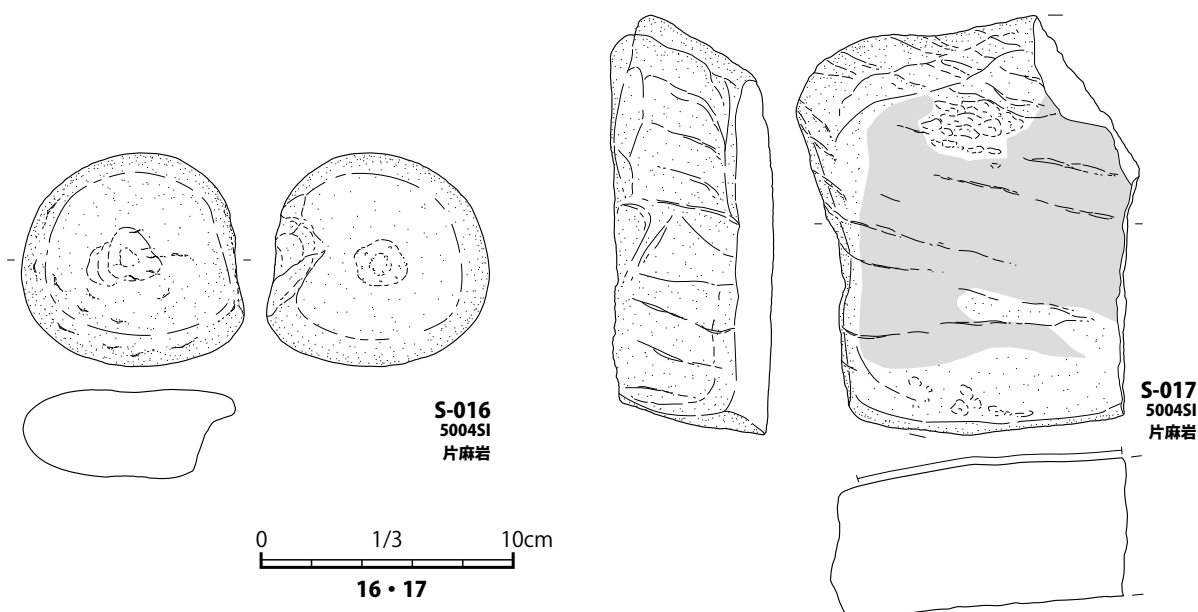
石材は黒曜石 105 点、安山岩 1430 点 (3、4、28、32、45、54、61)、溶結凝灰岩 365 点 (20、46、47)、泥質凝灰岩 175 点 (44、58)、砂質



第 83 図 5001SI 出土石器



第 84 図 5004SI 出土石器 1



第 85 図 5004SI 出土石器 2

凝灰岩 57 点、凝灰岩 76 点 (43)、凝灰質泥岩 7 点、凝灰質砂岩 4 点、下呂石 21 点、泥岩 3 点チャート 4 点 (60)、片麻岩 4 点、アプライト 2 点、松脂岩 1 点である。

(8) 石核【総計 309】

5、6、7、13、22、23、24、31、34、37、48、59、96 は石核である。7、13、22、24、31、34、37、59 は原礫面を残している。5、6、22、23、24、31、34、48、96 はさまざまな方向から剥離が行われる。13、59 は縁辺から剥片剥離を行っている。7、37 は礫器の可能性はある。

石材は安山岩 215 点 (5、6、7、13、22、23、24、31、34、37、59、96)、黒曜石 17 点 (48)、溶結凝灰岩 42 点、泥質凝灰岩 24 点、砂質凝灰岩 3 点、凝灰岩 5 点、下呂石、凝灰質砂岩 1 点、チャート 1 点である。

(9) 打製石斧【総計 143】

10、11、12、27、38、55、56、70、97、98、99、10、101、102、104、105、106、107、108、109、110、111、112 は打製石斧である。28、97、98 は分銅型、11、99、101、

102、103、107 は短冊型、10、12、100、108 は撥型、55、56、70、104、105、106、109、110、111、112 は不明である。38 は未製品と考えられる。

石材は安山岩 114 点 (10、11、12、56、70、97、98、102、103、106、107、108、109、110、111)、溶結凝灰岩 14 点 (55、99、100、104、105、112)、泥質凝灰岩 9 点 (28、101)、砂質凝灰岩 4 点 (38)、凝灰質砂岩 1 点、緑色片岩 1 点である。

(10) 磨製石斧【総計 12】

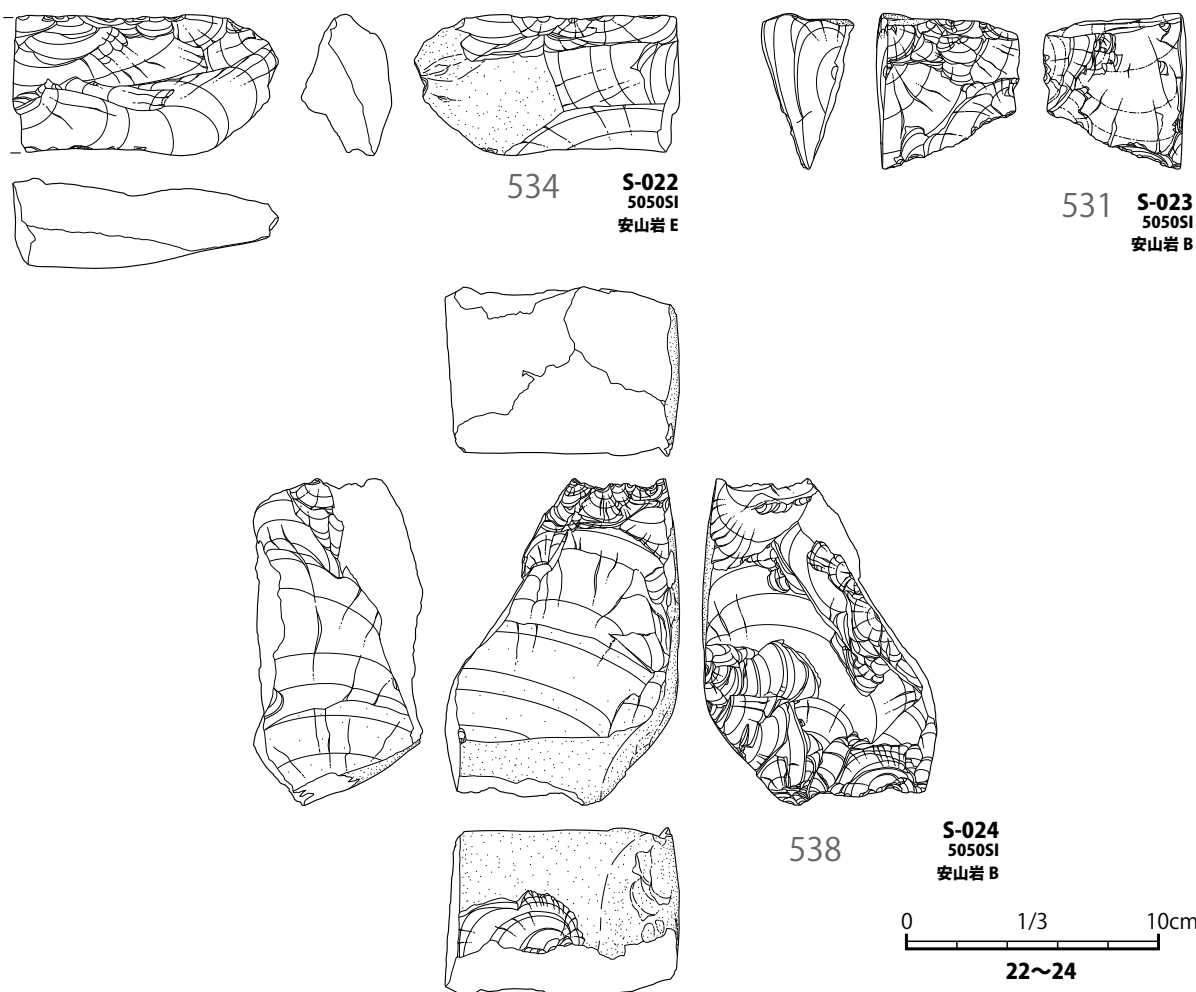
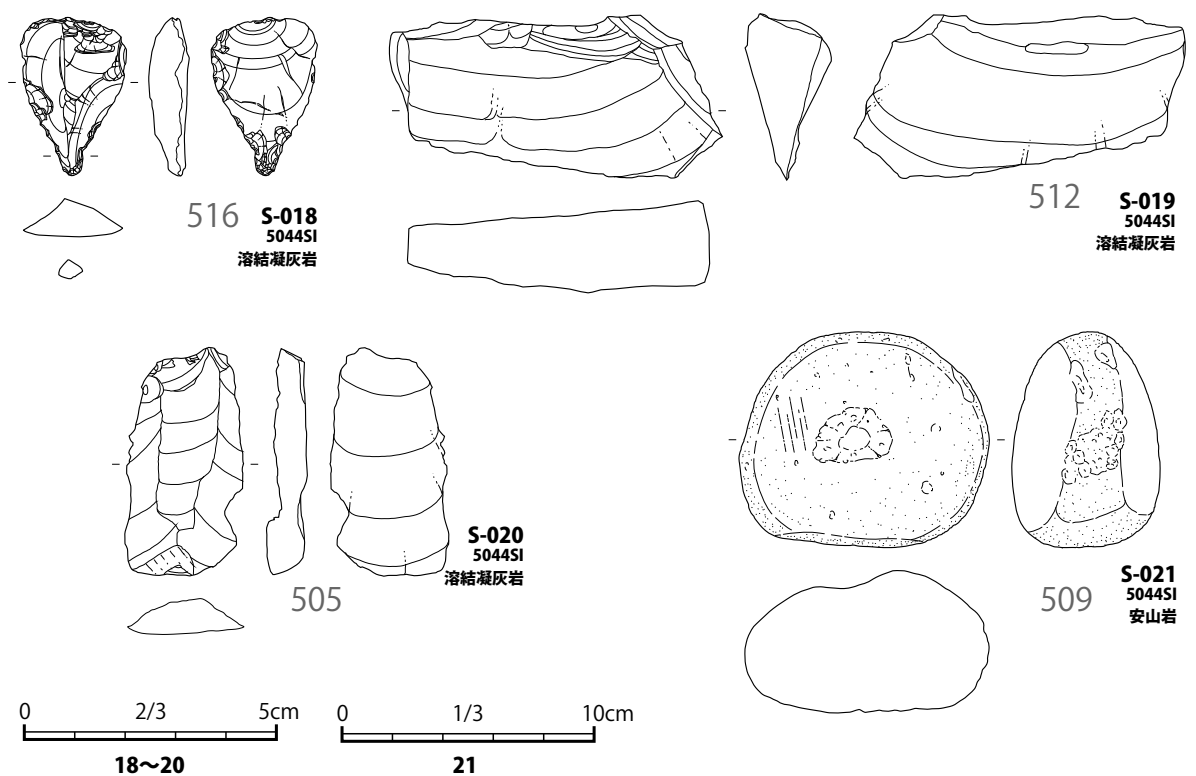
50、66、69、113、114、115、116、117、118 は磨製石斧である。66、69、113、114 は定角式、50、112、115、116、117、118 は乳棒状の石斧である。

石材は塩基性岩 8 点 (49、66、69、115、116、117、118)、蛇紋岩 1 点 (113)、閃緑岩 1 点、緑色片岩 1 点、滑石 1 点 (114) である。

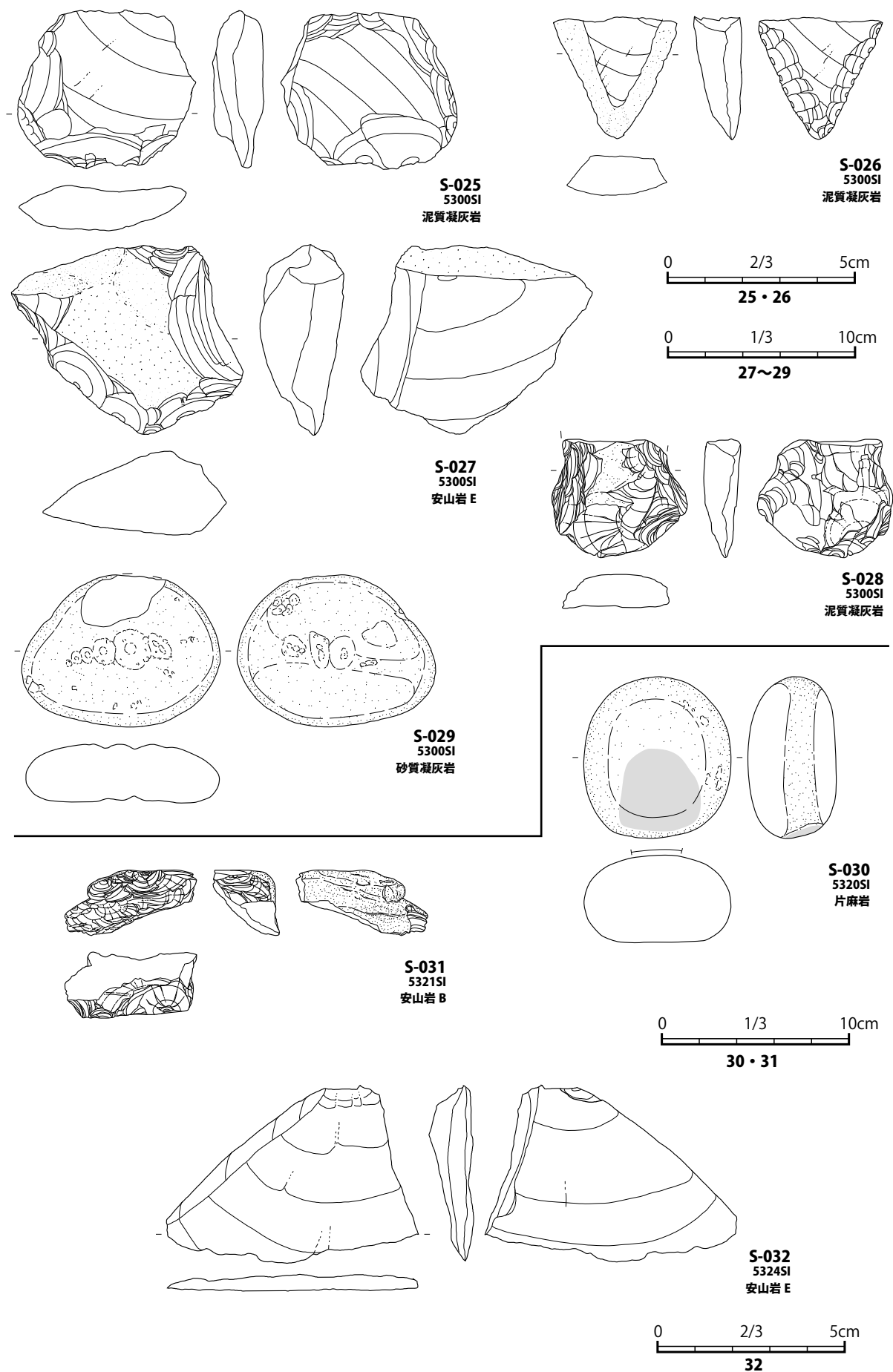
(11) 礫器【総計 3】

石材は安山岩である。

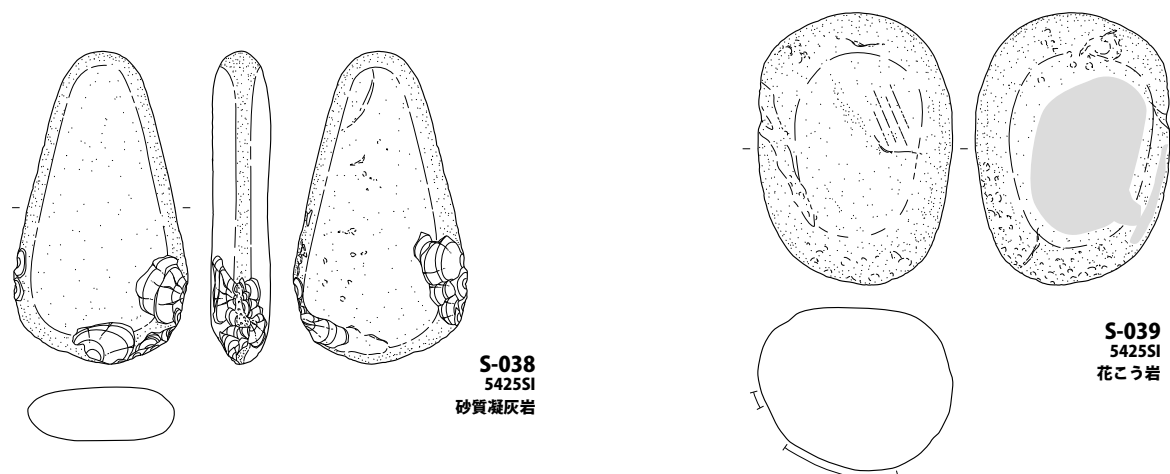
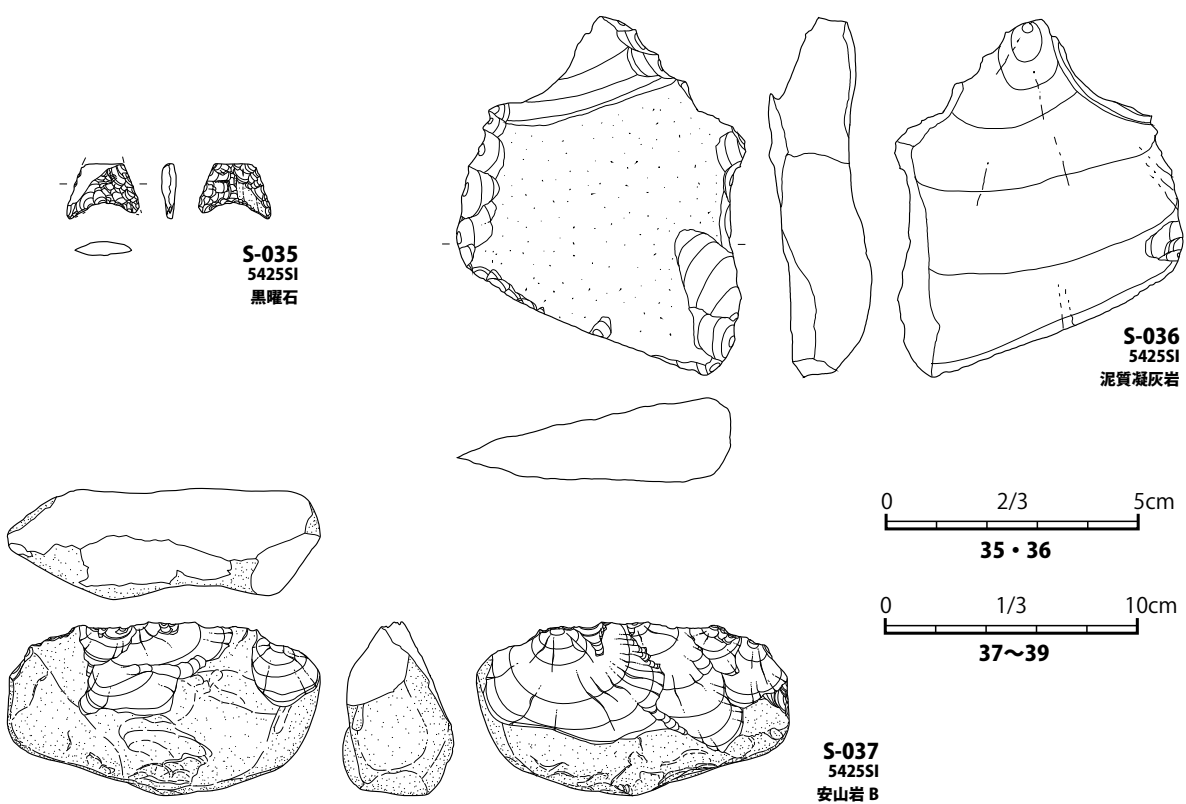
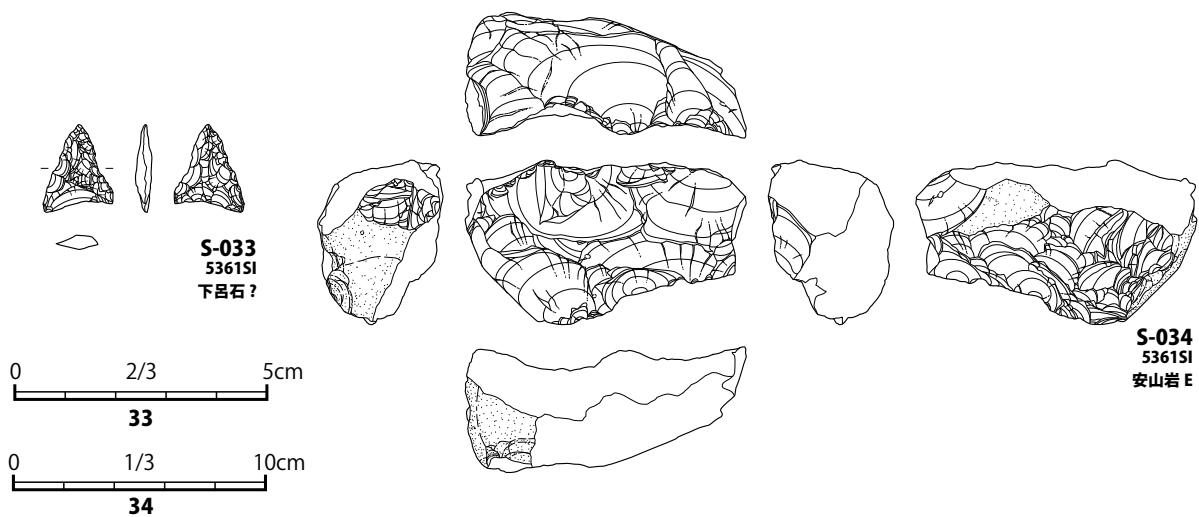
(12) 石錘【総計 26】



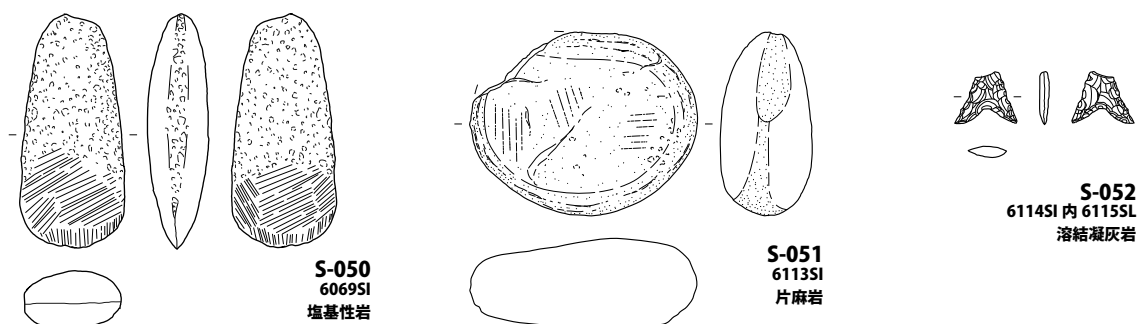
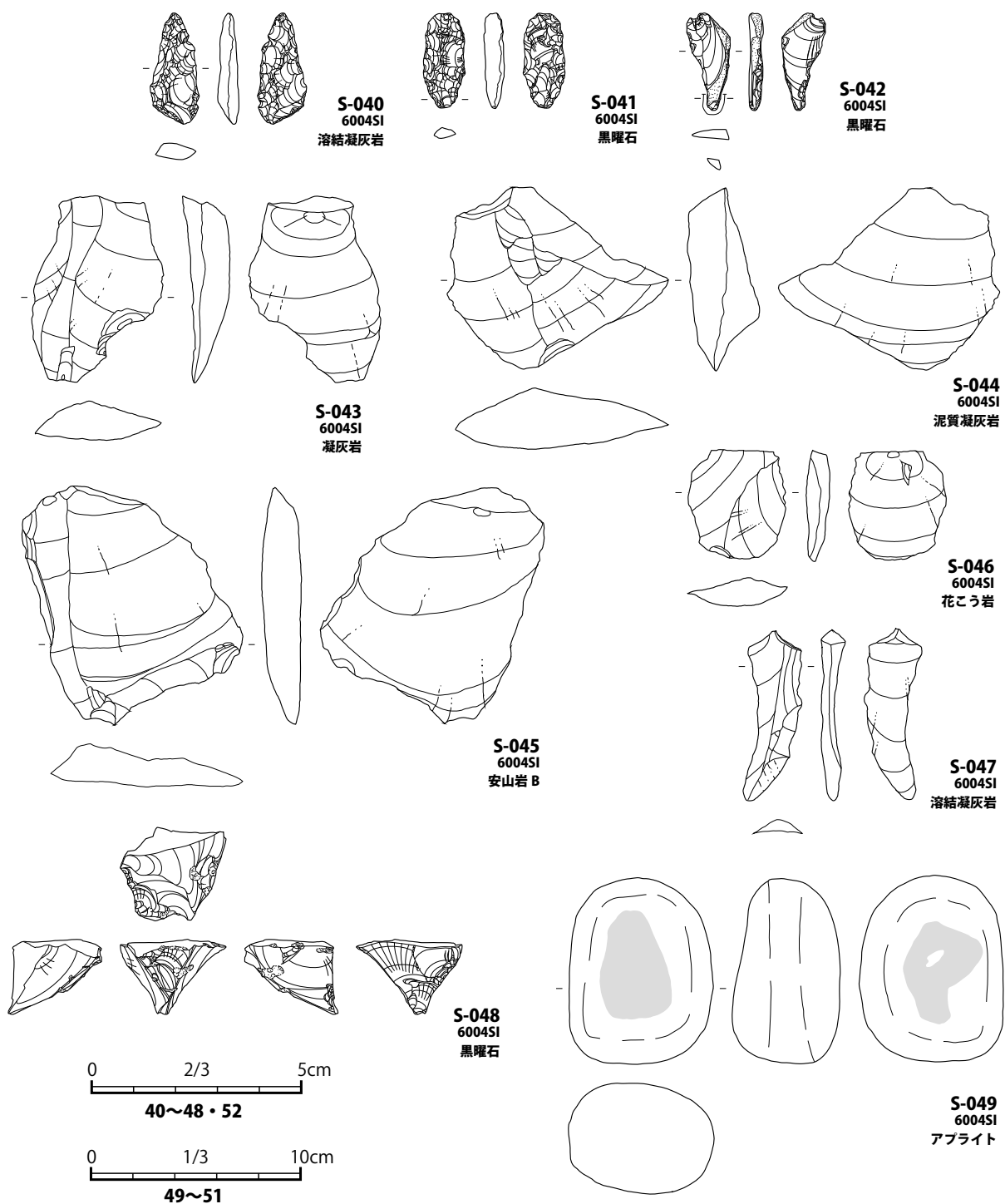
第 86 図 5044SI・5050SI 出土石器



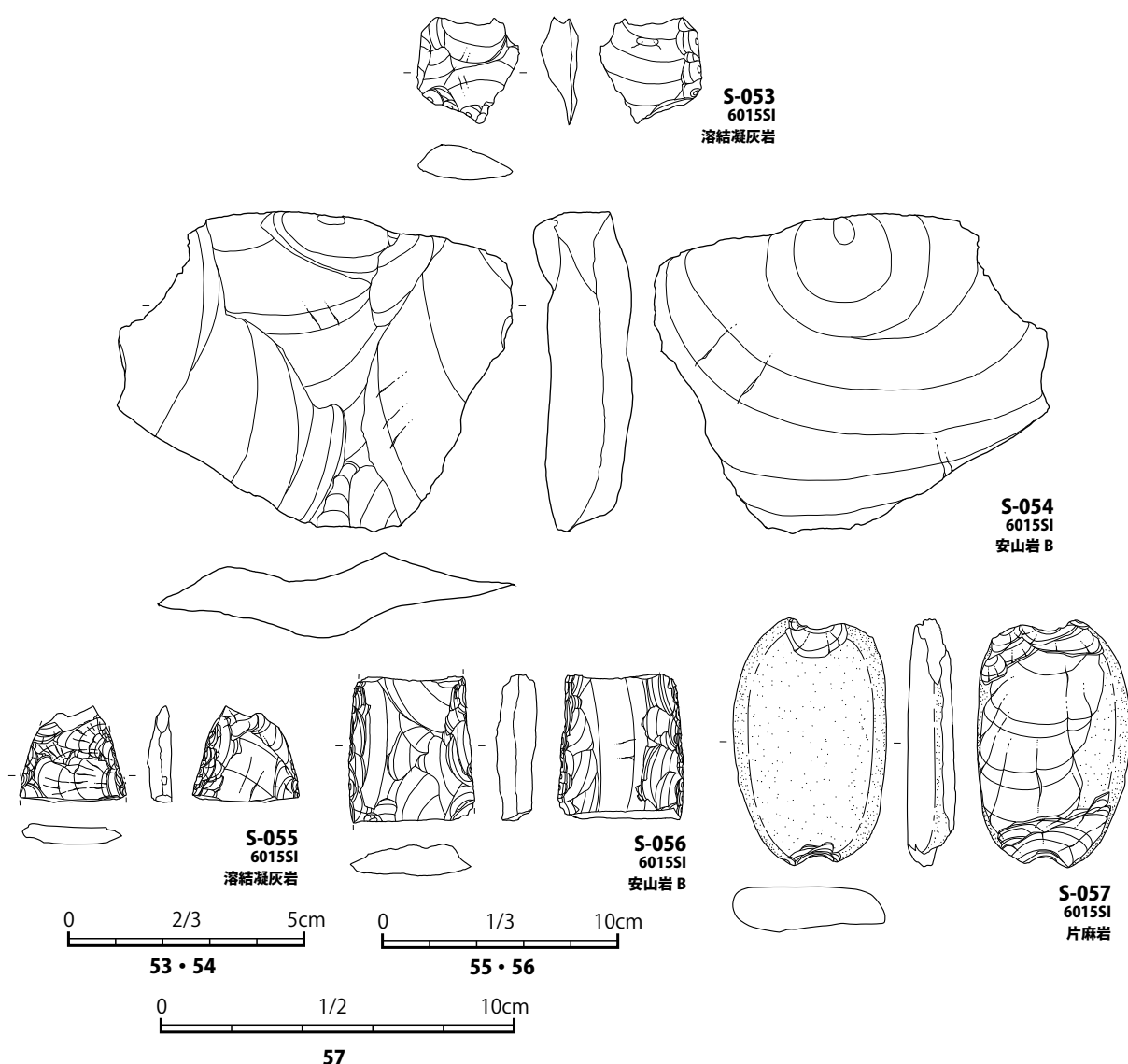
第 87 図 5300SI・5320SI・5321SI・5324SI 出土石器



第 88 図 5361SI・5425SI 出土石器



第 89 図 6004SI・6069SI・6113SI・6115SL 出土石器



第90図 6015SI出土石器

57、119、120、121、122、123、124、125、126、127、128は石錘である。57、125は打欠石錘、119、120、121、122、123、124は切目石錘、126、127、128は有溝石錘である。127は研磨が顕著で、ススのようなものが付着している。

石材は安山岩2点(119)、溶結凝灰岩1点、凝灰岩6点(121、125)、泥質凝灰岩1点、砂質凝灰岩2点(124、127)、凝灰質泥岩1点、塩基性岩5点(120、126)、閃緑岩1点(128)、片麻岩7点(57、122、123)である。

(13) 凹石【総計37】

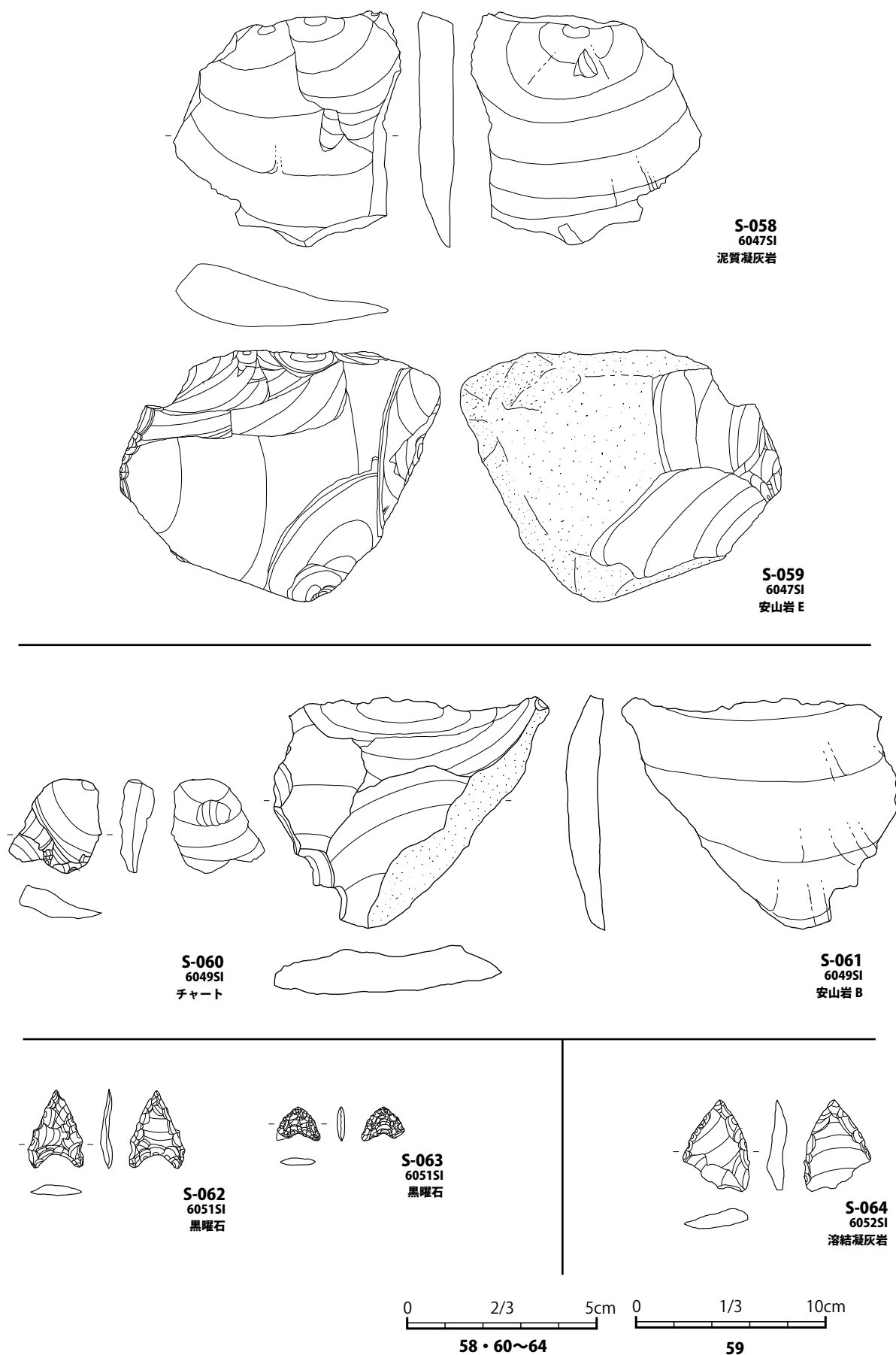
16、21、29、136、137は凹石である。16、29、137は表裏に凹みが見られる。

石材は安山岩9点(21)、泥質凝灰岩1点、砂質凝灰岩4点(29)、凝灰岩1点、凝灰質砂岩2点(137)、閃緑岩2点、花崗岩2点、片麻岩16点(16、136)である

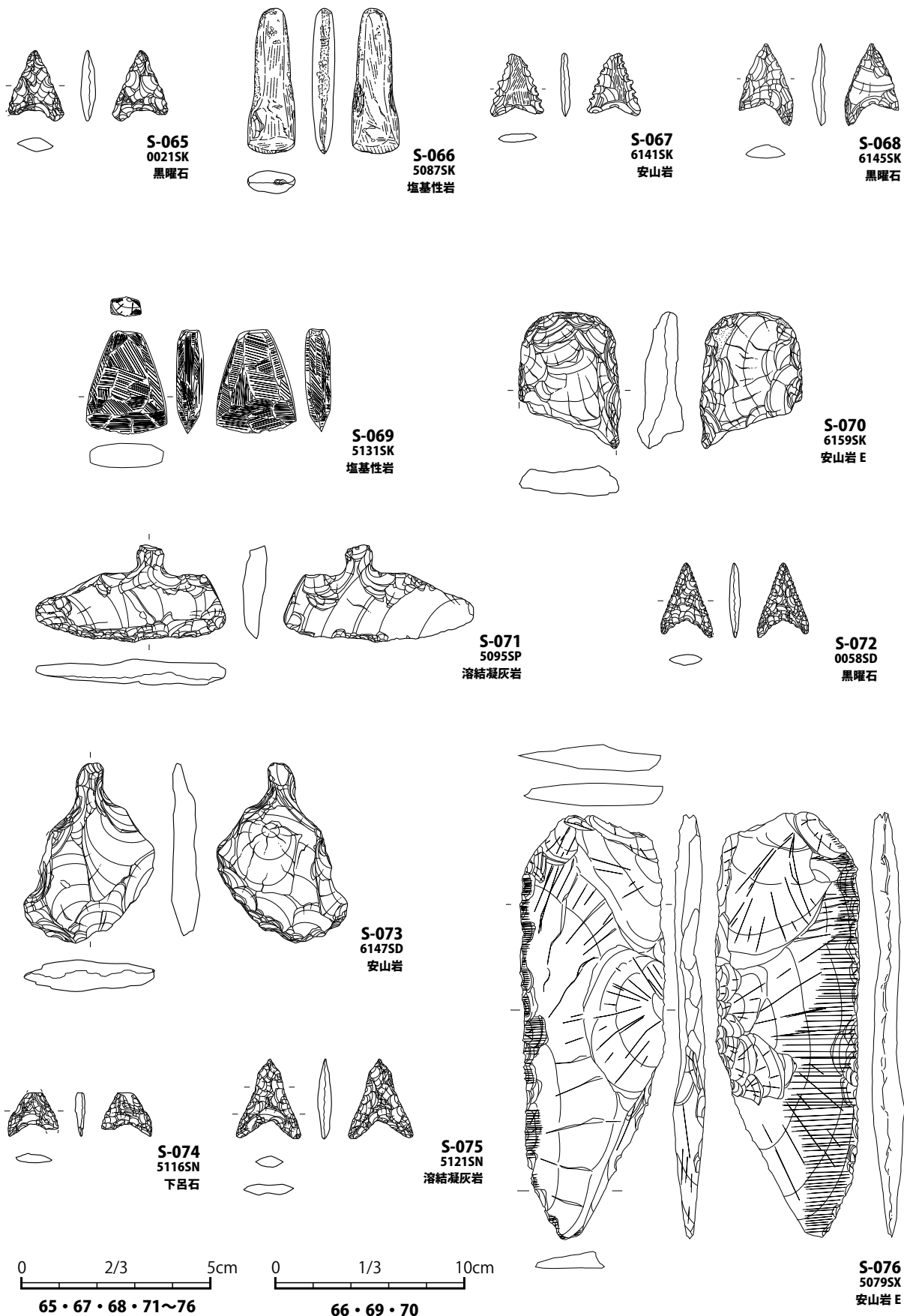
(14) 磨石・敲石類【総計177】

8、14、15、30、39、49、51、129、130、131、132、133、134、135は磨石・敲石類である。

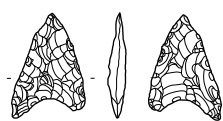
石材は安山岩36(135)、泥質凝灰岩2点、砂質凝灰岩18点、凝灰岩11点(8)、凝灰質泥岩1点、凝灰質砂岩5点、頁岩1点、砂岩1



第 91 図 6047SI・6049SI・6051SI・6052SI 出土石器



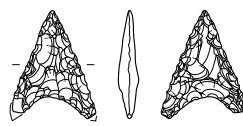
第 92 図 土坑内出土石器



S-077
検出 1
黒曜石



S-078
検出 1
黒曜石



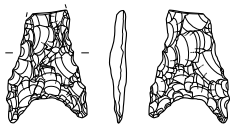
S-079
検出 1
溶結凝灰岩



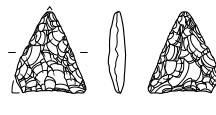
S-080
検出 1
黒曜石



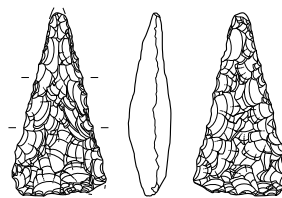
S-081
検出 2
黒曜石



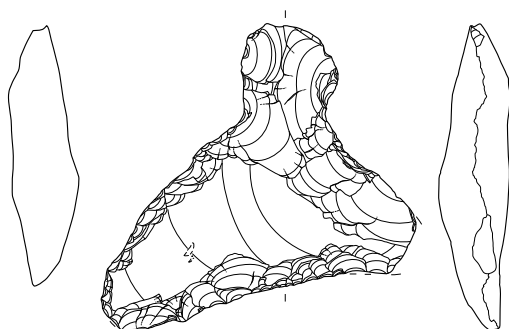
S-082
検出 1
溶結凝灰岩



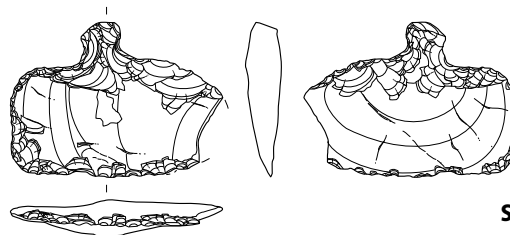
S-083
検出 1
溶結凝灰岩



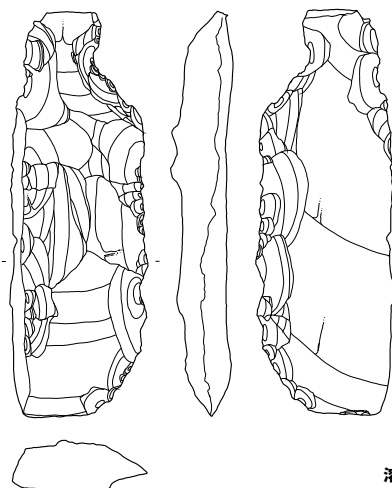
S-084
検出 2
溶結凝灰岩



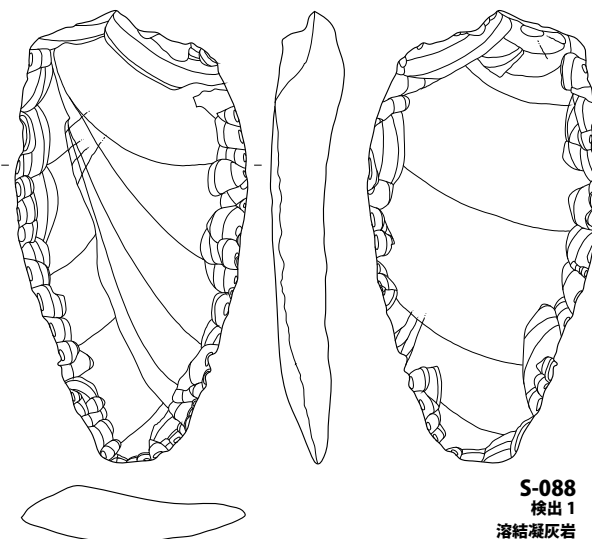
S-085
検出 1
安山岩 E



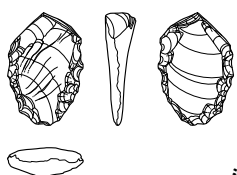
S-086
検出 1
溶結凝灰岩



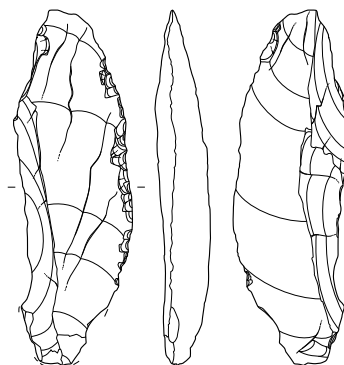
S-087
検出 1
溶結凝灰岩



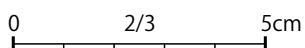
S-088
検出 1
溶結凝灰岩



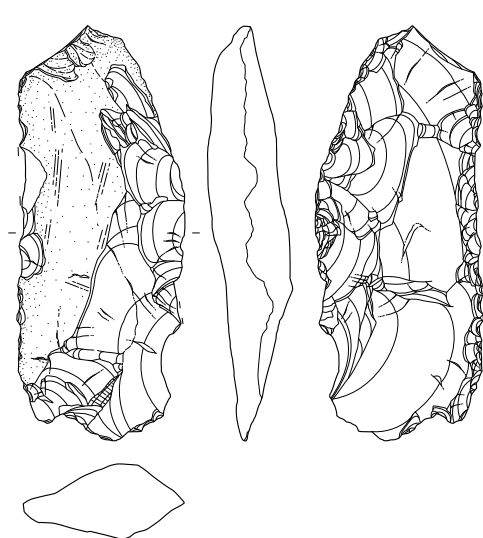
S-089
検出 1
溶結凝灰岩



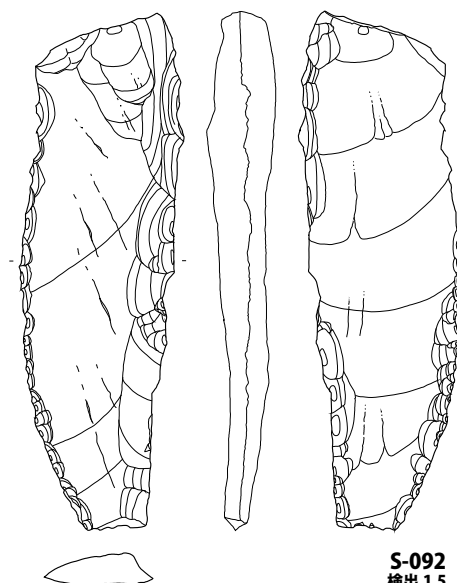
S-090
検出 1
溶結凝灰岩



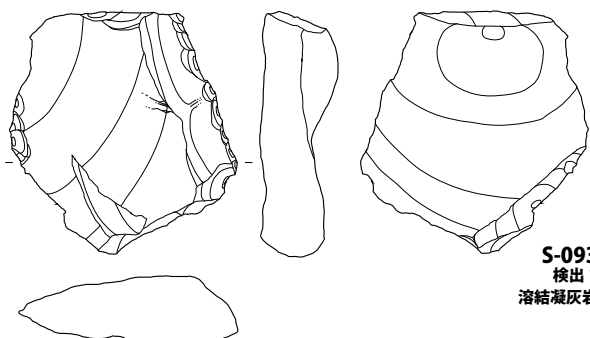
第 93 図 検出時など出土石器 1



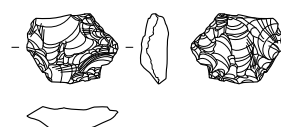
S-091
検出 1
溶結凝灰岩



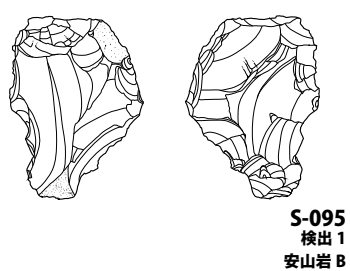
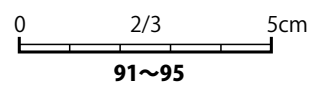
S-092
検出 1.5
安山岩 B



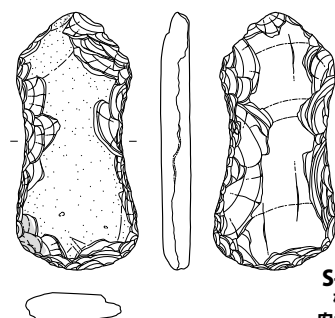
S-093
検出 1
溶結凝灰岩



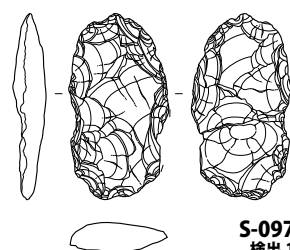
S-094
検出 1
黒曜石



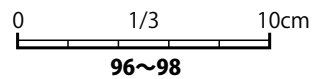
S-095
検出 1
安山岩 B



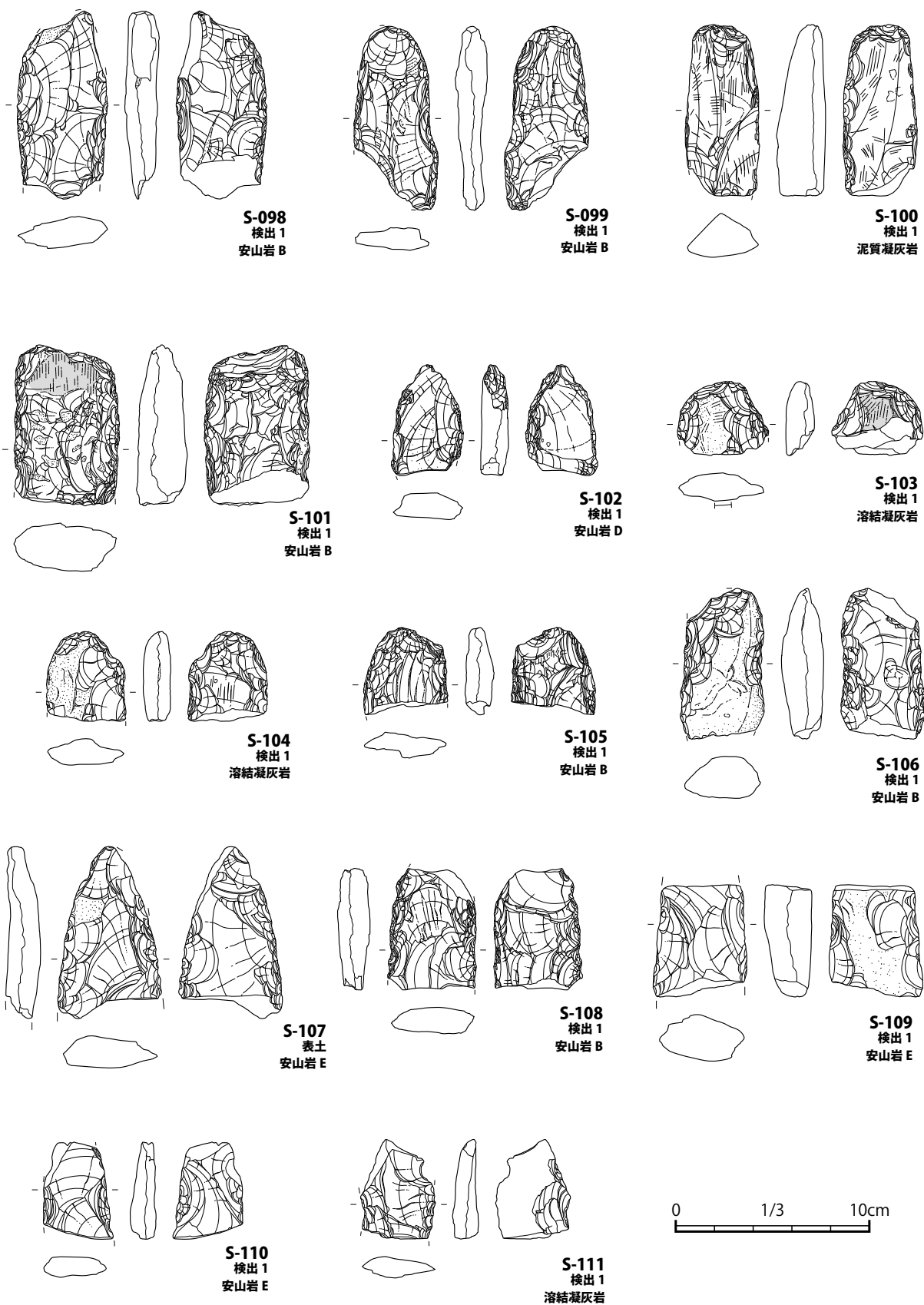
S-096
検出 1
安山岩 E



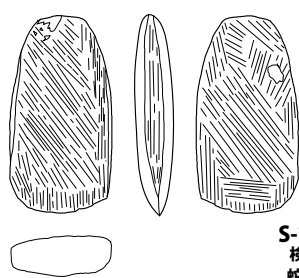
S-097
検出 1
安山岩 D



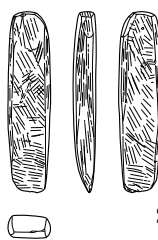
第 94 図 検出時など出土石器 2



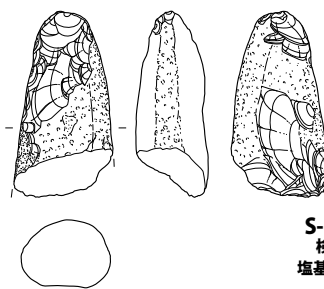
第 95 図 検出時など出土石器 3



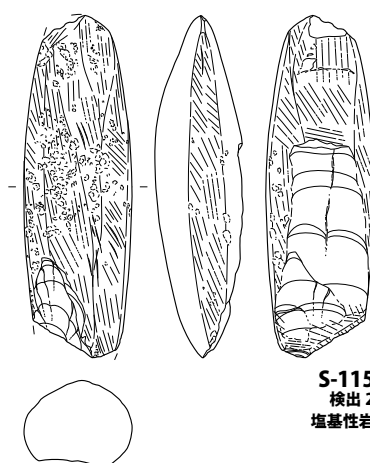
S-112
検出 1
蛇紋岩



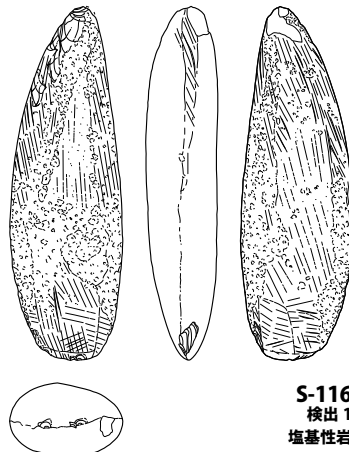
S-113
検出
滑石



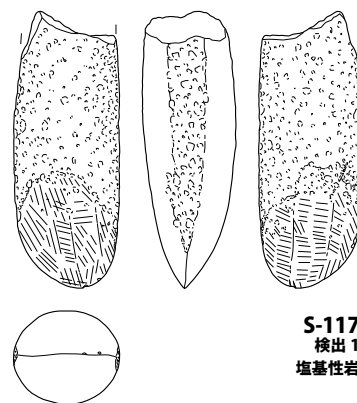
S-114
検出 1
塩基性岩



S-115
検出 2
塩基性岩

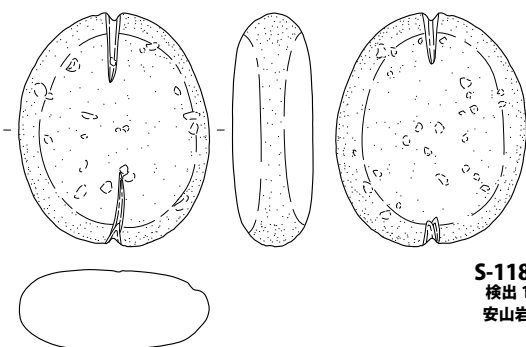


S-116
検出 1
塩基性岩

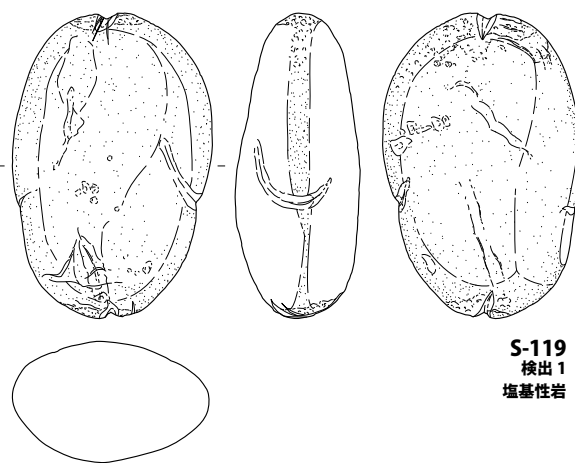


S-117
検出 1
塩基性岩

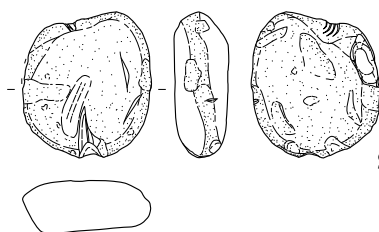
0 1/3 10cm
113~118



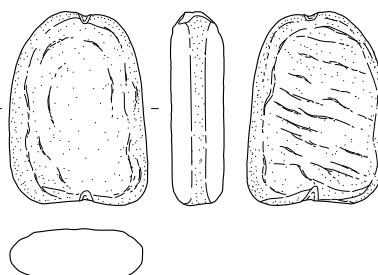
S-118
検出 1
安山岩



S-119
検出 1
塩基性岩



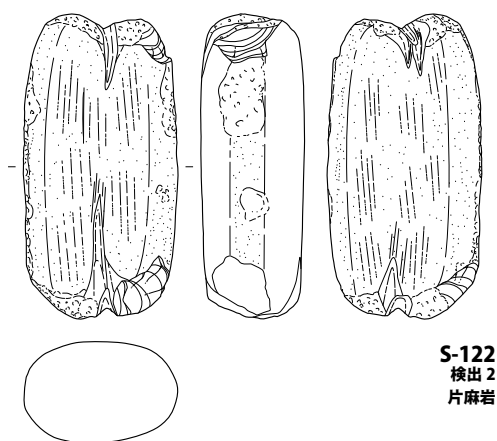
S-120
検出 1
凝灰岩



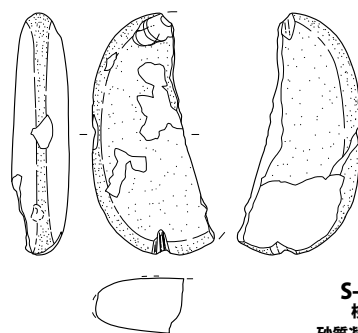
S-121
検出 2
片麻岩

0 1/2 10cm
119~122

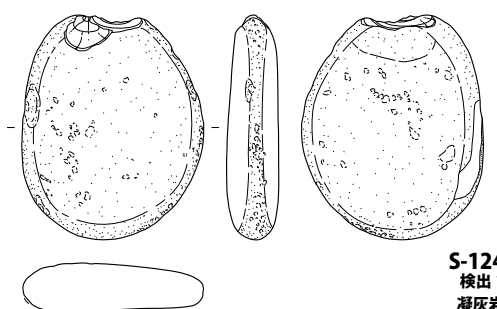
第 96 図 検出時など出土石器 4



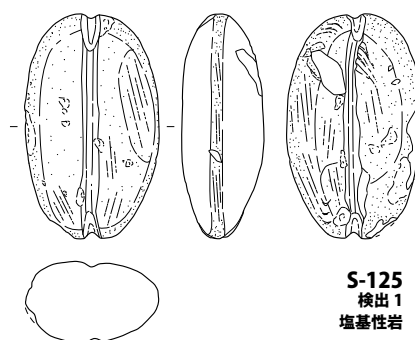
S-122
検出 2
片麻岩



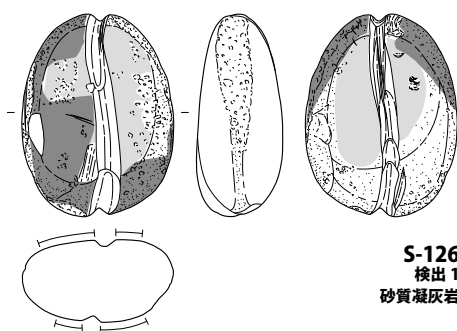
S-123
検出 2
砂質凝灰岩



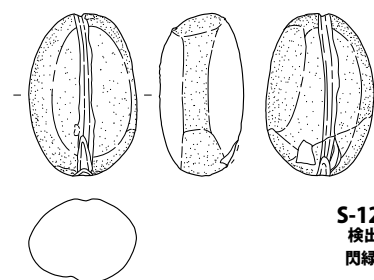
S-124
検出 1
凝灰岩



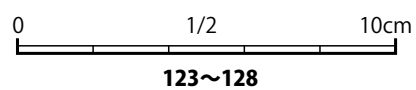
S-125
検出 1
塩基性岩



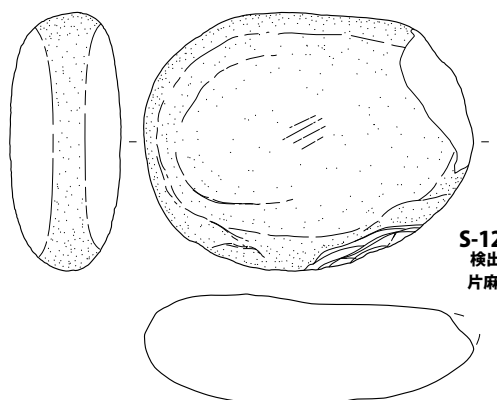
S-126
検出 1
砂質凝灰岩



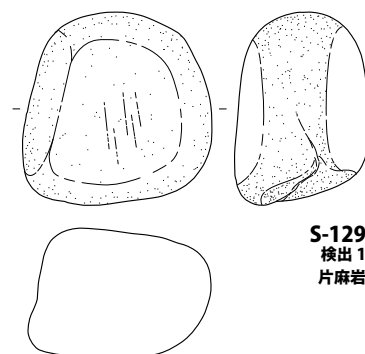
S-127
検出 1
閃緑岩



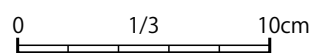
123~128



S-128
検出 1
片麻岩

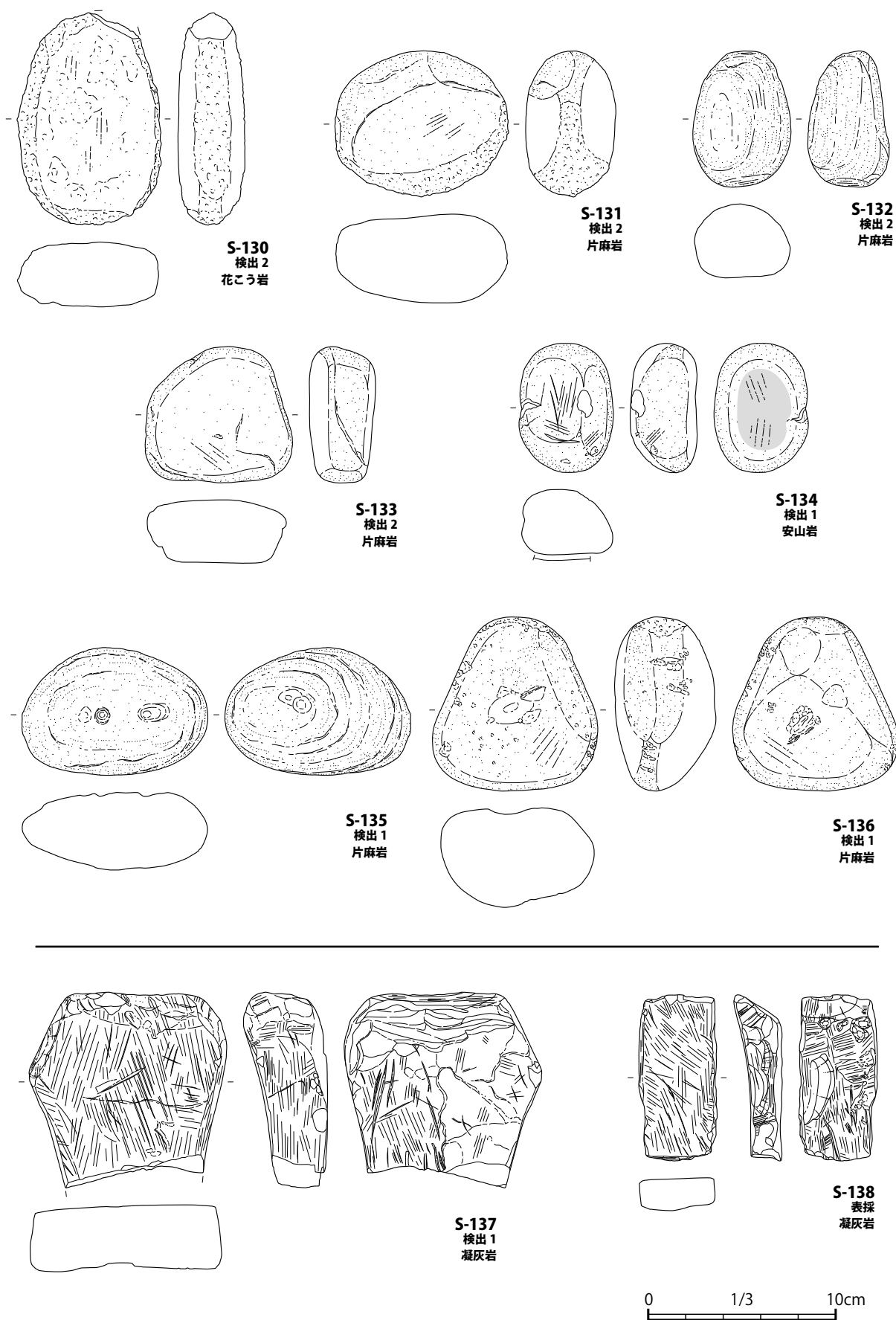


S-129
検出 1
片麻岩

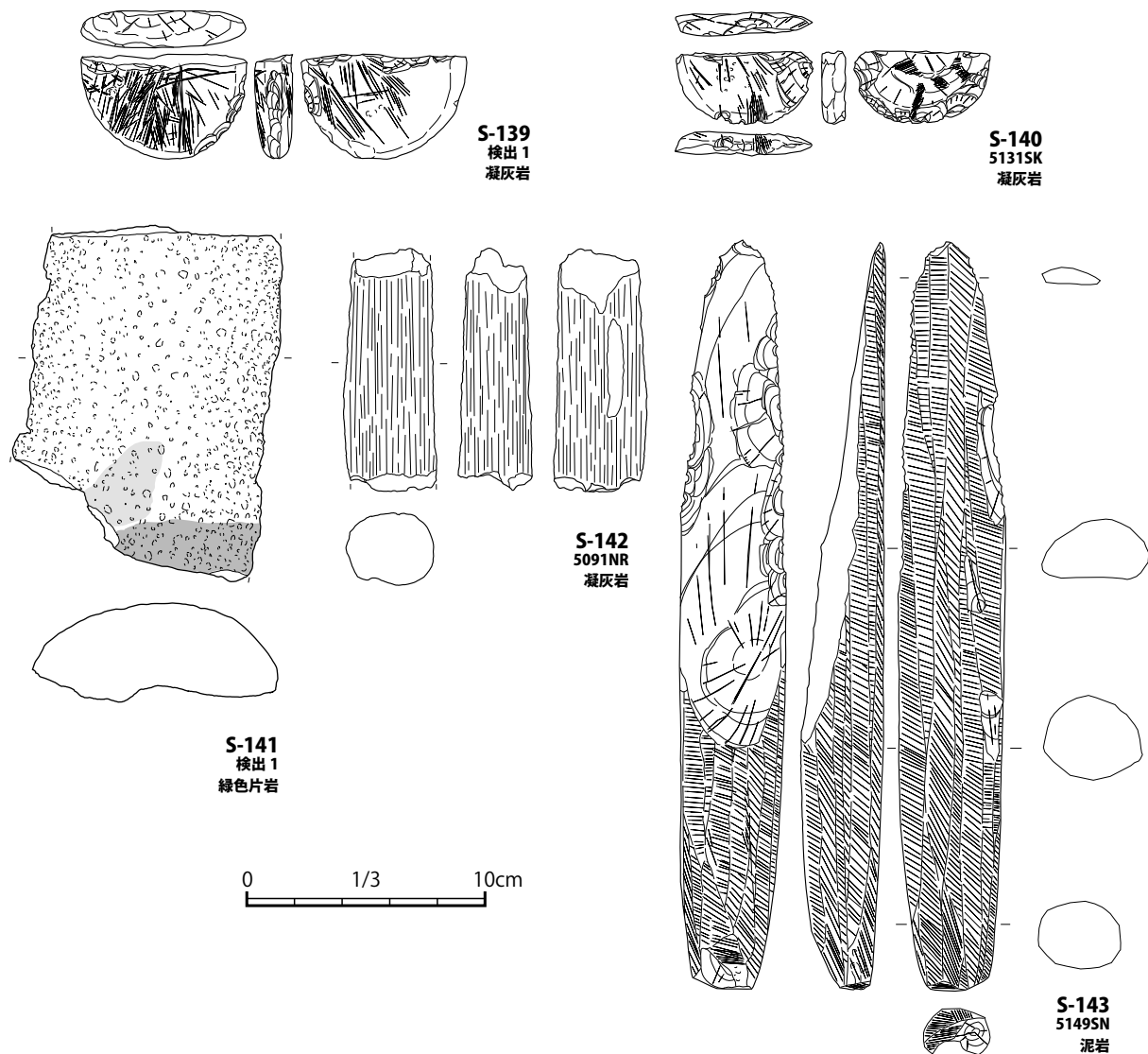


129・130

第 97 図 検出時など出土石器 5



第 98 図 検出時など出土石器 6



第 99 図 石製品

点、閃緑岩 3 点、片麻岩 69 点 (30、51、129、130、132、133、134)、花崗岩 16 点 (14、15、39、131)、アプライト 14 点 (49) である。

(15) 砥石【総計数 17】

17、138、139 は砥石である。石材は安山岩 1 点、泥質凝灰岩 2 点、砂質凝灰岩 3 点、凝灰岩 5 点 (138、139)、凝灰質泥岩 1 点、17 は片麻岩 5 点 (17)、である。

(16) 石皿台石類【総計数 63】

石材は安山岩 3 点、砂質凝灰岩 1 点、砂岩 1 点、片麻岩 43 点、花崗岩 10 点、アプライト 5 点

(1) 岩偶・岩版類【総計数 11】

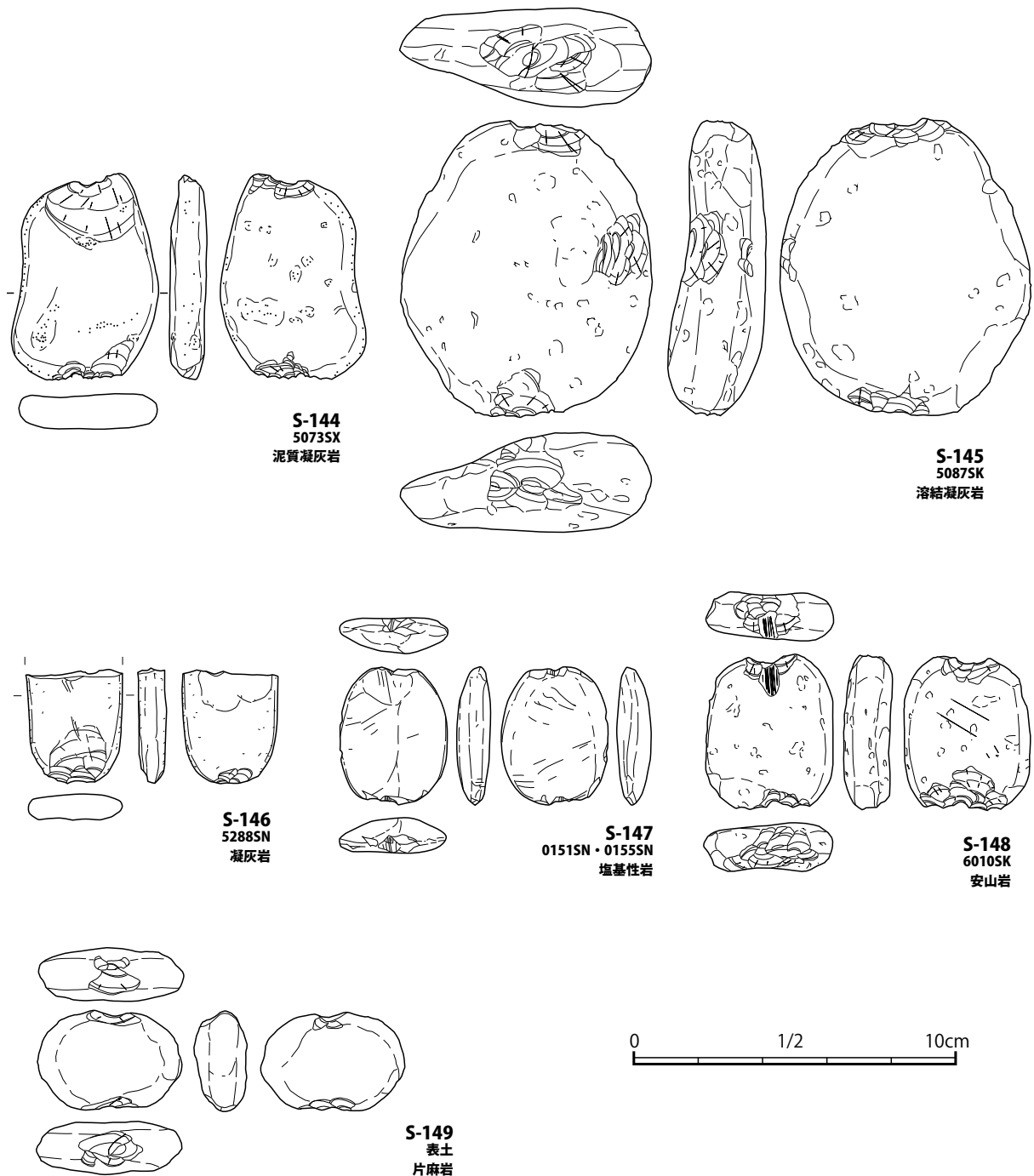
140、141 は岩偶・岩版類である。素材はどちらも扁平な円礫を用いる。137 は表裏面に線刻が施される。上部は折損している。138 表面に線刻が見られる。上半分は折損しており、裏面は剥落している。

石材は泥質凝灰岩 1 点、砂質凝灰岩 3 点、凝灰岩 7 点 (137、138)、である。

(2) 石棒【総計数 3】

142、143、144 は石棒である。石材は凝灰岩 1 点 (143)、141 は泥岩 1 点 (144)、緑色片岩 1 点 (142) である。 (社本有弥)

2 石製品



第 100 図 石器図面補遺 1

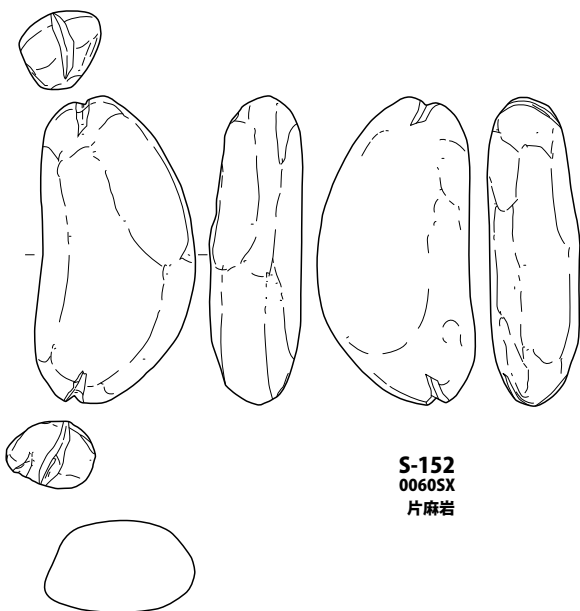
第 100 図は打欠石錘、第 101 図は切目石錘および有溝石錘とされるものを追加で図示した。打欠石錘に対して、切目石錘および有溝石錘では、使用素材および製作時に研磨調整が認められるなど、両者では明らかに資料の性質が大きく異なることが窺える。特に、155 は長軸方向に加えて短軸方向も溝が施されるなど、石製品の様相を呈

すると考えられる。

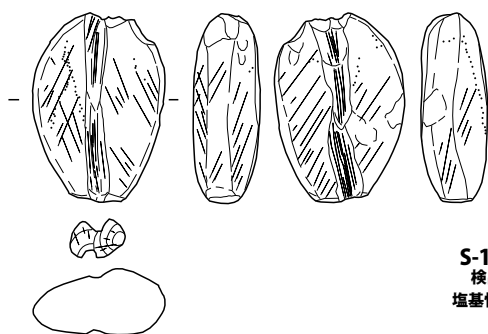
なお、S-138 および 139 は、古代以降の資料と考えられることを追記しておく。(川添和暁)



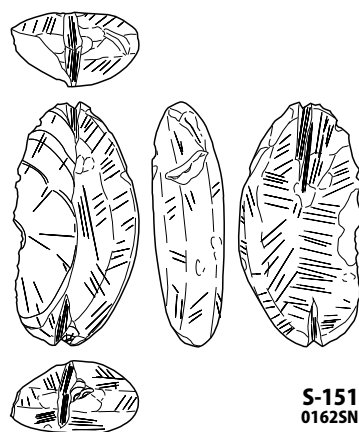
S-150
検出 1
凝灰岩



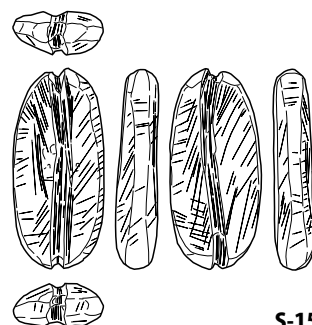
S-152
0060SX
片麻岩



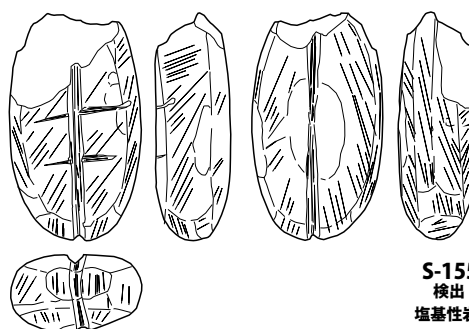
S-154
検出 1
塩基性岩



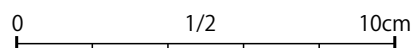
S-151
0162SN
凝灰岩



S-153
6013SX
凝灰質泥岩



S-155
検出 1
塩基性岩



第 101 図 石器図面補遺 2

第4節 古代～近世の土器・陶磁器類

概要 本節では、大崎遺跡出土の古代・中世・近世に属する土器・陶磁器類を提示する。本遺跡における古代以降の出土遺物による時期区分は、まず灰釉陶器（K-90 号窯式期・O-53 号窯式期・H-72 号窯式期・百代寺窯式期）と土師器（三河型甕・清郷型鍋）が古代で、暦年代は 9～11 世紀である。次に、山茶碗（山茶碗尾張型第 3 型式～第 11 型式）と瀬戸・美濃窯産陶器（古瀬戸期・大窯段階）、中国大陸産の青磁・白磁と土師器（伊勢型鍋・内耳鍋）が中世に該当し、暦年代は 12～16 世紀である。また登窯期の瀬戸・美濃窯産陶器が近世（17～19 世紀）に対応する。当該期の土器・陶磁器の総量は 27 リットルコンテナ（27l 入）で 3 箱に収まる量であり、縄文時代・弥生時代の土器に比べて圧倒的に少ない。また全 398 点のほとんどが小片であり、完形や接合により形状が復元できたものは数点に過ぎない。

古代で最も多いのは灰釉陶器で、破片点数は 65 点である（うち実測点数 28 点）。最古段階に位置付けられるのは K-90 号窯式期新段階（2044 など）で 9 世紀後葉である。これに対して 9 世紀の土師器は三河型甕（2053）1 点のみで、それ以外の 4 点は全て 10 世紀後半～11 世紀の清郷型鍋である。ただしその口縁形態はさまざまで、これらを時期差とみれば一時期あたりの数量は少なくなる。

中世は山茶碗が主体的となる一方、土師器鍋は前半の伊勢型鍋と同後半の内耳鍋に分かれる。前者は伊勢地域（特に南勢地域）に系譜をもつ胴部器壁の薄い（0.3cm 以下）鍋形土器である。胴部外面に顕著なハケ調整痕跡がみえる一方で内面は指ナデ調整痕跡とハケ調整痕跡の両者がみられ

る。胴部上半でくびれその上で大きく外反する口縁部となるが、その上端は内面側に折り曲げて肥厚させるとともに内湾させる。ただし器壁が極めて薄く残存は口縁部などに限られる。後者は、口縁部内面に吊り下げ用の穴（内耳）が付き、主に 15 世紀後半～16 世紀に生産・流通したものである。尾張・三河地域では形態から数種に分類され、当該遺跡では主に東三河～遠江地域で分布する「く」の字形」の型式が出土している。なお上記以外には輸入磁器（青磁・白磁）や常滑窯産壺・甕、古瀬戸（瓶類・平碗など）がある。

近世の遺物はごくわずかで、瀬戸・美濃窯産染付碗などが数点みられるのみである。しかも時期は幕末から近代にかけてのものである。

【21A 区遺構】

21A 区 032SP 2001 は灰釉陶器碗の小片で直線的な体部で口縁がわずかに玉縁状となる。内外面に施釉されていることから K-90 号窯式期で 9 世紀後半代となる。

21A 区 0129SK 2002 は山茶碗で、厚みのある体部と丸みのある高台が特徴で渥美窯・幸田窯系とみられる。底部内面は使用で摩耗している。時期は 12 世紀代である。

21A 区 0138SN・0139SN 間畦畔 2003 はロクロ土師器の小皿である。底部からの立ち上がりが明瞭で古代の杯に近い形態である。器面に雲母が多く認められる。南設楽郡域（新城市域）でみられるタイプと同一である。12 世紀～13 世紀前半に位置づけられる。

21A 区 0145SD 2004 は山茶碗の底部である。渥美・幸田窯系とみられる。底部内面は使用で摩耗している。

21A 区 5033SK 2005 は山茶碗類の底部で高台は貼り付け部分で剥がれている。底部内面は使用で摩耗している。

21A 区 5140SP 2006 は土師器伊勢型鍋である。水田畦畔に掘られた小ピットから破砕された状態で出土したが、底部を除く全形の約 60% が残存していることから埋納されたものと考えられる。外傾する口縁部は若干肥厚して内側に折り返す。胴部外面と口縁部内面はハケ調整、胴部内面と口縁部外面は指ナデ調整である。やや長めの頸部が特徴で、時期は 13 世紀後葉～ 14 世紀中葉とみられる。

21A 区 5176SN 2007 は山茶碗の底部である。渥美・幸田窯系とみられる。底部内面は使用で摩耗しているだけでなく煤が付着している。

【21B 区遺構】

21B 区 5233SN 2008 は山茶碗の口縁部である。渥美・幸田窯系と考えられる。

21B 区 5234SN 2009 は山茶碗の底部小片である。高台は三角形で小さい。尾張型に分類される。

21B 区 5255SN 2010 は灰釉陶器の段皿である。内面は灰釉がハケ塗りされている。K-90 号窯式期に位置づけられる。

21B 区 5380SN 2011 は灰釉陶器碗の口縁部内面に 1 条の凹線が巡っている。体部の立ち上がりは若干外反しつつ直線的で K-90 号窯式期である。2012 は山茶碗の口縁部である。器形は直線的で器壁は 0.5cm 以下と薄い。これらの特徴から東濃系で丸石 3 号窯式期（12 世紀末～ 13 世紀初頭）と考えられる。

21B 区 5288SN 2013 は灰釉陶器の碗である。体部は直線的で口縁部内面に凹線が 1 条廻り、K-90 号窯式期と考えられる。

21B 区 5398SN 2014 は瀬戸・美濃窯産陶器の鉄釉徳利である。上半部はロクロ目が目立つ。欠損する頸部から上方以外は残存している。時期は近代とみられる。

【22A 区遺構】

22A 区 1001SL 2015 は山茶碗類の陶丸である。直径 2.1cm の球形をしている。表面には花崗岩の小片が 1 か所埋め込まれている。

22A 区 1006SD 2016 は羽釜で、主に中世前半につくられた鍋の一形態である。内外面に煤が付着しており、遺跡内で使用された可能性が高い。

22A 区 1013SN 2017 灰釉陶器の碗である。全体に内湾した体部で O-53 号窯式期であろう。内外面に施釉。

22A 区 1025SN 2018 は土師器内耳鍋の口縁部小片で、屈曲部から外反する口縁部であることから「くの字形」に分類される。煤や焦げが付着している。

22A 区 1027SN 2019 は灰釉陶器の碗で、外面無釉である。O-53 号窯式期に相当する。

22A 区 1028SN 2020 は青磁碗で蓮弁文碗である可能性がある。体部外面の立ち上がりに施文がある。

22A 区 1039SN 2021 は山茶碗の小皿である。口縁部内面の全面に降灰釉が掛かっていることから重ね焼きの最上部に置かれていたと考えられる。降灰釉は使用により若干剥がれている。2022 は山茶碗類の無台小皿である。焼成や形態から尾張型に分類される。

22A 区 1043SN 2023 は土師器清郷型鍋である。口縁端部は粘土の貼り付けにより断面が逆三角形に肥厚している。

22A 区 1046SN E-2024 は灰釉陶器碗の底部である。ハの字形に広がる高い高台が特徴で

O-53 号窯式期に位置づけられる。底部内面は使用により摩耗している。2025 は常滑産陶器の瓶類口縁部である。頸部上端外面に三角形の粘土帯を貼り付け垂下させて口縁部としている。口縁部内外面に降灰釉が掛かり、内面に釉着がある。

22A 区 1065SN 2026 は青磁の鎬蓮弁文碗である。全体に内湾気味である。

22A 区 1067SN 2027 は渥美産陶器の甕または壺である。無釉で肩部に平行タタキ痕がみられる。

22A 区 1071SN 2028 は古瀬戸の播鉢である。胴部片のため口縁部形状は不明であるが、やや内湾する形態と考えられる。

22A 区 1074SN 2029 は灰釉陶器の碗で体部はやや直線的である。内外面施釉。

22A 区 1075SN 2030 は土師器伊勢型鍋で口縁部の小片である。内面側に折り曲げた口縁の肥厚が顕著となっている。

22A 区 1076SN 2031 は山茶碗の口縁部小片である。内面は使用により摩耗している。

22A 区 1082SN 2032 は青磁の鎬蓮弁文碗口縁部である。器形は 2150 に似るが蓮弁文の形状が異なる。E-2033 は土師器伊勢型鍋の胴部上半の小片である。

22A 区 1090SN 2034 は灰釉陶器碗の口縁部小片である。端部は玉縁となっている。O-53 号窯式期に位置づけられる。

22A 区 1092SN 2035 は渥美産陶器の壺とみられる。口縁部小片である。

22A 区 1094SN 2036 は土師器清郷型鍋である。口縁端部は粘土の貼り付けにより断面逆三角形に肥厚させている。2037 は山茶碗類であるが器壁が厚くやや大型の鉢の可能性がある。無釉で外面は摩耗が進んでいる。2038 は古瀬戸の灰

釉平碗である。直線的な体部から口縁部は上方へ向いている。後期様式 I 段階に相当する。

22A 区 1104SX 2039 は白磁の碗である。緩く内湾する体部から口縁部へ外反する。口縁から下へ約 2.0cm のところで 1 条の凹線が巡っている。外面には擦れや傷が目立つ。

22A 区 1222SX 2040 は土師器清郷型鍋の口縁部で、口縁端部は横方向に張り出して羽釜状となる。

22A 区 1230SI 2041 は古瀬戸壺類の胴部下半である。

22A 区 1368SP 2042 は山茶碗の底部小片である。高台は小さく潰れたようになっている。使用により摩耗している。渥美窯系に分類される。

22A 区 1378SK 2043 は灰釉陶器の碗口縁部小片である。若干外反している。百代寺窯式と考えられる。

22A 区 10010SS 2044 は灰釉陶器碗の底部で、長めの三日月高台であることから K-90 号窯式期新段階～O-53 号窯式期であろう。2045 は灰釉陶器の皿底部である。底部外縁に短い三日月高台が貼り付けられており、K-90 号窯式期とみられる。灰釉は内面のみ掛かっている。2046 は古瀬戸の播鉢である。約 10 点の破片となっていたが接合によって約 40% が残存が確認された。底部に回転糸切り痕があり、胴部下端には焼成前にヘラ工具の擦れた痕がみられる。胴部は全体的に内湾気味である。擦り目は上から見て左方向にカーブしている。いずれも 7 条の溝からなっており、ハケ状工具で施している。2047 は古瀬戸の播鉢口縁部小片である。残存部に揃り目はみえない。2048 は古瀬戸瓶類の胴部下半である。2049 は常滑産陶器の甕である。実測図掲載破片のほかにも胴部片もある。底部外面は横方向の指

ナデ、同内面の胴部立ち上がりには強めの指ナデが施されている。また内面は大半に降灰釉が掛かっている。色調は暗灰色～暗赤褐色をしている。

【22B 区遺構】

22B 区 6068SZ 2050 は灰釉陶器の椀である。内外面施釉。時期は K-90 号窯式期である。

【21A 区検 1】

2051 は灰釉陶器の椀でほぼ完存状態であった。高い高台で椀部の高さも 6.1cm あることから深椀に分類される。時期は O-53 号窯式期で 10 世紀前半である。2052 灰釉陶器椀の底部小片である。内外面ともに無釉で、高台は底部の縁辺に貼り付けられている。その特徴から H-72 号窯式期に位置づけられる。2053 は土師器甕でほぼ直角に屈曲する口縁部は外反し長さは 2～3cm である。約 0.5cm の器壁内外面は横方向の指ナデが施されている。これらの特徴から三河型に分類され 9 世紀前半代に位置付けられる。なお口縁部の大きさなどから推定口径は 15～20cm と推定され、カマド固定用ではない移動可能な小型甕と考えられる。2054 は山茶碗で口縁部はわずかに外反する。渥美・幸田窯系と考えられる。2055 は山茶碗の口縁部で外面の一部に成形時の擦痕がある。渥美産とみられる。2056 は山茶碗の口縁部で、直線的な器形や焼成から尾張型に分類される。2057 山茶碗の口縁部小片である。2058 は山茶碗の椀で、口縁部は緩く外反しその端部は丸い。その形状から渥美・幸田系と考えられる。2059 は山茶碗の底部で潰れ気味の高台に粉殻痕がある。2060 は山茶碗の底部小片である。高台は幅のある逆台形を呈する。渥美窯系である。2061 は山茶碗の底部小片である。高台は小さく潰れている。底部内面は使用により摩耗している。2062 は古瀬戸類の灰釉小皿である。

2063 は古瀬戸播鉢の体部であるが、残存部に擦り目はみられない。内外面が無釉である。2064 は土師器伊勢型鍋で口縁部の小片である。口縁部の厚さは 0.5cm 以下と薄い。2065 は土師器伊勢型鍋の胴部上半の破片である。外面は煤が付着する一方内面にそれはない。2066 は近世の瀬戸・美濃窯産陶器である。灰釉の端反碗で江戸時代後期であろう。

【21B 区検出】

2067 は山茶碗類の鉢で胴部の小片である。2068 は山茶碗の底部で潰れ気味の高台であることから渥美産の可能性がある。時期は 12 世紀とみられる。2069 は山茶碗であるが、無台で推定底径が 4.0cm であることから小皿とみられる。2070 は色調が暗赤褐色で、無釉・硬質の焼成である。これらの点は常滑窯産陶器に類似しているが産地不明である。ハの字形にひらく高めの高台で小碗に分類されるであろう。底部内面は使用により摩耗している。2071 は古瀬戸の播鉢である。底部に回転糸切り痕、内面は使用によって擦り目の摩耗と鉄釉の剥落が進んでいる。2072 は古瀬戸の播鉢である。胴部小片で外面・内面ともに露胎した状態である。

【22A 区検 1】

2073 は灰釉陶器の椀で内外面に施釉がなされている。丸みのある体部から口縁下部が若干窪んで僅かに外反する。2074 山茶碗類の小皿である。尾張型第 5～6 型式（12 世紀後半～13 世紀前葉）に位置づけられる。2075 は手捏ね土師器の小皿である。全体に指頭圧痕が認められる。器面に雲母が多くみられる。胎土に赤褐色粒が含まれる。2076 は青磁椀で口縁部の小片であるが施文は認められない。2077 は伊勢型鍋の上半部である。胴部器壁は厚さ 0.2cm ときわめて薄い口

縁部はここから内外面ともに肥厚させている。ただしその内湾の度合いは小さく外反したようになっている。外面の調整痕は不明瞭である。2078 は土師器伊勢型鍋の胴部半ばの破片で、内外面ともにハケ調整痕跡がみられ、器壁は他の破片に比べてやや厚くなっている。外面は煤・焦げが付着している。2079 は土師器伊勢型鍋の口縁部小片である。口縁部内面側に折り返しは他と同じであるが、口縁部の内湾と屈曲に加えて器壁が極端に薄くなっている（0.2～0.3cm）点が特徴である。その形態からみて時期は15世紀末～16世紀に比定される。2080 は土師器伊勢型鍋の口縁部小片である。口縁部の内湾は小さめで器壁の厚さは約0.5cmある。頸部外面に1条の凹線が巡っている。もとの色調は黄褐色だが外面は被熱により赤色化している。2081 は15世紀以降の土師器内耳鍋の口縁小片である。形状からすると「くの字形」に分類される。遠江～東三河地域を中心に分布するタイプである。2082 は古瀬戸の擂鉢口縁部である。残存部で擦目は確認できない。2083 は古瀬戸の灰釉平碗である。体部は内湾し口縁部は斜め上方へ向いている。内面に焼成時の滓が付着している。

【22A 区検 1.5】

2084 は灰釉陶器碗の底部で内面は使用により摩耗している。高いハの字高台でO-53号窯式期で。2085 は灰釉陶器の段皿である。全体に厚みがあり高台は短い三日月形をしている。内外面に施釉がなされK-90号窯式期とみられる。2086 は灰釉陶器碗の底部である。高台は小さい三角形を呈する。2087 は青磁の鎬蓮弁文碗である。2088 は青磁とみられる磁器碗である。灰白色を呈する。外面は全面が剥落しており、内面に緑灰色の釉が残るのみである。2089 は青磁合子

の身である。体部外面に縦位の鎬文が全周する。その上は蓋を受ける構造になっている。なお蓋は出土していない。2090 は土師器伊勢型鍋の口縁部小片である。口縁端部から外面に焦げや煤の付着がみられる。2091 古瀬戸の擂鉢口縁部である。2092 は瀬戸・美濃窯産陶器の鍋である。口縁部の小片のみであるが後円部外面に煤状の黒色物が付着しており使用痕と認められる。2093 は戦国時代の土師器内耳鍋の口縁部小片で、「くの字形」に分類される。口縁上端はさらに外面側に折り返して指ナデでつまみ上げている。

【22A 区検 2】

2094 は灰釉陶器碗で口縁から下方へ全体的に内湾する器形であることからO-53号窯式期とみられる。2095 は灰釉陶器の碗である。内外面に施釉されており、高さ約1.0cmの高台が特徴である。それらの特徴からO-53号窯式期に位置づけられる。2096 は灰釉陶器の碗で厚みもある最末期のものであろう。内外面に施釉がなされている。2097 は土師器清郷型鍋である。5mm以上の厚みがある胴部上端に羽根状の粘土を貼り付けて羽釜に近い口縁部としている。その端部は蓋受けか吹きこぼれ防止のためか若干上方につまみ上げられている。内外面に煤などの付着はない。2098 は中世陶器の無台碗とみられるが産地は不明である。底面は回転糸切り痕がある。2099 は土師器伊勢型鍋の口縁部小片である。その屈曲は小さく斜め上方に伸びており、器壁も比較的全体に厚い。

【22B 区検 1】

2100 は渥美産陶器壺の胴部上部（肩部）である。凹線があるほか縦位の線刻が1条ある。上部は降灰釉が掛かる。

【21A・B 区調査区その他】

21A 区 T0005 2101 は山茶碗で約 60% 残存している。産地は渥美・幸田窯系統と推測され、渥美窯の I-2a・b 期（12 世紀後葉～13 世紀前葉）に相当する。内面は使用による摩耗が進んでいる。

21A 区 T0017 2102 は土師器伊勢型鍋の口縁部小片である。端部を内面側に折り曲げて内湾させているがその曲げ幅は小さく、折り曲げ端部の痕跡が段となっている。なおその厚さは 0.5cm 以下と薄い。時期は 15 世紀末～16 世紀と推測される。

21A 区壁面整形 2103 は灰釉陶器碗の底部である。断面でみると高台はハの字形にひらく。内面は使用で摩耗している。

21A 区調査区北壁 2104 は土師器伊勢型鍋の口縁部小片である。端部を内面側へ折り曲げて内湾させている。その厚さは 0.5cm 以下と薄い。煤・焦げの付着はみられない。

21A 区切株清掃 2105 は灰釉陶器の口縁部で内外面の釉葉がはがれている。O-53 号窯式期とみられる。

21A 区表採 2106 は灰釉陶器の碗底部である。ハの字形に開く高台でその形態から O-53 号窯式期に位置づけられる。底部内面に降灰釉が厚く釉着している。2107 は山茶碗の底部小片である。高台は貼り付け面で剥がれている。底部内面は使用により摩耗している。2108 は古瀬戸類の灰釉丸碗である。2109 は中国大陸産の青磁碗である。

21A 区攪乱 2110 山茶碗の底部であるが高台が貼り付け部分で剥がれている。渥美系と考えられる。底部内面は使用で摩耗している。2111 は山茶碗の底部小片である。丸みのある高台は平らにつぶれている。底部内面は使用で摩耗している。渥美・幸田窯系に分類される。

21 区表採 2112 は灰釉陶器の碗底部である。ハの字形に開く高台でその形態から O-53 号窯式期に位置づけられる。底部内面に降灰釉が厚く釉着しておりあまり摩耗していない。2113 は山茶碗類の口縁部で、体部の形状が直線的であることから 13 世紀以降とみられる。

【22A・B 区調査区その他】

22A 区 TT01 2114 は古瀬戸の灰釉平碗の口縁部である。直線的な器形で口縁部近くで若干角度が急になる。

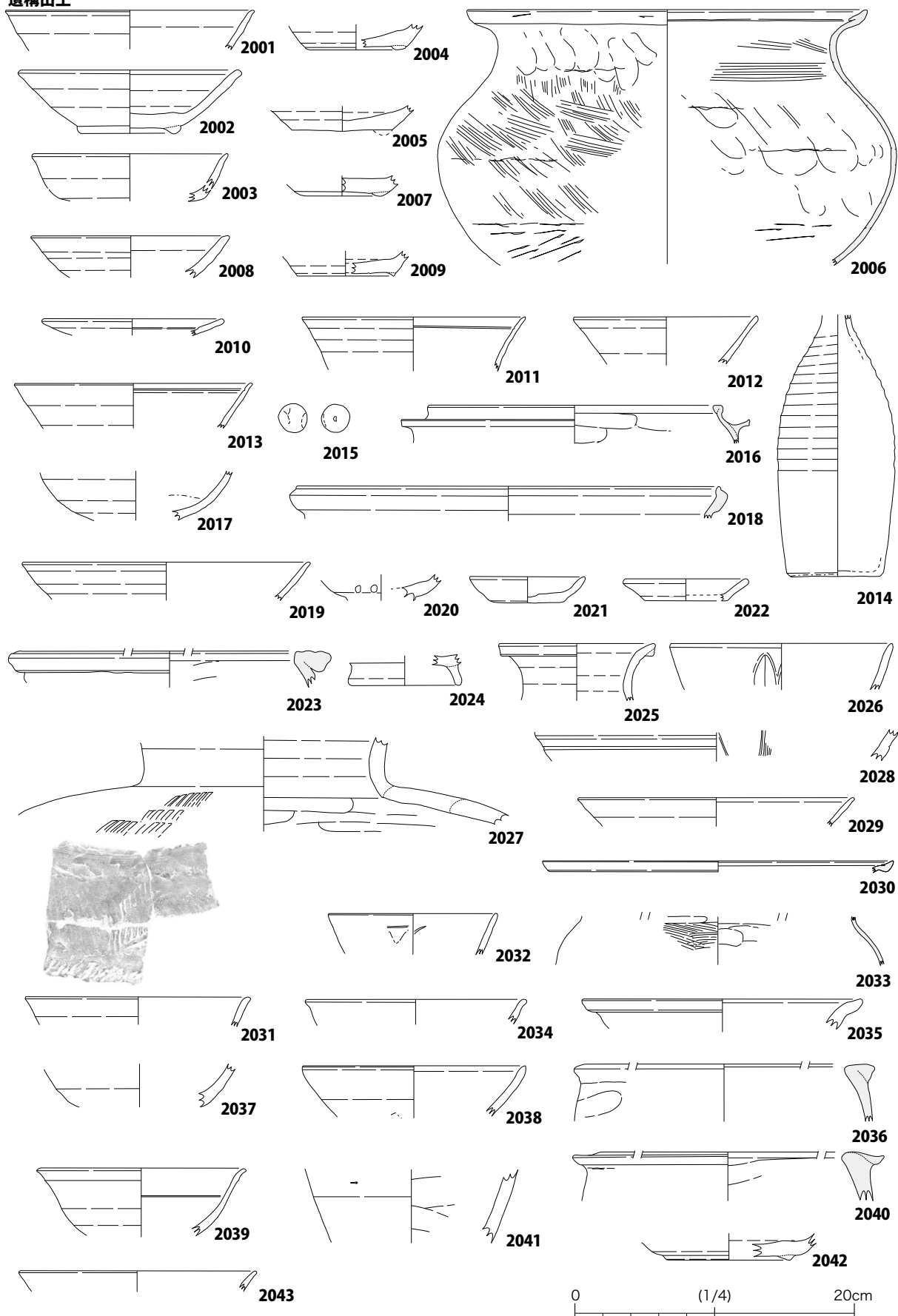
22A 区南北トレンチ 2115 は古瀬戸の灰釉平碗である。口縁部付近で角度が変化する。後期様式第Ⅱ段階に相当する。

22A 区調査区東壁表採 2116 は灰釉陶器であるが、器種は口径 10.8cm で小碗にあたる。口縁の外反は小さい。

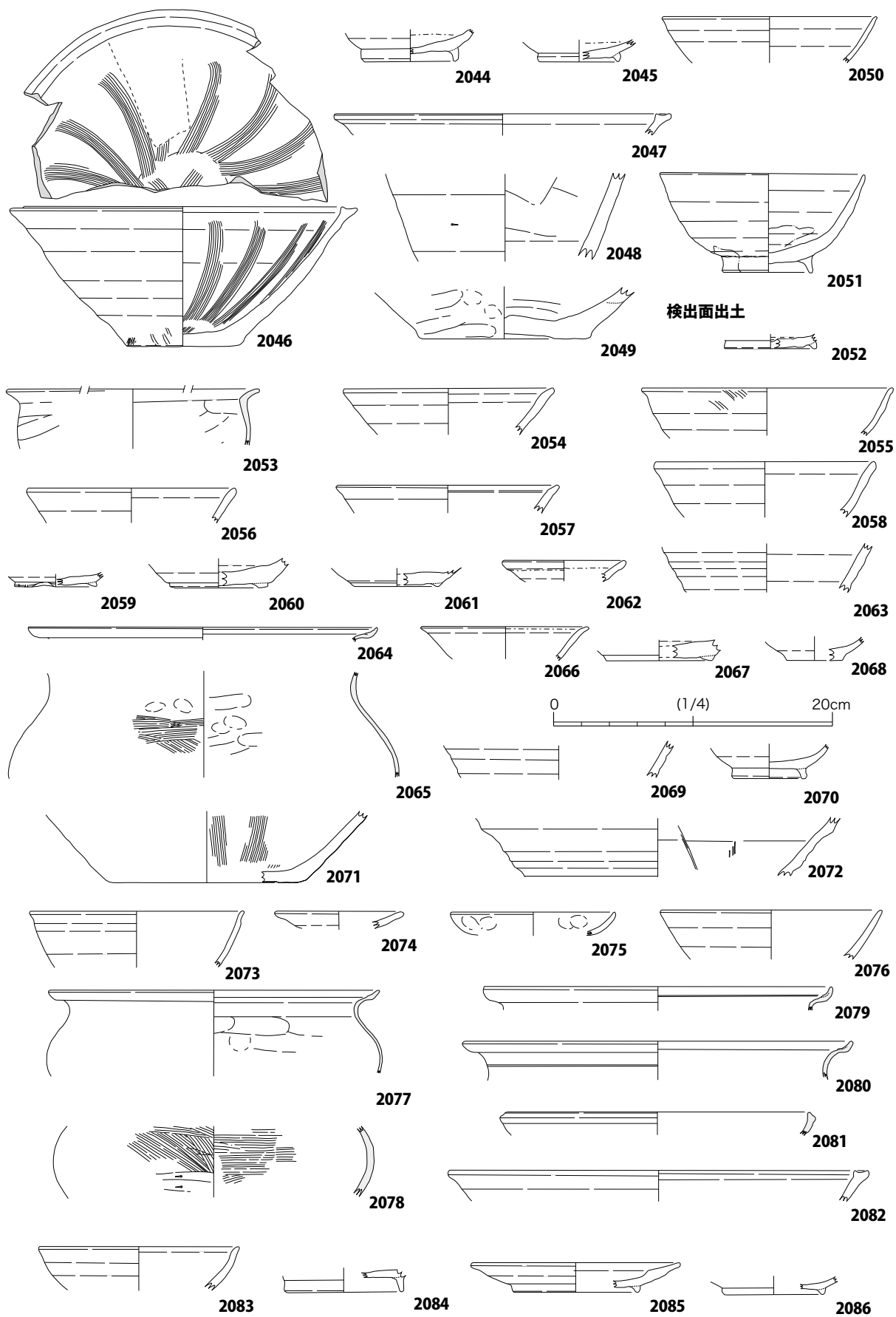
22A 区表土 2117 は灰釉陶器碗で、全体に丸みのある形状で口縁部の肥厚は比較的少ない。灰釉はハケ塗りであることから K-90 号窯式期の新段階とみられる。2118 は青磁の鎬蓮弁文碗の小片である。2119 は青磁鎬蓮弁文碗である。2120 は常滑産陶器の甕である。断面 N 字形口縁で、常滑第 11 型式（14 世紀）に相当するとみられる。色調は暗赤褐色で上端には降灰釉が掛かる。2121 は古瀬戸の播鉢口縁部である。内面側にかえしがついている。擦り目については不明である。

22A 区排土 E-2122 は灰釉陶器段皿である。口縁部から約 2cm の範囲で肥厚し段をつくっている。E-2123 は常滑産陶器の甕である。平らな底部から胴部は大きく外反しながら立ち上がる。成形痕跡は指頭圧痕と指ナデがみえる。底径は 20.6cm と推定されるので中型甕と推測される。

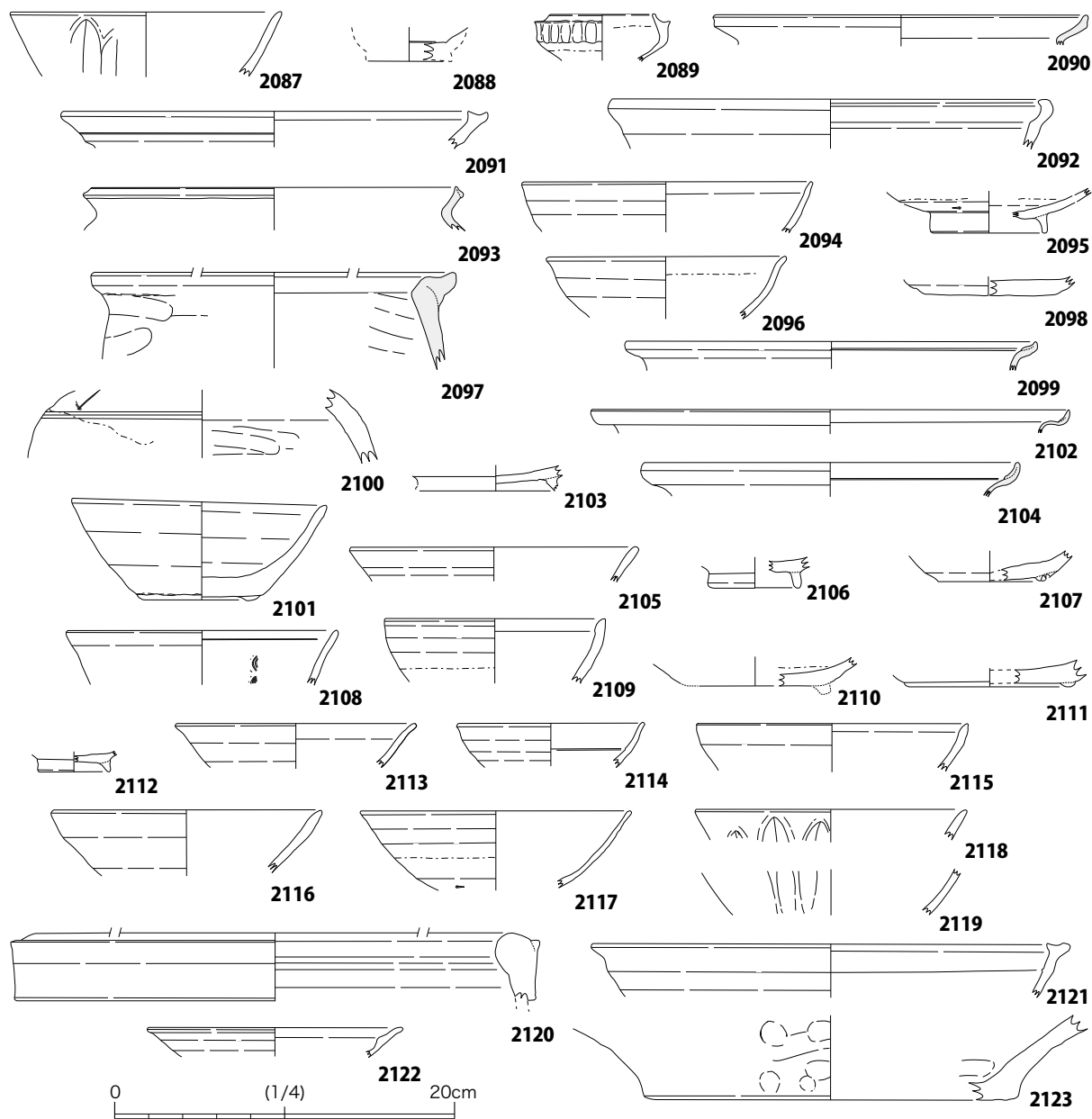
遺構出土



第 102 図 古代～近世の遺物実測図 1



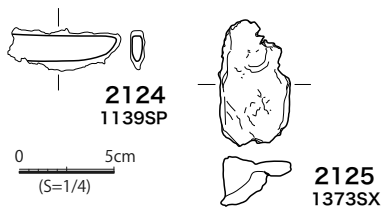
第 103 図 古代～近世の遺物実測図 2



第 104 図 古代～近世の遺物実測図 3

第 5 節 金属関連遺物

金属関連遺物としては、鉄製品と鉄滓がある。
2124 は 1139SP から出土した鉄製品である。
細長い扁平な形状で一部が欠損しており、残存
長は 6.0cm を測る。形状から刀子とみられる。
2125 は 1373SX から出土した 2 分の 1 分割碗
型鉄滓である。最大長 6.8cm、最大厚 2.6cm で、
気泡は少なく上端面は比較的に平滑である。鍛
錬鍛冶に伴うものと思われる。



第 107 図 金属関連遺物

第4章 自然科学分析

第1節 大崎遺跡におけるプラント・オパール分析、花粉分析

森 将志（パレオ・ラボ）

1. はじめに

愛知県北設楽郡設楽町の大崎遺跡では、鎌倉時代の水田面が検出されている。この層準における稲作の有無について検討するため、水田耕作土層から堆積物が採取された。以下では、試料について行ったプラント・オパール分析と花粉分析の結果を示し、当時の稲作や古植生について検討した。

2. 分析試料と方法

分析試料は、鎌倉時代の水田面とされる層準や、その下層から採取された9試料である。分析試料一覧を第2表に、試料採取層準を第108図に示す。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

2-1. プラント・オパール分析

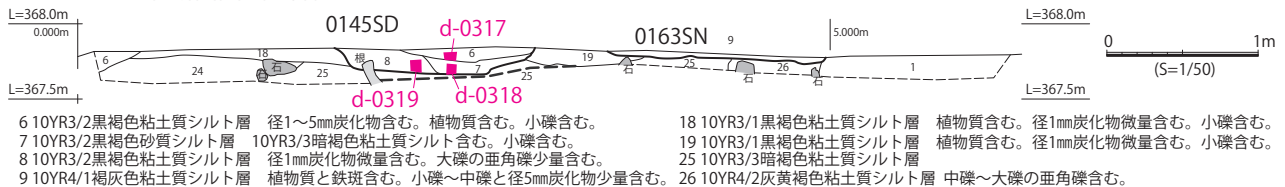
秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。

処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、第110図に載せた。

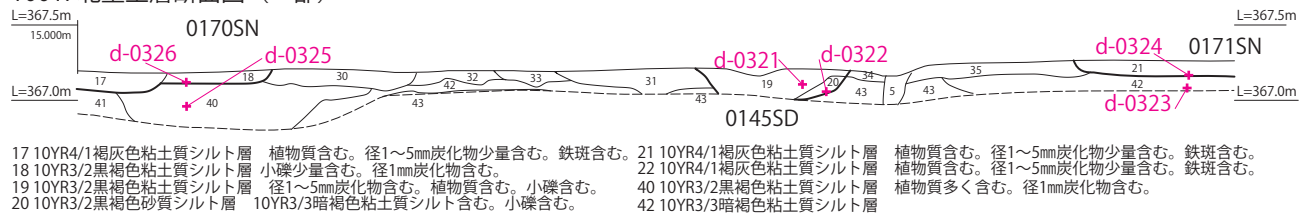
2-2. 花粉分析

試料（湿重量約3g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え、10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え、1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。この残渣より適宜プレパラートを作製し、プレパラ

T0016北壁土層断面図（一部）



T0017北壁土層断面図（一部）



第108図 分析試料採取層準

ト 1 枚の全面を検鏡した。

3. 結果

3-1. プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求め（第 3 表）、分布図を第 109 図に示す。

9 試料から検出された機動細胞珪酸体は、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の 6 種類である。いずれの試料においてもネザサ節型機動細胞珪酸体の産出が多かった。また、イネ機動細胞珪酸体は d-0323 と d-0325 以外の試料から検出されており、1,300 ～ 17,000 個 / g の産出量を示す。さらに、イネの籾殻に形成される珪酸体の破片（イネ穎破片）が d-0317 と d-0322、d-0325 から検出されている。

3-2. 花粉分析

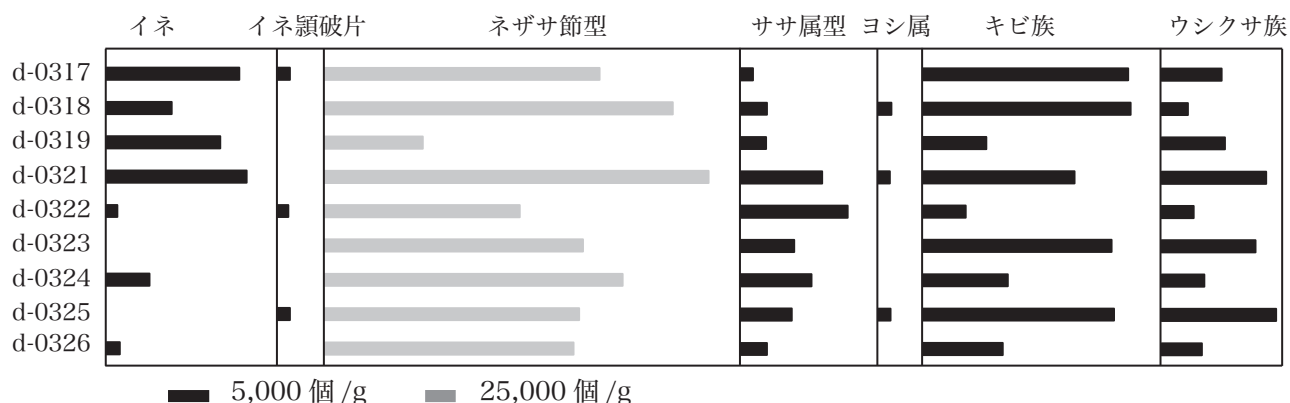
検鏡の結果、9 試料からは花粉化石が検出されなかった。プレパラート写真を第 111 図に示す。花粉化石が含まれていなかったため、産出表や花粉分布図は示していない。

4. 考察

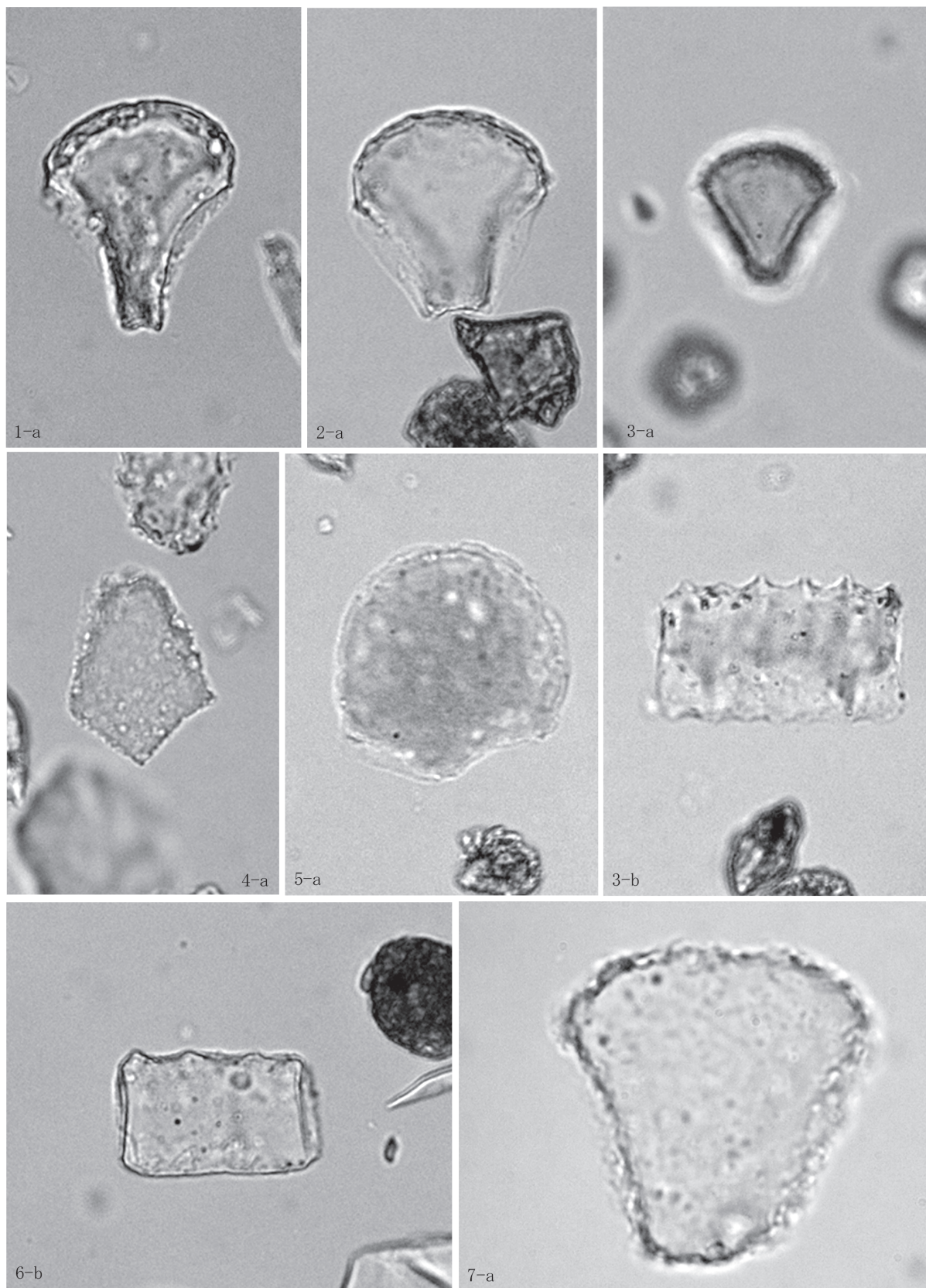
プラント・オパール分析の結果では、T0016 の d-0317 と d-0318、d-0319、T0017 の

d-0321 と d-0322、d-0324、d-0326 でイネ機動細胞珪酸体が検出された。イネ機動細胞珪酸体の産出量については、試料 1g 当り 5,000 個以上検出された地点の分布範囲と、実際の発掘調査で検出された水田址の分布がよく対応する結果が得られており（藤原，1984）、試料 1g 当り 5,000 個が水田土壌か否かを判断する目安とされている。この目安に照らし合わせると、5 つの試料（d-0317、d-0318、d-0319、d-0321、d-0324）で水田土壌の目安を上回っている。この結果は、対象遺構が水田であるという発掘調査所見を支持する。なお、水田の下層とされる層準ではイネ機動細胞珪酸体が検出されておらず、d-0325 でイネ穎破片が検出された。d-0325 におけるイネ穎破片の産出については、上位層からのイネ籾殻の混入等が考えられる。

また、いずれの試料においてもネザサ節型機動細胞珪酸体やササ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体が産出しており、中でもネザサ節型機動細胞珪酸体の産出が目立つ。水田周辺にはネザサ節型のササ類を主体としたタケ亜科やキビ族、ウシクサ族が分布していたと考えられる。さらに、抽水植物のヨシ属の機動細胞珪酸体が水田面の d-0318 と d-0321 から産出しており、水田周辺の湿潤な場所にはヨシ属も生育していたと考えられる。



第 109 図 植物珪酸体分布図



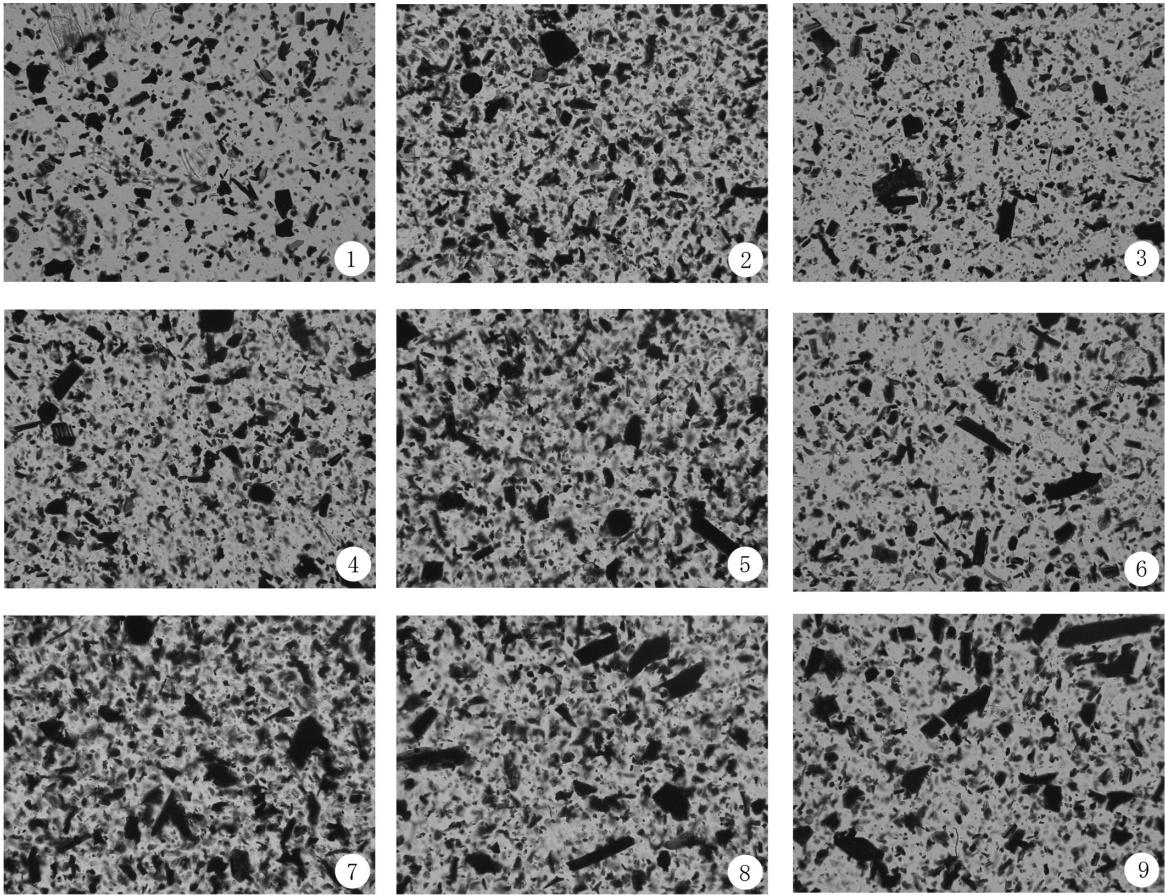
第 110 図 産出した植物珪酸体

0.05mm

1. イネ機動細胞珪酸体 (d-0317) 2. イネ機動細胞珪酸体 (d-0321) 3. ネザサ節型機動細胞珪酸体 (d-0317) 4. ササ属型機動細胞珪酸体 (d-0321) 5. ヨシ属機動細胞珪酸体 (d-0321) 6. キビ族機動細胞珪酸体 (d-0317) 7. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (d-0317) a: 断面 b: 側面

花粉分析では、花粉化石が検出されなかった。一般的に、花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると、紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され消失してしまう。したがって、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉化石が残りにくい。プラント・オパール分析の結果では、抽水植物のヨシ属の産出や水田の存在が推測されるため、比較的湿潤な環境があった可能性があるが、湿乾を繰り返す環境や堆積後に好気的な環境に晒されたために花粉の保存が不良になった可能性が考えられる。

1. d -0317
2. d -0318
3. d -0319
4. d -0321
5. d -0322
6. d -0323
7. d -0324
8. d -0325
9. d -0326



第 111 図 花粉化石のプレパラート写真

0. 02mm

引用文献

藤原宏志 (1984) プラント・オパール分析法とその
 応用—先史時代の水田址探査— 考古学ジャーナル,
 227, 2-7.

第 2 表 分析試料一覧

トレンチ	層位	試料No.	時期	岩質	備考
T0016	6	d-0317	鎌倉時代	10YR3/2黒褐色粘土質シルト	
	7	d-0318		10YR3/2黒褐色砂質シルト	
	8	d-0319		10YR3/2黒褐色粘土質シルト	
T0017	19	d-0321		10YR3/2黒褐色粘土質シルト	
	20	d-0322		10YR3/2黒褐色砂質シルト	
	42	d-0323		10YR3/3暗褐色粘土質シルト	水田面下層
	21	d-0324		10YR4/1褐灰色粘土質シルト	
	40	d-0325		10YR3/2黒褐色粘土質シルト	水田面下層
	18	d-0326		10YR3/2黒褐色粘土質シルト	

第 3 表 試料 1g 当りのプラント・オパール個数

	イネ (個/g)	イネ穎破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
d-0317	16,100	1,500	240,100	1,500	0	24,900	7,300	22,000
d-0318	7,900	0	304,000	3,200	1,600	25,200	3,200	22,100
d-0319	13,800	0	85,800	3,100	0	7,700	7,700	15,300
d-0321	17,000	0	335,300	9,900	1,400	18,400	12,700	55,200
d-0322	1,300	1,300	170,400	13,000	0	5,200	3,900	13,000
d-0323	0	0	225,600	6,500	0	22,900	11,400	14,700
d-0324	5,200	0	260,200	8,600	0	10,300	5,200	20,700
d-0325	0	1,500	222,300	6,200	1,500	23,200	13,900	32,400
d-0326	1,600	0	217,400	3,200	0	9,700	4,900	6,500

第2節 大崎遺跡のプラント・オパール分析

森 将志（パレオ・ラボ）

1. はじめに

愛知県北設楽郡設楽町に所在する大崎遺跡では、古環境復元を目的として、堆積物試料が採取された。以下では、試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺の当時のイネ科植物相について検討した。

2. 分析試料と方法

分析試料は、1116のTT02から採取された6試料と、1321の東壁から採取された9点の、計15試料である(第4表)。これらの試料について、以下の処理を施し、分析を行った。

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をツールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、第113図に載せた。

3. 結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(第5表)、分布図に示した(第112図)。

15試料を検鏡した結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞

珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の5種類の産出が確認できた。このうち、イネ機動細胞珪酸体はd-869とd-872、d-1180、d-1181、d-1182、d-1183、d-1186から産出が確認でき、産出量は1,200～3,500個/gである。また、いずれの試料もネザサ節型機動細胞珪酸体の産出が確認でき、各試料でネザサ節型機動細胞珪酸体の産出量が最も多い。

4. 考察

検鏡の結果、d-869とd-872、d-1180、d-1181、d-1182、d-1183、d-1186からイネ機動細胞珪酸体が検出された。イネ機動細胞珪酸体の産出量については、試料1g当り5,000個以上検出された地点の分布範囲と、実際の発掘調査で検出された水田址の分布がよく対応する結果が得られており(藤原, 1984)、試料1g当り5,000個が水田土壌か否かを判断する目安とされている。イネ機動細胞珪酸体が検出された試料はいずれもこの目安を下回っているが、試料採取地点周辺では水田を含めた何らかの状況下でイネの葉身が堆積していた可能性がある。

その他では、ネザサ節型やササ属型、キビ族、ウシクサ族などの機動細胞珪酸体が検出されており、これらの分類群のイネ科植物が試料採取地点周辺に生育していたと考えられる。なかでも、ネザサ節型機動細胞珪酸体の産出が多いため、試料採取地点周辺には、ネザサ節型のタケ亜科が主に分布を広げていた可能性がある。また、いずれの分類群も産出量にばらつきがあるが、1321東壁のキビ族機動細胞珪酸体については、イネ機動細胞珪酸体が産出している試料(d-1180、

d-1181、d-1182、d-1183) で産出量が多い傾向がある。明確に水田とはいえないものの、これらの試料から産出するキビ族機動細胞珪酸体は、タイヌビエなどの水田にともなうキビ族由来の可能性も考えられる。

引用文献

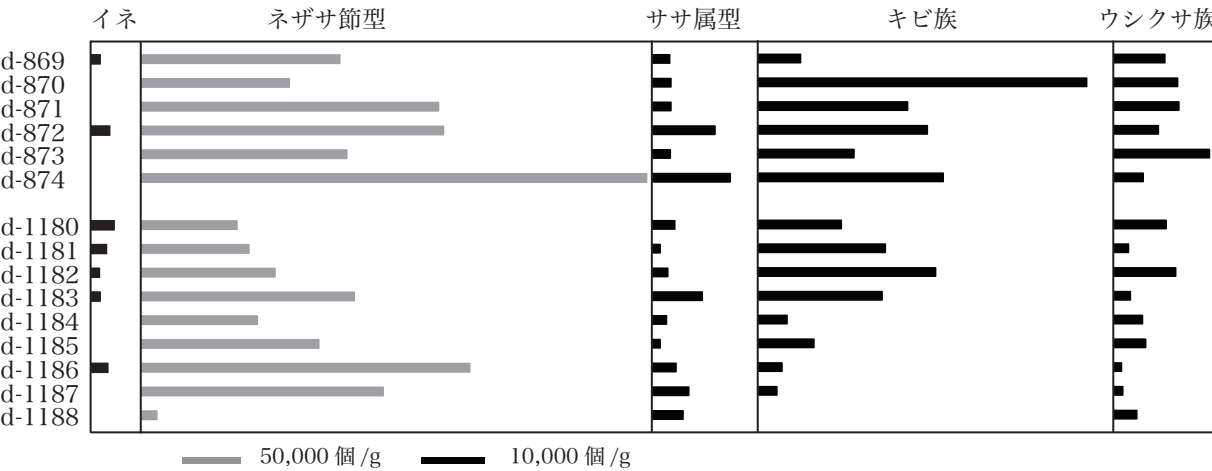
藤原宏志 (1984) プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－. 考古学ジャーナル, 227, 2-7.

第 4 表 分析試料一覧

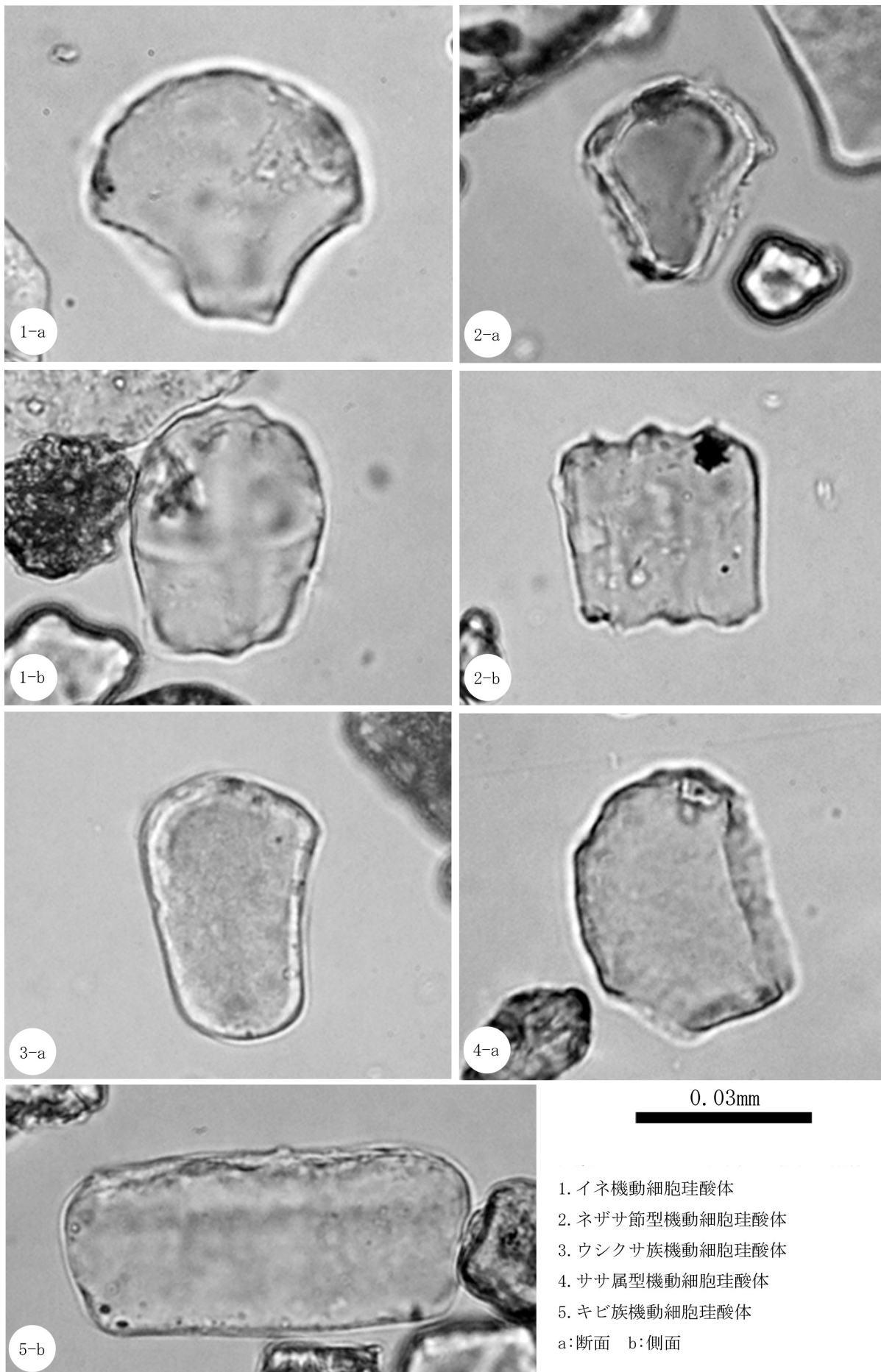
試料No.	地点	岩質
d-869	1116 TT02	黒褐色(7.5YR2/2)シルト
d-870		黒色(10Y3R2/1)シルト
d-871		黒褐色(7.5YR2/2)シルト
d-872		赤黒色(2.5YR2/1)シルト
d-873		黒色(5YR2/1)シルト
d-874		黒色(7.5YR2/1)シルト
d-1180	1321 東壁	暗褐色(10YR3/3)シルト
d-1181		暗褐色(10YR3/3)シルト
d-1182		黒褐色(10YR3/2)シルト
d-1183		黒褐色(7.5YR2/2)シルト
d-1184		黒褐色(10YR3/2)シルト
d-1185		暗褐色(10YR3/3)シルト
d-1186		暗褐色(10YR3/3)シルト
d-1187		黒褐色(7.5YR2/2)シルト
d-1188		黒褐色(10YR3/2)シルト

第 5 表 試料 1g 当りのプラント・オパール個数

	イネ (個/ g)	ネザサ節型 (個/ g)	ササ属型 (個/ g)	キビ族 (個/ g)	ウシクサ族 (個/ g)	不明 (個/ g)
d-869	1,300	168,900	2,700	6,600	8,000	22,600
d-870	0	125,900	2,900	51,500	10,000	7,200
d-871	0	252,900	2,900	23,400	10,200	8,800
d-872	2,800	257,100	9,800	26,500	7,000	18,200
d-873	0	174,800	2,800	15,000	15,000	10,300
d-874	0	429,800	12,200	29,000	4,600	30,500
d-1180	3,500	81,300	3,500	13,000	8,200	9,400
d-1181	2,300	91,500	1,200	19,900	2,300	17,600
d-1182	1,200	113,700	2,400	27,800	9,700	8,500
d-1183	1,300	181,200	7,800	19,400	2,600	25,900
d-1184	0	98,700	2,200	4,500	4,500	9,000
d-1185	0	151,000	1,200	8,700	5,000	10,000
d-1186	2,500	279,500	3,700	3,700	1,200	27,300
d-1187	0	205,800	5,700	2,900	1,400	7,100
d-1188	0	13,200	4,800	0	3,600	4,800



第 112 図 植物珪酸体分布図



第 113 図 d-1180 から産出した植物珪酸体

第3節 放射性炭素年代測定（1）

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtadze・小林克也

1. はじめに

愛知県設楽町の大崎遺跡から採取された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、22B 区の 6170SX から出土した深鉢 449 の胴部内面付着炭化物（試料 No.1 : PLD-49227）である。測定試料の情報、調製データは第6表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

第7表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、第114図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代（yrBP）の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入

る確率が 68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.4（較正曲線データ : IntCal20）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

6170SX から出土した深鉢の胴部内面付着炭化物（試料 No.1 : PLD-49227）は、 ^{14}C 年代が 5955 ± 25 ^{14}C BP、 2σ 暦年代範囲（確率 95.45 %）が 4934-4918 cal BC (2.80%)、4908-4776 cal BC (86.38%)、4758-4727 cal BC (6.27%) の暦年代を示した。これは、小林 (2017) を参照すると、縄文時代前期初頭～前葉に相当する。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.

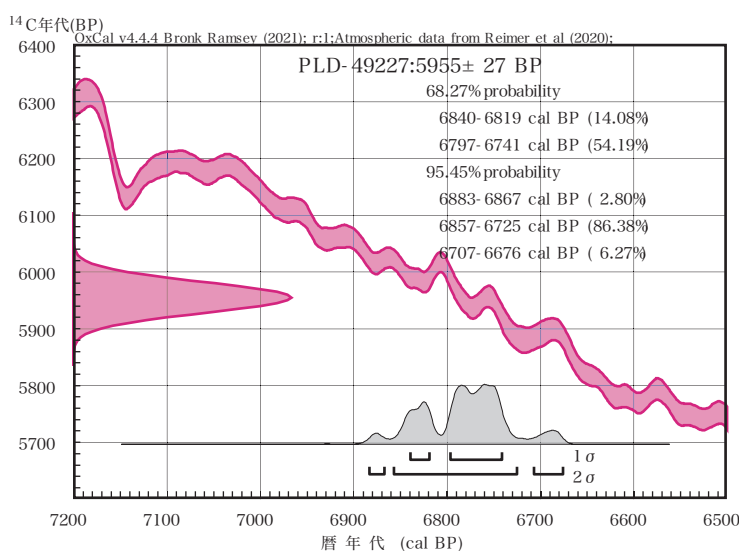
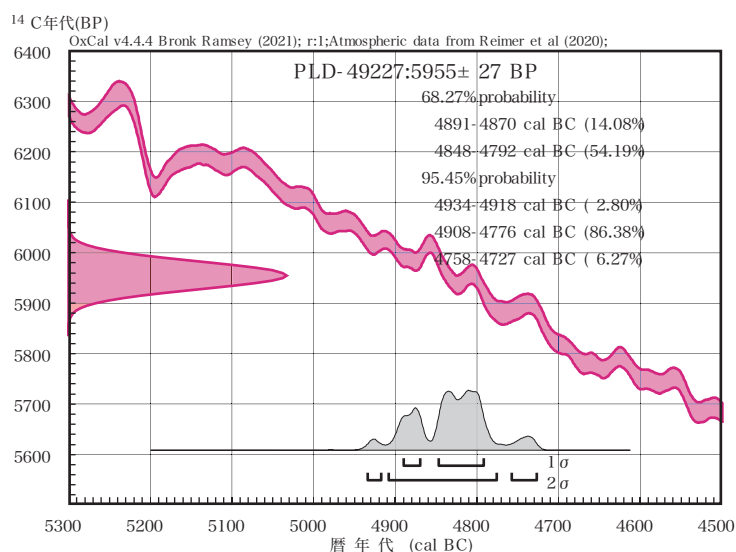
小林謙一 (2017) 縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素 14 年代—. 263p, 同成社.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎.

日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W.,

Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62 (4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)



第 114 図 土器 449 付着炭化物の暦年較正の結果

第 6 表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-49227	試料No.1 調査区: 22B区 グリッド: 2317 遺構: 6170SX 遺物No.d-1506 E-449	種類: 土器付着炭化物 器種: 深鉢 部位: 胴部内面 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

第 7 表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲		^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-49227 試料No.1	-26.67 ± 0.18	5955 ± 27	5955 ± 25	4891-4870 cal BC (14.08%) 4848-4792 cal BC (54.19%)	4934-4918 cal BC (2.80%) 4908-4776 cal BC (86.38%)	6840-6819 cal BP (14.08%) 6797-6741 cal BP (54.19%)	6883-6867 cal BP (2.80%) 6857-6725 cal BP (86.38%)

第4節 放射性炭素年代測定（2）

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・中村賢太郎

1. はじめに

愛知県北設楽郡設楽町に位置する大崎遺跡より出土した土器に付着した炭化物について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第8表のとおりである。試料は、土器に付着した炭化物3点である。測定試料の炭化物は、金属製ピンセットでアルミ箔に掻き落として採取した。採取した炭化物に対して超音波洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄を行った後、放射性炭素年代測定用と安定同位体比測定用および C/N 比測定用に試料を分割した。

放射性炭素年代測定用の試料については、調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

炭素含有量および窒素含有量の測定には、EA（ガス化前処理装置）である Flash EA1112（ThermoFisher Scientific 社製）を用いた。スタンダードは、アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。炭素安定同位体比（ $\delta^{13}\text{CPDB}$ ）および窒素安定同位体比（ $\delta^{15}\text{NAir}$ ）の測定には、質量分析計 DELTA V（Thermo Fisher Scientific 社製）を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比には IAEA Sucrose（ANU）、窒素安定同位体比には IAEA N1 を使用した。測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA 内の燃焼炉に

落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。次に、還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムで CO_2 と N_2 を分離し、TCD でそれぞれ検出・定量を行う。この時の炉および分離カラムの温度は、燃焼炉温度 1000°C 、還元炉温度 680°C 、分離カラム温度 35°C である。得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいて C/N（モル比）を算出した。分離した CO_2 および N_2 はそのまま He キャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。

3. 結果

第9表に炭素含有量と窒素含有量、C/N 比、炭素安定同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、窒素安定同位体比（ $\delta^{15}\text{N}$ ）を示し、第115、116図に各試料と食物群との比較を示した。

第10表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、第117図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代（yrBP）の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）

は、測定の実験誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

第 115 図と第 116 図に示した炭素安定同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、窒素安定同位体比 ($\delta^{15}\text{N}$)、C/N 比に基づく、土器付着炭化物は 3 点とも主に C3 植物や草食動物に由来すると推定される。したがって、土器付着炭化物の ^{14}C 年代への海洋リザーバー効果の影響は、それほど考慮しなくて良いと考えられる。

PLD-51399 の土器口縁部外面の付着炭化物は、 ^{14}C 年代が 2960 ± 20 BP、2 σ 暦年代範囲が 1261-1112 cal BC (94.21%)、1091-1085 cal BC (0.64%)、1063-1058 cal BC (0.60%) であった。

PLD-51400 の土器口縁部外面の付着炭化物

は、 ^{14}C 年代が 3825 ± 20 BP、2 σ 暦年代範囲が 2397-2387 cal BC (1.37%)、2344-2199 cal BC (92.28%)、2163-2151 cal BC (1.80%) であった。

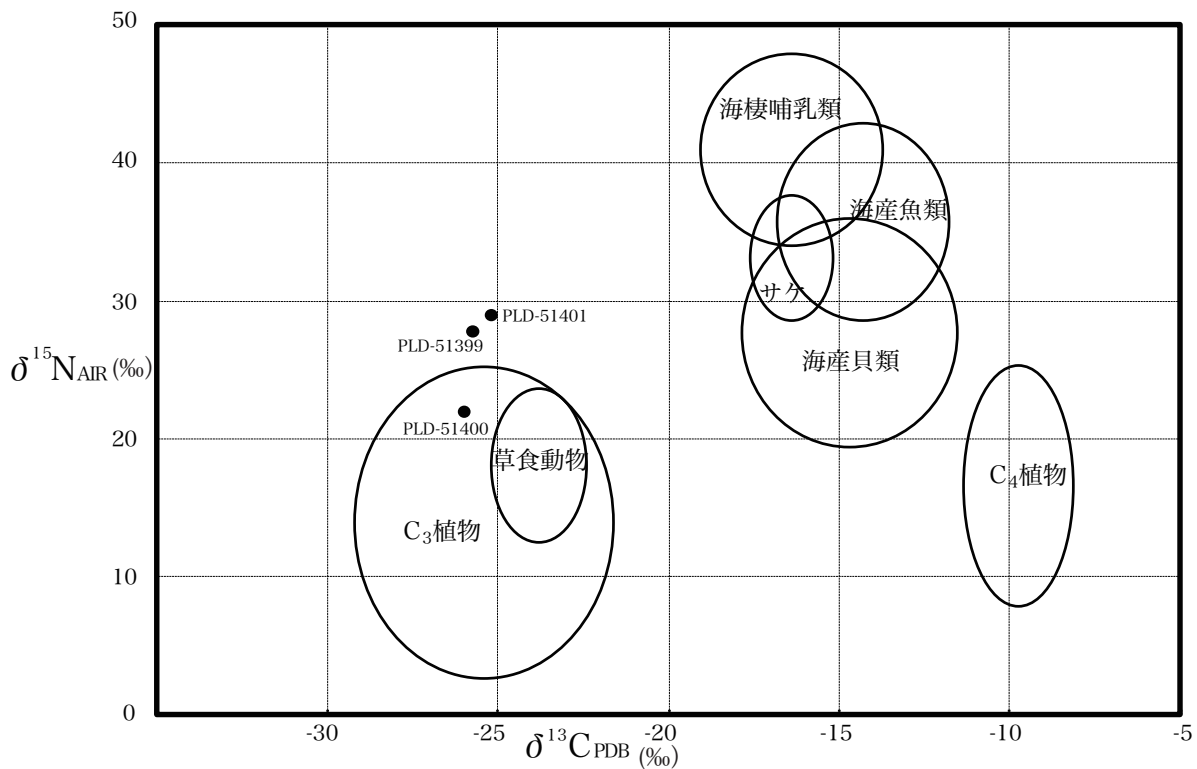
PLD-51401 の土器口外面の付着炭化物は、 ^{14}C 年代が 2930 ± 20 BP、2 σ 暦年代範囲が 1214-1050 cal BC (95.45%) であった。

参考文献

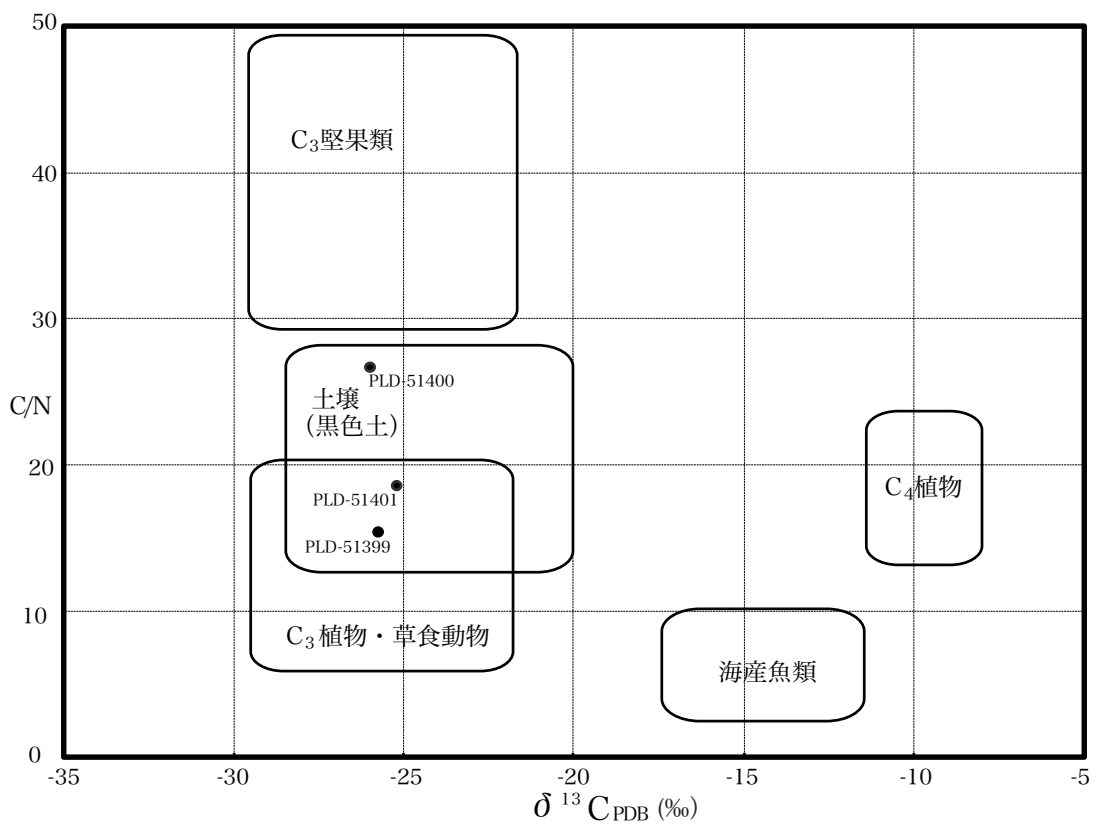
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62 (4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

第8表 放射性炭素年代測定の測定試料および処理（1）

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-51284	試料No.1 調査区：21A グリッド：1615 遺構：0142SN・0170SN 遺物No.d0398 報告書番号E-1003	種類：土器付着炭化物 部位：頸部外面 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51285	試料No.2 調査区：21A グリッド：2015 遺構：5076SK 遺物No.d-10990 報告書番号E-68	種類：土器付着炭化物 部位：胴部外面 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：0.1 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51286	試料No.3 調査区：22A グリッド：1316 遺構：1238SK 遺物No.d-0902 報告書番号E-1091	種類：土器付着炭化物 部位：胴部外面 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：0.1 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51287	試料No.4 調査区：22B グリッド：2417 遺構：検出2 遺物No.d-1214 報告書番号E-492	種類：土器付着炭化物 部位：頸部内面 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51288	試料No.5 調査区：22B グリッド：2317 遺構：検出（1）土器 遺物No.d-0045 報告書番号E-466	種類：土器付着炭化物 部位：胴部内面 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51289	試料No.6 調査区：21A グリッド：2114 遺構：20001SL 遺物No.d-10899	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51290	試料No.7 調査区：21A グリッド：2114 遺構：20001SL 遺物No.d-10900	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51291	試料No.8 調査区：21A グリッド：2114 遺構：20001SL 遺物No.d-10901	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51292	試料No.9 調査区：21A グリッド：2114 遺構：20001SL 遺物No.d-10902	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51293	試料No.10 調査区：22A グリッド：1321 遺構：10011SS 遺物No.d0106	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51294	試料No.11 調査区：22A グリッド：1321 遺構：10011SS 遺物No.d-0107	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51295	試料No.12 調査区：22A グリッド：1017 遺構：1001SL 遺物No.d-0296	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51296	試料No.13 調査区：22A グリッド：1017 遺構：1004SL	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51297	試料No.14 調査区：22B グリッド：2317 遺構：6015SL北トレンチ 遺物No.d-0315	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51298	試料No.15 調査区：22B グリッド：2218 遺構：6115SL 遺物No.d-1251	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51299	試料No.16 調査区：22B グリッド：2318 遺構：6159SK 遺物No.d-1548	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51300	試料No.17 調査区：22B グリッド：2417 遺構：検出2 遺物No.d-1587	種類：炭化草本類 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51301	試料No.18 調査区：22B グリッド：2218 遺構：6115SL	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51302	試料No.19 調査区：22B グリッド：2318 遺構：6168SK	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51303	試料No.20 調査区：22B グリッド：2318 遺構：6159SK	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)



第 115 図 炭素・窒素安定同位体比 (吉田・西田 (2009) に基づいて作製)



第 116 図 炭素安定同位体比と C/N 比の関係 (吉田・西田 (2009) に基づいて作製)

試料種	炭素含有率 (%)	窒素含有率 (%)	C/N比 (モル比)	安定同位対比 (‰)	
				$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$	$\delta^{15}\text{N}_{\text{AIR}}$
PLD-51399 土器付着炭化物	31.4	2.38	15.40	-25.7	8.9
PLD-51400 土器付着炭化物	25.7	1.12	26.65	-25.9	6.0

第 9 表 放射性炭素年代測定の炭素・窒素安定同位体比測定結果

第10表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果（1）

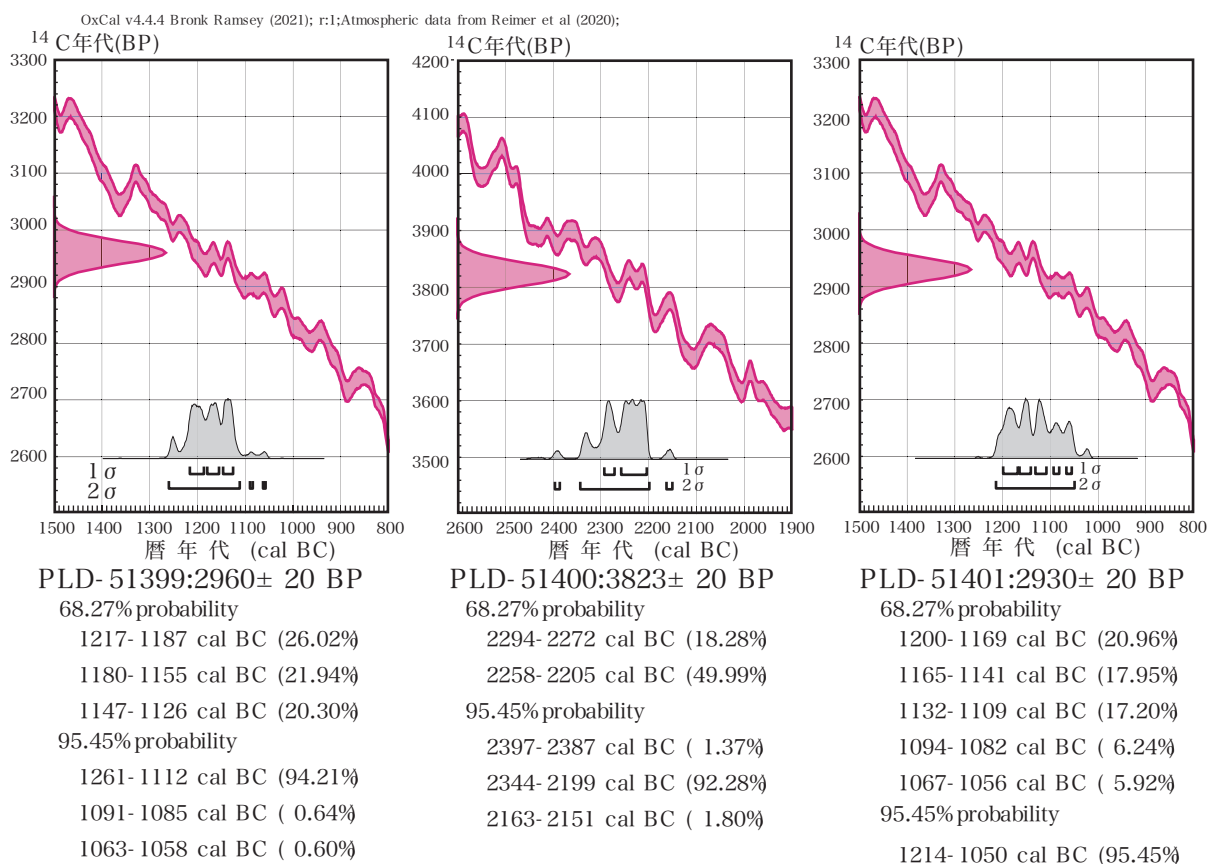
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-51284 試料No.1 0142SN・0170SN	-26.90 $\pm$ 0.15	2203 $\pm$ 18	2205 $\pm$ 20	355-343 cal BC (10.04%) 321-281 cal BC (33.89%) 231-201 cal BC (24.34%)	361-240 cal BC (67.08%) 236-197 cal BC (27.33%) 183-178 cal BC (1.04%)
PLD-51285 試料No.2 5076SK	-27.46 $\pm$ 0.16	2934 $\pm$ 19	2935 $\pm$ 20	1205-1139 cal BC (49.22%) 1134-1111 cal BC (17.32%) 1063-1059 cal BC (1.73%)	1214-1053 cal BC (95.45%)
PLD-51286 試料No.3 1238SK	-28.79 $\pm$ 0.13	2303 $\pm$ 19	2305 $\pm$ 20	398-382 cal BC (68.27%)	403-361 cal BC (90.17%) 274-264 cal BC (3.14%) 242-235 cal BC (2.13%)
PLD-51287 試料No.4 検出2	-27.47 $\pm$ 0.16	4675 $\pm$ 21	4675 $\pm$ 20	3512-3491 cal BC (18.13%) 3465-3426 cal BC (34.75%) 3408-3397 cal BC (8.57%) 3383-3375 cal BC (6.82%)	3519-3486 cal BC (23.77%) 3473-3372 cal BC (71.68%)
PLD-51288 試料No.5 検出 (1) 土器	-28.77 $\pm$ 0.14	4362 $\pm$ 20	4360 $\pm$ 20	3011-2978 cal BC (32.07%) 2966-2945 cal BC (17.04%) 2937-2917 cal BC (19.16%)	3071-3067 cal BC (0.76%) 3025-2909 cal BC (94.69%)
PLD-51289 試料No.6 20001SL	-26.97 $\pm$ 0.18	4114 $\pm$ 20	4115 $\pm$ 20	2848-2811 cal BC (22.24%) 2744-2729 cal BC (7.32%) 2695-2685 cal BC (4.36%) 2677-2623 cal BC (31.97%) 2592-2586 cal BC (2.39%)	2860-2806 cal BC (27.06%) 2753-2720 cal BC (12.05%) 2703-2578 cal BC (56.34%)
PLD-51290 試料No.7 20001SL	-27.71 $\pm$ 0.14	4140 $\pm$ 21	4140 $\pm$ 20	2863-2834 cal BC (14.62%) 2819-2804 cal BC (7.43%) 2756-2719 cal BC (19.37%) 2704-2665 cal BC (20.81%) 2648-2634 cal BC (6.04%)	2872-2798 cal BC (30.50%) 2782-2625 cal BC (64.95%)
PLD-51291 試料No.8 20001SL	-28.46 $\pm$ 0.17	4159 $\pm$ 20	4160 $\pm$ 20	2871-2846 cal BC (14.04%) 2812-2800 cal BC (6.85%) 2780-2743 cal BC (21.26%) 2730-2694 cal BC (20.27%) 2688-2676 cal BC (5.85%)	2877-2833 cal BC (19.33%) 2820-2665 cal BC (72.82%) 2650-2633 cal BC (3.30%)
PLD-51292 試料No.9 20001SL	-28.01 $\pm$ 0.17	4166 $\pm$ 20	4165 $\pm$ 20	2874-2849 cal BC (15.16%) 2810-2796 cal BC (8.65%) 2785-2745 cal BC (24.90%) 2728-2696 cal BC (19.57%)	2879-2837 cal BC (19.61%) 2817-2667 cal BC (74.36%) 2647-2637 cal BC (1.47%)
PLD-51293 試料No.10 10011SS	-28.69 $\pm$ 0.16	-1647 $\pm$ 15 F ¹⁴ C: 1.2276 $\pm$ 0.0024	-1645 $\pm$ 15	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1960-1960 cal AD (11.80%) 1960-1961 cal AD (35.97%) 1983-1984 cal AD (20.50%)	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1959-1961 cal AD (68.38%) 1983-1983 cal AD (5.80%) 1983-1984 cal AD (21.27%)
PLD-51294 試料No.11 10011SS	-23.79 $\pm$ 0.16	-3573 $\pm$ 13 F ¹⁴ C: 1.5603 $\pm$ 0.0027	-3575 $\pm$ 15	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1969-1969 cal AD (68.27%)	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1968-1969 cal AD (95.45%)
PLD-51295 試料No.12 1001SL	-27.60 $\pm$ 0.19	657 $\pm$ 17	655 $\pm$ 15	1294-1306 cal AD (23.37%) 1364-1384 cal AD (44.90%)	1286-1319 cal AD (41.84%) 1359-1389 cal AD (53.61%)
PLD-51296 試料No.13 1004SL	-26.71 $\pm$ 0.14	645 $\pm$ 17	645 $\pm$ 15	1299-1311 cal AD (21.02%) 1361-1388 cal AD (47.25%)	1292-1323 cal AD (39.43%) 1356-1392 cal AD (56.02%)
PLD-51297 試料No.14 6015SL北トレンチ	-30.46 $\pm$ 0.17	328 $\pm$ 17	330 $\pm$ 15	1510-1528 cal AD (15.34%) 1543-1543 cal AD (0.55%) 1551-1592 cal AD (38.25%) 1619-1634 cal AD (14.13%)	1494-1602 cal AD (76.10%) 1609-1638 cal AD (19.35%)
PLD-51298 試料No.15 6115SL	-26.79 $\pm$ 0.14	3405 $\pm$ 19	3405 $\pm$ 20	1741-1710 cal BC (29.89%) 1698-1671 cal BC (25.04%) 1654-1639 cal BC (13.33%)	1746-1625 cal BC (95.45%)
PLD-51299 試料No.16 6159SK	-23.16 $\pm$ 0.14	3413 $\pm$ 19	3415 $\pm$ 20	1744-1684 cal BC (61.16%) 1652-1644 cal BC (7.11%)	1864-1855 cal BC (1.63%) 1767-1759 cal BC (1.53%) 1752-1626 cal BC (92.29%)
PLD-51300 試料No.17 検出2	-28.39 $\pm$ 0.12	329 $\pm$ 16	330 $\pm$ 15	1509-1527 cal AD (15.86%) 1551-1593 cal AD (38.18%) 1619-1634 cal AD (14.23%)	1494-1602 cal AD (76.08%) 1609-1637 cal AD (19.37%)
PLD-51301 試料No.18 6115SL	-26.03 $\pm$ 0.16	3369 $\pm$ 19	3370 $\pm$ 20	1686-1651 cal BC (40.23%) 1645-1621 cal BC (28.04%)	1739-1713 cal BC (13.00%) 1694-1612 cal BC (80.86%) 1574-1565 cal BC (1.32%) 1551-1549 cal BC (0.27%)
PLD-51302 試料No.19 6168SK	-22.60 $\pm$ 0.16	3447 $\pm$ 19	3445 $\pm$ 20	1868-1850 cal BC (16.31%) 1771-1738 cal BC (32.40%) 1714-1695 cal BC (19.57%)	1876-1843 cal BC (22.35%) 1822-1796 cal BC (8.20%) 1778-1728 cal BC (38.76%) 1727-1689 cal BC (26.14%)
PLD-51303 試料No.20 6159SK	-22.50 $\pm$ 0.12	3374 $\pm$ 19	3375 $\pm$ 20	1687-1650 cal BC (42.26%) 1646-1623 cal BC (26.01%)	1740-1712 cal BC (15.08%) 1695-1614 cal BC (80.37%)

第 11 表 放射性炭素年代測定 of 測定試料および処理 (2)

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-51399	遺構: 5131SK 調査区: 4KOS21A 遺物No.d-10870	種類: 土器付着炭化物 部位: 口縁部外面 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-51400	遺構: 5320SI 調査区: 4KOS21A 遺物No.d-11443	種類: 土器付着炭化物 部位: 口縁部外面 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-51401	遺構: 5425SI 調査区: 4KOS21A 遺物No.d-11512	種類: 土器付着炭化物 部位: 口縁部外面 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

第 12 表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-51399 (遺物No.d-10870)	-25.87 ± 0.21	2960 ± 20	2960 ± 20	1217-1187 cal BC (26.02%) 1180-1155 cal BC (21.94%) 1147-1126 cal BC (20.30%)	1261-1112 cal BC (94.21%) 1091-1085 cal BC (0.64%) 1063-1058 cal BC (0.60%)
PLD-51400 (遺物No.d-11443)	-25.17 ± 0.21	3823 ± 20	3825 ± 20	2294-2272 cal BC (18.28%) 2258-2205 cal BC (49.99%)	2397-2387 cal BC (1.37%) 2344-2199 cal BC (92.28%) 2163-2151 cal BC (1.80%)
PLD-51401 (遺物No.d-11512)	-25.92 ± 0.25	2930 ± 20	2930 ± 20	1200-1169 cal BC (20.96%) 1165-1141 cal BC (17.95%) 1132-1109 cal BC (17.20%) 1094-1082 cal BC (6.24%) 1067-1056 cal BC (5.92%)	1214-1050 cal BC (95.45%)



第 117 図 暦年較正結果

第5節 大崎遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

北設楽郡設楽町田口字大崎に所在する大崎遺跡より出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、第 13 表に示す黒曜石製石器 50 点である。試料は、測定前に超音波洗浄器やメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA1200VX を使用した。装置の仕様は、X 線管ターゲットはロジウム (Rh)、X 線検出器は SDD 検出器である。測定条件は、測定時間 100sec、照射径 8mm、電圧 50kV、電流 1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタに Pb 測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光 X 線分析による X 線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた（望月，1999 など）。本方法では、まず各試料を蛍光 X 線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計 7 元素の X 線強度 (cps : count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

1) Rb 分率 = $\text{Rb 強度} \times 100 / (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$

2) Sr 分率 = $\text{Sr 強度} \times 100 / (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$

3) Mn 強度 $\times 100 / \text{Fe 強度}$

4) $\log (\text{Fe 強度} / \text{K 強度})$

そして、これらの指標値を用いた 2 つの判別図（横軸 Rb 分率－縦軸 Mn 強度 $\times 100 / \text{Fe 強度}$ の判別図、横軸 Sr 分率－縦軸 $\log (\text{Fe 強度} / \text{K 強度})$ の判別図）を作成し、各地の原石データと遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光 X 線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせる指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、 $\log (\text{Fe 強度} / \text{K 強度})$ の値が減少する（望月 1999）。試料の測定面には、なるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第 14 表に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、第 118 図に各原石の採取地の分布図を示す。

3. 分析結果

第 14 表に石器の測定値および算出した指標値を、第 119 図 1 と 2 に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

分析の結果、1 点が小深沢群と土屋橋 2 群（ともに長野県、和田エリア）の重複域、41 点が星ヶ台群（長野県、諏訪エリア）の範囲にプロットされた。分析 No.6 と 33 の 2 点は、第 119 図 1 では土屋橋 2 群の範囲にプロットされたが、第

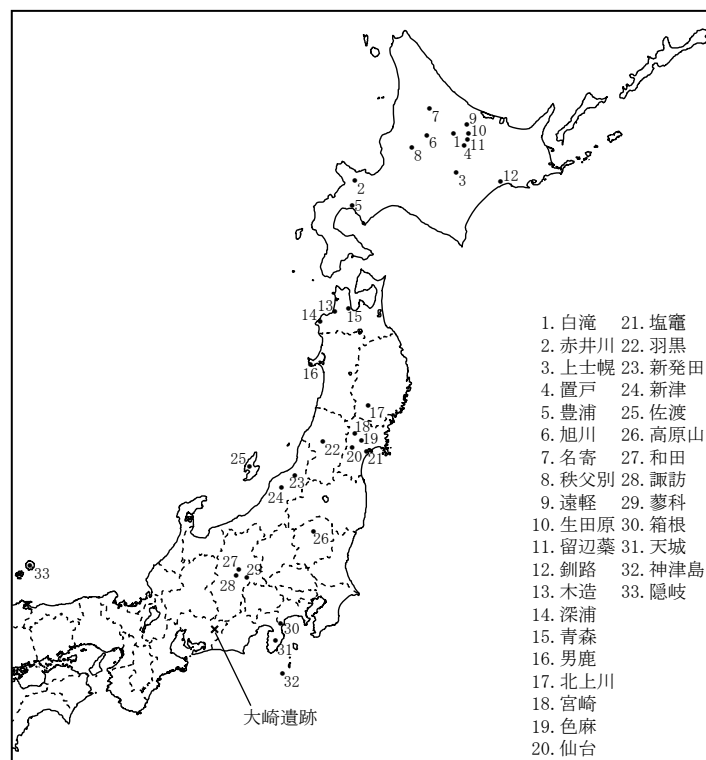
119 図2では土屋橋2群の範囲の下方にプロットされた。これは、先述したように遺物の風化による影響と考えられ（望月1999）、土屋橋2群に属する可能性が高い。同様に、分析No.49は小深沢群または土屋橋2群に、分析No.5、8、13、16、35の5点は星ヶ台群に属する可能性が高い。第15表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。今回分析した50点の範囲内において、全点が信州産であった。

4. おわりに

大崎遺跡より出土した黒曜石製石器50点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、4点が和、46点が諏訪エリア産と推定された。

引用文献

望月明彦（1999）上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定。大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡篇—」：172-179、大和市教育委員会。



第118図 黒曜石産地分布図（「東日本」）

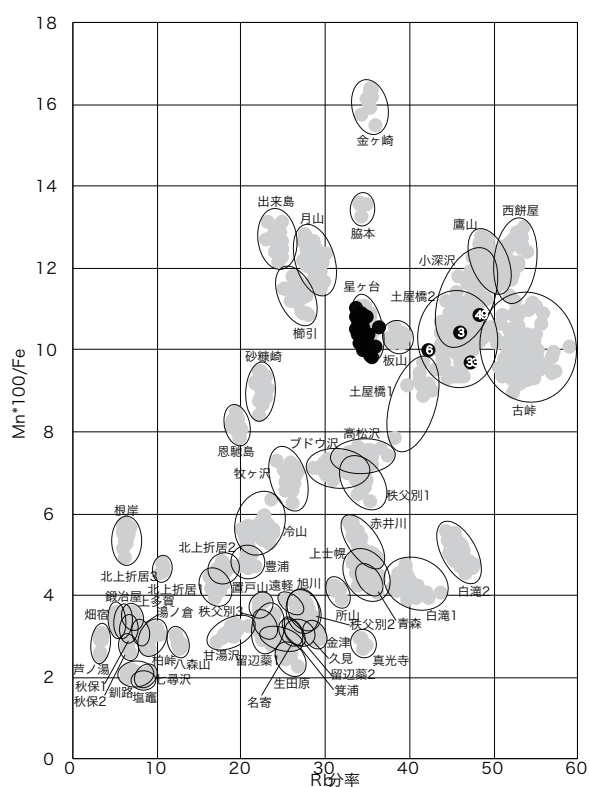


図1 黒曜石産地推定判別図（1）

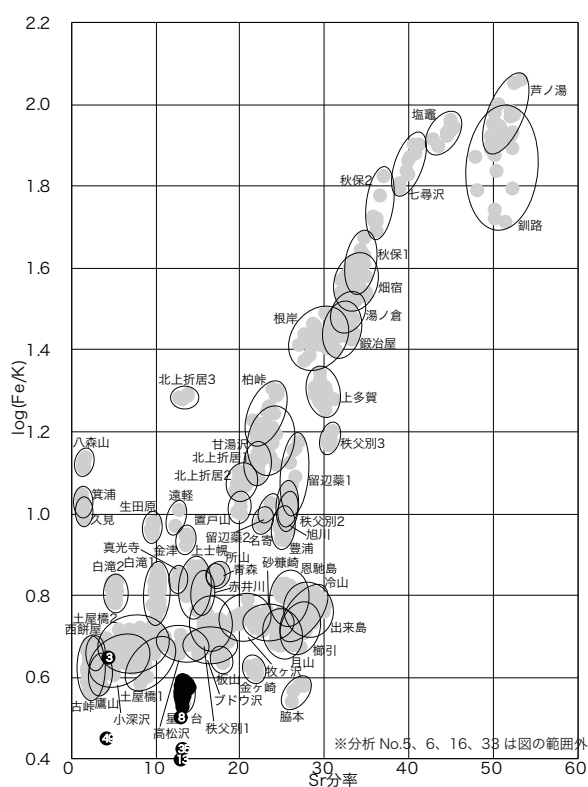


図2 黒曜石産地推定判別図（2）

第119図 黒曜石産地推定判別図

第 13 表 黒曜石産地推定分析対象

第 14 表 東日本黒曜石産地の判別群

分析 No.	仮番号	遺物 番号	地区	グリッド	遺構番号	取上 番号	シール 番号	日付	都道府県	エリア	判別群名	原石採取地	
1	仮-0018	S-065	21A	1414	0021SK	d-0036	1	210908	北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43),八号沢露頭(15)	赤石山山頂,八号沢露頭,八号沢,黒曜の沢,幌加林道(36)
2	仮-0024	S-072	21A	1517	0058SD	d-0044	2	210916			白滝2	7の沢川支流(2),IK露頭(10),十勝石沢露頭直下河床(11),アジサイの滝露頭(10)	
3	仮-0414		21A	2016	5004SI	d-11298		211223		赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)	
4	仮-0415		21A	2016	5004SI	d-11299		211223		上土幌	上土幌	十勝三股(4),タウシュベツ川右岸(42),タウシュベツ川左岸(10),十三ノ沢(32)	
5	仮-0416		21A	2016	5004SI	d-11300		211223		置戸	置戸山	置戸山(5)	所山(5)
6	仮-0417		21A	1916	5004SI	d-11301		211223			所山	所山(5)	
7	仮-0418		21A	1916	5004SI	d-11302		211223		豊浦	豊浦	豊泉(10)	近文台(8),雨紛台(2)
8	仮-0456		21A		5004SI			211223		旭川	旭川	忠烈布川 (19)	
9	仮-0503		21A	1915	5044SI	d-11239		211227		秩父別	秩父別1	中山(65)	
10	仮-0518		21A	2016	5045SK	d-10081	36	210927			秩父別2		
11	仮-0556		21A	1916	5054SI	d-11464		220124		秩父別3			
12	仮-2156	S-078	21A	1913	検1	d-10331	48	210930		遠軽	遠軽	社名淵川河床(2)	
13	仮-2309	S-077	21A	1915	検1	d-10480		211008		生田原	生田原	仁田布川河床(10)	
14	仮-2458	S-094	21A	1916	検1			220128	留辺蘂	留辺蘂1	ケシヨマップ川河床(9)		
15	仮-4126		22A	1216	1235SP	d-0936	73	220915		留辺蘂2			
16	仮-4186	S-041	22B	2417	6004SI	d-0339		220721	釧路	釧路	釧路市営スキー場(9),阿寒川右岸(2),阿寒川左岸(6)		
17	仮-4187		22B	2417	6004SI	d-0340		220721		木造	出来島	出来島海岸(15),鶴ヶ坂 (10)	
18	仮-4197		22B	2417	6004SI	d-0538		220802	深浦	八森山	岡崎浜(7),八森山公園(8)		
19	仮-4198	S-042	22B	2417	6004SI	d-0539	74	220802		青森	青森	天田内川(6)	
20	仮-4199	S-048	22B	2417	6004SI	d-0541	75	220802	秋田	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)		
21	仮-4205		22B	2417	6004SI	d-0557		220802		男鹿	脇本	脇本海岸(4)	
22	仮-4266		22B	2417	6015SI	d-0558		220802	岩手	北上折居1	北上川(9),真城 (33)		
23	仮-4267		22B	2417	6015SI	d-0734		220807		北上折居2			
24	仮-4294		22B	2417	6015SI トレンヂ東			220916		北上折居3			
25	仮-4367		22B	2418	6045SI	d-0556		220802	宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉(40)	
26	仮-4368		22B	2418	6045SI	d-0735		220808		色麻	根岸	根岸(40)	
27	仮-4371		22B	2318	6046SK	d-0374		220722		仙台	秋保1	土蔵(18)	
28	仮-4390		22B	2318	6049SI	d-0591		220803	秋保2				
29	仮-4417		22B	2318	6049SI	d-0399		220722	塩竈	塩竈	塩竈(10)		
30	仮-4448		22B	2318	6049SI④			220913		山形	月山	月山荘前(24),大越沢 (10)	
31	仮-4458		22B	2318	6051SI	d-0395		220722	羽黒		榊引	たらのき代 (19)	
32	仮-4461	S-063	22B	2318	6051SI	d-0619		220803	新潟	新発田	板山	板山牧場(10)	
33	仮-4464	S-062	22B	2318	6051SI	d-0622		220803		新津	金津	金津(7)	
34	仮-4470		22B	2219	6052SI	d-0651		220804	栃木	佐渡	真光寺	追分(4)	
35	仮-4527		22B	2218	6069SI	d-0726		220807		高原山	甘湯沢	甘湯沢(22)	
36	仮-4551		22B	2318	6091SL			220916	長野	和田	七尋沢	七尋沢(3),宮川(3),枝持沢(3)	
37	仮-4555		22B	2218	6099SP	d-0722		220807			西餅屋	芙蓉パーライト土砂集積場(30)	
38	仮-4599		22B	2317	6113SI④			220916			鷹山	鷹山(14),東餅屋(54)	
39	仮-4602		22B	2317	6113SI④			220916			小深沢	小深沢(42)	
40	仮-4620		22B	2218	6115SL	d-1137		221003			土屋橋1	土屋橋西(10)	
41	仮-4639		22B	2218	6115SL			221004			土屋橋2	新和田トンネル北(20),土屋橋北西(58),土屋橋西(1)	
42	仮-4678	S-068	22B	2217	6145SK	d-1409		221012			古峠	和田峠トンネル上(28),古峠(38),和田峠スキー場(28)	
43	仮-4690		22B	2317	6146SK	d-1338		221011			ブドウ沢	ブドウ沢(20)	
44	仮-4706		22B	2318	6157SX	d-1245		221005		牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)		
45	仮-4708		22B	2417	6157SX	d-1263		221006	高松沢	高松沢(19)			
46	仮-4745		22B	2417	6157SX	d-1347		221011	諏訪	星ヶ台	星ヶ台(35),星ヶ塔(20)		
47	仮-4746		22B	2417	6157SX	d-1348		221011		蓼科	冷山	冷山(20),麦草峠(20),麦草峠東(20)	
48	仮-5296	S-080	22B	2218	検出1	d-0205	85	220628	神奈川	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯(20)	
49	仮-5328	S-081	22B	2218	検出2	d-1408	86	221012			畑宿	畑宿(51)	
50	仮-5776		22B	2218	6068SI			221011	静岡	天城	鍛冶屋	鍛冶屋(20)	
											上多賀	上多賀(20)	
									東京	神津島	柏峠	柏峠(20)	
											恩馳島	恩馳島(27)	
									島根	隠岐	砂糠崎	砂糠崎(20)	
											久見	久見パーライト中(6),久見探掘現場(5)	
											箕浦	箕浦海岸(3),加茂(4),岸浜(3)	

第 15 表 黒曜石の測定値と産地推定結果

分析 No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	$\frac{Mn \times 100}{Fe}$	Sr分率	$\log \frac{Fe}{K}$	判別群	エリア	分析 No.
1	290.4	112.2	1065.7	843.7	322.3	436.0	864.2	34.21	10.53	13.07	0.56	星ヶ台	諏訪	1
2	285.1	110.1	1083.4	829.7	311.3	422.6	840.1	34.52	10.17	12.95	0.58	星ヶ台	諏訪	2
3	327.1	151.4	1454.7	1762.5	163.4	739.9	1157.7	46.10	10.41	4.27	0.65	小深沢or 土屋橋2	和田	3
4	282.0	108.8	1011.8	819.7	319.7	422.9	848.9	34.00	10.76	13.26	0.55	星ヶ台	諏訪	4
5	420.7	104.9	970.2	829.9	304.6	422.7	821.0	34.90	10.81	12.81	0.36	星ヶ台?	諏訪?	5
6	249.7	55.8	558.9	581.6	157.6	231.8	407.1	42.20	9.98	11.44	0.35	土屋橋2?	和田?	6
7	256.7	99.9	926.2	732.4	286.4	381.2	768.2	33.78	10.79	13.21	0.56	星ヶ台	諏訪	7
8	292.4	100.9	934.2	744.2	287.3	386.1	789.0	33.73	10.80	13.02	0.50	星ヶ台?	諏訪?	8
9	255.6	101.0	985.6	735.1	275.2	373.2	724.5	34.87	10.24	13.06	0.59	星ヶ台	諏訪	9
10	351.6	119.7	1185.7	941.1	350.5	467.2	917.3	35.17	10.10	13.10	0.53	星ヶ台	諏訪	10
11	232.1	89.6	847.5	661.4	249.5	336.3	680.3	34.32	10.58	12.94	0.56	星ヶ台	諏訪	11
12	234.0	93.0	915.1	725.8	279.2	371.9	749.0	34.14	10.17	13.13	0.59	星ヶ台	諏訪	12
13	381.6	104.2	959.4	830.9	313.5	426.2	838.2	34.50	10.86	13.01	0.40	星ヶ台?	諏訪?	13
14	306.8	118.6	1128.6	872.8	336.5	454.7	926.9	33.69	10.51	12.99	0.57	星ヶ台	諏訪	14
15	329.4	131.6	1233.0	990.1	378.8	511.3	1012.1	34.23	10.67	13.10	0.57	星ヶ台	諏訪	15
16	499.1	107.1	1012.8	931.2	322.0	450.6	851.2	36.45	10.57	12.60	0.31	星ヶ台?	諏訪?	16
17	279.8	110.8	1093.2	812.9	305.7	402.4	796.2	35.08	10.14	13.19	0.59	星ヶ台	諏訪	17
18	269.9	104.4	968.3	795.3	302.3	414.2	813.2	34.21	10.78	13.00	0.55	星ヶ台	諏訪	18
19	219.3	83.6	805.0	662.9	256.5	345.2	690.5	33.91	10.39	13.12	0.56	星ヶ台	諏訪	19
20	304.6	115.3	1075.1	821.6	314.3	422.3	835.5	34.33	10.73	13.13	0.55	星ヶ台	諏訪	20
21	205.5	83.7	760.0	608.0	237.8	321.6	642.4	33.60	11.01	13.14	0.57	星ヶ台	諏訪	21
22	326.9	127.1	1167.7	907.4	349.4	471.7	928.7	34.15	10.89	13.15	0.55	星ヶ台	諏訪	22
23	145.8	59.3	557.2	373.5	145.7	196.7	379.4	34.10	10.65	13.30	0.58	星ヶ台	諏訪	23
24	299.5	118.7	1135.3	896.5	343.7	464.6	910.8	34.27	10.45	13.14	0.58	星ヶ台	諏訪	24
25	311.9	122.8	1136.6	896.5	344.4	468.8	916.5	34.14	10.80	13.11	0.56	星ヶ台	諏訪	25
26	247.4	97.0	961.5	716.5	271.9	358.1	704.3	34.94	10.08	13.26	0.59	星ヶ台	諏訪	26
27	116.8	40.9	404.8	260.2	95.2	128.9	238.3	36.01	10.10	13.17	0.54	星ヶ台	諏訪	27
28	80.4	31.8	300.7	168.3	67.3	86.5	166.2	34.47	10.57	13.79	0.57	星ヶ台	諏訪	28
29	295.2	113.5	1071.6	856.7	328.9	445.3	872.5	34.22	10.59	13.14	0.56	星ヶ台	諏訪	29
30	195.1	78.2	747.5	565.1	217.6	291.8	562.1	34.53	10.47	13.30	0.58	星ヶ台	諏訪	30
31	238.2	92.3	911.7	703.8	268.3	364.2	710.3	34.39	10.12	13.11	0.58	星ヶ台	諏訪	31
32	142.9	54.8	554.8	406.7	151.9	199.0	392.0	35.38	9.88	13.22	0.59	星ヶ台	諏訪	32
33	356.2	71.4	737.2	842.6	189.9	288.0	464.1	47.22	9.69	10.64	0.32	土屋橋2?	和田?	33
34	279.1	106.7	1057.3	794.6	298.7	403.8	793.6	34.69	10.10	13.04	0.58	星ヶ台	諏訪	34
35	400.8	116.0	1063.0	865.4	330.6	447.7	881.8	34.27	10.92	13.09	0.42	星ヶ台?	諏訪?	35
36	140.5	54.3	537.1	301.8	117.9	152.9	290.3	34.97	10.11	13.66	0.58	星ヶ台	諏訪	36
37	302.8	118.4	1155.1	856.6	332.1	439.0	873.9	34.24	10.25	13.28	0.58	星ヶ台	諏訪	37
38	185.7	70.2	713.9	531.4	196.9	260.7	509.6	35.46	9.83	13.14	0.58	星ヶ台	諏訪	38
39	296.9	120.6	1161.2	899.0	343.0	464.5	908.4	34.38	10.38	13.12	0.59	星ヶ台	諏訪	39
40	280.2	102.7	1000.9	749.6	290.9	383.6	750.5	34.47	10.26	13.38	0.55	星ヶ台	諏訪	40
41	82.2	33.2	309.6	168.7	68.0	88.8	163.9	34.47	10.71	13.89	0.58	星ヶ台	諏訪	41
42	290.0	113.0	1076.5	853.4	324.7	441.3	868.2	34.31	10.50	13.05	0.57	星ヶ台	諏訪	42
43	124.4	49.5	470.5	339.1	133.1	175.6	343.1	34.22	10.51	13.44	0.58	星ヶ台	諏訪	43
44	239.4	92.1	847.5	674.6	260.5	355.1	705.0	33.81	10.86	13.06	0.55	星ヶ台	諏訪	44
45	274.3	109.2	1052.3	722.6	275.1	363.9	700.5	35.04	10.37	13.34	0.58	星ヶ台	諏訪	45
46	331.9	127.5	1181.3	916.0	351.2	475.0	934.2	34.23	10.80	13.12	0.55	星ヶ台	諏訪	46
47	352.7	128.4	1283.0	971.8	369.2	496.4	977.8	34.52	10.01	13.11	0.56	星ヶ台	諏訪	47
48	254.0	101.5	979.6	742.0	287.2	386.7	768.0	33.98	10.37	13.15	0.59	星ヶ台	諏訪	48
49	221.4	67.9	625.3	896.0	75.2	361.4	518.0	48.41	10.86	4.06	0.45	小深沢?or 土屋橋2?	和田	49
50	215.7	84.7	830.0	629.2	236.9	316.9	615.0	35.00	10.20	13.17	0.59	星ヶ台	諏訪	50

第6節 大崎遺跡から出土した炭化種実

バンダリ スダルシャン (パレオ・ラボ)

1. はじめに

愛知県北設楽郡設楽町川向地内に所在する大崎遺跡の縄文時代後期の炉跡から得られた炭化種実の同定を行い、当時利用された種実について検討した。

2. 試料と方法

試料は、22B 区の縄文時代後期の遺構とされる炉跡 6159SL から採取され、水洗選別後に抽出された 61 試料である。土壌の採取から種実の抽出までの作業は、愛知県埋蔵文化財センターによって行われた。水洗選別に使用された篩のサイズは不明である。水洗前の土壌量は第 16 表を参照されたい。

種実の同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても 1 個体とみなせるものは完形として数え、1 個体に満たないものは破片とした。炭化材の破片は、およその数を記号 (+) で示した。試料は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のオニグルミ炭化核、トチノキ炭化未熟果・炭化種子・炭化子葉、ムクロジ炭化種子、カラスザンショウ炭化種子、サンショウ炭化種子、イヌザンショウ炭化種子、ミズキ炭化核の 7 分類群、草本植物ではミズヒキ炭化果実のみ 1 分類群の、計 8 分類群が得られた。炭化種実以外には、不明炭化材と炭化子囊菌塊も得られたが、同定の対象外とした(表 1)。また、未炭化のブドウ属種子も得られたが、調査所見や遺跡の立地から、当時の生の種実は残存しないと考えられるため、今回は検討の対象外

とした。

以下に、炭化種実の産出状況を試料 No. 別に記載する。

試料 No.1：トチノキがやや多く、オニグルミがわずかに得られた。

試料 No.2：トチノキがやや多く、オニグルミがわずかに得られた。

試料 No.3：トチノキが多く、ムクロジとカラスザンショウがわずかに得られた。

試料 No.4：トチノキが少量、イヌザンショウがわずかに得られた。

試料 No.5：少量のトチノキが得られた。

試料 No.6：少量のトチノキが得られた。

試料 No.7：少量のトチノキが得られた。

試料 No.8：トチノキとイヌザンショウがわずかに得られた。

試料 No.9：トチノキがやや多く、サンショウとイヌザンショウがわずかに得られた。

試料 No.10：多量のトチノキが得られた。

試料 No.11：トチノキがわずかに得られた。

試料 No.12：少量のトチノキが得られた。

試料 No.13：トチノキがわずかに得られた。

試料 No.14：トチノキがわずかに得られた。

試料 No.15：トチノキとイヌザンショウがわずかに得られた。

試料 No.16：トチノキがやや多く、イヌザンショウとミズヒキがわずかに得られた。

試料 No.17：少量のトチノキが得られた。

試料 No.18：少量のトチノキが得られた。

試料 No.19：トチノキがわずかに得られた。

試料 No.20：トチノキが少量、ムクロジがわ

第 16 表 大崎遺跡から出土した炭化種実

大崎遺跡から出土した炭化種実 (1) (括弧内は破片数)

分類群	試料No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	水洗量 (kg)	9.42	-	11.19	10.15	9.87	9.17	9.52	10.06	10.71	14.64	9.69	8.70
オニグルミ	炭化核	(2)	(1)										
トチノキ	炭化未熟果			(1)									
	炭化種子	(16)	(9)	(22)	(1)		(10)	(3)		(13)	(26)	(2)	(1)
	炭化子葉	(52)	(85)	(188)	(24)	(13)	(17)	(31)	(3)	(68)	(257)	(6)	(14)
ムクロジ	炭化種子			(2)									
カラスザンショウ	炭化種子			1									
サンショウ	炭化種子									(2)			
イヌザンショウ	炭化種子				2				1	2			
不明	炭化材	(+)	(+)	(++)	(+)					(+)	(+)		

大崎遺跡から出土した炭化種実 (2) (括弧内は破片数)

分類群	試料No.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
	水洗量 (kg)	10.48	8.50	4.99	8.45	9.77	8.02	8.33	9.26	9.87	8.14	8.82	9.36	7.59
トチノキ	炭化種子	(2)			(7)	(8)	(6)	(2)	(1)	(1)	(27)	(1)	(1)	(1)
	炭化子葉	(5)	(8)	1 (6)	(58)	(17)	(13)	(4)	(28)	(15)	(49)	(4)	(10)	(4)
ムクロジ	炭化種子								(2)	(1)				
イヌザンショウ	炭化種子			1	3									
ミズヒキ	炭化果実				1									
不明	炭化材		(+)								(+)			

大崎遺跡から出土した炭化種実 (3) (括弧内は破片数)

分類群	試料No.	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37
	水洗量 (kg)	10.07	4.05	10.74	7.64	6.755	8.70	14.28	8.77	13.63	8.08	9.56	9.42
トチノキ	炭化種子	(6)	(9)	(8)	(1)	(6)	(10)	(6)	(2)	(6)	(36)	(32)	(1)
	炭化子葉	(24)	(28)	(28)	(8)	(9)	(24)	(18)	(2)	(22)	(149)	(127)	(10)
ムクロジ	炭化種子										(2)		
サンショウ	炭化種子										(1)		
イヌザンショウ	炭化種子									1			
不明	炭化材	(+)	(+)		(+)							(+)	
子囊菌	炭化子囊塊					1							
未炭化													
ブドウ属	種子			1									

大崎遺跡から出土した炭化種実 (4) (括弧内は破片数)

分類群	試料No.	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49
	水洗量 (kg)	11.42	12.76	15.87	9.95	9.33	11.19	10.71	12.90	4.825	13.02	10.58	9.16
トチノキ	炭化未熟果	1											
	炭化種子	(2)	(2)	(11)	(8)	(3)		(4)	(2)	(1)	(2)		(2)
	炭化子葉	(10)	(13)	(12)	(20)	(22)	(18)	(20)	(12)	(5)	(10)	(5)	(5)
イヌザンショウ	炭化種子								2				
ミズキ	炭化核				3 (1)								

大崎遺跡から出土した炭化種実 (5) (括弧内は破片数)

分類群	試料No.	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61
	水洗量 (kg)	15.30	12.11	13.29	12.89	10.68	10.24	10.24	11.59	12.97	11.88	13.07	15.12
オニグルミ	炭化核	(1)	(1)	(3)									(1)
トチノキ	炭化未熟果											(1)	
	炭化種子				(3)	(2)			(3)	(2)	(2)	(6)	(6)
	炭化子葉	(11)	(5)	(7)	(9)	(21)	(8)	(7)	(9)	(4)	(15)	(50)	(10)
ムクロジ	炭化種子												(1)
サンショウ	炭化種子	(1)		1			(1)						
不明	炭化材		(+)	(+)		(+)						(+)	
子囊菌	炭化子囊塊										(1)		

+:1-9,++:10-49

ずかに得られた。

試料 No.21：トチノキが少量、ムクロジがわずかに得られた。

試料 No.22：やや多くのトチノキが得られた。

試料 No.23：トチノキがわずかに得られた。

試料 No.24：少量のトチノキが得られた。

試料 No.25：トチノキがわずかに得られた。

試料 No.26：少量のトチノキが得られた。

試料 No.27：少量のトチノキが得られた。

試料 No.28：少量のトチノキが得られた。

試料 No.29：トチノキがわずかに得られた。

試料 No.30：少量のトチノキが得られた。

試料 No.31：少量のトチノキが得られた。

試料 No.32：少量のトチノキが得られた。

試料 No.33：少量のトチノキが得られた。

試料 No.34：トチノキが少量、イヌザンショウがわずかに得られた。

試料 No.35：トチノキが多く、ムクロジとサンショウがわずかに得られた。

試料 No.36：多量のトチノキが得られた。

試料 No.37：少量のトチノキが得られた。

試料 No.38：少量のトチノキが得られた。

試料 No.39：少量のトチノキが得られた。

試料 No.40：少量のトチノキが得られた。

試料 No.41：トチノキが少量、ミズキがわずかに得られた。

試料 No.42：少量のトチノキが得られた。

試料 No.43：少量のトチノキが得られた。

試料 No.44：少量のトチノキが得られた。

試料 No.45：トチノキが少量、イヌザンショウがわずかに得られた。

試料 No.46：トチノキがわずかに得られた。

試料 No.47：少量のトチノキが得られた。

試料 No.48：トチノキがわずかに得られた。

試料 No.49：トチノキがわずかに得られた。

試料 No.50：トチノキが少量、オニグルミとサンショウがわずかに得られた。

試料 No.51：オニグルミとトチノキがわずかに得られた。

試料 No.52：オニグルミとトチノキ、サンショウがわずかに得られた。

試料 No.53：少量のトチノキが得られた。

試料 No.54：少量のトチノキが得られた。

試料 No.55：トチノキとサンショウがわずかに得られた。

試料 No.56：トチノキがわずかに得られた。

試料 No.57：少量のトチノキが得られた。

試料 No.58：トチノキがわずかに得られた。

試料 No.59：少量のトチノキが得られた。

試料 No.60：やや多くのトチノキが得られた。

試料 No.61：トチノキが少量、オニグルミとムクロジがわずかに得られた。

次に、得られた分類群の記載を行い、第 20 図に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田 (2003-) に準拠し、APG III リストの順とした。

(1) オニグルミ *Juglans mandshurica Maxim. var. sachalinensis* (Komatsu) Kitam. 炭化核 クルミ科

完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は広卵形。表面には、浅い溝と凹凸が不規則に入る。内部は二室に分かれる。残存高 12.8mm、残存幅 11.1mm。

(2) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 炭化未熟果・炭化種子・炭化子葉 ムクロジ科

未熟果の上面観は円錐形、側面観は三角形。表面はざらつく。壁は厚く、やや弾力があり、柔らかい。高さ 3.6mm、幅 3.0mm。種子は、完形

ならば楕円形。下半部は褐色で光沢がなく、上半部は黒褐色でやや光沢がある。上下の境目の下に少し突出した着点がある。種皮は薄く、やや硬い。種皮の表面には指紋状の微細模様が密にある。残存高 13.8mm、残存幅 11.6mm、残存厚 8.8mm。子葉は、完形ならば球形。表面に皺や筋などは見られず、平滑。破片は不定形に割れる。残存高 14.6mm、残存幅 17.0mm。

(3) ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn.
炭化種子 ムクロジ科

完形ならば球形。上部は突出せず、やや平坦。表面は平滑で、線状の着点の痕跡がある。種皮は厚い。残存長 9.4mm、残存幅 9.2mm。

(4) カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc. 炭化種子 ミカン科

上面観は卵形、側面観は楕円形。表面には大きな網目模様があり、一方の側面には大きな着点がある。着点は種子の長さとはほぼ同じか、やや短い。種皮は厚く硬い。長さ 2.6mm、幅 2.2mm、厚さ 1.8mm。

(5) サンショウ *Zanthoxylum piperitum* (L.) DC. 炭化種子 ミカン科

上面観は卵形、側面観は楕円形ないし倒卵形。縦方向に中央部まで伸びる稜線があり、短い臍が斜め下を向く。網目状隆線は、低く細かい。種皮は厚く硬い。長さ 4.0mm、幅 2.7mm、厚さ 2.6mm。

(6) イヌザンショウ *Zanthoxylum schinifolium* Siebold et Zucc. 炭化種子 ミカン科

上面観は卵形、側面観は円形。表面には小さな網目状隆線があり、一方の側面には、大きな着点がある。着点の長さは種子の長さとはほぼ同じ。長さ 3.6mm、幅 3.0mm、厚さ 2.6mm。

(7) ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. ex Prain 炭化核 ミズキ科

完形ならばゆがんだ球形。基部に裂けたような大きな着点がある。種皮は厚く、やや軟らかい。深い溝と隆起が縦方向に走る。残存長 3.1mm、残存幅 3.7mm。

(8) ミズヒキ *Antenoron filiforme* (Thunb.) Roberty et Vautie 炭化果実 タデ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は広卵形。着点には円形の孔があく。壁は薄く、表面はざらざらしている。長さ 2.4mm、幅 1.7mm。

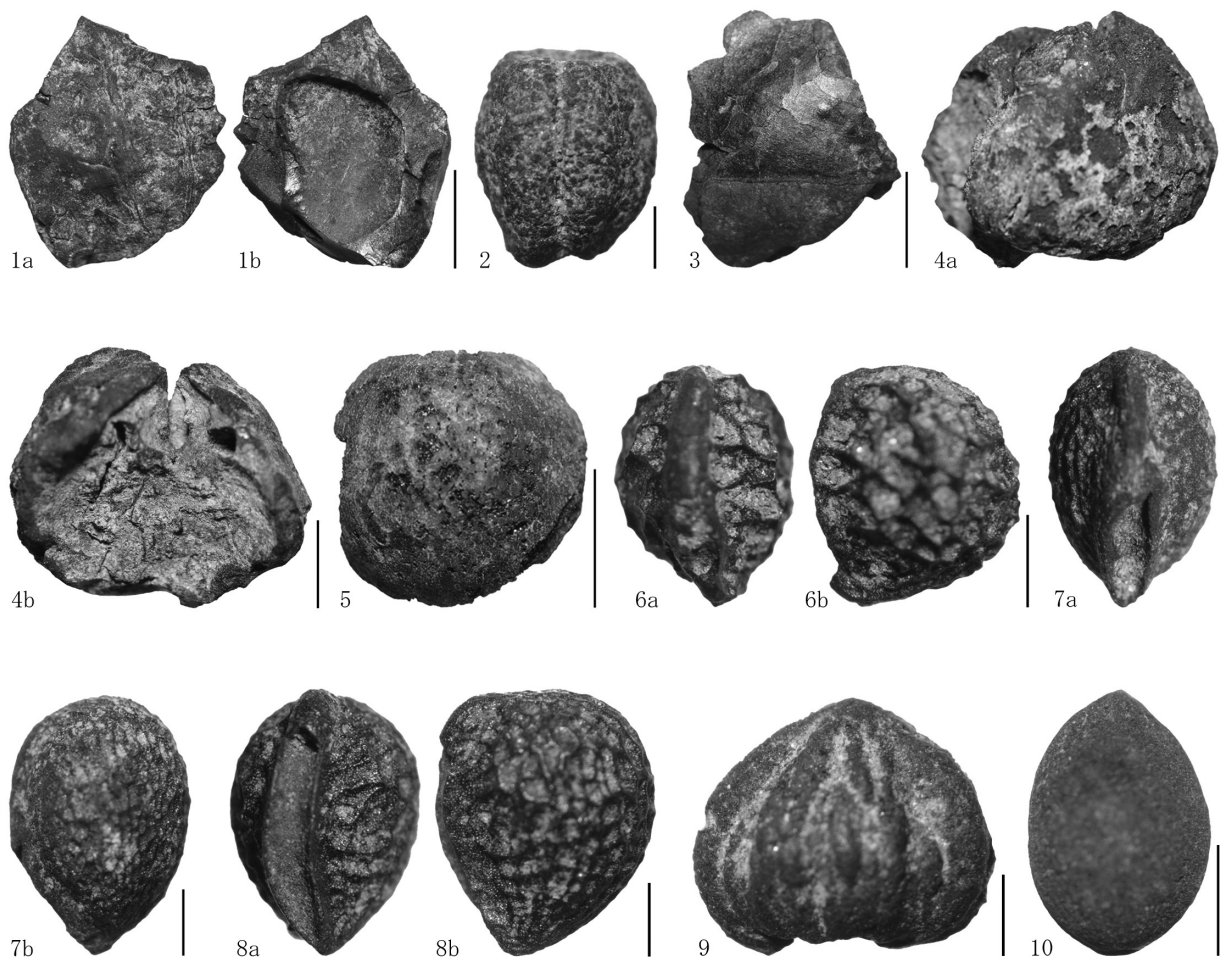
4. 考察

縄文時代後期の炉跡 6159SL からは、野生植物で食用として利用可能な堅果類のオニグルミとトチノキ、ムクロジ、しょう果類のカラスザンショウとサンショウ、イヌザンショウ、ミズキが得られた。オニグルミの核自体は利用できないため、内部の子葉を取り出すために割った核を炉で燃やした可能性などが考えられる。トチノキは食べるにあたってアク抜きが必要である(松山, 1982)。利用できる部位である種子や子葉が多量に出土しており、調理中などに炭化し、炉に堆積した可能性や、保管時に何らかの理由で炭化した種子や子葉が廃棄された可能性などが考えられる。トチノキは、炭化未熟果もわずかながら得られているため、周辺にトチノキが生育していた可能性がある。ムクロジは、アクの成分であるサポニンが含まれているが、種子を煎れば食べることもできる。ムクロジは、近現代の民俗例では洗剤や薬用としても用いられている(長沢, 2012)。しょう果類のミズキは、香辛料としての利用が想定されている(辻ほか, 2006)。イヌザンショウは薬用(鎮咳、消炎薬)として利用されており、カラスザンショウとサンショウは油として利用さ

れた可能性もある。また、野生の草本植物であるミズヒキも得られているが、周辺に生育していたものが偶発的に炉内で炭化し、堆積した可能性がある。

引用文献

- 松山利夫 (1982) 木の実, 371p, 法政大学出版局.
長沢 武 (2012) 野外植物民俗事苑, 443p, ほおずき書籍.
辻 圭子・辻 誠一郎・南木睦彦 (2006) 青森県三内丸山遺跡の縄文時代前期から中期の種実遺体群と植物利用, 植生史研究, 特別第2号, 101 - 120.
米倉浩司・梶田 忠 (2003-) BG Plants 和名-学名インデックス (YList), <http://ylist.info>



スケール 1, 3-5:5mm, 2, 6-10:1mm

1. オニグルミ炭化核、2. トチノキ炭化未熟果、3. トチノキ炭化種子、4. トチノキ炭化子葉、5. ムクロジ炭化種子、6. カラスザンショウ炭化種子、7. サンショウ炭化種子、8. イヌザンショウ炭化種子、9. ミズキ炭化核、10. ミズヒキ炭化果実

第 120 図 大崎遺跡から出土した炭化種実

第5章 総括

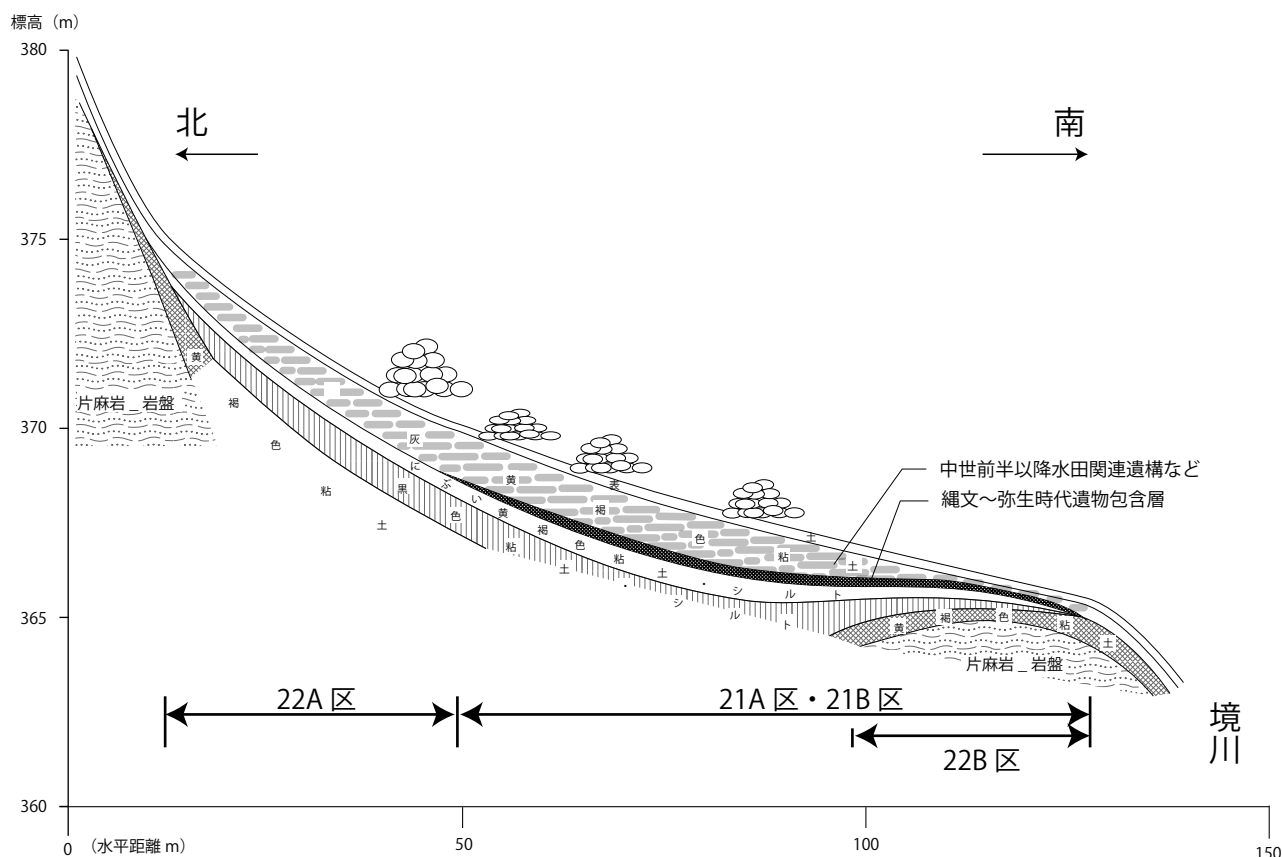
第1節 大崎遺跡の土地利用変遷

大崎遺跡は、標高約 363 ～ 378m、寒狭川（豊川）支流の境川左岸の丘陵上に立地する遺跡である。これまで報告した内容をもとに、模式化した基本層序図による遺跡形成過程を示したものが、第 121 図である。遺跡範囲外の北側と東側には田口の集落方向からの丘陵尾根が伸びており、一方で調査区西側と南側は境川の流れが迫っている。遺跡はこのような地形の四方に囲まれた、標高 365 ～ 375m の緩斜面上に形成されている。以下、ヒトの活動痕跡の在り方を基準として、各段階別にまとめてみた。

STAGE 0 当地の地山は片麻岩の岩盤を主体とし、この片麻岩が風化した部分は明黄褐色の均

質な粘土層の堆積として表出される。この粘土層の形成自体は後期旧石器時代以前にさかのぼるようで、万瀬遺跡および滝瀬遺跡のように、縄文時代早期初頭以前の集落跡などが検出されるのは、この堆積層上面である。大崎遺跡では、片麻岩の岩盤および黄褐色粘土層は調査区の北側および南端で、現地表下の浅いレベルで到達することができた。かつ、遺跡に対峙する境川の南側対岸には、巨大な片麻岩の岩盤を目視することができ、現在の境川はこの片麻岩岩盤を開削して流れている状況がよく分かる。

遺跡範囲の中央には、もともと大きな谷地形が存在していた。これは、調査区北東側（22A 区



第121図 大崎遺跡 基本土層模式図による土地利用変遷状況

東側)に位置している谷地形から伸びるものであり、この谷地形を埋積する堆積層が、黒色の粘土層・シルト層となって遺跡全体に認められていた。片麻岩細片を多く含むこの層は水成堆積層であり、無遺物層であった。この堆積層が浅くなる遺跡の北端と南端に後期旧石器時代の活動痕跡が残されていた可能性もあるものの、今回の調査では明確な痕跡を見つけることができなかった。今回の出土遺物に縦長剥片などがあるものの(S-020)、明確に当該時期のものがまとまって検出されることはなかった。

STAGE 1 今回の調査で、最も古い活動痕跡は、縄文時代早期後半(日本列島的には早期後葉～末葉)の表裏条痕土器の時期である。縄文時代中期・後期・晩期、そして弥生時代前期、中期と、先史時代の活動痕跡が認められる訳であるが、これらの活動痕跡は、上述した黒色粘土・シルト層の上に堆積した、にぶい黄褐色粘土・シルト層の上で確認された。このにぶい黄褐色粘土・シルト層は、元来地山である片麻岩岩盤および黄褐色粘土・シルト層が土石流堆積となって遺跡全体を覆って形成されたものである。この堆積層によって遺跡全体の地盤が安定化し、その後の先史時代の集落活動が活発化したといえる。その活動痕跡は、にぶい黄褐色粘土・シルト層の上に形成された灰黄褐色粘土層として堆積する結果となった。

STAGE 2 上述した灰黄褐色粘土層に連続する形で遺跡全体に堆積している粘土層の時期である。この堆積層では水田関連遺構が連続して確認されている。出土遺物から最も古くて古代【平安時代】から、新しく近世【江戸時代】まで継続して営まれていたと考えられるが、今回の調査で見つかった水田関連遺構の主体は中世前半と推定される。調査区北東側からの継続した流水によ

って堆積層が形成され、かつ耕作活動により攪拌と粘質化したものと考えられる。この耕作活動によって、STAGE 1で形成された先史時代の遺物包含層にも達しており、一部攪拌されたものと考えられる。今回の調査では耕作土内に縄文時代・弥生時代の遺物散布が広く認められるが、その多くは、斜面上方からの流入ではなく、先に当地に存在していた遺物包含層に由来するものの可能性が高い。

STAGE 3 表土付近での活動痕跡である。調査前から片麻岩片による集石遺構が点在している様子を観察できている。最も大きいものは、22A区にあった1001OSS(第42図)で、それをもとに斜面裾に向かって集石遺構が、21A区を中心として展開していた。

『設楽町誌 村落誌』(鈴木・七原ほか2001)は、各地区別に交通・産業・信仰・伝承などが、詳細に記述されている好書である。第2章田口地域にある中島地区の項目には、252頁に大崎の土地利用に関する記載が、以下の様に記されている。この部分の記述は伊藤重洋による。

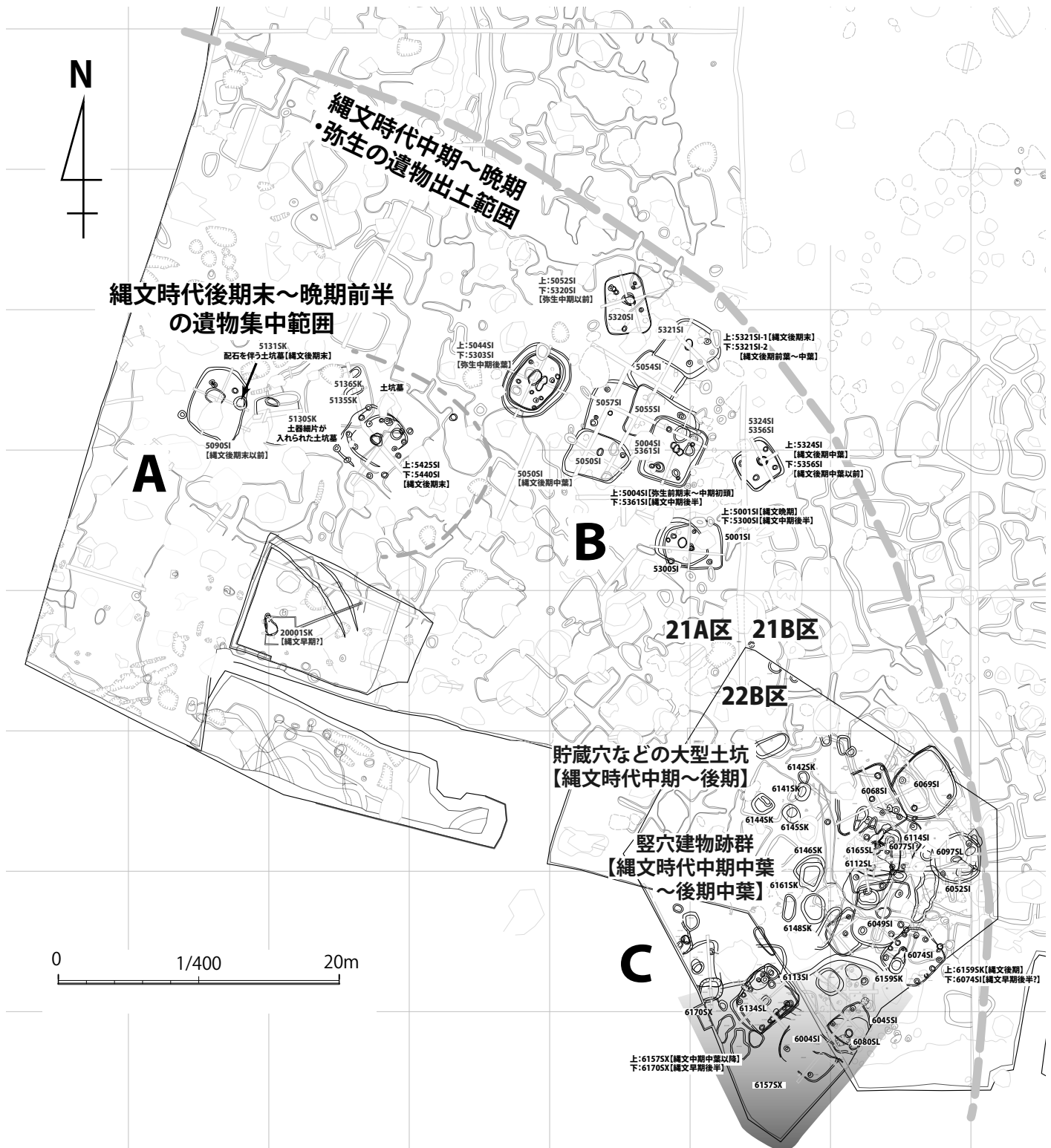
大崎は田口10か村の入会地であった。その大崎に江戸時代から10か村の火葬地があった。伝染病などの悪性の病気で人が死ぬと、この地で火葬されたのである。大正九年(1920)からは町有地となっている。

大崎遺跡の場所は、現在の田口中心部から北西側に向かって丘陵尾根を伝って境川方面に向かった先にある。いわば行き止まりの場所に当たる訳であるが、上記の記述が大崎遺跡の場所を記しているのであれば、江戸時代のある段階からは野焼きによる火葬地であった可能性があり、地表で確認された集石遺構群がその火葬地に伴う遺構であることが想定される訳である。しかし、調査の結

果、集石遺構の周辺および下面からは焼土や炭化物の集中した残存、および焼骨の検出を確認することができなかった。斜面上方からの水流などによりこれらのものが流出した可能性もあるもの

の、今回の発掘調査では、当地の火葬場としての利用を推定する直接的な証拠を掴むことができなかった。

ここで注目すべき点としては、この大崎の記述



第 122 図 21A 区・21B 区・22B 区 南西側に展開する縄文時代～弥生時代の集落跡 (S = 1 / 400)

で、水田関連の内容が見られない点である。このことから、SATGE 2 と SATGE 3 との境は近世前半以前であることが想定され、当地で水田が営

まれていたことは、近代以降は忘れ去られていたといえよう。

第2節 大崎遺跡の先史時代の様相

大崎遺跡では、縄文時代早期後半から弥生時代中期後葉までの遺構・遺物が調査された。ここでは、集落形成様相と、石器についての記述をしておく。

先史時代の集落について

特に遺跡範囲の南西側で集中した様相が認められ、この場所が集落域の中心的範囲であったことが分かる。全体の様子を第74図に示した。分布状況から第122図および第17表のように3地区に分けることができる。

A地区は分布域の西端に当たる。微地形として周囲からの高まりが認められ、B地区・C地区に比べて検出レベルが1m高いことからその様子が窺える。竪穴建物跡と土坑が見つかっており、土坑には土坑墓の可能性のあるものも含まれる。5425SIでは小型ながらも石囲炉跡を検出することができた。また、微地形の高まりの裾部には遺物包含層が展開しており、後世の耕作あるいは削平がなければ、本来は広域に活動痕跡範囲が

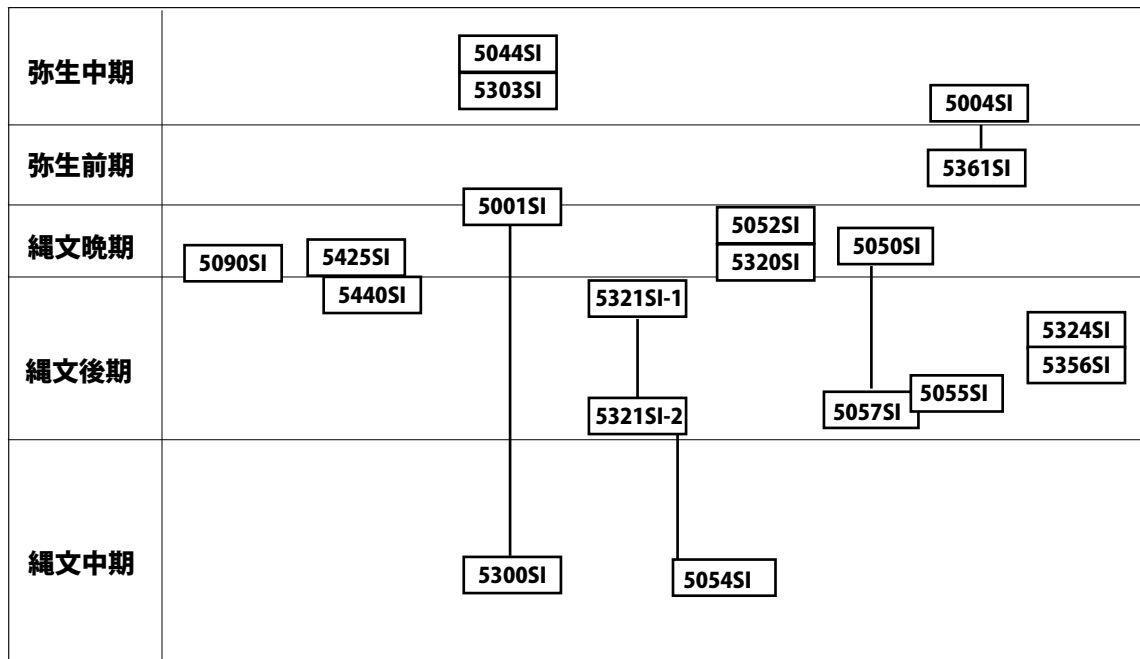
広く存在していた可能性がある。形成時期は、縄文時代後期後葉～晩期に集中していることが注目される。

B地区は、分布域の北東側にあたり、遺跡範囲全体からみると、中央部よりもやや南側付近に当たる21A区と21B区にまたがる範囲のなかに、竪穴建物跡を中心に、土坑も認められる。形成時期は、縄文時代中期後半～後期中葉、縄文時代晩期～弥生時代前期、弥生時代中期、と、差からに三時期に分けられそうである。さまざまな時期の竪穴建物跡が重複した状態で調査された。今回特に注目されるのは、弥生時代の竪穴建物跡である。5004SIは弥生時代前期末～中期初頭の時期と考えられるもので、弥生時代中期後葉の竪穴建物跡である5044SI・5303SIは小判形を呈した周堤を有する建物跡で、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡20A区で見つかった建物跡に類似する。

C地区は、22B区全体が該当する。南端は境川に向かった傾斜地となっており、土器・石

第17表 縄文・弥生時代 小地域別遺構と形成時期一覧

地区	調査区	グリッド	該当遺構	検出面 最高 標高	縄文早期	縄文前期	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	弥生前期	弥生中期
A地区	21 A区	1913・1914・ 1915・2014・ 2015	5090SI・6425SI・5440SI・ 5130SK・5131SK・5135SK・ 5136SK	366m	?		?				
B地区	21 A区 21 B区	1816・1915・ 1916・1917・ 2016・2017	5001SI・5004SI・5044SI・ 5050SI・5054SI・5055SI・ 5057SI・5300SI・5303SI・ 5320SI・5321SI・5324SI・ 5356SI・5361SI	365m							
C地区	22 B区	2217・2218・ 2219・2317・ 2318・2319・ 2417・2418	6004SI・6045SI・6052SI・ 6068SI・6069SI・6077SI・ 6113SI・6114SI・6141SK・ 6142SK・6144SK・6145SK・ 6148SK・6149SI・6157SX・ 6159SK・6170SX・	365m							



※太線および重なりは重複関係を、矢印は帰属時期が遡る可能性を示す。

第 123 図 縄文～弥生時代集落跡 B 地区の竪穴建物跡時期相関図

器がまとまって出土する捨て場であったと考えられる。捨て場には縄文時代早期後葉の遺物 (6170SX) とともに、縄文時代中期中葉から後半の土器がまとまって出土した (6157SX)。竪穴建物跡は、縄文時代中期中葉から後期中葉までに帰属するものが重複して調査された。6052SI では土器片を含む炉跡 6052SL が見つかり、本来は土器敷炉跡であった可能性が考えられる。また、6077SI などに伴う炉跡 6165SL では後期中葉の八王子 1 式土器深鉢片が入れられていた。

A～C 地区の集落形成時期を見ると、B・C 地区で、縄文時代中期後半～後期中葉の時期が共通している以外は、各地区の主体となる形成時期はそれぞれ異なることが分かる。特に注目すべき内容としては、竪穴建物跡と捨て場 (送り場) との関係である。縄文時代中期を主体とする C 地区では境川に向かう傾斜地に形成されていた一方、後期末～晩期を主体とする A 地区では、微高

地の裾部に捨て場 (送り場) と考えられる遺物包含層が形成されているという点である。後者では土坑墓と考えられる遺構も付近で認められるなどの事情も加わり、垂直方向・水平方向に繰り返した包含層形成がなされていた可能性がある。縄文時代中期は地形斜面側に、後期以降は丘陵上に包含層が形成される様子は、小松地区の笹平遺跡でも認められる (鈴木編 2022)。また、大名倉地区の西地・東地遺跡では、中期末以降は竪穴建物跡が見つかった場所と丘陵斜面変換点との斜面上方にまとまった遺物包含層の範囲が確認されており、これが送り場であった可能性がある (川添編 2019)。このように、今回の大崎遺跡の調査では、設楽地域における縄文時代の集落形成の在り方を考える上で、重要な調査成果が追加されたと言える。

また、今回の調査で弥生時代中期初頭の竪穴建物跡が調査されたことは、当地の弥生時代の活動を考える上でとても注目される。近年、弥生時代

第 18 表 石器石材別

		石 鏃	石 錐	石 匙	ス ク レ イ バ ー	楔 形 石 器	打 製 石 斧	礫 器	加 工 痕 の あ る 剥 片	加 工 痕 の あ る 礫 片	加 工 痕 の あ る 礫	剥 片	微 細 剥 片
黒曜石	点数	13	2		2	2			13			104	1
	重さ (g)	7.5	1.5		2.4	3.3			14.3			81.4	0.1
下呂石	点数	2							1			21	
	重さ (g)	0.7							0.8			35.5	
チャート	点数											4	
	重さ (g)											6.0	
溶結凝灰岩	点数	10	2	3	13		11		47			337	
	重さ (g)	10.6	9.3	41.5	373.5		646.3		722.1			690.0	
凝灰岩	点数	2			1				3	3	2	49	
	重さ (g)	7.8			13.8				63.6	76.0	163.9	728.6	
砂質凝灰岩	点数						3		4	5	1	35	
	重さ (g)						131.2		37.2	77.9	19.5	1034.4	
泥質凝灰岩	点数			2	5	1	7		18	3		148	
	重さ (g)			14.9	168.2	13.4	657.2		756.8	190.1		3265.9	
安山岩 A	点数												
	重さ (g)												
安山岩 B	点数			3	8		59	3	31	10		615	
	重さ (g)			63.3	60.2		4170.5	1767.4	1423.1	981.5		19051.8	
安山岩 C	点数												
	重さ (g)												
安山岩 D	点数				3		11		8			103	
	重さ (g)				121.0		1221.5		601.9			4230.0	
安山岩 E	点数	1		1	3		44		21	5	3	333	
	重さ (g)	1.9		2.6			500.6		688.4	702.7	64.9	286.9	
安山岩 F	点数											1	
	重さ (g)											46.2	
その他安山岩	点数	1					4					7.0	
	重さ (g)	0.4					235.5					521.4	
緑色片岩	点数						2						
	重さ (g)						93.6						
凝灰質泥岩	点数								2			4	
	重さ (g)								11.8			47.0	
凝灰質砂岩	点数						1					4	
	重さ (g)						107.3					133.5	
砂岩	点数												
	重さ (g)												
蛇紋岩	点数												
	重さ (g)												
滑石	点数												
	重さ (g)												
閃緑岩	点数										1		
	重さ (g)										37.7		
塩基性岩	点数												
	重さ (g)												
頁岩	点数												
	重さ (g)												
花こう岩	点数												
	重さ (g)												
片麻岩	点数								1			4	
	重さ (g)								94.3			224.7	
アブライト	点数											1	
	重さ (g)											168.1	

出土器種点数・総重量一覧

礫片	石片	石核	石核原形	原石・礫	碎片	磨製石斧	石錘	磨石	敲石	磨石+敲石	凹石	台石	被熱石・礫
	3	10			12								
	1.2	38.3			0.4								
		1											
		2.9											
		1											
		3.4											
31	51	42		4	1		1						
1578.3	660.7	4172.9		869.5	0.1		3.9						
27	192	5		90			5	2	8	1	1		2
764.8	2953.6	337.4		9046.7			226.2	790.3	327.6	76.9	238.4		221.9
21	143	3		54		1	3	12	6		4		4
1392.8	3403.0	1318.7		5726.6		233.3	198.4	7490.6	2652.5		1879.3		160.1
28	96	24		22			1	2			1	1	
665.2	365.1	3320.1		3736.2			49.2	541.5			71.9	5.4	
200	104	148	1	68				3					
14437.6	3269.8	36612.9	717.8	9566.5				1697.0					
		1											
		1531.3											
13	13	15			1								
946.2	590.8	5640.8											
154	58	43	3	70				3	4				
14112.3	2373.3	34955.7	251.2	15340.5				1187.2	1181.6				
3	59	1		69	2		2	17	9		9	3	8
635.7	3379.0	158.8		36526.5	0.3		114.9	3005.7	3852.0		4187.4	20099.9	3398.4
				1									
				133.1									
3	7		1	7			1						
338.7	247.6		17	939.3			117.5						
	30	1		29				2	3		2		7
	1060.2	92.7		6397.0				417.1	1256.6		791.7		4037.1
	1			1				1				1	1
	73.4			17.8				883.1				5000.0	181.6
						1							
						91.9							
						1							
						21.1							
	9			14		1	1	1	2		2		
	747.2			7330.3		32.5	38.9	135.3	880.5		875.7		
	1					8	5						
	27.5					87.4	25.4						
								1					
								1376.9					
	7			30				12	4		2	10	
	2431.2			66950.8				7371.8	2172.0		783.6	43346.6	
1	135			343	1		7	49	21		16	1	4
35.8	7055.8			71604.1	24.9		742.4	9252.4	10650.8		9500.5	350.6	2751.1
1	12			31				14				5	
80.6	1376.6			52710.3				8570.9				22007.5	

前期後半を主体とする竪穴建物跡群が、八橋地区の根道外遺跡で見つかった（川添 2024a）。先に述べたように、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡 20A 区では、弥生時代中期後葉の集落跡がまとまって調査されている（川添・河嶋・田中 2021）。今回の大崎遺跡の報告によって、これまで不明瞭であった、弥生時代前期から中期初頭・そして中期後葉の集落動態を考える上での貴重な調査データが公表されることとなった。

石器についての補遺

第 3 章第 3 節に石器・石製品についての報告がなされているが、ここで改めて、限られた頁数の中ではあるものの、石器・石製品についての補足をしておくこととする。

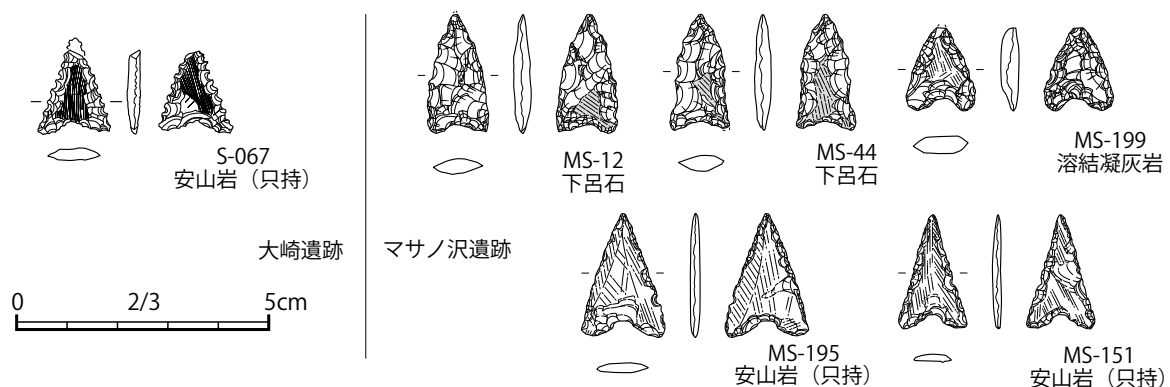
出土石器には、後期旧石器時代にさかのぼりうる縦長剥片の出土もあるものの、その出土は STAGE1 からの出土であり、原位置を保っておらず、かつまとまっていない。このことから、石器群の主体はやはり縄文時代早期後半から弥生時代中期までに属する資料群であると考えていいであろう。

これに基づく器種と出土点数については、第 3 章第 3 節に報告されている。また、器種から石材についての個別報告はなされている。ここでは、使用石材と器種との関係について言及しておきた

い。なお、石材同定は堀木真美子によるもので、特に安山岩に関する分類基準は、『西地・東地遺跡』報告書に準拠していることを明記しておく（堀木 2019）。

器種別の出土点数と石材別総重量を示したのが、第 18 表である。設楽ダム関連で調査された遺跡同様に、小型剥片石器では黒曜石が、大型の剥片石器では、安山岩 B・安山岩 D・安山岩 E の使用が卓越している様子を見ることができる。また、磨石敲石類では、片麻岩・花こう岩のほかにアプライトの使用が多い傾向が見受けられる。下呂石の使用も認められるが、出土資料でみるとそれほど多くないようである。

なお、S-067 は石鏃の中でも部分磨製石鏃とされるもので、ここに示す類型は、近年の研究で縄文時代後期中葉に特徴的に出現することが明らかとなったものである（川添 2011・2016 など）。使用石材は、豊川中流域に原産地のある、只持安産岩である。小松地区のマサノ沢遺跡でも同様の部分磨製石鏃が出土しており（第 124 図の M-151・195）、こちらも縄文時代後期中葉に属するものと考えられる。当地においては、単なる狩猟というよりは特殊な場面で使用された石鏃の可能性もあり、大崎遺跡での類例出土は、大変注目されるところである。



第 124 図 大崎遺跡およびマサノ沢遺跡出土の部分磨製石鏃

第3節 古代以降の遺物出土状況と水田関連遺構について

出土分布の違いからみた古代と中世 以上に提示した遺物に加え実測図で示していない遺物についても各破片ごとに分類を行った。そして時代別・器種別の遺物点数を計上してグリッドごとの出土分布図を作成したところ、古代と中世さらにその前半と後半で遺物の出土分布域に顕著な違いが見出すことができた（第105・106図）。まず、古代は灰釉陶器の出土分布に特徴がある。すなわちその点数の多いグリッドが、遺跡の北西部（22区西部）と南部（21A・B区南端）に集中しており、それぞれが古代の活動域であったと推測される。もちろん水田面の下位にあたる22A区検2面でも灰釉陶器などが出土しているので、これらの活動域が水田耕作に伴うものではないことは明らかである。これに加えて、古代の煮炊具である土師器三河型甕1点と清郷型鍋4点の分布を重ねると、清郷型鍋は全て北西部に集中していることが注目される。大崎遺跡出土の清郷型鍋の時期は、灰釉陶器の後半段階から山茶碗の初期段階（10世紀後半～11世紀）に相当することから、遺跡北西部の活動域が古代から中世へ継続したとみることができる。これに対して南部の活動域は、完形の灰釉陶器碗（2051）などK-90号窯式期～O-53号窯式期である点は北西部とさほど変わらないが、グリッド2015以外は1～2点にとどまり集中の度合いは低いように思われる。このことから大崎遺跡における古代（平安時代）の活動域は主に北西部にあり、南部は一時的なものであったと推測される。

次に中世の山茶碗と土師器鍋の出土分布をみる。山茶碗は遺跡北西部から南部にかけてほぼ切れ目なく分布している。1グリッドあたり5点

以下が大半であるが、グリッド2118のように9点に上るところもあり、分布は遺跡の西部から南部に比較的偏っているようにみえる。なお遺跡北東部には、ほぼ地表面に立地する塚状遺構10010SSがありここでも山茶碗が出土しているが、当該遺構の性格からして活動域とは分けて扱う必要がある。大半の山茶碗の時期は12世紀～13世紀前葉であることから、古代の清郷型鍋以降に活動域が拡大したとみることができる。一方、中世土師器の分布は山茶碗とやや異なっており、遺跡北端部のグリッド1017で最多点数（12点）となりその近隣グリッドも点数が多いが、分布域としては22区内で一旦途切れている。そして遺跡西部（21A区）の半ば（グリッド1713）から南側で再び増加傾向に転じ、遺跡南西部に集中域がみられる。グリッド1914では山茶碗が5点あり、グリッド1915では伊勢型鍋が埋納された状態で畦畔上の土坑5140SKから出土している。ところがそこから東側では山茶碗は分布するものの土師器鍋はほとんどみられない。

以上のように山茶碗と土師器鍋の分布域に違いがみられるのは、先述した山茶碗の時期に対して土師器鍋は13世紀後半以降戦国時代までのものを多く含んでいるからである。また伊勢型鍋が埋納された土坑5140SKは畦畔上にあることから、それまでに当該地点は水田化していたことになる。このように遺跡内における土地利用が中世の前半と後半で大きく変化している点も考慮すべきであろう。したがって、羽付鍋やくの字形内耳鍋が集中する遺跡北西部では14世紀以降も居住域としての土地利用が継続していたとみられる。さらに遺跡北西部では白磁や青磁の碗・合子も集中

する傾向にあり、古代（平安時代）から集落の中心地として機能していた場所と捉えることができる。

水田景観の形成 以上、出土遺物のなかでも中世前半と後半の分布状況の違いが、水田遺構で示される大崎遺跡における土地利用の変化に関係している点を確認した。しかし同時に、検出された水田遺構の全てが同時に構築されたのではないことも確認した。そこで水田がどのように開かれていったのかを検討する。

水田遺構を水源地と各田面で検出された水口（畦畔の切れ目）によって7つの群に分ける。水源地については遺跡内で2条の水路が検出されているので、それぞれから取水する水田群が存在する。それらは機能時期が共通しているはずだから相互に重複関係がなく方位などが揃っていることになる。しかし一方で、検出された水路からは給水を受けることが不可能な区域も存在する。したがってそれらは別の一群として把握することになる。そして各水田群の構築順を出土遺物の分布状況も合わせて検討すると以下ようになる。

① 遺跡南東部（21B区東半）にある南西方向に開けた凹地地形の一群（1a）が最初に開かれたと考えられる。当該水田群の水源地は遺構として確認されていないが、水口の位置からみた給水経路は北から南方向が大半となっている。したがってその水源地は、1aの北東隅（グリッド1820）に位置する沢状地形に求めることになる。この段階では、水路を開削せずに山上方向からの湧水に依拠していた可能性が高く、水源地から木樋で水を引いていた可能性もあるだろう。これと同様の状況が遺跡北東部（1b、22A区東半部）にある。この水田群も西側に開けた凹地地形にあり、その南側で水路1219SDが検出されているが、それ

との間には塚状遺構10010SSの立地する舌状に張り出した微高地があることから、当該水路からの給水は不可能である。地形的に見出すことは難しいが凹地地形の最奥部となるグリッド1221付近が水源地だった可能性がある。以上の水田群は下層や水田面から12世紀～13世紀前半の山茶碗が出土しているので、開田は13世紀後半と推定される。

② 遺跡中西部の北から南へ下る緩斜面に立地する2か所の水田群である。まず、南北方向の水路0145SD（1006SD）から東側の一群（2a）は、水口をみるとほぼ北から南へ給水がなされており一見水路を水源としているようでもあるが、給水経路を遡上すると当該水田群の北東側に位置する水路0058SD付近に辿り着く。0058SDは遺跡北東部から下ってくる1219SDの延長にあり、比較的遠方の水源地から水を引くことが開始された状況がうかがえる。これに対して0145SD西側の一群（2b）は、調査範囲内において水源地は不明で、給水経路からすると調査区外の北西方向に水源地を想定せざるを得ない。したがってこちらも0145SDの構築以前に開かれた可能性が高い。これらの水田群でも①と同じ時期の山茶碗が出土していることから、開田時期に大きな差はないと思われるが、①が凹地地形であるのに対してより開けた地形を利用している点で技術的な変化があった可能性もある。

③ 遺跡南部（21A・B区）に位置する。河岸段丘の崖面に沿って形成される約20m×約60mの細長い水田群である。水口にみる給水経路は北西から南西を基軸に南西方向へ下る地形に沿った給水を行っている。これらの水源地は③の北西隅に当たり、その地点には伊勢型鍋が埋納された土坑5140SPが位置する。このことから5140SPが

水源祭祀に関わる可能性が考えられるが、水路も検出されていないので水源確保の具体的な手段については不明である。③の開田時期は伊勢型鍋が14世紀代まで下る可能性が考えられるので、①や②にくらべて明らかに一段階後に位置付けられる。

④ 遺跡北西部（4a、22A 区西半部）と遺跡南西部（4b、21A 区西部）の2か所に認められる。これらは水路 0145SD（1006SD）に沿って配置されており、特に後者では枝分かれした取水口も認められることから一連で構築されたものである。水路は北から南へ下る緩斜面の中央を流れており、その両側への給水が設計されたもので、先述した 2a の一部もこの水路開削に伴って作り替えられている可能性もあるだろう。④の構築時期は域内で16世紀代まで下る可能性のある内耳鍋も出土しているので戦国時代かそれ以降と考えられる。当該水田群の構築は単に最終段階というだけでなく、平安時代から継続し水田構築に関わったとみられる集落の居住域を水田に作り替えたという点で遺跡の大きな画期に位置付けられる。以後新しい時期の居住に関わる遺物はほとんどみられないことから、遺跡から居住域が撤退して耕作地としての利用に限定されることになる。また、大崎遺跡の位置における村落の活動が文献史料で確認できないことから、それらの史料が形成された18世紀以前の状況であるともいえる。

（永井邦仁）

水田関連遺構に関する補遺

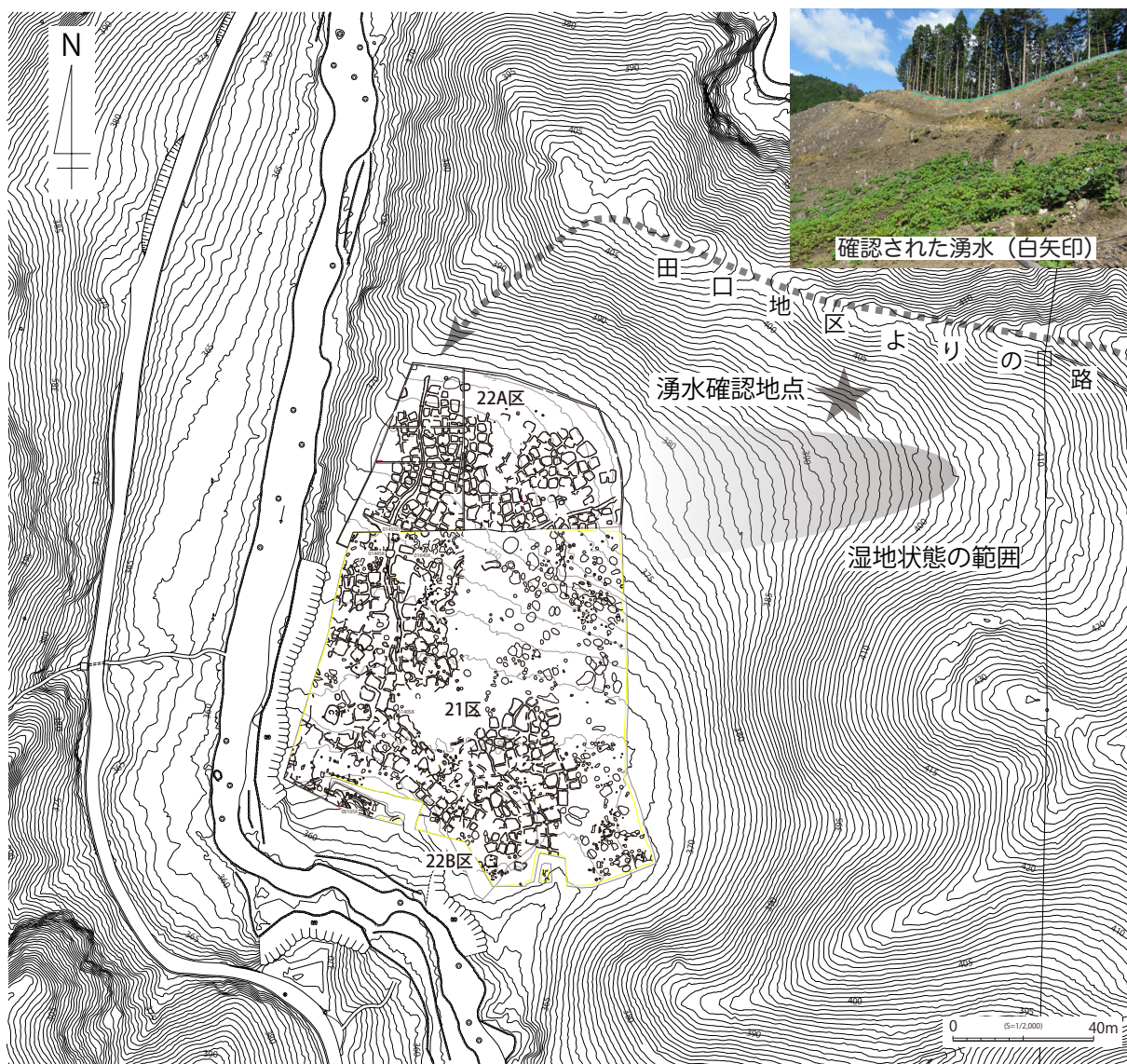
大崎遺跡で見つかった水田関連遺構では、傾斜地を利用した棚田状況の景観であったことが推定される。調査区内には導水路と考えられる用水路が見つまっているものの、検出されている導水路

のみでは、検出された水田全体に水を配することは難しいものと考えられる。主たる配水は掛け流しの形状で、水田関連遺構の西端・南端など、一部配水が行き届くように導水路での配水が補足的に行われていた、というのが現状であったと考えられる。

ここでは水田関連遺構に配された流水の水源について少し述べておきたい。令和3（2021）年の調査前から22A区東に接して位置する谷地形側は常に湿潤状態であることが、当初から注目されていた。この湿潤の原因は、この付近で地下水が表出していることが原因であろうと、推定されていた。令和4（2022）年度になって、周囲にあった植林の伐採工事が進むにつれて、さらに出水の様子を地表からも詳細に観察することができるようになった。調査区より60mほど東で、斜面からの湧水の存在を確認することができたのである（第125図の星印）。

第126図では、22A区東壁の土層断面写真を出しておいた。これを見ると、土石流堆積層を挟んだ上下の層に水田畦畔が営まれていた痕跡を見ることができる。水流の流れは、当然、時には土石流堆積の流れになることもあったであろう。

なお、このような傾斜地における水田関連遺構の形成は、設楽ダム関連調査で複数事例が確認されている。万瀬遺跡および大栗遺跡では、近世以降の水田関連遺構が土層断面のみで確認されている（河嶋編2024、樋上編2022）。上ヲロウ・下ヲロウ遺跡では、20A区北半で古代以降の耕作土が見つまっている（川添・河嶋・田中2021）。また、下延坂遺跡では、戦国期から近世・近代に継続した耕作地（水田）が全面にわたって見つまっている（渡邊2023、川添2024b）。これら耕作活動は、もともとかつての縄文時代の集落地の



第 125 図 大崎遺跡周辺で確認された湧水の位置 (S=1/2,000)



第 126 図 大崎遺跡 22A 区東壁 土層断面状況写真 (上：全景、下：拡大 西より)

上で営まれている場合が多い。その結果、遺物包　　の結果、細片化した遺物がまとまって出土するこ
含層が耕作活動によって攪拌されているため、そ　　となった、と考えられる。

参考文献

愛知県 2010 『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』

愛知県 2017 『愛知県史 資料編5 考古5 鎌倉～江戸』

河嶋優輝編 2024 『万瀬遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第222集

川添和暁 2011 『先史社会考古学—骨角器・石器と遺跡形成から見た縄文時代晩期—』 六一書房

川添和暁 2016 「縄文時代後晩期における剥片石器石材について—尾張・三河地域の剥片石核類から—」
『研究紀要』17. 11～30頁 愛知県埋蔵文化財センター

川添和暁 2024a 「下延坂遺跡」『年報 令和5年度』41～43頁 愛知県埋蔵文化財センター

川添和暁 2024b 「根道外遺跡」『年報 令和5年度』44～47頁 愛知県埋蔵文化財センター

川添和暁編 2019 『西地・東地遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第211集

川添和暁・河嶋優輝・田中 良 2021 「上ヲロウ・下ヲロウ遺跡」『年報 令和2年度』26～33頁
愛知県埋蔵文化財センター

北村和宏・木川正夫 2007『設楽ダム関連遺跡総合事前調査 詳細遺跡分布調査報告書』 愛知県教育委
員会

鈴木富美夫・岡田松三郎ほか 1968『北設楽郡史 原始—中世』 北設楽郡史編集委員会

鈴木富美雄・七原俱幸ほか 2001『設楽町誌 村落誌』 北設楽郡設楽町

鈴木正貴編 2022 『笹平遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第215集

永井宏幸編 2023 『マサノ沢遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第219集

樋上 昇編 2020 『川向東貝津遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第213集

樋上 昇編 2022 『大栗遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第218集

堀木真美子 2019 「石材分類について」『西地・東地遺跡』 205～206頁 愛知県埋蔵文化財センター
調査報告書第211集

渡邊 峻 2023 「下延坂遺跡」『年報 令和4年度』32～37頁 愛知県埋蔵文化財センター

遺構図版

遺構図版 1 ～ 35	1 面遺構	(縮尺 1:100)
遺構図版 36 ～ 40	2 面遺構	(縮尺 1:100)
遺構図版 41 ～ 53	3 面遺構	(縮尺 1:100)
遺構図版 54	4 面遺構	(縮尺 1:100)
遺構図版 55 ～ 56	最上面遺構	(縮尺 1:200)

遺構図版1

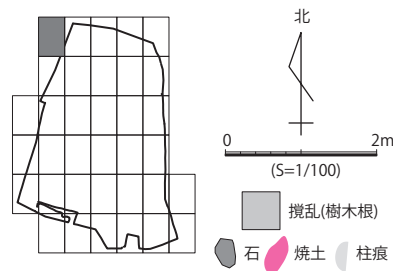
1面遺構(1)

X=-99,100
Y=36,140
1014

X=-99,100
Y=36,150
1015

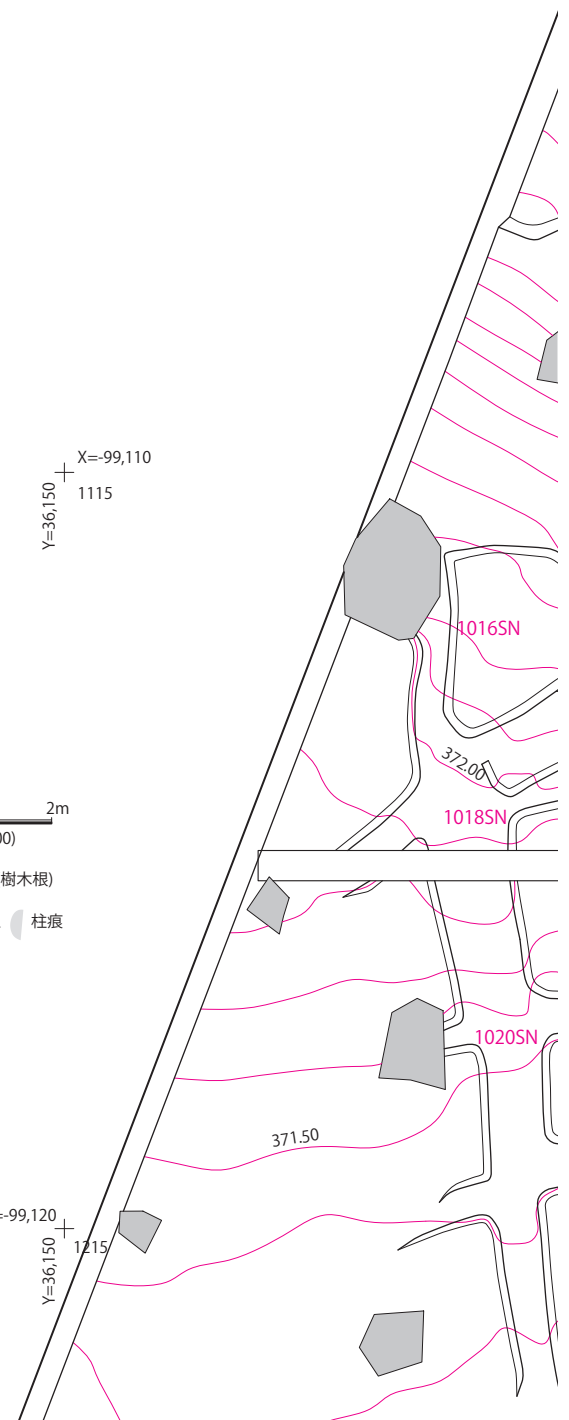
X=-99,110
Y=36,140
1114

X=-99,110
Y=36,150
1115



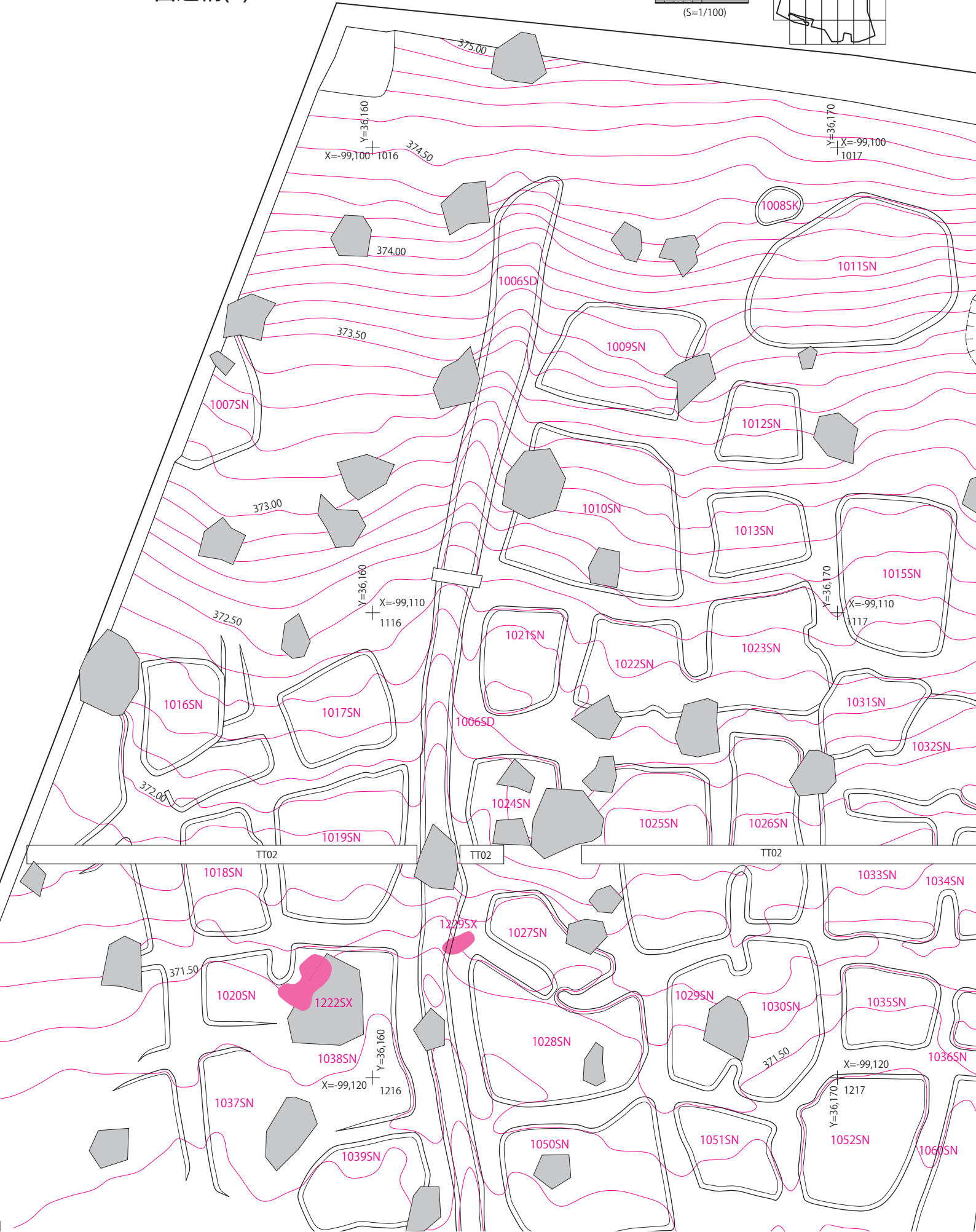
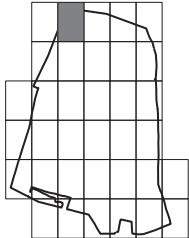
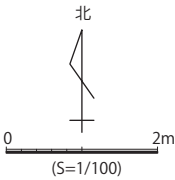
X=-99,120
Y=36,140
1214

X=-99,120
Y=36,150
1215

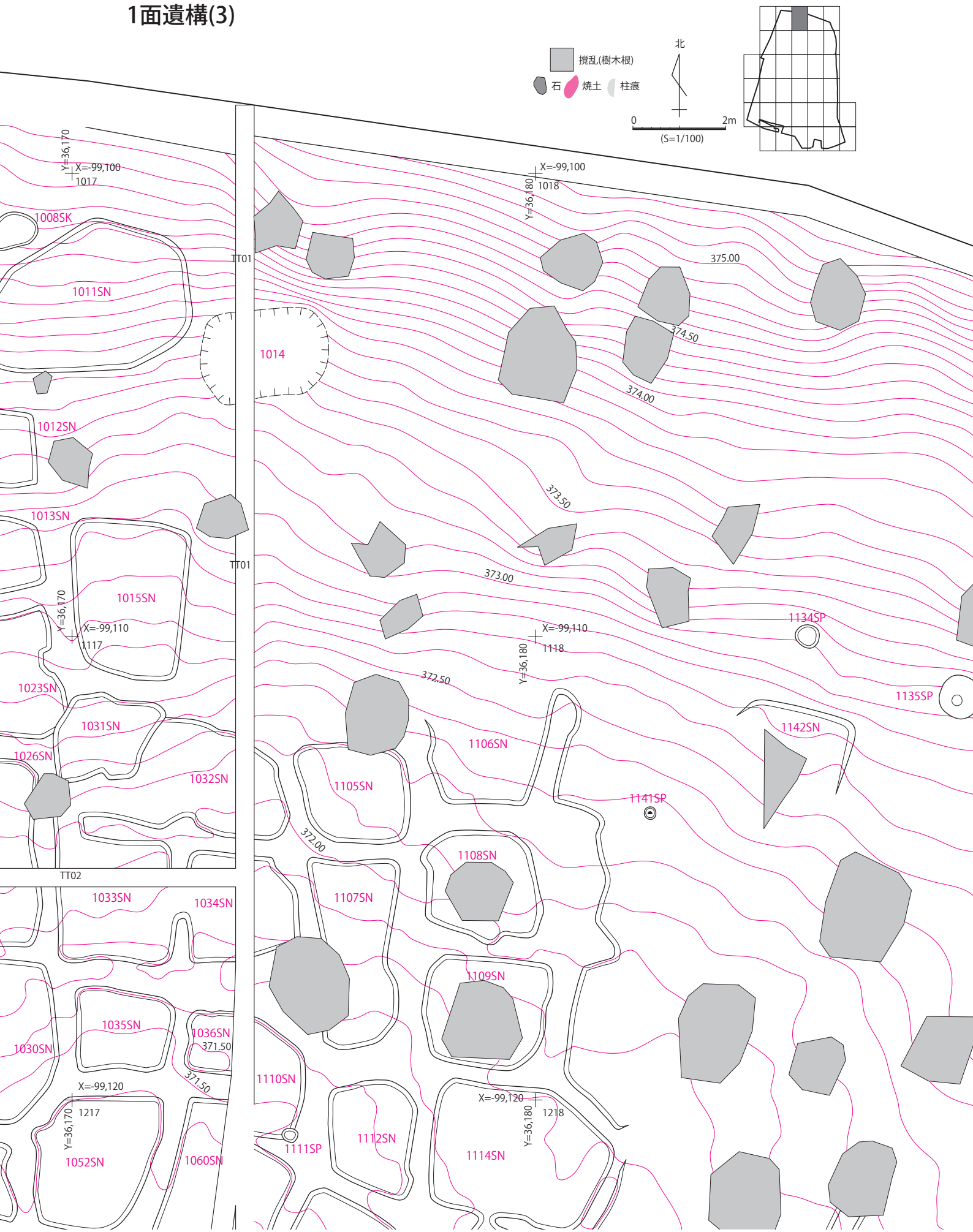


遺構図版2
1面遺構(2)

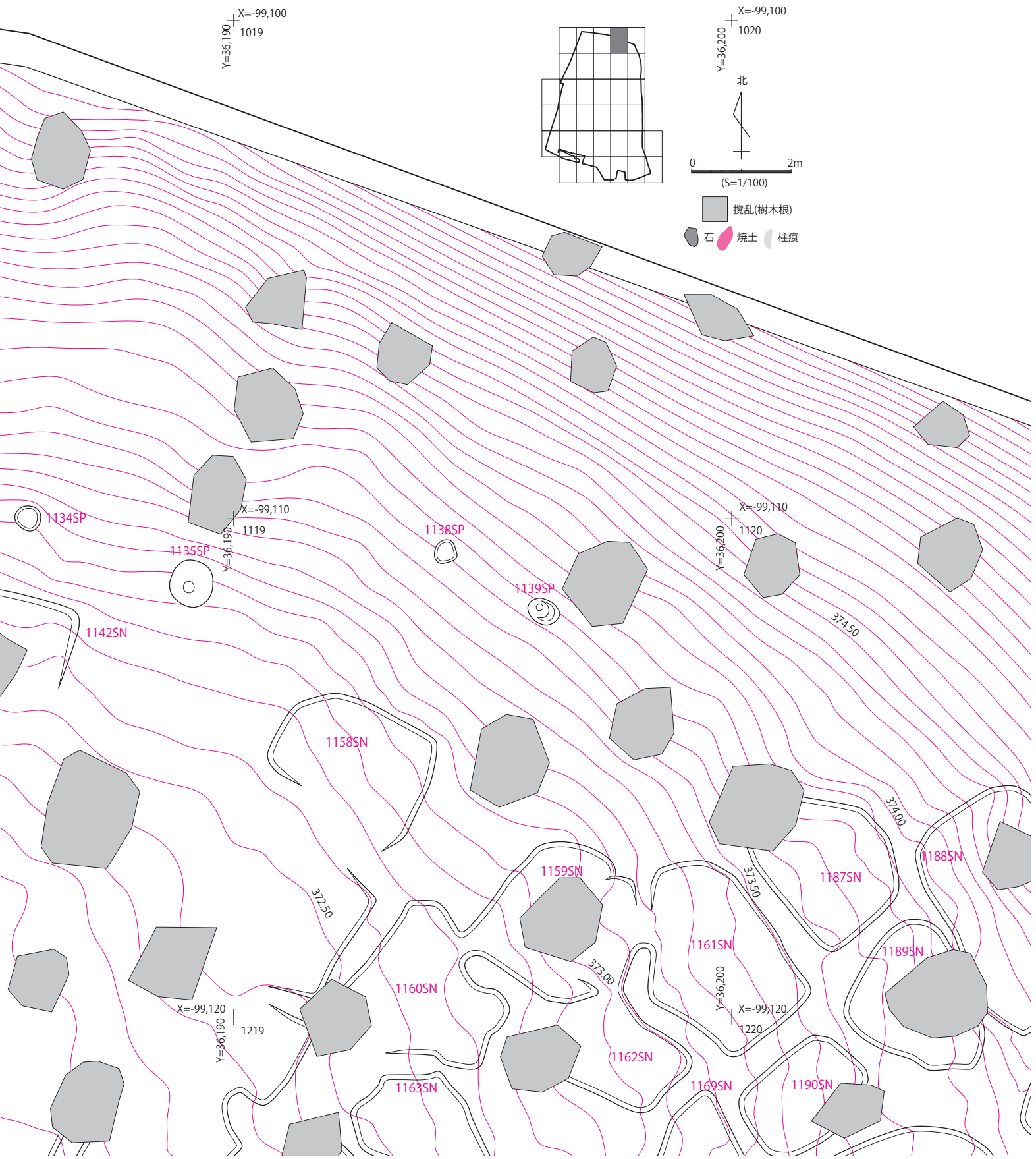
攪乱(樹木根)
石 焼土 柱痕



遺構図版3
1面遺構(3)

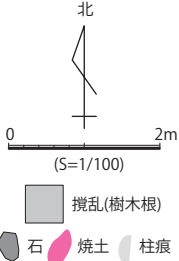
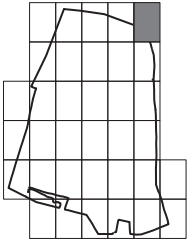


遺構図版4
1面遺構(4)



遺構図版5
1面遺構(5)

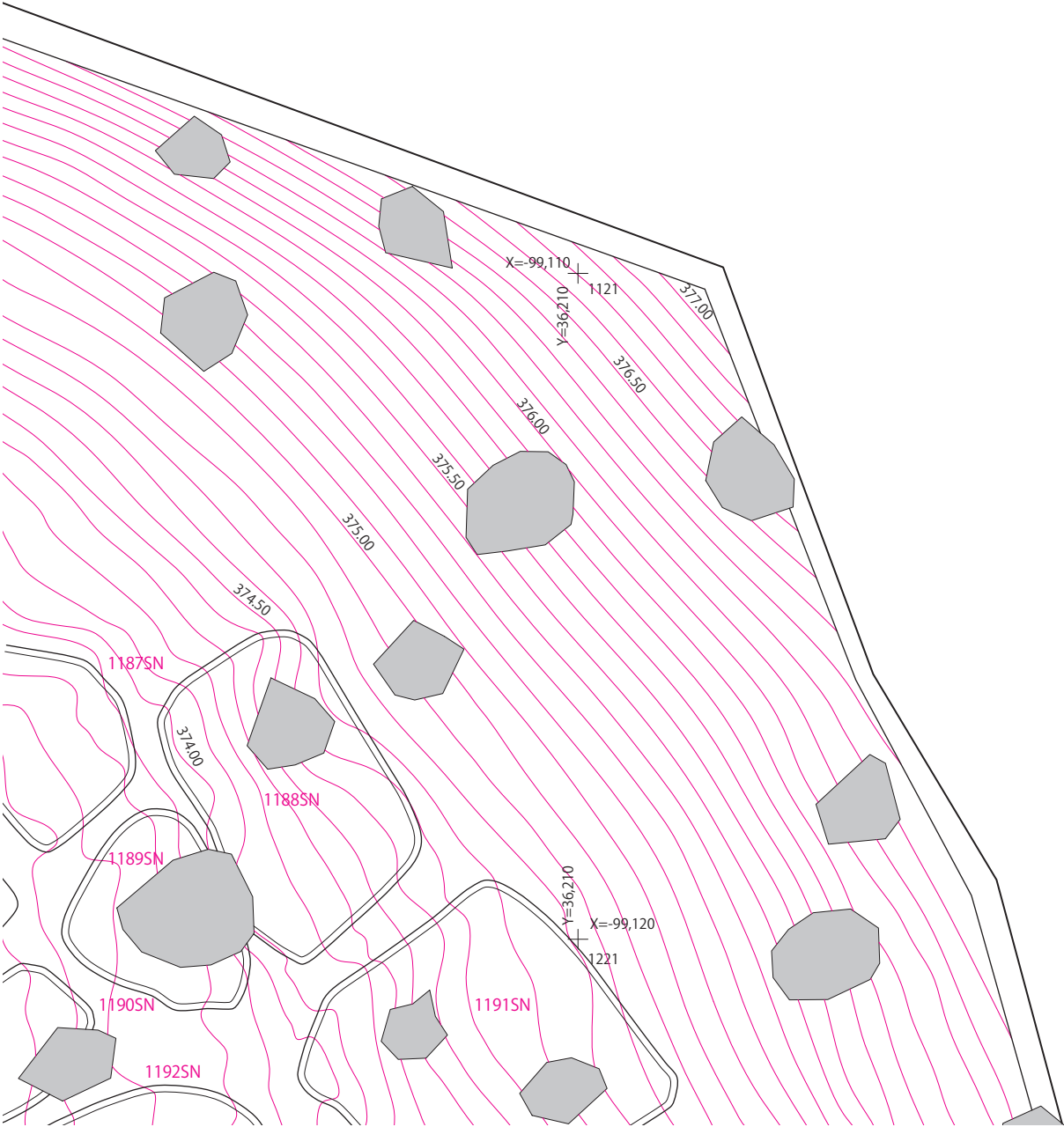
Y=36,210
X=-99,100
1021



Y=36,220
X=-99,100
1022

Y=36,220
X=-99,110
1122

Y=36,220
X=-99,120
1222

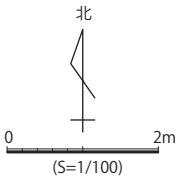
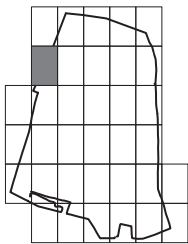


遺構図版6
1面遺構(6)

Y=36,140
+
1214 X=-99,120

X=-99,120
+
Y=36,150
1215

X=-99,130
+
1314
Y=36,140

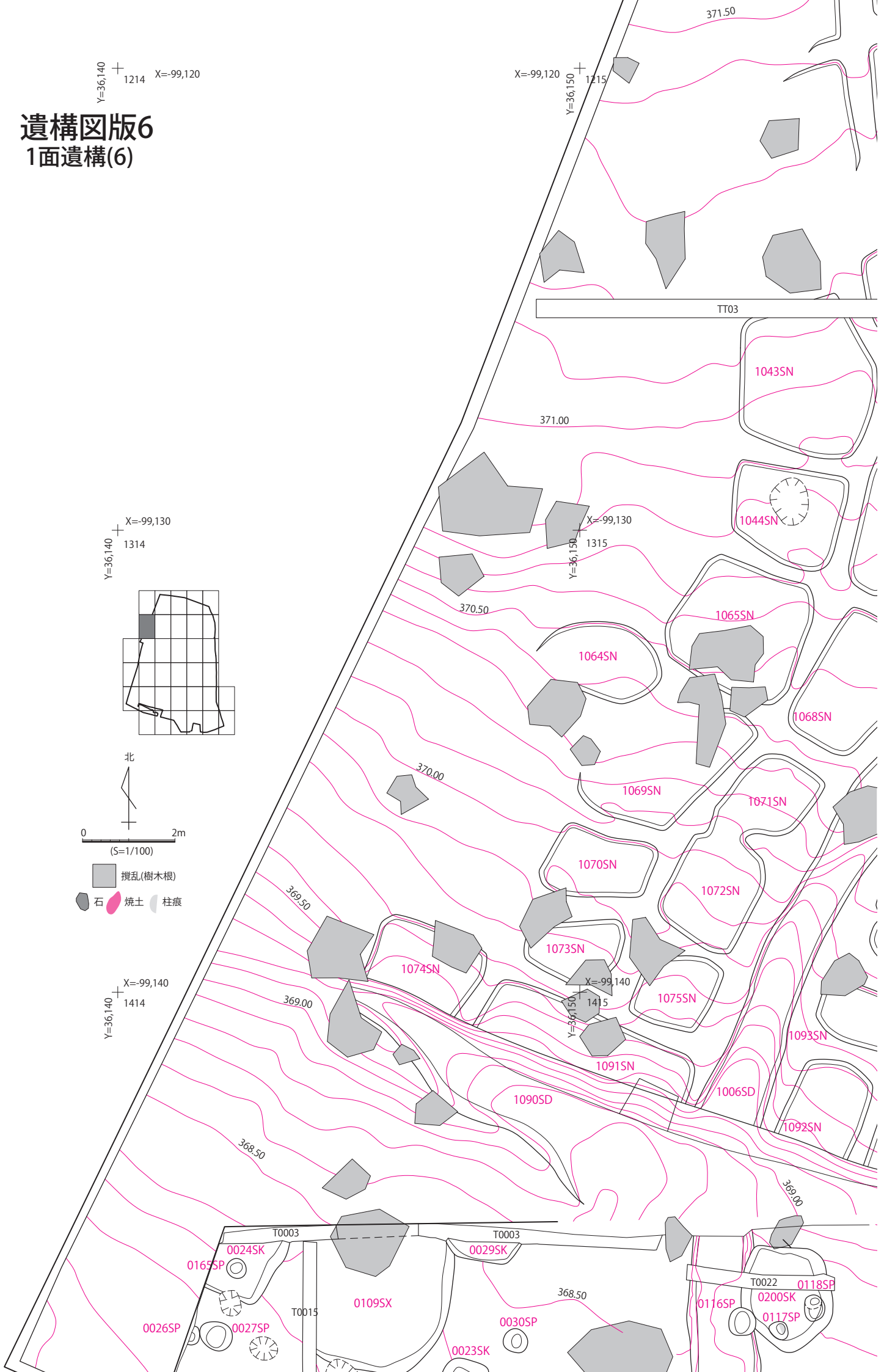


攪乱(樹木根)
石 焼土 柱痕

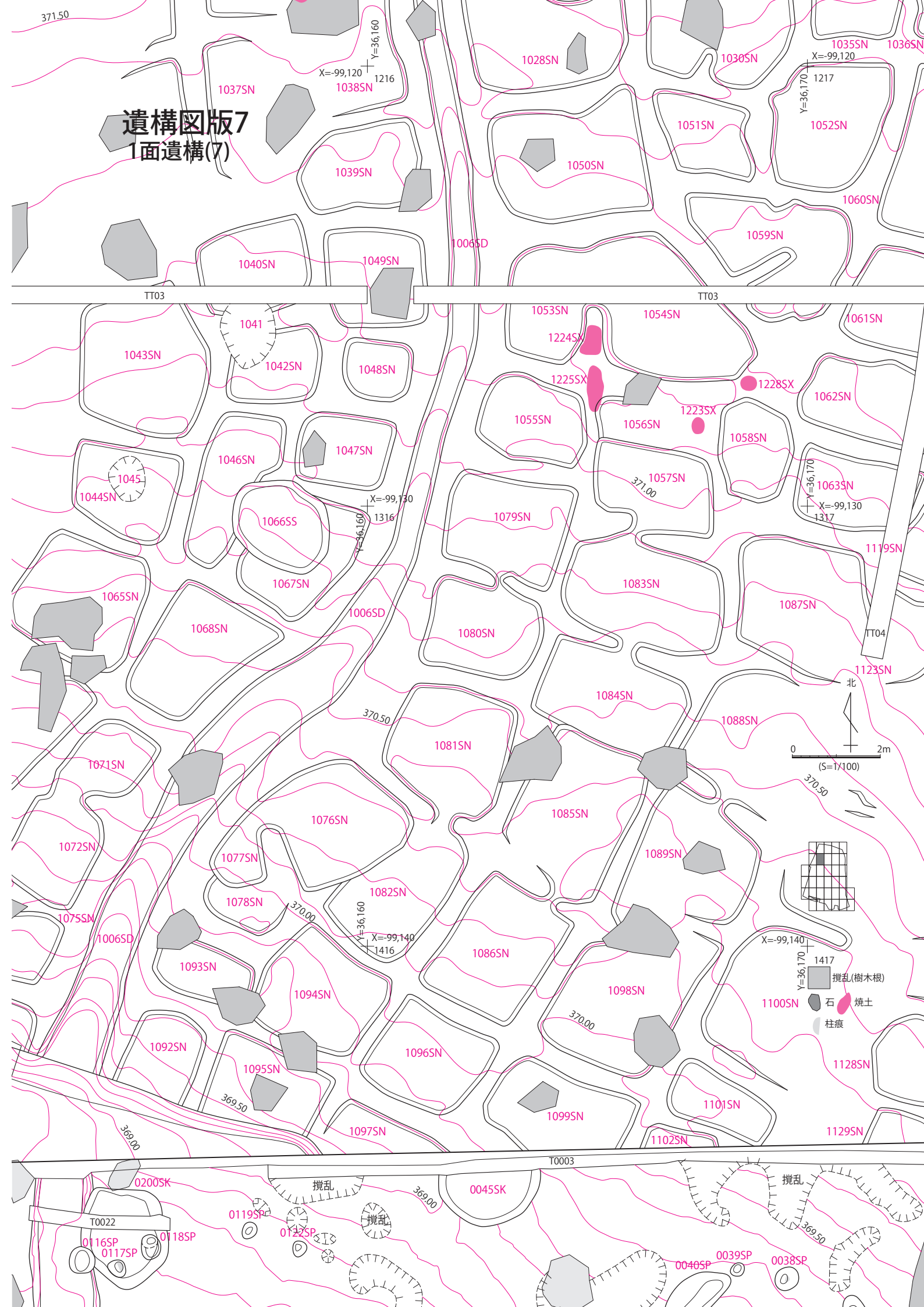
X=-99,140
+
1414
Y=36,140

X=-99,130
+
1315
Y=36,150

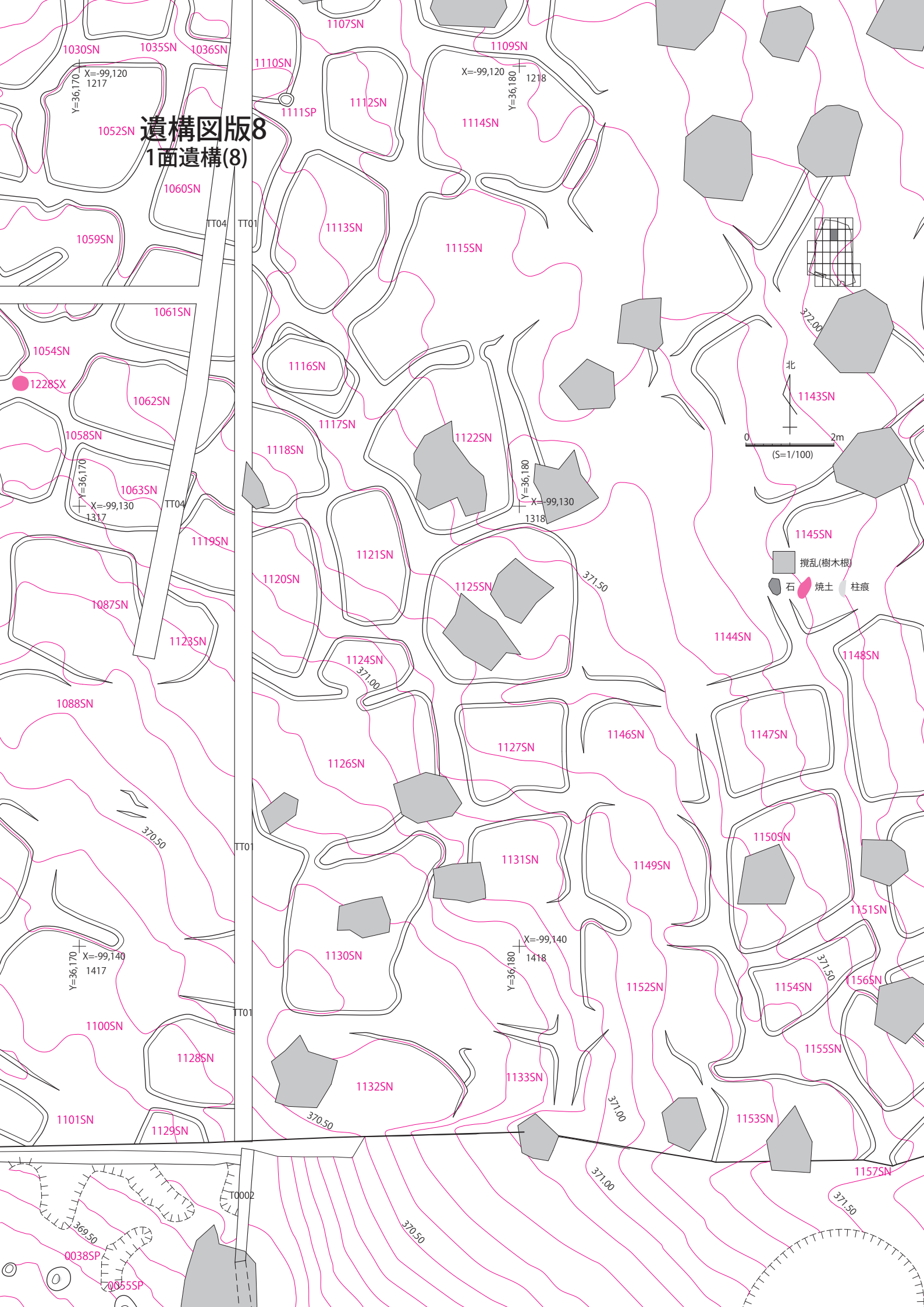
X=-99,140
+
1415
Y=36,150



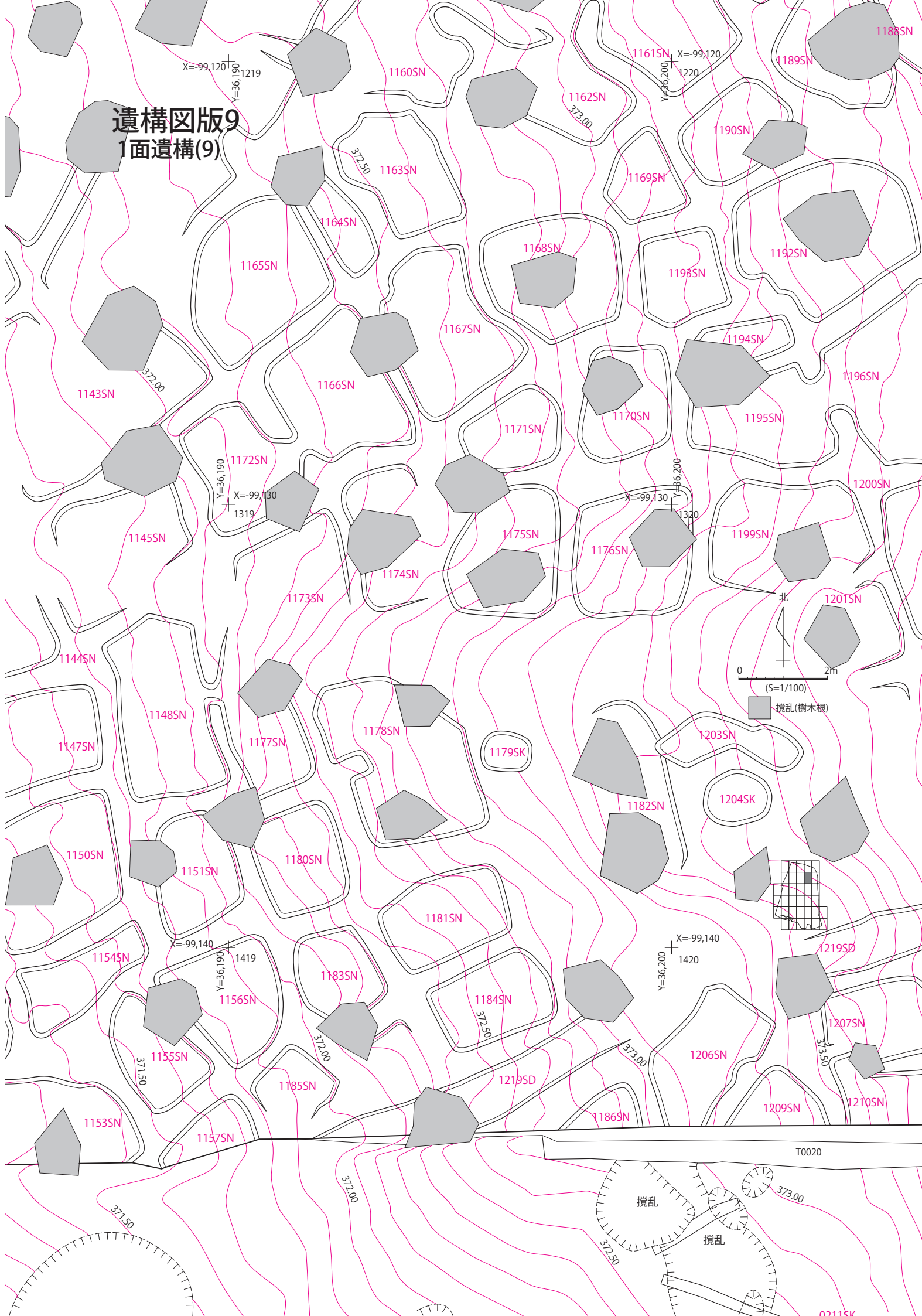
遺構図版7
1面遺構(7)



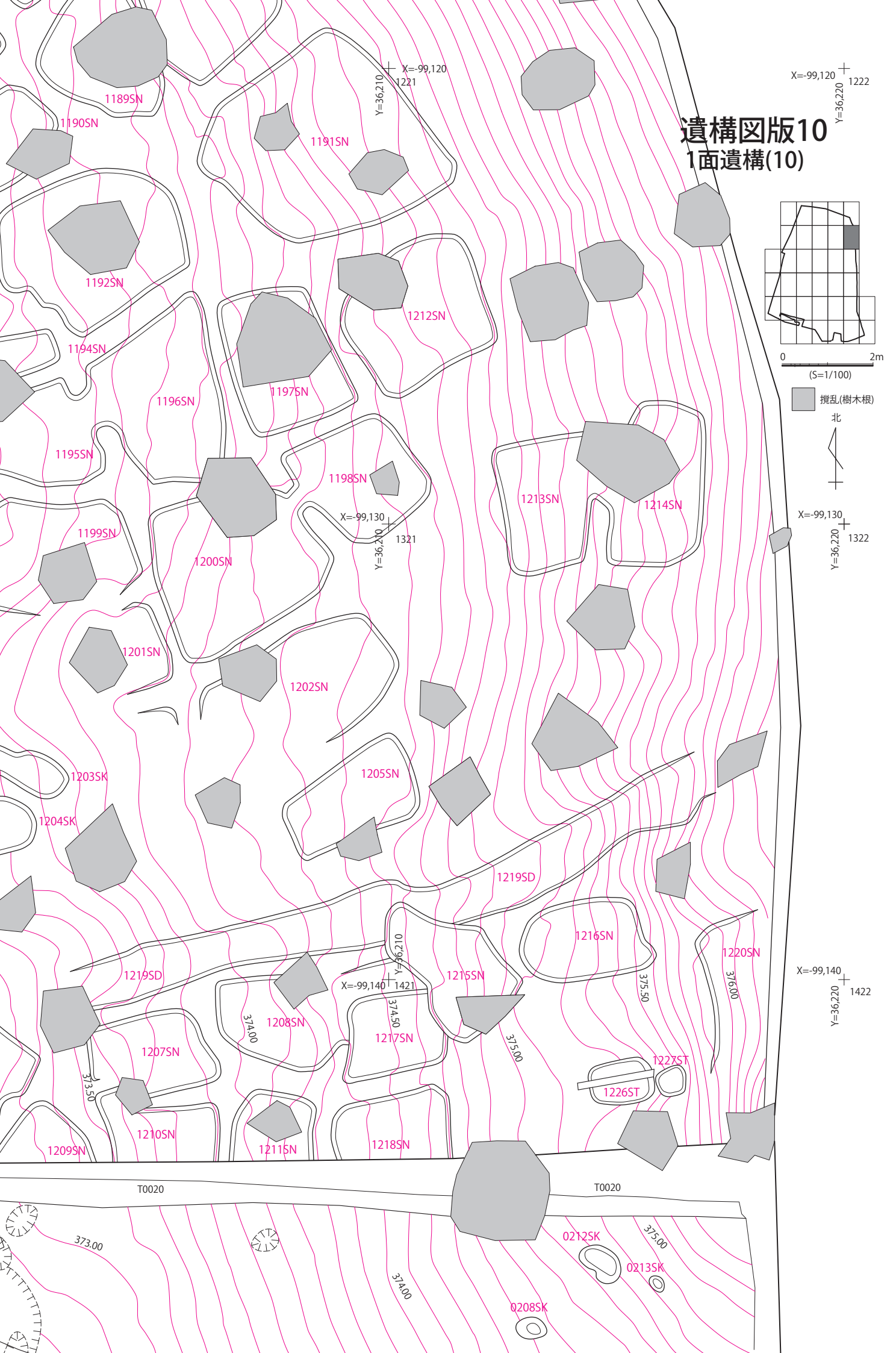
遺構図版8
1面遺構(8)



遺構図版9
1面遺構(9)



遺構図版10 1面遺構(10)



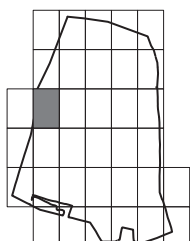
遺構図版11
1面遺構(11)



遺構図版12

1面遺構(12)

0 2m
(S=1/100)

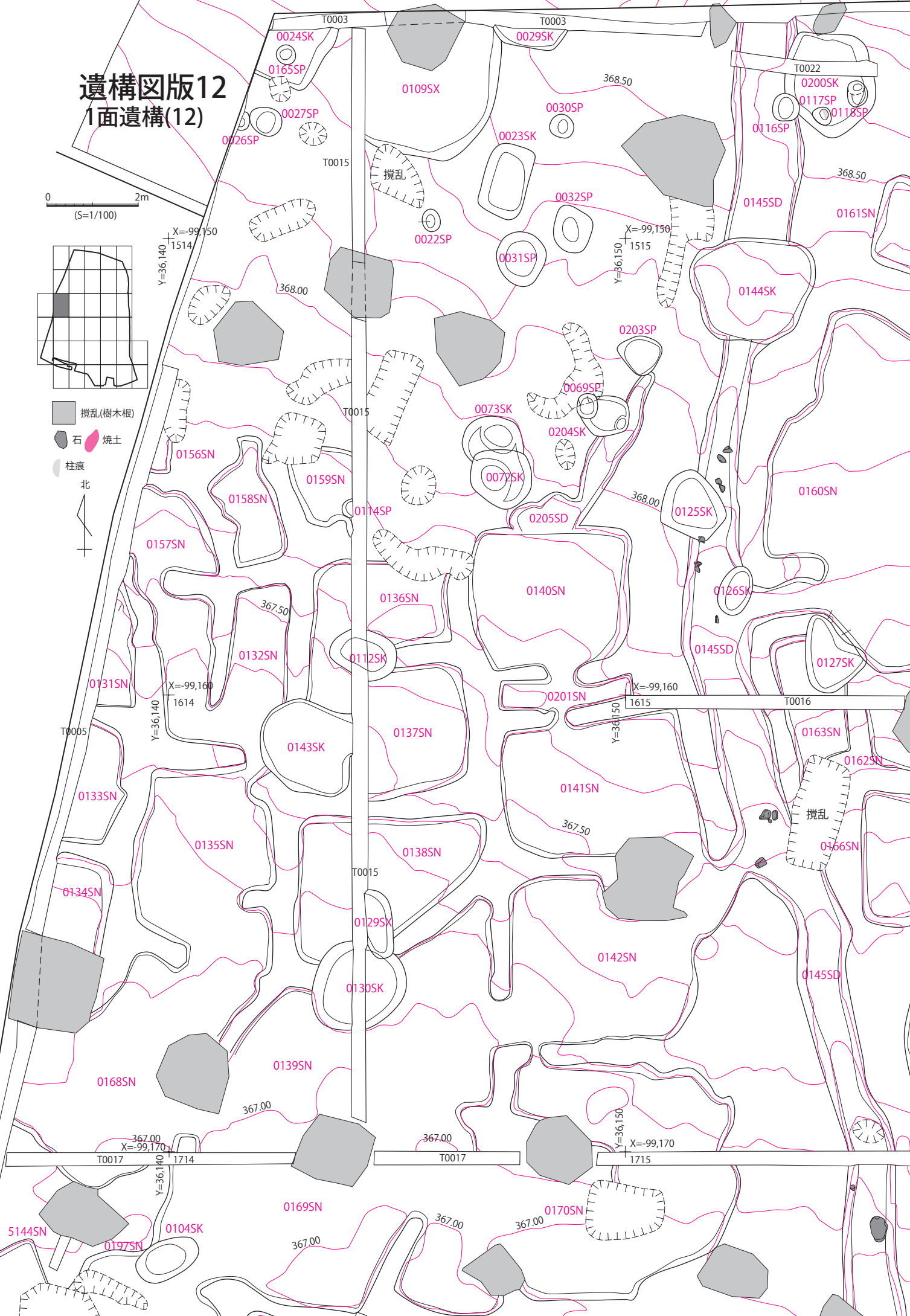


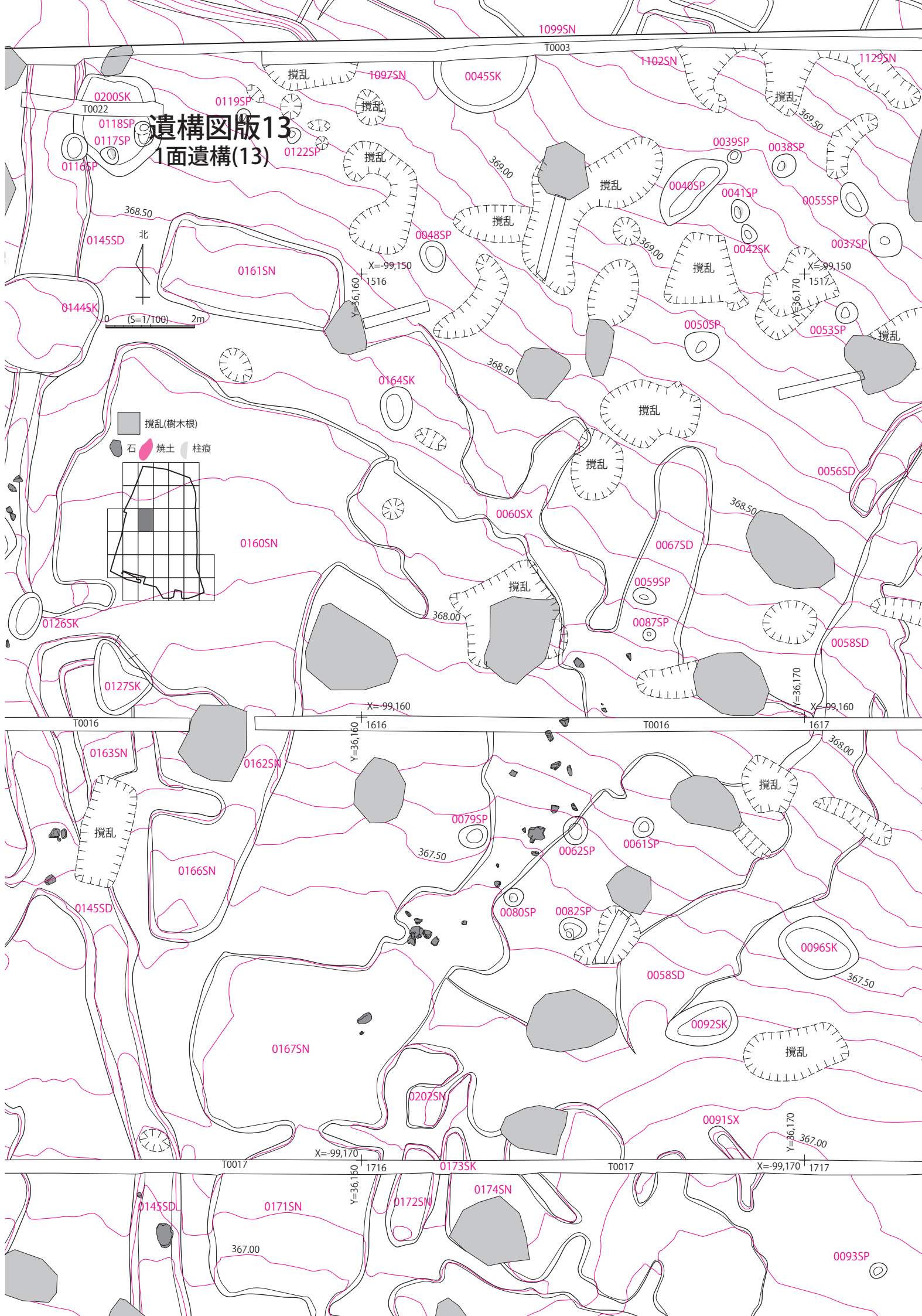
攪乱(樹木根)

石 焼土

柱痕

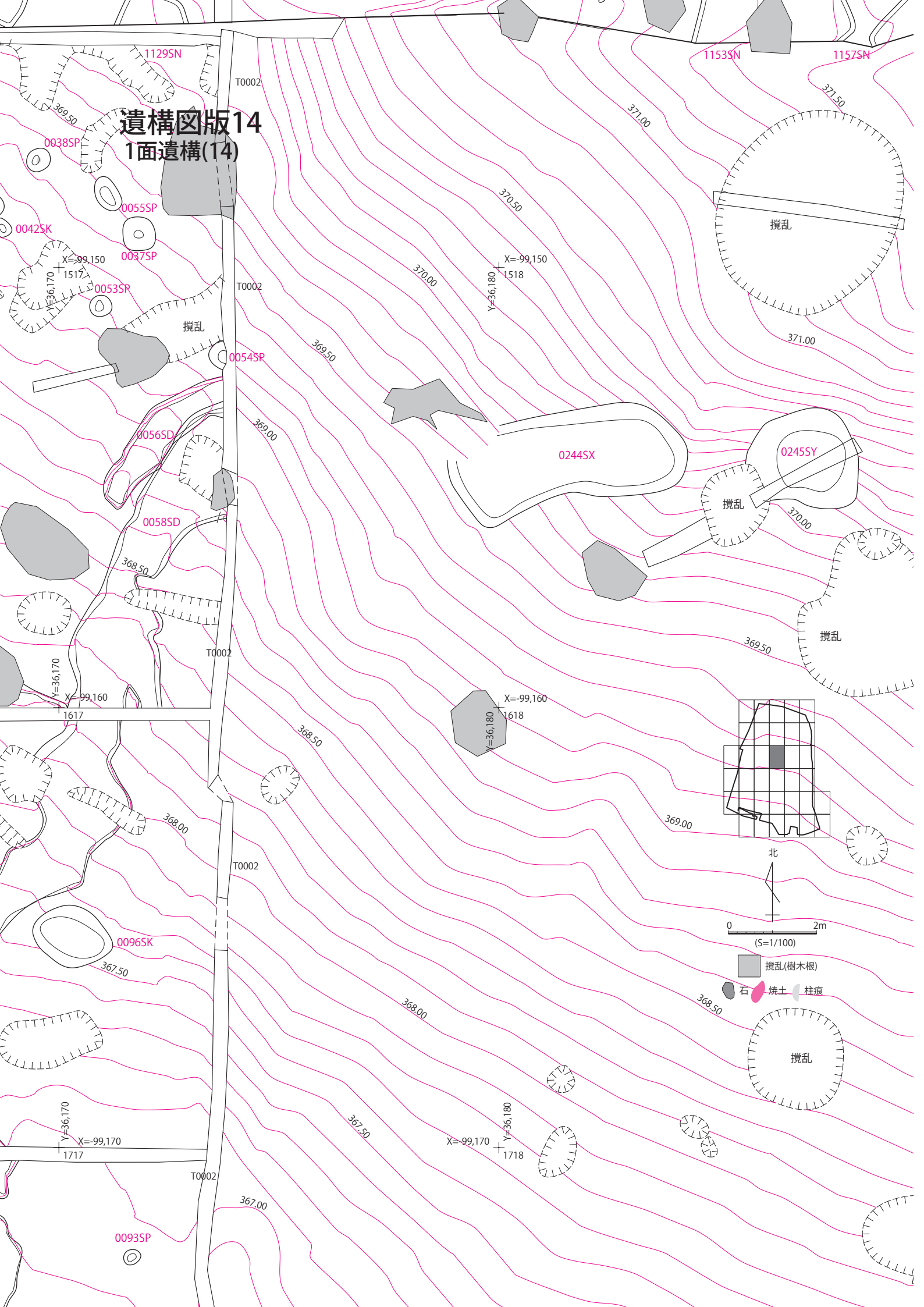
北



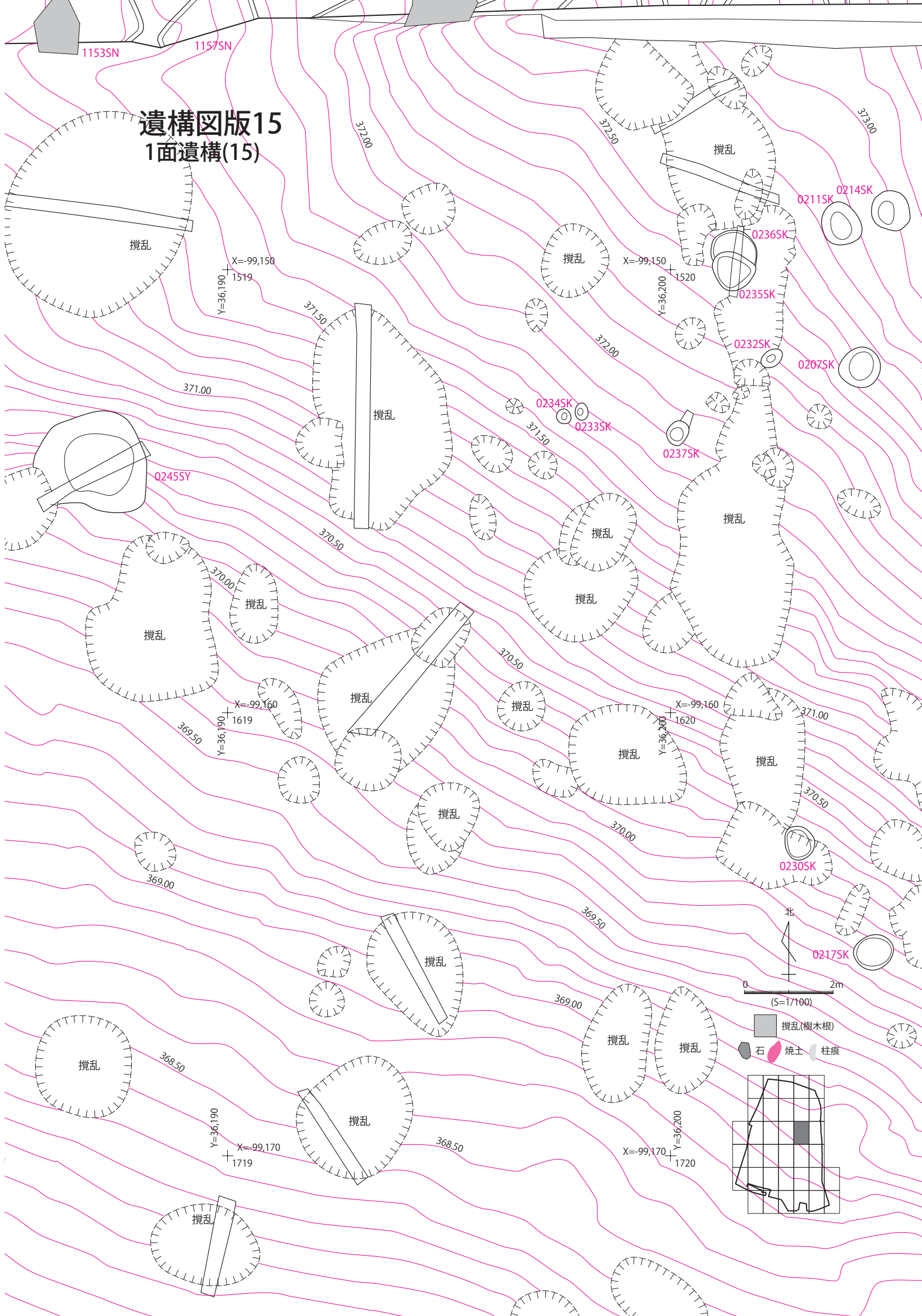


遺構図版14

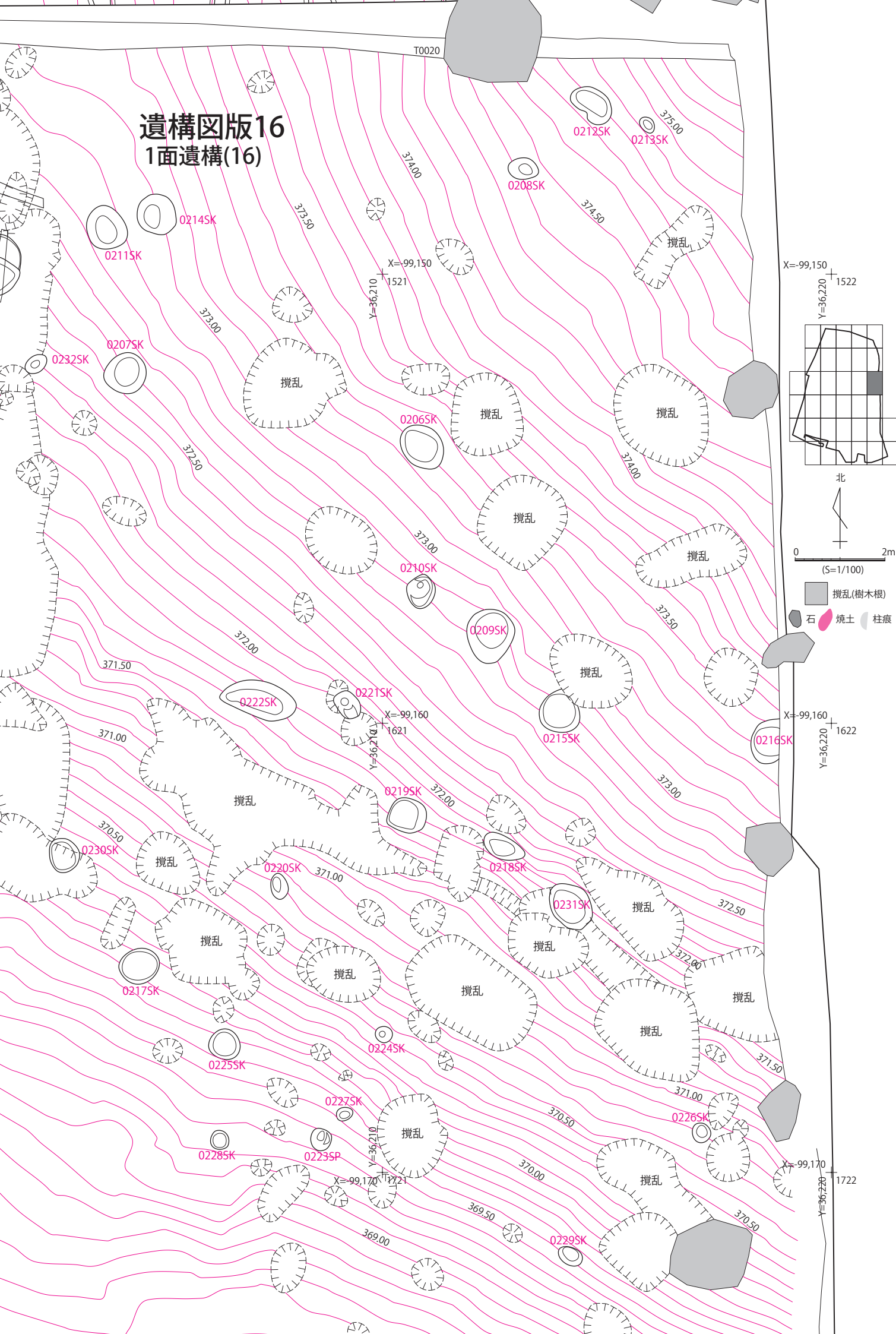
1面遺構(14)



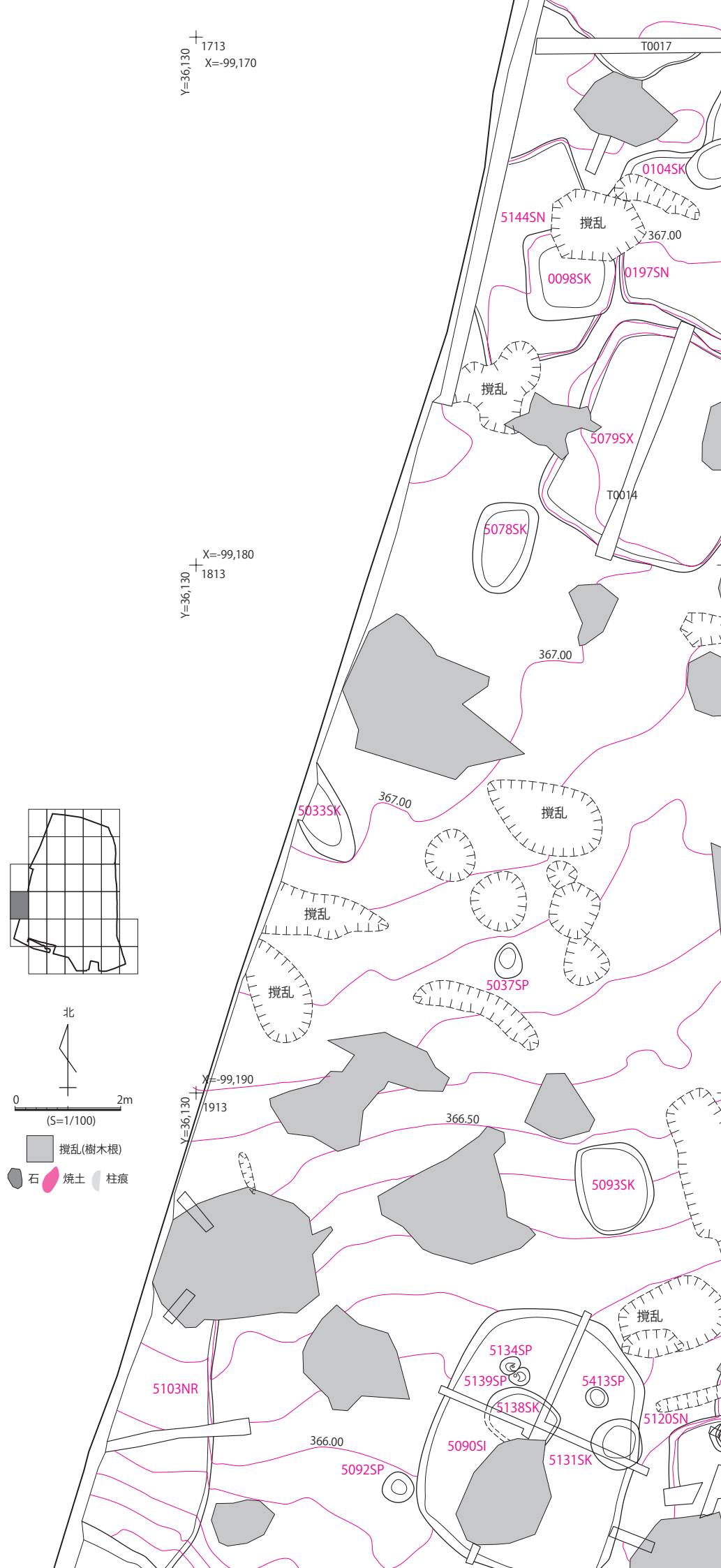
遺構図版15 1面遺構(15)

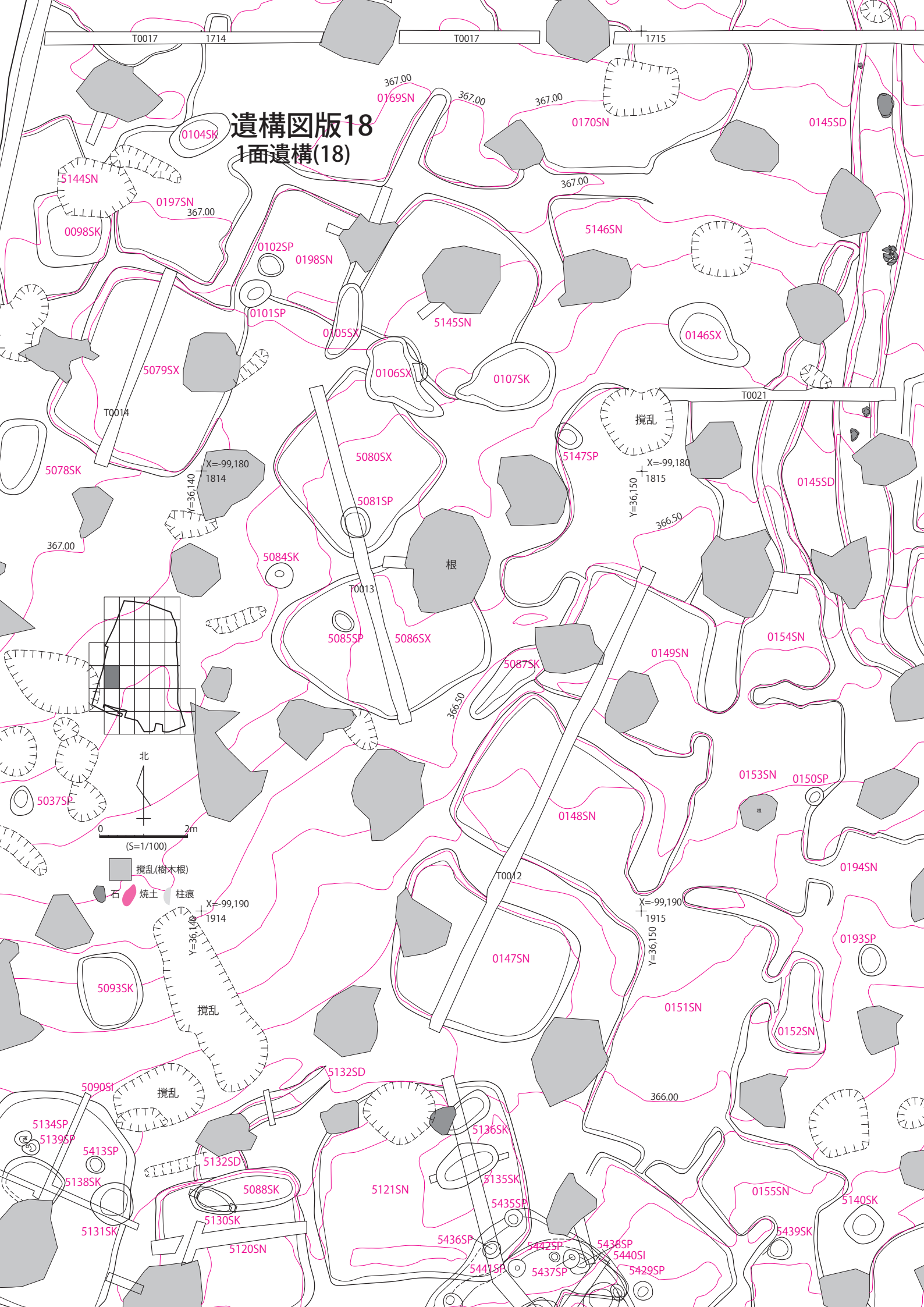


遺構図版16 1面遺構(16)



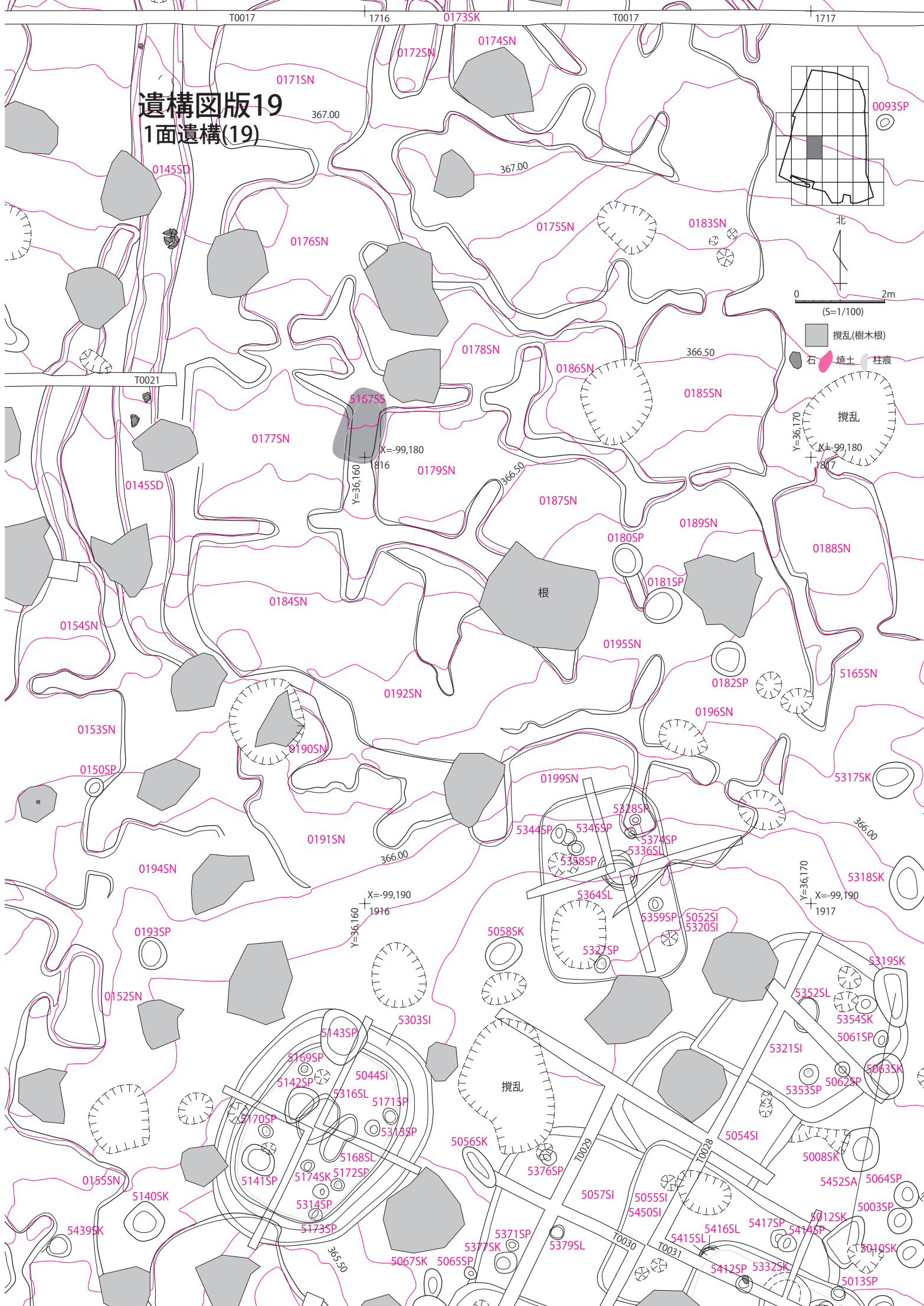
遺構図版17
1面遺構(17)





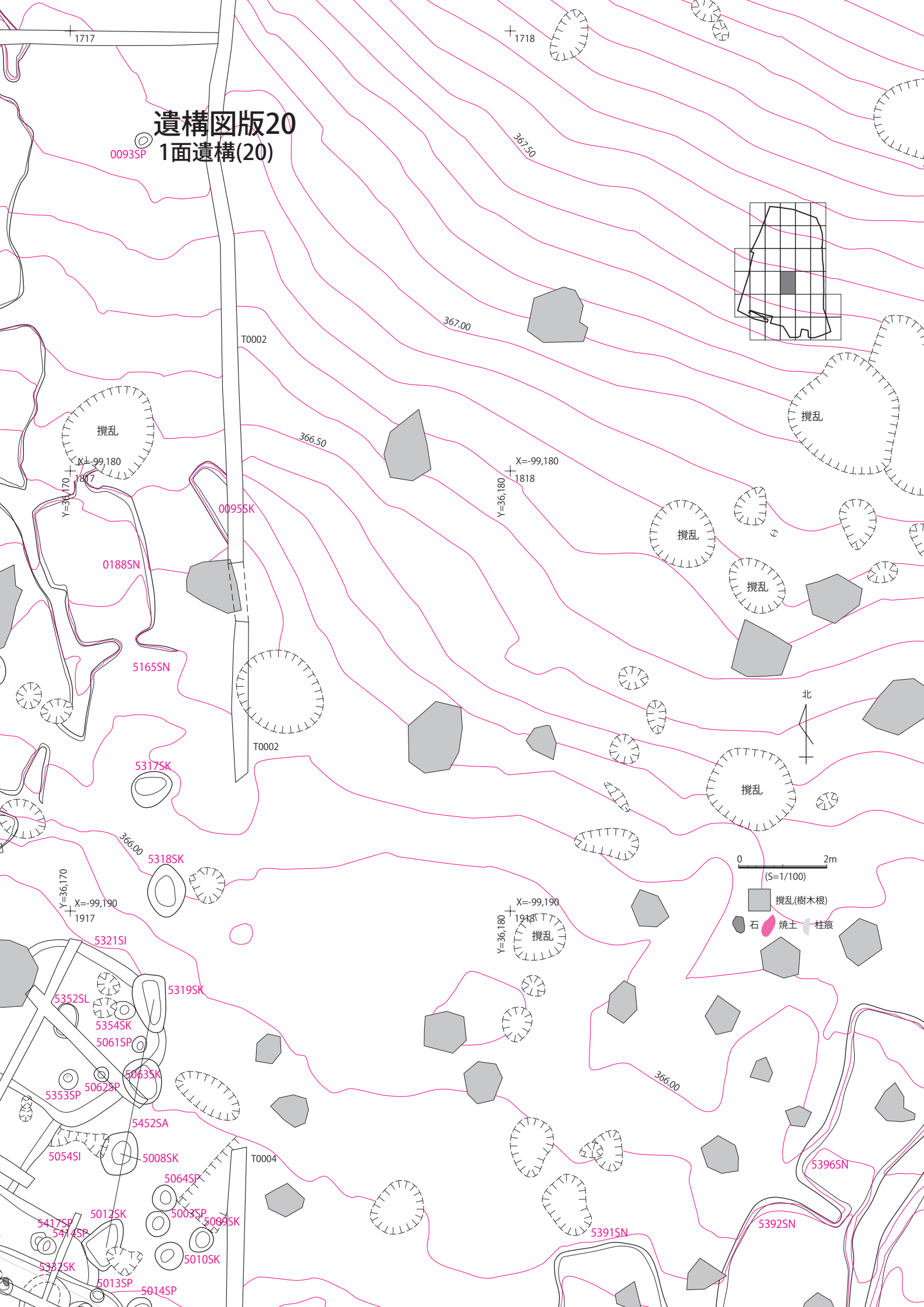
遺構図版18 1面遺構(18)

遺構図版19
1面遺構(19)

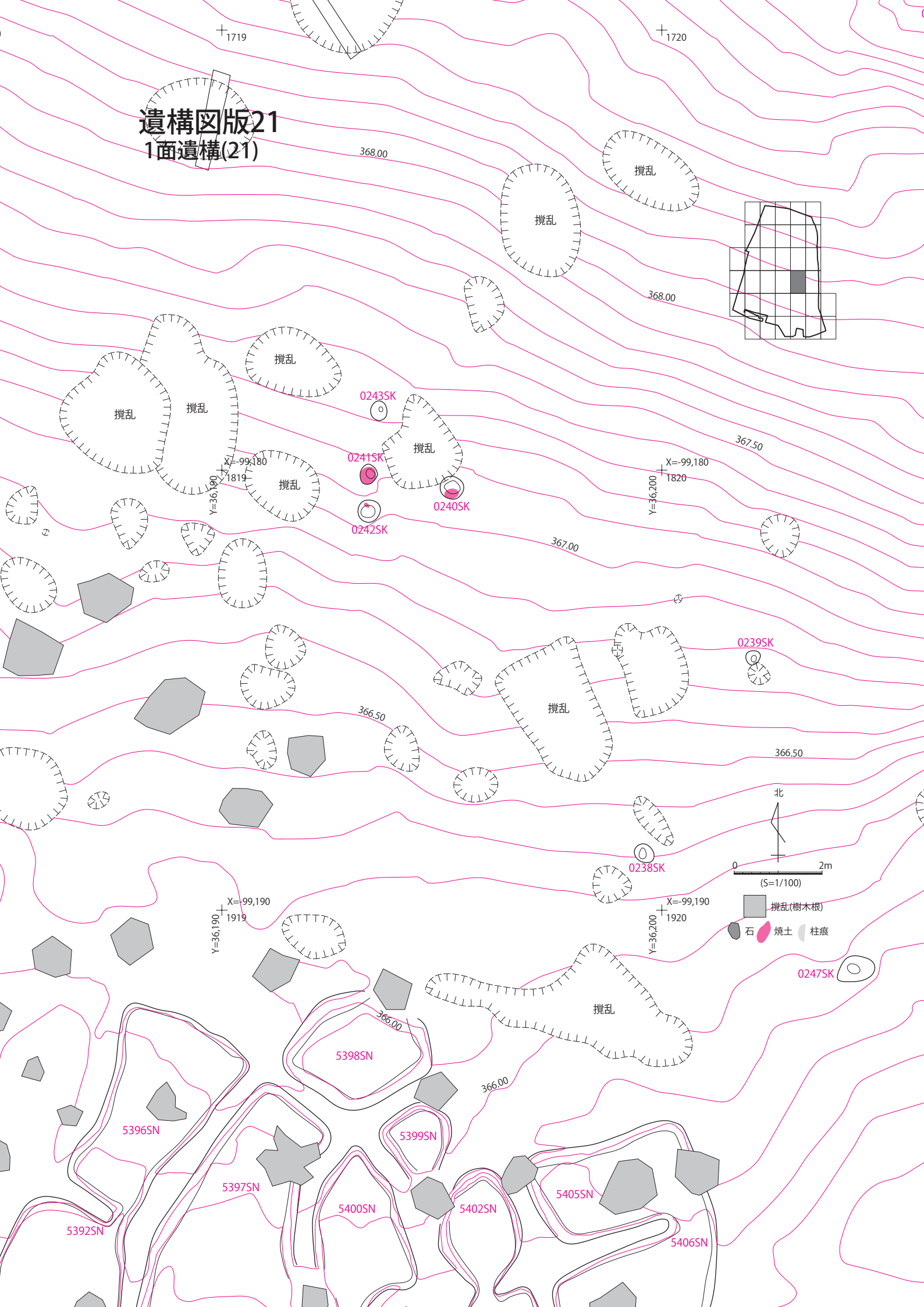


遺構図版20

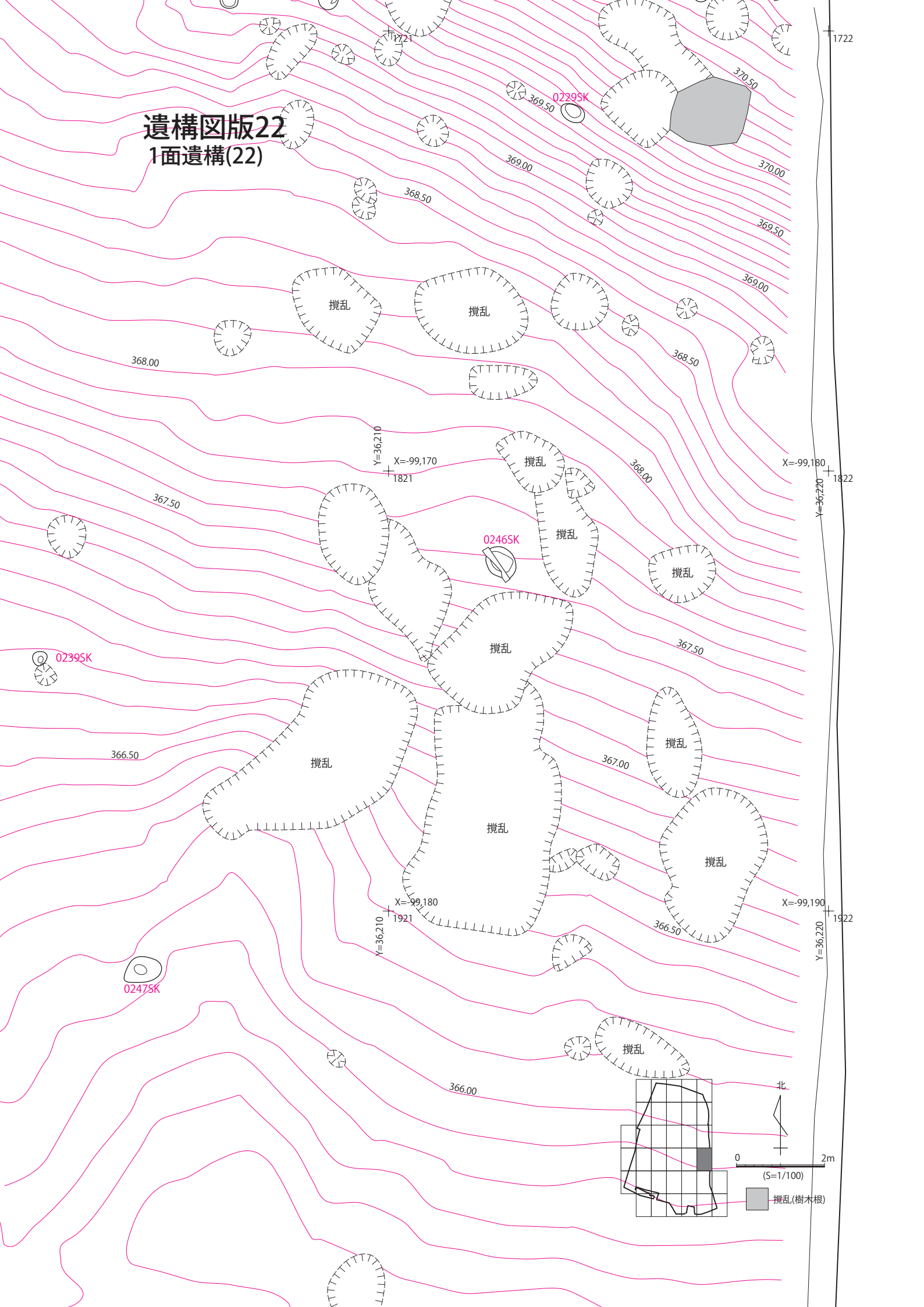
1面遺構(20)

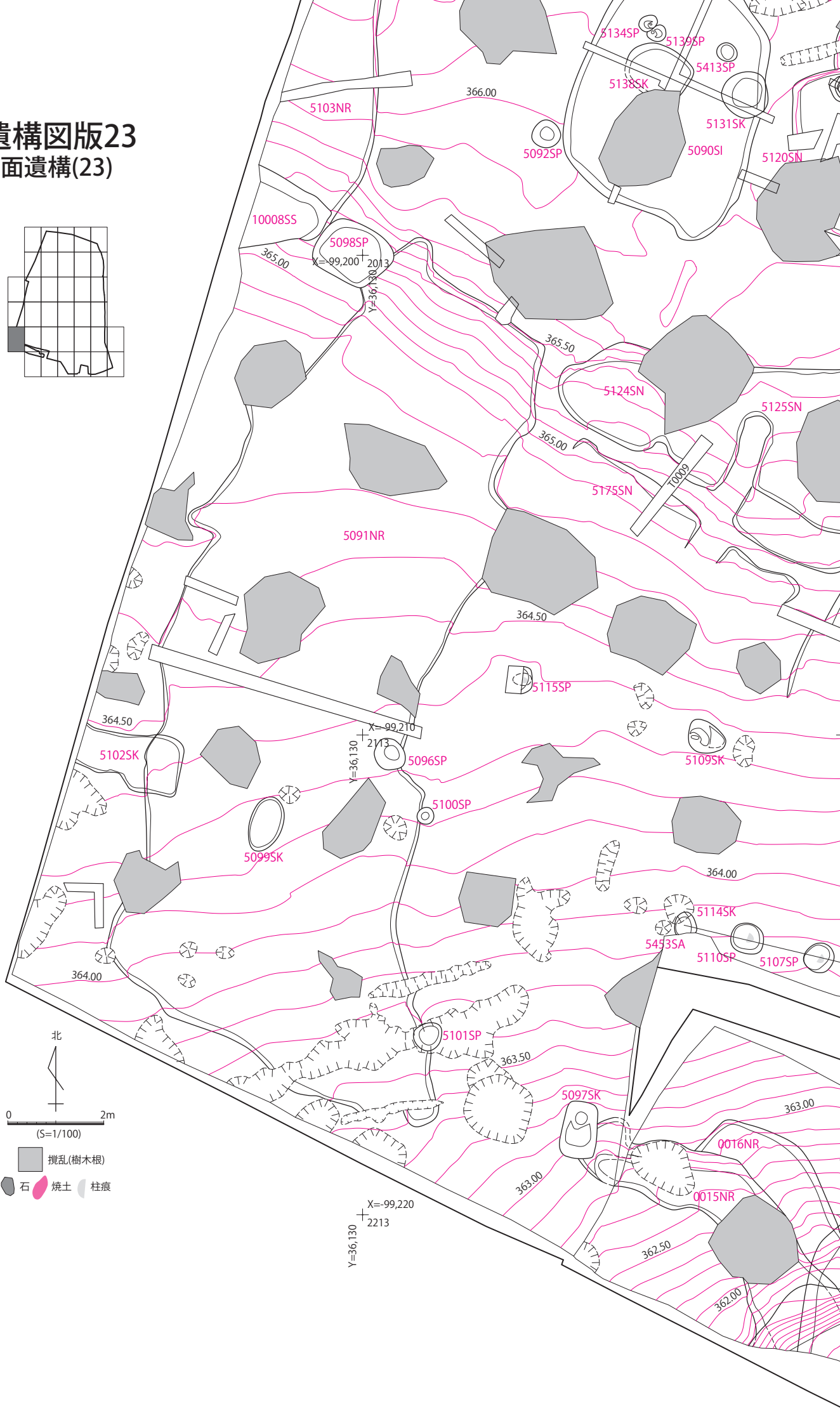
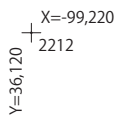
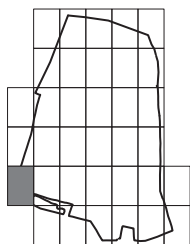


遺構図版21
1面遺構(21)



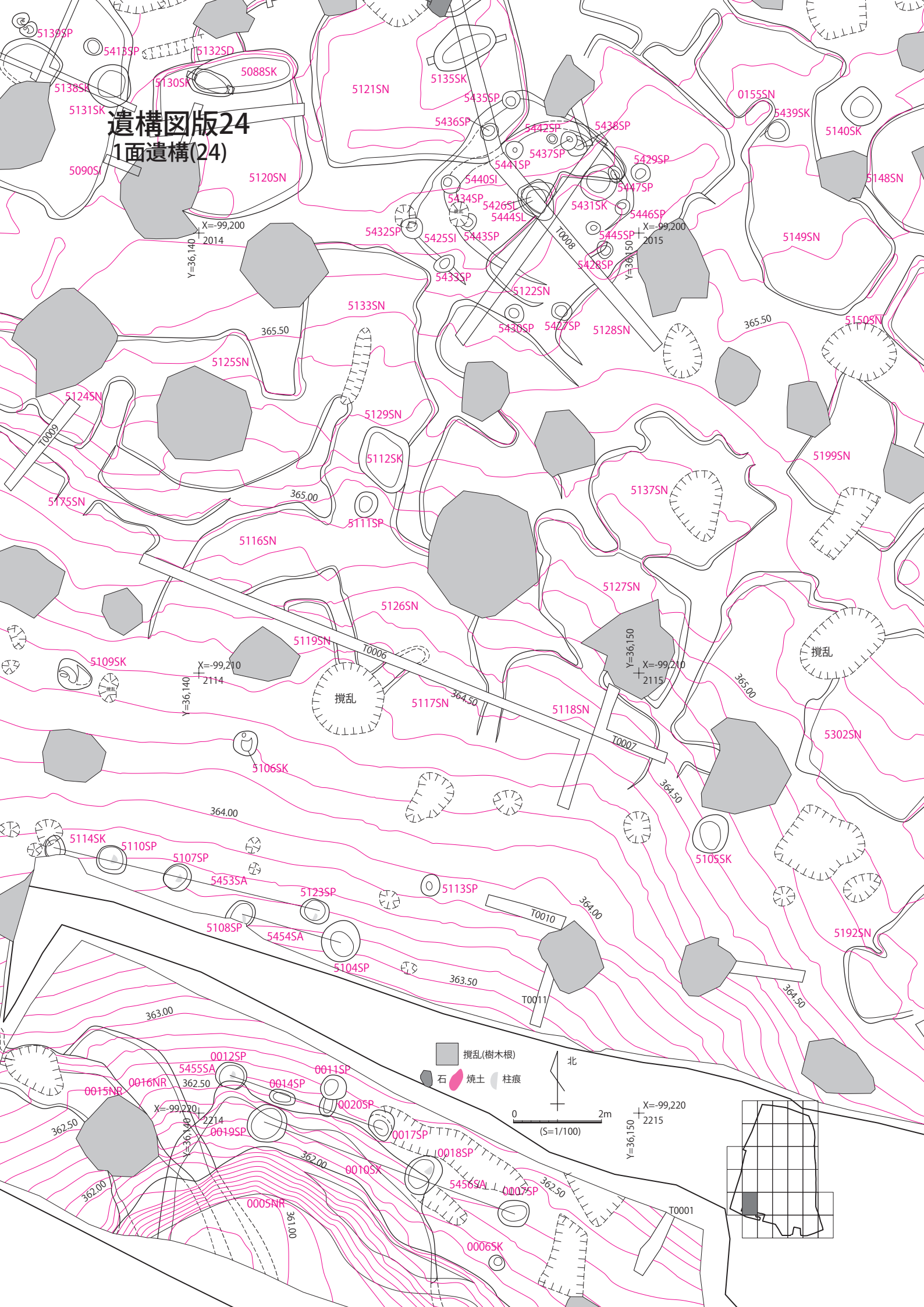
遺構図版22
1面遺構(22)



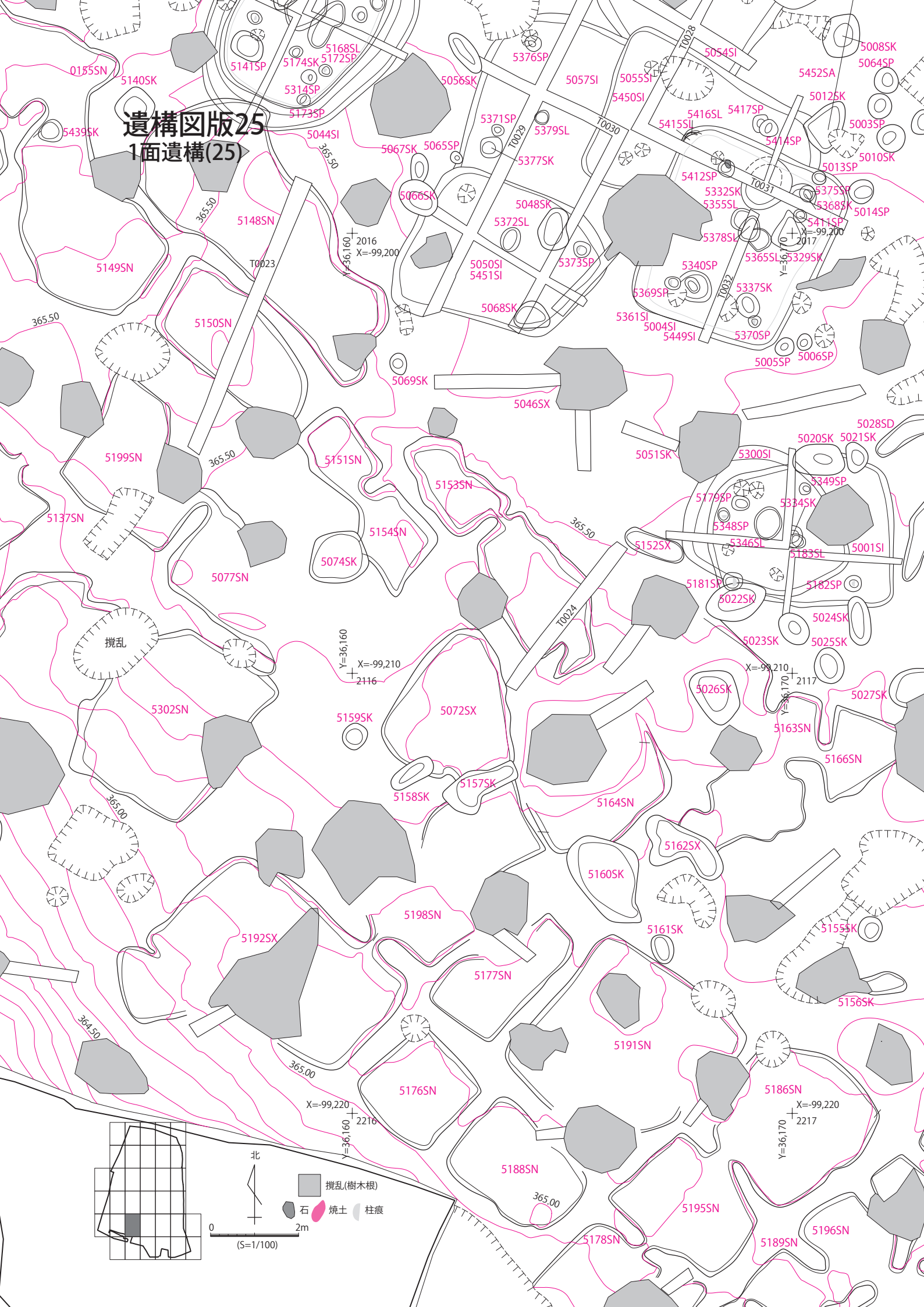
遺構図版23
1面遺構(23)

遺構図版24

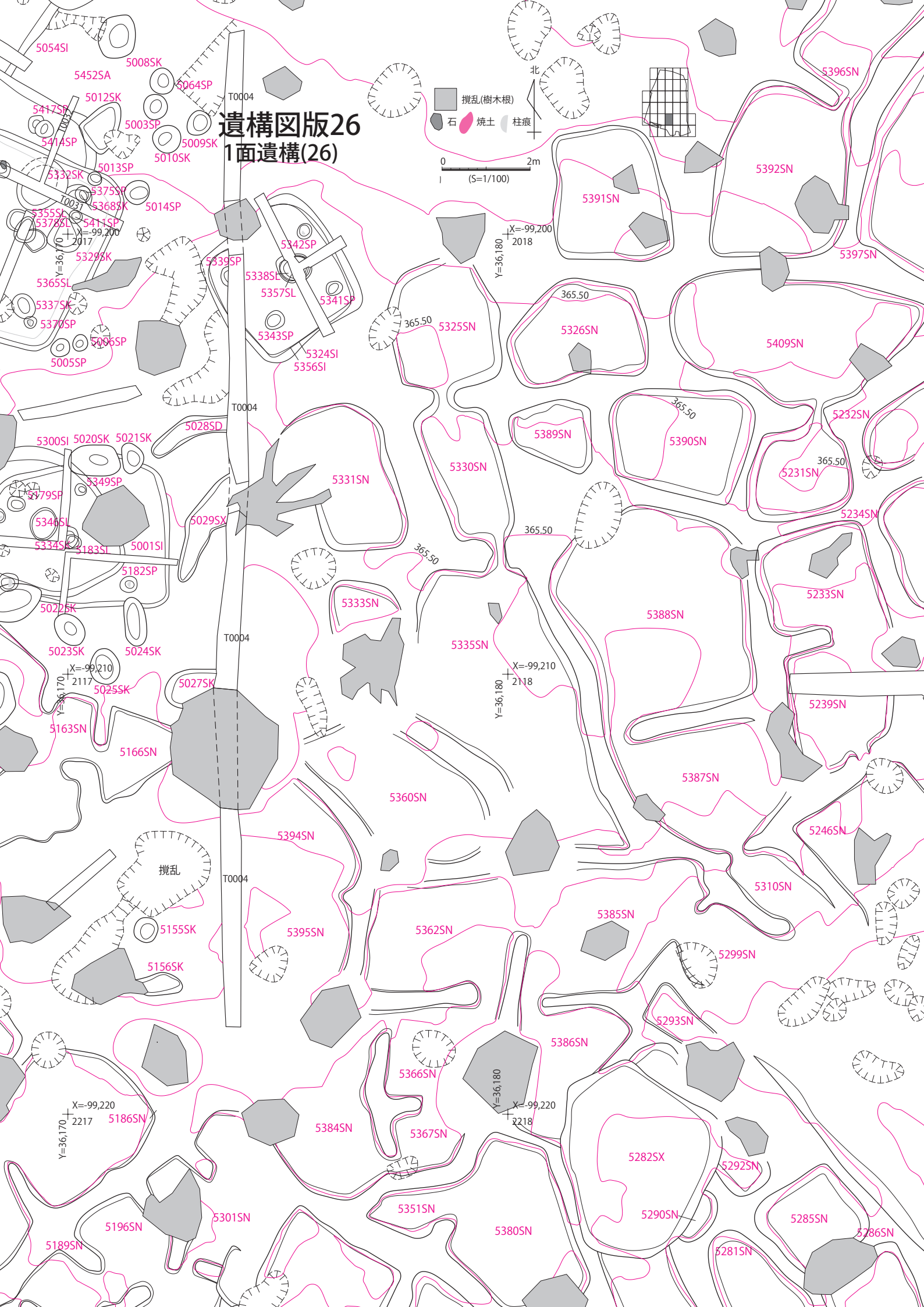
1面遺構(24)



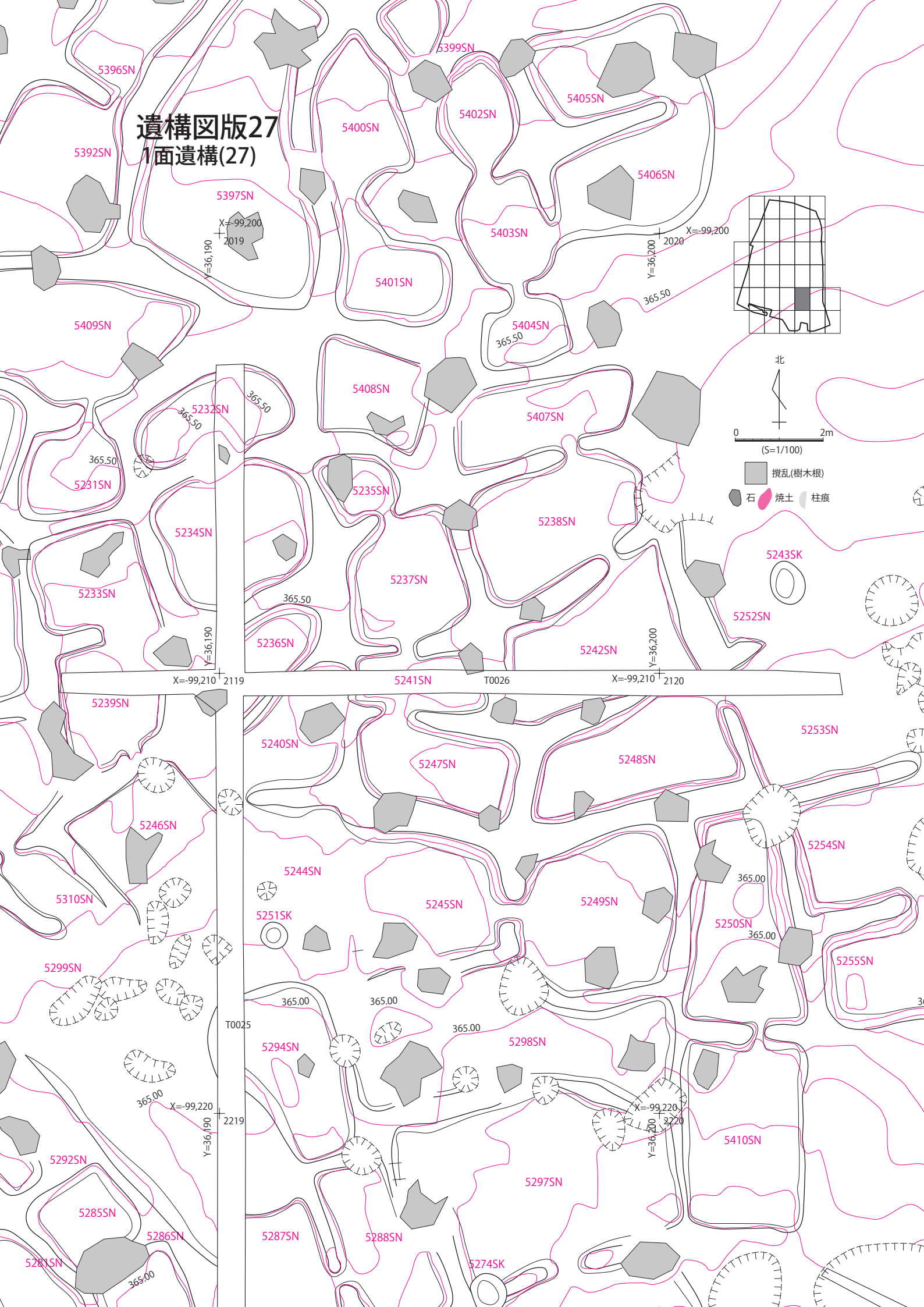
遺構図版25
1面遺構(25)



遺構図版26
1面遺構(26)

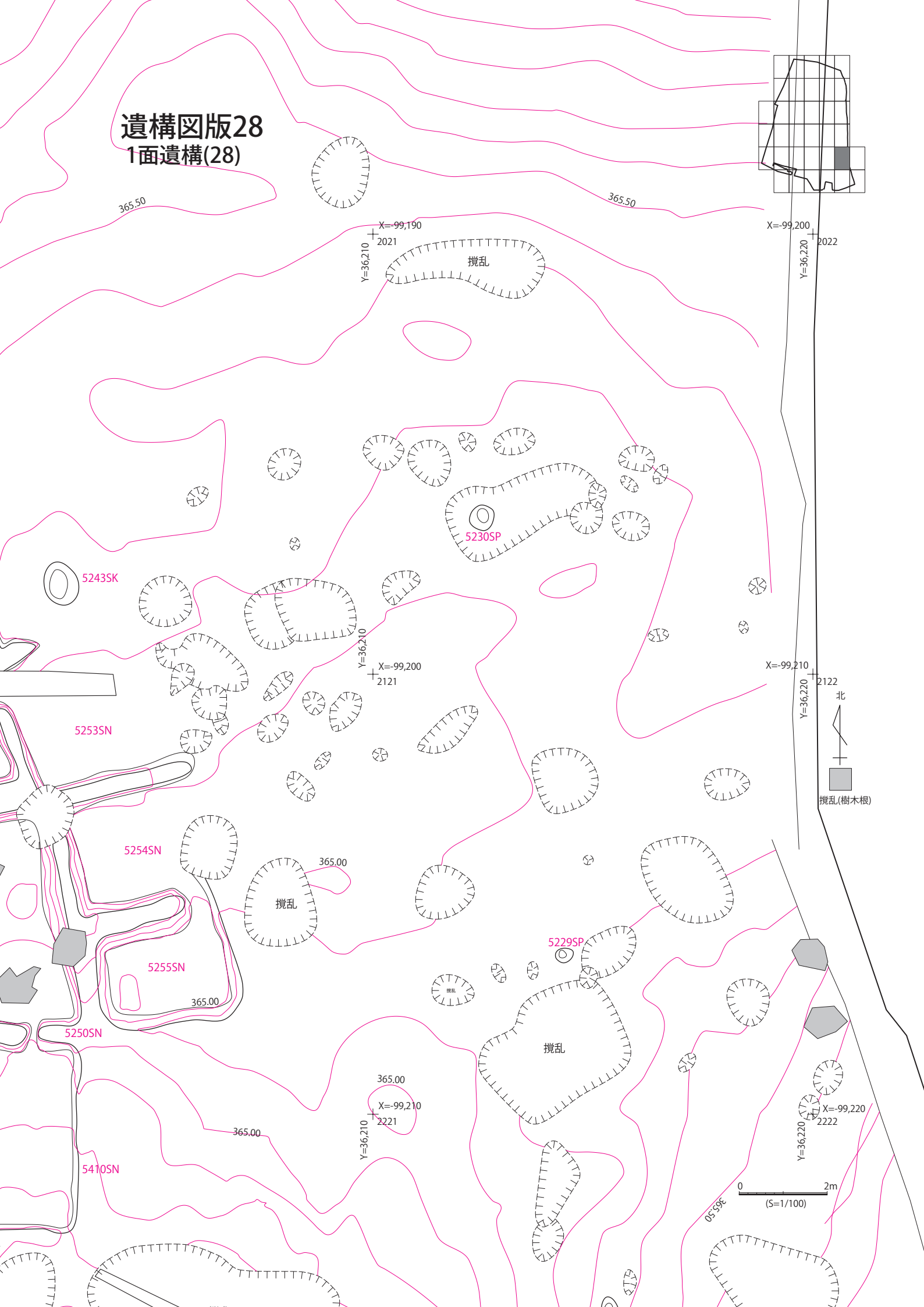


遺構図版27 1面遺構(27)

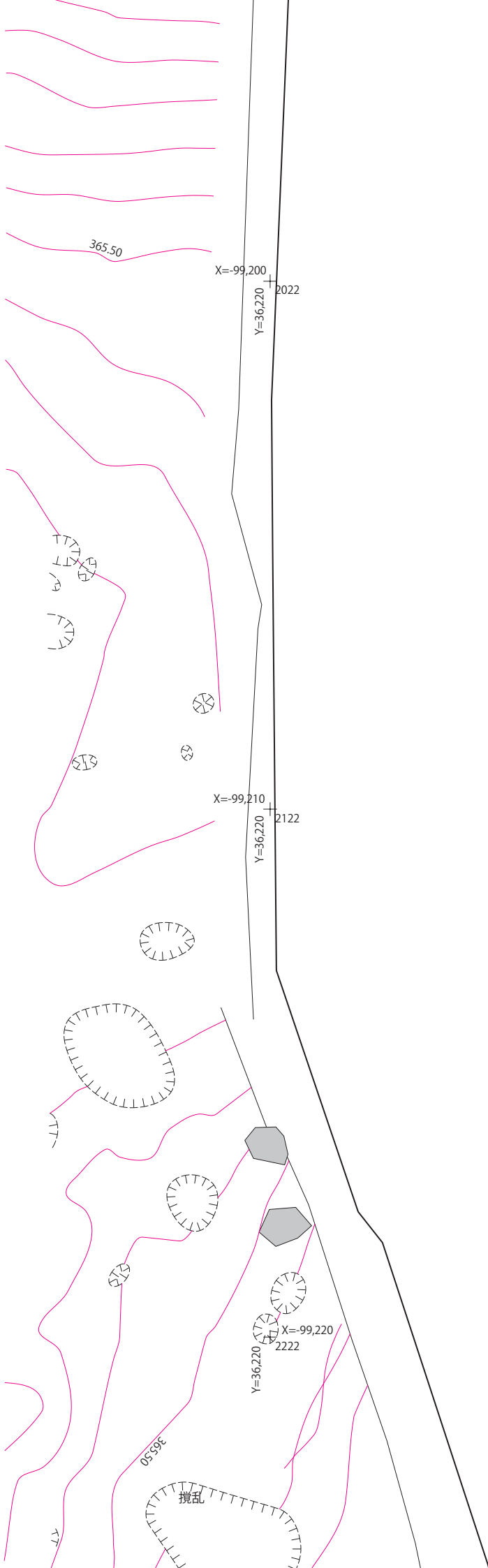


遺構図版28

1面遺構(28)

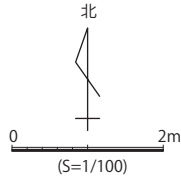
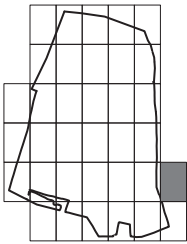


遺構図版29
1面遺構(29)



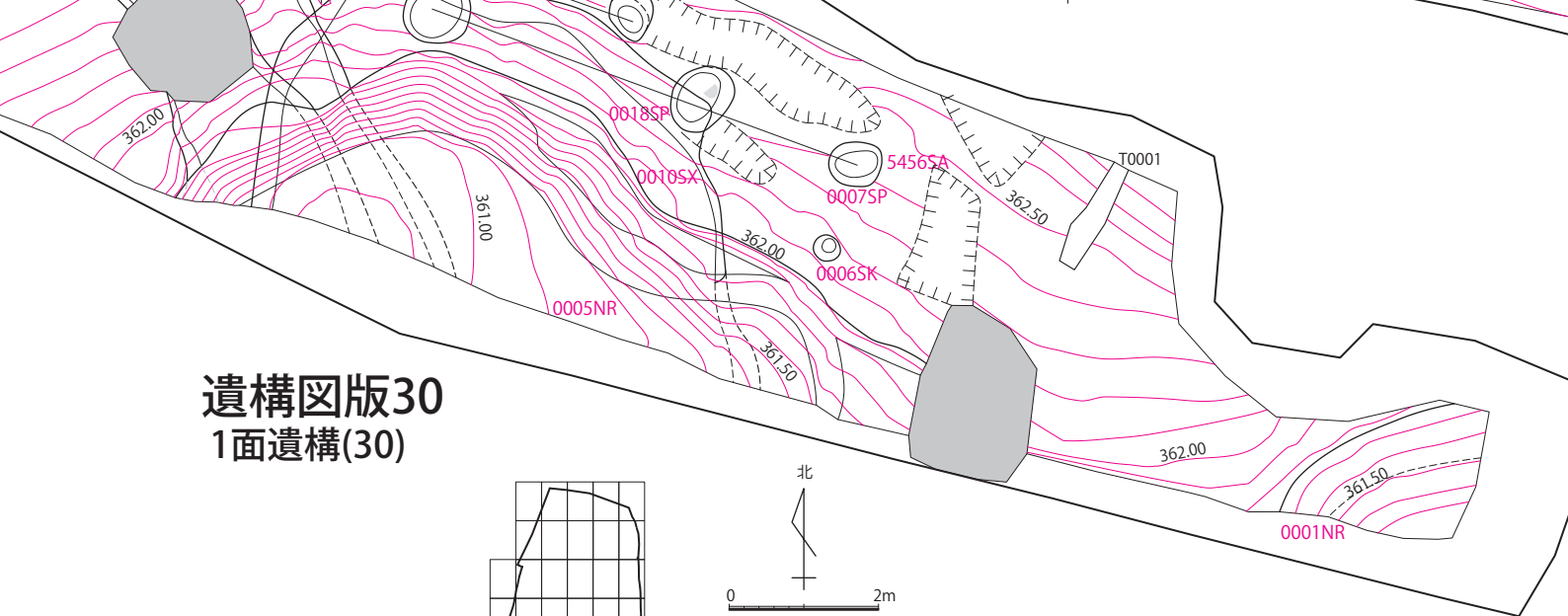
Y=36,230
+
2023

Y=36,230
+
2123

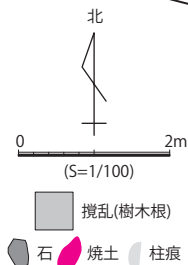
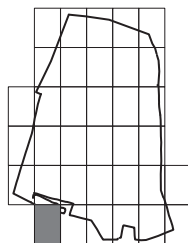


石 焼土 柱痕

X=-99,220
+
2223
Y=36,230



遺構図版30
1面遺構(30)



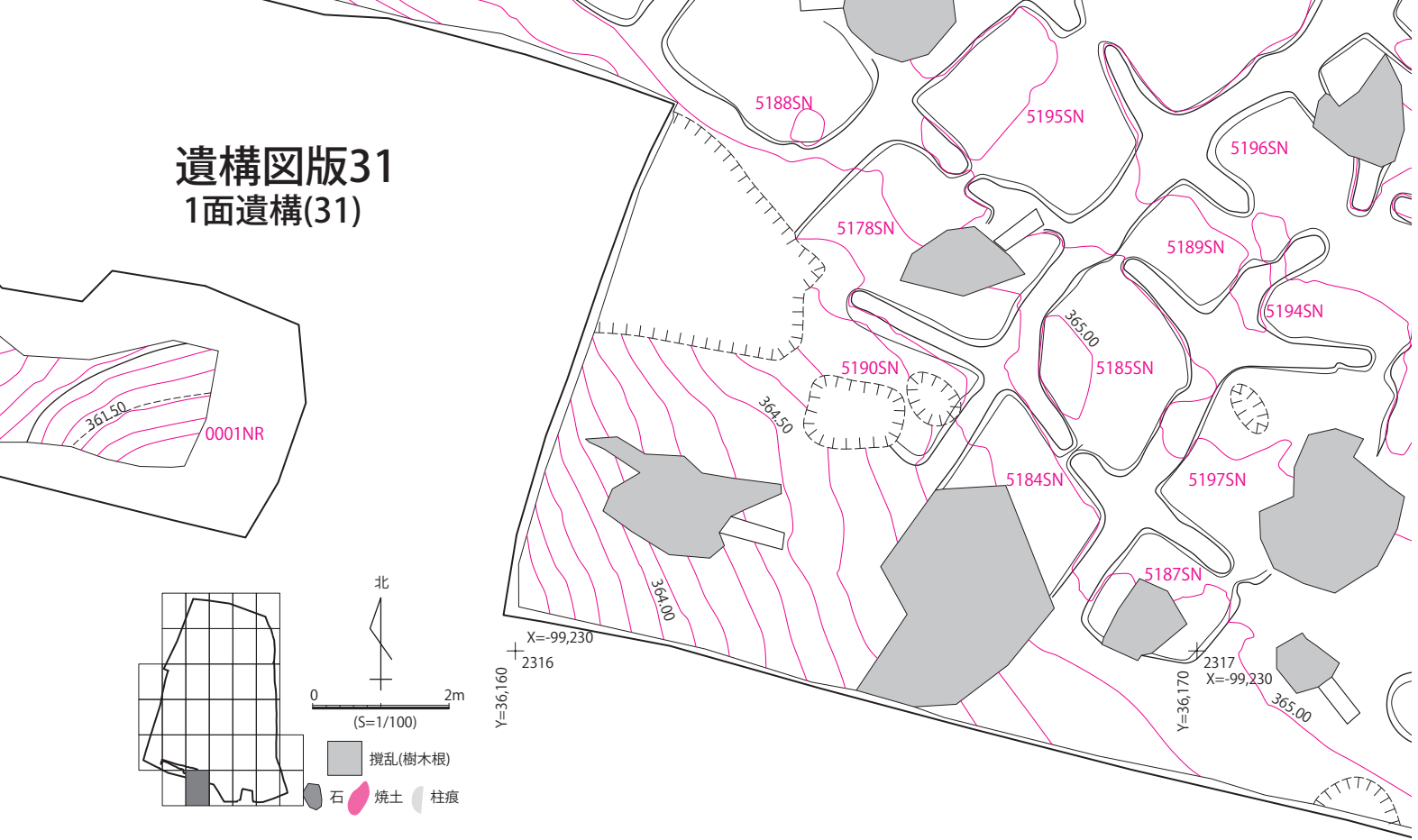
Y=36,140
+
X=-99,230
2314

Y=36,150
+
X=-99,230
2315

Y=36,140
+
X=-99,240
2414

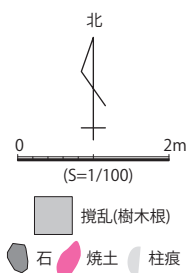
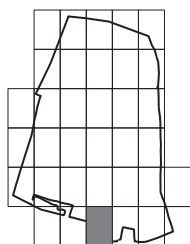
Y=36,150
+
X=-99,240
2415

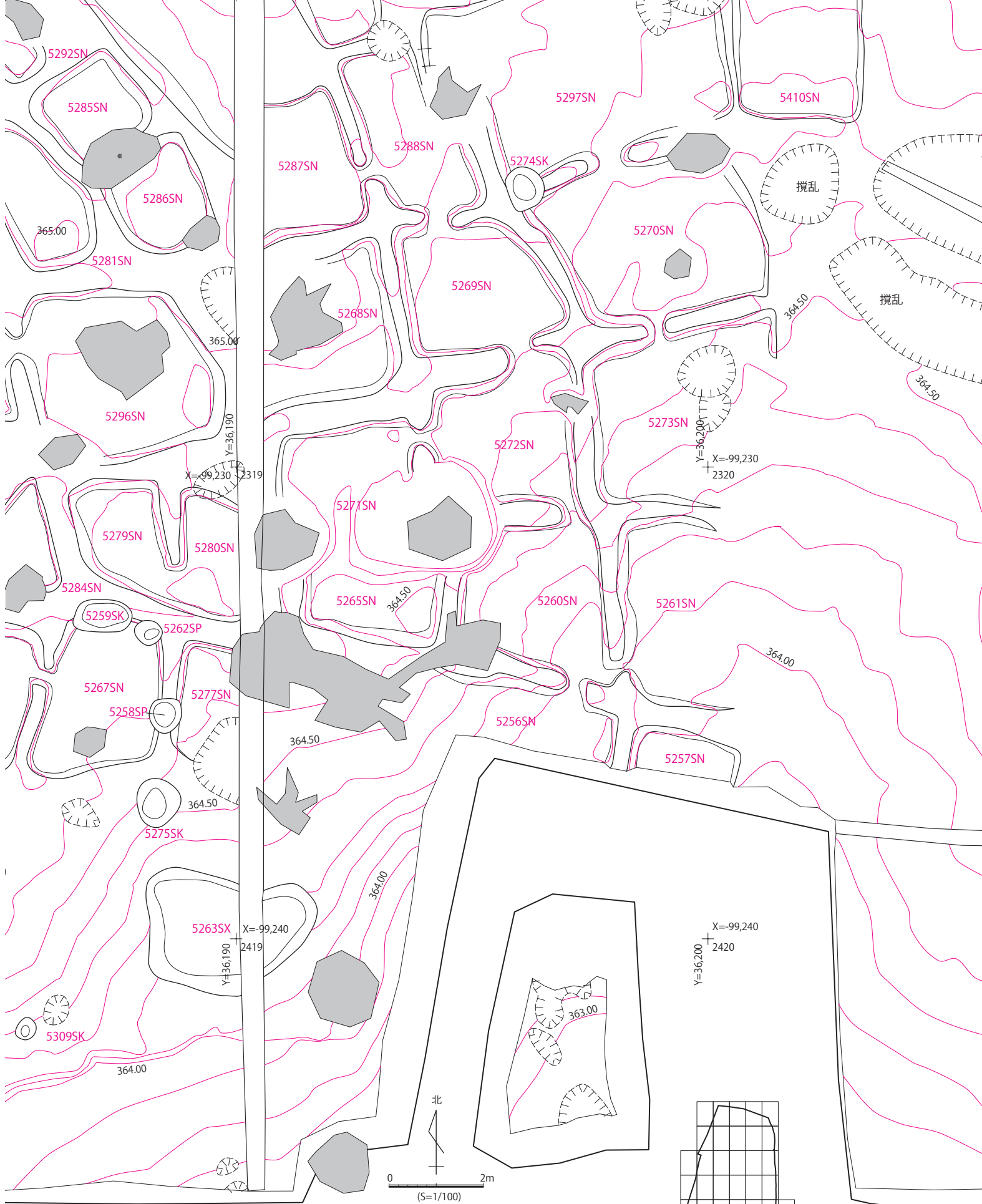
遺構図版31
1面遺構(31)



X=-99,240
+
2416
Y=36,160

X=-99,240
+
2417
Y=36,170

$$Y=36,170 + \frac{X-99,240}{2417}$$
遺構図版32
1面遺構(32)



遺構図版33
1面遺構(33)

 攪乱(樹木根)
 石  焼土  柱痕

5410SN

遺構図版34 1面遺構(34)

攪乱

攪乱

攪乱

5207SK

5209SK

5205SK

5206SK

5200SK

5227SK

5225SK

5219SK

5217SK

5222SX

5218SK

5221SK

5228SX

5220SK

5226SK

5204SK

5203SK

5212SK

5214SK

5224SK

5202SK

攪乱

攪乱

攪乱

攪乱

攪乱

攪乱

364.00

Y=36,210

X=-99,230

2421

5216SK

5213SK

5223SK

364.50

5210SK

5211SK

X=-99,240

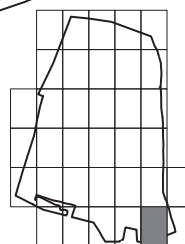
2422

Y=36,220

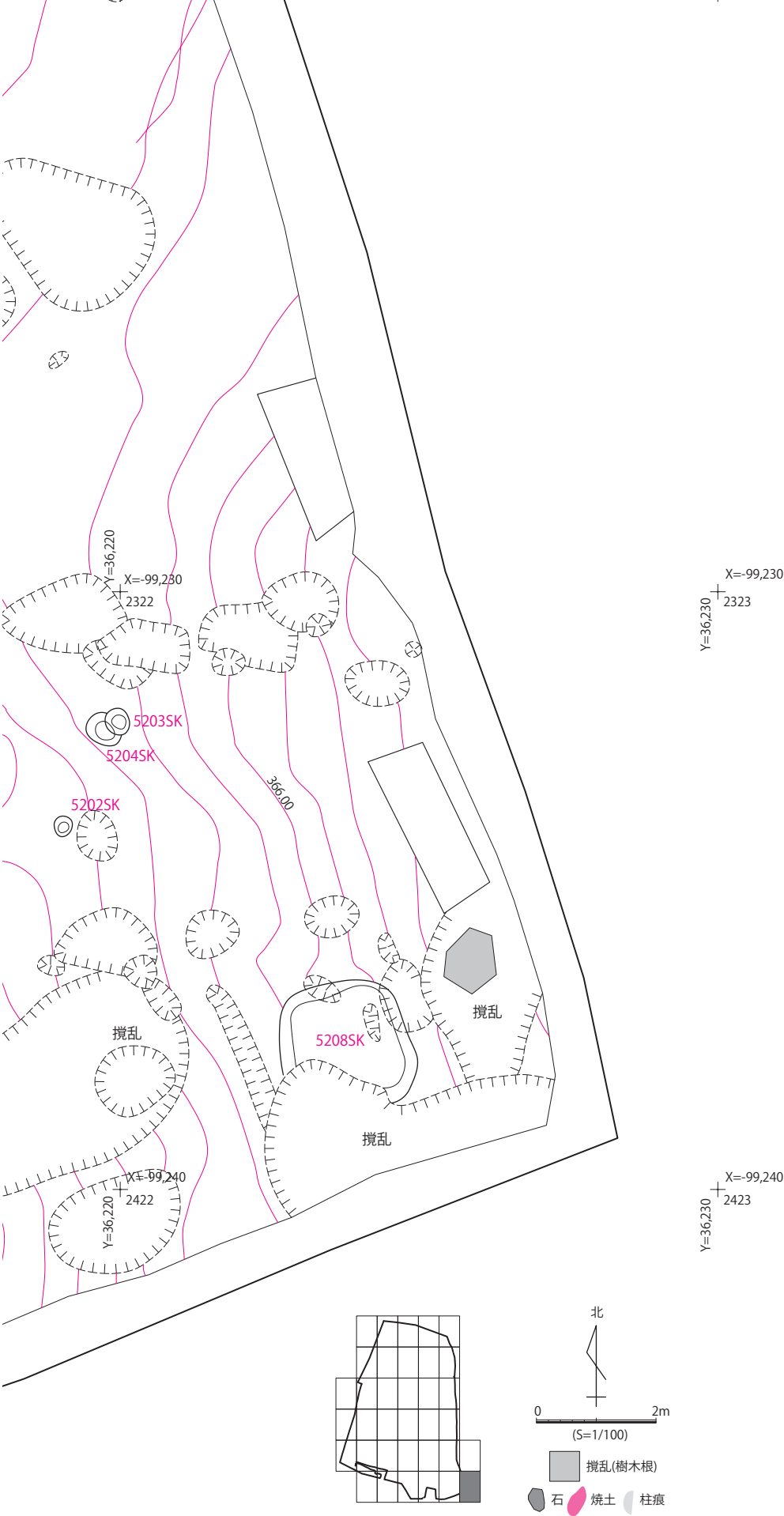
北

0 2m
(S=1/100)

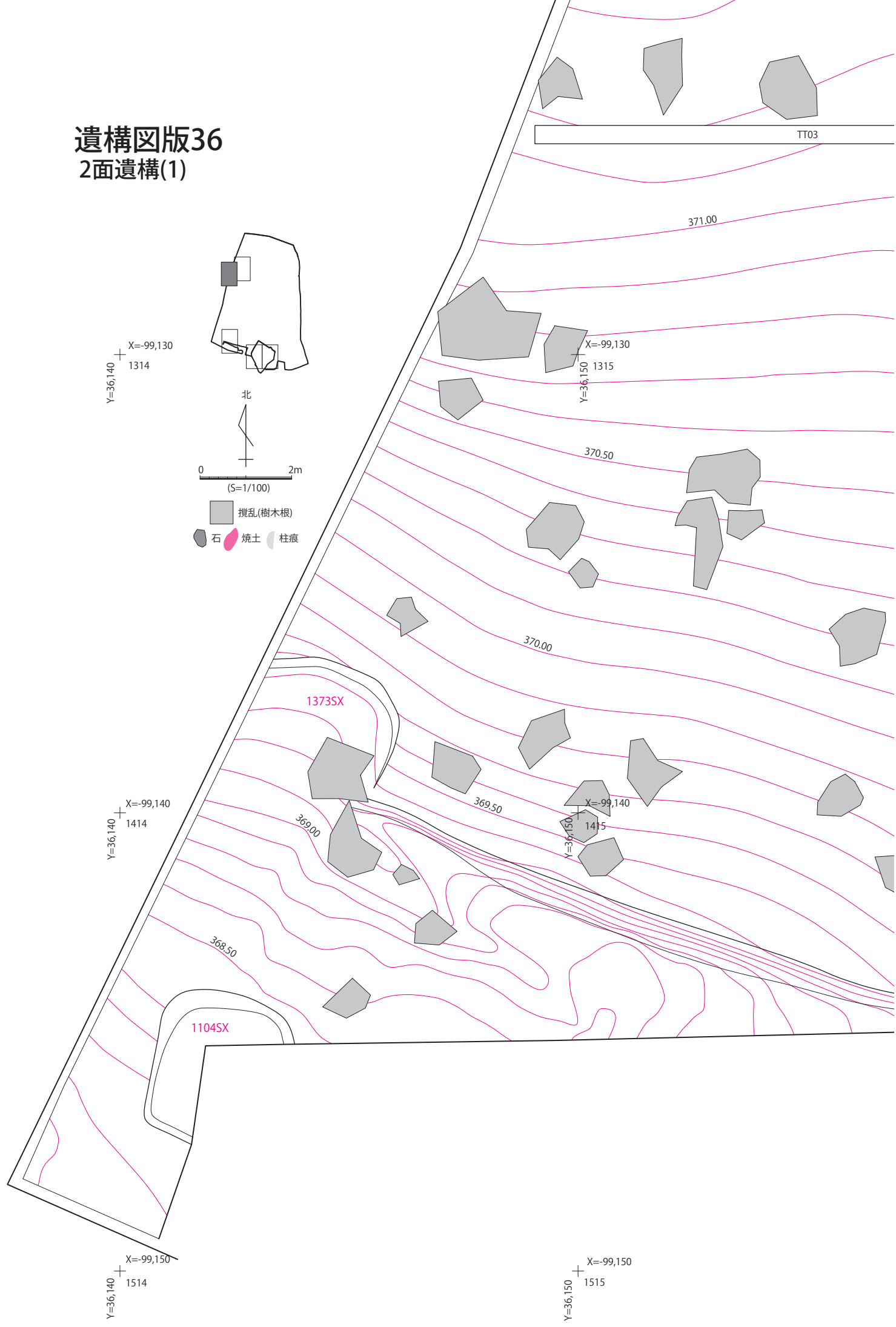
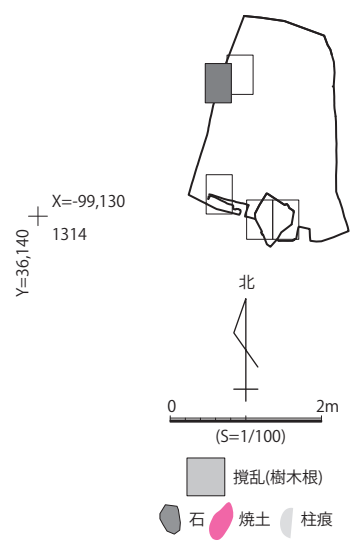
攪乱(樹木根)
石 焼土 柱痕



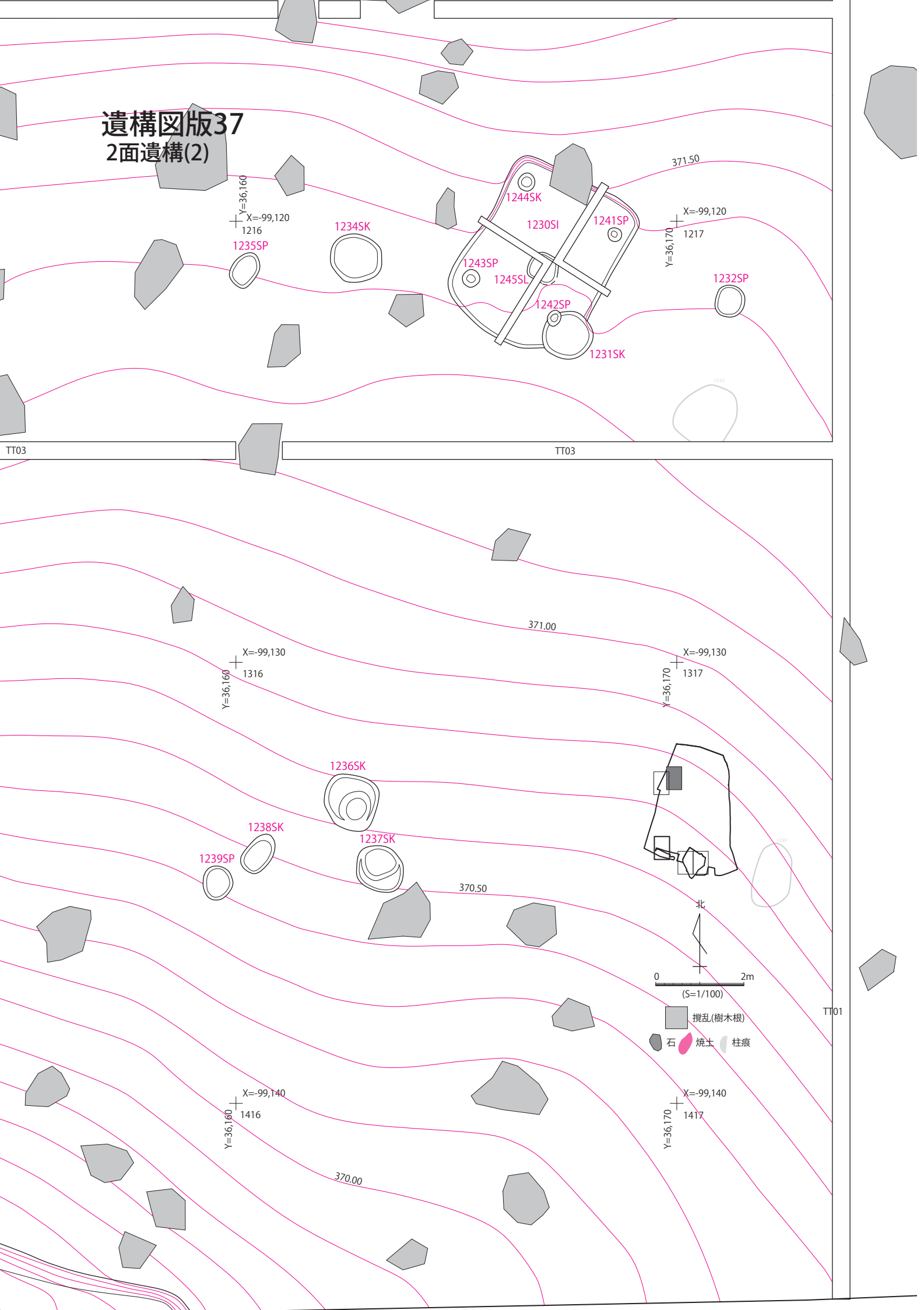
遺構図版35
1面遺構(35)



遺構図版36
2面遺構(1)



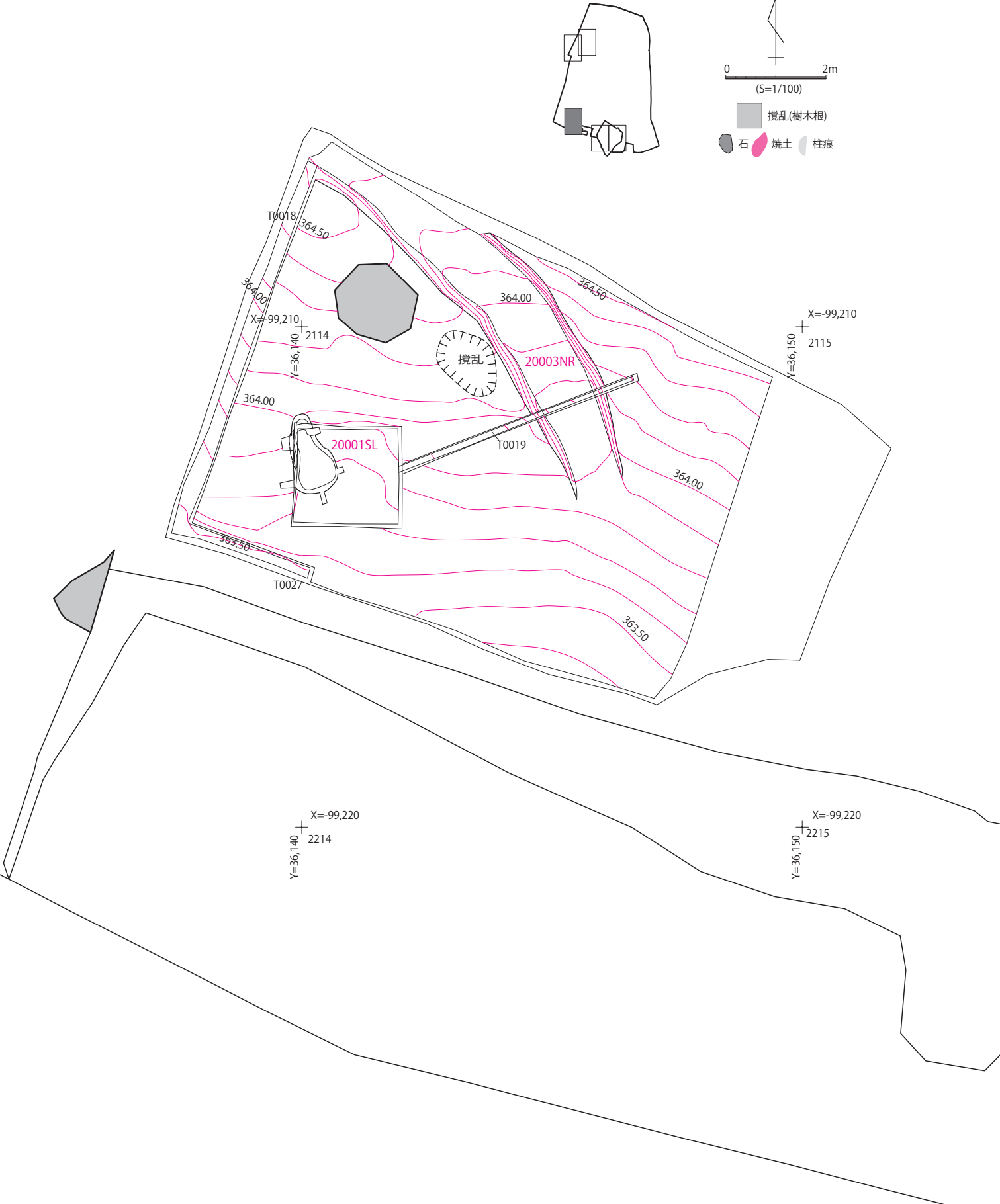
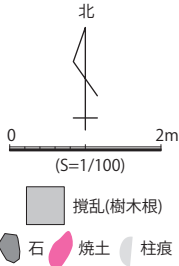
遺構図版37
2面遺構(2)



遺構図版38
2面遺構(3)

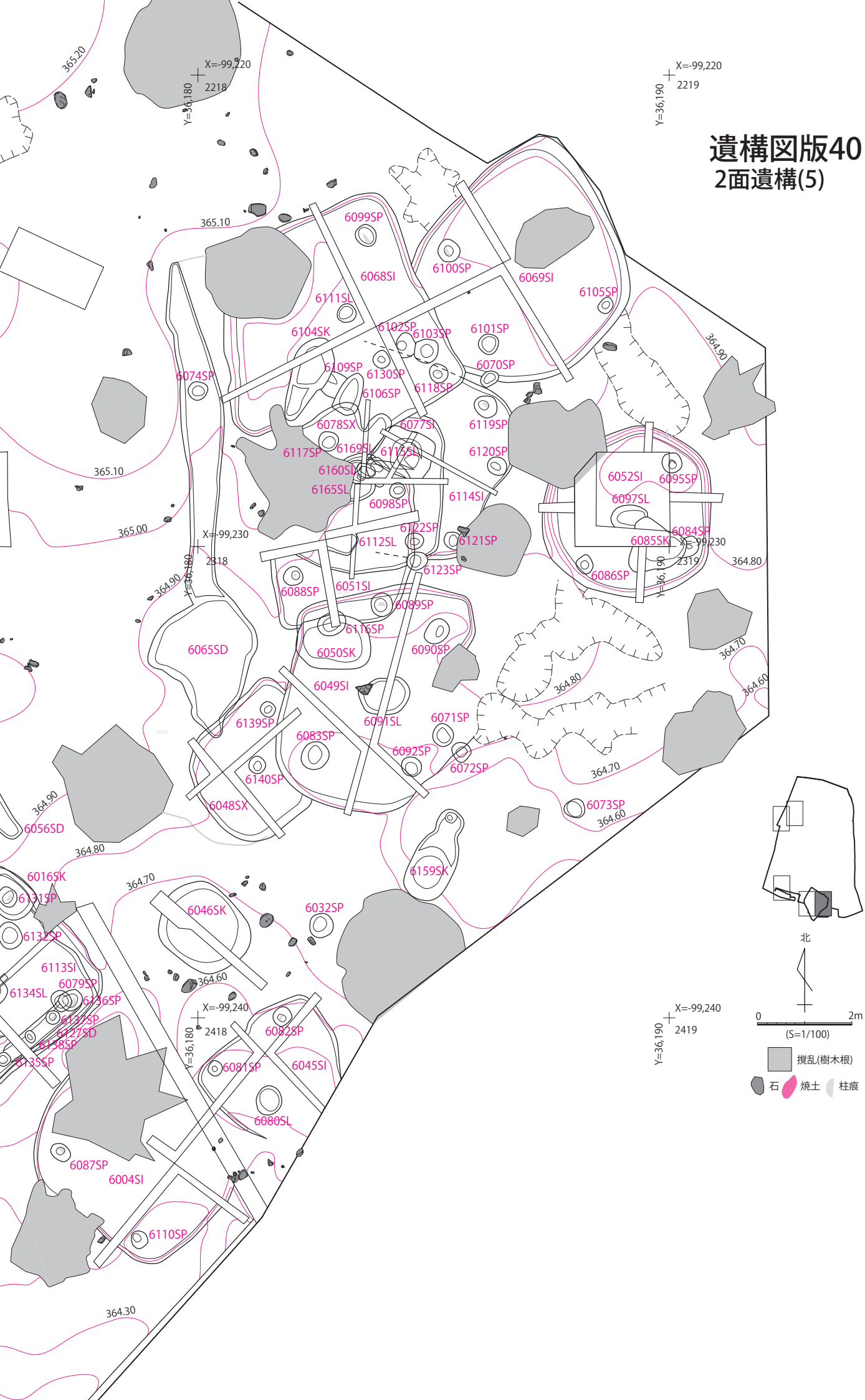
X=-99,200
Y=36,140
2014

X=-99,200
Y=36,150
2015



遺構図版39
2面遺構(4)

2面遺構(5)



遺構図版41

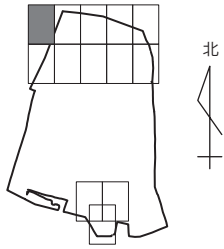
3面遺構(1)

X=-99,100
+
1014
Y=36,140

X=-99,100
+
1015
Y=36,150

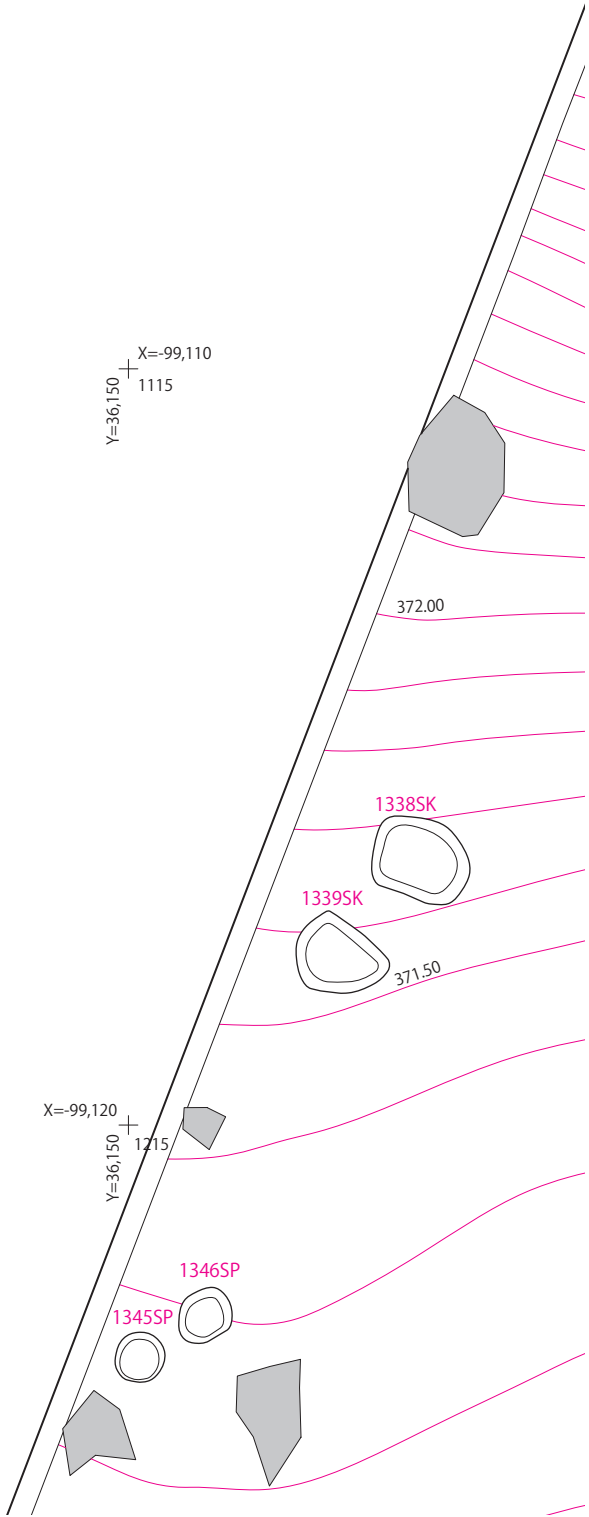
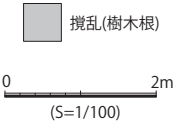
X=-99,110
+
1114
Y=36,140

X=-99,110
+
1115
Y=36,150



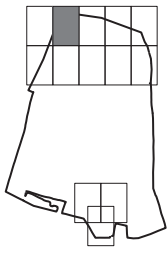
X=-99,120
+
1214
Y=36,140

X=-99,120
+
1215
Y=36,150



遺構図版42

3面遺構(2)



攪乱(樹木根)

0 2m
(S=1/100)



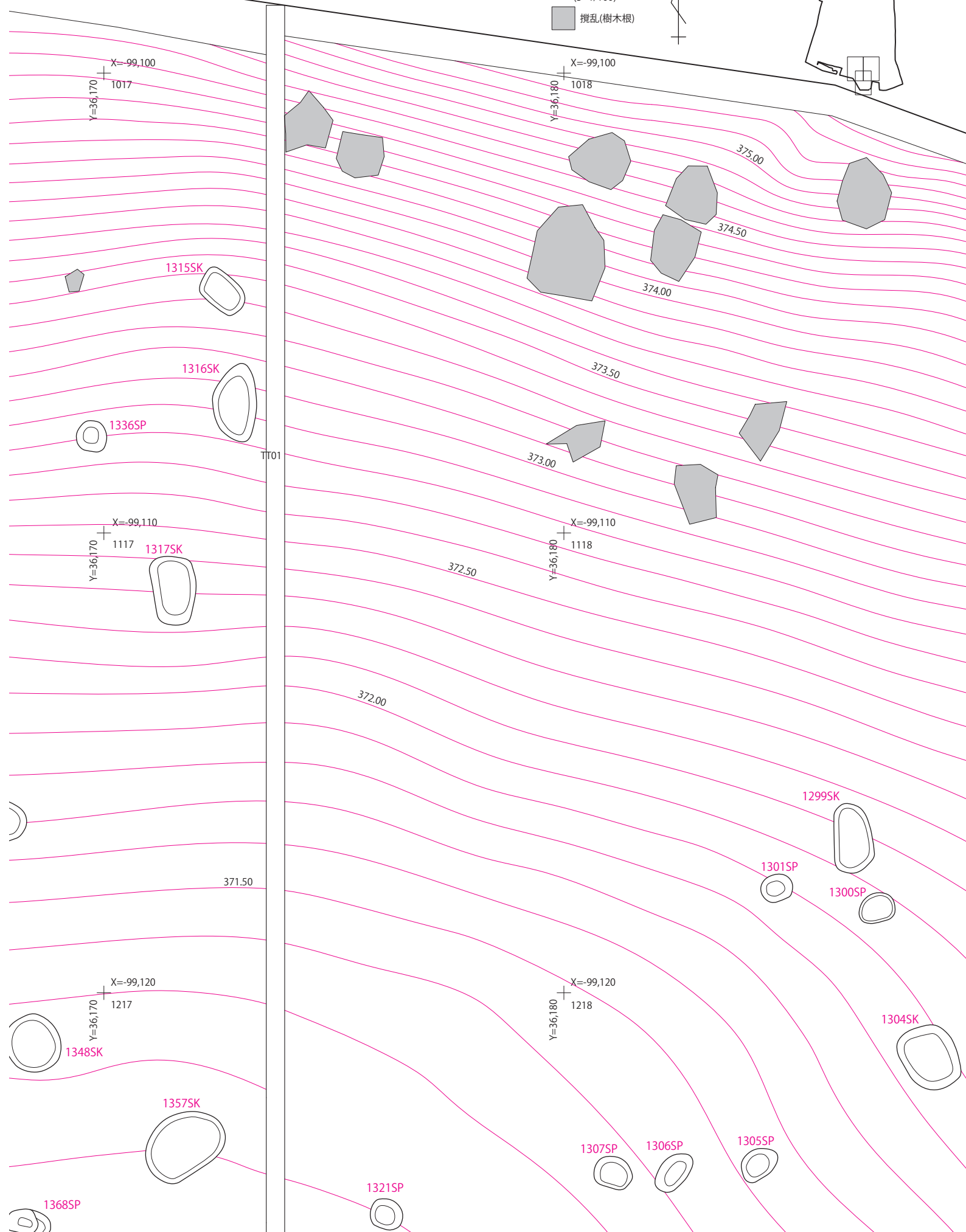
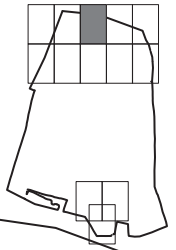
遺構図版43

3面遺構(3)

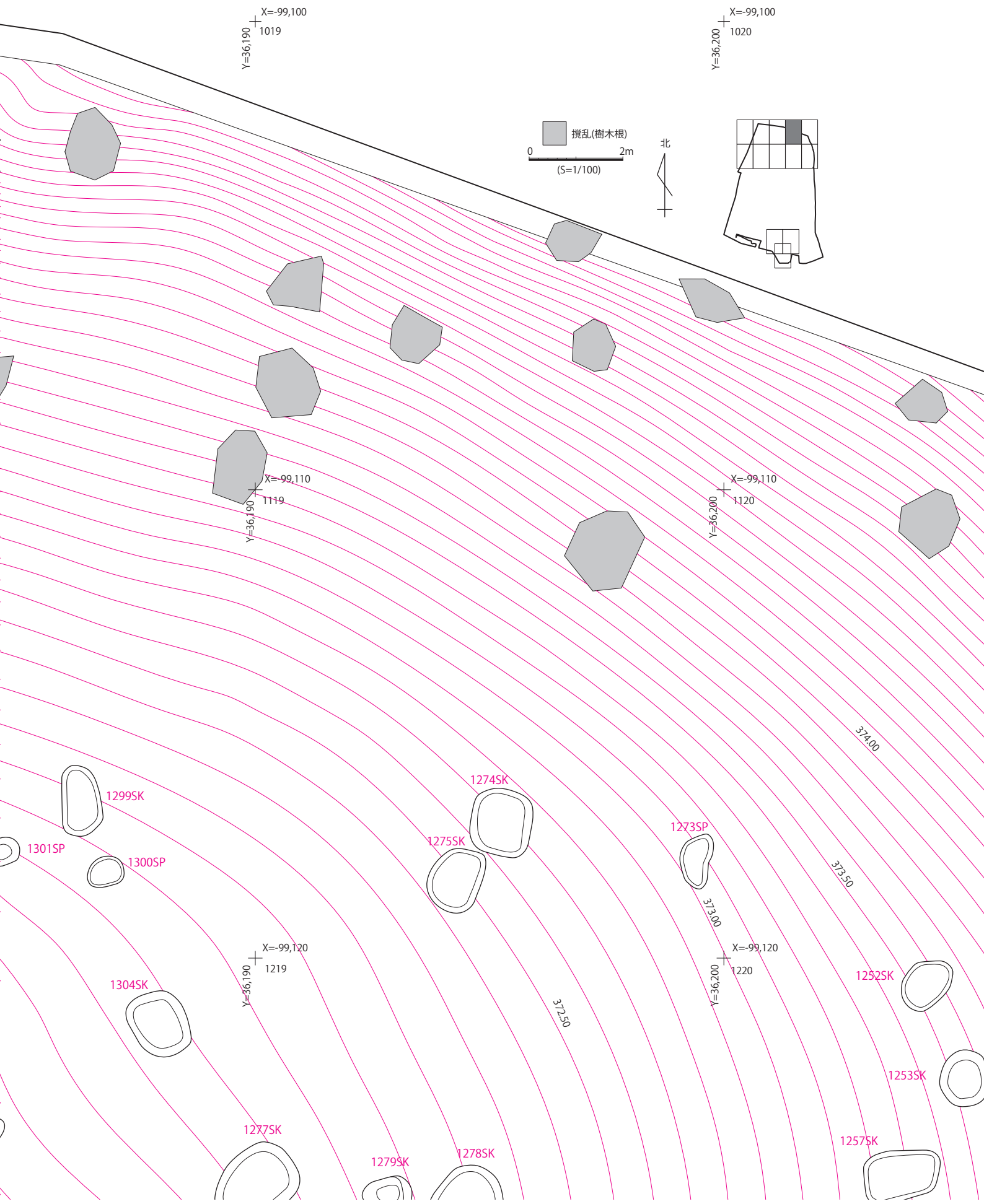
0 2m
(S=1/100)

攪乱(樹木根)

北



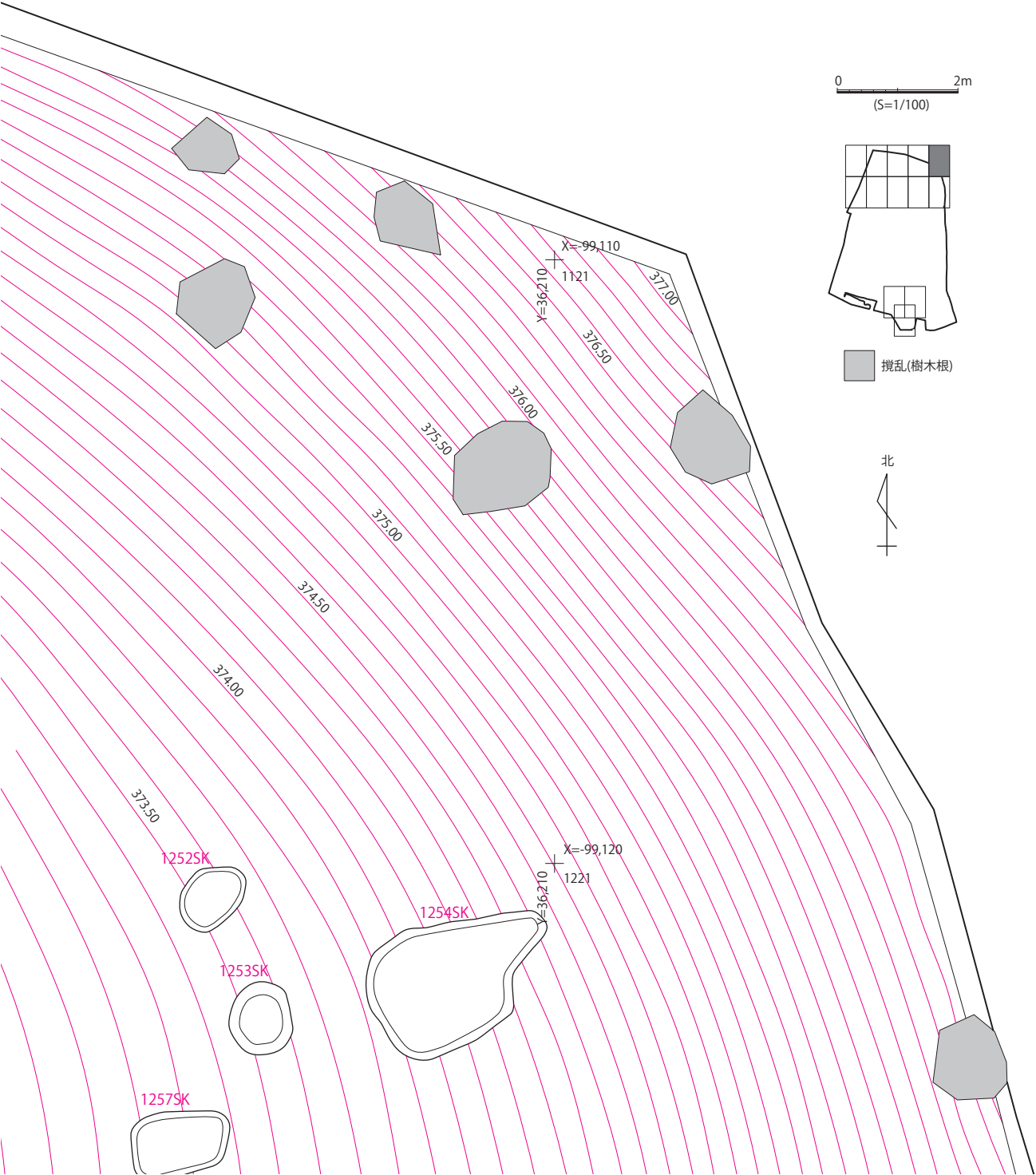
遺構図版44
3面遺構(4)



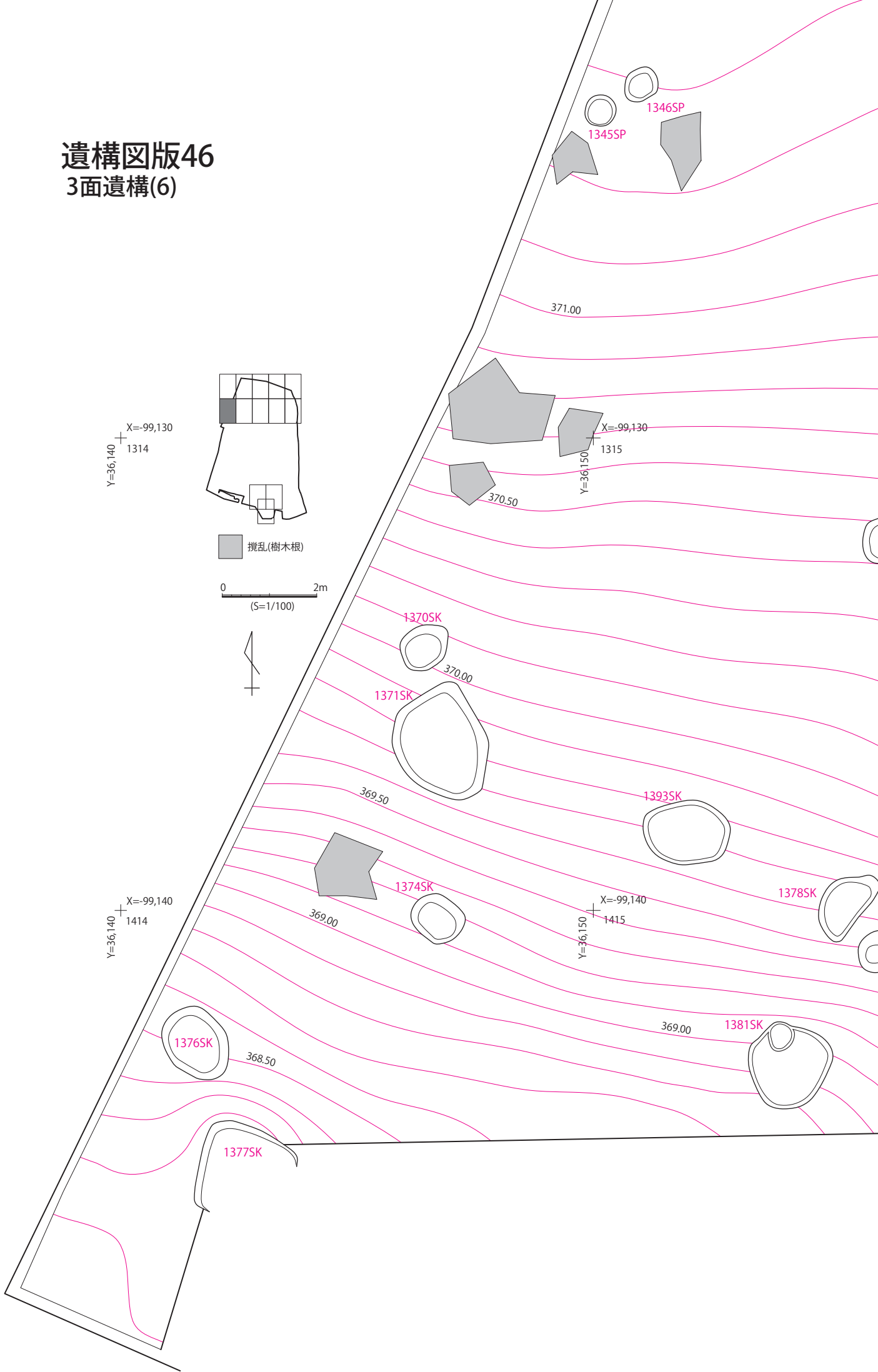
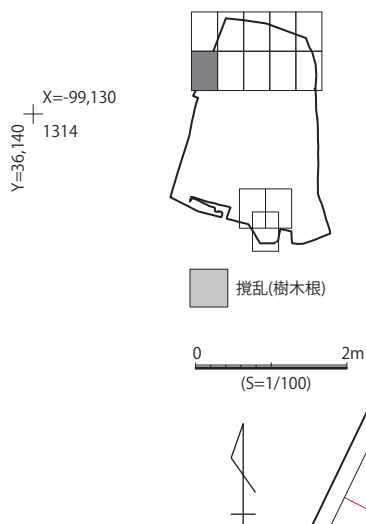
遺構図版45
3面遺構(5)

X=-99,100
+
1021
Y=36,210

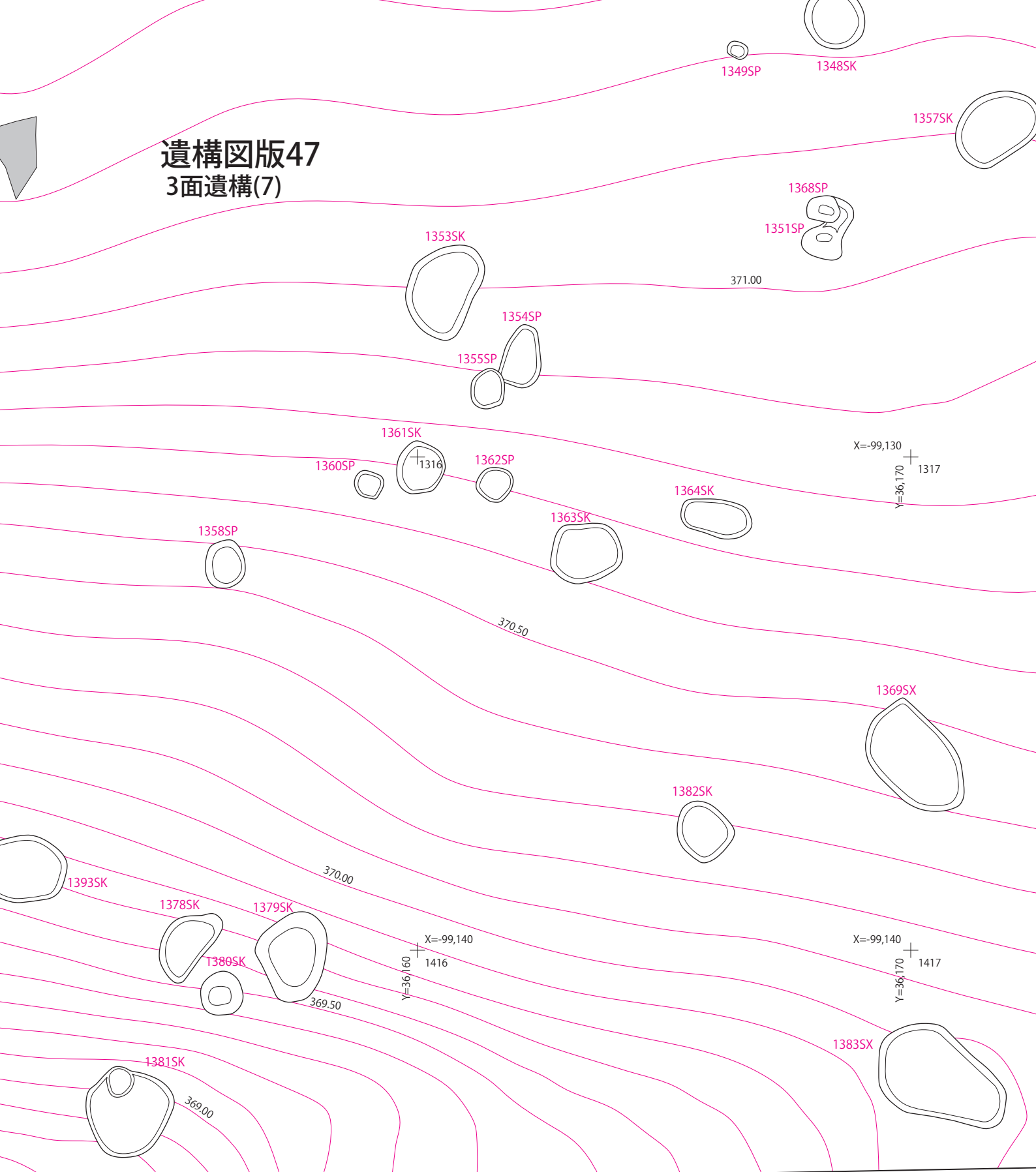
X=-99,100
+
1022
Y=36,220



遺構図版46
3面遺構(6)



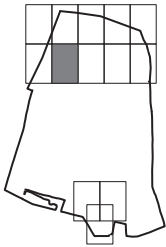
遺構図版47
3面遺構(7)



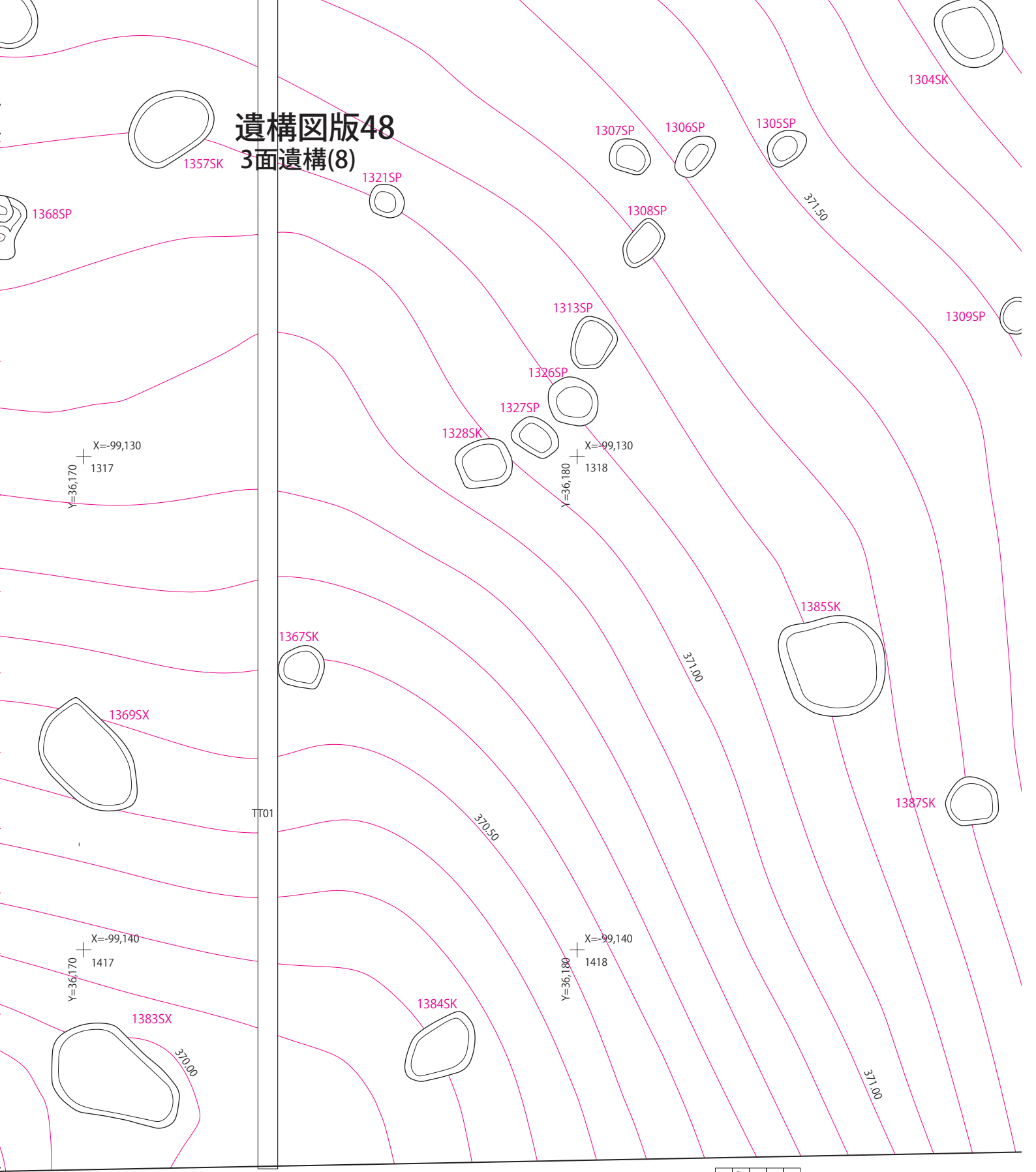
0 2m
(S=1/100)

攪乱(樹木根)

北



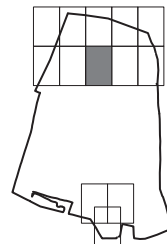
遺構図版48
3面遺構(8)



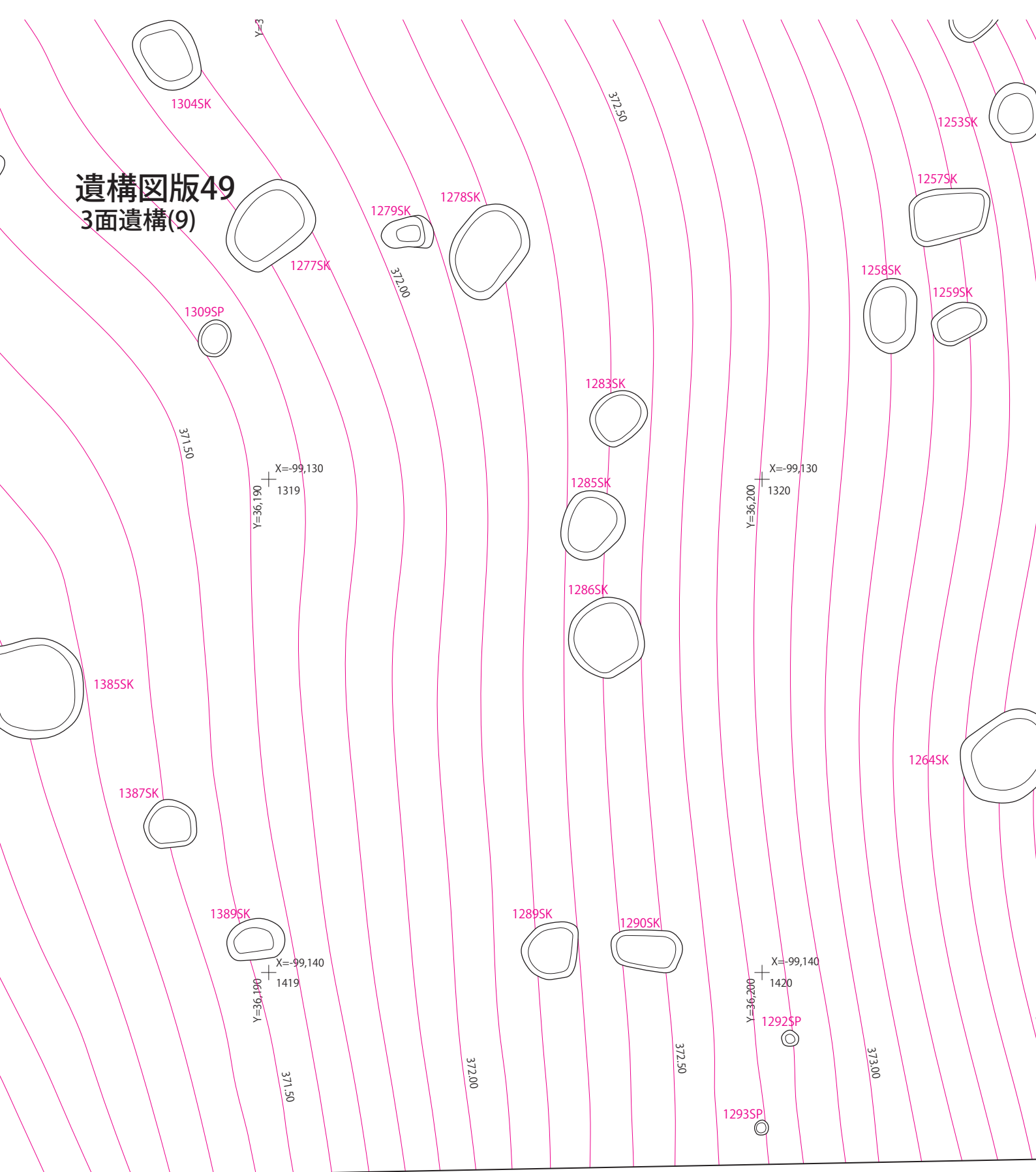
0 2m
(S=1/100)

攪乱(樹木根)

北



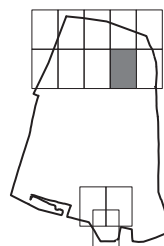
遺構図版49 3面遺構(9)



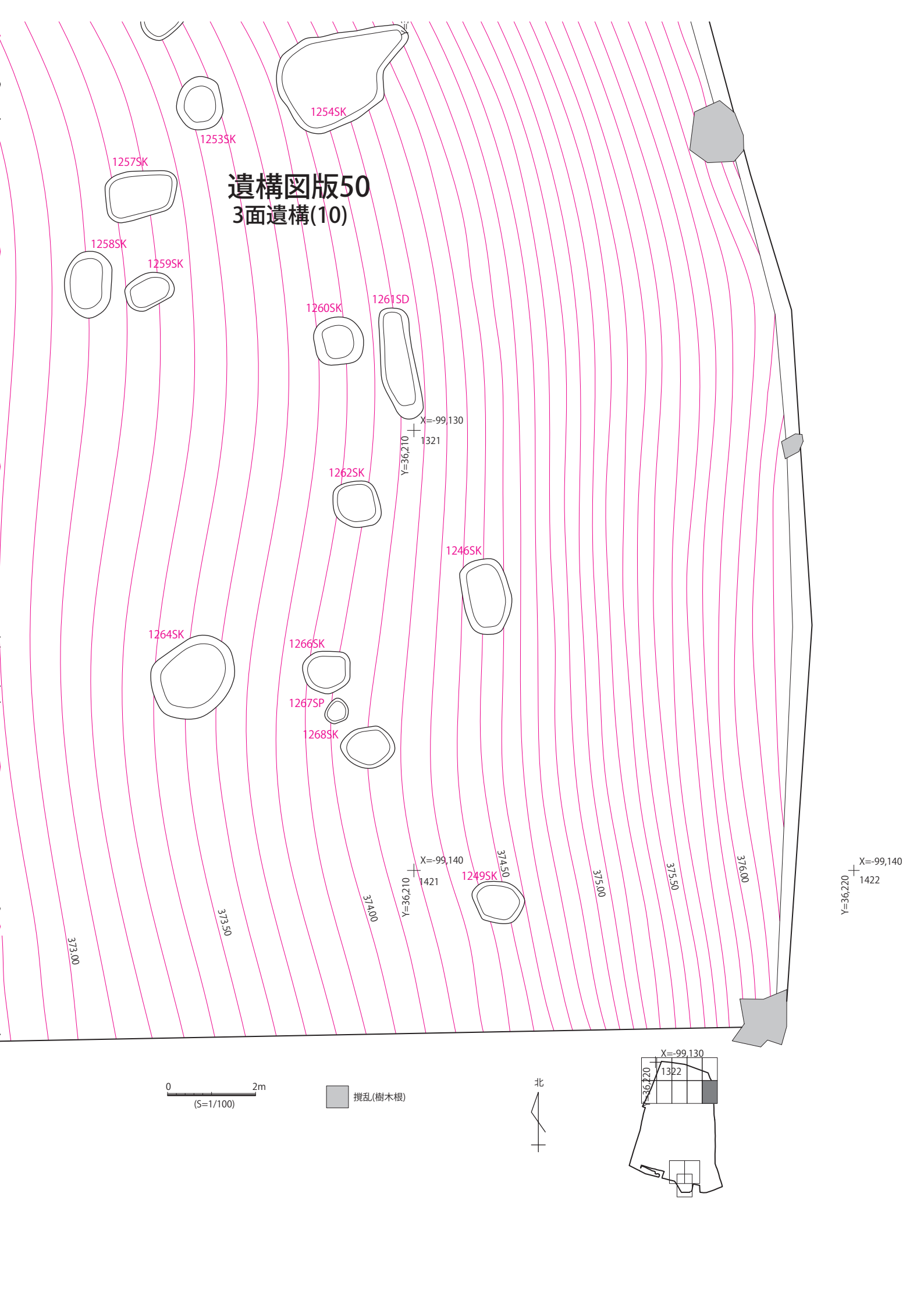
0 2m
(S=1/100)

攪乱(樹木根)

北



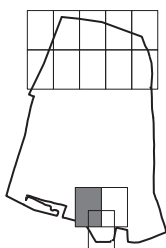
遺構図版50
3面遺構(10)



遺構図版51

3面遺構(11)

0 2m
(S=1/100)

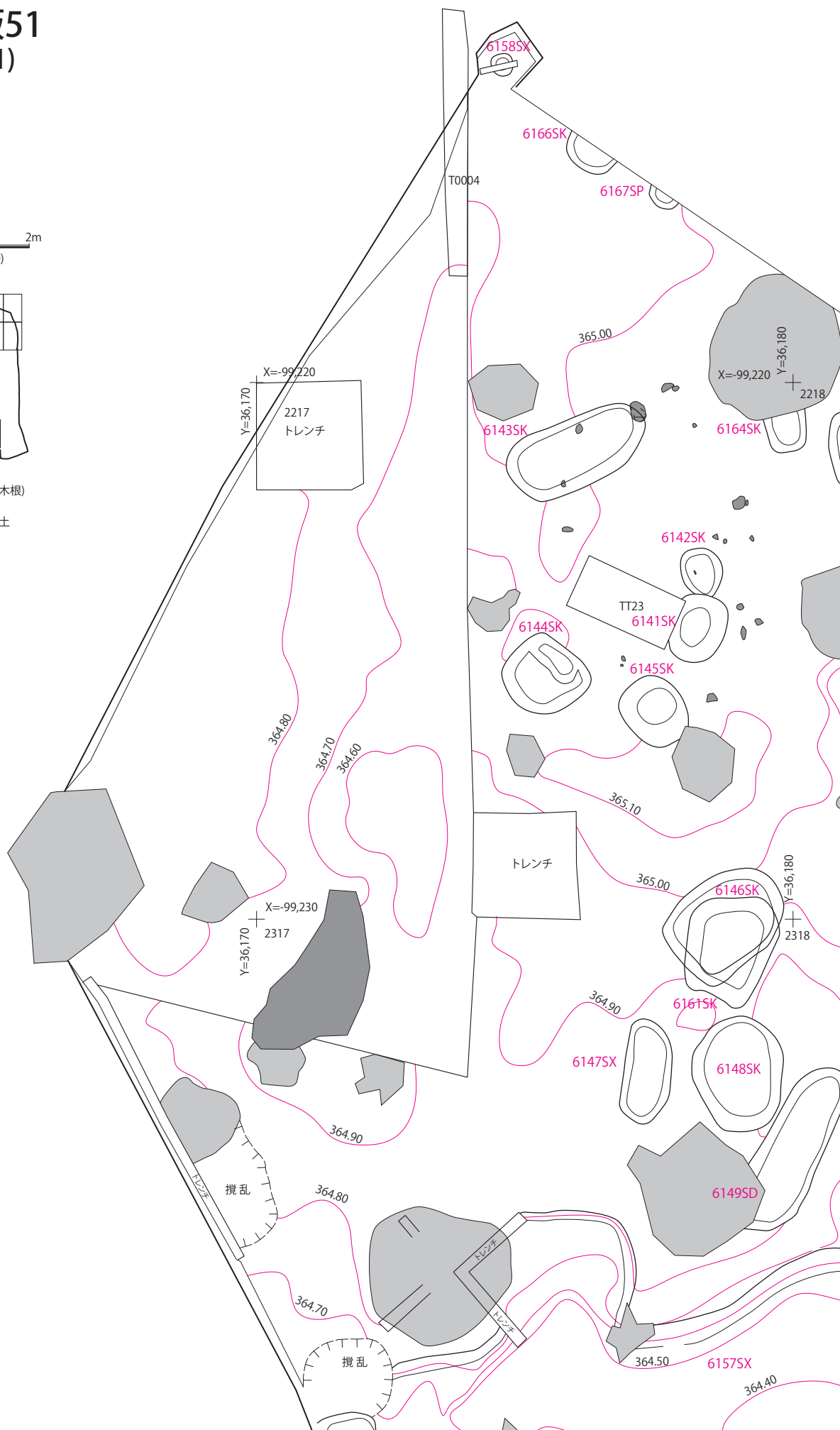


攪乱(樹木根)

石 焼土

柱痕

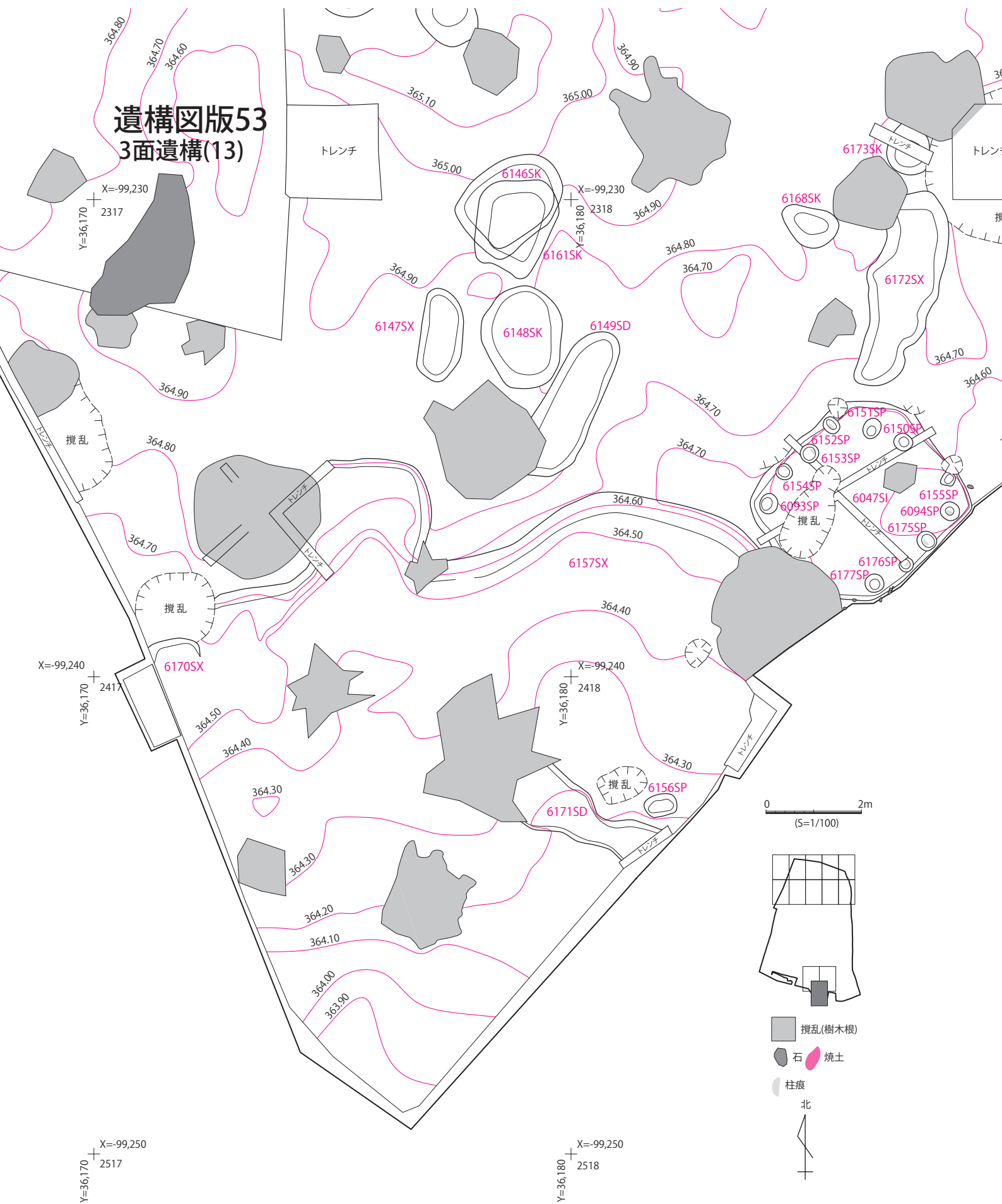
北



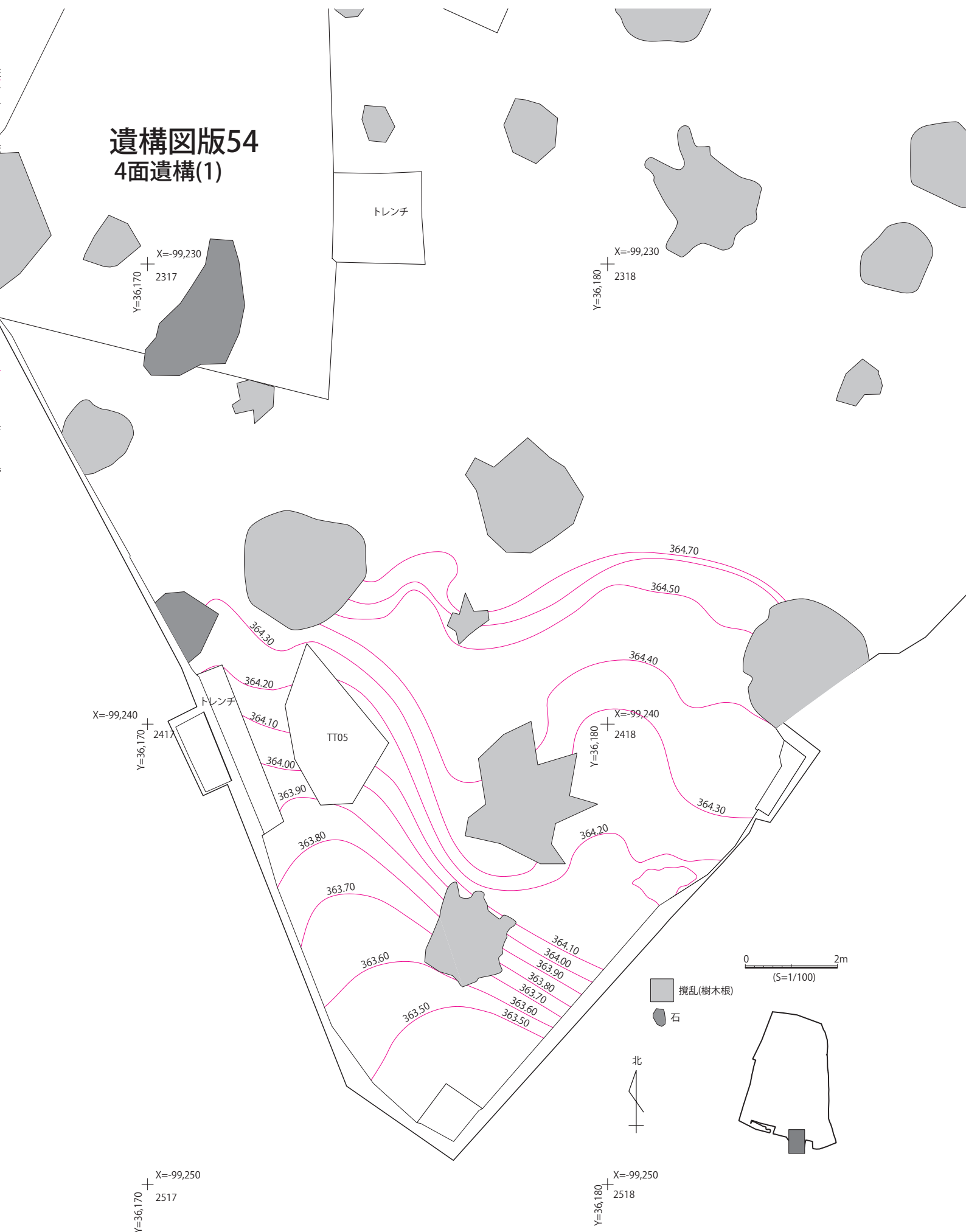
3面遺構(12)



遺構図版53 3面遺構(13)

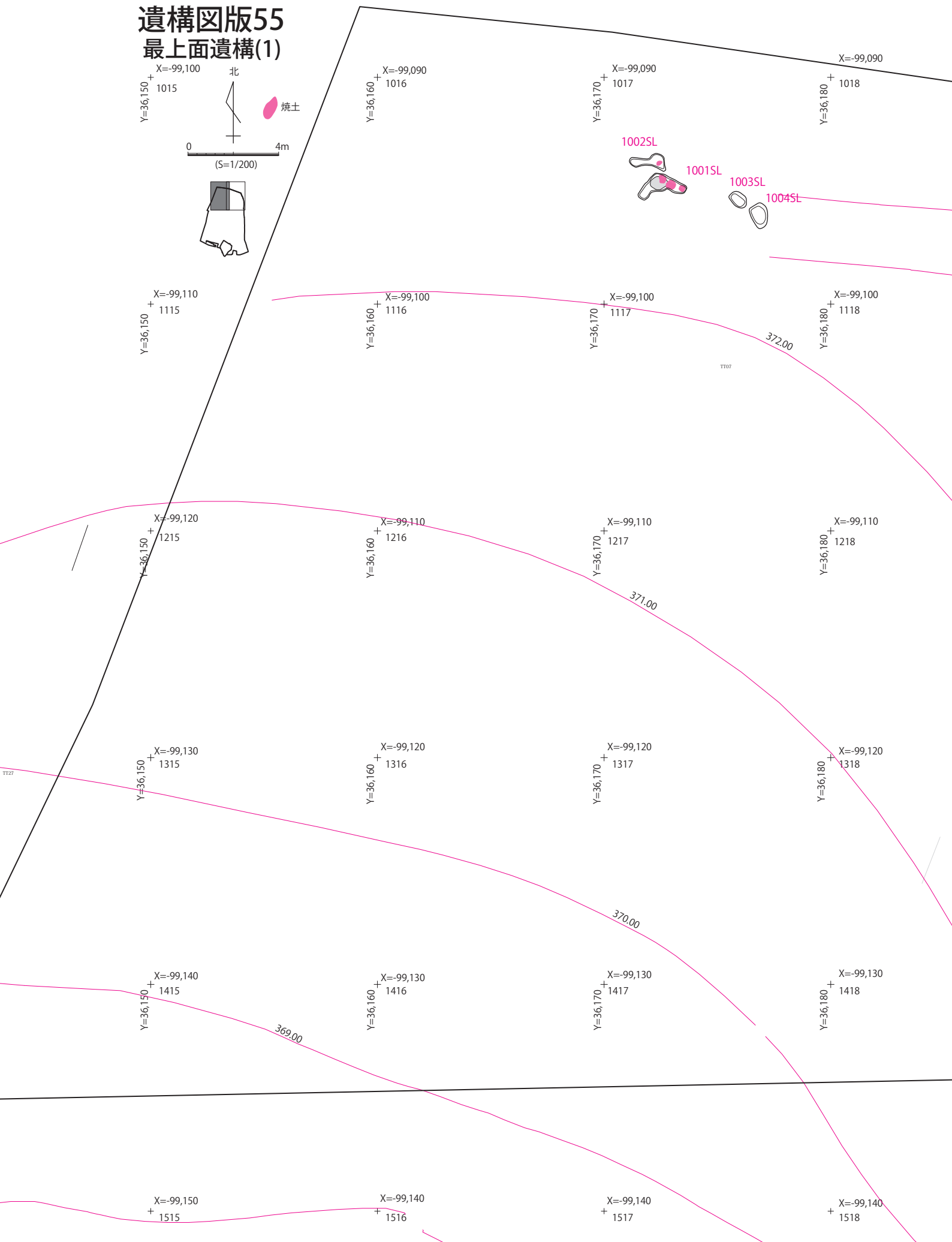
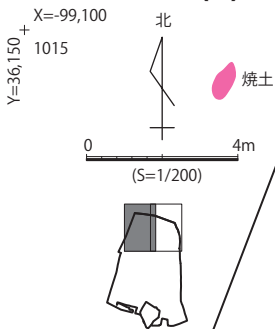


遺構図版54 4面遺構(1)



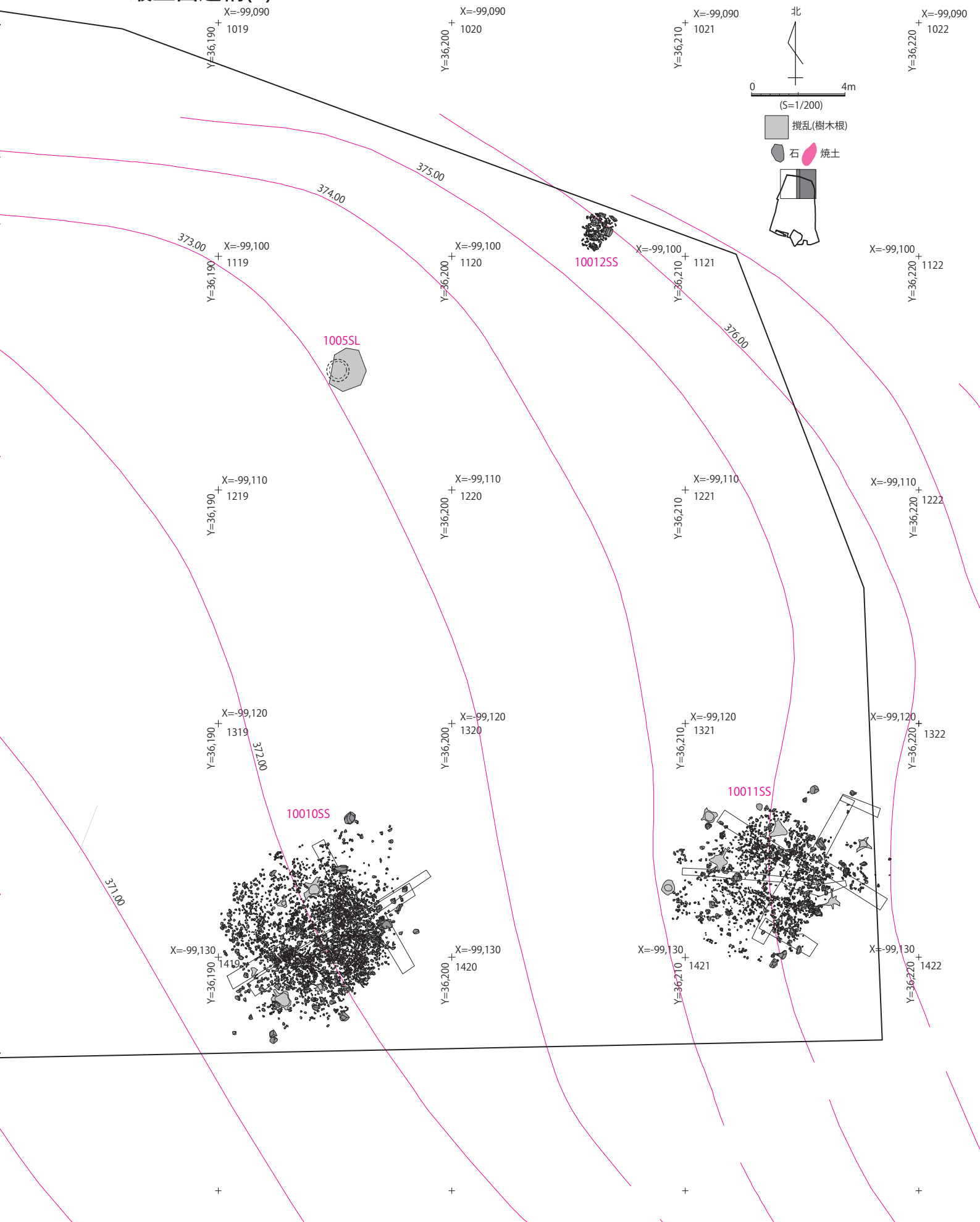
遺構図版55

最上面遺構(1)



遺構図版56

最上面遺構(2)





調査区北半分発掘前状況 (南より)



調査区南半分発掘前状況 (北東より)

写真図版 2

21A区・22A区 集石遺構【近世以降】



21A区集石遺構群検出状況（東より）



21A区10001SS(南より)



21A区10000SS(南より)



21A区10002SS（東より）



上：22B区10011SS（東より）、下：22B区10011SS土層断面（西より）



水田関連検出遺構検出状況【1715・1716・1815・1816 グリッド付近】（南西より）



水田関連検出遺構検出状況【2116・2216・2217 グリッド】（北東より）

写真図版 4

21A区水田関連遺構検出



21A区 水田関連検出遺構検出状況（北より）



21A区 水田関連遺構断面（西より）



21A区 水田関連遺構断面（南より）



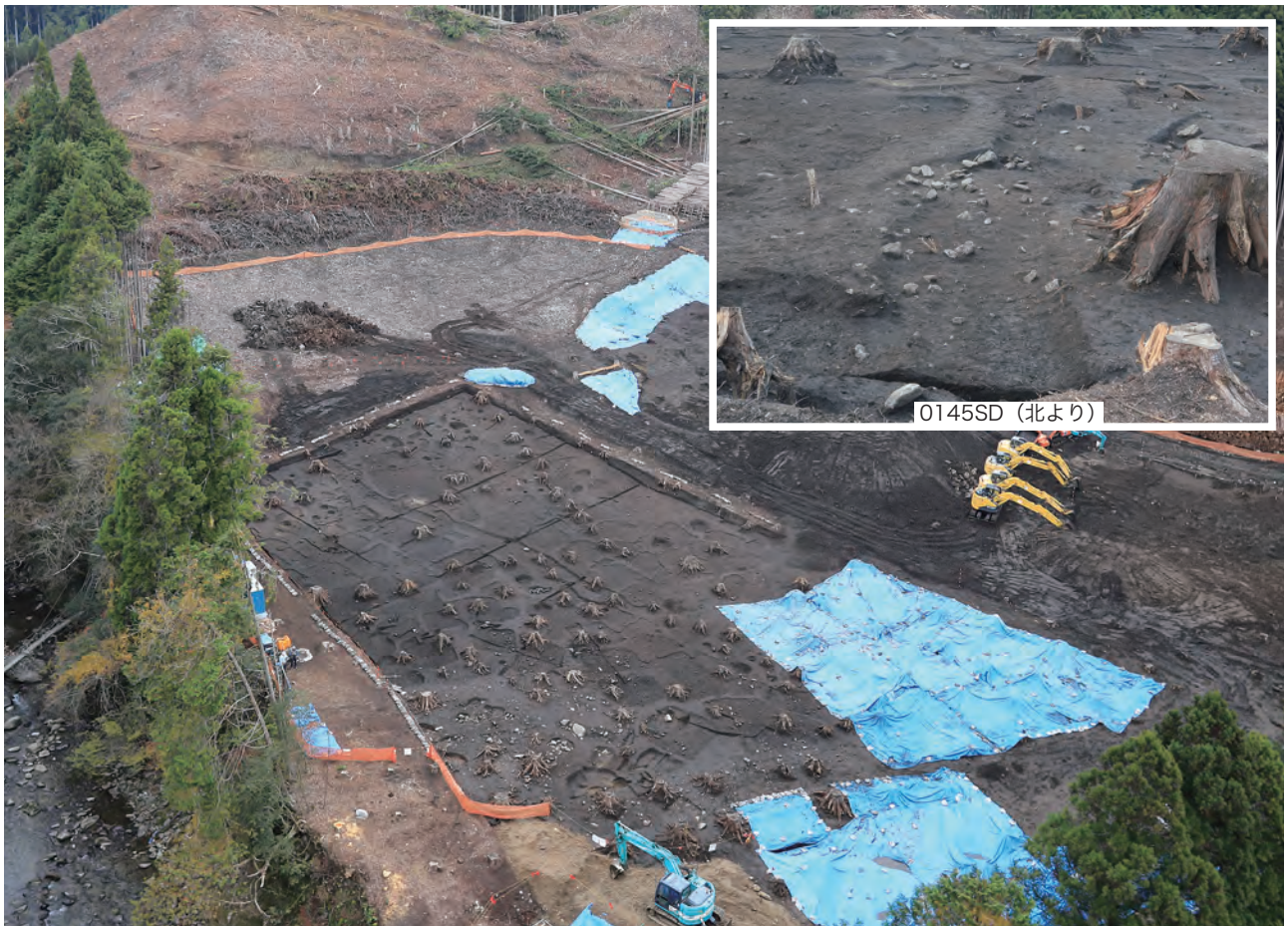
21A区 T0017 水田畦畔断面1（南より）



21A区 T0017 水田畦畔断面2（南より）



21A区水田関連遺構全景（北より）



0145SD（北より）

21A区水田関連遺構全景（南西より）

写真図版 6

21A区水田関連遺構



21A区 0005NR 北端柱列（東より）
(5453SA・5454SA)



上：21A区 0005NR 付近 検出、下：同 完掘（北東より）
(5455SA・5456SA)



21A区 5167SS 礫出土（東より）



21A区 西壁 水田関連遺構
アゼ内出土遺物 山茶碗（東より）



水田関連遺構 耕作土内出土遺物 播鉢



21A区アゼ内土坑 5140SK 伊勢型鍋出土状況（南より）



21A区 調査区東壁土層断面 北半分の1



21A区 調査区東壁土層断面 北半分の2



21A区 調査区北壁土層断面



21B区 水田関連遺構 検出状況



21B区 水田関連遺構 土層断面

写真図版 8

21B区水田関連遺構完掘



21B区 水田関連遺構 完掘状況（北西より）



水田関連遺構 出土 灰釉陶器碗

21B区 水田関連遺構 完掘状況（北東より）

Ba区788SI

22A区水田関連遺構完掘



22A区 水田関連遺構 完掘状況（上が南）



22A区 水田関連遺構 完掘状況（南より）



22A区 1006SD 土層断面（南より）

写真図版 10

21A区 竪穴建物跡など【縄文・弥生】



21A区 調査区南西側 完掘（西より）



21A区 5130SK 礫出土状況（北東より）



21A区 5131SK 土層断面（南西より）



21A区 5131SK 遺物出土状況（南西より）



21A区 5090SI・5131SK 完掘（西より）



21A区 5131SK 遺物出土（左：磨製石斧、右：岩偶岩版類）



21A区 5131SK 付近
遺物出土（岩偶岩版類）



21A区 竪穴建物跡など遺構検出状況【1915・1916・2016 グリッド】（北西より）



21A区 5004SI付近検出状況 (北より)



21A区 5004SI遺物検出状況 (東より)



21A区 5004SI土層断面



21A区 5004SI床面検出 (南より)



21A区 5004SI完掘 (南より)



21A区 5361SI床面1検出 (南より)



21A区 5361SI床面1完掘 (南より)

写真図版 12

21A区 竪穴建物跡など【縄文・弥生】



21A区 5361SI床面2検出状況 (南より)



21A区 5361SI完掘 (南より)



21A区 5001SI検出時遺物出土状況 (北西より)



21A区 5001SI付近検出時遺物出土状況 (南西より)



21A区 5001SI検出状況 (南より)



21A区 5001SI床面遺物出土状況 (南より)



21A区 5001SI土層断面



21A区 5001SI完掘 (南より)



21A区 5300SI検出 (南より)



21A区 5300SI土層断面



21A区 5300SI床面検出 (南より)



21A区 5300SI完掘 (南より)



21A区 縄文土器・弥生土器 など 遺物出土状況

写真図版 14

21A区 竪穴建物跡など【縄文・弥生】



21A区 5044SI床面1検出(南西より)



21A区 5044SI床面1検出(東より)



21A区 5303SI床面検出(南東より)



21A区 5303SI床面完掘(南東より)



21A区 5324SI検出(南東より)



21A区 5324SI土層断面(東より)



21A区 5324SI床面検出(南東より)



21A区 5324SI完掘(南東より)



21A区 5425SI床面検出(北西より)



21A区 5425SI柱穴など完掘(北西より)



21A区 5425SI土層断面(北より)



21A区 5425SI炉跡5426SL完掘(南西より)



21A区 5425SI完掘(北西より)



21A区 竪穴建物跡群完掘状況(北東より)



左：21A区20001SK 検出状況(南東より)、右：同礫出土状況(南より)

写真図版 16

21B区・22B区竪穴建物跡など【縄文・弥生ほか】



21B区北半 全景(上が南)



21B区 0245SY土層断面(南東より)



21B区 0216SK土層断面(左:土層断面、右:完掘)



22B区 6052SI床面検出(南より)



22B区 6052SI完掘(南より)



22B区 6051SI柱穴など完掘(南より)



22B区 6051SI炉跡6112SL 検出状況(東より)



22B区 6068SI 遺物出土状況検出状況 (南東より)



22B区 6113SI 検出状況 (北東より)



22B区 6113SI 床面検出状況 (北東より)



22B区 6113SI 完掘 (北東より)



22B区 6115SL 検出時遺物出土状況 (北西より)



22B区 6115SL 検出状況 (北東より)



22B区 6115SL 下層遺物出土状況 (南西より)



22B区 6114SI 炉跡 6115SL および 6077SI 完掘 (南東より)

写真図版 18

22B区竪穴建物跡など【縄文・弥生】



22B区 全景（北東より）



22B区 6157SX 遺物出土状況

22B区 6157SX【縄文中期廃棄帯】 完掘状況



22B区 南壁【6157SX・6170SX】土層断面



22B区 6170SX 遺物出土状況



22B区 6157SX 遺物出土状況



372 上面



372



449 拡大

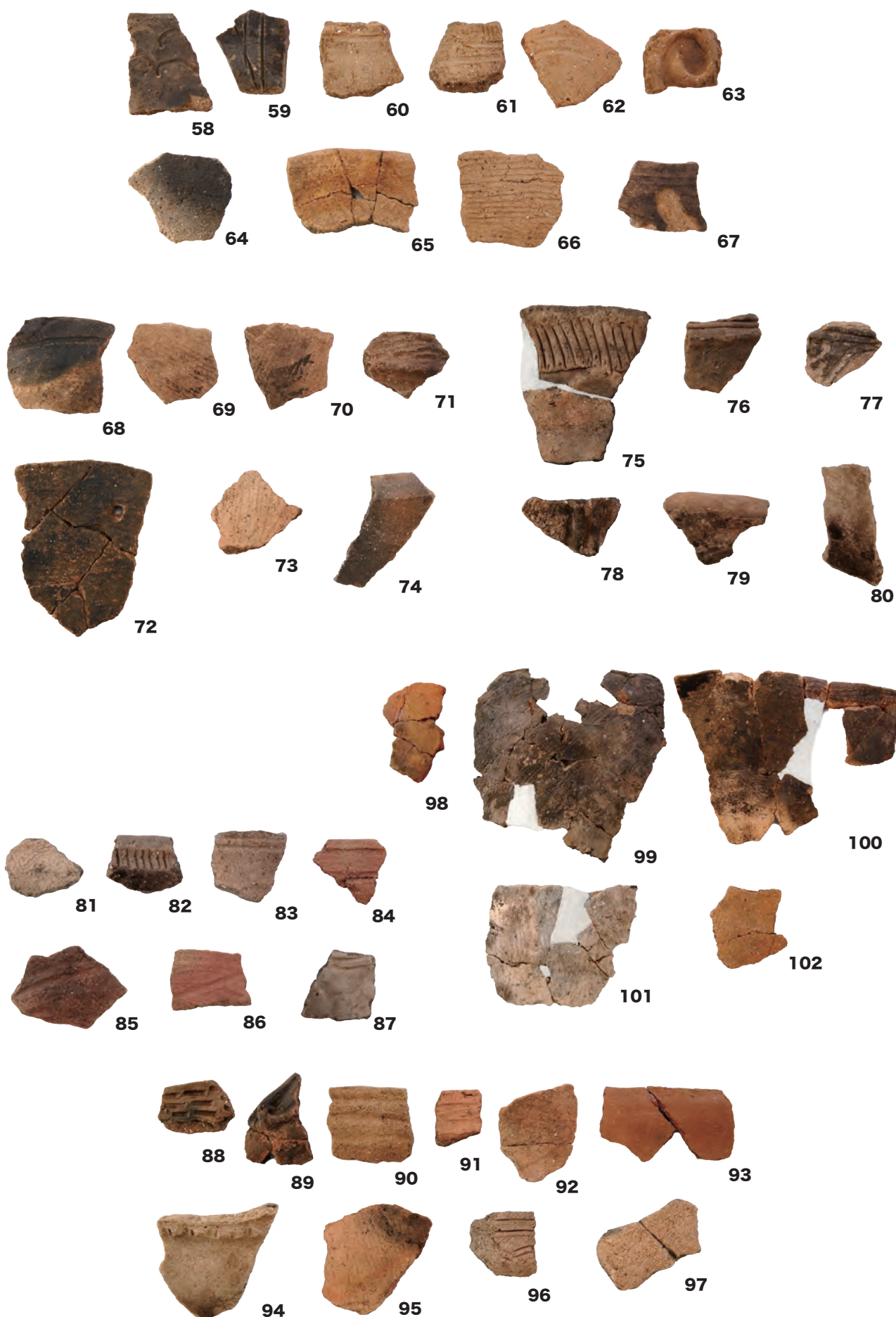


449

写真図版 20

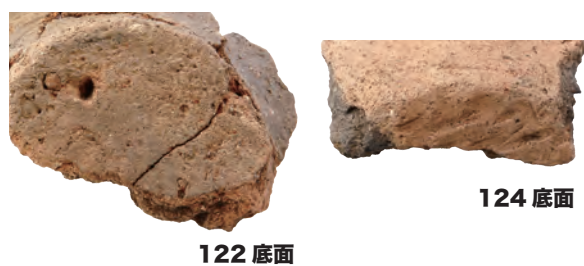
縄文土器





写真図版 22

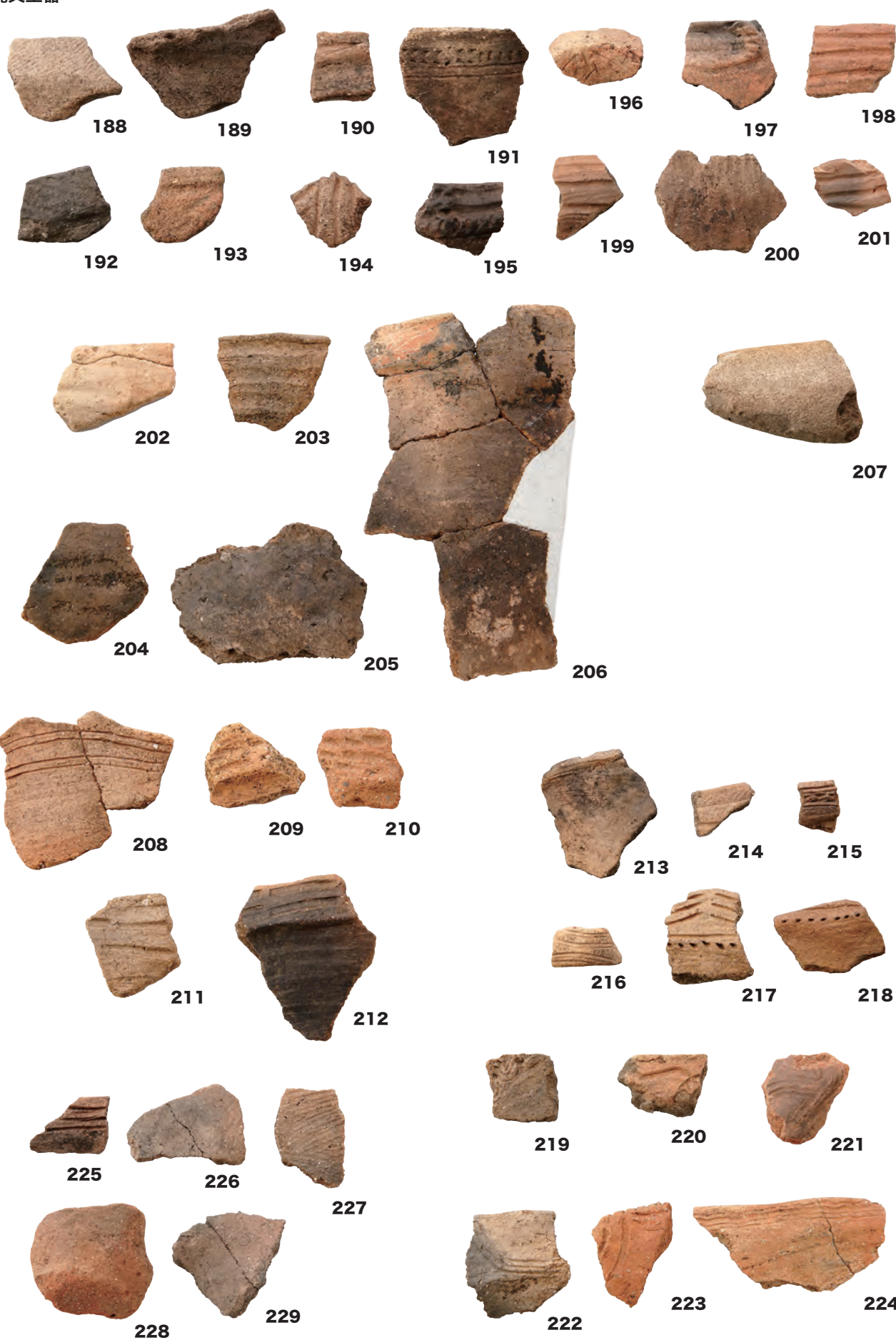
縄文土器





写真図版 24

縄文土器



写真図版25

縄文土器



写真図版 26

縄文土器





295



296



301



302



297



298



299



300



303



304



305



306



307



308



309



310



311



312



313



314



315



316



317



318



321



322



319



320

写真図版 28

縄文土器



323



324



325



329



330



331



326



327



328



337



338



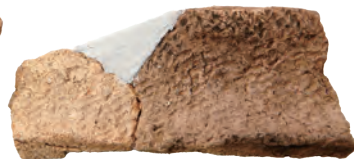
332



333



339



340



334



335



336



341



342



343



344



345



346



347



348



349



351



356



357



350



352



358



353



354



355



367



写真図版 30

縄文土器





450



453



454



451



452



455



456



457



458



459



460



461



467



468



469



462



463



464



465



471



466



470



472



473



474



475



482



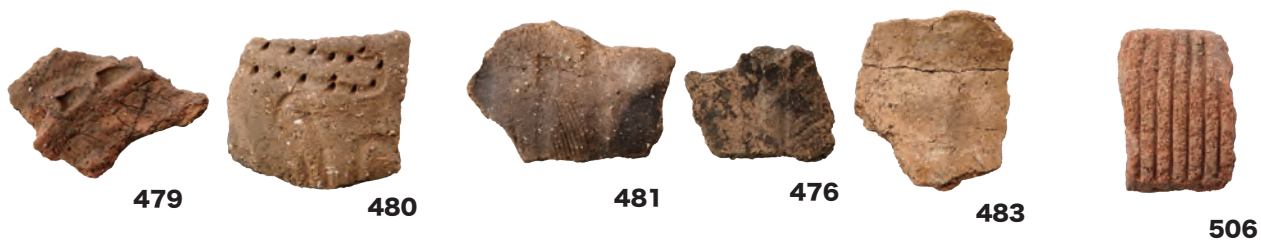
477



478

写真図版 32

縄文土器





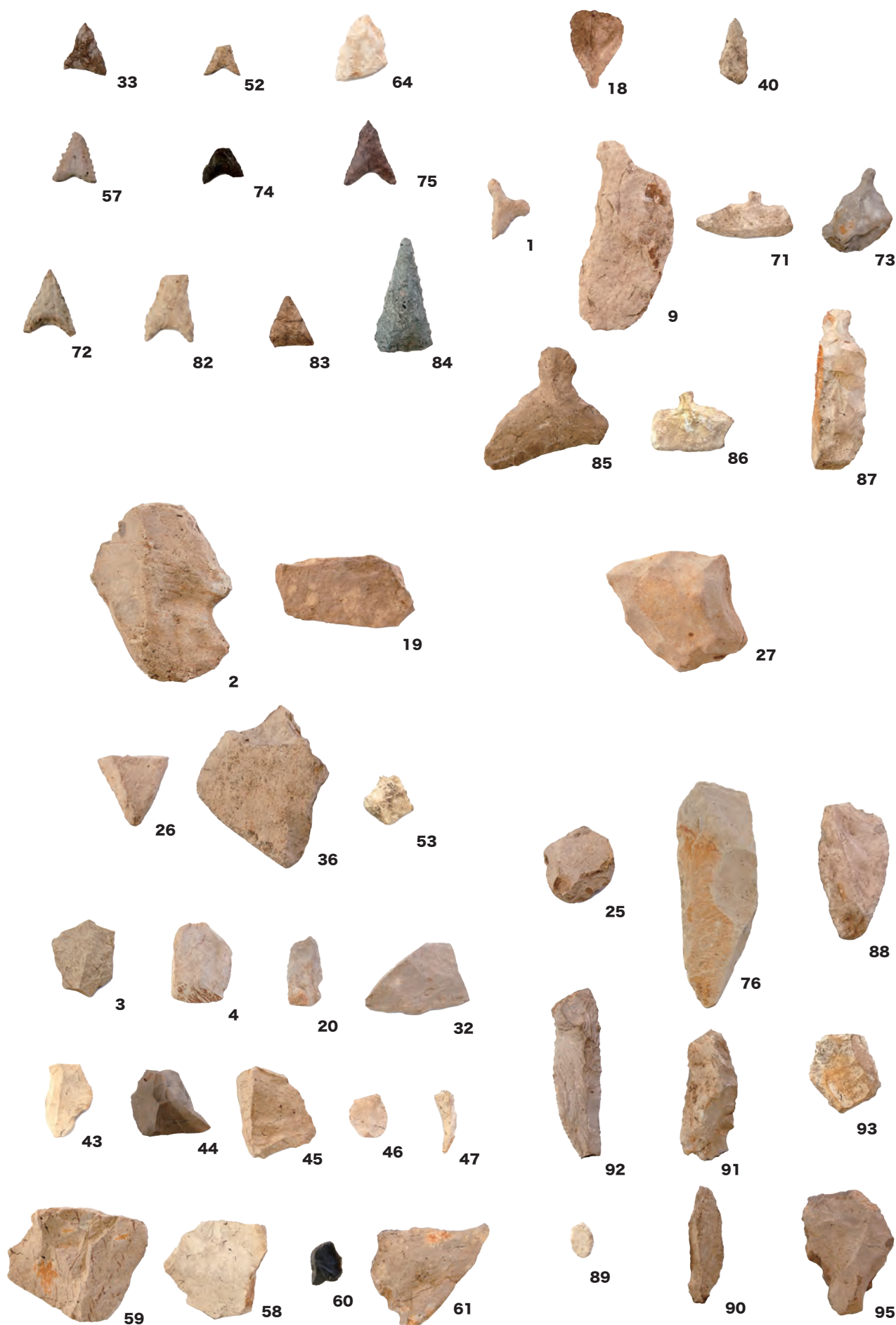
写真图版34

弥生土器



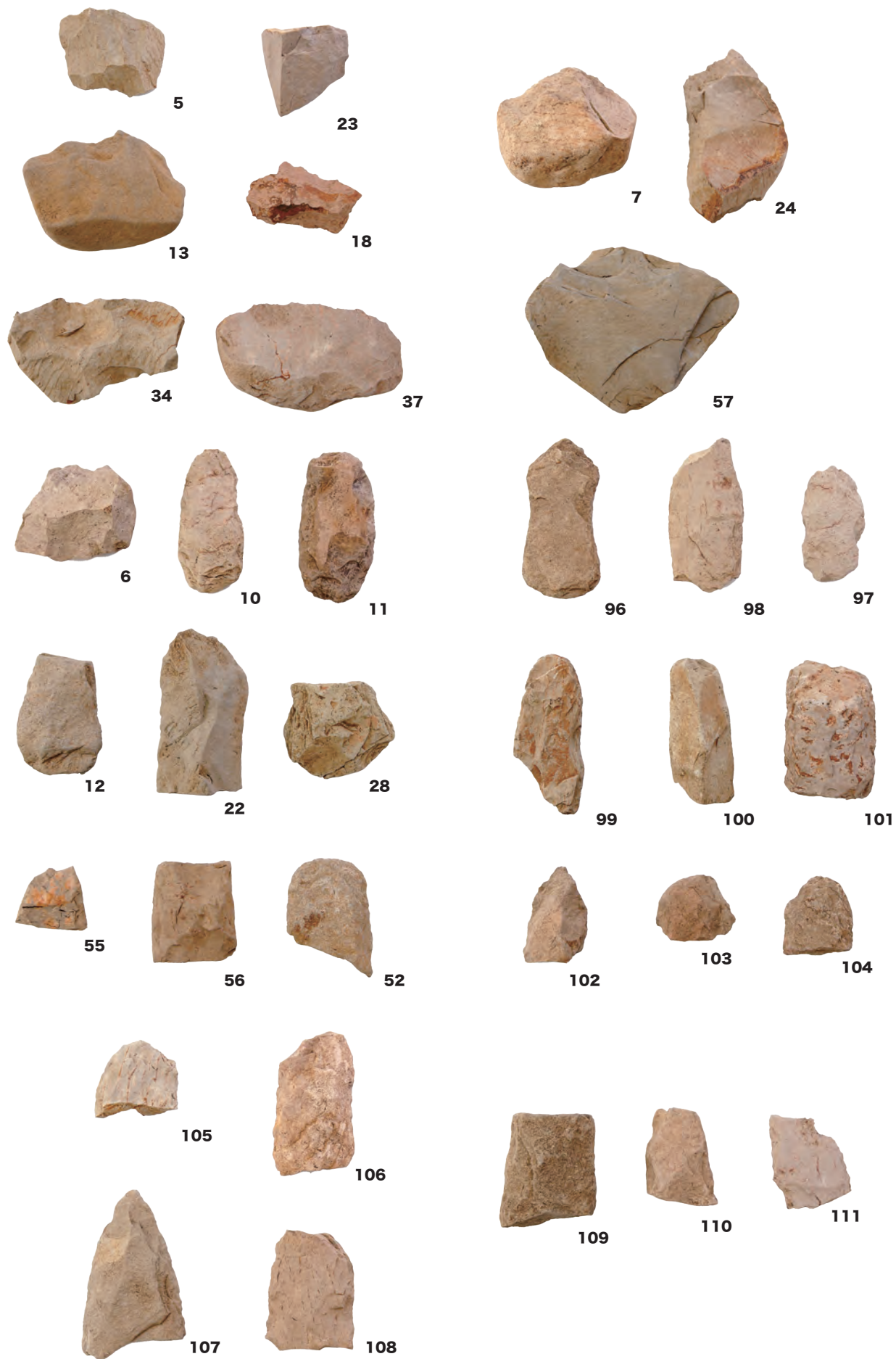
写真図版35

縄文時代・弥生時代石器



写真図版 36

縄文時代・弥生時代石器



写真図版37

縄文時代・弥生時代石器



35



41



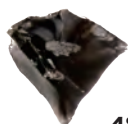
42



79



77



48



62



63



81



94



65



68



78



80



112



116



69



118



66



115



50



114



38



113

写真図版 38

縄文時代・弥生時代石器



57



118



119



120



121



122



123



124



125



126



127



154



153



155



144



145



149



152



150



151



148



146



147



39



129



30



128



51



15



49

写真図版39

縄文時代・弥生時代石器



130



131



132



133



134



8



14



135



29



21



16



136



17



138



137



142



141



143



140



139

写真図版 40

古代～近世の出土土器



2002



2016



2006



2014



2021



2025



2051



2101



2027



2039



2051



2101



2046



2032



2026



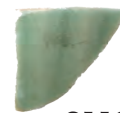
2087



2108



2118



2119



2089



2085



2044



2045



2047



2077



2079



2097



2048



2049



2080



2099

報告書抄録

ふりがな		おおさきいせき						
書 名		大崎遺跡						
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名		愛知県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第228集						
編著者名		鈴木正貴、川添和暁、蔭山誠一、社本有弥、永井邦仁、森将志、株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループ(伊藤茂、加藤和浩、廣田正史、佐藤正教、山形秀樹、Zaur Lomtatidze、小林克也、中村賢太郎)、竹原弘展、バンダリ・スダルジャン						
編集機関		財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター						
所在地		〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL 0567(67)4161						
発行年月日		西暦 2025年 3月 31日						
ふりがな		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村	遺跡番号					
おおさきいせき 大崎遺跡	あいちけん きたしたらくん 愛知県北設楽郡 したらちようたぐち 設楽町田口	23561	770195	35度 06分 22秒	137度 33分 50秒	2021.08.30～ 2022.02.04 2022.05.31～ 2022.10.21	11,085	設楽ダム
所収遺跡名		種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
大崎遺跡		集落	縄文時代	竪穴建物跡、土坑など		縄文土器、石器、石製品など		山間部の小区画 水田関連遺構
			弥生時代	竪穴建物跡、土坑など		縄文土器など		
			平安時代～戦国期	水田関連遺構、柵列など		灰釉陶器など 陶磁器など		
			江戸時代～	集石遺構、炭焼窯		陶磁器など		
文書番号		発掘届出(3埋セ第36-1号 2021.5.28) (4埋セ第7号・2022.4.8) 通知(3文芸第786-2号 2021.6.3) (4文芸第663-4号 2022.5.13) 終了届・保管証・発見届(3埋セ第88号2022.2.10) (4埋セ第88号2022.10.26) 鑑定結果通知(3文芸第2636号2022.3.24) (4文芸第1757-1号2022.11.7)						
要約	本遺跡は、境川左岸に形成された段丘面に立地する遺跡で、調査の結果、縄文時代から江戸時代までの遺構と遺物が確認された。特に、縄文時代中期末から弥生時代中期までの竪穴建物跡30棟などの遺構のほか、縄文時代早期の遺物も出土した。また、平安時代末から戦国時代にかけての水田関連遺構は、山間部の土地開発の歴史を知る上で貴重な成果といえる。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第228集

大崎遺跡

2025年3月31日

発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社